新年の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1	明治27年	新年の部	東三省王の元日晴れたりな	元日	時候
2	明治27年	新年の部	元日の月代青き捕虜かな	元日	時候
3	明治27年	新年の部	赫奕と画棟の初日龍動く	初日	天文
4	明治27年	新年の部	初日出や清涼殿の御屏風	初日	天文
5	明治27年	新年の部	金鞍の登城まばゆき初日かな	初日	天文
6	明治27年	新年の部	猿引の猿と寢てゐる木賃かな	猿廻し	人事
7	明治27年	新年の部	やり羽子や妻戸あけたる京女	羽子板	人事
8	明治27年	新年の部	藪入のかゝれとてしも念佛かな	藪入	人事
9	明治27年	新年の部	のりものゝ簾かゝげて若菜かな	若菜	植物
1011	明治30年	新年の部	屠蘇と云ふなるは草根木皮かな	屠蘇	人事
1815	明治31年	新年の部	塀側の手毬つくべく乾きたる	手毬	人事
1816	明治31年	新年の部	学校に手毬赤きが多きかな	手毬	人事
1817	明治31年	新年の部	妹の姊は縫ひ居る手毬哉	手毬	人事
1818	明治31年	新年の部	境内や日當る方に手毬賣	手毬	人事
1819	明治31年	新年の部	窓の日や手毬の唄の夢心	手毬	人事
1820	明治31年	新年の部	凡そ元旦ばかり嬉しきはなし	元旦	時候
1821	明治31年	新年の部	元日の納言參議年わかき	元日	時候
1822	明治31年	新年の部	元日の一門悉く列太夫	元日	時候
1823	明治31年	新年の部	犬の子の三ツ生れたり今朝の春	初春	時候
1824	明治31年	新年の部	元日を一子の愚かなるがあり	元日	時候
1825	明治31年	新年の部	暮れんとす雪ともならで二日空	二日	時候
1826	明治31年	新年の部	海山の二日は風となりはげし	二日	時候
1827	明治31年	新年の部	寝さめして正月二日心かな	二日	時候
1828	明治31年	新年の部	里に住で正月二日家に在り	二日	時候
1829	明治31年	新年の部	詩に周南小松引くべく二人かな	小松引	人事
1830	明治31年	新年の部	之子こゝに嫁ぎて摘める若菜かな	若菜摘み	人事
1831	明治31年	新年の部	松の内雪ふりつゞく何の兆	松の内	時候
1832	明治31年	新年の部	家二三松の内とも見えぬかな	松の内	時候
1833	明治31年	新年の部	豊葦原瑞穂の国の雑煮哉	雑煮	人事
1834	明治31年	新年の部	朱の椀や雑煮の一家二十餘口	雑煮	人事
1835	明治31年	新年の部	帰化人の蓬萊かさる今年より	蓬萊	人事
1836	明治31年	新年の部	蓬萊や障子あくれば安房上総	蓬萊	人事
1837	明治31年	新年の部	君が代や刑措いて用ゐず嫁が君	嫁が君	動物
1838	明治31年	新年の部	異名嫁が君と申すはしたなき	嫁が君	動物
1839	明治31年	新年の部	萬歳を犬の見てゐる戸口かな	萬歳	人事
1840	明治31年	新年の部	雲少し薄く初日を拜み得つ	初日	天文
1841	明治31年	新年の部	初日出に雲かゝるべきを拜み得つ	初日	天文
1842	明治31年	新年の部	元日を一天くもり渡りけり	元日	時候
1844	明治31年	新年の部	年男の事未だ學ばざるなり	年男	人事
2680	明治32年	新年の部	蓬萊にちご這ひ出でし蜜柑か那	蓬萊	人事
2681	明治32年	新年の部	桃咲くや女の子の多き妾腹	桃	植物
2682	明治32年	新年の部	花の如きめの子生れし祝ひか那	花	植物
2683	明治32年	新年の部	菫蒲公英子をいつくしむめをと哉	雑	雑
2684	明治32年	新年の部	子はなくて雛も飾らず暮れにけり	雛	人事
2685	明治32年	新年の部	元日に子供の多き夫婦か那	元日	時候
2686	明治32年	新年の部	塗盆や林檎捧ぐる女の童	林檎	植物
2687	明治32年	新年の部	紫蘇摘むで笊紫や女の子	紫蘇	植物
2688	明治32年	新年の部	人の子は幟立てたることしか那	幟	人事

新年の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2689	明治32年	新年の部	子を抱いて女拝むやお月様	月	天文
2690	明治32年	新年の部	輪飾に曉の風吹く戸口か那	注連飾	人事
2691	明治32年	新年の部	わかさりのさゝやかなるを飾りけり	注連飾	人事
2692	明治32年	新年の部	初烏水汲にゆく神の井戸	初烏	動物
2693	明治32年	新年の部	初烏飛んで行きけり江の東	初烏	動物
2694	明治32年	新年の部	二階かりて羽子板の画などかいてゐる	羽子板	人事
2695	明治32年	新年の部	羽子板の江戸はちりめん細工かな	羽子板	人事
2696	明治32年	新年の部	福引に一夜さゞめく屋形かな	福引	人事
2697	明治32年	新年の部	福引に芽出たきものを引きあてし	福引	人事
2698	明治32年	新年の部	歯朶青く福藁五尺あまりか那	雑	雑
2699	明治32年	新年の部	山草のさやかに青し神の棚	雑	雑
2700	明治32年	新年の部	大雪の峠越えたる物語り	雪	天文
2701	明治32年	新年の部	大雪の城下夜明けし烟か那	雪	天文
2702	明治32年	新年の部	濵風や小石にまじる蛎の殻	蛎	動物
2703	明治32年	新年の部	磯村やかきから光る夜半の月	蛎	動物
2704	明治32年	新年の部	袴はいて宮の煤掃く男か那	煤拂	人事
2705	明治32年	新年の部	煤掃の日暮れて帰る主人か那	煤拂	人事
2706	明治32年	新年の部	いさゝかの蕪も引いてしまひけり	蕪引	人事
2707	明治32年	新年の部	蕪引大根引に異ならず	蕪引	人事
2709	明治32年	新年の部	既にして天の岩戸を明の春	初春	時候
2710	明治32年	新年の部	交りは古き頭巾を笑ひけり	頭巾	人事
2711	明治32年	新年の部	元日や取散らしたる古色紙	元日	時候
3785	明治33年	新年の部	此村の子供多さよ松の内	松の内	時候
3786	明治33年	新年の部	年玉を貰ひてやがて寐入りけり	年玉	人事
3787	明治33年	新年の部	羞かしき手毬の唄や物心	手毬	人事
3788	明治33年	新年の部	綱引の跡に落ちたり赤き紐	綱引	人事
3789	明治33年	新年の部	思はずの手を握りけり歌かるた	歌留多	人事
3790	明治33年	新年の部	鮮かにぬひものしたる手毬哉	手毬	人事
3791	明治33年	新年の部	姉妹の蜂に驚く手毬哉	手毬	人事
3933	明治34年	新年の部	若水や名のある井戸の白幣	若水	人事
3934	明治34年	新年の部	親猿は猿曳よりも老いにけり	猿廻し	人事
3935	明治34年	新年の部	钁鑠としておはしけり謠そめ	謠初	人事
3936	明治34年	新年の部	ころげ行く手毬とまりし芝生哉	手毬	人事
3937	明治34年	新年の部	綱引のみかん撒いたるきそひ哉	綱引	人事
3938	明治34年	新年の部	居篭の人皆いねて水の音	居籠	人事
3939	明治34年	新年の部	抽斗や宝舟買ふ錢五文	寶舟	人事
3940	明治34年	新年の部	うりそめの景物貰ふ子供哉	初売	人事
3941	明治34年	新年の部	初暦小判は黄なる絵紙哉	初暦	人事
3942	明治34年	新年の部	蓬莱のかたへや屠蘇の小杯	雑	雑
3943	明治34年	新年の部	舞そめの一トさしまうて疲れけり	舞初	人事
3944	明治34年	新年の部	乘そめの松原出でし一騎哉	乘初	人事
4233	明治35年	新年の部	嫁が君女三の宮を覗きけり	嫁が君	動物
4234	明治35年	新年の部	舞そめや人妬しきかづけもの	舞初	人事
4235	明治35年	新年の部	獨居て謠そめとてうたひけり	謠初	人事
4236	明治35年	新年の部	初烏雀連歌の姿かな	初烏	動物
4237	明治35年	新年の部	弾初をすべきわが子の忌日哉	弾初	人事
4238	明治35年	新年の部	女王禄や十三にして歌合	女王禄	人事
4239	明治35年	新年の部	ゆづり葉は神世ながらの緑哉	楪	植物

新年の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4240	明治35年	新年の部	初夢のうそついて人を喜ばす	初夢	人事
4241	明治35年	新年の部	若水の如くさやけき心かな	若水	人事
4242	明治35年	新年の部	二三輪梅も小庭の惠方哉	恵方	人事
4243	明治35年	新年の部	門松や館をまかる白柏子	門松	人事
4244	明治35年	新年の部	喰積も獨すまひのさびしくて	喰積	人事
4245	明治35年	新年の部	太箸の太しく成ンぬ雑煮腹	太箸	人事
4246	明治35年	新年の部	文臺に倚り試みつ福寿草	福寿草	植物
4247	明治35年	新年の部	もろ／＼の神も遊ばん松の内	松の内	時候
4248	明治35年	新年の部	傀儡師人相わるき思かな	傀儡師	人事
4691	明治36年	新年の部	宝引に勝ちて蜜柑をふるまへり	宝引	人事
4692	明治36年	新年の部	孫共の作文帖も祝ひけり	年賀	人事
4693	明治36年	新年の部	ひき初の琵琶の古びも平家哉	弾初	人事
4694	明治36年	新年の部	歌仙より俳人に似てさるまはし	猿廻し	人事
4695	明治36年	新年の部	猿引の子や賢にして容よし	猿廻し	人事
4696	明治36年	新年の部	猿引の猿に藥を飲ませけり	猿廻し	人事
4697	明治36年	新年の部	猿引に興がる韓の公子哉	猿廻し	人事
4698	明治36年	新年の部	歌かるた老將軍のきげん哉	歌留多	人事
4699	明治36年	新年の部	歌かるたも取らで眠りぬ里かへり	歌留多	人事
4700	明治36年	新年の部	歌かるた書斉の二人妬ましき	歌留多	人事
4701	明治36年	新年の部	理不尽に取られて泣きぬ歌かるた	歌留多	人事
4702	明治36年	新年の部	嫁が君美人眠りよりさめぬ	嫁が君	動物
4703	明治36年	新年の部	てうち／＼あはゝも三ヶ日	三が日	時候
4704	明治36年	新年の部	小松引僧正遍照後れけり	小松引	人事
4705	明治36年	新年の部	大江戸の一夜の雪に出初哉	出初	人事
4706	明治36年	新年の部	鶴の首長しと笑ふ初湯かな	初風呂	人事
4707	明治36年	新年の部	藏開藏の中なる謠かな	藏開	人事
4708	明治36年	新年の部	一族の百人あまり睦月哉	睦月	時候
4709	明治36年	新年の部	名所の松めで居れば傀儡師	傀儡師	人事
4710	明治36年	新年の部	番頭の足袋の驕や松の内	松の内	時候
4711	明治36年	新年の部	初東風に吹かるゝ皃の白さかな	初東風	天文
4712	明治36年	新年の部	山草を神世の艸と覚えけり	歯朶	植物
4713	明治36年	新年の部	水祝馬鹿聟赫と怒りけり	水祝	人事
4714	明治36年	新年の部	藪入のべにうるはしとたゝへけり	藪入	人事
4715	明治36年	新年の部	よき日和一月場所の男ぶり	初場所	人事
4716	明治36年	新年の部	福寿草咲くも待たるゝ老の春	初春	時候
4717	明治36年	新年の部	綱引や若き女の一たまり	綱引	人事
5224	明治37年	新年の部	御詠皆大雅の音や小松引	小松引	人事
5225	明治37年	新年の部	初出式南奉行の威勢かな	出初	人事
5226	明治37年	新年の部	松の内面白き手紙来ることよ	松の内	時候
5227	明治37年	新年の部	常陸帶浄きは神の心かな	常陸帶	人事
5228	明治37年	新年の部	小松引一時の詞人朝にみつ	小松引	人事
5598	明治38年	新年の部	歯朶青し雪中に立つ宮柱	歯朶	植物
5599	明治38年	新年の部	御降や衛士に馴れくる翁丸	御降	天文
5600	明治38年	新年の部	萬歳に塾生どっと笑ひけり	萬歳	人事
5601	明治38年	新年の部	帳綴り女もすなる日記かな	帳綴	人事
5602	明治38年	新年の部	舞始の其舞衣や昔ぶり	舞初	人事
5603	明治38年	新年の部	蓬萊に母子二人の家内かな	蓬萊	人事
5942	明治39年	新年の部	川上の國栖が小家や初かすみ	初霞	天文

新年の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5943	明治39年	新年の部	臼伏せの宵や榾積む山の如し	臼伏せ	人事
5944	明治39年	新年の部	臼ふせて去る大家の庭寒し	臼伏せ	人事
5945	明治39年	新年の部	ぬさかけて東風に面をさらしけり	初東風	天文
5946	明治39年	新年の部	幣かけて朝日を浴びる尊さよ	初日	天文
5947	明治39年	新年の部	若木折て枯葉を棄つる雪の上	年木	人事
5948	明治39年	新年の部	若木焚く山家の飯の白さかな	年木	人事
5949	明治39年	新年の部	喜び見る若木の枝の燃ゆる事を	年木	人事
5950	明治39年	新年の部	暖に雪踏む柳迎へかな	柳迎え	人事
5951	明治39年	新年の部	よき柳迎へてうれし雪滑	柳迎え	人事
5952	明治39年	新年の部	渋柿をまじなへばナルと申しけり	成木責め	人事
5953	明治39年	新年の部	生身剥二人逢ひけり枯木立	なまはげ(生身剥)	人事
5954	明治39年	新年の部	わが影の雪に映れり生身剥	なまはげ(生身剥)	人事
5955	明治39年	新年の部	鳥追の角東天に響きけり	鳥追い	人事
5956	明治39年	新年の部	ひとり出て門田の鳥を追ひにけり	鳥追い	人事
5957	明治39年	新年の部	老の春去年の挿木に培ひぬ	初春	時候
6401	明治40年	新年の部	餅花の下に木魚を叩きけり	餅花	人事
6402	明治40年	新年の部	御降や汐の八百重の汐けふり	御降	天文
6403	明治40年	新年の部	御降や賤が山田の古案山子	御降	天文
6404	明治40年	新年の部	御降やかの南山に誰が住める	御降	天文
6405	明治40年	新年の部	御降や福藁の尾のしだり尾の	御降	天文
6406	明治40年	新年の部	御降や皆栖に在らん鳥獣	御降	天文
6407	明治40年	新年の部	初刷の雪の小家に到りけり	初刷	人事
6408	明治40年	新年の部	孫子共ふくよかに見る初湯哉	初風呂	人事
6409	明治40年	新年の部	人につらく双六の運つよき哉	双六	人事
6410	明治40年	新年の部	郭外を一周す騎馬初かな	騎馬初	人事
6411	明治40年	新年の部	歌人の歌に糞しぬ嫁が君	嫁が君	動物
6412	明治40年	新年の部	掃きそむる反古は十有七字哉	掃初	人事
6413	明治40年	新年の部	飾臼あたりを拂ふ大きさよ	飾臼	人事
6414	明治40年	新年の部	年玉のかず/＼に灯や枕元	年玉	人事
6415	明治40年	新年の部	猿引の狂歌もすなる紙筆哉	猿廻し	人事
6416	明治40年	新年の部	萬才が飯喰ふ宿や梅の花	萬歳	人事
6417	明治40年	新年の部	帳綴に昔大家の名残かな	帳綴	人事
6418	明治40年	新年の部	まゆ玉の玉の如孫ら子ら居たり	繭玉	人事
6742	明治41年	新年の部	鋤鍬に其處あり雑煮くふ	雑煮	人事
6743	明治41年	新年の部	雑煮くふ頃鶏鳴狗吠かな	雑煮	人事
6744	明治41年	新年の部	雑煮すや御題の松を裏の山	雑煮	人事
6745	明治41年	新年の部	己がもの己がついたる雑煮かな	雑煮	人事
6746	明治41年	新年の部	雑煮くうてしばし端居や草の宿	雑煮	人事
6747	明治41年	新年の部	雑煮してすゞ菜があまる里居哉	雑煮	人事
6748	明治41年	新年の部	長幼の序日上る雑煮かな	雑煮	人事
6749	明治41年	新年の部	雑煮くうてしまへば正に晴るゝ雪	雑煮	人事
6750	明治41年	新年の部	旅なれば雑煮の事も竹枝かな	雑煮	人事
6751	明治41年	新年の部	雑煮くふ静かさもあり歌舞の町	雑煮	人事
6752	明治41年	新年の部	書始は女まじらぬ一間かな	書初	人事
6753	明治41年	新年の部	井開や凍しが上に汲こぼす	若水	人事
6754	明治41年	新年の部	とりしばる綾の袂や吉書始	書初	人事
6755	明治41年	新年の部	若水やその源の神路山	若水	人事
6756	明治41年	新年の部	此家にかゞやくや屠蘇の小杯	屠蘇	人事

新年の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6757	明治41年	新年の部	綱引や双峯の神みそなはす	綱引	人事
7028	明治42年	新年の部	初鶏や金に戻りし金の精	初鶏	動物
7029	明治42年	新年の部	元日に恰も届く生海鼡哉	元日	時候
7031	明治42年	新年の部	この翁かくてあるぞや嫁が君	嫁が君	動物
7032	明治42年	新年の部	飛車と飛び角行と行く騎初哉	騎馬初	人事
7033	明治42年	新年の部	類句ありと互に揶揄す松の内	松の内	時候
7034	明治42年	新年の部	押鮎の腹平らかに居たりけり	押鮎	人事
7201	明治43年	新年の部	一家風試筆則ち冨士の山	書初	人事
7305	明治44年	新年の部	瑞兆に松の雪見る雑煮哉	雑煮	人事
7408	明治45年	新年の部	若水の源知れや神の國	若水	人事
7409	明治45年	新年の部	太箸もその庭訓の威儀にこそ	太箸	人事
7410	明治45年	新年の部	千金の子と祝ぐ声す双六に	双六	人事
7542	大正２年	新年の部	大字書き畢ンぬ御降晴れてあり	御降	天文
7543	大正２年	新年の部	神意苔青し若水くむ処	若水	人事
7544	大正２年	新年の部	初かまど夫の松柏を薪とす	初竈	人事
7545	大正２年	新年の部	我家の瑞氣墨の香匂ふ春	書初	人事
7682	大正３年	新年の部	初空を大にす神路山の杉	初空	天文
7683	大正３年	新年の部	若水や杉見る毎にぢゝが顔	若水	人事
7684	大正３年	新年の部	氏神の杉おろしの雪を鍬初め	鍬初	人事
7686	大正３年	新年の部	小松引く足の力よ腰の力よ	小松引	人事
7688	大正３年	新年の部	我影の顧盻を壁に冬ごもり	冬籠	人事
7759	大正４年	新年の部	雑煮ことし大嘗祭のある	雑煮	人事
7760	大正４年	新年の部	大雪の旦よく燃ゆかまどの火	元旦	時候
7763	大正４年	新年の部	冬籠水を甘しと思ひけり	冬籠	人事
7830	大正５年	新年の部	神の國に我として生く初日かげ	初日	天文
7831	大正５年	新年の部	若水に山の高さよ筧鳴り	若水	人事
8055	大正６年	新年の部	第一の盥嗽了る年男	年男	人事
8056	大正６年	新年の部	年男吾が候ふや竈の火	年男	人事
8214	大正７年	新年の部	若水に來去す兒らが顔よ	若水	人事
8215	大正７年	新年の部	南山を流るゝ水や歳旦	元旦	時候
8400	大正８年	新年の部	硯の海濶く一家の吉書哉	書初	人事
8401	大正８年	新年の部	山草は神代の草と覚ゆるよ	歯朶	植物
8403	大正８年	新年の部	我家の水音に年新た也	新年	時候
8605	大正９年	新年の部	初鶏に鋤鍬ばらの控へたり	初鶏	動物
8606	大正９年	新年の部	早梅の御題畏し鍬はじめ	鍬初	人事
8608	大正９年	新年の部	取あへず手毬つくべき場作れ	手毬	人事
8759	大正10年	新年の部	讀初の一章大御心かも	讀初	人事
8760	大正10年	新年の部	よみそめや物と相和す古机	讀初	人事
8761	大正10年	新年の部	讀初の兒等はや庭の凍に在り	讀初	人事
8762	大正10年	新年の部	神木立に吹雪も知らぬ畏さよ	初詣	人事
8764	大正10年	新年の部	蝶鳥の夢打破る工夫かな	雑	雑
8766	大正10年	新年の部	志す所をいはゞ桃の花	桃	植物
8767	大正10年	新年の部	蝶鳥と子等をはやしぬ松の内	松の内	時候
8769	大正10年	新年の部	よき人に日月遲し門の春	初春	時候
8918	大正11年	新年の部	元日も水鳥羽搏つ夜となりぬ	元日	時候
9491	大正14年	新年の部	日出處に國し家して雑煮哉	雑煮	人事
9493	大正14年	新年の部	詩二曰ク家宝に宜し橙も	橙	植物
9667	大正15年	新年の部	故人全集年を迎へてめでたけれ	年迎う	時候

新年の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9668	大正15年	新年の部	文章の稿のまゝ新年に入る	新年	時候
9669	大正15年	新年の部	いつ炷きし香の名残や松の内	松の内	時候
10305	昭和３年	新年の部	はつ空の雲をかぎりぬ小松山	初空	天文
10306	昭和３年	新年の部	はつ空や雲は五色にかたまりて	初空	天文
10307	昭和３年	新年の部	はつ空や芦辺の雪に両三家	初空	天文
10308	昭和３年	新年の部	はつ空や古檜雲吐く峰つゞき	初空	天文
10309	昭和３年	新年の部	はつ空に横斜す庵の古木哉	初空	天文
10311	昭和３年	新年の部	屋外の枯木觀來る筆はしめ	書初	人事
10312	昭和３年	新年の部	峻嶺を攀づるが如し筆はしめ	書初	人事
10313	昭和３年	新年の部	厨なる古妻遠し筆はしめ	書初	人事
10314	昭和３年	新年の部	書始やいつ贈られし金不換	書初	人事
10315	昭和３年	新年の部	書始や朝凍りし庵の水	書初	人事
10316	昭和３年	新年の部	書始や窗の垂氷に咫尺して	書初	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
11	明治27年	春の部	江の村や東風吹きそめし軒の簑	東風	天文
12	明治27年	春の部	鳩啼くや若草むしる女の子	若草	植物
13	明治27年	春の部	蕗の薹花となりけり小藪道	蕗の薹	植物
14	明治27年	春の部	梅が香や机の上の萬葉集	梅	植物
15	明治27年	春の部	梅咲いて琴の音すなり西の對	梅	植物
16	明治27年	春の部	やり梅の湯殿に赤き袂かな	梅	植物
17	明治27年	春の部	紅梅や隣りの娘としいくつ	梅	植物
18	明治27年	春の部	梅咲いて狩野の一軸古びたり	梅	植物
19	明治27年	春の部	鶯の畑に晝餉の夫婦かな	鶯	動物
20	明治27年	春の部	春風の屋根に烏賊干す入江かな	春風	天文
21	明治27年	春の部	朝市の跡すれて居る餘寒かな	餘寒	時候
22	明治27年	春の部	渦まくや朧月夜の龍飛崎	朧月	天文
23	明治27年	春の部	傾城の衣くれなゐに春の月	春の月	天文
24	明治27年	春の部	陽炎の畑打男すね黒し	陽炎	天文
25	明治27年	春の部	三助の月代青し花の山	花	植物
26	明治27年	春の部	その昔熊谷次郎花の山	花	植物
27	明治27年	春の部	白馬繋く傾城町の柳かな	柳	植物
28	明治27年	春の部	起きよ／＼春ゆかんとすぬる胡蝶	行春	時候
29	明治27年	春の部	行春や我故郷へ三百里	行春	時候
30	明治27年	春の部	行春を凌雲閣に眺めけり	行春	時候
31	明治27年	春の部	去程に春も暮れけり鐘の声	暮春	時候
273	明治28年	春の部	陽炎に鍬振上ぐる男かな	陽炎	天文
275	明治28年	春の部	陽炎のそこらに行けど君見えず	陽炎	天文
276	明治28年	春の部	紅梅や几帳ほのかに衣の色	梅	植物
277	明治28年	春の部	淀みけり渦まかれけり春の水	春の水	地理
278	明治28年	春の部	大奥の衣のけはひや朧月	朧月	天文
279	明治28年	春の部	浪もなし朧月夜の外が濱	朧月	天文
280	明治28年	春の部	舟のたり／＼両岸の桃花燃えんとす	桃	植物
281	明治28年	春の部	春風や電線吼ゆる東海道	春風	天文
282	明治28年	春の部	菜の花や笠背負ひたる伊勢詣	菜の花	植物
283	明治28年	春の部	馬士唄ふ五十三亭日は長し	日永	時候
284	明治28年	春の部	行春をこちらも向かぬ男かな	行春	時候
285	明治28年	春の部	行春を出羽とあるなり笠の文字	行春	時候
287	明治28年	春の部	薄月の菜の花畑牛帰る	菜の花	植物
288	明治28年	春の部	朧夜のほの白き花や何の花	朧	天文
289	明治28年	春の部	月朧只むさし野の果もなし	朧月	天文
290	明治28年	春の部	朧夜のそれかとばかり水車	朧	天文
291	明治28年	春の部	潺湲と朧をくゞる野川かな	朧	天文
292	明治28年	春の部	花や／＼恁麼の時これいかむ	花	植物
293	明治28年	春の部	里人よ我もこそ来れ花見んと	花見	人事
294	明治28年	春の部	こと問はむ汝か里の櫻いかにぞや	櫻	植物
295	明治28年	春の部	むさし野の麦二三寸小雨ふる	麦青む	植物
296	明治28年	春の部	すさましや桃花の村を鉄車ゆく	桃	植物
297	明治28年	春の部	菜の花や女首出す汽車の窓	菜の花	植物
298	明治28年	春の部	春雨の畑に何する男ぞも	春雨	天文
299	明治28年	春の部	一村の屋根の低さよ桃さくら	雑	雑
300	明治28年	春の部	石地蔵それよりつゞく花菜かな	菜の花	植物
301	明治28年	春の部	春風の乞食つゞきぬ江戸の町	春風	天文

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
302	明治28年	春の部	花の山かばんさげたる男かな	花	植物
303	明治28年	春の部	蝶々よ旅の記あらば見まくほし	蝶	動物
304	明治28年	春の部	或人の吃り／＼つ春暮れぬ	暮春	時候
305	明治28年	春の部	塔高しそれより高き雲雀かな	雲雀	動物
306	明治28年	春の部	溌溂と餘寒の蝦のはねたりな	餘寒	時候
307	明治28年	春の部	からまりつ／＼大藤の花咲きぬ	藤の花	植物
458	明治29年	春の部	石上に椿散りけり僧拾へり	椿	植物
459	明治29年	春の部	女五六酒賣る家の桃の花	桃	植物
460	明治29年	春の部	去程に李月夜の面白や	李の花	植物
461	明治29年	春の部	山かげの一本櫻咲きにけり	櫻	植物
462	明治29年	春の部	千本のさくら一度に咲きにけり	櫻	植物
463	明治29年	春の部	梅が香や月淡くして水細く	梅	植物
464	明治29年	春の部	村又村霞の中の午の鐘	霞	天文
465	明治29年	春の部	日は西へ雲雀も啼かず山畑	雲雀	動物
466	明治29年	春の部	朧夜の女物云ふ屋形船	朧	天文
467	明治29年	春の部	寺しんかん夜ほの〳〵と鶯や	鶯	動物
468	明治29年	春の部	水ちょろ／＼筧に流す椿かな	椿	植物
469	明治29年	春の部	桃咲いて馬引出す小家かな	桃	植物
470	明治29年	春の部	春三月桃紅李白酒十斗	春	時候
471	明治29年	春の部	雪隠の屋根煤びたり桃の花	桃	植物
473	明治29年	春の部	登らんせ春は楊州第一楼	春	時候
474	明治29年	春の部	舞姫の樓に上りつ梨花の月	梨の花	植物
475	明治29年	春の部	春やこよひ飽まで酒を召上れ	春	時候
476	明治29年	春の部	夕風の墓門の櫻花もなし	櫻	植物
477	明治29年	春の部	繽たり紛たり土饅頭を吹く落花	落花	植物
478	明治29年	春の部	春の夜の紅樓女あり名は阿嬌	春夜	時候
479	明治29年	春の部	春の夜や繡したる閨の幕	春夜	時候
480	明治29年	春の部	炉塞いで壁の一軸哀れなる	爐塞	人事
481	明治29年	春の部	杉十丈段々に藤の花咲きぬ	藤の花	植物
482	明治29年	春の部	一面に紅白のつゝじ咲きにけり	躑躅	植物
483	明治29年	春の部	禿山やつゝじの赤きところ〳〵	躑躅	植物
484	明治29年	春の部	谷間の藤棧花咲きぬ	藤の花	植物
485	明治29年	春の部	藤の花渕に臨めること三尺	藤の花	植物
486	明治29年	春の部	水淺く岩白うして藤の花	藤の花	植物
10611	明治29年	春の部	松青く藤紫に水白し	藤	植物
1013	明治30年	春の部	根芹にして根の短きが口惜しく	芹	植物
1014	明治30年	春の部	梅咲いて米の飯喰ふ山家かな	梅	植物
1015	明治30年	春の部	夢みらく君が行く野の若艸を	若草	植物
1016	明治30年	春の部	白魚を紫の上にまゐらせよ	白魚	動物
1017	明治30年	春の部	箱根路をわが越えくれば春の風	春風	天文
1018	明治30年	春の部	霞淡く蝦夷が小島の見ゆるかな	霞	天文
1019	明治30年	春の部	よもすがら我戀すべく春さむし	春寒	時候
1020	明治30年	春の部	春の雪山鳥の尾のさら／＼と	春雪	天文
1022	明治30年	春の部	草木春にして胡女が唄ふ恨かな	春	時候
1024	明治30年	春の部	團子喰へば犬吠ゆるなり花の山	花	植物
1026	明治30年	春の部	この別れ春帆遲き恨かな	春	時候
1027	明治30年	春の部	二三人離宴に春の月を看る	春の月	天文
1028	明治30年	春の部	馬で行け萬里の春を横ぎって	春	時候

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1029	明治30年	春の部	君が船明日桃花灘上を	桃	植物
1030	明治30年	春の部	踏破らむ落花の五十有三亭	落花	植物
1031	明治30年	春の部	炉ふさいで此曉をいざ罷らむ	爐塞	人事
1032	明治30年	春の部	恐る暮に落花の里に入らむことを	落花	植物
1033	明治30年	春の部	酒許せ奥州の春猶さむし	春	時候
1034	明治30年	春の部	菫拈りつ紫さめつ此の別れ	菫	植物
1035	明治30年	春の部	離愁とはつくしの如きものなるか	土筆	植物
1036	明治30年	春の部	春の日の落馬なんども我俳諧	春日	時候
1037	明治30年	春の部	この別已にして月朧ろなり	朧月	天文
1038	明治30年	春の部	わが旅や蒲公英三ツ四ツあれば足る	蒲公英	植物
1040	明治30年	春の部	春の夜をみめよき女二人行く	春夜	時候
1041	明治30年	春の部	花はさくら妻を娶らば陰麗花	櫻	植物
1042	明治30年	春の部	中婦弾じ少婦歌へり花の宴	花	植物
1043	明治30年	春の部	柳十里隋家の宮女恨あり	柳	植物
1044	明治30年	春の部	永き日を貧なる女物思ふ	日永	時候
1045	明治30年	春の部	春殿の蝋燭あかし楊氏の女	春	時候
1046	明治30年	春の部	美なる女木蘭の船春の水	雑	雑
1047	明治30年	春の部	朧夜の女歌へり後庭花	朧	天文
1048	明治30年	春の部	楼に上る邯鄲の女春多恨	春	時候
1049	明治30年	春の部	春酒緑り越女の金釵斜なる	春	時候
1050	明治30年	春の部	曙の御講のかすみ虎夫人	霞	天文
1051	明治30年	春の部	賤の女が春の野に出で戀すなり	春の野	地理
1052	明治30年	春の部	春の夜の神前に巫女居並べる	春夜	時候
1053	明治30年	春の部	長き日を仆張る男眠りける	日永	時候
1054	明治30年	春の部	薄月の絹雪洞や春の戀	春	時候
1055	明治30年	春の部	丸太積みあげて陽炎の立つを見る	陽炎	天文
1056	明治30年	春の部	永き日やところ〳〵の土方節	日永	時候
1057	明治30年	春の部	金殿や春の夜毎を皷うつ	春夜	時候
1058	明治30年	春の部	よもすがら笛の音すなり春の城	春	時候
1059	明治30年	春の部	櫻散る此夕暮の静かさは	落花	植物
1060	明治30年	春の部	大木の櫻散ること徐ろに	落花	植物
1061	明治30年	春の部	車去て都のはづれ暮遅し	遲日	時候
1062	明治30年	春の部	長き日の東海道を二人づれ	日永	時候
1063	明治30年	春の部	大歡樂大千世界櫻かな	櫻	植物
1064	明治30年	春の部	酒足らず櫻に冠をかけて去る	櫻	植物
1065	明治30年	春の部	落椿鉄灯篭に積であり	椿	植物
1066	明治30年	春の部	杯盤や酒腥くさくら散る	落花	植物
1067	明治30年	春の部	菜の花の傍へに清き流かな	菜の花	植物
1068	明治30年	春の部	藥賣る家の椿の赤きかな	椿	植物
1069	明治30年	春の部	日當りやたんぽゝ咲ける二ツ三ツ	蒲公英	植物
1070	明治30年	春の部	切支丹の庭に真紅の花咲きぬ	花	植物
1071	明治30年	春の部	寺の池に年ふる蛙住めりとか	蛙	動物
1072	明治30年	春の部	洛陽の春に居眠る男あり	春	時候
1073	明治30年	春の部	菜の花に小さき橋を二つほど	菜の花	植物
1074	明治30年	春の部	聞説野に三千のつく〳〵し	土筆	植物
1075	明治30年	春の部	春の人身細き太刀を佩いてゆく	春	時候
1076	明治30年	春の部	春遠近壁に題す一層の楼	春	時候
1077	明治30年	春の部	幕打たせ花の彼方の謠かな	花	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1079	明治30年	春の部	春の月二人并むで眺めつらむ	春の月	天文
1080	明治30年	春の部	菜の花のてふ/＼猫の子眠て知らず	菜の花	植物
1081	明治30年	春の部	水桶にさしたる藤の花咲きぬ	藤の花	植物
1082	明治30年	春の部	里の子の鞭にするなる藤の花	藤の花	植物
1083	明治30年	春の部	道を失す大澤の藤の花を見る	藤の花	植物
1084	明治30年	春の部	わたかまる藤の花房短くて	藤の花	植物
1085	明治30年	春の部	つゝじ赤く藤紫の陳腐なる	躑躅	植物
1086	明治30年	春の部	雑木原に偶々つゝじあるがよし	躑躅	植物
1087	明治30年	春の部	蒲公英の莖の長きがほうけたり	蒲公英	植物
1088	明治30年	春の部	矮なるは最も赤きつゝじかな	躑躅	植物
1089	明治30年	春の部	水涸れ水車猶存す藤の花	藤の花	植物
1925	明治31年	春の部	東門を犬と連立つ日暖か	暖	時候
1926	明治31年	春の部	犬追へば鶏飛上る桃の枝	桃	植物
1927	明治31年	春の部	二三人梅花書屋に会したる	梅	植物
1928	明治31年	春の部	卓上や主客坐につく梅の花	梅	植物
1929	明治31年	春の部	主と客と漢魏六朝梅の花	梅	植物
1930	明治31年	春の部	家疎らにして梅やうやく多し	梅	植物
1931	明治31年	春の部	獨り樓に上る梅の花月夜	梅	植物
1932	明治31年	春の部	白梅や雲烟龍蛇墨一斗	梅	植物
1933	明治31年	春の部	市に入れば梅の木小さし塀の内	梅	植物
1934	明治31年	春の部	梅の村に仕へずして老いし住む	梅	植物
1935	明治31年	春の部	梅林に物の音をきく社かな	梅	植物
1936	明治31年	春の部	白梅の白きを愛すかほりかな	梅	植物
1937	明治31年	春の部	郡太守賢にして士を愛す梅の花	梅	植物
1938	明治31年	春の部	晴天に昼の月傾きぬいかのぼり	凧	人事
1939	明治31年	春の部	壁に飛ばす一斗の墨や梅の花	梅	植物
1940	明治31年	春の部	姉妹や菫咲く野に睦しき	菫	植物
1941	明治31年	春の部	山陰に日暮るゝ遲し春の駒	春の駒	動物
1942	明治31年	春の部	日の暮るゝ遲き牧場や春の駒	春の駒	動物
1943	明治31年	春の部	誤て古道行けば雉子鳴きぬ	雉子	動物
1944	明治31年	春の部	野路山路鶯ところ〴〵かな	鶯	動物
1945	明治31年	春の部	戀すべく里に出でたり寺の猫	猫の戀	動物
1946	明治31年	春の部	淺ましく猫の恋する声高し	猫の戀	動物
1947	明治31年	春の部	戀合ふやいよゝ近づく猫の聲	猫の戀	動物
1948	明治31年	春の部	戀中の何れも黒き猫なりし	猫の戀	動物
1949	明治31年	春の部	故里や猫恋すべく長じたり	猫の戀	動物
1950	明治31年	春の部	飯だこの果敢なかりける最期かな	飯だこ	動物
1951	明治31年	春の部	飯だこのこれより大なるはなし	飯だこ	動物
1952	明治31年	春の部	二三間雉子鳴き飛で草に入る	雉子	動物
1953	明治31年	春の部	野は燒けてきぎす鳴くなり雨の中	雉子	動物
1954	明治31年	春の部	前山にきゞす鳴くなり渡し舟	雉子	動物
1955	明治31年	春の部	岡の家畑もありて雲雀なく	雲雀	動物
1956	明治31年	春の部	川沿や青麦畑を春の風	春風	天文
1957	明治31年	春の部	回文の錦織出す春の風	春風	天文
1958	明治31年	春の部	雁帰る昼とざしたる小村かな	帰る雁	動物
1959	明治31年	春の部	宿とりて二階に居れば雁の行く	帰る雁	動物
1960	明治31年	春の部	驛尽きて吾は南し雁北す	帰る雁	動物
1961	明治31年	春の部	別荘の月に梅見る主客かな	梅見	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1962	明治31年	春の部	春雨や夜密かに泣く娼家の子	春雨	天文
1963	明治31年	春の部	杼を停め帰雁の雲に看入る哉	帰る雁	動物
1964	明治31年	春の部	驛せはし帰る雁がね來るつばめ	雑	雑
1965	明治31年	春の部	花菜すこしてふ/＼契浅からず	蝶	動物
1966	明治31年	春の部	蛇穴を出づ半して眠りゐる	蛇穴を出る	動物
1967	明治31年	春の部	石暖かに蛇の出でたる氣はひあり	蛇穴を出る	動物
1968	明治31年	春の部	大きうて歌も得よまぬ蛙かな	蛙	動物
1969	明治31年	春の部	河上や吹き来る風に梅が香す	梅	植物
1970	明治31年	春の部	梅が香の水を吹き来る夜船かな	梅	植物
1971	明治31年	春の部	客を得つ茗荷たけを探る裏の畑	茗荷竹	植物
1972	明治31年	春の部	茗荷たけを得べくと妻は裏にいづ	茗荷竹	植物
1973	明治31年	春の部	若艸を茵となしつ物語	若草	植物
1974	明治31年	春の部	蕗の薹の苦きを愛す朝の膳	蕗の薹	植物
1975	明治31年	春の部	白うして長き根芹の雫かな	芹	植物
1976	明治31年	春の部	人稀に梅猶早き山路かな	梅	植物
1977	明治31年	春の部	山路来て野を暖かに鞍の上	暖	時候
1978	明治31年	春の部	村店に野路の花見の人数かな	花見	人事
1979	明治31年	春の部	依々として柳の枝を放たざる	柳	植物
1980	明治31年	春の部	庭先に陽炎立つや雨あがり	陽炎	天文
1981	明治31年	春の部	膳出でぬ芽独活白魚若夫婦	雑	雑
1982	明治31年	春の部	口を閉ぢ田螺は遂に物いはず	田螺	動物
1983	明治31年	春の部	白魚に箸は春慶臭きかな	白魚	動物
1984	明治31年	春の部	狼烟あぐれば褒姒が笑ふ春の風	春風	天文
1985	明治31年	春の部	古臼の水温むべく日南す	水温む	地理
1986	明治31年	春の部	朧夜を李獅々が家に行幸哉	朧	天文
1987	明治31年	春の部	出代に居残りし女主ぶり	出代	人事
1988	明治31年	春の部	出代や夜更けて語る台所	出代	人事
1989	明治31年	春の部	隣国の使者の一行かすみけり	霞	天文
1990	明治31年	春の部	梅林を出てゝ北斗を拜すかな	梅	植物
1991	明治31年	春の部	嶺北に村あり雨に寒食す	寒食	人事
1992	明治31年	春の部	江北の梅の木古くして疎なり	梅	植物
1993	明治31年	春の部	浦東風や船に残んの灯が見ゆる	東風	天文
1994	明治31年	春の部	江南や梅花淡月簫の音	梅	植物
1995	明治31年	春の部	琴に挑む女かほよし桃の花	桃	植物
1996	明治31年	春の部	長き日の和船繕ふ濱辺かな	日永	時候
1997	明治31年	春の部	根岸菴に春夜の鐘や東叡山	春夜	時候
1998	明治31年	春の部	姫君の東下りや春の風	春風	天文
1999	明治31年	春の部	白き馬の東に飛びぬ梅月夜	梅	植物
2000	明治31年	春の部	春の水滾々として東流す	春の水	地理
2001	明治31年	春の部	人中に南無佛と申す櫻哉	櫻	植物
2002	明治31年	春の部	南海に眞珠採るべく日暖か	暖	時候
2003	明治31年	春の部	春さむし北方にはゝき星を見る	春寒	時候
2004	明治31年	春の部	昭君の北に行く日をつばめ来る	燕	動物
2005	明治31年	春の部	桃咲いて美なる浣紗の女かな	桃	植物
2006	明治31年	春の部	三月三日妓を宰相の家に觀る	上巳	人事
2007	明治31年	春の部	青柳の欄を拂て雫せり	柳	植物
2008	明治31年	春の部	畑中の一本柳暮れにけり	柳	植物
2009	明治31年	春の部	雨暖かに柳烟るや長き土手	柳	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2010	明治31年	春の部	髙張や旅館の柳しだれつゝ	柳	植物
2011	明治31年	春の部	退朝や御講の柳静かにて	柳	植物
2012	明治31年	春の部	雨一ト日柳に暗き小窓かな	柳	植物
2013	明治31年	春の部	鞍壺や柳かぶさる門せまみ	柳	植物
2014	明治31年	春の部	御手洗の水にしだるゝ柳か那	柳	植物
2015	明治31年	春の部	瘤髙く幹くねりたる柳か那	柳	植物
2016	明治31年	春の部	僧房に碁客相対す日の永き	日永	時候
2017	明治31年	春の部	商人と連れて鄙路の日は長し	日永	時候
2019	明治31年	春の部	病みやせて出代の日の部屋を出る	出代	人事
2020	明治31年	春の部	日麗か眼病院の色がらす	麗	時候
2021	明治31年	春の部	藥にせまく田螺殼燒く裏の畑	田螺	動物
2022	明治31年	春の部	痘除けの赤き幣吹く春の風	春風	天文
2023	明治31年	春の部	くすし申さく白魚の如きを少し召せ	白魚	動物
2024	明治31年	春の部	菴主病むで菊の根分くる人もなし	菊根分	人事
2025	明治31年	春の部	木瓜咲くや日たゞ閒なる村の醫者	木瓜	植物
2026	明治31年	春の部	風引いて月に簾下ろす梨の花	梨の花	植物
2027	明治31年	春の部	藥賣刀を舞はす日永か那	日永	時候
2028	明治31年	春の部	ちご病みて雛に親しむ飽き易き	雛祭	人事
2029	明治31年	春の部	里見えて春の社日の太鼓かな	社日	時候
2030	明治31年	春の部	菜の花や門鎖したる避病院	菜の花	植物
2031	明治31年	春の部	買て放つ亀の子活きぬ春の川	春の川	地理
2032	明治31年	春の部	淡雪の消えも入りたき病める戀	淡雪	天文
2033	明治31年	春の部	出代を孕める人の母訪ひぬ	出代	人事
2034	明治31年	春の部	ひとり病むで灯ともす春の夕寒し	春宵	時候
2035	明治31年	春の部	山吹や水に映りし病める顔	山吹	植物
2036	明治31年	春の部	藥賣る店にさし込む春日かな	春の日	天文
2037	明治31年	春の部	腫物の薄痒くなりぬ春の風	春風	天文
2038	明治31年	春の部	はては乱舞酒腥き落花哉	落花	植物
2039	明治31年	春の部	病む人の粥少し残り春さむし	春寒	時候
2040	明治31年	春の部	陽炎や漢藥植ゑし医者の庭	陽炎	天文
2041	明治31年	春の部	春の夜の産声聞ゆ隣かな	春夜	時候
2042	明治31年	春の部	麗かや人参つむで髙麗船が	麗	時候
2043	明治31年	春の部	藥臭き人に逢ひけり春の宵	春宵	時候
2044	明治31年	春の部	師の坊の塞がざる爐に病みわびぬ	爐塞	人事
2046	明治31年	春の部	百艸を嘗め試みつ春の風	春風	天文
2047	明治31年	春の部	永き日の碁石を下すこと遲し	日永	時候
2048	明治31年	春の部	山寺の木魚も絶えて日の永き	日永	時候
2049	明治31年	春の部	永き日の沖に魚つる獨か那	日永	時候
2050	明治31年	春の部	野に出でゝ讃美歌唄ふ日永哉	日永	時候
2052	明治31年	春の部	凧の糸柱に繫ぐ響かな	凧	人事
2053	明治31年	春の部	賣れ残る武者繪の凧の物憂かり	凧	人事
2054	明治31年	春の部	ありたけの糸伸ばしたり凧	凧	人事
2055	明治31年	春の部	大凧の川を越え来しうなり哉	凧	人事
2056	明治31年	春の部	風ゆるくせんすべもなし凧	凧	人事
2057	明治31年	春の部	とかくして大凧打あげぬ	凧	人事
2058	明治31年	春の部	宿とりて二階に居れば凧	凧	人事
2059	明治31年	春の部	鄙に入て日は猶髙し凧	凧	人事
2060	明治31年	春の部	切凧の骨徒らに太かりし	凧	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2061	明治31年	春の部	凧の音の聞えずなりて日は暮れぬ	凧	人事
2062	明治31年	春の部	縁日に求めし梅のはや散りぬ	梅	植物
2063	明治31年	春の部	雪解に不動明王突立ちぬ	雪解	地理
2064	明治31年	春の部	一門をあつめて獺のまつりか那	獺の祭	時候
2065	明治31年	春の部	涅槃会のすむで涅槃像さびし	涅槃會	人事
2066	明治31年	春の部	馬市のまくさ飛散る春の風	春風	天文
2067	明治31年	春の部	門前に來鳴く鶯来ずなりぬ	鶯	動物
2069	明治31年	春の部	朧夜を葦毛の駒の魁けぬ	朧	天文
2070	明治31年	春の部	心せよ餘寒に風を引きやすし	餘寒	時候
2071	明治31年	春の部	盆梅のこぼれて歌書の栞か那	盆梅	植物
2073	明治31年	春の部	かりすまひして古雛かざりける	雛祭	人事
2074	明治31年	春の部	乙女子の雛に團居す物語	雛祭	人事
2075	明治31年	春の部	本箱や物憂かるべく雛古りし	雛祭	人事
2076	明治31年	春の部	雛の間に蝋燭ともす禿か那	雛祭	人事
2077	明治31年	春の部	雛市の灯ともす頃を雨がふる	雛市	人事
2078	明治31年	春の部	人戀し雛包みたる古錦	雛祭	人事
2079	明治31年	春の部	雛の間に伯母と寐し子や絹行灯	雛祭	人事
2080	明治31年	春の部	今更に雛に戀する身となりぬ	雛祭	人事
2081	明治31年	春の部	雛市には雛買はまく思ふか那	雛市	人事
2082	明治31年	春の部	雛棚に鼡さびしき住居か那	雛祭	人事
2084	明治31年	春の部	闇の夜や沼に映りし野火の影	野山焼	人事
2085	明治31年	春の部	物の香や焼けし野を吹く弱き風	野山焼	人事
2086	明治31年	春の部	野を焼いて山焼けかゝる風強し	野山焼	人事
2087	明治31年	春の部	湖の上を焼野の烟這ひかゝる	野山焼	人事
2088	明治31年	春の部	二階から夜の野を焼く火が見えし	野山焼	人事
2089	明治31年	春の部	籔陰に野火のくすぶる小雨の日	野山焼	人事
2090	明治31年	春の部	野も山も焼けて夕を雨となる	野山焼	人事
2091	明治31年	春の部	一ト処野焼の烟立ちのぼる	野山焼	人事
2092	明治31年	春の部	夜に入りてはげしうなりし野火の風	野山焼	人事
2093	明治31年	春の部	人さはぐ野火官山に移るべう	野山焼	人事
2095	明治31年	春の部	穴を出るや蛇忽ちに見えずなり	蛇穴を出る	動物
2096	明治31年	春の部	試に穴を出でたる蛇ならし	蛇穴を出る	動物
2097	明治31年	春の部	穴に憂く出つべくと蛇のうき心	蛇穴を出る	動物
2098	明治31年	春の部	蛇穴を出づべく少し早かりし	蛇穴を出る	動物
2099	明治31年	春の部	風腥くうはばみ穴を出でけらし	蛇穴を出る	動物
2100	明治31年	春の部	出でし穴を去るべく蛇の愁あり	蛇穴を出る	動物
2101	明治31年	春の部	穴を出でゝ蛇眠るべく草若し	蛇穴を出る	動物
2102	明治31年	春の部	穴を出でゝ蛇人を見る餘所心	蛇穴を出る	動物
2103	明治31年	春の部	蛇出づべく穴にさし込む朝日哉	蛇穴を出る	動物
2104	明治31年	春の部	穴を出でし蛇に悔あり寒き雨	蛇穴を出る	動物
2105	明治31年	春の部	親蛇が穴を出でたり子泣くらむ	蛇穴を出る	動物
2106	明治31年	春の部	穴を出づる咫尺にして眠る蛇	蛇穴を出る	動物
2107	明治31年	春の部	蛇穴を出で孔子容れられず	蛇穴を出る	動物
2108	明治31年	春の部	蛇穴を出づ重耳主從行く	蛇穴を出る	動物
2109	明治31年	春の部	楚に囚はれ穴を出でたる蛇を見る	蛇穴を出る	動物
2110	明治31年	春の部	蛇穴を出づるや梁甫吟起る	蛇穴を出る	動物
2111	明治31年	春の部	蛇穴を出づる時遠人家を懐ふ	蛇穴を出る	動物
2112	明治31年	春の部	国破れ蛇穴を出づ城春なり	蛇穴を出る	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2113	明治31年	春の部	雛店の前に花賣る翁か那	雛市	人事
2114	明治31年	春の部	古雛の吾宿わびし人も來ず	雛祭	人事
2115	明治31年	春の部	雛市にとあるを買はまほしかりし	雛市	人事
2116	明治31年	春の部	昨日燒きし野を土臭き風が吹く	野山燒	人事
2118	明治31年	春の部	花に醉ふて乞食女に戯るゝ	花	植物
2119	明治31年	春の部	紫の霞棚引く宮の森	霞	天文
2120	明治31年	春の部	簾捲いて琴に對へば春の月	春の月	天文
2121	明治31年	春の部	田螺なく背戸に落ちたり三日の月	田螺	動物
2123	明治31年	春の部	見送るがふりすてがたき柳か那	柳	植物
2125	明治31年	春の部	賀びや雛まゐらす桃の宿	桃	植物
2126	明治31年	春の部	夫婦して今日も打つなり寺の畑	畑打ち	人事
2127	明治31年	春の部	藏普請濟むで辛夷の花咲きぬ	辛夷	植物
2128	明治31年	春の部	連翹を啄みこぼし鳥飛びぬ	連翹	植物
2129	明治31年	春の部	なかなかに長閑けき日なり山の寺	長閑	時候
2131	明治31年	春の部	異國舩に嶋の子走る春の風	春風	天文
2132	明治31年	春の部	島守が舘の旗や春の風	春風	天文
2133	明治31年	春の部	立てかけし琴の響や春の風	春風	天文
2134	明治31年	春の部	淺草や喇叭篳篥春の風	春風	天文
2135	明治31年	春の部	春風の野に小便す二人づれ	春風	天文
2136	明治31年	春の部	造船の鉋屑ちる春の風	春風	天文
2137	明治31年	春の部	東郊の春風二十四番か那	春風	天文
2138	明治31年	春の部	春風の冲の方より白帆か那	春風	天文
2139	明治31年	春の部	春風や妹がひれふる松浦潟	春風	天文
2140	明治31年	春の部	春風の道尽て寺の門に入る	春風	天文
2142	明治31年	春の部	管絃や春風吹満つ十二樓	春風	天文
2143	明治31年	春の部	造作の檜匂ふや春の風	春風	天文
2144	明治31年	春の部	縁に出でゝ障子張り居るや春の風	春風	天文
2145	明治31年	春の部	漣や春風渡る昆明池	春風	天文
2146	明治31年	春の部	春風や笹舟放つ池の面	春風	天文
2147	明治31年	春の部	梅遲く春風寒き伽藍か那	春風	天文
2148	明治31年	春の部	春風の吹やむ夕や花くもり	春風	天文
2149	明治31年	春の部	少しくもり春風寒し梅の道	春風	天文
2150	明治31年	春の部	馬に乘る追分村や春の風	春風	天文
2151	明治31年	春の部	春風や片側町の紺暖簾	春風	天文
2152	明治31年	春の部	洞穴に浪出つ入りつ日の永き	日永	時候
2153	明治31年	春の部	春の宵あけの玉垣灯のもるゝ	春宵	時候
2155	明治31年	春の部	永き日の馬まばらなる牧場か那	日永	時候
2156	明治31年	春の部	拜領の馬繫ぐ庭のさくらか那	櫻	植物
2157	明治31年	春の部	馬蹄輕く江南を春の風吹くよ	春風	天文
2158	明治31年	春の部	日は永く邯鄲の少年馬を馳す	日永	時候
2159	明治31年	春の部	厩から馬首出す花菜か那	菜の花	植物
2160	明治31年	春の部	春の夜の陣に琵琶きく馬上か那	春夜	時候
2161	明治31年	春の部	馬に乘て温泉の村に入るや春の雨	春雨	天文
2162	明治31年	春の部	春風や伶人馬に乘て行く	春風	天文
2163	明治31年	春の部	瘦馬に母乘せてゆく涅槃か那	涅槃會	人事
2164	明治31年	春の部	馬上にして槍の穂洗ふ柳か那	柳	植物
2165	明治31年	春の部	馬を下りて刄を洗ふ柳か那	柳	植物
2166	明治31年	春の部	春月や画ける欄間彫れる棟	春の月	天文

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2167	明治31年	春の部	柳折り柳折り春風路傍の情	春風	天文
2168	明治31年	春の部	坐につけば紅白のさくら餅が出る	桜餅	人事
2169	明治31年	春の部	柳ありて揚弓店と灯をともす	柳	植物
2170	明治31年	春の部	王城の北や上野の森おぼろ	朧	天文
2171	明治31年	春の部	肉くれなゐ點心みとり春の宵	春宵	時候
2172	明治31年	春の部	春閨の蝶や白馬の人遠く	蝶	動物
2173	明治31年	春の部	六法やくるわのさくら男伊達	櫻	植物
2174	明治31年	春の部	遊廓に異人乗込む春の月	春の月	天文
2175	明治31年	春の部	朧夜の廓逃げ来し二人か那	朧	天文
2176	明治31年	春の部	二三人廓出てゆく春の雨	春雨	天文
2177	明治31年	春の部	春さめや傾城部の小酒もり	春雨	天文
2178	明治31年	春の部	吉原の夜さくらを見るや田舎人	櫻	植物
2179	明治31年	春の部	花の廓若き男のなぶられし	花	植物
2180	明治31年	春の部	雨の廓春夢正にこまやかなり	春の夢	人事
2181	明治31年	春の部	客を送る柳のかけや京言葉	柳	植物
2182	明治31年	春の部	花に醉ふて遊女見に行く人数か那	花	植物
2183	明治31年	春の部	廓見ゆ菜の花街道横に折れ	菜の花	植物
2184	明治31年	春の部	三階や川に沿へる廓の春風樓	春風	天文
2185	明治31年	春の部	川千鳥若き遊女の京言葉	千鳥	動物
2186	明治31年	春の部	女連れて廓のさくら見に出でし	櫻	植物
2187	明治31年	春の部	入口の青柳見ゆる廓かな	柳	植物
2188	明治31年	春の部	心中のさはぎに廓あけやすき	短夜	時候
2190	明治31年	春の部	靉靆や玉種うる山の春の雲	春の雲	天文
2191	明治31年	春の部	春の夜の汐みち来るや磯くもり	春夜	時候
2192	明治31年	春の部	巣にこもる孕雀のなやみか那	孕雀	動物
2193	明治31年	春の部	うらゝかや寝殿の上を舞へる鳶	麗	時候
2194	明治31年	春の部	東京のまつりを語り畑打つ	畑打ち	人事
2195	明治31年	春の部	菜の花に大根の花のひょろ長き	雑	雑
2196	明治31年	春の部	萩垣の萩の芽もえつ茶のけふり	萩若葉	植物
2197	明治31年	春の部	蛤の篭に蓋すや磯のくさ	蛤	動物
2198	明治31年	春の部	垂跡や花の菩薩の人だかり	花祭	人事
2199	明治31年	春の部	故郷にある日炬燵を塞きけり	炬燵塞ぐ	人事
2201	明治31年	春の部	家に帰れば早巣立ちけり燕の子	燕の子	動物
2202	明治31年	春の部	頷赤くはしき燕の夫婦か那	燕	動物
2203	明治31年	春の部	堂上に巣くふべく乙鳥飛入りぬ	燕	動物
2204	明治31年	春の部	燒跡や乙鳥飛びかふ日もすがら	燕	動物
2205	明治31年	春の部	棟の上に雨の乙鳥のならびか那	燕	動物
2206	明治31年	春の部	入舩やつばくらめ飛ぶ港町	燕	動物
2207	明治31年	春の部	乙鳥や江戸参勤の諸大名	燕	動物
2208	明治31年	春の部	此頃や洛陽に入るつばくらめ	燕	動物
2209	明治31年	春の部	三階や昼の廓のつばくらめ	燕	動物
2210	明治31年	春の部	謫せられて嶋に燕をなつかしむ	燕	動物
2212	明治31年	春の部	五六人歌題えらびつ春の雨	春雨	天文
2214	明治31年	春の部	女坂を上れば天神の春の月	春の月	天文
2216	明治31年	春の部	椿落つ地水火風空椿落つ	椿	植物
2217	明治31年	春の部	もろく落ちし大輪の赤椿か那	椿	植物
2218	明治31年	春の部	物かいて居れば小庭に蝶が来る	蝶	動物
2219	明治31年	春の部	山吹にぬれて出でたり寺のちご	山吹	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2220	明治31年	春の部	山吹の歌知る茶屋の女か那	山吹	植物
2222	明治31年	春の部	村熟を晝鎖しあり鳴蛙	蛙	動物
2223	明治31年	春の部	蛙鳴く吉原田圃小提灯	蛙	動物
2224	明治31年	春の部	其中に声高き蛙遠き哉	蛙	動物
2225	明治31年	春の部	聽蛙亭の石灯篭に灯をともす	蛙	動物
2226	明治31年	春の部	野の店や昼の蛙の鳴きやまず	蛙	動物
2227	明治31年	春の部	小蛙の昼さはがしき宿場か那	蛙	動物
2228	明治31年	春の部	蛙祭る祠のうしろ蛙鳴	蛙	動物
2229	明治31年	春の部	小蛙や稍々ありて鳴く大蛙	蛙	動物
2230	明治31年	春の部	雲低れて遠方に鳴く蛙哉	蛙	動物
2231	明治31年	春の部	閣々と怒れる蛙雲を吐く	蛙	動物
2232	明治31年	春の部	ひとゝころ蛙鳴きやまず虹出でぬ	蛙	動物
2234	明治31年	春の部	女生徒の蚕飼ふたる一ト室か那	蚕	動物
2235	明治31年	春の部	蚕飼ふ此頃夫婦家にあり	蚕	動物
2236	明治31年	春の部	起きて見れば蚕の村に灯がともる	蚕	動物
2237	明治31年	春の部	大勢や庄屋に蚕飼ふ女	蚕	動物
2238	明治31年	春の部	桑の香や蚕の部屋のうす暗き	蚕	動物
2239	明治31年	春の部	妻となり夫となりぬ蚕飼ふ	蚕	動物
2240	明治31年	春の部	蚕かふ背戸を出てゆく小唄哉	蚕	動物
2241	明治31年	春の部	故郷に帰れば妻は蚕かひか那	蚕	動物
2242	明治31年	春の部	しんかんと蚕眠れる昼間か那	蚕	動物
2243	明治31年	春の部	養蚕所の二階に見えし女ども	蚕	動物
2244	明治31年	春の部	養蚕に雇はれて居るいとこづれ	蚕	動物
2245	明治31年	春の部	勝手より蚕見に来し隠居か那	蚕	動物
2246	明治31年	春の部	養蚕がすむで祭ある小村か那	蚕	動物
2247	明治31年	春の部	原中に塀めぐらせり養蚕所	蚕	動物
2248	明治31年	春の部	試に蚕かひたる世帯か那	蚕	動物
2249	明治31年	春の部	行く程に都のはづれ蚕時	蚕	動物
2251	明治31年	春の部	兄弟が訟の庭や棣棠華	棣	植物
2252	明治31年	春の部	行春を流罪と決す便か那	行春	時候
2253	明治31年	春の部	耕して甘棠を謳ふ野人か那	耕	人事
2254	明治31年	春の部	百姓の家に公事きく辛夷か那	辛夷	植物
2255	明治31年	春の部	石だゝみ状師が家の柳か那	柳	植物
2256	明治31年	春の部	役人の衣更へたり決断所	更衣	人事
2257	明治31年	春の部	大庭に水打つ天下の決断所	打水	人事
2258	明治31年	春の部	訟を断ず秋霜の如きか那	秋の霜	天文
2259	明治31年	春の部	名奉行のしのびありきす村の秋	秋	時候
2260	明治31年	春の部	竹にはさむ直訴の状や猟の道	狩	人事
10656	明治31年	春の部	梅が香やお京は六角御幸町	梅	植物
10585	明治31年	春の部	踏迷古道行くや百千鳥	百千鳥	動物
2713	明治32年	春の部	青空や松の梢のいかのぼり	凧	人事
2715	明治32年	春の部	むかしぶりや子の日の御幸絵巻物	子の日の遊び	人事
2716	明治32年	春の部	夕立に飛龍を描く墨はねし	夕立	天文
2717	明治32年	春の部	眉を描く京の女や秋海棠	秋海棠	植物
2718	明治32年	春の部	棧や画けるが如き蜀の秋	秋	時候
2719	明治32年	春の部	大なる武者繪の凧のうなり哉	凧	人事
2720	明治32年	春の部	菊咲くや古き繪を見る奈良の寺	菊	植物
2721	明治32年	春の部	絵具皿に陽炎の立つ写生哉	陽炎	天文

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2722	明治32年	春の部	奉納の繪馬かつぎ行く春の風	春風	天文
2723	明治32年	春の部	満開の牡丹画きし絹地か那	牡丹	植物
2724	明治32年	春の部	墨の香や素縑に画く梅の花	梅	植物
2726	明治32年	春の部	お小姓の戀せられたる櫻か那	櫻	植物
2727	明治32年	春の部	女唄ふ蝦夷が小島や草萠ゆる	草萠	植物
2728	明治32年	春の部	牛曳いて出るや小村の桃日和	桃	植物
2729	明治32年	春の部	よき幟ほしがる小供心か那	幟	人事
2730	明治32年	春の部	小意気なる藝者通りぬ門涼み	納涼	人事
2731	明治32年	春の部	小流や野菜花さく風呂の月	雑	雑
2732	明治32年	春の部	等閑や小草花咲く裏の道	草花	植物
2733	明治32年	春の部	寒潭に小さき月を印したる	寒	時候
2734	明治32年	春の部	寒垢離を行ず小兵の男哉	寒垢離	人事
2735	明治32年	春の部	小波や寒日うすき山の池	寒	時候
2737	明治32年	春の部	海苔粗朶に足引掻かん女の子	海苔	植物
2738	明治32年	春の部	冴返る塗縁をふむ跣足かな	冴返	時候
2739	明治32年	春の部	踏青の足もよごれぬ日和かな	踏青	人事
2740	明治32年	春の部	春の宵足に温泉をそゝぎけり	春宵	時候
2741	明治32年	春の部	若草に鶏の子の足かくれけり	若草	植物
2742	明治32年	春の部	散る花や毛だらけの足踏伸ばす	落花	植物
2743	明治32年	春の部	陽炎や岩が根ぬらす足の跡	陽炎	天文
2744	明治32年	春の部	ぬるむ水足の甲越すかち渉り	水温む	地理
2746	明治32年	春の部	沐浴して鏡に向ふ桃の花	桃	植物
2747	明治32年	春の部	芽をふきし傾城部屋の柳か那	柳	植物
2748	明治32年	春の部	小屏風に春の灯のほのあかき	春燈	人事
2749	明治32年	春の部	春雨や傾城部屋の小行灯	春雨	天文
2750	明治32年	春の部	送り出て柳に袖をかくしけり	柳	植物
2751	明治32年	春の部	傾城の梅の紅きをめづるかな	梅	植物
2752	明治32年	春の部	傾城の柳をくゞるともし哉	柳	植物
2753	明治32年	春の部	蝋燭や金釵斜に春の宴	春	時候
2754	明治32年	春の部	かんばしき酒に醉ひたり春の宴	春	時候
2755	明治32年	春の部	小屏風や念佛幽かに春の雨	春雨	天文
2757	明治32年	春の部	神立たす天浮橋うらゝかに	麗	時候
2758	明治32年	春の部	月の梅橋に人語の響かな	梅	植物
2759	明治32年	春の部	人去て橋は柳に暮れんとす	柳	植物
2760	明治32年	春の部	鄙路行くや土橋にもゆる草日和	草萠	植物
2761	明治32年	春の部	藪入や橋の袂の乳母が店	藪入	人事
2762	明治32年	春の部	行過ぎし衣の匂や橋おぼろ	朧	天文
2763	明治32年	春の部	満汐に橋洗はれし涼しさよ	涼し	時候
2764	明治32年	春の部	唐様や白蓮房に架けし橋	蓮	植物
2765	明治32年	春の部	錫杖の石橋渡る雲の峯	雲の峰	天文
2766	明治32年	春の部	谷川や秋の雲見る丸木橋	秋の雲	天文
2768	明治32年	春の部	かしこまる烏帽子尊し梅の花	梅	植物
2769	明治32年	春の部	神の井に烏帽子を拂ふ柳かな	柳	植物
2770	明治32年	春の部	樹の下の草緑りなり春の雪	春雪	天文
2771	明治32年	春の部	青草にはぢかれにけり春の雪	春雪	天文
2772	明治32年	春の部	出て行くや沈丁臭き寺のちご	沈丁花	植物
2773	明治32年	春の部	紅梅の紅きを愛づる人もあり	梅	植物
2774	明治32年	春の部	泥を出て田螺見てゐる山の雲	田螺	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2775	明治32年	春の部	門川に田螺鳴くべき曇りかな	田螺	動物
2776	明治32年	春の部	大方の雛飾りし二日哉	雛祭	人事
2777	明治32年	春の部	雛買ひに連立出でしめをと哉	雛市	人事
2779	明治32年	春の部	滝の音に春日閒なる對坐哉	春日	時候
2780	明治32年	春の部	畑中や十二社詣春の風	春風	天文
2781	明治32年	春の部	湛えては松が根ひたす春の水	春の水	地理
2782	明治32年	春の部	土手の日や古葉を掻けば草萠えし	草萠	植物
2783	明治32年	春の部	畑打の人を喚ぶなり暮の道	畑打ち	人事
2784	明治32年	春の部	麗かの水を渡りぬ美なる哉	麗	時候
2785	明治32年	春の部	清人のよき衣着たる柳か那	柳	植物
2786	明治32年	春の部	灯を持って女見えたり春の宿	春	時候
2787	明治32年	春の部	春の日の虹あらはれぬ滝しぶき	春の日	天文
2788	明治32年	春の部	此頃の日和頼もし萠ゆる草	草萠	植物
2790	明治32年	春の部	畑打やものなつかしき話振	畑打ち	人事
2791	明治32年	春の部	逢着し得たり彼岸の燒豆腐	彼岸	人事
2792	明治32年	春の部	物詣彼岸の雲の尊とかり	彼岸	人事
2793	明治32年	春の部	春の水十二叢祠を繞りけり	春の水	地理
2794	明治32年	春の部	碁客相逢ふて十二社の暮遅き	遲日	時候
2795	明治32年	春の部	雉打て邯鄲の市に帰る哉	雉子	動物
2796	明治32年	春の部	氷解けて淵となりたる巖かな	氷解	地理
2797	明治32年	春の部	いさゝかの花菜見出でし山路哉	菜の花	植物
2798	明治32年	春の部	畑打や去年の債を語合ふ	畑打ち	人事
2799	明治32年	春の部	白魚や水打そゝぐ籃の草	白魚	動物
2801	明治32年	春の部	鞦韆に鶏鳴いてゐる田舎哉	鞦韆	人事
2802	明治32年	春の部	岩鼻に蕨も取らぬひとりかな	蕨	植物
2803	明治32年	春の部	竹に近く家を移しぬ竹の秋	竹の秋	植物
2804	明治32年	春の部	はらからの列見を競ふかざし哉	櫻	植物
2805	明治32年	春の部	摘草の茅花もまじりこぼれけり	摘草	人事
2806	明治32年	春の部	妻機を下らず燕堂に巣くふ	燕	動物
2807	明治32年	春の部	賜や錦きせゆく鶏合	鷄合	人事
2808	明治32年	春の部	てふ／＼の物思ふらん小さき胸	蝶	動物
2809	明治32年	春の部	門川に鍋炭流る温みかな	暖	時候
2810	明治32年	春の部	やゝ遲き末黒芒の芽ばへかな	末黒の芒	植物
2811	明治32年	春の部	佛菩薩大千世界花盛り	花	植物
2813	明治32年	春の部	玉碗や美酒を盛り来る桃の花	桃	植物
2814	明治32年	春の部	桃の村を出づれば漢の代となりぬ	桃	植物
2815	明治32年	春の部	曲水や桃盛りなる醉心地	桃	植物
2816	明治32年	春の部	桃の岸に流れ寄りけり古き椀	桃	植物
2817	明治32年	春の部	白桃の莟勝なり寒食す	寒食	人事
2818	明治32年	春の部	満朝の小人原や桃李	雜	雜
2819	明治32年	春の部	桃の枝を賜って朝を罷るかな	桃	植物
2820	明治32年	春の部	位低く児孫に冨めり桃の花	桃	植物
2821	明治32年	春の部	谷深く平家の末や桃の村	桃	植物
2822	明治32年	春の部	桃咲いて帝夜毎の微行かな	桃	植物
2824	明治32年	春の部	根を分けて菊に黄金を給はりし	菊根分	人事
2825	明治32年	春の部	人泊めて菊の根分くる旦か那	菊根分	人事
2826	明治32年	春の部	小童の菊の根分に侍りし	菊根分	人事
2827	明治32年	春の部	暮の雨菊の白根のこぼれかな	菊根分	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2828	明治32年	春の部	根分すと菊園に出づ荒れしかな	菊根分	人事
2829	明治32年	春の部	帰省して一ト日は菊の根を分けし	菊根分	人事
2830	明治32年	春の部	市人の菊の根分や銭ほしき	菊根分	人事
2831	明治32年	春の部	白髪の菊の根分に召されけり	菊根分	人事
2832	明治32年	春の部	根も分けず菊に荒れたり古き庭	菊根分	人事
2833	明治32年	春の部	根分して菊に故事など文を見る	菊根分	人事
2835	明治32年	春の部	使しててふ／＼神と語るかな	蝶	動物
2837	明治32年	春の部	麗かの繡したり美なる雲	麗	時候
2839	明治32年	春の部	町中に春の埃りや女連れ	春塵	天文
2841	明治32年	春の部	日に疎き梨の莟や茶のけふり	梨の花	植物
2843	明治32年	春の部	菜の花に鍛冶が家見る眞昼哉	菜の花	植物
2845	明治32年	春の部	鶏の子やぬるむ水のむ器	水温む	地理
2847	明治32年	春の部	陽炎の草を離れてもゆる哉	陽炎	天文
2849	明治32年	春の部	唐人の春の冠うるはしき	春	時候
2851	明治32年	春の部	江の島の神の細工や春の貝	春	時候
2852	明治32年	春の部	鍋小さく長閑に物の煮ゆる哉	長閑	時候
2853	明治32年	春の部	永き日の物の種まくひとり哉	日永	時候
2855	明治32年	春の部	凾根の山煙揚るところ〳〵	雑	雑
2857	明治32年	春の部	砂利舟の砂利こぼれけり春の風	春風	天文
2859	明治32年	春の部	山中は椿に物の静かなり	椿	植物
2861	明治32年	春の部	わざおぎや菜種の中の戻り路	菜の花	植物
2863	明治32年	春の部	菜の花や鐘もつかざる山の寺	菜の花	植物
2865	明治32年	春の部	雲ゆくや山冷かに蕗の薹	蕗の薹	植物
2867	明治32年	春の部	一村や晴れて冨士見る柿若葉	柿若葉	植物
2869	明治32年	春の部	菜の花の美なる山河を夢むらん	菜の花	植物
2871	明治32年	春の部	春の夜の洗足ぬるき旅籠かな	春夜	時候
2873	明治32年	春の部	旭のさすや羽衣乾く草の蝶	蝶	動物
2875	明治32年	春の部	てふの眉誰が家の子の描きけん	蝶	動物
2877	明治32年	春の部	葉櫻にあしたの風や白き幣	葉櫻	植物
2879	明治32年	春の部	てふ／＼の麦の中から生れけり	蝶	動物
2881	明治32年	春の部	材木の菜種日和に乾くかな	菜の花	植物
2883	明治32年	春の部	搖曳の舟に見おろす海雲哉	雑	雑
2885	明治32年	春の部	思はずの小松が原や菜種さく	菜の花	植物
2887	明治32年	春の部	菜の花に染物干すや町はづれ	菜の花	植物
2889	明治32年	春の部	野社の菜の花くもり太皷打つ	菜の花	植物
2890	明治32年	春の部	囚人の物もいはざる日永かな	日永	時候
2891	明治32年	春の部	絹張の蝙蝠仐や菜種咲く	菜の花	植物
2892	明治32年	春の部	野火消えて伊吹おろしの淋しかり	野山焼	人事
2893	明治32年	春の部	菜種咲く近江の空の低き哉	菜の花	植物
2894	明治32年	春の部	近江路や菜の花車人みちて	菜の花	植物
2895	明治32年	春の部	菜の花に小さき佛の眠る哉	菜の花	植物
2896	明治32年	春の部	名物の餅に日永の埃り哉	日永	時候
2897	明治32年	春の部	花ちるや鱠にすべき篭の鮒	鮒膾	人事
2898	明治32年	春の部	降らざりし菜の花ぐもり京に入る	菜の花	植物
2899	明治32年	春の部	春の人に吾もまじりて京に入る	春	時候
2900	明治32年	春の部	雀子の一ト日は水に遊びけり	雀の子	動物
2902	明治32年	春の部	佛具屋に日當る春や奈良の町	春	時候
2903	明治32年	春の部	永き日の珠数賣る店や人もなし	日永	時候

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2904	明治32年	春の部	袈裟衣緋や紫や京の春	春	時候
2905	明治32年	春の部	木魚さらす古道具の店長閑なる	長閑	時候
2906	明治32年	春の部	連翹や古き経賣る店の先	連翹	植物
2907	明治32年	春の部	幢幔や寺寂として春の雨	春雨	天文
2908	明治32年	春の部	金色の佛黒みし櫻か那	櫻	植物
2909	明治32年	春の部	行春の小坊主鐘を撞いて出る	行春	時候
2910	明治32年	春の部	春雨や寺かりてゐる夫婦もの	春雨	天文
2911	明治32年	春の部	禅を問へば桃花に牛の乳白し	桃	植物
2913	明治32年	春の部	剛の坐の黒皮縅し梅の花	梅	植物
2914	明治32年	春の部	漂着の黒奴に春の人だかり	春	時候
2915	明治32年	春の部	黒奴の罵合ふや花の茶屋	花	植物
2916	明治32年	春の部	路傍や花菜に人の飯黒き	菜の花	植物
2917	明治32年	春の部	注連張りし黒き巖や海朧	朧	天文
2918	明治32年	春の部	山吹や鉄漿黒々の茶屋女	山吹	植物
2919	明治32年	春の部	引越しのかまどは黒し桃の花	桃	植物
2920	明治32年	春の部	黒々と木佛并び春の月	春の月	天文
2921	明治32年	春の部	花かざし顔の黒子やよき女	花	植物
2922	明治32年	春の部	酒苦がく櫻は黒き男かな	櫻	植物
2924	明治32年	春の部	てふ／＼の止まらんとする微風かな	蝶	動物
2925	明治32年	春の部	てふ／＼の物も思はず飛んでゐる	蝶	動物
2926	明治32年	春の部	てふ／＼や舟から上り岐れ道	蝶	動物
2927	明治32年	春の部	てふ／＼や何に集る庭の昼	蝶	動物
2928	明治32年	春の部	てふ／＼の吹かれては又逢はまくす	蝶	動物
2929	明治32年	春の部	閒庭や蝶も出でざる昼下り	蝶	動物
2930	明治32年	春の部	てふ／＼の顔よきが恋せられなん	蝶	動物
2932	明治32年	春の部	釣鐘や落花つめたき雨のもり	落花	植物
2933	明治32年	春の部	商人の釣鐘覗く日永哉	日永	時候
2934	明治32年	春の部	鐘つけば殷々となる朧かな	朧	天文
2935	明治32年	春の部	行春の鐘撞き出す下山かな	行春	時候
2936	明治32年	春の部	春の日の鐘釣り上ぐる群衆哉	春日	時候
2937	明治32年	春の部	鐘釣て山吹散りぬ地のゆるぎ	山吹	植物
2938	明治32年	春の部	菜の花や村に鐘鑄る人どほり	菜の花	植物
2939	明治32年	春の部	試みに鐘など撞くや春の寺	春	時候
2940	明治32年	春の部	洪鐘や寂莫として落椿	椿	植物
2941	明治32年	春の部	陽炎の大地に据ゑし鐘黒き	陽炎	天文
2942	明治32年	春の部	島原や菜種の花に振返り	菜の花	植物
2943	明治32年	春の部	菜の花に揚屋の窓や小さかり	菜の花	植物
2944	明治32年	春の部	菜の花や人を手招ぐ小傾城	菜の花	植物
2945	明治32年	春の部	島原に異人も見えて柳かな	柳	植物
2946	明治32年	春の部	傾城の八文字ふむ柳かな	柳	植物
2947	明治32年	春の部	傾城の日仐は赤き柳かな	柳	植物
2948	明治32年	春の部	洋人や菜種の花に廓出る	菜の花	植物
2949	明治32年	春の部	日は遲き壬生狂言の舞台かな	遲日	時候
2950	明治32年	春の部	菜の花に物賣る店や壬生念佛	菜の花	植物
2951	明治32年	春の部	島原は菜の花ぐもり壬生念佛	菜の花	植物
2952	明治32年	春の部	壬生寺に狂言はてし雲雀かな	雲雀	動物
2953	明治32年	春の部	飴賣も見てゐる壬生の踊かな	壬生念佛	人事
2955	明治32年	春の部	鶯や松の梢を雲帰る	鶯	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2957	明治32年	春の部	飛込んで浮きし蛙の頓悟哉	蛙	動物
2959	明治32年	春の部	遥拝の大極殿や雲雀鳴く	雲雀	動物
3793	明治33年	春の部	清泉に梅花を點ず梅の花	梅	植物
3794	明治33年	春の部	水に落つ鶴の涙や梅の花	梅	植物
3795	明治33年	春の部	徒らに燒かれし猫の戀衣	猫の戀	動物
3796	明治33年	春の部	春の夜や廓の裏の小提灯	春夜	時候
3797	明治33年	春の部	潔き白魚の目や水の中	白魚	動物
3798	明治33年	春の部	白魚をえりわけにけり海の草	白魚	動物
3799	明治33年	春の部	老猫の寢顔に戀もなかりけり	猫の戀	動物
3800	明治33年	春の部	東風吹くや松原出でし蜑少女	東風	天文
3801	明治33年	春の部	羽衣の東風に吹かれて松朝日	東風	天文
3802	明治33年	春の部	雪に落つ花釵や雪すべり	花簪	植物
3803	明治33年	春の部	人形や錦屑散る春の風	春風	天文
3804	明治33年	春の部	藻の花に手の届かざる泗哉	藻の花	植物
3805	明治33年	春の部	這ふちごのくうすべ知らで苺哉	苺	植物
3806	明治33年	春の部	諸共に泣き出す子供角力哉	角力	人事
3807	明治33年	春の部	雛抱いて唄ひ戻りぬ隣の子	雛	人事
3808	明治33年	春の部	ふらこゝの影の長さよ水の上	鞦韆	人事
3809	明治33年	春の部	提灯や路にかぶさる夜の花	花	植物
3811	明治33年	春の部	鎭守府の將軍星や王二月	二月	時候
3812	明治33年	春の部	藤茶屋の軒も柱も藤の花	藤の花	植物
3813	明治33年	春の部	出代の小錢ためたる財布かな	出代	人事
3814	明治33年	春の部	出代の人となりたる男ぶり	出代	人事
3815	明治33年	春の部	出代の主の妾を憎む哉	出代	人事
3816	明治33年	春の部	藪入の流行目にさす藥かな	藪入	人事
3817	明治33年	春の部	宮城野は畑となりし花菜哉	菜の花	植物
3818	明治33年	春の部	傾城の白石噺春の雨	春雨	天文
3819	明治33年	春の部	遠雷に耳驚かす汐干かな	潮干	地理
3820	明治33年	春の部	よき人の足をかゆがる汐干かな	潮干	地理
3821	明治33年	春の部	踏青の終に汐干に遊びけり	潮干	地理
3822	明治33年	春の部	灯火に汐干のつとをひらきけり	潮干	地理
3823	明治33年	春の部	遠く遊ぶ汐干の人や暮遲き	潮干	地理
3824	明治33年	春の部	海苔麁朶や雨ふりやまぬ汐干潟	潮干	地理
3825	明治33年	春の部	東の海のしほひや春の雲	潮干	地理
3826	明治33年	春の部	門前の汐干に遊ぶ日もすがら	潮干	地理
3827	明治33年	春の部	男達船に物煮る汐干かな	潮干	地理
3946	明治34年	春の部	谷底の殘の雪や山おろし	殘雪	地理
3947	明治34年	春の部	小額による年波や猫の妻	猫の戀	動物
3948	明治34年	春の部	春の雪朧の月を見る皃に	春雪	天文
3949	明治34年	春の部	雪解の日毎／＼や山の色	雪解	地理
3950	明治34年	春の部	初雷やさる上臈の宮ごもり	初雷	天文
3951	明治34年	春の部	囀って／＼いつこ飛去りぬ	囀	動物
3952	明治34年	春の部	語らひや身こもる田螺物うげに	田螺	動物
3953	明治34年	春の部	いもとねて神鳴をきく春の宵	春宵	時候
3954	明治34年	春の部	花にぬる鎧や春の宵しめり	春宵	時候
3955	明治34年	春の部	いつはりの皮衣やく春の宵	春宵	時候
3956	明治34年	春の部	名玉を碎いて春の夜の愁	春夜	時候
3957	明治34年	春の部	住吉の松めでたしや春の宵	春宵	時候

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3958	明治34年	春の部	山吹の庄や山吹姫を見る	山吹	植物
3959	明治34年	春の部	角落ちし氣の衰や鹿の皃	鹿の角落つ	動物
3960	明治34年	春の部	飯蛸のうかれ心や月の汐	飯だこ	動物
3961	明治34年	春の部	よき衣のけはひも春の夢心	春の夢	人事
3962	明治34年	春の部	呼びかはす雀の親子悲くも	雀の子	動物
3963	明治34年	春の部	夕かすみ絹を曳いたる如き哉	霞	天文
3964	明治34年	春の部	初午の市に上りし鰊かな	鰊	動物
3965	明治34年	春の部	春の水風にふかるゝ水の皺	春の水	地理
3966	明治34年	春の部	あらがねに陽炎もゆる車上かな	陽炎	天文
3967	明治34年	春の部	紅の帳も見えず夕吹雪	吹雪	天文
3968	明治34年	春の部	塞上の胡笳塞下の吹雪哉	吹雪	天文
3969	明治34年	春の部	むせぶらん千鳥悲しや小夜吹雪	吹雪	天文
3970	明治34年	春の部	送出て吹雪の人を望みけり	吹雪	天文
3971	明治34年	春の部	日當や背戸の種井の水淺み	種井	人事
3972	明治34年	春の部	種物の器の水やくつがへり	種物	人事
3973	明治34年	春の部	紫に光りてあやし物の種	種物	人事
3974	明治34年	春の部	水につく藁の青みや種俵	種俵	人事
3975	明治34年	春の部	春寒したねをつくべき水溜	春寒	時候
3976	明治34年	春の部	星おちて紫烟騰りぬ胡射の春	春	時候
3977	明治34年	春の部	曉の星の柳に消えて昆明池	柳	植物
3978	明治34年	春の部	門に見る柳に絶えぬ愁かな	柳	植物
3979	明治34年	春の部	糞し去る玳瑁の梁や燕	燕	動物
3980	明治34年	春の部	芽を吹いて諸木の競心かな	芽吹く	植物
3981	明治34年	春の部	瓔珞の光や春の殿づくり	春	時候
3982	明治34年	春の部	買得たる桃の安さよ乱咲き	桃	植物
3983	明治34年	春の部	鶯のころも輕げに見ゆるかな	鶯	動物
3984	明治34年	春の部	鳥の巣や既に故郷の路にあり	鳥の巣	動物
3985	明治34年	春の部	干鱈さいて冷たく覚ゆ宵の春	春宵	時候
3986	明治34年	春の部	裏山の雑木の春や禽の声	春	時候
3987	明治34年	春の部	如月の節物遲し廿日過	如月	時候
3988	明治34年	春の部	暖や日向に据ゑし藥風呂	暖	時候
3989	明治34年	春の部	永き日の寿型をこねる一人かな	日永	時候
3990	明治34年	春の部	吊したるきゞすに遲き日脚哉	遲日	時候
3991	明治34年	春の部	山吹を括りて石を露はしぬ	山吹	植物
3992	明治34年	春の部	雛の間は寂しく思ふ四日哉	雛	人事
3993	明治34年	春の部	何草の芽ともわかざる花壇哉	草の芽	植物
3994	明治34年	春の部	黄鳥のやゝ近づいて来鳴く哉	鶯	動物
3995	明治34年	春の部	一丈もしだれて柳水を拂ふ	柳	植物
3996	明治34年	春の部	春の日の木魚を市にさらしけり	春日	時候
3997	明治34年	春の部	魏か晋か枯木か梅か古法帖	雑	雑
3998	明治34年	春の部	花束を抛ち去りぬ蜂の穴	蜂	動物
3999	明治34年	春の部	耕の人の家路や夕ぬくき	耕	人事
4000	明治34年	春の部	満面の醉や櫻に酒を吹く	櫻	植物
4001	明治34年	春の部	散りかゝる彼岸櫻や西行忌	西行忌	人事
4002	明治34年	春の部	釈典の人少ナなる香火かな	釋奠	人事
4003	明治34年	春の部	初花に心も留めず杣が妻	花	植物
4004	明治34年	春の部	種芋を盗まれにけり宵の中	種芋	植物
4005	明治34年	春の部	鳥雲に入て佛に見ゆらむ	鳥入雲	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4006	明治34年	春の部	偶々に麦ふむ足やこそかゆき	麥踏	人事
4007	明治34年	春の部	草餅を三ツ重ねたり小さき盆	草餅	人事
4008	明治34年	春の部	峯入の咒を讀上ぐる風雨かな	峰入	人事
4009	明治34年	春の部	只一ツ芽吹く接穂や忘霜	別れ霜	天文
4010	明治34年	春の部	花まさに開かん象行く吉なり	花	植物
4011	明治34年	春の部	野遊の女に歌をおくりけり	野遊	人事
4012	明治34年	春の部	花の露に濕ふ如し御身拭	御身拭	人事
4013	明治34年	春の部	耳をぬく雉子の悲鳴や泊狩	雉子	動物
4014	明治34年	春の部	ひたのぼる魚のきほひや上りやな	上り築	人事
4015	明治34年	春の部	物は夕鳥の別も憂かりけり	鳥帰る	動物
4016	明治34年	春の部	寒食や廂の前の白き花	寒食	人事
4017	明治34年	春の部	三里來て大津の鐘や鮒膾	鮒膾	人事
4018	明治34年	春の部	薪能奈良は静かに明けにけり	薪能	人事
4019	明治34年	春の部	豆の花摘まんと蜂にさゝれけり	雑	雑
4250	明治35年	春の部	鶯や人熱鉄を湯に投ず	鶯	動物
4251	明治35年	春の部	朧夜のたま／＼鶴の鳴き去りぬ	朧	天文
4252	明治35年	春の部	雪洞の絹の光りや冴返り	冴返	時候
4253	明治35年	春の部	世の中の柳を見ても涙か那	柳	植物
4254	明治35年	春の部	鐘撞て京の日永し智恩院	日永	時候
4255	明治35年	春の部	佛閣の彼方にさびし薪能	薪能	人事
4256	明治35年	春の部	下萠の草に愁もなかりけり	草萠	植物
4257	明治35年	春の部	春の水柳洗はんばかりかな	春の水	地理
4258	明治35年	春の部	白魚の子をや生むらん宵の月	白魚	動物
4259	明治35年	春の部	炉塞や佛の飯のさびしくも	爐塞	人事
4260	明治35年	春の部	炉塞ば炉なし柳は緑にて	爐塞	人事
4261	明治35年	春の部	煩悩の炉は塞がてと悲めり	爐塞	人事
4262	明治35年	春の部	乾海苔の小家や春の雲の影	春の雲	天文
4264	明治35年	春の部	かゝる世に賢を招かば梅の花	梅	植物
4266	明治35年	春の部	桃散て神のお水もぬるみけり	桃	植物
4268	明治35年	春の部	初雷や人を惑はす張天師	初雷	天文
4269	明治35年	春の部	陽炎や大津の路の絵紙賣	陽炎	天文
4270	明治35年	春の部	温む川脛赤き鳥都鳥	水温む	地理
4272	明治35年	春の部	古の櫻もさかで哀なり	櫻	植物
4274	明治35年	春の部	畑打に鳥なく頃や歌枕	畑打ち	人事
4275	明治35年	春の部	初雷や屏風の鴛鴦の驚かず	初雷	天文
4276	明治35年	春の部	日當や競ひ出でたる蕗の薹	蕗の薹	植物
4278	明治35年	春の部	だまっては居れぬしびれもねはん像	涅槃會	人事
4280	明治35年	春の部	糊臭き雀の嘴やねはん像	涅槃會	人事
4282	明治35年	春の部	ねはん會や各が腹のへり加減	涅槃會	人事
4284	明治35年	春の部	一時佛右に寐返る別れかな	涅槃會	人事
4285	明治35年	春の部	引鶴の黄金の札も霞かな	引鶴	動物
4286	明治35年	春の部	耕して居れば咎もなかりけり	耕	人事
4287	明治35年	春の部	花くもり花なき里もなかりけり	花	植物
4288	明治35年	春の部	海棠に珊瑚の鞭をふるひけり	海棠	植物
4289	明治35年	春の部	大名の驕の沙汰や汐干狩	潮干狩	人事
4291	明治35年	春の部	綿つみの玉の臺や春寒し	春寒	時候
4292	明治35年	春の部	龍天に黄帝の御衣ひるかへる	龍登天	動物
4293	明治35年	春の部	踏青の皆珠をふむ美少年	踏青	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4294	明治35年	春の部	猫の子の父も知らざる哀かな	猫の子	動物
4295	明治35年	春の部	釈奠や上にまれます聖天子	釋奠	人事
4296	明治35年	春の部	凍とけてその若緑常盤なり	凍解	地理
4297	明治35年	春の部	淡雪の淡き契りや夢ばかり	淡雪	天文
4298	明治35年	春の部	つばくらに昼鳴る鐘や知恩院	燕	動物
4299	明治35年	春の部	面を吹く風軟かや小弓引	春風	天文
4300	明治35年	春の部	冷めしの宿はものうし朧月	朧月	天文
4301	明治35年	春の部	天さかる鄙路の春や歌枕	春	時候
4302	明治35年	春の部	趣や芥もくたに温む水	水温む	地理
4303	明治35年	春の部	悉く揚がる大凧小凧かな	凧	人事
4304	明治35年	春の部	梅咲いて賢を招かん國の守	梅	植物
4305	明治35年	春の部	獺の妻病で祭か延びにけり	獺の祭	時候
4306	明治35年	春の部	獺魚をまつるも宵の春なれや	獺の祭	時候
4307	明治35年	春の部	寒食の小皿に紅き芽うど哉	寒食	人事
4308	明治35年	春の部	うどの芽の潔うして春寒し	春寒	時候
4309	明治35年	春の部	涅槃会や鳥啼いてゐる沙羅双樹	涅槃會	人事
4310	明治35年	春の部	ねはん會の済んで鳴出す猫の妻	涅槃會	人事
4311	明治35年	春の部	二日灸麦の畑を眺めやり	二日灸	人事
4312	明治35年	春の部	二日灸肌ぬく事を羞らへり	二日灸	人事
4313	明治35年	春の部	初雷やよき人の夢を驚かす	初雷	天文
4314	明治35年	春の部	畑打や知事が来たとも知らぬげな	畑打ち	人事
4315	明治35年	春の部	水ぬるみ流るゝさまや椿落つ	水温む	地理
4316	明治35年	春の部	陽炎や庭に干したる鬼の面	陽炎	天文
4317	明治35年	春の部	雛の間の桃の屑はく四日哉	雛祭	人事
4318	明治35年	春の部	雛棚の飾も終へてうれしけれ	雛祭	人事
4319	明治35年	春の部	別荘の春まだ浅き便り哉	春淺し	時候
4320	明治35年	春の部	田螺臭き料理なりけり草の宿	田螺	動物
4321	明治35年	春の部	初午や狐のぬすむ小豆めし	初午	人事
4322	明治35年	春の部	手のひらの子雀飛ばす春の風	春風	天文
4323	明治35年	春の部	髙砂や此浦舟も春けしき	春	時候
4324	明治35年	春の部	庭前の雪も残らずなりにけり	殘雪	地理
4325	明治35年	春の部	子がやせた母もやせたと鳴蛙	蛙	動物
4326	明治35年	春の部	山吹や白木作りの行在所	山吹	植物
4327	明治35年	春の部	出代や叶はぬ戀の三年越	出代	人事
4328	明治35年	春の部	つみ草や羽衣見ゆるあたりまで	摘草	人事
4329	明治35年	春の部	出代の嬲られ皃や桃の花	雜	雜
4330	明治35年	春の部	雁風呂のぬるきもうたゝ哀也	雁風呂	人事
4331	明治35年	春の部	白魚の身は潔し韮なます	雜	雜
4332	明治35年	春の部	小坊主の彼岸顔なり山颪	彼岸	人事
4333	明治35年	春の部	悉く蛙となりぬ蛙の子	蛙	動物
4334	明治35年	春の部	古つかをさくり出して日は永し	日永	時候
4335	明治35年	春の部	昭君の馬や楊の花ふゝき	柳	植物
4336	明治35年	春の部	階前の花飛ぶ急に秦舞陽	花	植物
4337	明治35年	春の部	年々の桃の流や西施石	桃	植物
4338	明治35年	春の部	春風や徐福が舩の童男女	春風	天文
4339	明治35年	春の部	家に居る東方朔や田螺あへ	田螺和	人事
4340	明治35年	春の部	田螺賣る小鍋に春の日ざし哉	田螺	動物
4341	明治35年	春の部	陽炎や田螺の鍋の煮こぼるゝ	田螺	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4342	明治35年	春の部	田螺賣だまされてゐる都かな	田螺	動物
4343	明治35年	春の部	牡丹切て客驚かす春申君	牡丹	植物
4344	明治35年	春の部	燕青が雁を見上ぐる眼かな	雁	動物
4345	明治35年	春の部	古道を箕子泣き去りぬつく〳〵し	つくつく法師	動物
4346	明治35年	春の部	大將は霍嫖姚ぞ霜の声	霜	天文
4347	明治35年	春の部	草餅に張儀が舌の長い事	草餅	人事
4348	明治35年	春の部	春雨や縁に湯氣立つ藥鍋	春雨	天文
4349	明治35年	春の部	虎杖も蘇ものびて暮おそし	雑	雑
4350	明治35年	春の部	春の水あさみに及ぶ溢かな	春の水	地理
4351	明治35年	春の部	田鼡鶉となりしや否吾不知焉	田鼡化して鶉となる	時候
4352	明治35年	春の部	立札に人たかりけり花吹雪	花	植物
4353	明治35年	春の部	世の中の俳人どもやつく〳〵し	土筆	植物
4354	明治35年	春の部	猫の戀去年の恨もありぬべし	猫の戀	動物
4355	明治35年	春の部	遲き日や壬生の舞台の片明り	遲日	時候
4356	明治35年	春の部	踊見て壬生から戻る日永哉	日永	時候
4357	明治35年	春の部	先生がつくしの歌をよまれけり	土筆	植物
4358	明治35年	春の部	木蓮や庭にほしたる種俵	木蓮	植物
4359	明治35年	春の部	木蓮の画室に散りぬ二三片	木蓮	植物
4360	明治35年	春の部	春雨や狐落ちたる女泣く	春雨	天文
4361	明治35年	春の部	歌塚や栁の木の芽も春にして	春	時候
4362	明治35年	春の部	ほの〳〵とあけの蛙も鳴きにけり	蛙	動物
4363	明治35年	春の部	石楠花金剛山の知らぬ鳥	石楠花	植物
4364	明治35年	春の部	鳴神の石にひゝきや石楠花	石楠花	植物
4365	明治35年	春の部	麦鶉田鼡の妻の知らず顔	麦鶉	動物
4366	明治35年	春の部	到る処菜種の中の麦青し	麦青む	植物
4367	明治35年	春の部	竹の秋嵯峨の名所は荒れにけり	竹の秋	植物
4368	明治35年	春の部	蛇も穴を出つる日和や老の杖	蛇穴を出る	動物
4369	明治35年	春の部	春もうし藥を煮る火消えがちに	春	時候
4370	明治35年	春の部	山霊の不可思議もあり泊狩	泊狩	人事
4371	明治35年	春の部	蜃氣楼いかなる神のこもるらん	蜃氣楼	天文
4372	明治35年	春の部	玉殿に春の御悩や反魂香	春	時候
4373	明治35年	春の部	桃の酒さめて桃ちる日暮哉	桃の酒	人事
4719	明治36年	春の部	鶴も帰り梅もちりけり丘夕	梅	植物
4720	明治36年	春の部	暗きより出でし貴人や薪能	薪能	人事
4721	明治36年	春の部	冴え返る神の井の水湧き足らず	冴返	時候
4722	明治36年	春の部	氷とけて鴛鴦の毛も流れけり	氷解	地理
4723	明治36年	春の部	木の芽苦き鶯の舌や別霜	別れ霜	天文
4724	明治36年	春の部	春淺し等閑に見る蛙の句	春淺し	時候
4725	明治36年	春の部	野を焼くや貴人たま／＼過ぎにけり	野山焼	人事
4726	明治36年	春の部	春風の吹静まりやうす曇	春風	天文
4727	明治36年	春の部	初午や一樹うれしき野路の梅	初午	人事
4728	明治36年	春の部	鳴くや田螺夜来八萬四千の偈	田螺	動物
4730	明治36年	春の部	初雷や命婦訪ふ草の宿	初雷	天文
4731	明治36年	春の部	初雷や髙麗人光る君を相る	初雷	天文
4732	明治36年	春の部	折からの初雷や品さだめ	初雷	天文
4733	明治36年	春の部	初雷に尼君ひとり淋しけれ	初雷	天文
4734	明治36年	春の部	初雷を紫の上寐入りけり	初雷	天文
4735	明治36年	春の部	初雷に物のけ落す修法かな	初雷	天文

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4736	明治36年	春の部	初雷や小君かしこきかへり言	初雷	天文
4737	明治36年	春の部	初雷や衣にかくるゝ人ぞうき	初雷	天文
4738	明治36年	春の部	初雷や末摘花もあはれなり	初雷	天文
4739	明治36年	春の部	初雷や松も淋しき須磨の宿	初雷	天文
4740	明治36年	春の部	陽炎の乱れて孔雀飛ばんとす	陽炎	天文
4741	明治36年	春の部	日蝕や水草の芽のうす緑	草の芽	植物
4742	明治36年	春の部	菊根分こゝにひとりの翁あり	菊根分	人事
4743	明治36年	春の部	門前に子等集ひけり西行忌	西行忌	人事
4744	明治36年	春の部	梅月夜水神を見るかしこさよ	梅	植物
4745	明治36年	春の部	童子二三人春服既に成る	春服	人事
4746	明治36年	春の部	日蝕や野に囀の声もなし	囀	動物
4747	明治36年	春の部	試に童子醉ひたり桃の酒	桃の酒	人事
4748	明治36年	春の部	酒壷や多少の桃花鮮かに	桃	植物
4749	明治36年	春の部	桃の酒顔色いよゝ美なる哉	桃の酒	人事
4750	明治36年	春の部	桃の酒小狙も醉ひて睡りけり	桃の酒	人事
4751	明治36年	春の部	桃の酒楊貴妃に戯れ給ふ	桃の酒	人事
4752	明治36年	春の部	春の月還御の頃を傾きぬ	春の月	天文
4753	明治36年	春の部	春の月花にそむける人や誰	春の月	天文
4754	明治36年	春の部	春の月加茂の社家人ほのめきて	春の月	天文
4755	明治36年	春の部	春の月枯れて久しき柳かな	春の月	天文
4756	明治36年	春の部	清水の舞臺や春の月に歩す	春の月	天文
4758	明治36年	春の部	ゆく春の雲見れば雲流れけり	行春	時候
4759	明治36年	春の部	春立や紫の衣市の人	立春	時候
4760	明治36年	春の部	若草の妻とこもりて雉子きく	雉子	動物
4761	明治36年	春の部	飯喰に戻るもうしや猫の恋	猫の戀	動物
4762	明治36年	春の部	春の雪つらなるともし春めきぬ	春雪	天文
4763	明治36年	春の部	折からの春の雷うれしけれ	春雷	天文
4764	明治36年	春の部	梅の花日の本國神の國	梅	植物
4765	明治36年	春の部	春さむし母の病に花もなし	春寒	時候
4766	明治36年	春の部	初雷やかるたの友と夜を語る	初雷	天文
4767	明治36年	春の部	白魚をめぐはし妹におくりけり	白魚	動物
4768	明治36年	春の部	鶯にのますべき水もぬるみけり	鶯	動物
4769	明治36年	春の部	牢を出れば木芽の春となりにけり	木の芽	植物
4770	明治36年	春の部	雪なだれさくべきさくら折れにけり	雪崩	地理
4771	明治36年	春の部	清貧と称す厨や鮒膾	鮒膾	人事
4772	明治36年	春の部	よき海苔の十帖ばかり土産哉	海苔	植物
4773	明治36年	春の部	妻よびに猫出る頃や蕗のとう	蕗の薹	植物
4774	明治36年	春の部	まや參馬に驚く女づれ	摩耶詣	人事
4775	明治36年	春の部	日の春や刀をつゝむ古錦らん	春日	時候
4776	明治36年	春の部	翩々とうるはしき子やつくしつみ	土筆	植物
4777	明治36年	春の部	土筆つみ茨の下をかいくゞり	土筆	植物
4778	明治36年	春の部	しばらくは土筆もつまで遊びけり	土筆	植物
4779	明治36年	春の部	土筆つむ兼好法師も春の人	土筆	植物
4780	明治36年	春の部	つくしつみし今宵の夢や乳母が宿	土筆	植物
4781	明治36年	春の部	飯蛸の飯も料理やうど若し	飯だこ	動物
4782	明治36年	春の部	おもンみれば釈迦終焉記迦葉筆	涅槃會	人事
4783	明治36年	春の部	塗物を玉かと春の光かな	春の光	天文
4784	明治36年	春の部	雁風呂に胡女が唄を憐みぬ	雁風呂	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4785	明治36年	春の部	蘖も乏しきばらの莟かな	蘖	植物
4786	明治36年	春の部	二日灸三里は花の定坐かな	二日灸	人事
4787	明治36年	春の部	鳴神の氣もすが／＼と接木哉	接木	人事
4788	明治36年	春の部	歌書俳書その棚々や炉をふさぐ	爐塞	人事
4789	明治36年	春の部	熊野を謠ふ楼上の灯や帰雁	帰る雁	動物
4790	明治36年	春の部	釈典や彼の丘隅の黄なる鳥	釋奠	人事
4791	明治36年	春の部	たぬしきゝつかもとよみけり春の歌	春	時候
4792	明治36年	春の部	苗代の多少の水や春深淺	苗代	地理
4793	明治36年	春の部	竹の秋山荘に定家雨をきく	竹の秋	植物
4794	明治36年	春の部	草餅に脇句うれしく吟じけり	草餅	人事
4795	明治36年	春の部	春の海須磨は悲しき処かな	春の海	地理
4796	明治36年	春の部	負けるなと其角が声や鶏合	鶏合	人事
4797	明治36年	春の部	春眠不覚曉と答へけり	春眠	人事
4798	明治36年	春の部	其角忌や疊の上の松の影	其角忌	人事
4799	明治36年	春の部	苗代の畔や菜種のこぼれ咲	菜の花	植物
4800	明治36年	春の部	羽衣を望む蛙の目つき哉	蛙	動物
4801	明治36年	春の部	蜜蜂の蜜に醉ひたる宵寐哉	蜂	動物
4802	明治36年	春の部	去る蝶の女心や来る蜂	蜂	動物
4803	明治36年	春の部	扇輕く花に小蜂を拂ひけり	蜂	動物
4804	明治36年	春の部	蜂の子の薊の花に遊びけり	薊の花	植物
4805	明治36年	春の部	蜂一ツ侯伯を脅かし去る	蜂	動物
4806	明治36年	春の部	木の実うゑて寺に碁を見る樵者哉	木實植う	人事
4807	明治36年	春の部	園林の遲日木実もうゑにけり	木實植う	人事
4808	明治36年	春の部	木の実うゝる山の流もぬるみけり	木實植う	人事
4809	明治36年	春の部	木実うゑて猿を愛する閑もあり	木實植う	人事
4810	明治36年	春の部	木実うゑてしばらく松に雨やどり	木實植う	人事
4811	明治36年	春の部	藥にもすとて木実のうゑあまり	木實植う	人事
4812	明治36年	春の部	林間に遍き日向木実うゝ	木實植う	人事
4813	明治36年	春の部	木実うゑて家に居れば鳥雲に	木實植う	人事
4814	明治36年	春の部	木実うゝる頭の上や春の雲	木實植う	人事
4815	明治36年	春の部	去年買ひし裏の禿山木実うゝ	木實植う	人事
4816	明治36年	春の部	木実うゑて立去る丘や百千鳥	木實植う	人事
4817	明治36年	春の部	柳鮠釣る人もなし都鳥	柳鮠	動物
4818	明治36年	春の部	柳鮠網にかゞやく春日哉	柳鮠	動物
4819	明治36年	春の部	をし去るや波暖き柳鮠	柳鮠	動物
4820	明治36年	春の部	古芝にひた釣上げぬ柳はえ	柳鮠	動物
4821	明治36年	春の部	柳はえかくるゝ程に水草生ふ	柳鮠	動物
4822	明治36年	春の部	草の芽の赤きも見えて柳はえ	柳鮠	動物
4823	明治36年	春の部	柳はえ柳の絮の乱れかな	柳鮠	動物
4824	明治36年	春の部	柳はえ春水石をめぐる処	柳鮠	動物
4825	明治36年	春の部	柳はえ石垣存す膳所の城	柳鮠	動物
4826	明治36年	春の部	絲遊に驚きもするか柳はえ	柳鮠	動物
4827	明治36年	春の部	崖畑の花菜はすきて柳はえ	柳鮠	動物
4828	明治36年	春の部	春の夜毎藥湯に来る姉妹	春夜	時候
4829	明治36年	春の部	春の夜を皆醉臥しぬ天狗ども	春夜	時候
4830	明治36年	春の部	春の夜の厨は鱒に灯あきらか	春夜	時候
4831	明治36年	春の部	名香に醉ひて春の夜睡られず	春夜	時候
4832	明治36年	春の部	手枕に五衰の夢や夜半の春	春夜	時候

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4833	明治36年	春の部	春の夜の物妬ましく明けにけり	春夜	時候
4834	明治36年	春の部	春の夜の情に堪へたり沈丁花	春夜	時候
4835	明治36年	春の部	羽衣をかへして宵の春さびし	春宵	時候
4836	明治36年	春の部	歌の主を春夜もすがら戀ひにけり	春夜	時候
4837	明治36年	春の部	舞衣に春の夜露を厭ひけり	春夜	時候
4838	明治36年	春の部	陽炎に臥猪の床を見たりけり	陽炎	天文
4839	明治36年	春の部	陽炎や其せんだんの二タ葉より	陽炎	天文
4840	明治36年	春の部	陽炎や山路ゆきゆく踏迷ひ	陽炎	天文
4841	明治36年	春の部	陽炎をかきみたしたる落花哉	陽炎	天文
4842	明治36年	春の部	陽炎や花流れ去り流れ来る	陽炎	天文
4843	明治36年	春の部	陽炎を拂って柳しだれけり	陽炎	天文
4844	明治36年	春の部	陽炎や茨の芽赤き藪の中	陽炎	天文
4845	明治36年	春の部	陽炎に五々のたんぽゝ黄なる哉	陽炎	天文
4846	明治36年	春の部	陽炎や断橋の影水にあり	陽炎	天文
4847	明治36年	春の部	芹の香に鶴の別を惜みけり	芹	植物
4848	明治36年	春の部	芹取て小松にはぢく雫かな	芹	植物
4849	明治36年	春の部	下立ちて雪間の芹に小手寒し	芹	植物
4850	明治36年	春の部	初東風や朝戸にすつる芹の屑	芹	植物
4851	明治36年	春の部	芹取やえりに柳のまだ寒し	芹	植物
4852	明治36年	春の部	芹取るや短き芹は流れけり	芹	植物
4853	明治36年	春の部	芹つむで旦の丘に上りけり	芹	植物
4854	明治36年	春の部	芹採る子或は薄氷を渉りけり	芹	植物
4855	明治36年	春の部	根芹洗ふ更によき水湧くところ	芹	植物
4856	明治36年	春の部	春の雪きのふや採りし芹田哉	芹	植物
4857	明治36年	春の部	はづらひや芹田にぬれし帶の端	芹	植物
10593	明治36年	春の部	交る鳥いづれか歌をよまざりれり	交る鳥	動物
5230	明治37年	春の部	棧に陽炎もゆる雪消かな	陽炎	天文
5231	明治37年	春の部	ぬるむ水芹徒らに伸びまさり	水温む	地理
5232	明治37年	春の部	初雷に雁鳴き立つる水田哉	初雷	天文
5233	明治37年	春の部	錦織る女はらから寒食す	寒食	人事
5234	明治37年	春の部	笑ふ山麓の村の日の御旗	山笑う	地理
5235	明治37年	春の部	還暦の祝もすめり二ノ替	二の替	人事
5236	明治37年	春の部	山遊びわれに隨ふ春の雲	春の雲	天文
5237	明治37年	春の部	其角忌を火燵の名残老破笠	其角忌	人事
5238	明治37年	春の部	其角忌の白髪かこちぬ秋色女	其角忌	人事
5239	明治37年	春の部	其角忌や美女花の如く半時庵	其角忌	人事
5240	明治37年	春の部	古酒ねだる俤しのべ梅の花	梅	植物
5241	明治37年	春の部	其角忌や柳をつかむ女の子	其角忌	人事
5243	明治37年	春の部	朧なり昔馬上の琵琶の主	朧	天文
5244	明治37年	春の部	詩に狂ふ僧や漫りに春を怨む	春	時候
5245	明治37年	春の部	彼岸すぎて本堂さむし造花	彼岸	人事
5246	明治37年	春の部	若芝や水に掃き出す芝の屑	若芝	植物
5247	明治37年	春の部	女若く芍薬の芽の如くなり	芍薬の芽	植物
5248	明治37年	春の部	日の光さし木の蔽もれにけり	挿木	人事
5249	明治37年	春の部	武夫の見るものにして鶏合	鶏合	人事
5250	明治37年	春の部	裏の田に田螺を見得て遊びけり	田螺	動物
5251	明治37年	春の部	國の乱れ山徒らに焼けにけり	野山焼	人事
5252	明治37年	春の部	山焼いて怪まれけり旅の僧	野山焼	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5253	明治37年	春の部	林間に山やきし子等遊びけり	野山焼	人事
5254	明治37年	春の部	片栗の花盛りなり燒かぬ山	片栗の花	植物
5255	明治37年	春の部	宵に見る山火や旅の語草	野山焼	人事
5256	明治37年	春の部	囀や薮をめくらす水たまり	囀	動物
5257	明治37年	春の部	炉塞きて夕飯心細かりし	爐塞	人事
5258	明治37年	春の部	鮒鱠少年行を歌ひけり	鮒膾	人事
5260	明治37年	春の部	梨の花ハ手車空しく過きにけり	梨の花	植物
5262	明治37年	春の部	幼稚園風の日の柳桜かな	雑	雑
5263	明治37年	春の部	春の日の玉を溶かして温泉哉	春日	時候
5264	明治37年	春の部	春の村温泉の湧く所見てあるく	春	時候
5265	明治37年	春の部	春の雲湯の湧く山を流れけり	春の雲	天文
5266	明治37年	春の部	湯治人河原をあるく柳かな	柳	植物
5267	明治37年	春の部	鳥雲に入て靈泉湧き止まず	鳥入雲	動物
5269	明治37年	春の部	竹落葉落栃舍の狸追はれけり	竹落葉	植物
5270	明治37年	春の部	古塚のほとり水澄む竹落葉	竹落葉	植物
5271	明治37年	春の部	花を見て夕に帰る竹落葉	竹落葉	植物
5272	明治37年	春の部	竹落葉把栗帰らぬ寺淋し	竹落葉	植物
5273	明治37年	春の部	若鮎の値を問ふや竹落葉	竹落葉	植物
5274	明治37年	春の部	針供養浪々の夫を恨みけり	針供養	人事
5275	明治37年	春の部	御忌の雨寺の白梅乱れ落つ	御忌	人事
5276	明治37年	春の部	冴返る夜店萬年青に人少な	冴返	時候
5277	明治37年	春の部	入來の敵に警む冴返り	冴返	時候
5278	明治37年	春の部	踏青の人驚ける狼煙哉	踏青	人事
5279	明治37年	春の部	人山に入りて帰らぬ日永哉	日永	時候
5280	明治37年	春の部	千羊皮客に頒てり桃の花	桃	植物
5281	明治37年	春の部	二ノ替鄙の知人連立ちぬ	二の替	人事
5282	明治37年	春の部	貧にして人に疎きころ梅の花	梅	植物
5283	明治37年	春の部	陋巷の梅顔セを照しけり	梅	植物
5284	明治37年	春の部	鴨の背に雪消の水の光哉	雪解	地理
5285	明治37年	春の部	白梅ややれつくしたる一狐裘	梅	植物
5286	明治37年	春の部	古文辞に人を老いしむ梅の花	梅	植物
5287	明治37年	春の部	二ノ替麦ふむ人をさそひけり	二の替	人事
5288	明治37年	春の部	二ノ替なほ輝の浪花人	二の替	人事
5289	明治37年	春の部	二ノ替薮入もせで日立ちけり	二の替	人事
5290	明治37年	春の部	雪なだれ崖の小家に人住めり	雪崩	地理
5291	明治37年	春の部	雪に積む材木崩る雪消哉	雪解	地理
5292	明治37年	春の部	風引いて粥のあはしや梅の花	梅	植物
5293	明治37年	春の部	人毎に梅さげ返る熟舍哉	梅	植物
5294	明治37年	春の部	野路の梅耕すは我が徒よ	梅	植物
5295	明治37年	春の部	白梅や住みもすてざる草の宿	梅	植物
5296	明治37年	春の部	折枝ふむ松の山路の雪消哉	雪解	地理
5297	明治37年	春の部	下萠の皆庭鳥にはまれけり	草萠	植物
5298	明治37年	春の部	陽炎の湯の村行けば湯の香哉	陽炎	天文
5299	明治37年	春の部	湯の里に通ふ小橋や春の人	春	時候
5300	明治37年	春の部	徒らに湯のわく処つばめ哉	燕	動物
5301	明治37年	春の部	陽炎や何萬人が呼ばふ声	陽炎	天文
5302	明治37年	春の部	湯にこもる女さそひつ春の山	春の山	地理
5303	明治37年	春の部	湯の村の見る物柳緑也	柳	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5304	明治37年	春の部	かしこみて見上ぐれば鳥雲に入る	鳥入雲	動物
5305	明治37年	春の部	花に醉ふてかゞやく顔や水鏡	花	植物
5306	明治37年	春の部	若芝を歩み去りたる女かな	若芝	植物
5307	明治37年	春の部	花ふゞき音樂近く起りけり	花	植物
5308	明治37年	春の部	ふらこゝや祭にゆかぬ兒一人	鞦韆	人事
5309	明治37年	春の部	目さしやく隣ありけり宵の春	目刺	人事
5310	明治37年	春の部	目刺干す日頃桜蚊生れけり	目刺	人事
5311	明治37年	春の部	目刺干す磯村花もなかりけり	目刺	人事
5312	明治37年	春の部	目刺燒く宿の畑や春の雨	目刺	人事
5313	明治37年	春の部	家に居て目さし作りぬ濱日和	目刺	人事
5314	明治37年	春の部	のり干してめざしもつくる女多く	目刺	人事
5315	明治37年	春の部	花に來る蜂しば/＼や目さしほす	目刺	人事
5316	明治37年	春の部	炭燒の眺め桜の古木哉	櫻	植物
5317	明治37年	春の部	帰省して産土神詣で遲桜	櫻	植物
5318	明治37年	春の部	夜桜や木蔭より出る児一人	櫻	植物
5319	明治37年	春の部	桜狩法主は若くおはしけり	花見	人事
5320	明治37年	春の部	小高みに花を隔つや吉水院	花	植物
5321	明治37年	春の部	住みすてず籬落浅きに桜哉	櫻	植物
5322	明治37年	春の部	満開の桜にあけし朝戸哉	櫻	植物
5323	明治37年	春の部	暖き日中野埃立つ見えて	暖	時候
5324	明治37年	春の部	雨の音暖き宵の雨の中	暖	時候
5325	明治37年	春の部	野遊の赤毛布敷く暖き	野遊	人事
5326	明治37年	春の部	背にぬくき日ざし莚帆つゞりけり	暖	時候
5327	明治37年	春の部	潤や社日の雨のあたゝかな	社日	時候
5328	明治37年	春の部	みづ/＼し玉籬に添ふ花の色	花	植物
5605	明治38年	春の部	きさらぎの花に逢ひたる命かな	如月	時候
5606	明治38年	春の部	春浅き宿や紀ノ女の歌反古	春淺し	時候
5607	明治38年	春の部	涅槃會に活溌々の羅漢かな	涅槃會	人事
5608	明治38年	春の部	雉子打って立つや海山夕ぐもり	雉子	動物
5609	明治38年	春の部	雪國の雪に壓されて木の芽哉	木の芽	植物
5610	明治38年	春の部	野火燃えて金澤の柵はなかりけり	野山燒	人事
5611	明治38年	春の部	偸見る妹が草紙や宵の春	春宵	時候
5612	明治38年	春の部	花に雨家々の秋千ぬれにけり	鞦韆	人事
5613	明治38年	春の部	春古き嵯峨の野川や水ぬるむ	水温む	地理
5614	明治38年	春の部	氷融けて柳の渡し猶寒し	氷解	地理
5615	明治38年	春の部	此頃の夜は朧なり歌かるた	朧	天文
5616	明治38年	春の部	榾古し雪解の頃の山の宿	雪解	地理
5617	明治38年	春の部	澤畔や雪解の頃の春を佗ぶ	雪解	地理
5618	明治38年	春の部	片栗の花日に匂ふ雪解かな	雪解	地理
5619	明治38年	春の部	乱山の先を爭ふ雪解かな	雪解	地理
5620	明治38年	春の部	鵠の昨日や去りし雪解かな	雪解	地理
5621	明治38年	春の部	鱒に網川波ゆらぐ春日かな	鱒	動物
5622	明治38年	春の部	猫の子ら愁人の裳をかゝまくす	猫の子	動物
5623	明治38年	春の部	摘みこぼす草や種井に満つる水	種井	人事
5624	明治38年	春の部	鶯を深く蔵しぬ竹の秋	竹の秋	植物
5625	明治38年	春の部	春惜む文細々と書かれけり	春惜む	時候
5626	明治38年	春の部	曲水に妹のからうた妬しき	曲水	人事
5627	明治38年	春の部	耕して落花の水を澆きけり	耕	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5628	明治38年	春の部	樂や老いて耕す帝の田	耕	人事
5629	明治38年	春の部	耕すや鄙人は知らず箕子の國	耕	人事
5630	明治38年	春の部	花に簑耕すわざをまねびけり	耕	人事
5631	明治38年	春の部	梅の花よき墨つくる家なりけり	梅	植物
5632	明治38年	春の部	水上は五十鈴の春や苗代田	苗代	地理
5633	明治38年	春の部	苗代の春にほとりす小百姓	苗代	地理
5634	明治38年	春の部	苗代や鄙人舁きゆく古神輿	苗代	地理
5635	明治38年	春の部	苗代の参差と山べ春めきぬ	苗代	地理
5636	明治38年	春の部	苗代に徑よりすや宵あるき	苗代	地理
5637	明治38年	春の部	初雷に天津祝詞のかしこさよ	初雷	天文
5638	明治38年	春の部	残雪や古松が根の日の光	殘雪	地理
5639	明治38年	春の部	残雪や斧も入れざる松林	殘雪	地理
5640	明治38年	春の部	残雪や小松がうれの日の光	殘雪	地理
5641	明治38年	春の部	炉塞や草の芽くるゝ隣の子	爐塞	人事
5642	明治38年	春の部	山笑ふ旅路の果となりにけり	山笑う	地理
5643	明治38年	春の部	釈奠の人遊ぶ松の緑かな	釋奠	人事
5644	明治38年	春の部	古道人行くこと少れに百千鳥	百千鳥	動物
5645	明治38年	春の部	小弓引艶なる人を妬みけり	小弓引	人事
5646	明治38年	春の部	梅の花白きにたへず鶴帰る	梅	植物
5647	明治38年	春の部	繪踏して去る結髪の壮士哉	繪踏	人事
5648	明治38年	春の部	一人子を掌裡の珠や雛まつり	雛祭	人事
5649	明治38年	春の部	耕や夜は玩ぶ古雛	雛祭	人事
5650	明治38年	春の部	ふらここの影に惑へる子猫哉	猫の子	動物
5651	明治38年	春の部	紫の朱のと鳥のつるみけり	鳥交る	動物
5652	明治38年	春の部	詩を焚くや春雁雲に入る夕	春雁	動物
5653	明治38年	春の部	虎杖や大澤の鳥雲に入る	鳥入雲	動物
5654	明治38年	春の部	鳥雲に入て枯木蘖あり	鳥入雲	動物
5959	明治39年	春の部	こさ吹くや返照雲の山に満つ	霾	天文
5960	明治39年	春の部	黄梅の家を記得す故園哉	黄梅	植物
5961	明治39年	春の部	こさ鳴って東風ふきぬけり枯木立	霾	天文
5962	明治39年	春の部	こさふけば寒霞日暮を靡きけり	霾	天文
5964	明治39年	春の部	氷に上る魚に驚く聖かな	魚氷に上る	時候
5965	明治39年	春の部	氷に上る魚や瀬の神渕の神	魚氷に上る	時候
5966	明治39年	春の部	羞らくは氷に上る魚の糞を見る	魚氷に上る	時候
5967	明治39年	春の部	國風は氷に上る魚の樂か	魚氷に上る	時候
5968	明治39年	春の部	遊人や魚氷に上る金閣寺	魚氷に上る	時候
5969	明治39年	春の部	春寒の凝りてや蕗の薹青し	蕗の薹	植物
5970	明治39年	春の部	滝水に眉目痛しや冴返り	冴返	時候
5971	明治39年	春の部	夜奔る卓文君や猫の戀	猫の戀	動物
5972	明治39年	春の部	耳底にひゞく獅子吼や涅槃像	涅槃會	人事
5973	明治39年	春の部	玉くしけ開かんと欲す春の宵	春宵	時候
5974	明治39年	春の部	王城を南に去るや一ノ午	初午	人事
5975	明治39年	春の部	經巻と藥炉と彼岸七日哉	彼岸	人事
5976	明治39年	春の部	おぼろかに夜はなりゆくや春の雪	春雪	天文
5977	明治39年	春の部	荒牧や片へはつもる春の雪	春雪	天文
5978	明治39年	春の部	蟄虫は目さめてゐるか春の雪	春雪	天文
5979	明治39年	春の部	若芝や撞鐘を距る十歩程	若芝	植物
5980	明治39年	春の部	若芝の侵さんとする接木かな	若芝	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5981	明治39年	春の部	若芝にホテルを出る日仆哉	若芝	植物
5982	明治39年	春の部	若芝に門開きけり植物園	若芝	植物
5983	明治39年	春の部	芝萠ゆるぢゞが魚釣処かな	若芝	植物
5984	明治39年	春の部	督郵のこの山越えし雪解かな	雪解	地理
5985	明治39年	春の部	草餅に妻が知らざる苦吟かな	草餅	人事
5986	明治39年	春の部	春の霜花屋が曉の灯かな	春霜	天文
5987	明治39年	春の部	雉子鳴くや草をなびかす李將軍	雉子	動物
5988	明治39年	春の部	柳伐て今年燕を淋しうす	燕	動物
5989	明治39年	春の部	長閑さの人に讀ましむ鐘の銘	長閑	時候
5990	明治39年	春の部	つくば過ぎて幾夜か寐つる啼雲雀	雲雀	動物
5992	明治39年	春の部	皆化して蜂と飛去る百千句	蜂	動物
5993	明治39年	春の部	水は温む野芝居ありし辺り哉	水温む	地理
5994	明治39年	春の部	水温む船路を人と別れけり	水温む	地理
5995	明治39年	春の部	鬼棲まずなりて山川ぬるみけり	水温む	地理
5996	明治39年	春の部	水温む庭の景色や閨の昼	水温む	地理
5997	明治39年	春の部	水温み菜の花咲かぬ畑もなし	水温む	地理
5998	明治39年	春の部	温む水春や昔の春ならぬ	水温む	地理
5999	明治39年	春の部	懐旧の水を探れば水温む	水温む	地理
6000	明治39年	春の部	山人は正に睡れり水温む	水温む	地理
6001	明治39年	春の部	帛を衣て春の寒さを怕れけり	春寒	時候
6002	明治39年	春の部	東より西に過ぎたる田螺かな	田螺	動物
6003	明治39年	春の部	學人が眼睛萠ゆる草に落つ	草萠	植物
6004	明治39年	春の部	梅咲いて鼻孔に春の寒哉	梅	植物
6005	明治39年	春の部	客曰く眉毛生ぜり猫が戀	猫の戀	動物
6006	明治39年	春の部	むつの牧東に開け春の海	春の海	地理
6007	明治39年	春の部	繪踏する九州一の美人かな	繪踏	人事
6008	明治39年	春の部	凍解くるほとり八ツ手の古葉哉	凍解	地理
6009	明治39年	春の部	連綿と柳の村や春の海	春の海	地理
6010	明治39年	春の部	恙なしと文す如月半ばころ	如月	時候
6011	明治39年	春の部	寒食や桃に小暗き民の家	寒食	人事
6012	明治39年	春の部	崢嶸と聳ゆる山や帰る雁	帰る雁	動物
6013	明治39年	春の部	春の雁痩せて湖水に映りけり	春雁	動物
6014	明治39年	春の部	珊瑚の鞭雁の別を送りけり	帰る雁	動物
6016	明治39年	春の部	梅の花咳唾の珠を偲びけり	梅	植物
6018	明治39年	春の部	雛もなし汝を桃の花の顔	雛	人事
6019	明治39年	春の部	山買ふや山の境の春の水	春の水	地理
6020	明治39年	春の部	木実うゑんと思ふあたりをありきけり	木實植う	人事
6021	明治39年	春の部	田螺賣桃李のこみち戻りけり	田螺	動物
6022	明治39年	春の部	若もゆる長信宮の祠かな	草萠	植物
6023	明治39年	春の部	一ト列に挿しゝ塘の木芽かな	木の芽	植物
6024	明治39年	春の部	桜狩汐干狩より尚遠し	花見	人事
6025	明治39年	春の部	垣を結ふ大根の花の主かな	大根の花	植物
6026	明治39年	春の部	富めるもの嘲けられけり桜鯛	桜鯛	動物
6027	明治39年	春の部	物皆の処を得たり鳥交る	鳥交る	動物
6028	明治39年	春の部	耕して釣徒と暮を帰りけり	耕	人事
6029	明治39年	春の部	山をやく夕やうはゞみ慟哭す	野山焼	人事
6030	明治39年	春の部	花をまつ我に桜蚊飛来る	春の蚊	動物
6031	明治39年	春の部	鯡賣る軒端や春の虫がとぶ	鰊	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6032	明治39年	春の部	連翹や花に突入る牛の角	連翹	植物
6033	明治39年	春の部	海棠に狂杜が才を試みん	海棠	植物
6034	明治39年	春の部	嘲や我は飯喰ふ其角の日	其角忌	人事
6035	明治39年	春の部	夏近し賣残したる花の酒	夏近し	時候
6036	明治39年	春の部	むざ／＼と馬に喰はれぬ萩若葉	萩若葉	植物
6037	明治39年	春の部	晝を睡る書楼の人や松の花	松の花	植物
6038	明治39年	春の部	海苔の香に巌を思ふ雄鹿の宿	海苔	植物
6039	明治39年	春の部	菊根分桜頻りに散る日哉	菊根分	人事
6040	明治39年	春の部	雲雀揚がる武藏の國の眞中哉	雲雀	動物
6041	明治39年	春の部	尺八や宵をほのめく積塔會	積塔會	人事
6042	明治39年	春の部	頽れたるかまとや庵の三月尽	三月尽	時候
6043	明治39年	春の部	ゆく春の茶の木がくれや人遊ぶ	行春	時候
6420	明治40年	春の部	人とりしなだれの雪の残りけり	殘雪	地理
6421	明治40年	春の部	東風吹いて山紫と成にけり	東風	天文
6422	明治40年	春の部	凧の尾の空にからまる物もなし	凧	人事
6423	明治40年	春の部	灯の花に尚疑ひや春の宵	春宵	時候
6424	明治40年	春の部	此心竟に動かず梅の花	梅	植物
6425	明治40年	春の部	梅白し弊履を棄てゝ人の去る	梅	植物
6426	明治40年	春の部	かれ／＼て一樹となりぬ梅の花	梅	植物
6427	明治40年	春の部	古梅に廬を結ぶ花を省みず	梅	植物
6428	明治40年	春の部	筆陣や梅に爭ふ儒と釈と	梅	植物
6429	明治40年	春の部	家貧しければ梅いよ／＼白し	梅	植物
6430	明治40年	春の部	雪の下の地を見る頃や冴返る	冴返	時候
6431	明治40年	春の部	鳥雲に入るや人待つこと久し	鳥入雲	動物
6432	明治40年	春の部	海苔やくや海苔とる海の目に浮	海苔	植物
6433	明治40年	春の部	凶年の落穂悲む田打かな	田打ち	人事
6434	明治40年	春の部	十人の田打必ず愚なるあり	田打ち	人事
6435	明治40年	春の部	田に田打常平倉の屋根に鶏	田打ち	人事
6436	明治40年	春の部	畑打が陳情表の話かな	畑打ち	人事
6437	明治40年	春の部	畑打に出でまくとすや朋來る	畑打ち	人事
6438	明治40年	春の部	古葉くゞる林中の水温みけり	水温む	地理
6439	明治40年	春の部	両三家めぐり来て里の水ぬるむ	水温む	地理
6440	明治40年	春の部	温む水に心驚く帰雁かな	水温む	地理
6441	明治40年	春の部	日々に伸びまさる菜や水ぬるむ	水温む	地理
6442	明治40年	春の部	伐尽す柴山の水温みけり	水温む	地理
6443	明治40年	春の部	春浅き宿や乏しき深山柴	春淺し	時候
6444	明治40年	春の部	戀猫の爪恐ろしく思ひけり	猫の戀	動物
6446	明治40年	春の部	天氣地氣啓蟄の日と成にけり	啓蟄	時候
6447	明治40年	春の部	芊々の草綿々のひばりかな	雲雀	動物
6448	明治40年	春の部	雪残る山見てひばり落る哉	雲雀	動物
6449	明治40年	春の部	何氏が発祥の地や雲雀なく	雲雀	動物
6450	明治40年	春の部	遠く遊ぶ牧守が子にひばり哉	雲雀	動物
6451	明治40年	春の部	ひはり落ついつこ雲雀の塒かな	雲雀	動物
6452	明治40年	春の部	西行がうしろに揚るひばり哉	雲雀	動物
6453	明治40年	春の部	ひばり野や我が見つゝ行く歌枕	雲雀	動物
6454	明治40年	春の部	畑あればひばり啼く川の中洲かな	雲雀	動物
6455	明治40年	春の部	ひばりより下に春く夕日かな	雲雀	動物
6456	明治40年	春の部	夕霞夕雲雀水流れけり	雲雀	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6457	明治40年	春の部	あき人は黄金もて梅を購へり	梅	植物
6458	明治40年	春の部	梅さげて人過りけり古本屋	梅	植物
6459	明治40年	春の部	北海の雪の便りや梅の花	梅	植物
6460	明治40年	春の部	種まいて暮るゝおそきを覚えけり	種蒔	人事
6461	明治40年	春の部	木の実植うる翁や花に誘はれず	木實植う	人事
6462	明治40年	春の部	木の実植ゑよ／＼と人のすゝめ哉	木實植う	人事
6463	明治40年	春の部	鶏合すんで花洛のくもりかな	鶏合	人事
6464	明治40年	春の部	花の歌雁の別に清らなる	帰る雁	動物
6465	明治40年	春の部	長閑さに桶の田螺を算へけり	田螺	動物
6466	明治40年	春の部	踏青のいつこの天や龍登る	龍登天	動物
6467	明治40年	春の部	芝に居る小弓の友や萩若葉	萩若葉	植物
6468	明治40年	春の部	洛中は早も日仐や萩若葉	萩若葉	植物
6469	明治40年	春の部	萩若葉野路に相逢ふ春の人	萩若葉	植物
6470	明治40年	春の部	萩若葉詞人素より多病也	萩若葉	植物
6471	明治40年	春の部	人多情萩の若葉に苦吟かな	萩若葉	植物
6472	明治40年	春の部	胸中の磊塊蜂の巣に似たり	蜂の巣	動物
6473	明治40年	春の部	あるは蜂の趣を見る古人の句	蜂	動物
6474	明治40年	春の部	蜂巣ふ茨を剪って棄てにけり	蜂の巣	動物
6475	明治40年	春の部	大徳の蜂にさゝれずおはしけり	蜂	動物
6476	明治40年	春の部	小坊主が蜂を逃げゆく落花哉	蜂	動物
10657	明治40年	春の部	此濱の鰊少し冴え返り	鰊	動物
6759	明治41年	春の部	草の舎に隠れもなしや凧絵かく	凧	人事
6760	明治41年	春の部	時を得て蠢くものや水温む	水温む	地理
6761	明治41年	春の部	初雷や天下の句風新たなり	初雷	天文
6762	明治41年	春の部	初雷や勃然として臨池の興	初雷	天文
6763	明治41年	春の部	佛名に救はるゝ身や鐘かすむ	霞	天文
6764	明治41年	春の部	家居皆古風な里や鐘霞む	霞	天文
6765	明治41年	春の部	丘壑の情放散や鐘かすむ	霞	天文
6766	明治41年	春の部	一飯の供養に足るや鐘霞む	霞	天文
6767	明治41年	春の部	奥人の訥なる話鐘かすむ	霞	天文
6768	明治41年	春の部	鐘かすむ國土一草一伽藍	霞	天文
6769	明治41年	春の部	山河の岸うつ波や雉子とぶ	雉子	動物
6770	明治41年	春の部	拓き終へし地を見取図や日の永き	日永	時候
6771	明治41年	春の部	海棠や酒醒めて晝の衾あり	海棠	植物
6772	明治41年	春の部	望夫石ありし口碑や春の潮	春の潮	地理
6773	明治41年	春の部	魚戸蟹舎雁行く景と見えにけり	帰る雁	動物
6774	明治41年	春の部	異を樹つるにしもあらねど木芽和	木芽和	人事
6775	明治41年	春の部	野遊の荷物にしたり筆硯	野遊	人事
6776	明治41年	春の部	野遊の此道よりす柳かな	野遊	人事
6777	明治41年	春の部	野遊にかの道人をさそひけり	野遊	人事
6778	明治41年	春の部	野遊の沼見めぐりぬ男衆	野遊	人事
6779	明治41年	春の部	野遊や路に詣づる神社	野遊	人事
6780	明治41年	春の部	野遊や人に秘めたる歌袋	野遊	人事
6781	明治41年	春の部	野遊に弓引く男子戀にけり	野遊	人事
6782	明治41年	春の部	野遊やげん／＼尽きて大堰川	野遊	人事
6783	明治41年	春の部	野遊の雪白き山を畏れけり	野遊	人事
6784	明治41年	春の部	雨けぶる日や野遊の序を草す	野遊	人事
6785	明治41年	春の部	褒貶に耳傾けず干鱈買ふ	干鱈	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6786	明治41年	春の部	花落ちて辛夷に実なし干鱈さく	干鱈	人事
6787	明治41年	春の部	棒鱈の荷も片づきぬ初つばめ	燕	動物
6788	明治41年	春の部	炉火灰となりて鶯庭に来る	鶯	動物
6789	明治41年	春の部	忽然と鶯きくや著作堂	鶯	動物
6790	明治41年	春の部	谷水の窮み鶯遷りけり	鶯	動物
6791	明治41年	春の部	鶯や木履の音も例の刻	鶯	動物
6792	明治41年	春の部	崇なき伐木や鶯の啼く	鶯	動物
6793	明治41年	春の部	蘖の瑞の木原や兎の子	蘖	植物
6794	明治41年	春の部	蘖の萠々として春の水	蘖	植物
6795	明治41年	春の部	蘖も女の丈けに柳かな	蘖	植物
6796	明治41年	春の部	古梅の終に蘖なかりけり	蘖	植物
6797	明治41年	春の部	蘖も遺さずと斧揮ひけり	蘖	植物
6798	明治41年	春の部	花さくと魂まねげ帰る雁	帰る雁	動物
6799	明治41年	春の部	五文たこ三文たこと揚りけり	凧	人事
6800	明治41年	春の部	人鮎を汲む鳥花を喰ふ日哉	鮎汲み	人事
6801	明治41年	春の部	鮎の子や御幸の沙汰もほのかにて	小鮎	動物
6802	明治41年	春の部	餌をくふとしもなく小鮎つられけり	小鮎	動物
6803	明治41年	春の部	鮎汲を見て小謡や桜川	鮎汲み	人事
6804	明治41年	春の部	貫之が假名ふみに入る小鮎哉	小鮎	動物
6805	明治41年	春の部	初雷や腹案の句の一頓挫	初雷	天文
6806	明治41年	春の部	汲鮎を三ツに分つや風光る	鮎汲み	人事
6807	明治41年	春の部	薪とる山賤にして鮎を汲む	鮎汲み	人事
6808	明治41年	春の部	春惜む心に鮎を汲にけり	鮎汲み	人事
6809	明治41年	春の部	若鮎に恋々として都鳥	小鮎	動物
6810	明治41年	春の部	小鮎釣に上ると雨日閑話哉	小鮎	動物
6811	明治41年	春の部	兎狩りし岨も平も雪解かな	雪解	地理
6812	明治41年	春の部	官山に人入る遅き雪げかな	雪解	地理
6813	明治41年	春の部	水の辺りありく畑地の雪げ哉	雪解	地理
6814	明治41年	春の部	伐出しの節木残りて雪解哉	雪解	地理
6815	明治41年	春の部	市も立つ山の驛の雪解哉	雪解	地理
6816	明治41年	春の部	老いたるを牽いて馬耕や辛夷咲く	辛夷	植物
6817	明治41年	春の部	荒蕪地に鍬入式や辛夷さく	辛夷	植物
6818	明治41年	春の部	山僧愚なれど俗ならず辛夷さく	辛夷	植物
6819	明治41年	春の部	廃したる炭がま興す辛夷哉	辛夷	植物
6820	明治41年	春の部	ありなしの落魄や門の古辛夷	辛夷	植物
6821	明治41年	春の部	法事過ぎて人に分ちぬ漆種	種物	人事
6822	明治41年	春の部	隣人に種物惜むそしりあり	種物	人事
6823	明治41年	春の部	しらべ洩の種や橡の実一叺	種物	人事
6824	明治41年	春の部	種物の事方丈と挨拶す	種物	人事
6825	明治41年	春の部	雨讀の閑種物の名を想出づ	種物	人事
6826	明治41年	春の部	山僧の大愚辛夷の花も知らず	辛夷	植物
6827	明治41年	春の部	山吹や水に及ばぬ野火の痕	山吹	植物
6828	明治41年	春の部	山吹や寺に故実の經供養	山吹	植物
6829	明治41年	春の部	山吹や馬はあれども伊賀吟行	山吹	植物
6830	明治41年	春の部	山吹や執筆中の五元集	山吹	植物
6831	明治41年	春の部	長者屋しき山吹さくを古跡哉	山吹	植物
6832	明治41年	春の部	青き踏む貴妃を扶けて遅れけり	踏青	人事
6833	明治41年	春の部	踏青の水に逢うて且つ迂回せり	踏青	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6834	明治41年	春の部	踏青や閑雲の景野鶴の情	踏青	人事
6835	明治41年	春の部	踏青の叉路や文武の子	踏青	人事
6836	明治41年	春の部	雪の山の一角も見て青き踏む	踏青	人事
6838	明治41年	春の部	蝦夷が子の摘み残しけむ蕗のとう	蕗の薹	植物
7036	明治42年	春の部	拓本の大きさも希有梅の花	梅	植物
7037	明治42年	春の部	早起の箴奴も写す梅の花	梅	植物
7038	明治42年	春の部	渕黙も一家の規模や梅の花	梅	植物
7039	明治42年	春の部	朝奇晩奇只主人知る梅の花	梅	植物
7040	明治42年	春の部	三冬に研り残す朱や梅の花	梅	植物
7041	明治42年	春の部	句意画意のいつこ融会や梅一枝	梅	植物
7042	明治42年	春の部	蹇の僧猶住めり軒の梅	梅	植物
7043	明治42年	春の部	橋架す奇風遺れり峡の梅	梅	植物
7044	明治42年	春の部	飼鶏の同じ羽色や梅の宿	梅	植物
7045	明治42年	春の部	飯喰へど鄙しとなさず梅の主	梅	植物
7046	明治42年	春の部	閣成て記を作らしむ雉子の声	雉子	動物
7047	明治42年	春の部	三日つゞく土豪の宴雉子啼く	雉子	動物
7048	明治42年	春の部	雉子撃って新妻故に帰りけり	雉子	動物
7049	明治42年	春の部	雁風呂や今様の美女三五人	雁風呂	人事
7050	明治42年	春の部	炉塞や耳目に潜む風邪の氣	爐塞	人事
7051	明治42年	春の部	餅賣と約束事や麦を踏む	麥踏	人事
7052	明治42年	春の部	流行唄村にも流行る雪げかな	雪解	地理
7053	明治42年	春の部	本草も我一代や二日炙	二日灸	人事
7054	明治42年	春の部	溶き分けて浴き絵具や山笑ふ	山笑う	地理
7055	明治42年	春の部	手をあげて乳母言傳や山笑ふ	山笑う	地理
7057	明治42年	春の部	城の窓麦の青きを望みけり	麦青む	植物
7058	明治42年	春の部	青麦に澄みぬきのふの雪げ水	麦青む	植物
7059	明治42年	春の部	青麦に水鳥の目のかすみかな	麦青む	植物
7060	明治42年	春の部	事なきにきづく用意や麦青し	麦青む	植物
7061	明治42年	春の部	神宮の手斧の音や春の麦	麦青む	植物
7062	明治42年	春の部	城きづく坐上図解や大石忌	大石忌	人事
7063	明治42年	春の部	自他心事棋子黒白や大石忌	大石忌	人事
7064	明治42年	春の部	眉目相照す花あり大石忌	大石忌	人事
7065	明治42年	春の部	編笠に軽重の論や大石忌	大石忌	人事
7066	明治42年	春の部	文の波瀾帰雁の事や大石忌	大石忌	人事
7067	明治42年	春の部	蛙子や臨池一日一字づゝ	蝌蚪	動物
7068	明治42年	春の部	諳ンずる長恨歌詞や半仙戯	鞦韆	人事
7069	明治42年	春の部	菊根分終りて次韻却寄哉	菊根分	人事
7070	明治42年	春の部	詠ミ歌の贈答體に遅日哉	遲日	時候
7071	明治42年	春の部	家富めば古式すたれぬ竹の秋	竹の秋	植物
7072	明治42年	春の部	宝印と縛印と彼岸團子哉	彼岸	人事
7073	明治42年	春の部	眉剃りて彼岸の花につとひけり	彼岸	人事
7074	明治42年	春の部	湾をなすところ丘あり春の海	春の海	地理
7075	明治42年	春の部	豫め定まる帰期や春の海	春の海	地理
7076	明治42年	春の部	花衣着ぬきの冷や田螺和	田螺和	人事
7077	明治42年	春の部	水城跡石髙々と田螺かな	田螺	動物
7078	明治42年	春の部	人送り出でし話頭の田螺かな	田螺	動物
7079	明治42年	春の部	民の疾苦田螺の事も問にけり	田螺	動物
7080	明治42年	春の部	嵎を負ふ家居田螺も賣に来る	田螺	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7082	明治42年	春の部	鹿放つよしを庭見の麗かに	麗	時候
7083	明治42年	春の部	湖の雑魚煮れば湖草も麗かに	麗	時候
7084	明治42年	春の部	馬士よべどあらず道もせにちる李	李の花	植物
7085	明治42年	春の部	草つむも駐蹕の地のほとり哉	摘草	人事
7086	明治42年	春の部	湖の魚珍らかに見て春惜む人	春惜む	時候
7087	明治42年	春の部	又一人の弟子遠島や暮るゝ春	暮春	時候
7088	明治42年	春の部	醍醐寺の埒の大破も暮るゝ春	暮春	時候
7089	明治42年	春の部	笞うつ刑も昔に春暮れぬ	暮春	時候
7090	明治42年	春の部	奥書も断簡の部や春暮るゝ	暮春	時候
7091	明治42年	春の部	子に似ぬ子と思寐や暮るゝ春	暮春	時候
7092	明治42年	春の部	簀の上の森吉の雪や苗代田	苗代	地理
7093	明治42年	春の部	苗代も見て後園日に渉る	苗代	地理
7094	明治42年	春の部	苗代の萠ゆるや古碑の苔も掃く	苗代	地理
7095	明治42年	春の部	苗代やけふ造林の山を出る	苗代	地理
7096	明治42年	春の部	風除けの林の禽や苗代田	苗代	地理
7097	明治42年	春の部	山吹に短き悔いぬ舟の棹	山吹	植物
7098	明治42年	春の部	山吹や馬腹に及ぶ溢れ水	山吹	植物
7099	明治42年	春の部	山吹に日和見鴉とも見ゆる	山吹	植物
7100	明治42年	春の部	山吹の山孤峭なる身冷哉	山吹	植物
7101	明治42年	春の部	山吹や岩魚捕る約に人をまつ	山吹	植物
7102	明治42年	春の部	境論の立別れゆくつゝじかな	躑躅	植物
7103	明治42年	春の部	髙山を遥拜の野のつゝじ哉	躑躅	植物
7104	明治42年	春の部	帽子手巾つゝじ野深く人遊ぶ	躑躅	植物
7105	明治42年	春の部	水飲みに下るもつゝじがくれかな	躑躅	植物
7106	明治42年	春の部	つゝじ野にいつこ来て去る奔馬哉	躑躅	植物
7203	明治43年	春の部	二三子茲に弓勢見よや梅の花	梅	植物
7204	明治43年	春の部	立春大吉堂に八十八の人	立春	時候
7205	明治43年	春の部	日本刀の歌傳唱や寒食す	寒食	人事
7206	明治43年	春の部	木隠れし君を二度半仙戯	鞦韆	人事
7207	明治43年	春の部	秋千に醉発す花の雪ちるに	鞦韆	人事
7208	明治43年	春の部	ふらこゝに見る店頭の餅白き	鞦韆	人事
7209	明治43年	春の部	一山紫一水明や秋千に	鞦韆	人事
7210	明治43年	春の部	あなかしこ戀猫の句を扇面に	猫の戀	動物
7211	明治43年	春の部	遠忌果てゝ氣安覚えぬ猫の戀	猫の戀	動物
7212	明治43年	春の部	雪汁に渇きあさまし猫の夫	猫の戀	動物
7213	明治43年	春の部	作家手段粉黛の字や猫の妻	猫の戀	動物
7214	明治43年	春の部	雪頽跡に三家挙るや猫の恋	猫の戀	動物
7215	明治43年	春の部	馬も野へ牛も野へ誰ぞふらこゝに	鞦韆	人事
7216	明治43年	春の部	ふらこゝに上る鶏鳴狄吠の徒	鞦韆	人事
7217	明治43年	春の部	字句を索めて春雷飛と得たりけり	春雷	天文
7218	明治43年	春の部	寤寐に之を求むれど得ず水温む	水温む	地理
7219	明治43年	春の部	仿古詩牋歡会の桃と紅に	桃	植物
7220	明治43年	春の部	人を送る詩の一格や春の霜	春霜	天文
7221	明治43年	春の部	画眉郎の嘲解かむ長閑さに	長閑	時候
7222	明治43年	春の部	古人既に山相論や里長閑	長閑	時候
7223	明治43年	春の部	暗算にこの魯鈍さよ宵長閑	長閑	時候
7224	明治43年	春の部	猫の子等の雌にのみ名づく長閑也	長閑	時候
7225	明治43年	春の部	餌につかぬ魚を惡むや水長閑	長閑	時候

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7226	明治43年	春の部	耳穴の痒き同病長閑なる	長閑	時候
7227	明治43年	春の部	今の世に異形相の人よ長閑なる	長閑	時候
7228	明治43年	春の部	文庫蹟ものどか諸子木百家草	長閑	時候
7229	明治43年	春の部	卉木猶藏書の如し庭長閑	長閑	時候
7230	明治43年	春の部	人やある例の大笑寺長閑	長閑	時候
7231	明治43年	春の部	花にさそへば笠縫うて居る人つれな	花	植物
7232	明治43年	春の部	掃苔会一樹の花にこぞりけり	花	植物
7233	明治43年	春の部	一摶の鳥にかほどの落花哉	落花	植物
7234	明治43年	春の部	一韵十疊満都の花に傳唱す	花	植物
7235	明治43年	春の部	水石の奇趣に蝦夷名や山櫻	山櫻	植物
7236	明治43年	春の部	十日すぎて見る野火埃水温む	水温む	地理
7237	明治43年	春の部	勸農譚皆耳寄せて水温む	水温む	地理
7238	明治43年	春の部	鍬ぶりも遺制めくあり温む水	水温む	地理
7239	明治43年	春の部	流るゝもの卑きについて水温む	水温む	地理
7240	明治43年	春の部	枝に鳥の徒に居る見ゆ温む水	水温む	地理
7241	明治43年	春の部	熱喝に耳ほがらなり山笑ふ	山笑う	地理
10610	明治43年	春の部	稀に入れば柳散ると云ふ	柳	植物
7307	明治44年	春の部	親によく肖て四ツ白の麗かに	麗	時候
7309	明治44年	春の部	亀鳴くよ塔一見の本望に	亀鳴く	動物
7310	明治44年	春の部	亀鳴くや紙に記せバ断碑考	亀鳴く	動物
7312	明治44年	春の部	火口作る家傳も徒に桃の花	桃	植物
7313	明治44年	春の部	醉ひて後又の日の桃見約しけり	桃	植物
7314	明治44年	春の部	酒の名に典故あり桃葉勝にて	桃	植物
7315	明治44年	春の部	桃散るや貨すまじき馬書借に来る	桃	植物
7316	明治44年	春の部	三日の徭役果てゝ桃の宿	桃	植物
7317	明治44年	春の部	媚ぶと貶す人すげなくも桃の花	桃	植物
7318	明治44年	春の部	ある時は師や娓々として桃の花	桃	植物
7319	明治44年	春の部	末子の事又念頭に桃の花	桃	植物
7320	明治44年	春の部	緋桃白桃家道復び盛ン也	桃	植物
7322	明治44年	春の部	聖德は飽まで桃に睡りけり	桃	植物
7324	明治44年	春の部	一鳥も一魚も縁に木芽ふく	木の芽	植物
7326	明治44年	春の部	晴耕の心魚鳥と相照す	耕	人事
7327	明治44年	春の部	春田打ちし疲や閲す金蘭簿	田打ち	人事
7329	明治44年	春の部	片言を交して花に急ぐ人	花	植物
7330	明治44年	春の部	行春と題して筆を擱きにけり	行春	時候
7331	明治44年	春の部	行春と題す乃ち筆をおく	行春	時候
7333	明治44年	春の部	君に手紙書き了へて石竹を植う	石竹植う	人事
7416	明治45年	春の部	天斧山脈を斷つ東風吹息まず	東風	天文
7417	明治45年	春の部	春寒し今到着の書册積む	春寒	時候
7418	明治45年	春の部	京よりの封筒よ文字よ春の雪	春雪	天文
7420	明治45年	春の部	桃の花はかくて千載不易なる	桃	植物
7424	明治45年	春の部	君が意蓋し霞を盛れとこそ	霞	天文
7426	明治45年	春の部	木實植て倦まず鳥鳴く諸声に	木實植う	人事
7428	明治45年	春の部	魂や遊ぶ画譜の花鳥の蝕みし	花	植物
7552	大正２年	春の部	装幀に天覧思ふ春寒き	春寒	時候
7553	大正２年	春の部	回覧集などてか遲き春寒に	春寒	時候
7554	大正２年	春の部	花鳥画いて小婢に與ふ春寒く	春寒	時候
7557	大正２年	春の部	夜学日の間遠に菜種花となる	菜の花	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7562	大正２年	春の部	春雷の杉に五尺の尖りかな	春雷	天文
7563	大正２年	春の部	春雷や根芹掘る水のむら濁	春雷	天文
7565	大正２年	春の部	魂語録に來り臨めり春の風	春風	天文
7566	大正２年	春の部	東風高し大衆旗皷に法の陣	東風	天文
7567	大正２年	春の部	兵談も海國の事爐塞げり	爐塞	人事
7568	大正２年	春の部	爐塞げば知る山の暗水の明	爐塞	人事
7570	大正２年	春の部	暮遲きためし見む花間に竹外に	遲日	時候
7572	大正２年	春の部	人に知る知らぬあり只春惜む	春惜む	時候
7574	大正２年	春の部	春雨の泥乾き大鳥も飛ぶ	春雨	天文
7575	大正２年	春の部	春雨帰庵茸作る術を見て	春雨	天文
7576	大正２年	春の部	恩に狎るゝ下部あり春雨の泥	春雨	天文
7577	大正２年	春の部	隣畑に籬取り去りぬ春の雨	春雨	天文
7578	大正２年	春の部	春雨霏々社中帰省の一人欽ぐ	春雨	天文
7579	大正２年	春の部	鍬鍛冶の今日も打たずよ春の雨	春雨	天文
7581	大正２年	春の部	燕來しと見て遠眺を再びす	燕	動物
7583	大正２年	春の部	何に吹く貝の音つやぞ風光る	風光る	天文
7584	大正２年	春の部	陽炎に何語りけむ唇ぞ	陽炎	天文
7585	大正２年	春の部	水に棲む物皆に水温みけり	水温む	地理
7586	大正２年	春の部	暖に天地生々の心あり	暖	時候
7587	大正２年	春の部	耳目具して蟄虫の出づ霞哉	霞	天文
7588	大正２年	春の部	日洽し片栗の葉に花に葉に	片栗の花	植物
7589	大正２年	春の部	槻若葉郷先生を傳す誰ぞ	若葉	植物
7590	大正２年	春の部	髙津島も這ふ虫も秋を知れとこそ	秋	時候
7591	大正２年	春の部	露輕し籬に傍うて虫の飛ぶ	露	天文
7592	大正２年	春の部	末枯や里に歸れバ古き唄	末枯	植物
7593	大正２年	春の部	落日や凩の跡の土じめり	凩	天文
7690	大正３年	春の部	雛衣とならましを雛近きもの	雛祭	人事
7692	大正３年	春の部	君をほぐ季無からめや啓蟄の頃	啓蟄	時候
7694	大正３年	春の部	地の下に物あり雪の上に耀きぬ	雪	天文
7700	大正３年	春の部	顔に淡雪今ふりし壁土思ふ	淡雪	天文
7701	大正３年	春の部	ごうと鳴る風に非ず冴返る空	冴返	時候
7702	大正３年	春の部	凍霧透きて火赤く烟三ところ	凍霧	天文
7703	大正３年	春の部	地に布ける淡雪亀裂さながらに	淡雪	天文
7704	大正３年	春の部	又震るかに東風吹く雲と木の末と	東風	天文
7705	大正３年	春の部	崖崩れ掘る鍬戞と残雪に	殘雪	地理
7706	大正３年	春の部	大地裂けたり蕗のとう活々と	蕗の薹	植物
7707	大正３年	春の部	陽炎に包まれて老と幼と居り	陽炎	天文
7708	大正３年	春の部	假橋に蹊作す春の水とゞろ	春の水	地理
7709	大正３年	春の部	萠えがてに死ぬる草黝の沙湧いて	草萠	植物
7710	大正３年	春の部	着膨レ悔ゆ春川渡る鹿島立	春の川	地理
7711	大正３年	春の部	家に帰りて雀の巣屑又掃きぬ	雀の巣	動物
7712	大正３年	春の部	帆にあまる風や木芽張る岸髙を	木の芽	植物
7714	大正３年	春の部	雨に冷ゆる人々の顔花暗し	花	植物
7715	大正３年	春の部	悲しき事を教へられつ草摘む子	摘草	人事
7716	大正３年	春の部	牡丹彫る鑿やゝ鈍り春埃	春塵	天文
7717	大正３年	春の部	土膨るゝと見て畑打つ力かな	畑打ち	人事
7718	大正３年	春の部	一ツ來る春の蚊夜雨只土の知る	春の蚊	動物
7720	大正３年	春の部	神わざの鳥の巣毀つこと勿れ	鳥の巣	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7721	大正３年	春の部	鳥已に巣へりかほど草萠えし	鳥の巣	動物
7722	大正３年	春の部	脈々の暖かさ巣鳥獨知る	鳥の巣	動物
7723	大正３年	春の部	禿筆に宿墨に春の惜まるゝ	春惜む	時候
7724	大正３年	春の部	善く割るゝ薪にも春を惜む人	春惜む	時候
7725	大正３年	春の部	遂に言はで只管に春を惜む哉	春惜む	時候
7726	大正３年	春の部	春惜む唱酬秘むとなき夜半に	春惜む	時候
7727	大正３年	春の部	鳥の名を知らずして徒に春惜む	春惜む	時候
7729	大正３年	春の部	乗合の話柄轉ず山つゝじ濃き	躑躅	植物
7765	大正４年	春の部	髙東風の旦より良く啼く子とぞ	東風	天文
7766	大正４年	春の部	山に樹大きく春立つ北國ハ	立春	時候
7767	大正４年	春の部	枝も伐るをゆるさぬ杉や凧	凧	人事
7769	大正４年	春の部	踊るべき人誰々を想ひけり	踊	人事
7771	大正４年	春の部	快し春寒けれど日の光	春寒	時候
7773	大正４年	春の部	陽炎の今ぞ木にもゆ草にもゆ	陽炎	天文
7774	大正４年	春の部	この國の地氣動くところ蕗のとう	蕗の薹	植物
7776	大正４年	春の部	春天雪舞ひ帰雁咽ぶかな	春の空	天文
7778	大正４年	春の部	東風つゝく三日よ木實植てより	東風	天文
7780	大正４年	春の部	鳥は巣を得たり木魚稀にうつ	鳥の巣	動物
7782	大正４年	春の部	連翹や鳥海の雪目に痛き	連翹	植物
7784	大正４年	春の部	あぢきなし花見の記にも君が事	花見	人事
7788	大正４年	春の部	妙境は木蓮に春の雲舞ハむ	春の雲	天文
7790	大正４年	春の部	鶯や朝茶の烟断ゆる時	鶯	動物
7877	大正５年	春の部	立春大吉の中の枯木かな	立春	時候
7878	大正５年	春の部	春寒の土踏みて在り讀書人	春寒	時候
7879	大正５年	春の部	春寒に一人殖ゑたる針子哉	春寒	時候
7880	大正５年	春の部	大凍の中に庭柳春めきぬ	春めく	時候
7881	大正５年	春の部	夕凍に瀬鳴り迫るが如く覚ゆ	凍返る	地理
7882	大正５年	春の部	雪解遅く國中を山の鎮めかな	雪解	地理
7883	大正５年	春の部	兒等叫ぶ一しきり雪解の館の下	雪解	地理
7884	大正５年	春の部	寒ん明けの雪垣をもる日ざしかな	餘寒	時候
7885	大正５年	春の部	伐木丁々たり東風渡る山	東風	天文
7886	大正５年	春の部	北人や二月佳節の顔白し	二月	時候
7887	大正５年	春の部	佳節の氣象地に青き蕗の薹	蕗の薹	植物
7888	大正５年	春の部	佳節遊ぶ青年どもや春寒を	春寒	時候
7889	大正５年	春の部	仆れ樹の生き／＼とあり氷解く	氷解	地理
7890	大正５年	春の部	社木のみ伐殘されつ春吹雪	春吹雪	天文
7891	大正５年	春の部	一方の青天濃きに春の雪	春雪	天文
7892	大正５年	春の部	臼木にと切放す木口東風過る	東風	天文
7893	大正５年	春の部	上國の梅信は是風邪の神	梅	植物
7894	大正５年	春の部	火燃ゆ活々と凍霧に住む人等	凍霧	天文
7895	大正５年	春の部	皃好くて凍霧の中來る女かな	凍霧	天文
7896	大正５年	春の部	凍霧晴れて日は南なる人の顔	凍霧	天文
7897	大正５年	春の部	氷解くる此池の魚数知れず	氷解	地理
7898	大正５年	春の部	日の雪解夜の流レとなりにけり	雪解	地理
7899	大正５年	春の部	雪解踏來る杣が妻子を見迎へぬ	雪解	地理
7900	大正５年	春の部	啓蟄の日の正午かな雪間水	啓蟄	時候
7901	大正５年	春の部	山迢かにして東風吹くこと長し	東風	天文
7903	大正５年	春の部	千竿の竹の影舞ふ朧月	朧月	天文

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7904	大正５年	春の部	山峻しく水急に涅槃會すぎぬ	涅槃會	人事
7905	大正５年	春の部	風反りの樹や春淺き流レ雲	春淺し	時候
7906	大正５年	春の部	學校の卒業式や春の雪	春雪	天文
7907	大正５年	春の部	路砂利の幾度春の雪に日に	春雪	天文
7908	大正５年	春の部	卒業の茶話會や春淺き雨	春淺し	時候
7910	大正５年	春の部	柳已に青し汝が帽影に	柳	植物
7912	大正５年	春の部	人々の拳陽炎もゆるかな	陽炎	天文
7913	大正５年	春の部	山少し燒くるに昼餉食ひ居たり	野山燒	人事
7914	大正５年	春の部	古葉くゞり旧根に及ぶ春の水	春の水	地理
7915	大正５年	春の部	山下行く我に春山の女唄ふ	春の山	地理
7916	大正５年	春の部	岸辺樹々の枝間朗らに春の水	春の水	地理
7917	大正５年	春の部	絲遊や夜雨に浸りし種俵	陽炎	天文
7918	大正５年	春の部	春一樹二樹に芥燒くけふり	春	時候
7919	大正５年	春の部	村文庫蛙鳴く田の邉り也	蛙	動物
7920	大正５年	春の部	草萠ゆる頃又動く讀書慾	草萠	植物
7921	大正５年	春の部	草もゆる見て我草鞋足すゝむ	草萠	植物
7922	大正５年	春の部	鶯や止まって潭となるところ	鶯	動物
7923	大正５年	春の部	道に一人端山鶯きゝにけり	鶯	動物
7924	大正５年	春の部	書樓近く巣作る雀恋マ	雀の巣	動物
7925	大正５年	春の部	矢根石拾ふ頭上を囀りぬ	囀	動物
7926	大正５年	春の部	鶯や首を回らせば天空し	鶯	動物
7927	大正５年	春の部	我と共にこの一國の霞みけり	霞	天文
7928	大正５年	春の部	山は山河は河なる霞かな	霞	天文
7929	大正５年	春の部	地にもゆる我も／＼と土筆	土筆	植物
7930	大正５年	春の部	耕人の目に鳥海の雪かすむ	霞	天文
7931	大正５年	春の部	堆きまでに落花を掃きあつむ	落花	植物
7932	大正５年	春の部	巣籠の雀を襲ふ風落花	雀の巣	動物
7933	大正５年	春の部	納屋の前花散りつもる炭俵	落花	植物
7934	大正５年	春の部	風雨叩く櫻を望むがらす窓	櫻	植物
7935	大正５年	春の部	蕨伸る日照りに鳴るや藪枯葉	蕨	植物
7936	大正５年	春の部	折るとしもなき早蕨の把に盈つる	蕨	植物
7937	大正５年	春の部	野路一人雉子鳴く方を後ろにす	雉子	動物
7938	大正５年	春の部	樹に草に行春の雨斜なる	行春	時候
7939	大正５年	春の部	神鳴りて天氣変りぬ梨の花	梨の花	植物
7940	大正５年	春の部	隣隔つ生垣深く春暮る	暮春	時候
7941	大正５年	春の部	雀子と大根の花と風雨かな	雑	雑
7942	大正５年	春の部	蕨狩の女に守る古渡シ	蕨狩	人事
8079	大正６年	春の部	柳の芽蕗の薹我と相知りぬ	雑	雑
8080	大正６年	春の部	東風の里雪穴日々に毀たるゝ	東風	天文
8081	大正６年	春の部	氷解くる池の面の風を迎へけり	氷解	地理
8085	大正６年	春の部	大方の柳芽ぐむに涙かな	柳の芽	植物
8086	大正６年	春の部	翔りゆく白鳥二ツ春の水	春の水	地理
8087	大正６年	春の部	我が立つを巣の營みの雀飛ぶ	雀の巣	動物
8088	大正６年	春の部	禽一時柴刈人に囀りぬ	囀	動物
8089	大正６年	春の部	草萠時渡シの舩の遲き待つ	草萠	植物
8090	大正６年	春の部	澤水の早さに堪へて蕗の薹	蕗の薹	植物
8091	大正６年	春の部	柳垂るゝ處我が立つ星の春	春の星	天文
8092	大正６年	春の部	提灯にからびたり春の泥一片	春泥	地理

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8093	大正６年	春の部	春の泥乾くや燕とぶはじめ	春泥	地理
8094	大正６年	春の部	庭の松に來鳴く鶯書に親し	鶯	動物
8095	大正６年	春の部	當面の山燒くる見て書を釋てつ	野山燒	人事
8096	大正６年	春の部	大衆ハ知らず斷崖の花辛夷	辛夷	植物
8097	大正６年	春の部	木の芽吹いて禽もろ／＼が口を張る	木の芽	植物
8099	大正６年	春の部	山門の一偈木芽のもろ／＼に	木の芽	植物
8101	大正６年	春の部	鶯の耳に徹して痕もなし	鶯	動物
8103	大正６年	春の部	雜草に山吹白し垣日向	山吹	植物
8232	大正７年	春の部	子等の顔に啓蟄近き日の色よ	啓蟄	時候
8233	大正７年	春の部	この雨に雪減る上を歩みけり	雪解	地理
8234	大正７年	春の部	栗枯木雪解の烟立つ中に	雪解	地理
8235	大正７年	春の部	腹案を筆す物皆冴返る	冴返	時候
8236	大正７年	春の部	雪の底筧溢るゝ雪解哉	雪解	地理
8237	大正７年	春の部	太古史を讀む屋外の雪解哉	雪解	地理
8238	大正７年	春の部	山辺雪解を見て日毎往還す	雪解	地理
8240	大正７年	春の部	大樹の下兒孫額づくや蕗のとう	蕗の薹	植物
8241	大正７年	春の部	まれ人と夜座寛ぐや猫の戀	猫の戀	動物
8242	大正７年	春の部	鳥已に蹼を印す雪間草	雪間草	植物
8243	大正７年	春の部	殘雪の人脅かすゆゝしさよ	殘雪	地理
8244	大正７年	春の部	野蒜掘戀猫の宿へ戻る也	野蒜	植物
8245	大正７年	春の部	野蒜もゆる彼方伐木の群衆かな	野蒜	植物
8246	大正７年	春の部	春風や雪垣解けバ山見ゆる	春風	天文
8247	大正７年	春の部	雪垣の跡や柳の緑匂ふ	柳	植物
8248	大正７年	春の部	百千鳥處を得たり巨樹細柯	百千鳥	動物
8249	大正７年	春の部	春風に猶冷ゆらんぞ雲雀の巣	雲雀の巣	動物
8251	大正７年	春の部	花鳥の魂こぞる朧かな	朧	天文
8253	大正７年	春の部	耳近に鳴く鶯や山の鼻	鶯	動物
8255	大正７年	春の部	雛の日や先祖の話一くさり	雛祭	人事
8257	大正７年	春の部	畑の土膨れつくして春のゆく	行春	時候
8258	大正７年	春の部	路傍や末黒うすれて春の行く	行春	時候
8259	大正７年	春の部	行春や矯々として鳥の飛ぶ	行春	時候
8260	大正７年	春の部	春を惜む心友二人夜學かな	春惜む	時候
8261	大正７年	春の部	行春の鳥の啄む水泡かな	行春	時候
8262	大正７年	春の部	醉酣に暴風雨中春惜む	春惜む	時候
8263	大正７年	春の部	土くれも我が手も硬し暮るゝ春	暮春	時候
8264	大正７年	春の部	平準の水に岸辺の春くるゝ	暮春	時候
8265	大正７年	春の部	行春や徒に伸びたる藥草	行春	時候
8266	大正７年	春の部	水あれバ葉廣水草春老いし	行春	時候
8267	大正７年	春の部	この花に鮮魚の價貴けれ	花	植物
8268	大正７年	春の部	貧しくて年經る家や花大根	大根の花	植物
8269	大正７年	春の部	晝の戸に李の花香漾へり	李の花	植物
8270	大正７年	春の部	籬ともなく朽木横はる春の艸	春の草	植物
8271	大正７年	春の部	少閒を摘むべき草のほゝけたり	摘草	人事
8272	大正７年	春の部	蕨五六本椎茸一つ握りつゝ	蕨	植物
8419	大正８年	春の部	土につく我足うれし蕗のとう	蕗の薹	植物
8420	大正８年	春の部	雪解靄中に枯木と我と哉	雪解	地理
8421	大正８年	春の部	春淺き枯木の苔の美くしや	春淺し	時候
8422	大正８年	春の部	蕗のとう苦きに美酒や春淺き	春淺し	時候

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8423	大正８年	春の部	啄木鳥を徒に見てすぐ春淺き	春淺し	時候
8424	大正８年	春の部	春淺き土や大樹の根の邊り	春淺し	時候
8425	大正８年	春の部	春淺し水鳥春の水をくゞる	春淺し	時候
8426	大正８年	春の部	一日着て一日掛く春淺き漁簑	春淺し	時候
8427	大正８年	春の部	春淺き庭の主や古椿	春淺し	時候
8428	大正８年	春の部	春淺し鉄砲ひゞく田螺の戸	春淺し	時候
8429	大正８年	春の部	古藻ながらの湖の魚買ふ春淺き	春淺し	時候
8430	大正８年	春の部	春はやも山の黛濃き日哉	早春	時候
8432	大正８年	春の部	もえいづる草に不覚の泪かな	草萠	植物
8433	大正８年	春の部	岡邊行く子等や木芽の競ひふく	木の芽	植物
8434	大正８年	春の部	木芽ふけよ／＼と鳥の諸音哉	木の芽	植物
8435	大正８年	春の部	木芽固し卒業式の人々に	木の芽	植物
8436	大正８年	春の部	木芽垣に師弟別を惜しみけり	木の芽	植物
8437	大正８年	春の部	氏神に不時の詣や木芽もゆ	木の芽	植物
8438	大正８年	春の部	舟上る遲々柳の芽ふくれをり	柳の芽	植物
8439	大正８年	春の部	遲き早き木芽に雪の淡々し	木の芽	植物
8440	大正８年	春の部	樹々の芽のふく音か雨けふる中	木の芽	植物
8441	大正８年	春の部	木芽つめバよべの雨露含みをり	木の芽	植物
8443	大正８年	春の部	命長き椎や梢の百千鳥	百千鳥	動物
8445	大正８年	春の部	朝鮮の桃種植ゑつ此土に	花種蒔く	人事
8446	大正８年	春の部	木芽ふくや冷たくなりし野火の痕	木の芽	植物
8447	大正８年	春の部	犬鈍に鶏輕し桑もえ出でゝ	桑の芽	植物
8449	大正８年	春の部	日遲々たり椿赤きに水流れ	遲日	時候
8451	大正８年	春の部	庭の内外うからやからにはつ燕	燕	動物
8452	大正８年	春の部	墓木より春雨垂るに孫ら子ら	春雨	天文
8454	大正８年	春の部	朝鳥の花に羽たゝく目ざましき	花	植物
8455	大正８年	春の部	笙篳篥神格りますや花の雲	花	植物
8456	大正８年	春の部	我家の水や花見の足すゝぐ	花見	人事
8457	大正８年	春の部	蝋燭の花に冷えゆく端居哉	花	植物
8458	大正８年	春の部	花の泥を厭ひ水ナ上遠くゆく	花	植物
8459	大正８年	春の部	此山を出でじと花に又思ふ	花	植物
8460	大正８年	春の部	大雨の中獨遊べり花の魂	花	植物
8462	大正８年	春の部	陽炎のまに／＼遊ぶ魂を思ふ	陽炎	天文
8463	大正８年	春の部	花寒き心書樓にこもりけり	花	植物
8464	大正８年	春の部	田打ども我庭の花見て過ぐる	花	植物
8466	大正８年	春の部	花に來て蛙の客となりにけり	花	植物
8468	大正８年	春の部	皆人の春惜む中の蛙哉	春惜む	時候
8637	大正９年	春の部	杉村や神のうがらのうらゝかに	麗	時候
8638	大正９年	春の部	神々に縄墨匂へ家の春	初春	時候
8639	大正９年	春の部	玉の如く春寒凝りて句録の句	春寒	時候
8640	大正９年	春の部	山際に片よりて梅の徑かな	梅	植物
8641	大正９年	春の部	梅一木二木や風邪もなき小村	梅	植物
8642	大正９年	春の部	梅早し何に驅け去る軍人	梅	植物
8643	大正９年	春の部	梅の老樹に近寄らで過ぐ里人よ	梅	植物
8644	大正９年	春の部	梅に月誰ぞ宿禽を驚かす	梅	植物
8645	大正９年	春の部	梅に管せず潭心の月に立つ	梅	植物
8646	大正９年	春の部	梅寒く苦吟曉に達しけり	梅	植物
8647	大正９年	春の部	瓶梅の蕾や苦吟夜を徹す	梅	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8648	大正９年	春の部	風邪入らぬ里の往來や梅の花	梅	植物
8649	大正９年	春の部	梅を遠く去るや柳を綰ぬべく	梅柳	植物
8650	大正９年	春の部	曉を啼くや梅の寒きに水鳥も	梅	植物
8651	大正９年	春の部	水鳥の孤獨となりぬ梅の花	梅	植物
8652	大正９年	春の部	古舊挨拶す梅の戸柳の門	梅柳	植物
8653	大正９年	春の部	桃夭々雛の主人のねびまさり	雛祭	人事
8654	大正９年	春の部	古雛にあるじまうけも無かりけり	雛祭	人事
8655	大正９年	春の部	かりそめの雛にかゞやく灯かな	雛祭	人事
8656	大正９年	春の部	雛まつる大家の庭の闇深し	雛祭	人事
8657	大正９年	春の部	夜の雨襲ひ來にけり雛が宿	雛祭	人事
8658	大正９年	春の部	雛の間に狗吠鶏鳴聞えけり	雛祭	人事
8659	大正９年	春の部	料紙硯文したゝむる雛の前	雛祭	人事
8660	大正９年	春の部	雛を見て帰るさ眉のよな月が	雛祭	人事
8661	大正９年	春の部	門をなす柳に出入る雛の人	雛祭	人事
8662	大正９年	春の部	雛過ぎて更に活けたる桃白し	桃	植物
8664	大正９年	春の部	ゆく春の取つく物も無かりけり	行春	時候
8665	大正９年	春の部	誰と共に春を惜まん筆硯	春惜む	時候
8666	大正９年	春の部	ゆく春を大風吹いて籠りゐる	行春	時候
8771	大正10年	春の部	野路稀にゆく人や梅に管らず	梅	植物
8772	大正10年	春の部	自から起ちて探梅の糧作る	探梅	人事
8773	大正10年	春の部	梅さくやいかに傳へて古瓢	梅	植物
8774	大正10年	春の部	我をさけて苔はむ鳥や梅の花	梅	植物
8775	大正10年	春の部	梅寒うして暦日を過たず	梅	植物
8776	大正10年	春の部	梅の曙既に人ある麦畠	梅	植物
8777	大正10年	春の部	梅寒し火箭の稽古の戻り人	梅	植物
8778	大正10年	春の部	人遠し梅蕾堅く水急に	梅	植物
8779	大正10年	春の部	梅柳日の景移る一郭	梅柳	植物
8780	大正10年	春の部	梅ちる軒海苔干す戸風平かに	梅	植物
8781	大正10年	春の部	木芽吹くや朝山越ゆるかしま立	木の芽	植物
8782	大正10年	春の部	顔回ハ學を好めり木芽和	木芽和	人事
8783	大正10年	春の部	藪木の芽赤くほぐれつ晝蛙	木の芽	植物
8784	大正10年	春の部	涅槃會大雨境内の木芽寒ム	木の芽	植物
8785	大正10年	春の部	ちょと摘みて／＼木芽つみ憂かり	木の芽	植物
8786	大正10年	春の部	漣や橋の袂の木芽摘	木の芽	植物
8787	大正10年	春の部	木芽摘風に吹かれて唄ひをり	木の芽	植物
8788	大正10年	春の部	木芽照るや馬を走らす少年輩	木の芽	植物
8789	大正10年	春の部	谷水の日に減りて木芽ほうけたり	木の芽	植物
8790	大正10年	春の部	諸木の芽色づく見てや雁急ぐ	木の芽	植物
8791	大正10年	春の部	水に照る木芽や蘆はかれ／＼て	木の芽	植物
8792	大正10年	春の部	谷川の濁うすらぎて曉の花	花	植物
8793	大正10年	春の部	岩魚釣る人と相識らず山櫻	山櫻	植物
8794	大正10年	春の部	櫻狩劔客道を讓り去る	花見	人事
8795	大正10年	春の部	花ちるや手づから藏む古硯	落花	植物
8796	大正10年	春の部	燭を採れバ花の筵の人空し	花見	人事
8797	大正10年	春の部	舊道や今を盛りの山櫻	山櫻	植物
8798	大正10年	春の部	旅人に花ふる里の荒にけり	花	植物
8799	大正10年	春の部	ちる花に斯松栽ゑし人を想ふ	落花	植物
8800	大正10年	春の部	花人を送りて蛙鳴出しぬ	花	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8801	大正10年	春の部	花に急ぐ人の絶間の陽炎よ	花	植物
8802	大正10年	春の部	花漬けて故人至るを待たん哉	花	植物
8804	大正10年	春の部	行春や足つまだつる山一ツ	行春	時候
8929	大正11年	春の部	彼岸近し人の子の目に杖なんど	彼岸	人事
8931	大正11年	春の部	紙鳶繪かく弟を見て物いはず	凧	人事
8932	大正11年	春の部	紙鳶の句に忍び雛の句に泣きぬ	凧	人事
8933	大正11年	春の部	紙鳶も揚り雪崩越え來し安堵哉	凧	人事
8934	大正11年	春の部	雪崩越えし安堵を揚る紙鳶	凧	人事
8935	大正11年	春の部	暮一人尚凧揚げむ風待ちぬ	凧	人事
8936	大正11年	春の部	繪凧持歸る枯木の奥の家	凧	人事
8937	大正11年	春の部	大鳥の拔羽を茲に草もゆる	草萠	植物
8938	大正11年	春の部	樹の枝のかげ太やかに土ぬくき	暖	時候
8939	大正11年	春の部	鶯や例の端山に日の照りて	鶯	動物
8940	大正11年	春の部	むら杉を繞りて春の水光る	春の水	地理
8941	大正11年	春の部	衆禽は邇く鶯遐か也	鶯	動物
8942	大正11年	春の部	羽毛異なりて一樹に囀るよ	囀	動物
8943	大正11年	春の部	鳥下りて春の地息に浸りけり	春の土	地理
8944	大正11年	春の部	愁ひて書樓に在れバ柳青し	柳	植物
8945	大正11年	春の部	山川の淵瀬久しき櫻哉	櫻	植物
8946	大正11年	春の部	春の夜の人を玉なる夢路哉	春夜	時候
8947	大正11年	春の部	時ありて巨人の影や蛙の子	蝌蚪	動物
8948	大正11年	春の部	朝ぼらけ大河隔てゝ雉子の聲	雉子	動物
8949	大正11年	春の部	木芽より雨の餘りて枯芝へ	木の芽	植物
8950	大正11年	春の部	したゝかに雨に打たるゝ菫哉	菫	植物
8951	大正11年	春の部	朝晴に袴干しけり土筆達	土筆	植物
8952	大正11年	春の部	碑の苔を掃はで久し春の雨	春雨	天文
8953	大正11年	春の部	朝霽や木芽潤ほし足らぬ雨	木の芽	植物
8954	大正11年	春の部	旦に出て夕に歸れバ櫻哉	櫻	植物
8955	大正11年	春の部	陽炎に野をやく子等のかけめぐる	陽炎	天文
8956	大正11年	春の部	二三十の目高に田螺一ツかな	雑	雑
8957	大正11年	春の部	春雨や茸の事に立咄シ	春雨	天文
8959	大正11年	春の部	僧と地を指點す一鳥囀るに	囀	動物
8960	大正11年	春の部	この垣に五加木つみけむ昔かな	五加木	植物
8961	大正11年	春の部	花鳥や白骨うめん此ところ	花	植物
8962	大正11年	春の部	ねもごろに繕はしめつ五加木垣	五加木	植物
8963	大正11年	春の部	城の如く花の大樹の聳えけり	花	植物
8964	大正11年	春の部	春雨に潤ひ足りし大地哉	春雨	天文
8965	大正11年	春の部	春雨にひたぬれて巣の營か	春雨	天文
8966	大正11年	春の部	愁見る碑の舊苔や春の雨	春雨	天文
8967	大正11年	春の部	春の雨烟るが中の日は南	春雨	天文
8968	大正11年	春の部	春雨のまだきに晴れて日遍し	春雨	天文
8969	大正11年	春の部	春雨の夢を掠めて蚊の去りし	春雨	天文
8970	大正11年	春の部	春の雨晴るゝに近し日の朧	春雨	天文
8971	大正11年	春の部	はやうもれゆく骨壺や春の雨	春雨	天文
8972	大正11年	春の部	白骨を埋むるに雨の落花哉	落花	植物
8973	大正11年	春の部	春雨や見るまにぬれし土饅頭	春雨	天文
8974	大正11年	春の部	春雨の自から垂る墓辺の樹	春雨	天文
8976	大正11年	春の部	一鍬の土にかげろふ畏さよ	陽炎	天文

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8977	大正11年	春の部	さゝやかに虫巣ふ草芳しく	草芳し	植物
8978	大正11年	春の部	草芳しく女かほよし流レ水	草芳し	植物
8980	大正11年	春の部	悲しくも餘花の白さを眼睛に	餘花	植物
8982	大正11年	春の部	湖の魚飛を心に風光る	風光る	天文
8983	大正11年	春の部	行春の一日を聳ゆ雲の峰	行春	時候
8984	大正11年	春の部	牡丹さげて群衆にふれさせじとす	牡丹	植物
8985	大正11年	春の部	湖辺近くゆく／＼春の草老いぬ	春の草	植物
9171	大正12年	春の部	一方に柳靡きつ春吹雪	春吹雪	天文
9172	大正12年	春の部	中流の舟に日射しや春吹雪	春吹雪	天文
9173	大正12年	春の部	思はずの月ハ朧に春吹雪	春吹雪	天文
9174	大正12年	春の部	我等が灯目にや映りて梟啼く	梟	動物
9175	大正12年	春の部	議論無用深夜梟に罵らる	梟	動物
9178	大正12年	春の部	梅柳唐人笛も聞ゆなり	梅柳	植物
9180	大正12年	春の部	南國の人を弔ふ雪解哉	雪解	地理
9181	大正12年	春の部	女もまじり何の往來や雪融に	雪解	地理
9183	大正12年	春の部	春服や詠じて帰る日高きに	春服	人事
9185	大正12年	春の部	鳥雲に入る時君がたよりかな	鳥入雲	動物
9186	大正12年	春の部	雪解水畔越すに人等語りすぐ	雪解	地理
9187	大正12年	春の部	野蒜萠え／＼風渡る地を歩む	野蒜	植物
9188	大正12年	春の部	春山の霞を吸ひて樵る見ゆ	春の山	地理
9189	大正12年	春の部	畔近く田螺遊ぶや蕗の薹	蕗の薹	植物
9191	大正12年	春の部	先生を送るや春の水に沿ひ	春の水	地理
9193	大正12年	春の部	皆鳴くに鳴かぬ蛙の慵さよ	蛙	動物
9194	大正12年	春の部	芹摘みに天翔りゆく鳥影す	芹	植物
9195	大正12年	春の部	芹摘や四澤の水の湊まるに	芹	植物
9196	大正12年	春の部	莖芹のつむべくなりぬ雁別れ	芹	植物
9197	大正12年	春の部	家遠く芹つむ子等に歸雁哉	芹	植物
9198	大正12年	春の部	せゝらぎに日の匂ひけり芹みどり	芹	植物
9199	大正12年	春の部	芹摘の喚べバ鷹へて田螺採り	芹	植物
9200	大正12年	春の部	芹摘は黙し梅見の語り過ぐ	雑	雑
9202	大正12年	春の部	雲歸る峰又峰の麗かに	麗	時候
9204	大正12年	春の部	春風に背ら吹かせて家路かな	春風	天文
9205	大正12年	春の部	芹採や卑しからざる女の童	芹	植物
9206	大正12年	春の部	芹濯ぐ流れ夕東風吹渡る	芹	植物
9207	大正12年	春の部	芹摘の子等に轟く雷一ツ	芹	植物
9208	大正12年	春の部	山陰や春のつゆおく柴さくら	芝櫻	植物
9209	大正12年	春の部	お兵庫の址のみ存す花遲し	花	植物
9210	大正12年	春の部	三日照りて一日潤ふ春田かな	春の田	地理
9211	大正12年	春の部	崇山や霞を透す雪の襞	霞	天文
9212	大正12年	春の部	照り／＼て一日の夕霞みけり	霞	天文
9214	大正12年	春の部	この花に誰か識らむや雁の糞	花	植物
9215	大正12年	春の部	日の雨や楓のぬれ葉濡れ燕	燕	動物
9216	大正12年	春の部	朝戸出の苗代見るや燕も	燕	動物
9217	大正12年	春の部	芍藥の頃双棲の燕かな	燕	動物
9218	大正12年	春の部	燕の來著きし里や花遲し	燕	動物
9219	大正12年	春の部	遠山の雪や燕飜る	燕	動物
9220	大正12年	春の部	老一人留守居燕子慈々と鳴く	燕の子	動物
9221	大正12年	春の部	翁媼挨拶す燕筋かひに	燕	動物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9222	大正12年	春の部	一ツ家や双飛の燕寢に歸る	燕	動物
9223	大正12年	春の部	燕の今宵を寢ぬる舊巣哉	燕	動物
9224	大正12年	春の部	野仕事や燕もまじる大族ラ	燕	動物
9226	大正12年	春の部	草を披いて花片を見る愁哉	花	植物
9337	大正13年	春の部	八重垣の瑞垣の邊の霞哉	霞	天文
9338	大正13年	春の部	梅の花を空薫物や御文筥	梅	植物
9339	大正13年	春の部	老一木若木に交り春吹雪	春吹雪	天文
9340	大正13年	春の部	稀に見る鮮魚に春の吹雪哉	春吹雪	天文
9341	大正13年	春の部	春吹雪白魚網を掠めけり	春吹雪	天文
9342	大正13年	春の部	都上りの美人を見るや春吹雪	春吹雪	天文
9344	大正13年	春の部	人も無げに端山鶯啼にけり	鶯	動物
9345	大正13年	春の部	雲雀沈むや火を免れたる古芒	雲雀	動物
9346	大正13年	春の部	雲雀の國蛙の國と相隣る	雑	雑
9347	大正13年	春の部	舞雲雀紫の山を讃へつゝ	雲雀	動物
9348	大正13年	春の部	今晴れし野路の乾きや舞雲雀	雲雀	動物
9349	大正13年	春の部	やおら起ちぬ雲雀に名殘留めつゝ	雲雀	動物
9350	大正13年	春の部	雲雀野や日々に相見る少女どち	雲雀	動物
9351	大正13年	春の部	雲雀野の水平かに流れけり	雲雀	動物
9352	大正13年	春の部	雨細し雲雀揚れバ日は南	雲雀	動物
9353	大正13年	春の部	舞雲雀金鶏山は此方かな	雲雀	動物
9354	大正13年	春の部	不二の根の雪怖ろしき雲雀哉	雲雀	動物
9355	大正13年	春の部	落雲雀大根の花を戀ひつゝか	雲雀	動物
9356	大正13年	春の部	春曉の戸にふれて花賣の居り	春曉	時候
9357	大正13年	春の部	吟行の早蕨を折る暇哉	蕨	植物
9358	大正13年	春の部	貴人は野亭におはす蕨哉	蕨	植物
9359	大正13年	春の部	鳥の巣と梢はなりぬ古人の碑	鳥の巣	動物
9360	大正13年	春の部	鳥の巣に塔の丹碧間近なる	鳥の巣	動物
9361	大正13年	春の部	行春の海山かけて風斜	行春	時候
9362	大正13年	春の部	鳥の巣に夜のくもりと成にけり	鳥の巣	動物
9363	大正13年	春の部	藪淺く蕨折る人見知りけり	蕨	植物
9364	大正13年	春の部	旅心そらに鳥の巣高き哉	鳥の巣	動物
9365	大正13年	春の部	啼かはす鳥やこゝらに巣ひけむ	鳥の巣	動物
9366	大正13年	春の部	行春の或は水を趁ひありく	行春	時候
9367	大正13年	春の部	鳥の巣や城の艮天德寺	鳥の巣	動物
9368	大正13年	春の部	蕨折り／＼山川の淵に臨みけり	蕨	植物
9369	大正13年	春の部	行春や露けしと思ふ宵ありき	行春	時候
9370	大正13年	春の部	蕨折るや遥かに望む市の塵	蕨	植物
9371	大正13年	春の部	行春の鳥のいさかふ草の上	行春	時候
9509	大正14年	春の部	春寒に在りて君がため句を思ふ	春寒	時候
9510	大正14年	春の部	春吹雪一ト時ありてたれ柳	春吹雪	天文
9511	大正14年	春の部	春寒や蝕みつゞる從軍記	春寒	時候
9512	大正14年	春の部	鶯や雪より起きし小柴原	鶯	動物
9513	大正14年	春の部	田の水の饒かなるまゝ田螺在り	田螺	動物
9515	大正14年	春の部	鶯の古巣たづねむ山椿	椿	植物
9517	大正14年	春の部	囀や珠を掘得て山下る	囀	動物
9519	大正14年	春の部	朧夜や橋を渡れバ松の里	朧	天文
9520	大正14年	春の部	鶯や山畑拓く朝仕事	鶯	動物
9521	大正14年	春の部	春の野にこもりて物の鳴く音哉	春の野	地理

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9522	大正14年	春の部	鳥どもの恋さまざまに霞かな	霞	天文
9523	大正14年	春の部	春愁を知らず流に沿うてゆく	春愁	人事
9524	大正14年	春の部	山行の杉苗春の露しげみ	春の露	天文
9525	大正14年	春の部	木芽あへ處々の啼鳥朗かに	木芽和	人事
9527	大正14年	春の部	曉深み鳥啼立つる卯月哉	卯月	時候
9529	大正14年	春の部	夏に入る草の色城の石垣も	立夏	時候
9530	大正14年	春の部	夏に入る葉雫窓を拂ふ哉	立夏	時候
9531	大正14年	春の部	夏に入る雨小寒しや城の木々	立夏	時候
9532	大正14年	春の部	故郷やつゝじがくれに知る女	躑躅	植物
9533	大正14年	春の部	水茶屋の水にさしたるつゝじ哉	躑躅	植物
9534	大正14年	春の部	旅人とつゝじに昔語かな	躑躅	植物
9535	大正14年	春の部	初夏の雨園林を濶しぬ	初夏	時候
9537	大正14年	春の部	卯の花の白き憂を主とす	卯の花	植物
9539	大正14年	春の部	野遊のいつこ硯の水汲まん	野遊	人事
9540	大正14年	春の部	雲雀鳴いて野遊の友など遲き	野遊	人事
9541	大正14年	春の部	野遊や筵のはしの百千草	野遊	人事
9542	大正14年	春の部	野遊や遥かに望む渡舟	野遊	人事
9543	大正14年	春の部	野遊やあらぬ方より男達	野遊	人事
9545	大正14年	春の部	まぼろしやつゝじがくれに小さき物	躑躅	植物
9547	大正14年	春の部	野遊の耳聳つる雉子の聲	野遊	人事
9549	大正14年	春の部	水の上の龍神堂や夏に入る	立夏	時候
9550	大正14年	春の部	神さびてよしある藤の葉勝なる	藤の花	植物
9551	大正14年	春の部	春惜む人々こぞり水の辺に	春惜む	時候
9552	大正14年	春の部	我と相見て春惜む美人かも	春惜む	時候
9553	大正14年	春の部	噴水の斷えつ続きつ藤落花	藤の花	植物
9555	大正14年	春の部	風吹かバ吹け幟押立てん	幟	人事
9557	大正14年	春の部	京阪の方角つゝじ藪越に	躑躅	植物
9558	大正14年	春の部	蕨老いてはるけくなりし旅路哉	蕨	植物
9681	大正15年	春の部	春伐りの木口麗に匂ふ哉	麗	時候
9682	大正15年	春の部	春立や蒲團清らに雨をきく	立春	時候
9684	大正15年	春の部	熊撃てとそゝのかす雪の別哉	雪の果	天文
9685	大正15年	春の部	残雪の清らに柳しだれけり	殘雪	地理
9686	大正15年	春の部	柳青き見つ書樓を下る時	柳	植物
9688	大正15年	春の部	梅柳天麗かに覆ふ哉	梅柳	植物
9689	大正15年	春の部	絵册子の亂れ兒らはや雪に出づ	雪	天文
9690	大正15年	春の部	青松葉こぼれて道の凍返る	凍返る	地理
9691	大正15年	春の部	欄前や朧漲る垂柳	朧	天文
9693	大正15年	春の部	老のはて寂の極ミを梅の花	梅	植物
9695	大正15年	春の部	夢しば／＼青を踏みぬ雪の宿	踏青	人事
9696	大正15年	春の部	細々と垂氷す春の曉に	春曉	時候
9697	大正15年	春の部	雪名残下萠故に消えにつゝ	雪の果	天文
9699	大正15年	春の部	清淺の水春寒の鶴もなし	春寒	時候
9700	大正15年	春の部	鶯に顔セ古き怡々如たり	鶯	動物
9701	大正15年	春の部	麗や堯にかも似し御頽	麗	時候
9702	大正15年	春の部	二三子後れて至る蕗の薹	蕗の薹	植物
9703	大正15年	春の部	詩を学びたりや未だし土筆摘	土筆	植物
9704	大正15年	春の部	麗や各志を言へ	麗	時候
9705	大正15年	春の部	野焼已まず水に臨んで夫子在す	野山焼	人事

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9706	大正15年	春の部	鶯を其處と聽きけり山の上	鶯	動物
9707	大正15年	春の部	春風の古葉飛ばすや日の表	春風	天文
9708	大正15年	春の部	谷川のきり岸木芽尚堅し	木の芽	植物
9709	大正15年	春の部	暖や人の棲みけむ大昔	暖	時候
9710	大正15年	春の部	逕行く人影載せて春の水	春の水	地理
9711	大正15年	春の部	童子來てこそづかしけり古落葉	古落葉	植物
9712	大正15年	春の部	いつの世の石器うもれて菫かな	菫	植物
9714	大正15年	春の部	鶯の聲喬木の枝に在り	鶯	動物
9715	大正15年	春の部	春の塵と山吹なりぬうつ木垣	春塵	天文
9717	大正15年	春の部	山の雨城下の花に晴にけり	花	植物
9719	大正15年	春の部	或時は釣りさげて花の神祭れ	花	植物
9721	大正15年	春の部	笑を含んで巷の花に手を分つ	花	植物
9722	大正15年	春の部	花に約して松露を贈り來りけり	花	植物
9723	大正15年	春の部	草芳しと見つゝや草履作るらん	草芳し	植物
9724	大正15年	春の部	登臨や萬戸の花の揺ぐ風	花	植物
9725	大正15年	春の部	花人につみて示しぬ通草の芽	花	植物
9726	大正15年	春の部	山路來て花見の裳かゝげけり	花見	人事
9727	大正15年	春の部	花菫こゝに句箋を埋むべく	菫	植物
9728	大正15年	春の部	慵しや衣を拂ふ花のちり	花	植物
9730	大正15年	春の部	蕨長けて子を悲しがる雉子哉	雉子	動物
9731	大正15年	春の部	野に出でゝ泉を遠み春惜む	春惜む	時候
9732	大正15年	春の部	行春の句をかきつらね反古哉	行春	時候
9733	大正15年	春の部	春惜む句未成らず古手帖	春惜む	時候
9734	大正15年	春の部	衣につく柳の絮や春惜む	春惜む	時候
9735	大正15年	春の部	藤つゝじ小高き所友を喚ぶ	雑	雑
9736	大正15年	春の部	藤つゝじ水を索ねて人去りぬ	雑	雑
9737	大正15年	春の部	野遊や所をかへて河嶽の景	野遊	人事
9738	大正15年	春の部	つゝじちりしきて馬糞古りにけり	躑躅	植物
9739	大正15年	春の部	行春や盟ひに背く漁者の友	行春	時候
9969	昭和２年	春の部	大空の春は立てども陰りけり	立春	時候
9970	昭和２年	春の部	春立といへども大地しゞま也	立春	時候
9971	昭和２年	春の部	天地を罩めて春寒ひたに在り	春寒	時候
9972	昭和２年	春の部	月は入りぬうなじも膝も春の霜	春霜	天文
9973	昭和２年	春の部	春寒の伊吹に遭ひぬ天が下	春寒	時候
9974	昭和２年	春の部	天そゝる氷は未だ融けなくに	氷	天文
9975	昭和２年	春の部	早川も今かよどまん凍返り	凍返る	地理
9977	昭和２年	春の部	麟鳳來宿帳も綴りけむ	帳綴	人事
9978	昭和２年	春の部	二月や研がんと思ふ斧の錆	二月	時候
9979	昭和２年	春の部	如月や木神祀る樵ども	如月	時候
9980	昭和２年	春の部	二月や新陵の霜の花	二月	時候
9981	昭和２年	春の部	二月や尚繪具ぬる五文凧	二月	時候
9982	昭和２年	春の部	二月や又現はれし山の鬼	二月	時候
9984	昭和２年	春の部	大利根の奥の氷を劈きぬ	氷解	地理
9985	昭和２年	春の部	春泥や嘴を淨めて枝に鳥	春泥	地理
9987	昭和２年	春の部	春泥やいづこを関の蹄跡	春泥	地理
9988	昭和２年	春の部	春泥や籬落の花の白勝に	春泥	地理
9989	昭和２年	春の部	春泥に摶ち落したる小蟲哉	春泥	地理
9990	昭和２年	春の部	春泥や古き都の淺茅原	春泥	地理

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9991	昭和２年	春の部	春淺し誰が句に入らむ柳の芽	春淺し	時候
9992	昭和２年	春の部	古梅の魂呼びさませ春の雪	春雪	天文
9993	昭和２年	春の部	碧空や雪間うれしき蕗の薹	蕗の薹	植物
9994	昭和２年	春の部	柳垂れてうすらひ自から融くる	薄氷	地理
9995	昭和２年	春の部	春の霜柳に解けて流れけり	春霜	天文
9996	昭和２年	春の部	いちじるく柳青みぬ春吹雪	春吹雪	天文
9997	昭和２年	春の部	火を鑽りて三月絶たずえぞが山	野山焼	人事
9998	昭和２年	春の部	山焼くる遠し合戰繪巻見る	野山焼	人事
9999	昭和２年	春の部	雪汁の川波高し野火の果	野山焼	人事
10000	昭和２年	春の部	大嶺の七岐八岐燒くる見ゆ	野山焼	人事
10001	昭和２年	春の部	山燒の燧袋も古にけり	野山焼	人事
10002	昭和２年	春の部	山燒や火を鑽れバ啼く枝の鳥	野山焼	人事
10004	昭和２年	春の部	鶯の宿をこそ見め曉深く	鶯	動物
10005	昭和２年	春の部	おのがじゝ地を占めてをり蕗の薹	蕗の薹	植物
10006	昭和２年	春の部	欣然口を開くに似たり蕗の薹	蕗の薹	植物
10007	昭和２年	春の部	草萠えぬ地もなし吾子思はぬ日も	草萠	植物
10008	昭和２年	春の部	草萠ゆるはじめ大方紫に	草萠	植物
10009	昭和２年	春の部	鳥も來ずすくよかに草萠え出でぬ	草萠	植物
10010	昭和２年	春の部	風邪の目に早下萠の淺みどり	草萠	植物
10012	昭和２年	春の部	巣雀の夙に出て啼く此事か	雀の巣	動物
10014	昭和２年	春の部	うがらやがら雀も囀せ鶯も	鶯	動物
10016	昭和２年	春の部	遠つ祖の倚りにけむ木ぞ百千鳥	百千鳥	動物
10017	昭和２年	春の部	梅柳鼎にちりも無かりけり	梅柳	植物
10019	昭和２年	春の部	我が外に誰ぞ鶯を諦聽す	鶯	動物
10021	昭和２年	春の部	遷りゆく喬木正に芽ぶきつゝ	芽吹く	植物
10023	昭和２年	春の部	牡丹の朱となるべく莟む哉	牡丹	植物
10025	昭和２年	春の部	明日の事に松露を掘らん夜の雨	松露	植物
10026	昭和２年	春の部	松露掘れと吾に簑かす主人あり	松露	植物
10027	昭和２年	春の部	花に負きて遥けくも來つ松露掘	松露	植物
10028	昭和２年	春の部	松露掘りし籃にいづこの落花哉	松露	植物
10029	昭和２年	春の部	海に向いて長嘯す或ハ松露掘る	松露	植物
10030	昭和２年	春の部	古草を焚く火に松露炙りけり	松露	植物
10032	昭和２年	春の部	松籟を聽て巣にある燕哉	燕	動物
10034	昭和２年	春の部	春惜む一筋心碑の前に	春惜む	時候
10035	昭和２年	春の部	春惜む人にまじりて往還り	春惜む	時候
10036	昭和２年	春の部	春を惜め同じ流れの季吟門	春惜む	時候
10037	昭和２年	春の部	神の前行春の塵を留めけり	行春	時候
10039	昭和２年	春の部	日は照れど霞潤ふ松の間	霞	天文
10040	昭和２年	春の部	防風老いしに誰が子今朝又牛放つ	防風	植物
10042	昭和２年	春の部	誰摘まぬ木芽ほうけて鳥の啼く	木の芽	植物
10044	昭和２年	春の部	幾里行く脚の力や春暮れて	暮春	時候
10328	昭和３年	春の部	獨樹孤碑酒を酹ぎつ梅の花	梅	植物
10329	昭和３年	春の部	探梅や主人に留む三顧の詩	探梅	人事
10330	昭和３年	春の部	禽起ちて谿越す梅の東雲に	梅	植物
10331	昭和３年	春の部	梅固し急流石を轉じつゝ	梅	植物
10332	昭和３年	春の部	車輕し眉目を掠む梅の風	梅	植物
10333	昭和３年	春の部	竒しき亀畏きトや梅の花	梅	植物
10335	昭和３年	春の部	鶴頸とひさごも祝へ梅の花	梅	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10337	昭和３年	春の部	よき年のよき草摘みて籠に盈てり	摘草	人事
10339	昭和３年	春の部	ゆきす支の國定まりぬ梅柳	梅柳	植物
10341	昭和３年	春の部	囀や雨は大野を潤しぬ	囀	動物
10342	昭和３年	春の部	囀や泉に遊ぶ両三鳥	囀	動物
10343	昭和３年	春の部	囀や乳の如垂る枝の雨	囀	動物
10344	昭和３年	春の部	囀の岡低く川舒びにけり	囀	動物
10345	昭和３年	春の部	大和の山相爭ひき囀に	囀	動物
10346	昭和３年	春の部	囀や相あらそひしうねび山	囀	動物
10347	昭和３年	春の部	囀や畆傍ををしと爭ひし	囀	動物
10348	昭和３年	春の部	千峰萬峰の底や涅槃像	涅槃會	人事
10349	昭和３年	春の部	雪山をまのあたりにす涅槃像	涅槃會	人事
10350	昭和３年	春の部	沙羅双樹の萠ゆる聲あり涅槃像	涅槃會	人事
10351	昭和３年	春の部	ひたゆるゝ柳の條よ春の雪	春雪	天文
10352	昭和３年	春の部	世の中は小判の沙汰や猫の戀	猫の戀	動物
10354	昭和３年	春の部	雲の上は白酒黒酒に匂ふ秋	秋	時候
10356	昭和３年	春の部	薫風や五六騎城を出て遊ぶ	薫風	天文
10357	昭和３年	春の部	精神ハ斯花白し老梅忌	鳴雪忌	人事
10358	昭和３年	春の部	細柴や路にさし出て皆芽ぐむ	芽吹く	植物
10359	昭和３年	春の部	蕗の薹畦越す水に莟みつゝ	蕗の薹	植物
10360	昭和３年	春の部	さまざまに戀つくしたる蛙哉	蛙	動物
10361	昭和３年	春の部	いきものゝ戀しな〳〵に水温む	水温む	地理
10362	昭和３年	春の部	踏青や龍戦ひし野を遠み	踏青	人事
10363	昭和３年	春の部	踏青や玉とあざむく鳥の糞	踏青	人事
10364	昭和３年	春の部	誰と共に青きを踏まん白頭翁	踏青	人事
10365	昭和３年	春の部	踏青の子や邯鄲の市を過ぐ	踏青	人事
10366	昭和３年	春の部	踏青やひゝなが宿に夜は寝ねん	踏青	人事
10367	昭和３年	春の部	踏青の客や故郷の人ならず	踏青	人事
10368	昭和３年	春の部	踏青や鸚鵡は籠に留まりて	踏青	人事
10369	昭和３年	春の部	鶯の來鳴くも知らず畑に在り	鶯	動物
10370	昭和３年	春の部	春の日の透る古葉よ古苔よ	春の日	天文
10372	昭和３年	春の部	此下に玉を埋めたり落椿	椿	植物
10373	昭和３年	春の部	蜂群るゝ雑木の花の一日かな	蜂	動物
10374	昭和３年	春の部	蜂來り促がす遲吟晝深く	蜂	動物
10375	昭和３年	春の部	蜂未だ起きず閼伽はや汲了へつ	蜂	動物
10376	昭和３年	春の部	蜂の巣や久矣經櫃開かざる	蜂の巣	動物
10377	昭和３年	春の部	蕊深き蜂や晨の露じめり	蜂	動物
10378	昭和３年	春の部	蕊深く蜂の翅を斂めけり	蜂	動物
10379	昭和３年	春の部	頭長き新發意蜂に螫されけり	蜂	動物
10380	昭和３年	春の部	蜂の巣や久し鐘楼に上らざる	蜂の巣	動物
10381	昭和３年	春の部	袂輕く扇の影と蜂の影	蜂	動物
10382	昭和３年	春の部	蜂の影扇の影と水に在り	蜂	動物
10383	昭和３年	春の部	扇影やかざしに迫る蜂一ツ	蜂	動物
10385	昭和３年	春の部	住吉や探題更に藤の花	藤の花	植物
10387	昭和３年	春の部	人知らぬ鶯聽くも山の幸	鶯	動物
10389	昭和３年	春の部	山法師矛の先なる藤の花	藤の花	植物
10390	昭和３年	春の部	山吹ハきのふか刈りし藤の花	藤の花	植物
10391	昭和３年	春の部	石の如憑む木枯れつ藤の花	藤の花	植物
10392	昭和３年	春の部	野茶湯の客のよるべや藤の花	藤の花	植物

春の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10394	昭和３年	春の部	恒河沙に甘露湛へつ佛生會	仏生会	人事
10395	昭和３年	春の部	灌佛や一滴々の法の乳	仏生会	人事
10396	昭和３年	春の部	紫の雲は藤かも花御堂	花祭	人事
10397	昭和３年	春の部	花御堂尚ほのかなり暮の星	花祭	人事
10398	昭和３年	春の部	雪山はうしろに聳ゆ花御堂	花祭	人事
10400	昭和３年	春の部	松露掘と人に見られし一日哉	松露	植物
10401	昭和３年	春の部	山盛の松露こぼさぬ徑かな	松露	植物
10403	昭和３年	春の部	一日野をゆけバ一日の春暮るゝ	暮春	時候
10405	昭和３年	春の部	依々として妻ハ摘みおり遲蕨	蕨	植物
10406	昭和３年	春の部	草鞋緒を結ぶに雉子のほろゝ哉	雉子	動物
10407	昭和３年	春の部	篠原や透く日斜に篠子採る	筍	植物
10606	不　　詳	春の部	春の夜や闇に灯して詩仙堂	春の夜	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10510	明治26年	夏の部	夕立のわするものらし松の月	夕立	天文
33	明治27年	夏の部	宿とりて衣更へたる夕かな	更衣	人事
34	明治27年	夏の部	職人の衣更へたる一坐かな	更衣	人事
35	明治27年	夏の部	菩提寺の僧と語るや衣更	更衣	人事
36	明治27年	夏の部	ほろ／＼と雉啼く野辺の麦熟せり	麥	植物
37	明治27年	夏の部	日入らんとして麦刈る野辺に人むれたり	麦刈	人事
38	明治27年	夏の部	刈麦の庄屋が軒の匂ひかな	麦刈	人事
39	明治27年	夏の部	卯の花の鎧の袖にこぼれける	卯の花	植物
40	明治27年	夏の部	卯の花の爰は都のはづれなり	卯の花	植物
41	明治27年	夏の部	夕月の卯の花垣根馬士帰る	卯の花	植物
42	明治27年	夏の部	一輪で咲く大寺の牡丹かな	牡丹	植物
43	明治27年	夏の部	杜若咲くや汀の石黒し	杜若	植物
44	明治27年	夏の部	廣縁に姫居並べり杜若	杜若	植物
45	明治27年	夏の部	杜若池一面に咲きにけり	杜若	植物
46	明治27年	夏の部	杜若誰殿の住みあらしけむ	杜若	植物
47	明治27年	夏の部	杜若庄屋が池の夜明かな	杜若	植物
48	明治27年	夏の部	夕月の白芥子の花ほろ／＼と	罌粟の花	植物
49	明治27年	夏の部	面白や芥子散る里の夕月夜	罌粟の花	植物
50	明治27年	夏の部	白芥子に赤前垂の女かな	罌粟の花	植物
51	明治27年	夏の部	わが宿の白芥子の花咲きにけり	罌粟の花	植物
52	明治27年	夏の部	名も知らぬ鳥の啼きけり夏木立	夏木立	植物
53	明治27年	夏の部	風をり／＼灯火青き若葉かな	若葉	植物
54	明治27年	夏の部	夕雨の夏山の裾牛帰る	夏山	地理
55	明治27年	夏の部	ものゝふの歌よまんとす子規	時鳥	動物
56	明治27年	夏の部	大佛の肩のあたりを子規	時鳥	動物
57	明治27年	夏の部	子規石の華表に苔むしぬ	時鳥	動物
58	明治27年	夏の部	子規つら／＼高き梢かな	時鳥	動物
59	明治27年	夏の部	神体の何とも知れず子規	時鳥	動物
60	明治27年	夏の部	宮柱太しき立てほとゝきす	時鳥	動物
61	明治27年	夏の部	大川の舟箭の如し子規	時鳥	動物
62	明治27年	夏の部	子規某侯の登城かな	時鳥	動物
63	明治27年	夏の部	行列の跡や先なり子規	時鳥	動物
64	明治27年	夏の部	子規御意むづかしの大名や	時鳥	動物
65	明治27年	夏の部	子規名古曽は古き関所なり	時鳥	動物
66	明治27年	夏の部	子規箱根峠の夜明かな	時鳥	動物
67	明治27年	夏の部	あけぼのゝ船頭ひとり子規	時鳥	動物
68	明治27年	夏の部	直垂の人立ちにけり子規	時鳥	動物
69	明治27年	夏の部	子規五條の橋の夜明かな	時鳥	動物
70	明治27年	夏の部	子規啼くや古墳月黒し	時鳥	動物
71	明治27年	夏の部	一峯江に落ちて青し子規	時鳥	動物
72	明治27年	夏の部	子規なくや断岸三千丈	時鳥	動物
73	明治27年	夏の部	大木の道に仆れつひきかへる	蟇	動物
74	明治27年	夏の部	草屋二軒中より出る蟇	蟇	動物
75	明治27年	夏の部	蚊遣火や親老いて子は幼し	蚊遣	人事
76	明治27年	夏の部	旅僧の軒に彳むかやりかな	蚊遣	人事
77	明治27年	夏の部	一峯高し蚊遣の里の家五六	蚊遣	人事
78	明治27年	夏の部	山々の裾はかやりの烟かな	蚊遣	人事
79	明治27年	夏の部	つく／＼と冨士見る人や五月晴	五月晴	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
80	明治27年	夏の部	五月雨や濁浪一潟三千里	五月雨	天文
81	明治27年	夏の部	五月雨の函根を越えて宿りけり	五月雨	天文
82	明治27年	夏の部	五月雨の店頭の丁稚眠りける	五月雨	天文
83	明治27年	夏の部	五月雨や翁端然として大閣記	五月雨	天文
84	明治27年	夏の部	五月雨の江戸は八百八町なり	五月雨	天文
85	明治27年	夏の部	五月雨の馬ほく／＼と東海道	五月雨	天文
86	明治27年	夏の部	葉がくれのいちご見えたる夕日かな	苺	植物
87	明治27年	夏の部	寺子らが机の上のいちごかな	苺	植物
88	明治27年	夏の部	女の子雛人形のいちごかな	苺	植物
89	明治27年	夏の部	里の子のいちごわけいり小藪道	苺	植物
90	明治27年	夏の部	乳母が手の無下に卑きいちごかな	苺	植物
91	明治27年	夏の部	蝸牛や竹縁三尺経机	蝸牛	動物
92	明治27年	夏の部	かたつむり公達のむつからせ給ふ	蝸牛	動物
93	明治27年	夏の部	蝸牛林中に入て雨晴れぬ	蝸牛	動物
94	明治27年	夏の部	蝸牛行脚の僧未だ帰らず	蝸牛	動物
95	明治27年	夏の部	翡翠の一ツ止まって小雨ふる	翡翠	動物
96	明治27年	夏の部	かはせみの飛去て池暮れんとす	翡翠	動物
97	明治27年	夏の部	百合咲くや旅僧ひとり地蔵堂	百合	植物
98	明治27年	夏の部	古塚の白百合の花咲きにけり	百合	植物
99	明治27年	夏の部	百合の花山門をくゞる女かな	百合	植物
100	明治27年	夏の部	里の子の百合の花さす地蔵かな	百合	植物
101	明治27年	夏の部	禿山を見上ぐる牛の暑さかな	暑さ	時候
102	明治27年	夏の部	炎天の村は鎮守の祭かな	炎天	天文
103	明治27年	夏の部	炎天の川原に人の声すなり	炎天	天文
104	明治27年	夏の部	炎天や十里の沙路人見えず	炎天	天文
105	明治27年	夏の部	炎天の漁人群がる川瀬かな	炎天	天文
106	明治27年	夏の部	炎天を只銅像の高きかな	炎天	天文
107	明治27年	夏の部	炎天の大杉ところ〴〵かな	炎天	天文
108	明治27年	夏の部	炎天や廣野の中の石地蔵	炎天	天文
109	明治27年	夏の部	炎天の牛引出すや村外れ	炎天	天文
110	明治27年	夏の部	炎天の大路直なる都かな	炎天	天文
111	明治27年	夏の部	炎天に立並びけり大佛	炎天	天文
112	明治27年	夏の部	炎天の川原に眠る舟子かな	炎天	天文
113	明治27年	夏の部	炎天の峠越えたるひとりかな	炎天	天文
114	明治27年	夏の部	炎天の峠を上る驛馬かな	炎天	天文
115	明治27年	夏の部	炎天を船千艘の港かな	炎天	天文
116	明治27年	夏の部	炎天を長屋／＼の鼾かな	炎天	天文
117	明治27年	夏の部	炎天の乞食ひとり眠りけり	炎天	天文
118	明治27年	夏の部	炎天の痩牛ところ〴〵かな	炎天	天文
119	明治27年	夏の部	炎天の畑中通る男かな	炎天	天文
120	明治27年	夏の部	炎天を順礼越ゆる峠かな	炎天	天文
121	明治27年	夏の部	凉しさや竹搖れて海見えにけり	凉し	時候
122	明治27年	夏の部	百萬の灯火凉し江戸の町	凉し	時候
123	明治27年	夏の部	凉しさや磯馴松かげところ〴〵	凉し	時候
124	明治27年	夏の部	凉しさや大海原を月一輪	凉し	時候
125	明治27年	夏の部	凉しさや東は海波三萬里	凉し	時候
126	明治27年	夏の部	凉しさや水橋上を越えんとす	凉し	時候
127	明治27年	夏の部	凉しさや浪とう／＼と海士が軒	凉し	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
128	明治27年	夏の部	凉しさや燈火見ゆる向川岸	凉し	時候
129	明治27年	夏の部	凉しさや夕立ながら松の月	凉し	時候
130	明治27年	夏の部	清水とく／＼晝とざしたる小村かな	清水	地理
131	明治27年	夏の部	武者一騎岩踏みならす清水かな	清水	地理
132	明治27年	夏の部	清水湧く小村の軒の草長し	清水	地理
133	明治27年	夏の部	夕顔や職人かへる薄月夜	夕顔	植物
134	明治27年	夏の部	撫子や晝静かにして鶏うたふ	撫子	植物
135	明治27年	夏の部	岨道の撫子やせて覚束な	撫子	植物
309	明治28年	夏の部	丹堊白堊若葉の中の五層樓	若葉	植物
310	明治28年	夏の部	打開く大手の門の青あらし	青嵐	天文
311	明治28年	夏の部	玉欄干釵光扇影青あらし	青嵐	天文
312	明治28年	夏の部	青嵐吹き入る海の朝日かな	青嵐	天文
313	明治28年	夏の部	大川の渦き青く蛍とぶ	螢	動物
314	明治28年	夏の部	僧入定ほたる三ツ四ツ低くとぶ	螢	動物
315	明治28年	夏の部	前栽のほたる三ツ四ツ小雨ふる	螢	動物
317	明治28年	夏の部	時鳥况んや我は夢みらく	時鳥	動物
318	明治28年	夏の部	人見えず只海山のさみだるゝ	五月雨	天文
320	明治28年	夏の部	梅雨晴のそこと定めよ須磨明石	梅雨晴	天文
321	明治28年	夏の部	柳暗く水白く水鶏なく夜かな	水鶏	動物
322	明治28年	夏の部	灯幽かに鵜飼が妻のひとり居る	鵜飼	人事
323	明治28年	夏の部	岨道や丈三尺の蛇の衣	蛇衣を脱ぐ	動物
324	明治28年	夏の部	五月雨の大佛仰ぐひとりかな	五月雨	天文
325	明治28年	夏の部	無二無三に角振立てよ蝸牛	蝸牛	動物
326	明治28年	夏の部	夕立の跡に連る白帆かな	夕立	天文
327	明治28年	夏の部	夕立の雲吹きつけぬ天主閣	夕立	天文
329	明治28年	夏の部	夕立の板東太郎六十里	夕立	天文
330	明治28年	夏の部	姫百合の覚束なげや草の中	百合	植物
331	明治28年	夏の部	今年竹瀘車の烟のすさまじや	若竹	植物
332	明治28年	夏の部	雲の峯満洲の野に崩れんとす	雲の峰	天文
333	明治28年	夏の部	雲の峯奥州五十四郡なり	雲の峰	天文
334	明治28年	夏の部	夏ころも奥の山越え出羽の海	夏衣	人事
335	明治28年	夏の部	某も貴殿も今日の暑さ哉	暑さ	時候
336	明治28年	夏の部	ゆき／＼て五十四郡の清水のまん	清水	地理
337	明治28年	夏の部	蝉なくや右は奥州左出羽	蝉	動物
338	明治28年	夏の部	野も畑もさみだれにけり牛の声	五月雨	天文
339	明治28年	夏の部	夕立やすわむら／＼と比叡の雲	夕立	天文
340	明治28年	夏の部	英雄孺子さても其後あつさかな	暑さ	時候
488	明治29年	夏の部	一山の堂塔古き若葉かな	若葉	植物
489	明治29年	夏の部	夜ほの〴〵湖の上の若葉かな	若葉	植物
490	明治29年	夏の部	さん候あれこそ田植唄にて候え	田植	人事
491	明治29年	夏の部	もの申す聞召したか子規	時鳥	動物
492	明治29年	夏の部	あな笑止山僧未だ衣を更へず	更衣	人事
493	明治29年	夏の部	衣更へて和尚来ませり此夕	更衣	人事
494	明治29年	夏の部	吾妹子が衣更へたるはづかしさ	更衣	人事
495	明治29年	夏の部	子規太郎冠者居るかやい	時鳥	動物
496	明治29年	夏の部	居は膝を容るゝに足れば青嵐	青嵐	天文
497	明治29年	夏の部	里見えて時に閑古鳥がなく	閑古鳥	動物
498	明治29年	夏の部	曉や湖上をはしる青嵐	青嵐	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
499	明治29年	夏の部	一ツ／＼いちご取出す袂かな	苺	植物
500	明治29年	夏の部	口紅の痕すさまじき暑かな	暑さ	時候
502	明治29年	夏の部	そもさんと骸骨抱く涼しさよ	涼し	時候
503	明治29年	夏の部	灯ともすは妹があたりか五月闇	五月闇	天文
505	明治29年	夏の部	五月雨の合羽今簑わらじ	五月雨	天文
506	明治29年	夏の部	城上の雲突拔かんず大幟	幟	人事
507	明治29年	夏の部	姫百合鬼百合姫百合を取る	百合	植物
508	明治29年	夏の部	引く弓の満月の如しほとゝぎす	時鳥	動物
510	明治29年	夏の部	子は痩せぬ其子の母は此夏を	夏	時候
511	明治29年	夏の部	灯涼しや白装束の巫女ひとり	涼し	時候
512	明治29年	夏の部	涼しさや水樓下る白柏子	涼し	時候
10613	明治29年	夏の部	何とせん只天地のさみだるゝ	五月雨	天文
1091	明治30年	夏の部	更へもあへず衣典するいさゝか惜し	更衣	人事
1092	明治30年	夏の部	綿ぬいで袷と申す送られつ	袷	人事
1093	明治30年	夏の部	師翁より袷と申越されける	袷	人事
1095	明治30年	夏の部	衣更へてかたみに笑めるめをとかな	更衣	人事
1097	明治30年	夏の部	急がずば松魚に後れ申すべく	鰹	動物
1099	明治30年	夏の部	心せよ毛虫の多きところあり	毛蟲	動物
1100	明治30年	夏の部	首盗むべく獄門に忍びつ子規	時鳥	動物
1101	明治30年	夏の部	頭つけば毛虫忽ちわたかまる	毛蟲	動物
1102	明治30年	夏の部	燒跡や幟もなくて日の暮るゝ	幟	人事
1103	明治30年	夏の部	廬を出でず三旬にして梅黄ばむ	梅の實	植物
1104	明治30年	夏の部	式部の君祭に見えず恨めしき	祭	人事
1105	明治30年	夏の部	一輪の牡丹切ったる月夜かな	牡丹	植物
1106	明治30年	夏の部	小さき家に白き牡丹ばかりなる	牡丹	植物
1107	明治30年	夏の部	唐代の衣冠正しき牡丹かな	牡丹	植物
1108	明治30年	夏の部	曉に主人牡丹を切りに出づ	牡丹	植物
1109	明治30年	夏の部	悉く牡丹を切て日暮れたり	牡丹	植物
1110	明治30年	夏の部	庵に臥して実となりし櫻眺め得つ	櫻の實	植物
1111	明治30年	夏の部	短夜の戀てふ歌をよみ侍る	短夜	時候
1112	明治30年	夏の部	短夜を傾城町のさわがしき	短夜	時候
1113	明治30年	夏の部	短夜を主上還御とひしめきぬ	短夜	時候
1114	明治30年	夏の部	短夜のともしつらなる港町	短夜	時候
1115	明治30年	夏の部	明易き沖の小嶋のかゝり舟	短夜	時候
1116	明治30年	夏の部	東向の磯家のともし明易き	短夜	時候
1117	明治30年	夏の部	隠者を訪へど逢はずして閑古鳥	閑古鳥	動物
1118	明治30年	夏の部	あはれ六朝の文物閑古鳥	閑古鳥	動物
1119	明治30年	夏の部	池涸れて杜若咲く埒もなし	杜若	植物
1120	明治30年	夏の部	鞭打つや卯の花こぼす執金吾	卯の花	植物
1121	明治30年	夏の部	船に寐て千里江陵青あらし	青嵐	天文
1122	明治30年	夏の部	二三本若楓あらぬ寺もなし	若楓	植物
1123	明治30年	夏の部	古道を枝さしかはす若葉かな	若葉	植物
1124	明治30年	夏の部	大澤の坡に仰ぐ青葉哉	青葉	植物
1125	明治30年	夏の部	遮るを臑でわけゆく若葉かな	若葉	植物
1126	明治30年	夏の部	はらり／＼若葉の露に首をちゞめつ	若葉	植物
1127	明治30年	夏の部	枝垂れて若葉したるを踏みつ／＼	若葉	植物
1128	明治30年	夏の部	千葉か三浦か若葉の中の旗印	若葉	植物
1129	明治30年	夏の部	若葉午にして敵営烟起るを見る	若葉	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1130	明治30年	夏の部	大砲の烟罩めつくす若葉かな	若葉	植物
1131	明治30年	夏の部	烟すこし若葉の中の砲の音	若葉	植物
1132	明治30年	夏の部	一彪の軍馬出でたり夏木立	夏木立	植物
1133	明治30年	夏の部	夜大雨す筍地を抜くこと三寸	筍	植物
1134	明治30年	夏の部	筍の最も大なるをほる	筍	植物
1135	明治30年	夏の部	筍の分野に魏あり呉蜀あり	筍	植物
1136	明治30年	夏の部	筍の斜につちくれをさくもあり	筍	植物
1137	明治30年	夏の部	夏の月を泳いで前岸に達しける	夏の月	天文
1138	明治30年	夏の部	二三十紅灯吊す納涼かな	納涼	人事
1140	明治30年	夏の部	清水あり馬をはせたる六十里	清水	地理
1141	明治30年	夏の部	昨日見してゝむしの行方を知らず	蝸牛	動物
1142	明治30年	夏の部	此日巳の刻てゝむし出づと記されし	蝸牛	動物
1143	明治30年	夏の部	てゝむしを秦王に献じ説きけらく	蝸牛	動物
1144	明治30年	夏の部	客と荘子とてゝむしを見てゐたりける	蝸牛	動物
1145	明治30年	夏の部	てゝむしや蘇秦六国の相となる	蝸牛	動物
1146	明治30年	夏の部	仐張りの仐干せば栁の花散りぬ	栁の花	植物
1147	明治30年	夏の部	貪りてなるべく僧は帰らず椎の花	椎の花	植物
1148	明治30年	夏の部	夕日赤み雨晴れつ芥子花咲出でつ	罌粟の花	植物
1149	明治30年	夏の部	魯に大に諸侯を會す瓜茄子	雑	雑
1150	明治30年	夏の部	麦の秋蘇秦茫然として帰る	麦の秋	時候
1151	明治30年	夏の部	死なばやと翁うめきつ麦の秋	麦の秋	時候
1152	明治30年	夏の部	髙時が犬をはしらす麦の秋	麦の秋	時候
1153	明治30年	夏の部	浪花なる娘下りつ麦の秋	麦の秋	時候
1154	明治30年	夏の部	よき女貧家に嫁して粽結ふ	粽	人事
1155	明治30年	夏の部	女の童の巧みに粽ゆふがあり	粽	人事
1156	明治30年	夏の部	恨むらくは妹が粽のちいさくて	粽	人事
1157	明治30年	夏の部	落人にひそかに粽まゐらせぬ	粽	人事
1158	明治30年	夏の部	妻鮓を韓非説難を作りける	鮓	人事
1159	明治30年	夏の部	すしを得つ詩人一堂に會したる	鮓	人事
1160	明治30年	夏の部	探題して公すしてふを得給ひし	鮓	人事
1161	明治30年	夏の部	七八人城中の鮓に義を結ぶ	鮓	人事
1162	明治30年	夏の部	二三子が頻りに鮓を望みける	鮓	人事
1163	明治30年	夏の部	ひとり住ですしを壓す賢なれバなり	鮓	人事
1164	明治30年	夏の部	村熟にすしを壓す因て詩を講ず	鮓	人事
1165	明治30年	夏の部	此鮓を娘孕みたる恨かな	鮓	人事
1166	明治30年	夏の部	此鮒をすしとなすべき由申せ	鮓	人事
1167	明治30年	夏の部	鮓空しく壓したる石の横はる	鮓	人事
1168	明治30年	夏の部	鮎の石重きに過ぎたらんを妹恐る	鮎	動物
1169	明治30年	夏の部	すしを壓す石を得つべく出行きぬ	鮓	人事
1170	明治30年	夏の部	思ひきやかばかり鮓のなれんとは	鮓	人事
1171	明治30年	夏の部	すし桶となすべきを得つさげ帰る	鮓	人事
1172	明治30年	夏の部	鮓を壓す石徒らに重きかな	鮓	人事
1173	明治30年	夏の部	妹瘦せて鮓石重き恨かな	鮓	人事
1174	明治30年	夏の部	すしはあらず何やら欲しう思ひける	鮓	人事
1175	明治30年	夏の部	忠義堂に鮓桶運び終りたる	鮓	人事
1176	明治30年	夏の部	鮓すこし残れるを夜さがし得つ	鮓	人事
1177	明治30年	夏の部	すしを得べく妻を厨下にはしらせつ	鮓	人事
1179	明治30年	夏の部	晋あけ易く鼡四五疋楚に奔る	短夜	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1180	明治30年	夏の部	鼡穴に詩を題し五月雨を眠る	五月雨	天文
1181	明治30年	夏の部	尽く小き蚤を逸したる	蚤	動物
1182	明治30年	夏の部	曉に関を出でたる蚤を追ふ	蚤	動物
1183	明治30年	夏の部	周易に蝿糞をしつ溺をしつ	蝿	動物
1184	明治30年	夏の部	取敢へず硯に呑まんとすなる蝿	蝿	動物
1185	明治30年	夏の部	愚なる蚊の何を以て唾壺に出沒す	蚊	動物
1186	明治30年	夏の部	西をさして曉の蚊の飛去りぬ	蚊	動物
1187	明治30年	夏の部	屋根の上の蝙蝠を射落さんず	蝙蝠	動物
1188	明治30年	夏の部	蝙蝠に弦を鳴らす徒爾なりき	蝙蝠	動物
1189	明治30年	夏の部	蝙蝠の忽然として見えずなり	蝙蝠	動物
1190	明治30年	夏の部	蝙蝠の今宵東隣より出でぬ	蝙蝠	動物
1191	明治30年	夏の部	疊三ひら敷ける廬を青あらし	青嵐	天文
1192	明治30年	夏の部	草長く水浅きところ螢多かり	螢	動物
1193	明治30年	夏の部	大なる蛍たま／＼西よりす	螢	動物
1194	明治30年	夏の部	行けど／＼清水ありとしも見えず	清水	地理
1195	明治30年	夏の部	敗軍の清水かきにごし／＼	清水	地理
1196	明治30年	夏の部	五月雨の村を犬吠え鶏鳴きぬ	五月雨	天文
1197	明治30年	夏の部	雨五月道蜀に入ること遠し	五月雨	天文
1198	明治30年	夏の部	行くが中に牛は最もさみだるゝ	五月雨	天文
1199	明治30年	夏の部	田舍路の茶屋さみだれて人もなし	五月雨	天文
1200	明治30年	夏の部	箋を展れば夕立の風吹いて来る	夕立	天文
1201	明治30年	夏の部	凉しさの枕水樓と申すあり	凉し	時候
1202	明治30年	夏の部	夕立を危樓と号すべき聳ちぬ	夕立	天文
1203	明治30年	夏の部	夕立や毫を揮へば墨淋漓	夕立	天文
1204	明治30年	夏の部	甚だ可なり試みに昼寐せん	晝寢	人事
1205	明治30年	夏の部	瓜を切れば種が三ツ四ツこぼれける	瓜	植物
1206	明治30年	夏の部	一漢の蚊に苦める古廟かな	蚊	動物
1207	明治30年	夏の部	我を蹴て足長き蚊の飛でゆく	蚊	動物
1208	明治30年	夏の部	薄暗く晝の蚊多し閻魔堂	蚊	動物
1209	明治30年	夏の部	蚊帳の中の蚊を打果す夜明かな	蚊	動物
1210	明治30年	夏の部	撃たんとして撃ち得ざりける蚊を憎む	蚊	動物
1211	明治30年	夏の部	海門や孤帆見る／＼雲の峯	雲の峰	天文
1212	明治30年	夏の部	北の方に真黒な雲の峯起る	雲の峰	天文
1213	明治30年	夏の部	銅標や靺鞨の国の雲の峯	雲の峰	天文
1214	明治30年	夏の部	夏の月をざぶ／＼と水渉り来る	夏の月	天文
1215	明治30年	夏の部	魚店と八百屋の間を夏の月	夏の月	天文
1216	明治30年	夏の部	廣き家に大きな蚊帳のほしきかな	蚊帳	人事
1217	明治30年	夏の部	山寺や蚊帳を釣らざる夜をひとり	蚊帳	人事
1218	明治30年	夏の部	明らさまに蚊帳釣てある磯家かな	蚊帳	人事
1219	明治30年	夏の部	ひとり住んで蚊帳の破れをつくろひつ	蚊帳	人事
1220	明治30年	夏の部	岳陽樓に夕立すべきけしきかな	夕立	天文
1221	明治30年	夏の部	雲の峯総の野を壓し崩れんとす	雲の峰	天文
1222	明治30年	夏の部	扇裂いて悟了と叫ぶ男かな	扇	人事
1223	明治30年	夏の部	大女郎に図扇を渡す小女郎哉	扇	人事
1224	明治30年	夏の部	赤裸々と炎天の小屋を出でゝゆく	炎天	天文
1225	明治30年	夏の部	扇の句一字を脱したる恨み	扇	人事
1226	明治30年	夏の部	團扇もちてからの女の歩み来る	扇	人事
1228	明治30年	夏の部	滝壺に膏藥洗ふ夏の旅	夏	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1229	明治30年	夏の部	女滝男滝四十八滝五月雨	五月雨	天文
1230	明治30年	夏の部	滝のそばに大きなひさごかけてあり	滝	地理
1231	明治30年	夏の部	犠牲や滝どう／＼と夕立す	滝	地理
1232	明治30年	夏の部	滝をうしろ文覚出たり夏木立	夏木立	植物
1233	明治30年	夏の部	夏山の道窮まって滝あらはれぬ	夏山	地理
1234	明治30年	夏の部	庭前に滝をつくりいで一家すゞむ	納涼	人事
1235	明治30年	夏の部	閑古鳥をきくべくとして滝の後ろに出づ	閑古鳥	動物
1236	明治30年	夏の部	滝の上に入定したり苔の花	苔の花	植物
1237	明治30年	夏の部	木下闇滝あれば則ち祠あり	木下闇	植物
1239	明治30年	夏の部	若楓小さき橋の朱欄干	若楓	植物
1241	明治30年	夏の部	喬松林を出です昼寐をしたるべく	晝寢	人事
1243	明治30年	夏の部	萩若く庭さゝやかに雨細く	萩若葉	植物
1245	明治30年	夏の部	日は斜つゝじが逕幾曲り	躑躅	植物
1247	明治30年	夏の部	岩清水の止まって潭となり午の月	清水	地理
1249	明治30年	夏の部	籬を排し薫風南山より来る	薫風	天文
1251	明治30年	夏の部	對座して中夜に杜鵑をきかまくす	時鳥	動物
1252	明治30年	夏の部	家を移し葵の多き庭を得つ	葵	植物
1253	明治30年	夏の部	人俗にして帷子を着たる行く	帷子	人事
1254	明治30年	夏の部	旅に病むで癒えたればつゆ正に晴る	梅雨	天文
1256	明治30年	夏の部	通辯をして心太を命じ異人かな	心太	人事
1257	明治30年	夏の部	左遷の道黄州を経て心太	心太	人事
1258	明治30年	夏の部	心太の必ず冷かなるを望む	心太	人事
1259	明治30年	夏の部	取敢へず心太を命じたる主從かな	心太	人事
1260	明治30年	夏の部	野に飢えて偶々心太をさがし得つ	心太	人事
1261	明治30年	夏の部	客僧の東より來つ心太	心太	人事
1262	明治30年	夏の部	浮屠の道たとへば心太の如し	心太	人事
1263	明治30年	夏の部	小盗人の心太を喰ふてゐたりける	心太	人事
1264	明治30年	夏の部	野社に心太賣る古き女	心太	人事
1265	明治30年	夏の部	心太一荷の價幾何ぞ	心太	人事
1266	明治30年	夏の部	只心太の冷かなるがあり	心太	人事
1267	明治30年	夏の部	卓上に心太の盤大なり	心太	人事
1268	明治30年	夏の部	中に心太を厭ふひとりあり	心太	人事
1269	明治30年	夏の部	招牌や水滸の店の心太	心太	人事
1270	明治30年	夏の部	真中に心太の盤を据えてあり	心太	人事
1271	明治30年	夏の部	心太に胃の腑損ひし恨かな	心太	人事
1272	明治30年	夏の部	家のうしろ灘声急にして明易き	短夜	時候
1273	明治30年	夏の部	短夜を灘上に泊す水の声	短夜	時候
1274	明治30年	夏の部	短夜や後宮の美女装ひを凝す	短夜	時候
1276	明治30年	夏の部	大旱に雲霓を望む海の上	旱	天文
1277	明治30年	夏の部	路傍の撫子折りつ／＼行く	撫子	植物
1278	明治30年	夏の部	下闇を甲冑鮮かなる出でつ	木下闇	植物
1279	明治30年	夏の部	行者ひとり冨士を下るに行逢ひつ	富士詣	人事
1280	明治30年	夏の部	はねる虫いさゝか蚤に似て非なり	蚤	動物
1282	明治30年	夏の部	夏瘦の汝を憐む人もなし	夏瘦	人事
1283	明治30年	夏の部	夏の月音樂起る鴻臚館	夏の月	天文
1284	明治30年	夏の部	水打て静かに對す木魚かな	打水	人事
1285	明治30年	夏の部	暑き日を同行凡そ四五十人	暑さ	時候
1286	明治30年	夏の部	道蠻に入り雨の日多き土用かな	土用	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1287	明治30年	夏の部	海の上を夕立の雲飛揚せり	夕立	天文
1289	明治30年	夏の部	夜道ゆけば山蛭落るあまたゝび	蛭	動物
1290	明治30年	夏の部	覇氣高く蛭が小島に夕立す	蛭	動物
1291	明治30年	夏の部	すさまじく山蛭の屍横はる	蛭	動物
1292	明治30年	夏の部	雲蒸すや泥中の蛭化けぬべく	蛭	動物
1293	明治30年	夏の部	踏迷ひ山蛭多き山に入る	蛭	動物
1294	明治30年	夏の部	瑞艸の根を湧き出づる清水かな	清水	地理
1295	明治30年	夏の部	悟了すらく鴫焼はこれ既成佛	鴫	動物
1296	明治30年	夏の部	土用干して一物を看破了	蟲干	人事
1297	明治30年	夏の部	蜩や食堂に下る法師原	蜩	動物
1298	明治30年	夏の部	癖奇なり一ツ葉の鉢并べたる	一ツ葉	植物
1299	明治30年	夏の部	坐に入て漫に汗拭を求めたり	汗拭	人事
1301	明治30年	夏の部	打磬やむで曉に蓮の白き咲く	蓮	植物
1302	明治30年	夏の部	僧房や蓮に飯喰ふ五六人	蓮	植物
1303	明治30年	夏の部	夜僧房に宿して曉に蓮を見る	蓮	植物
1304	明治30年	夏の部	繽紛と蓮花赫奕と菩薩夢	蓮	植物
1305	明治30年	夏の部	池に臨んで白蓮房と額したり	蓮	植物
1306	明治30年	夏の部	凉しさは漁戸断續のともしかな	凉し	時候
1308	明治30年	夏の部	納凉台に詩をつくるべく君帰る	納凉	人事
1310	明治30年	夏の部	大いなる芭蕉のかげに凉むべし	凉し	時候
1312	明治30年	夏の部	仰向くや昼寝の胸毛風が吹く	晝寢	人事
1314	明治30年	夏の部	納凉台を撤し恰も好きを見る	納凉	人事
1316	明治30年	夏の部	すこし飛べる蝉唖にして見えずなり	蝉	動物
1318	明治30年	夏の部	ところ〳〵蚊にさゝれたるが腫れ痛む	蚊	動物
1320	明治30年	夏の部	夙に起きて若葉に對す頭痛かな	若葉	植物
1321	明治30年	夏の部	下闇に嘯いて行く我に病あり	木下闇	植物
1322	明治30年	夏の部	眼を病むであやめの汀に下り立ちぬ	あやめ	植物
1323	明治30年	夏の部	夏の雲赤黒くして人瘧を病む	夏の雲	天文
1324	明治30年	夏の部	夏瘦を君にはをかしがらせ給ふ	夏瘦	人事
1325	明治30年	夏の部	此夏を一の君いたう瘦せ給ふ	夏瘦	人事
1326	明治30年	夏の部	蚊帳のそとのくすしとおん物語かな	蚊帳	人事
1327	明治30年	夏の部	夏瘦や君をまほに得も見給はず	夏瘦	人事
1328	明治30年	夏の部	夏瘦せて十二宮樓の人恨む	夏瘦	人事
1329	明治30年	夏の部	後宮や人夏瘦せて君王を望む	夏瘦	人事
1330	明治30年	夏の部	曉装や人夏瘦もし給はず	夏瘦	人事
1331	明治30年	夏の部	夏瘦を貧にして機による物うしや	夏瘦	人事
1332	明治30年	夏の部	病みてあれば蚊遣火焚かんよしもなし	蚊遣	人事
1333	明治30年	夏の部	病みてより長へに捲かず青簾	青簾	人事
1334	明治30年	夏の部	病床や夢に妹がりに凉みける	納凉	人事
1335	明治30年	夏の部	癰を切て少し凉しき夕かな	凉し	時候
1336	明治30年	夏の部	縁に出でゝ癰をきれば大に夕立す	夕立	天文
1337	明治30年	夏の部	主蚊遣す従者藥を得て帰る	蚊遣	人事
1338	明治30年	夏の部	足の甲の膏藥剥がす清水かな	清水	地理
1339	明治30年	夏の部	虫干や隅に堆き傷寒論	蟲干	人事
1340	明治30年	夏の部	施藥院の門に昼寐の男かな	晝寢	人事
1341	明治30年	夏の部	少し病みて顔白き彌宜の御祓哉	御祓	人事
1342	明治30年	夏の部	蚊にも堪へず藥を蚊帳の中に煮る	蚊	動物
1343	明治30年	夏の部	夕立や雷落ちてより頭痛やむ	夕立	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1344	明治30年	夏の部	清水汲んで主の創口を洗ひける	清水	地理
1345	明治30年	夏の部	夏六月南方瘴癘の地に陣す	六月	時候
1346	明治30年	夏の部	扁鵲が君に葛水を奉る	葛水	人事
1347	明治30年	夏の部	川狩に何ぞ疝氣を恐れんや	川狩	人事
1348	明治30年	夏の部	病僧の蓮の汀を徘徊す	蓮	植物
1349	明治30年	夏の部	赤き幣と鮓供へたり痘の神	鮓	人事
1350	明治30年	夏の部	道連の漢藥を説く夏野かな	夏野	地理
1351	明治30年	夏の部	妻もなき夏書の男病みほうけ	夏書	人事
1352	明治30年	夏の部	用ゐられず帰て病みつ麦の秋	麦の秋	時候
1353	明治30年	夏の部	背に疽を発して憤る蚊帳の中	蚊帳	人事
1354	明治30年	夏の部	病める人の早瓜ほしとぞ申越す	瓜	植物
1355	明治30年	夏の部	枕元の藥瓶に蝿たかりたる	蝿	動物
1356	明治30年	夏の部	路にして暑さに病むと郵便す	暑さ	時候
1357	明治30年	夏の部	病院の門に集へる日仐かな	日傘	人事
1358	明治30年	夏の部	病院の窓あけて見る若葉かな	若葉	植物
1359	明治30年	夏の部	臨月に衣更へたる女かな	更衣	人事
1360	明治30年	夏の部	夏瘦せて異人の妻の医師を訪ふ	夏瘦	人事
1361	明治30年	夏の部	看護婦の白き衣や夏衣	夏衣	人事
1362	明治30年	夏の部	此夏を諸国大いに疫をやむ	夏	時候
1363	明治30年	夏の部	病臥して夢あしき夜半を子規	時鳥	動物
1364	明治30年	夏の部	蚊帳を出でつ国歩艱難にして吾病めり	蚊帳	人事
1365	明治30年	夏の部	あるじ病みて卯の花垣根しどろなり	卯の花	植物
1366	明治30年	夏の部	明けやすき夜を苦しげに咳嗽す	短夜	時候
1367	明治30年	夏の部	戀に病みて音をのみぞ泣く祭かな	祭	人事
1368	明治30年	夏の部	短夜を心中ありと呼はりぬ	短夜	時候
1369	明治30年	夏の部	後宮の人夏瘦せて曉装す	夏瘦	人事
1370	明治30年	夏の部	四十雀の五十雀と呼ばるゝ恨かな	雑	雑
1371	明治30年	夏の部	目白去って頬赤来る日向かな	雑	雑
2262	明治31年	夏の部	藤の葉の窓にかぶさり夏に入る	夏	時候
2264	明治31年	夏の部	だぶ／＼と浴せかけたる甘茶かな	甘茶	人事
2265	明治31年	夏の部	佛さまの産湯貰ひに参らうぞ	仏生会	人事
2266	明治31年	夏の部	子規夜舩に上る蜀の客	時鳥	動物
2268	明治31年	夏の部	水打て松籟起る四睡の図	打水	人事
2269	明治31年	夏の部	妹がりを卯の花くだしたそがるゝ	卯の花腐し	天文
2270	明治31年	夏の部	水打てば泥亀の首ちゞめたる	打水	人事
2271	明治31年	夏の部	碁に倦むで餘花にあけたる小窓哉	餘花	植物
2273	明治31年	夏の部	老いし妓の衣更へたり鼡色	更衣	人事
2275	明治31年	夏の部	町中に地車を押す暑さか那	暑さ	時候
2276	明治31年	夏の部	薔薇園のせうび買ひたる異人哉	薔薇	植物
2278	明治31年	夏の部	百姓の筍を送る家例か那	筍	植物
2279	明治31年	夏の部	筍の分野爭ふきほひか那	筍	植物
2280	明治31年	夏の部	薮小さく筍痩せて伸びてけり	筍	植物
2281	明治31年	夏の部	筍の杉の木の間に伸びてけり	筍	植物
2282	明治31年	夏の部	筍の皮棄てに出づ小川か那	筍	植物
2283	明治31年	夏の部	縁先に筍の土こぼれけり	筍	植物
2284	明治31年	夏の部	筍を掘りをれば竹の雫か那	筍	植物
2285	明治31年	夏の部	竹薮に筍盗む男か那	筍	植物
2286	明治31年	夏の部	七賢の筍飯に會したる	筍	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2287	明治31年	夏の部	筍を盗む竹原月夜か那	筍	植物
2288	明治31年	夏の部	筍に妙なる僧や一ト筆画	筍	植物
2289	明治31年	夏の部	去年買ひし筍賣の来りけり	筍	植物
2290	明治31年	夏の部	筍の伸びたきまゝに伸びにけり	筍	植物
2292	明治31年	夏の部	尼寺に少しばかり咲く紅の花	紅花	植物
2293	明治31年	夏の部	雨蛙宮の森より暮れかゝる	雨蛙	動物
2294	明治31年	夏の部	垣越に水打つ女ちょと見えし	打水	人事
2295	明治31年	夏の部	美少年の名ありかすりの單物	単衣	人事
2296	明治31年	夏の部	さしみ皿にいさゝかの蓼緑なり	蓼	植物
2297	明治31年	夏の部	けふの日の午の刻よりついりかな	梅雨	天文
2299	明治31年	夏の部	狼狽の孑孑沈むをかしけり	孑孑	動物
2300	明治31年	夏の部	目すゞしく眉秀でたるが夏書か那	夏書	人事
2301	明治31年	夏の部	道場の昼鎖したるあふちか那	楝の花	植物
2302	明治31年	夏の部	馬を下りて床几涼しさや磯馴松	涼し	時候
2303	明治31年	夏の部	凉風に画箋展べたる二階か那	凉風	天文
2304	明治31年	夏の部	短夜の雨戸あけたる二階か那	短夜	時候
2305	明治31年	夏の部	二階かりて画師がこもりぬ五月雨	五月雨	天文
2307	明治31年	夏の部	鱗形の雲うらゝかや湖の上	麗	時候
2308	明治31年	夏の部	日蝕の雲黄色なり秋の水	秋の水	地理
2309	明治31年	夏の部	油繪や秋日田家雲の色	秋の日	天文
2310	明治31年	夏の部	雨雲の蔽ひかさなる若葉哉	若葉	植物
2311	明治31年	夏の部	浴みして衣かへて山の雲を見る	更衣	人事
2312	明治31年	夏の部	太陽の雲割て出るあつさ哉	暑さ	時候
2313	明治31年	夏の部	巖上の雲の影落つ清水哉	清水	地理
2314	明治31年	夏の部	秋立つや峠の茶屋のあけの雲	立秋	時候
2315	明治31年	夏の部	師が活けし裁縫室のあやめ哉	あやめ	植物
2316	明治31年	夏の部	當直に女生徒あやめ持ち来る	あやめ	植物
2317	明治31年	夏の部	清水酌みに松脂臭き翁哉	清水	地理
2318	明治31年	夏の部	飯喰ふて納凉に出たる旅篭か那	納凉	人事
2319	明治31年	夏の部	炎天の砂利道きしる車か那	炎天	天文
2320	明治31年	夏の部	日盛の天井低き二階か那	日盛	天文
2321	明治31年	夏の部	嵩高にぼろ負ふてゆく暑か那	暑さ	時候
2322	明治31年	夏の部	麦酒盆に麦酒水菓子納凉台	雑	雑
2323	明治31年	夏の部	葉柳の窓打拂ふ雫かな	夏柳	植物
2324	明治31年	夏の部	凉風や紗の窓掛を吹きまくり	凉風	天文
2325	明治31年	夏の部	短夜を語明かしてしまひけり	短夜	時候
2326	明治31年	夏の部	凉しさの尺八吹いて橋を行く	凉し	時候
2327	明治31年	夏の部	川風の蛍吹き入る裏二階	螢	動物
2328	明治31年	夏の部	葉柳に蛍の篭を吊しけり	雑	雑
2329	明治31年	夏の部	鉦太皷野に見世物の小屋あつし	暑さ	時候
2330	明治31年	夏の部	樂隊の森を出て来る夕凉し	凉し	時候
2331	明治31年	夏の部	川風の蝋燭を吹く凉しかり	凉し	時候
2332	明治31年	夏の部	壇上に蚊も寄りつかぬ咒文か那	蚊	動物
2333	明治31年	夏の部	虫干の古繪に夕日壇の浦	蟲干	人事
2334	明治31年	夏の部	短夜の陸地見えたる舩路哉	短夜	時候
2335	明治31年	夏の部	葉柳の月に稽古やくさり鎌	夏柳	植物
2961	明治32年	夏の部	羽あり飛ぶ堂のうしろや日の落つる	羽蟻	動物
2962	明治32年	夏の部	水の上に羽蟻飛行く夜明かな	羽蟻	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2963	明治32年	夏の部	羽蟻とぶ葭の簾や縄朽ちし	羽蟻	動物
2964	明治32年	夏の部	松風に羽蟻吹かるゝ茶店かな	羽蟻	動物
2965	明治32年	夏の部	夥しき羽ありの庭や雨上り	羽蟻	動物
2966	明治32年	夏の部	樟の根に神ともならで羽蟻哉	羽蟻	動物
2967	明治32年	夏の部	日は赫と羽あり画棟に飛上る	羽蟻	動物
2968	明治32年	夏の部	竹縁に飛ばぬ羽蟻や經机	羽蟻	動物
2969	明治32年	夏の部	羽ありとんで紫の花にとまりけり	羽蟻	動物
2970	明治32年	夏の部	羽生へて飛出すありの思ひかな	羽蟻	動物
2971	明治32年	夏の部	羽ありとぶ樒の上や日の光り	羽蟻	動物
2972	明治32年	夏の部	水打てば羽蟻飛つく草の上	羽蟻	動物
2974	明治32年	夏の部	五畝の畑に藍も植ゑけり雨多き	藍蒔く	人事
2975	明治32年	夏の部	草取るや藍に撫子のこぼれ咲き	雑	雑
2976	明治32年	夏の部	藍痩せて蓼丈高き畑かな	蓼	植物
2977	明治32年	夏の部	草の中に藍もまじりて草の中	藍	植物
2978	明治32年	夏の部	藍苗の畑まで鶏の遊びけり	藍蒔く	人事
2979	明治32年	夏の部	藍うゑて古きかめなど畑の隅	藍蒔く	人事
2980	明治32年	夏の部	山中や悉く藍をうゑし畑	藍蒔く	人事
2981	明治32年	夏の部	商人を泊めたる宿や藍畑	藍	植物
2982	明治32年	夏の部	照りつゞく藍の畑のほこりかな	藍	植物
2983	明治32年	夏の部	出水の藍の畑をひたしけり	藍	植物
2984	明治32年	夏の部	藍多く山路曇りし他國かな	藍	植物
2986	明治32年	夏の部	大木のしだれ櫻や実の多き	櫻の實	植物
2987	明治32年	夏の部	夢に見し実櫻となる故郷かな	櫻の實	植物
2988	明治32年	夏の部	試みにさくらの実かむちょと渋き	櫻の實	植物
2989	明治32年	夏の部	実ざくらを見上る庭や知らぬ鳥	櫻の實	植物
2990	明治32年	夏の部	庭のさくらに鳥の女夫や実をこぼす	櫻の實	植物
2991	明治32年	夏の部	中庭や池にさくらの実が熟す	櫻の實	植物
2992	明治32年	夏の部	柵結ひて実も結ばざる桜かな	櫻の實	植物
2993	明治32年	夏の部	実取る子のさくらに上る岐れ枝	櫻の實	植物
2994	明治32年	夏の部	桜子や烏飛起つ宮まうで	櫻の實	植物
2995	明治32年	夏の部	桜の実自から落つる山路かな	櫻の實	植物
2997	明治32年	夏の部	皃吹くや若葉の山に人上る	若葉	植物
2998	明治32年	夏の部	山の井に若葉かぶさり祠かな	若葉	植物
2999	明治32年	夏の部	堂荒て鐘にさし出し若葉哉	若葉	植物
3000	明治32年	夏の部	舞殿や若葉の雫吹きつくる	若葉	植物
3001	明治32年	夏の部	石逕の故郷に近き若葉哉	若葉	植物
3002	明治32年	夏の部	学室の若葉月夜や若法師	若葉	植物
3003	明治32年	夏の部	若葉して閒に人住む庵かな	若葉	植物
3004	明治32年	夏の部	若葉を出で岩鼻に立つ微風哉	若葉	植物
3005	明治32年	夏の部	知らぬ木や若葉の中に白き花	若葉	植物
3006	明治32年	夏の部	石逕を蛇の横ぎる若葉かな	若葉	植物
3008	明治32年	夏の部	かはせみの嘴をのがれし小魚かな	翡翠	動物
3009	明治32年	夏の部	かはせみの小魚落しぬ藤の棚	翡翠	動物
3010	明治32年	夏の部	かはせみや水緑なる朝月夜	翡翠	動物
3011	明治32年	夏の部	かはせみや汀飛び起つ草のゆれ	翡翠	動物
3012	明治32年	夏の部	翡翠や芦四五本に夜明けたる	翡翠	動物
3013	明治32年	夏の部	たま／＼や翡翠飛去る浅き水	翡翠	動物
3014	明治32年	夏の部	かはせみのとまる一本柳かな	翡翠	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3015	明治32年	夏の部	山陰やかはせみ去て暮るゝ池	翡翠	動物
3016	明治32年	夏の部	かはせみや魚ひそみたる柳の根	翡翠	動物
3017	明治32年	夏の部	小さき洲にかはせみ止り朝の雨	翡翠	動物
3018	明治32年	夏の部	かはせみのとまる巖や草すこし	翡翠	動物
3019	明治32年	夏の部	かはせみや水紋をなす淵の色	翡翠	動物
3020	明治32年	夏の部	かはせみの羽より雫したゝりし	翡翠	動物
3021	明治32年	夏の部	板塀や芭蕉玉巻く比叡の雲	芭蕉玉巻	植物
3022	明治32年	夏の部	門口や柿の花ちる油うり	柿の花	植物
3023	明治32年	夏の部	漣や岩を離れぬ羽ぬけ鴨	羽抜鳥	動物
3024	明治32年	夏の部	大比叡の雲に芭蕉の巻葉哉	芭蕉玉巻	植物
3025	明治32年	夏の部	一八の屋根に鳶舞ふ日和哉	一八	植物
3026	明治32年	夏の部	神前や蓮の浮葉に灯のうつる	蓮の浮葉	植物
3027	明治32年	夏の部	戸明くるや蚊がとんで行く明の星	蚊	動物
3028	明治32年	夏の部	取出す袷わびしや酒の痕	袷	人事
3029	明治32年	夏の部	祭すぎて葵をはさむ歌集かな	葵	植物
3030	明治32年	夏の部	盤石や雫したゝる桐の花	桐の花	植物
3031	明治32年	夏の部	一門の神草かざす祭かな	祭	人事
3032	明治32年	夏の部	親よ子よ瓜や茄子の花盛り	雑	雑
3033	明治32年	夏の部	繪日今の京には清き流あり	日傘	人事
3035	明治32年	夏の部	穂麦わけて舞子の濵に出でしかな	麥	植物
3036	明治32年	夏の部	弟子僧のしばし交りぬ印地打	印地打	人事
3037	明治32年	夏の部	初なりの胡瓜うれしや朝の雨	瓜	植物
3038	明治32年	夏の部	枝蛙苔に落ちけり古き石	雨蛙	動物
3039	明治32年	夏の部	乘合や人の戀きく虎が雨	虎が雨	天文
3040	明治32年	夏の部	破産して穂麦の國を出づるかな	麥	植物
3041	明治32年	夏の部	牡丹亭に画箋を展べし唐子かな	牡丹	植物
3042	明治32年	夏の部	衣更へて舟に上りぬ曉の風	更衣	人事
3043	明治32年	夏の部	灌佛の甘茶冷めたし暮の雲	仏生会	人事
3044	明治32年	夏の部	石竹の露こぼれけり白き砂	石竹	植物
3045	明治32年	夏の部	摘み残す茶の木の雨や夏に入る	夏	時候
3047	明治32年	夏の部	鶯の虎渓に老いし別かな	鶯	動物
3048	明治32年	夏の部	大矢数馬乘りすてし小殿原	矢數	人事
3049	明治32年	夏の部	火串消えて草吹く風や曉近し	照射	人事
3050	明治32年	夏の部	拔出でゝ河骨咲くや金氣水	河骨	植物
3051	明治32年	夏の部	青梅や草の中なる古き幹	梅の實	植物
3052	明治32年	夏の部	鵜遣ひの物も云はざる愚かな	鵜飼	人事
3053	明治32年	夏の部	漣や松葉散落つ水の上	松落葉	植物
3054	明治32年	夏の部	葉柳や水ひた／＼と出町橋	夏柳	植物
3055	明治32年	夏の部	日のもるゝ松の落葉や南禅寺	松落葉	植物
3056	明治32年	夏の部	紫や水に雨ふる杜若	杜若	植物
3057	明治32年	夏の部	麦の穂や逢坂山に関もなし	麥	植物
3058	明治32年	夏の部	鶯の老いしも知らず泣音かな	老鶯	動物
3059	明治32年	夏の部	草臥れし穂麦の路や寺に入る	麥	植物
3060	明治32年	夏の部	湖も見えて玉巻く芭蕉緑なり	芭蕉玉巻	植物
3061	明治32年	夏の部	てふ／＼の松をはなれて浜辺かな	蝶	動物
3062	明治32年	夏の部	須磨の家の背戸は名所や麦の風	麥	植物
3063	明治32年	夏の部	青嵐須磨をはなるゝ船屋形	青嵐	天文
3065	明治32年	夏の部	耕すやげんげ色濃き水たまり	げんげ	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3066	明治32年	夏の部	嵯峨村に旧蹟多し竹の秋	竹の秋	植物
3068	明治32年	夏の部	したゝりや雲の音きく石の上	滴り	地理
3070	明治32年	夏の部	したゝりの筏下るや大堰川	滴り	地理
3071	明治32年	夏の部	年々を鮎の子上る行方哉	鮎	動物
3072	明治32年	夏の部	蕩漾の若葉の上や鮎のぼる	雑	雑
3074	明治32年	夏の部	野々宮は竹落葉するばかりなり	竹落葉	植物
3076	明治32年	夏の部	さら／＼と屋根はしる竹の落葉かな	竹落葉	植物
3077	明治32年	夏の部	雪隠や昔の窓の栃若葉	栃若葉	植物
3079	明治32年	夏の部	草の中に墓さがし得つ羽蟻とぶ	羽蟻	動物
3081	明治32年	夏の部	撞鐘のほとりに松の落葉かな	松落葉	植物
3083	明治32年	夏の部	嵯峨の山に鐘聞えけり松葉散る	松落葉	植物
3085	明治32年	夏の部	かくや／＼神輿かきゆく若葉かな	若葉	植物
3087	明治32年	夏の部	閼伽酌むで若葉見上る目はすずし	若葉	植物
3089	明治32年	夏の部	踏分くる野ばらの花や脛痒し	薔薇	植物
3091	明治32年	夏の部	古井に枝蛙落つ泗ぎかな	雨蛙	動物
3093	明治32年	夏の部	日にやけし馬士もまじるや御身拭	日焼	人事
3095	明治32年	夏の部	廣澤や真菰の上の昼の月	真菰	植物
3096	明治32年	夏の部	水湧くや物なつかしき苔の花	苔の花	植物
3097	明治32年	夏の部	蓴菜の花咲く池となりにけり	蓴菜	植物
3098	明治32年	夏の部	蓴とる舟の小唄や宵月夜	蓴菜	植物
3099	明治32年	夏の部	病葉の下にあやしき祠かな	病葉	植物
3100	明治32年	夏の部	椎咲くや油に黒む石灯篭	椎の花	植物
3101	明治32年	夏の部	谷川や石に魚見る百合の花	百合	植物
3102	明治32年	夏の部	宿おりの女訪ひよる粽かな	粽	人事
3103	明治32年	夏の部	宿下りの粽結ひけり五年ぶり	粽	人事
3104	明治32年	夏の部	さらし場に花咲く草の雫かな	晒布	人事
3105	明治32年	夏の部	日蝕の人群るゝなり麦の秋	麦の秋	時候
3106	明治32年	夏の部	生節に木葉かけたり舟がつく	生節	人事
3107	明治32年	夏の部	蕗切って旦の汁に投じけり	蕗	植物
3108	明治32年	夏の部	水のんで蕗の葉すつる山路哉	蕗	植物
3109	明治32年	夏の部	金銀の氣を吹く山の清水哉	清水	地理
3110	明治32年	夏の部	湖も見えて寺に玉巻く芭蕉哉	芭蕉玉巻	植物
3111	明治32年	夏の部	常盤木や落葉吹散る力餅	常盤木落葉	植物
3112	明治32年	夏の部	境内や銀杏若葉す神の水	若葉	植物
3113	明治32年	夏の部	御祭の鬢髪白き葵かな	葵	植物
3114	明治32年	夏の部	木の間より引き出でにけり競馬	競馬	人事
3115	明治32年	夏の部	葉柳の橋にせまりし神輿かな	夏柳	植物
3116	明治32年	夏の部	觀音や若楓透く日の光り	若楓	植物
3117	明治32年	夏の部	尼が愛す萩の若葉や清閑寺	萩若葉	植物
3119	明治32年	夏の部	官人のよき帷子や椰子の下	帷子	人事
3120	明治32年	夏の部	帷子を浣ふあしたの流か那	帷子	人事
3121	明治32年	夏の部	帷子に草の香のぼる故郷か那	帷子	人事
3122	明治32年	夏の部	人の娘帷子を着て宿下り	帷子	人事
3124	明治32年	夏の部	草の上にはら／＼雨や百合の花	百合	植物
3125	明治32年	夏の部	水湧くや草の葉末の雲の峯	雲の峰	天文
3126	明治32年	夏の部	麦藁の帽吹かれけり水の上	夏帽子	人事
3127	明治32年	夏の部	雲濕ふ保津の川瀬や夏木立	夏木立	植物
3128	明治32年	夏の部	打水にぬれし茶店の柱かな	打水	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3130	明治32年	夏の部	うゑまぜや紫陽花も咲く異種	紫陽花	植物
3131	明治32年	夏の部	山科の田植さびしや竹の風	田植	人事
3132	明治32年	夏の部	草衣を并木にかけし裸かな	裸	人事
3133	明治32年	夏の部	闇涼し草の根をゆく水の音	涼し	時候
3135	明治32年	夏の部	曉の杉に星見る蚊帳の中	蚊帳	人事
3137	明治32年	夏の部	藍うゑし畑に水引く微風かな	藍蒔く	人事
3139	明治32年	夏の部	麦刈て近江の湖の碧きかな	麦刈	人事
3141	明治32年	夏の部	木の間より湖の風吹く田植哉	田植	人事
3143	明治32年	夏の部	凉風の投網の水にぬれしかな	雑	雑
3145	明治32年	夏の部	太閤の千疊敷や茶摘歌	茶摘	人事
3147	明治32年	夏の部	山門や椎の花散る黄檗寺	椎の花	植物
3148	明治32年	夏の部	萬木の濕ふ山や五月雲	梅雨雲	天文
3150	明治32年	夏の部	凉しけや角なき鹿の草に臥す	涼し	時候
3151	明治32年	夏の部	大佛を見れば凉しき男哉	涼し	時候
3152	明治32年	夏の部	蘭を植ゑし愚庵に帰る雲凉し	涼し	時候
3153	明治32年	夏の部	狗ころと和尚と似たり夕すゞみ	納涼	人事
3154	明治32年	夏の部	水に散る神輿洗のかゞり哉	神輿洗い	人事
3155	明治32年	夏の部	飄々と神輿を洗ふ袖凉し	神輿洗い	人事
3156	明治32年	夏の部	水を吹いて鱠に到る風凉し	涼し	時候
3158	明治32年	夏の部	梅干にかしま立する翁かな	梅干す	人事
3159	明治32年	夏の部	木立出づる清き流や夏神樂	夏神樂	人事
3160	明治32年	夏の部	午近く土用の雲の起りけり	土用	時候
3161	明治32年	夏の部	散尽すねむの花見る病哉	合歓の花	植物
3162	明治32年	夏の部	塗盆の水したゝるや夏氷	氷水	人事
3163	明治32年	夏の部	空蝉や土をつかんで寂莫と	空蝉	動物
3164	明治32年	夏の部	月代や川狩の舟遡る	川狩	人事
3165	明治32年	夏の部	草の根に漣立つや水馬	水馬	動物
3166	明治32年	夏の部	雨乞の修験者谷に下りけり	雨乞	人事
3167	明治32年	夏の部	青鷺の東に飛ぶや曉の空	青鷺	動物
3169	明治32年	夏の部	水涼し顔をあぐれば東山	涼し	時候
3170	明治32年	夏の部	賣りに出る青蕃椒一荷かな	青唐辛子	植物
3171	明治32年	夏の部	芋の葉や角大豆の花あだにして	ささげ	植物
3172	明治32年	夏の部	朝起の小便したる青田かな	青田	地理
3173	明治32年	夏の部	岩の下を水流れけり青すゝき	青芒	植物
3174	明治32年	夏の部	鮎賣の水こぼしたる山路かな	鮎	動物
3175	明治32年	夏の部	醤油賣の吾に先だつ夏野哉	夏野	地理
3176	明治32年	夏の部	夏草に温泉の烟立つ軒端かな	夏草	植物
3177	明治32年	夏の部	草の上に帽子おきたる清水かな	清水	地理
3178	明治32年	夏の部	木の枝に脱ぎてかけたり夏羽織	夏羽織	人事
3179	明治32年	夏の部	墓の木に巣を張る蛛や苔の花	苔の花	植物
3180	明治32年	夏の部	雲帰る寺の昼寐の枕かな	晝寢	人事
3181	明治32年	夏の部	虫干の尼もあはれや寂光院	蟲干	人事
3182	明治32年	夏の部	夏艸に瀧のしぶきや白き花	夏草	植物
3183	明治32年	夏の部	瀧にすずみ山蟻に臑さゝれけり	納涼	人事
3829	明治33年	夏の部	青すたれ餘花に閑なる庭の雨	餘花	植物
3830	明治33年	夏の部	方丈は眼さめ玉はず蓮の寺	蓮	植物
3831	明治33年	夏の部	名所の草も蛍も賣られけり	螢	動物
3832	明治33年	夏の部	晝顔の花小さくぞ咲出でし	晝顔	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3833	明治33年	夏の部	子子や花一つ咲く燕子花	子子	動物
3834	明治33年	夏の部	鵜籌も淋くなりぬ御還幸	鵜飼	人事
3835	明治33年	夏の部	虫干や山寺覗く小嘍囉	蟲干	人事
3836	明治33年	夏の部	雨乞や日は赫々と照り渡り	雨乞	人事
3837	明治33年	夏の部	晒井のよき水たまる旦かな	井戸替え	人事
3838	明治33年	夏の部	火を焚くや烟もれ出る夏木立	夏木立	植物
3839	明治33年	夏の部	武者修業或は照射したりけり	照射	人事
3840	明治33年	夏の部	照射してひとりの母を養へり	照射	人事
3841	明治33年	夏の部	ともしして邪氣を受けたる病哉	照射	人事
3842	明治33年	夏の部	照射する男こわがり駕篭の中	照射	人事
3843	明治33年	夏の部	頭巾取って名告合たる照射哉	照射	人事
3844	明治33年	夏の部	ともしして戻る男や子を愛す	照射	人事
3845	明治33年	夏の部	草むらに大蛇を見たる火串哉	照射	人事
3846	明治33年	夏の部	火串して駆落者と見たりけり	照射	人事
3847	明治33年	夏の部	照射して犠牲をけんず山の神	照射	人事
3848	明治33年	夏の部	頭巾取れバ美少年なりねらひ狩	照射	人事
3849	明治33年	夏の部	夢に見し木立の中の百合の花	百合	植物
3850	明治33年	夏の部	百合多き小嶋に神を祀りけり	百合	植物
3851	明治33年	夏の部	岩蔭に小さく咲きたり百合の花	百合	植物
3852	明治33年	夏の部	百合活けて簾に風を遮りぬ	百合	植物
3853	明治33年	夏の部	百合の花折り持ちて暮山を下る	百合	植物
3854	明治33年	夏の部	炭かまの跡の泉や百合の花	百合	植物
3855	明治33年	夏の部	青芒は馬に喰はれぬ百合の花	百合	植物
3856	明治33年	夏の部	山百合のはなべらを打つ小蛇かな	百合	植物
3857	明治33年	夏の部	夜遊ぶ女の神や百合の花	百合	植物
3858	明治33年	夏の部	谷川を越えて逕の百合の花	百合	植物
3859	明治33年	夏の部	佛法を謗って河豚と生れけん	河豚	動物
3860	明治33年	夏の部	佛像に対して奈良の春寒し	春寒	時候
3861	明治33年	夏の部	元日の佛にともす老となり	元日	時候
3862	明治33年	夏の部	灌佛や見上ぐれば皆若葉山	仏生会	人事
3863	明治33年	夏の部	雨のほとけそゞろに寒きおん姿	寒さ	時候
3864	明治33年	夏の部	川中の石の名所や青芒	青芒	植物
10515	明治33年	夏の部	名の知れぬ墓の乱れて苔の花	苔の花	植物
10521	明治33年	夏の部	扇置く亭の遊びや夜に入り	扇	人事
10563	明治33年	夏の部	哀への蛍あはれむ閏月	蛍	植物
10514	明治33年	夏の部	松杉聞く沼青々として閑古鳥	閑古鳥	動物
10547	明治33年	夏の部	野の草の折んとぞ思ふ花もなし	野の草	植物
10557	明治33年	夏の部	天風は後れて來る清水かな	清水	地理
10558	明治33年	夏の部	轉宅の物の花もなき土用かな	土用	時候
10559	明治33年	夏の部	清國の内亂をきく晝寐かな	晝寐	人事
10560	明治33年	夏の部	新宅に雨よろこぶ青田かな	青田	地理
10561	明治33年	夏の部	釣床や下を流るゝ水の石	釣床	人事
10564	明治33年	夏の部	糞舟の野川を下り雲の峰	雲の峰	天文
4021	明治34年	夏の部	青簾捲かんも物ぞ憂かりける	青簾	人事
4022	明治34年	夏の部	明易き旗へんほんとひるがへり	短夜	時候
4023	明治34年	夏の部	緑袍の人に逢ひけり毛虫の精	毛蟲	動物
4024	明治34年	夏の部	くたびれて皆寐入りたる清水かな	清水	地理
4025	明治34年	夏の部	風邪の氣の物ほしからず夏蜜柑	夏蜜柑	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4026	明治34年	夏の部	白藤や昔女のうらみ塚	藤の花	植物
4027	明治34年	夏の部	一ツ新茶一袋去来より	新茶	人事
4028	明治34年	夏の部	染物の淺黄萠黄や花卯木	卯の花	植物
4029	明治34年	夏の部	葉櫻や射反らしたる白羽の矢	葉櫻	植物
4030	明治34年	夏の部	辨慶の髭もそりたる袷哉	袷	人事
4031	明治34年	夏の部	卽景の茄子俗なり俳諧師	茄子	植物
4032	明治34年	夏の部	蕗の葉を披けば水の流哉	蕗	植物
4033	明治34年	夏の部	大澤の蕗のしげりや電光	雜	雜
4034	明治34年	夏の部	蕗の香のいやしからざる料理哉	蕗	植物
4035	明治34年	夏の部	鮓おして市の心に遠さかり	鮓	人事
4036	明治34年	夏の部	絵紙賣る大津の店や藤の花	藤の花	植物
4037	明治34年	夏の部	夕市の店の鱸や月上る	鱸	動物
4038	明治34年	夏の部	玫瑰の花咲いて海碧りなり	玫瑰	植物
4039	明治34年	夏の部	日の透くや柿の花ちる柿林	柹の花	植物
4040	明治34年	夏の部	少年の夏帽ぬぎし目すゞし	夏帽子	人事
4041	明治34年	夏の部	紫陽花に取乱したる妬かな	紫陽花	植物
4042	明治34年	夏の部	青天に秀でゝ桐の花咲きぬ	桐の花	植物
4043	明治34年	夏の部	冷やかな香薷舐りぬたかむしろ	簟	人事
4044	明治34年	夏の部	蚊を打て物狂はしき修法哉	蚊	動物
4045	明治34年	夏の部	虎を待てば風も起りぬほととぎす	時鳥	動物
4046	明治34年	夏の部	卯の花のうしと見る世や仮住ゐ	卯の花	植物
4047	明治34年	夏の部	蝸牛の静かに物の花を見る	蝸牛	動物
4048	明治34年	夏の部	菩提とは清水の如き心かな	清水	地理
4049	明治34年	夏の部	一面に花咲く苔や雲の影	苔の花	植物
4051	明治34年	夏の部	物云へば共に愚かにして凉し	凉し	時候
4052	明治34年	夏の部	抱篭の夢凡ならず覚えけり	竹夫人	人事
4053	明治34年	夏の部	瓜茄子ころがり合へるえにし哉	雜	雜
4054	明治34年	夏の部	狂歌師の買ひむさぼりぬ初茄子	茄子	植物
4055	明治34年	夏の部	振袖の露を厭ひぬ釣忍	釣忍	人事
4056	明治34年	夏の部	夕立の小鮒や草にはね上る	夕立	天文
4057	明治34年	夏の部	元禄の古茶天明の新茶哉	雜	雜
4058	明治34年	夏の部	わびしさの鮓を探て味噌を得つ	鮓	人事
4059	明治34年	夏の部	山百合や故郷人の草を刈る	百合	植物
4060	明治34年	夏の部	草蝉の百合に取りつく小鳴哉	百合	植物
4061	明治34年	夏の部	さぶしくもあるか月夜の百合の花	百合	植物
4062	明治34年	夏の部	百合活けて座を起去りぬ五尺程	百合	植物
4063	明治34年	夏の部	たきものゝ一間や昼寐しておはす	晝寢	人事
4064	明治34年	夏の部	滝殿を下り來る人やたきものす	滝殿	人事
4065	明治34年	夏の部	殺生の関白殿や時鳥	時鳥	動物
4066	明治34年	夏の部	つゝじ咲く傍に草木もなかりけり	躑躅	植物
4067	明治34年	夏の部	よき水に眼あかるき若葉哉	若葉	植物
4068	明治34年	夏の部	渋茶汲む娘梅干す媼哉	梅干す	人事
4069	明治34年	夏の部	目に青葉松魚は下司の新茶哉	雜	雜
4070	明治34年	夏の部	夏霞草の戸越の湖の上	夏霞	天文
4071	明治34年	夏の部	大徳の拂子や蝿も寄りつかず	蝿	動物
4072	明治34年	夏の部	夏草の茂きが中の軒端かな	夏草	植物
4073	明治34年	夏の部	新妻の鏡臺の上や紅扇	扇	人事
4074	明治34年	夏の部	藥湯のさめてしまひぬ夏の月	夏の月	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4075	明治34年	夏の部	金碧の額の古びや蓮の亭	蓮	植物
4076	明治34年	夏の部	蒓菜の花の盛を夕立かな	夕立	天文
4077	明治34年	夏の部	心中の沙汰も久しや橋納涼	納涼	人事
4078	明治34年	夏の部	川上の空に夜振のあかり哉	夜振	人事
4079	明治34年	夏の部	行き／＼て日仐かくれし野末かな	日傘	人事
4080	明治34年	夏の部	戀もなき草刈共や虎が雨	虎が雨	天文
4081	明治34年	夏の部	蓴採る姿を人に見られけり	蓴菜	植物
4082	明治34年	夏の部	澤庵に訪はれし宵や鮓をおす	鮓	人事
4083	明治34年	夏の部	流去る卵のからや風涼し	涼し	時候
10579	明治34年	夏の部	目の前にまぼろし消えてはちす哉	はちす	植物
10589	明治34年	夏の部	夏野行く馬の嚏や薬草	夏野	地理
4375	明治35年	夏の部	採蓴の姿恥らふうき思	蓴菜	植物
4376	明治35年	夏の部	編笠や故人も我も恙なき	編笠	人事
4377	明治35年	夏の部	澤潟の花さき出てぬ雲の峰	雲の峰	天文
4378	明治35年	夏の部	羅に水草の花を画きけり	羅	人事
4379	明治35年	夏の部	鮎釣の巖に倚りけり百合の花	百合	植物
4380	明治35年	夏の部	蝙蝠や小庭あかるき白菖蒲	菖蒲	植物
4381	明治35年	夏の部	水とく／＼山葵の花の幽かなり	山葵の花	植物
4382	明治35年	夏の部	満山の植立杉や夏に入る	夏	時候
4383	明治35年	夏の部	鐘が鳴る諸山諸木の若葉かな	若葉	植物
4384	明治35年	夏の部	うらみわび果は筑摩のかさね鍋	筑摩祭	人事
4385	明治35年	夏の部	綿ぬいで貧しき戀を悲みぬ	更衣	人事
4386	明治35年	夏の部	さま〳〵の戀ぢゃ浮世ぢゃ鍋祭	筑摩祭	人事
4387	明治35年	夏の部	綿ぬぐや重きが上の小夜衣	更衣	人事
4388	明治35年	夏の部	鮑叔に銭拂はせて初鰹魚	初鰹	動物
4389	明治35年	夏の部	淺ましき草の茂りや神泉苑	草茂る	植物
4390	明治35年	夏の部	鶯の老をも知らず四睡かな	老鶯	動物
4391	明治35年	夏の部	灌佛の鐘は上野か初鰹魚	初鰹	動物
4392	明治35年	夏の部	飯喰うて淋しかりけり花卯木	卯の花	植物
4393	明治35年	夏の部	花桐の露にぬれたる鶉かな	桐の花	植物
4394	明治35年	夏の部	油々と草茂るなり午の雲	草茂る	植物
4395	明治35年	夏の部	鶯の老いてせはしき鳴音かな	老鶯	動物
4396	明治35年	夏の部	二の申の祭の旗や青嵐	青嵐	天文
4397	明治35年	夏の部	神前の笙篳篥やくらべ馬	競馬	人事
4398	明治35年	夏の部	なよ竹の女竹を植ゑつ細流	竹植る	人事
4399	明治35年	夏の部	菖蒲蓬いづれ六日の軒の露	菖蒲	植物
4400	明治35年	夏の部	一椀の茶を喫了す晝寐起	晝寢	人事
4401	明治35年	夏の部	到來の鮓の香うれし晝寐起	晝寢	人事
4402	明治35年	夏の部	朝日子をそびらに負ふて矢数哉	矢數	人事
4403	明治35年	夏の部	高山の頂に人や夏帽子	夏帽子	人事
4404	明治35年	夏の部	萍やたぐりよせたる花一つ	萍	植物
4405	明治35年	夏の部	掛香や草屋に育つ貴人の子	掛香	人事
4406	明治35年	夏の部	藥つめば藥を鹿のねぶりけり	藥日	人事
4407	明治35年	夏の部	たらちねのあやめ湯まゐるかたばかり	あやめ	植物
4408	明治35年	夏の部	鄙ぶりを人に恥ぢたる粽かな	粽	人事
4409	明治35年	夏の部	菖蒲酒はなやかに蓬酒わびたり	雜	雜
4410	明治35年	夏の部	燕子の寄りもつかざる幟かな	幟	人事
4411	明治35年	夏の部	鯵賣の山路を來る女かな	鯵	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4412	明治35年	夏の部	夕立や八尺の麻刈乱す	夕立	天文
4413	明治35年	夏の部	妹が取る小田の早苗の長短	早苗	植物
4414	明治35年	夏の部	ます鏡榊の花も咲きにけり	榊の花	植物
4415	明治35年	夏の部	鮎賣の水こぼし去る朝戸哉	鮎	動物
4416	明治35年	夏の部	宿の子の淺きなじみや苺やる	苺	植物
4417	明治35年	夏の部	瓜さがす野鍛冶が弟子や瓜の花	瓜の花	植物
4418	明治35年	夏の部	蚊帳を出て芭蕉つめたし眉の上	蚊帳	人事
4419	明治35年	夏の部	鑛を碎く響や雲の峯	雲の峰	天文
4420	明治35年	夏の部	競渡見る二喬や未だ幼き	ボート	人事
4421	明治35年	夏の部	紫陽花の蛇とる児や寺の間	紫陽花	植物
4422	明治35年	夏の部	香薷ねる水したたらす掌	香薷散	人事
4423	明治35年	夏の部	鹿の子の露凉しげにねぶりけり	鹿の子	動物
4424	明治35年	夏の部	夏川や喚べば答へて徒渉り	夏の川	地理
4425	明治35年	夏の部	編笠や人に知られし面魂	編笠	人事
4426	明治35年	夏の部	編笠や風吹來る伊豆の海	編笠	人事
4427	明治35年	夏の部	貯の煮酒の壹や詩を作る	煮酒	人事
4428	明治35年	夏の部	五更の灯煮酒の冷えを照しけり	煮酒	人事
4429	明治35年	夏の部	酒のまぬ杜氏や煮酒の火の加減	煮酒	人事
4430	明治35年	夏の部	封じ去る煮酒の桶や藏はやみ	煮酒	人事
4431	明治35年	夏の部	人のために酒煮るも憂し志	煮酒	人事
4433	明治35年	夏の部	大川の溢るゝ水や雲の峯	雲の峰	天文
4434	明治35年	夏の部	汎濫の水吹く風や雲の峯	雲の峰	天文
4435	明治35年	夏の部	くものみね洪水海と連りぬ	雲の峰	天文
4436	明治35年	夏の部	くものみね洪水國を貫けり	雲の峰	天文
4437	明治35年	夏の部	くものみね洪水森を洗去る	雲の峰	天文
4438	明治35年	夏の部	洪水や忽ち起るくもの峰	雲の峰	天文
4439	明治35年	夏の部	洪水をかぎる木立や雲の峰	雲の峰	天文
4440	明治35年	夏の部	眼前に水漲りぬ雲の峰	雲の峰	天文
4441	明治35年	夏の部	雲の峰くづれ洪水暮れんとす	雲の峰	天文
4442	明治35年	夏の部	くものみね水漲って音もなし	雲の峰	天文
4443	明治35年	夏の部	洪水に吾が立つ丘や雲の峯	雲の峰	天文
4444	明治35年	夏の部	洪水や葉山しげ山雲の峯	雲の峰	天文
4445	明治35年	夏の部	洪水の舟出恐ろし雲の峯	雲の峰	天文
4446	明治35年	夏の部	洪水の野にひた／＼と雲の峯	雲の峰	天文
4447	明治35年	夏の部	雲の峯出水の中の大榎	雲の峰	天文
4448	明治35年	夏の部	横サマに水押寄せぬ雲の峯	雲の峰	天文
4449	明治35年	夏の部	洪水や日たゞゆるがぬ雲の峯	雲の峰	天文
4450	明治35年	夏の部	洪水の老樹に激す雲の峯	雲の峰	天文
4451	明治35年	夏の部	洪水の渦去て雲の峯	雲の峰	天文
4452	明治35年	夏の部	雲の峰洪水の音遠きより	雲の峰	天文
4453	明治35年	夏の部	諸共に起きてふたさぬかやの穴	蚊帳	人事
4454	明治35年	夏の部	冷飯をこぼす夏書の御経かな	夏書	人事
4456	明治35年	夏の部	ひやめし喰終ッて冷飯腹横はる	雑	雑
4457	明治35年	夏の部	理屈云ふ兼好法師初松魚	初鰹	動物
4458	明治35年	夏の部	武者窓に雨吹きちるや桐の花	桐の花	植物
4459	明治35年	夏の部	鹿の子に馴れて遊びぬ女童	鹿の子	動物
4460	明治35年	夏の部	迷ひ行く鹿の子や神にみちびかれ	鹿の子	動物
4461	明治35年	夏の部	藥ふる夜明の水や白あやめ	あやめ	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4462	明治35年	夏の部	訪ひよれば思ふ女のまゆをえる	繭	人事
4463	明治35年	夏の部	よきまゆをえりわけにけり小一合	繭	人事
4464	明治35年	夏の部	日があたる水馬の夢や菱の花	菱の花	植物
4465	明治35年	夏の部	卯の花の水にこぼれて水馬哉	水馬	動物
4466	明治35年	夏の部	うすものや雨玉階にそゝぐ夕	羅	人事
4467	明治35年	夏の部	うすものや風を怕るゝ御悩み	羅	人事
4468	明治35年	夏の部	石榴の花の盛も久しかり	石榴の花	植物
4469	明治35年	夏の部	麦刈の寺を抜けけり花ざくろ	石榴の花	植物
4470	明治35年	夏の部	皮をぬく竹四五本の月夜哉	竹の皮脱ぐ	植物
4471	明治35年	夏の部	清流や竹の皮ちる竹の風	竹の皮脱ぐ	植物
4472	明治35年	夏の部	追剥に逢はで峠の明易き	短夜	時候
4473	明治35年	夏の部	夕立や熊坂の胸毛ぬるゝ程	夕立	天文
4474	明治35年	夏の部	涼しさや水迸る大理石	涼し	時候
4475	明治35年	夏の部	湯あみして薄荷畑の風涼し	涼し	時候
4476	明治35年	夏の部	人の國は又も直訴や田植唄	田植	人事
4477	明治35年	夏の部	雨乞や又現はれし白き虹	雨乞	人事
4478	明治35年	夏の部	鍋さげて山田通ひや五月人	五月	時候
4479	明治35年	夏の部	くす玉の紫がちや右左	薬玉	人事
4480	明治35年	夏の部	人訪へば人の女房の昼ね哉	晝寝	人事
4481	明治35年	夏の部	一家皆昼寐のさまや明けはなし	晝寝	人事
4482	明治35年	夏の部	人の来て昼寐の母御目さめたり	晝寝	人事
4483	明治35年	夏の部	紫陽花に昼寐の瞼開きけり	晝寝	人事
4484	明治35年	夏の部	山蟻を恐るゝ樹下の昼ね哉	晝寝	人事
4485	明治35年	夏の部	一人さめて蚊帳をつくらふ昼寐哉	晝寝	人事
4486	明治35年	夏の部	目さむれば虹が出て居る昼寐哉	晝寝	人事
4487	明治35年	夏の部	花活の花が開きぬ昼寐覚	晝寝	人事
4488	明治35年	夏の部	白薔薇を活けて和尚の昼寐哉	晝寝	人事
4489	明治35年	夏の部	鮒すしの消息もあり昼寐起	晝寝	人事
4490	明治35年	夏の部	前栽の日かげとなりぬ昼寐起	晝寝	人事
4491	明治35年	夏の部	庭樹打って人の昼寐を驚かす	晝寝	人事
4492	明治35年	夏の部	盗人の晝寐をしばる社かな	晝寝	人事
4493	明治35年	夏の部	雷や胡瓜畑の花ざかり	瓜の花	植物
4494	明治35年	夏の部	わぶらくは皆になりたる鮓の桶	鮓	人事
4495	明治35年	夏の部	蘭湯や一家兄弟十二人	蘭湯	人事
4496	明治35年	夏の部	孑子のいやじゃ／＼と申しけり	孑子	動物
4497	明治35年	夏の部	打水の盥の鯉がはねる哉	打水	人事
4498	明治35年	夏の部	卯の花に残る山吹さびしくも	卯の花	植物
4499	明治35年	夏の部	虫干の衣にかくるゝ童かな	蟲干	人事
4501	明治35年	夏の部	水飯に悲しき心起りけり	水飯	人事
4502	明治35年	夏の部	川上の朗詠美なる夜振かな	夜振	人事
4503	明治35年	夏の部	夏菊の黄もめづらしき朝餉哉	夏菊	植物
4504	明治35年	夏の部	蟷螂の世に顔よくも生れけり	蟷螂生る	動物
4505	明治35年	夏の部	屋根の上に土用の花やこぼれ草	土用	時候
4506	明治35年	夏の部	水草に流れ来て去る蝉の殻	空蝉	動物
4507	明治35年	夏の部	石山の石の上飛ぶ蛍か那	螢	動物
4508	明治35年	夏の部	水に流す夏書の反古や朝あらし	夏書	人事
4509	明治35年	夏の部	百合切て滝に抛つ修法かな	百合	植物
4510	明治35年	夏の部	石に腰百合の写生や木下闇	百合	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4511	明治35年	夏の部	心よき浅黄のうらや更衣	更衣	人事
4512	明治35年	夏の部	氷むろ山櫻の頃の行幸哉	氷室	人事
4513	明治35年	夏の部	川床にしるき丈山の拂子哉	川床	人事
4514	明治35年	夏の部	夏瘦の手洗ひにゆく泉哉	夏瘦	人事
4515	明治35年	夏の部	佛拝む稚き君やくのえ香	薫衣香	人事
4516	明治35年	夏の部	掛香や領布ふりなから近よりぬ	掛香	人事
4518	明治35年	夏の部	夏羽をり長し短し人の丈け	夏羽織	人事
4519	明治35年	夏の部	詩箋飛んで水に入りけりたかむしろ	簟	人事
4520	明治35年	夏の部	一莖の蓮潔き夏書哉	夏書	人事
4521	明治35年	夏の部	境内の狸の番や栗の花	栗の花	植物
4522	明治35年	夏の部	梅干も日蔭となりぬ店の間	梅干す	人事
4523	明治35年	夏の部	明易き草の嵐や蛇の衣	蛇衣を脱ぐ	動物
4524	明治35年	夏の部	満願の曉出や風かほる	薫風	天文
4525	明治35年	夏の部	五月雨の背戸にすてけり魚のわた	五月雨	天文
4526	明治35年	夏の部	河骨や雲を出でたる日の光	河骨	植物
4527	明治35年	夏の部	百合高く鹿の子小さく画きけり	雑	雑
4528	明治35年	夏の部	銀の箸吹く風や沖膾	沖膾	人事
4529	明治35年	夏の部	乳母が宿の此頃の花や蜀葵	立葵	植物
4530	明治35年	夏の部	洗たくや盥にうつる雲の峰	雲の峰	天文
4531	明治35年	夏の部	心太つくがわざなる漢哉	心太	人事
4532	明治35年	夏の部	潔くすゝり了りぬ心太	心太	人事
4533	明治35年	夏の部	心太人各々が銭勘定	心太	人事
4534	明治35年	夏の部	心太ありやと如意を揮ひけり	心太	人事
4535	明治35年	夏の部	心太五言一句を口吟む	心太	人事
4536	明治35年	夏の部	昼皃の虹見る頃をしぼみけり	晝顔	植物
4537	明治35年	夏の部	見てすぎぬ思ふ女のまゆをえる	繭	人事
4538	明治35年	夏の部	麻畑にあかき旭ざしや山かつら	麻	植物
4539	明治35年	夏の部	水馬名のなき虫も游ぎけり	水馬	動物
4540	明治35年	夏の部	訃をきいて驚き起つやほとゝぎす	時鳥	動物
4541	明治35年	夏の部	うすものゝ兼好にくき男かな	羅	人事
4542	明治35年	夏の部	水飯に風や四面の蓮より	水飯	人事
4543	明治35年	夏の部	着かへたる白帷子やよだち過	帷子	人事
4544	明治35年	夏の部	蝙蝠や母子すまひの念佛鉦	蝙蝠	動物
4545	明治35年	夏の部	行水や虹消え残る東山	行水	人事
4546	明治35年	夏の部	夏川をわたり少らく跣足哉	夏の川	地理
4547	明治35年	夏の部	夏川のまた吹く風や顧みる	夏の川	地理
4548	明治35年	夏の部	夏川や草刈共の夕渉	夏の川	地理
4549	明治35年	夏の部	夏川や木立もる日のさゞら波	夏の川	地理
4550	明治35年	夏の部	夏川の已にあけたるうがひ哉	夏の川	地理
4551	明治35年	夏の部	夏川に下り立つ人や朝月夜	夏の川	地理
4552	明治35年	夏の部	夏川や夜ふけて渉る水の音	夏の川	地理
4553	明治35年	夏の部	夏川の月見る家や明放し	夏の川	地理
4554	明治35年	夏の部	夏川の月待つさまや捲すだれ	夏の川	地理
4555	明治35年	夏の部	編笠の人に訪はれし昼寐哉	編笠	人事
4556	明治35年	夏の部	編笠やいつもの髭を剃落し	編笠	人事
4557	明治35年	夏の部	編笠を脱いで心太に對しけり	心太	人事
4558	明治35年	夏の部	編笠に湖吹く風の真向哉	編笠	人事
4559	明治35年	夏の部	其中の女と見えつ小編笠	編笠	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4560	明治35年	夏の部	編笠に故人痩せたる涙かな	編笠	人事
4561	明治35年	夏の部	編笠をゆるがし笑ふ別哉	編笠	人事
4562	明治35年	夏の部	山寺の餘花紅に目さましき	餘花	植物
4563	明治35年	夏の部	一鳥啼かず餘花更に幽かなる	餘花	植物
4564	明治35年	夏の部	駒牽や鞍に青葉の日の光	青葉	植物
4565	明治35年	夏の部	駒曳や鬣を吹く青あらし	青嵐	天文
4859	明治36年	夏の部	草合草に佳き名をつけにけり	草合	人事
4860	明治36年	夏の部	御子羅子の田植めでたし神の國	田植	人事
4861	明治36年	夏の部	月下ばら剪て香に驚きぬ	薔薇	植物
4863	明治36年	夏の部	初袷眼は黄巻にかゞやきぬ（青々）	袷	人事
4864	明治36年	夏の部	初袷酒のまぬ人細長し（四方太）	袷	人事
4865	明治36年	夏の部	初袷それにつけても烟草哉（紅緑）	袷	人事
4866	明治36年	夏の部	初袷うれしよき酒三オンス（鳴雪）	袷	人事
4867	明治36年	夏の部	初袷今の世の句をさげしみぬ（碧梧桐）	袷	人事
4868	明治36年	夏の部	初袷今はた醉ひて謠ひけり（虚子）	袷	人事
4869	明治36年	夏の部	雷や赫と日のさす桐の花	桐の花	植物
4870	明治36年	夏の部	夏座敷暮れて吹入る艸木の香	夏座敷	人事
4871	明治36年	夏の部	経よめば夏断の腹の鳴ることよ	夏断	人事
4872	明治36年	夏の部	夕立や雹もまじりて紅藍花畑	夕立	天文
4873	明治36年	夏の部	御神庫に銀杏の若葉輝けり	若葉	植物
4874	明治36年	夏の部	藥日の鼎の塵を掃ひけり	藥日	人事
4875	明治36年	夏の部	かりそめにかみ試みつ藥摘	藥日	人事
4876	明治36年	夏の部	藥ふる我庭黄ばむ梅一樹	藥ふる	天文
4877	明治36年	夏の部	藥狩いやしからざる主從かな	藥日	人事
4878	明治36年	夏の部	藥草を採り藥草を干す一日哉	藥日	人事
4879	明治36年	夏の部	競かりこの頃道士庵にあり	競馬	人事
4881	明治36年	夏の部	耳あれば天地五月の雲の音	五月	時候
4883	明治36年	夏の部	この頃の日ッ本の國あけやすき	短夜	時候
4884	明治36年	夏の部	五月雨やいって追手が呼ばふ声	五月雨	天文
4885	明治36年	夏の部	眼の前の紅花盛りなり夏霞	紅花	植物
4886	明治36年	夏の部	簟童子も雲の奇を了す	簟	人事
4887	明治36年	夏の部	等閑に茶の湯もすなり簟	簟	人事
4888	明治36年	夏の部	陶に水飯空し簟	簟	人事
4889	明治36年	夏の部	婆子饒舌梅干の壷仆しけり	梅干す	人事
4890	明治36年	夏の部	葛水の其交や君子也	葛水	人事
4891	明治36年	夏の部	夏神樂水浴びて来る神馬哉	夏神樂	人事
4892	明治36年	夏の部	露凉し朴の林の朝日影	夏の露	天文
4893	明治36年	夏の部	露凉し軒端の草に茶の煙	夏の露	天文
4894	明治36年	夏の部	露凉し林檎熟して紅に	夏の露	天文
4895	明治36年	夏の部	露すゞし保津の朝川くだり舟	夏の露	天文
4896	明治36年	夏の部	露凉し木末に消ゆるはゝき星	夏の露	天文
4897	明治36年	夏の部	青芒山家の鍋に洗飯	青芒	植物
4898	明治36年	夏の部	短夜の人や丘見の皃白き	短夜	時候
4899	明治36年	夏の部	短夜や人をあやしむとめ木の香	短夜	時候
4900	明治36年	夏の部	短夜の曉一しきりちり松葉	短夜	時候
4901	明治36年	夏の部	短夜のありのすさびも掃かれけり	短夜	時候
4902	明治36年	夏の部	雨五月いつこ鶯啼にけり	五月雨	天文
4903	明治36年	夏の部	五月雨や家をめぐりて当帰畑	五月雨	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4904	明治36年	夏の部	紫陽花の妬げに見えてさみだるゝ	五月雨	天文
4905	明治36年	夏の部	五月雨の棗色づく日の光り	五月雨	天文
4906	明治36年	夏の部	柚の花は香にこぼれけり棕梠の花	棕梠の花	植物
4907	明治36年	夏の部	棕梠の花風雨頻りに至る夕	棕梠の花	植物
4908	明治36年	夏の部	野雀や棕梠の莟を弄ぶ	棕梠の花	植物
4909	明治36年	夏の部	棕梠の花庭木の中にかそへけり	棕梠の花	植物
4910	明治36年	夏の部	花棕梠の畑は四月の天氣哉	棕梠の花	植物
4911	明治36年	夏の部	花棕梠や畑の隅なる青山椒	棕梠の花	植物
4912	明治36年	夏の部	絵日今にかくれて兒のありきけり	日傘	人事
4913	明治36年	夏の部	日今して舟に河水を掬ひけり	日傘	人事
4914	明治36年	夏の部	藍刈と物打語る日今人	日傘	人事
4915	明治36年	夏の部	日今たゝみ林檎の下に立寄りぬ	日傘	人事
4916	明治36年	夏の部	短夜の聞知らぬ鳥山の宿	短夜	時候
4917	明治36年	夏の部	短夜の皃も洗ハず鴉かな	短夜	時候
4918	明治36年	夏の部	島原を畑に見てゆく日今哉	日傘	人事
4919	明治36年	夏の部	青梅を人の日今につふて哉	雑	雑
4920	明治36年	夏の部	短夜を鳴残る蛙一ツ哉	短夜	時候
4921	明治36年	夏の部	五月雨や杉伐仆す橋わたし	五月雨	天文
4922	明治36年	夏の部	獨活畑のうど採尽す棕梠の花	棕梠の花	植物
4923	明治36年	夏の部	机に灯古人蚊をやく辞あり	蚊	動物
4924	明治36年	夏の部	棕梠の花竹原出る小嘍囉	棕梠の花	植物
4925	明治36年	夏の部	五月雨道にふまるゝあやめ草	五月雨	天文
4926	明治36年	夏の部	五月雨や塩くさき飽く蕨汁	五月雨	天文
4927	明治36年	夏の部	短夜の餘花にあけたり山かつら	短夜	時候
4928	明治36年	夏の部	短夜の牡丹を惜む主かな	短夜	時候
4929	明治36年	夏の部	蚊を打て再び呪文高らかに	蚊	動物
4930	明治36年	夏の部	目をとぢて蚊の鳴く方を定めけり	蚊	動物
4931	明治36年	夏の部	冷飯に蚊も秋近くなりにけり	蚊	動物
4932	明治36年	夏の部	曉の蚊の乾をさして飛去りぬ	蚊	動物
4933	明治36年	夏の部	戀に蚊に物の哀を覚えけり	蚊	動物
4934	明治36年	夏の部	昼の蚊やみすより人を覗く程に	蚊	動物
4935	明治36年	夏の部	大佛や日今かたげて人のゆく	日傘	人事
4936	明治36年	夏の部	かちわたり河原をありく日今哉	日傘	人事
4937	明治36年	夏の部	顔や日今の中の日の匂ひ	日傘	人事
4938	明治36年	夏の部	日今たゝめば木間もる日や顔に照る	日傘	人事
4939	明治36年	夏の部	花棕梠やかたち醜き寺男	棕梠の花	植物
4940	明治36年	夏の部	花棕梠や寺僧頑に叱る声	棕梠の花	植物
4941	明治36年	夏の部	さみだるゝ牧場に馬もなかりけり	五月雨	天文
4942	明治36年	夏の部	蚊をやくや夜の活花蚊帳越に	蚊	動物
4943	明治36年	夏の部	うはなりのひた憎む蚊や古行灯	蚊	動物
4944	明治36年	夏の部	蝋燭や法幢に蚊も寄つかず	蚊	動物
4945	明治36年	夏の部	五月雨やよしある里の花かつみ	五月雨	天文
4946	明治36年	夏の部	五月雨の雲や柴胡のむら茂り	五月雨	天文
4948	明治36年	夏の部	ゆけ、われ蛇斬ると夢みたり	蛇	動物
4949	明治36年	夏の部	河骨に蜻蜓始めて飛ぶ日哉	蜻蛉	動物
4950	明治36年	夏の部	水馬頻りに飛ぶも恋の事	水馬	動物
4951	明治36年	夏の部	薫風や故郷の路の花茨	薫風	天文
4952	明治36年	夏の部	涼しさにラムネの玉を鳴らしけり	涼し	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4953	明治36年	夏の部	ふじ詣裾野の小家立出でぬ	富士詣	人事
4954	明治36年	夏の部	鄙の宿燈心草も花咲きぬ	燈心草の花	植物
4955	明治36年	夏の部	黄梅の雨や寺僧の詩三昧	黄梅	植物
4956	明治36年	夏の部	風凉し龍をはしらす墨の痕	凉し	時候
4957	明治36年	夏の部	若竹に小督の墓を弔へり	若竹	植物
4958	明治36年	夏の部	燕子花活けあまりたる廣葉哉	杜若	植物
4959	明治36年	夏の部	葛水や老来の歯も爽かに	葛水	人事
4960	明治36年	夏の部	うの花の主と申せ蝸牛	蝸牛	動物
4961	明治36年	夏の部	あちさゐや小家にしるき異種	紫陽花	植物
4962	明治36年	夏の部	雲の峰日たゝ西吹く形哉	雲の峰	天文
4963	明治36年	夏の部	あちさゐに或はかゝるゝ寺子哉	紫陽花	植物
4964	明治36年	夏の部	葛水や馬も凉しき木下蔭	葛水	人事
4965	明治36年	夏の部	絵扇をすさびにすなる力士哉	絵扇	人事
4966	明治36年	夏の部	角ふるや物きゝわけてかたつむり	蝸牛	動物
4967	明治36年	夏の部	大衆の打眠うかがふ蝸牛	蝸牛	動物
4968	明治36年	夏の部	紫陽花の色に迷へり蝸牛	蝸牛	動物
4969	明治36年	夏の部	伸上りてゝむし思ふ所あり	蝸牛	動物
4970	明治36年	夏の部	雲の峰六尺の百合花開く	雲の峰	天文
4971	明治36年	夏の部	王城の鬼門に当り雲の峰	雲の峰	天文
4972	明治36年	夏の部	ちるけしの葉末や雲峰低し	雲の峰	天文
4973	明治36年	夏の部	君が手の扇の影や草合	扇	人事
4974	明治36年	夏の部	扇つかひ顔に紅うつりけり	扇	人事
4975	明治36年	夏の部	あちさゐのいやしき様や夜店の灯	紫陽花	植物
4976	明治36年	夏の部	紫陽花に蛇打逃がす茂り哉	紫陽花	植物
4977	明治36年	夏の部	紫陽花に日うとき樫の廣葉哉	紫陽花	植物
4978	明治36年	夏の部	葛のんで土器に水そゝきけり	葛水	人事
4979	明治36年	夏の部	草清水人こほし去る葛粉哉	清水	地理
4980	明治36年	夏の部	葛水や白衣は人の潔き	葛水	人事
4981	明治36年	夏の部	市中の一本杉や雲の峯	雲の峰	天文
4982	明治36年	夏の部	床の間のあやめの丈や扇掛	あやめ	植物
4983	明治36年	夏の部	祭見る村のしこめも扇哉	扇	人事
4984	明治36年	夏の部	あけやすき我が宿水の音ばかり	短夜	時候
4985	明治36年	夏の部	栗の花颯然として雨到る	栗の花	植物
4986	明治36年	夏の部	夏の神夜は卽ち白衣哉	夏	時候
4987	明治36年	夏の部	夏ざしき夕日が少しあたりけり	夏座敷	人事
4988	明治36年	夏の部	夏羽をり飄々として庭ありき	夏羽織	人事
4989	明治36年	夏の部	羽拔鳥蓴とる子の鼻の先	羽拔鳥	動物
4990	明治36年	夏の部	朝皃の苗に斑入をえらびけり	朝顔の苗	植物
4991	明治36年	夏の部	舟遊び舳に當り三日の月	舟遊	人事
4992	明治36年	夏の部	舟遊水の流に茶の烟	舟遊	人事
4993	明治36年	夏の部	舟遊眉をあぐれば嵐山	舟遊	人事
4994	明治36年	夏の部	舟遊舟ばたに立つ美少年	舟遊	人事
4995	明治36年	夏の部	舟遊去来は酒に遠さかり	舟遊	人事
4996	明治36年	夏の部	かへり見る活花の間や簟	簟	人事
4997	明治36年	夏の部	簟少し日当る朝の程	簟	人事
4998	明治36年	夏の部	簟独坐に近き月見艸	簟	人事
4999	明治36年	夏の部	簟足ふみ伸ばす雲の上	簟	人事
5000	明治36年	夏の部	簟星を懐ろなる思	簟	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5001	明治36年	夏の部	簟花が目につく女童	簟	人事
5002	明治36年	夏の部	蚊帳越や夜の活花白き花	蚊帳	人事
5003	明治36年	夏の部	蚊帳去るや枕に近く青表紙	蚊帳	人事
5004	明治36年	夏の部	蚊帳の中故人は旅につかれけり	蚊帳	人事
5005	明治36年	夏の部	蚊帳を出て夏朝皃に見入りけり	蚊帳	人事
5006	明治36年	夏の部	稲妻に玉巻芭蕉秀でたり	芭蕉玉巻	植物
5007	明治36年	夏の部	風鈴に新体の詩を咏じけり	風鈴	人事
5008	明治36年	夏の部	昼皃や道に死居る蝉暑し	晝顔	植物
5009	明治36年	夏の部	甘酒に客昼の蚊を憎みけり	蚊	動物
5010	明治36年	夏の部	目すゞしく眉秀でたり夏書人	夏書	人事
5011	明治36年	夏の部	ラムネのむやいさゝかの酒の醉心地	ラムネ	人事
5012	明治36年	夏の部	大原女の面もふらず草いきれ	草いきれ	植物
5013	明治36年	夏の部	法の風蓮の花の開く音	蓮	植物
5014	明治36年	夏の部	蓴つみ蓮の浮葉もたぐりけり	蓴菜	植物
5015	明治36年	夏の部	盆栽の蓮も咲いて水乏し	蓮	植物
5016	明治36年	夏の部	蓮の花くわゐの花も咲きにけり	蓮	植物
5017	明治36年	夏の部	蓮やせて浮草茂り咲にけり	蓮	植物
5018	明治36年	夏の部	蓮伐るや雨に驚く僧のさま	蓮	植物
5019	明治36年	夏の部	蓮さげて本堂をゆく尊さよ	蓮	植物
5020	明治36年	夏の部	白蓮の旦紅蓮の夕かな	蓮	植物
5021	明治36年	夏の部	河骨の群がり咲くや蓮の花	蓮	植物
5022	明治36年	夏の部	蓮見んと行くや蓮の朝月夜	蓮	植物
5023	明治36年	夏の部	銀燭や坐に水飯のうつはもの	水飯	人事
5024	明治36年	夏の部	水飯や皆銀のうつはもの	水飯	人事
5025	明治36年	夏の部	水飯や精進の日の昼灯	水飯	人事
5026	明治36年	夏の部	杣人の洗ひこぼしぬ洗飯	水飯	人事
5027	明治36年	夏の部	水飯や詩は性霊を貴べり	水飯	人事
5028	明治36年	夏の部	水飯や簀戸に遮る雨しぶき	水飯	人事
5029	明治36年	夏の部	水めしや紫陽花の色暮近き	水飯	人事
5030	明治36年	夏の部	水飯に昼の蚊一ツ見たりけり	水飯	人事
5031	明治36年	夏の部	水飯や句は天明を喜べり	水飯	人事
5032	明治36年	夏の部	水飯に奈良漬の香を憎みけり	水飯	人事
10581	明治36年	夏の部	蝙蝠や過て怪しきオロシヤ人	蝙蝠	動物
10595	明治36年	夏の部	蟷螂の生るゝ見ても佛かな	蟷螂	動物
10609	明治36年	夏の部	眠る山夫の洞庭の眺めかな	眺め	人事
5330	明治37年	夏の部	火事跡や風雨乱るゝ桐の花	桐の花	植物
5331	明治37年	夏の部	輪奐の美にかゞやけり桐の花	桐の花	植物
5332	明治37年	夏の部	鬱として野に垂る雲や桐の花	桐の花	植物
5333	明治37年	夏の部	桐の花落ちて微風を見たりけり	桐の花	植物
5334	明治37年	夏の部	花桐の露や残礎を乱れうつ	桐の花	植物
5335	明治37年	夏の部	歌人や羽拔の鳥に寄する戀	羽拔鳥	動物
5336	明治37年	夏の部	夏帽や皆林泉の客ばかり	夏帽子	人事
5337	明治37年	夏の部	夏座敷小寒きばかり雨中の景	夏座敷	人事
5338	明治37年	夏の部	梅雨晴に長袖の人や花棗	棗の花	植物
5339	明治37年	夏の部	避暑の客名を題壁に知られけり	避暑	人事
5340	明治37年	夏の部	午睡して居れば官人抂駕かな	晝寢	人事
5341	明治37年	夏の部	竹婦人東坡は室に居残りぬ	竹夫人	人事
5342	明治37年	夏の部	夏菊や婆子に詩を問ふ白樂天	夏菊	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5343	明治37年	夏の部	水飯を喰こぼしけり長廣舌	水飯	人事
5344	明治37年	夏の部	貴人の前扇の風のあまり哉	扇	人事
5345	明治37年	夏の部	蝿を打つ臥龍先生二十八	蝿	動物
5346	明治37年	夏の部	はひを打つ惡道心が眼かな	蝿	動物
5347	明治37年	夏の部	夕立や物に恐るゝ蝿一つ	蝿	動物
5348	明治37年	夏の部	蝿を避けて庭の棗に遊びけり	蝿	動物
5350	明治37年	夏の部	蝿叩から／＼と笑ひ給ふらん	蝿	動物
5351	明治37年	夏の部	枕頭の山水蚊帳に賓主かな	蚊帳	人事
5352	明治37年	夏の部	よき蚊帳も釣て松風蘿月哉	蚊帳	人事
5353	明治37年	夏の部	偸見る蚊帳にうまゐの皃白し	蚊帳	人事
5354	明治37年	夏の部	石山の旅泊や夏の夕ありき	夏の夕	時候
5355	明治37年	夏の部	夏の夕雨に還御の神輿かな	夏の夕	時候
5356	明治37年	夏の部	百日紅鶏の疫のはやる里	百日紅	植物
5357	明治37年	夏の部	秋近き宵ありきすや陰陽師	秋近し	時候
5358	明治37年	夏の部	冷汁に廬山の雨を偲びけり	冷汁	人事
5359	明治37年	夏の部	草取や瘦田と見ゆる稲の丈	草取り	人事
5361	明治37年	夏の部	軍中の節度凉しき事ばかり	凉し	時候
5362	明治37年	夏の部	山の幸兄は照射に出てゝ行く	照射	人事
5363	明治37年	夏の部	雷落ちし官山の杉伐らせけり	雷	天文
5364	明治37年	夏の部	苔の花佛足石を冒しけり	苔の花	植物
5365	明治37年	夏の部	支那の人簞食の禮や夏柳	夏柳	植物
5366	明治37年	夏の部	夏書の間只山僧の入るを許す	夏書	人事
5367	明治37年	夏の部	將軍の磊落として一夜酒	甘酒	人事
5368	明治37年	夏の部	不二小屋の曉深き鑽火かな	富士詣	人事
5369	明治37年	夏の部	水辺やおどろ／＼と不二行人	富士垢離	人事
5370	明治37年	夏の部	富士垢離や赤星の影清らかに	富士垢離	人事
5371	明治37年	夏の部	朔日の行事かしこし富士の坊	富士詣	人事
5372	明治37年	夏の部	語りつぎ云ひつぎ富士の道者哉	富士詣	人事
5373	明治37年	夏の部	高山を前に控へて青すだれ	青簾	人事
5374	明治37年	夏の部	小説の女に似たり青すだれ	青簾	人事
5375	明治37年	夏の部	青すだれ酒に琥珀の光あり	青簾	人事
5376	明治37年	夏の部	青簾古器を並べて樂めり	青簾	人事
5377	明治37年	夏の部	青すだれ衣桁の衣のあからさま	青簾	人事
5378	明治37年	夏の部	大勢に膾料理や青すだれ	青簾	人事
5379	明治37年	夏の部	青すだれ清女が老を覗きけり	青簾	人事
5380	明治37年	夏の部	青すだれ寂寞として古佛像	青簾	人事
5381	明治37年	夏の部	青すだれ老僧まかり出にけり	青簾	人事
5382	明治37年	夏の部	青簾松の嵐の寒き程	青簾	人事
5383	明治37年	夏の部	葉桜やよき水を射る日の光	葉櫻	植物
5384	明治37年	夏の部	一陣の風千木の幟かな	幟	人事
5385	明治37年	夏の部	草の上に招魂壇や羽蟻飛ぶ	羽蟻	動物
5386	明治37年	夏の部	衣更南枝に巣ふ鳥悲し	更衣	人事
5387	明治37年	夏の部	浮巣すゞし真菰の中の朝月夜	真菰	植物
5388	明治37年	夏の部	うはゝみの鱗を見たる照射哉	蛇	動物
5390	明治37年	夏の部	はかなさは青梅落つと見たりけり	梅の實	植物
5391	明治37年	夏の部	僧よりも高き芭蕉の巻葉哉	芭蕉玉巻	植物
5392	明治37年	夏の部	衣更皆うつくしき皃ばかり	更衣	人事
5393	明治37年	夏の部	うつくしき皃そろへたる袷かな	袷	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5394	明治37年	夏の部	月の暈牡丹くづるゝ夜なりけり	牡丹	植物
5395	明治37年	夏の部	夏やすみ妹としたしむ林檎哉	夏休み	人事
5396	明治37年	夏の部	雲割れて河骨の黄にさす日かな	河骨	植物
5397	明治37年	夏の部	さらし井の不淨を神に恐れけり	井戸替え	人事
5398	明治37年	夏の部	蘭湯の浴終へて君王に侍す	蘭湯	人事
5399	明治37年	夏の部	夏の夕とぎすましたる翌日の鎌	夏の夕	時候
5400	明治37年	夏の部	夏の夕清女が老を過ぎりけり	夏の夕	時候
5401	明治37年	夏の部	夏の夕虹あか／＼と山にあり	夏の夕	時候
5402	明治37年	夏の部	草の香に折ふし咽ぶ鹿の子哉	鹿の子	動物
5403	明治37年	夏の部	沢蘭に下りて遊べる鹿の子哉	鹿の子	動物
5404	明治37年	夏の部	梅雨晴の芝に鹿の子の蹄かな	鹿の子	動物
5405	明治37年	夏の部	社地ひろし鹿の子に馴れて飛燕	鹿の子	動物
5406	明治37年	夏の部	神木の露に驚く鹿の子哉	鹿の子	動物
5407	明治37年	夏の部	蚊帳して帝玉山頽れけり	蚊帳	人事
5408	明治37年	夏の部	兄弟が寝静まりたる蚊帳哉	蚊帳	人事
5409	明治37年	夏の部	竹の子の皮脱く頃を赦免かな	竹の皮脱ぐ	植物
5410	明治37年	夏の部	帽を振る登山の連や青すゝき	青芒	植物
5411	明治37年	夏の部	夏瘦の猶手に釈かず青表紙	夏瘦	人事
5412	明治37年	夏の部	よく育つ南瓜の花も大也	南瓜の花	植物
5413	明治37年	夏の部	行先に誰かは知らずともしかな	照射	人事
5414	明治37年	夏の部	維レ孑子乾坤／＼とふる	孑子	動物
5415	明治37年	夏の部	朝々や青田に夏の日を拜す	青田	地理
5416	明治37年	夏の部	山の裾頓に開けて青田哉	青田	地理
5417	明治37年	夏の部	街道の埃かゝらぬ青田かな	青田	地理
5418	明治37年	夏の部	松明照す道の左右の青田哉	青田	地理
5419	明治37年	夏の部	雨上り水漫々と青田哉	青田	地理
5420	明治37年	夏の部	鍋祭筑摩の荘の美婦一人	筑摩祭	人事
5421	明治37年	夏の部	ねんごろの男一人や鍋祭	筑摩祭	人事
5422	明治37年	夏の部	卯の花や艶なる人の筑摩鍋	筑摩祭	人事
5423	明治37年	夏の部	催馬樂を謡ふ筑摩の祭人	筑摩祭	人事
5424	明治37年	夏の部	やごとなき神業にして筑摩鍋	筑摩祭	人事
5425	明治37年	夏の部	蜩たれて百合の花ほのかに白し	百合	植物
5426	明治37年	夏の部	百合さげて見知らぬ人の滝見哉	百合	植物
5427	明治37年	夏の部	等閑に百合も挿したるかほりか南	百合	植物
5428	明治37年	夏の部	百合活けて坐を立去りし美人哉	百合	植物
5429	明治37年	夏の部	百合の花美人の顔に映じけり	百合	植物
5430	明治37年	夏の部	水代へて残少なや冷瓜	冷瓜	人事
5431	明治37年	夏の部	蛛の囲のうたて覚ゆる御墓哉	蜘蛛	動物
5656	明治38年	夏の部	初茄子や世人は知らず俳体歌	茄子	植物
5657	明治38年	夏の部	妹が子は夏蚕の桑に納涼みけり	納涼	人事
5658	明治38年	夏の部	騎射の日の晨晴れたる翠微哉	騎射	人事
5659	明治38年	夏の部	弱冠にして出家す蓮の浮葉哉	蓮の浮葉	植物
5660	明治38年	夏の部	卯の花の家なる美婦を盗みけり	卯の花	植物
5661	明治38年	夏の部	夏浅き萠黄の山や湖の上	夏浅し	時候
5662	明治38年	夏の部	慵しや秋に近づく氷室守	氷室	人事
5663	明治38年	夏の部	盗人の跡に柘榴の落花哉	石榴の花	植物
5664	明治38年	夏の部	腹かけの紺の匂や心太	心太	人事
5665	明治38年	夏の部	筝に髀肉見せけり蝸牛	蝸牛	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5666	明治38年	夏の部	家に居て竹をうゑけり太史公	竹植る	人事
5667	明治38年	夏の部	竹うゑて猶紫陽花を存しけり	竹植る	人事
5668	明治38年	夏の部	絃誦の声を後ろや竹植うる	竹植る	人事
5669	明治38年	夏の部	蘇子が子ら退いて賦す種竹の詩	竹植る	人事
5670	明治38年	夏の部	竹うゑて二日三日や月円か	竹植る	人事
5671	明治38年	夏の部	虎渓よりかへす獨や木下闇	木下闇	植物
5672	明治38年	夏の部	挺ンでし朴の葉音や木下闇	木下闇	植物
5673	明治38年	夏の部	木下闇皆黄檗の法師原	木下闇	植物
5674	明治38年	夏の部	下闇や木を白うして文字を書く	木下闇	植物
5675	明治38年	夏の部	下闇や幻住菴へ二三人	木下闇	植物
5676	明治38年	夏の部	夏の月槐に深き住居かな	夏の月	天文
5677	明治38年	夏の部	雨ほしき暮となりけり韮の花	韮の花	植物
5678	明治38年	夏の部	游泳の戻りを咲きぬ月見草	月見草	植物
5679	明治38年	夏の部	朝月に浮巣の雛の眼あけゝり	浮巣	動物
5680	明治38年	夏の部	萬骨の枯れて蟷螂生れけり	蟷螂生る	動物
5681	明治38年	夏の部	潮浴びて新月かゝる頃しもや	海水浴	人事
5682	明治38年	夏の部	衣ぬいで蛇且つ所得顔かな	蛇衣を脱ぐ	動物
5683	明治38年	夏の部	水吹けば團扇もぬれつ蚊やり草	蚊遣	人事
5684	明治38年	夏の部	朝草を荷ひ渉るや夏の川	夏の川	地理
5685	明治38年	夏の部	流るゝに任す扇や河納涼	納涼	人事
5686	明治38年	夏の部	箒木の宿とこそ聞け月見草	月見草	植物
5687	明治38年	夏の部	夏衣念佛心起りけり	夏衣	人事
5688	明治38年	夏の部	蝿打て又や草廬を立去りぬ	蝿	動物
5689	明治38年	夏の部	霍乱の人に修法や泉殿	霍乱	人事
5690	明治38年	夏の部	夏瘦の朝暮に花を活けにけり	夏瘦	人事
5691	明治38年	夏の部	夏瘦の夜を親しむ獨坐かな	夏瘦	人事
5692	明治38年	夏の部	夏やせの水澄む頃に及びけり	夏瘦	人事
5693	明治38年	夏の部	夏瘦の人や文月の句を想ふ	夏瘦	人事
5694	明治38年	夏の部	夏瘦や庭の梧桐の頼もしき	夏瘦	人事
5695	明治38年	夏の部	筍や既に春蔬の氣を厭ふ	筍	植物
5696	明治38年	夏の部	牡丹見る人驚かす毛虫かな	毛蟲	動物
5697	明治38年	夏の部	白牡丹白きを穢す毛虫哉	毛蟲	動物
5698	明治38年	夏の部	洗鯉客は当世の七才子	洗鯉	人事
5699	明治38年	夏の部	山開晴れて風鳴る頭上哉	山開	人事
5700	明治38年	夏の部	葉柳の枝伐落す浅き水	夏柳	植物
5701	明治38年	夏の部	病葉や銀杏に高き卯月の日	病葉	植物
5702	明治38年	夏の部	薫風や處せきまで金魚盤	薫風	天文
5703	明治38年	夏の部	萬木の皆日に向ふ若葉哉	若葉	植物
5704	明治38年	夏の部	五月雨に押流さるゝあやめ哉	あやめ	植物
5705	明治38年	夏の部	五月晴大河を照す斜陽かな	五月晴	天文
5706	明治38年	夏の部	木隠れに大佛近く鹿の子哉	鹿の子	動物
5707	明治38年	夏の部	折ふしの肱笠雨や田植人	田植	人事
5708	明治38年	夏の部	喝采や花踏みちらすくらべ馬	競馬	人事
5709	明治38年	夏の部	昔男女ありけり鍋祭	筑摩祭	人事
5710	明治38年	夏の部	蓴採り舟を停めて語りけり	蓴菜	植物
5711	明治38年	夏の部	貧しくて青唐辛子潔し	青唐辛子	植物
5712	明治38年	夏の部	沙弥が来て青唐辛子貰ひけり	青唐辛子	植物
5713	明治38年	夏の部	花茨五月の晴と成にけり	茨の花	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5714	明治38年	夏の部	軾や轍や竹うゝる記を作りけり	竹植る	人事
5716	明治38年	夏の部	君に贈るつるぎに清水そゝぎけり	清水	地理
5717	明治38年	夏の部	川狩や夜はほの〳〵と君が顔	川狩	人事
5718	明治38年	夏の部	麦秋の狼煙頻りにあがりけり	麦の秋	時候
5719	明治38年	夏の部	夕立のしぶきかしこし宮柱	夕立	天文
5720	明治38年	夏の部	雨やどり椎ばかりなる涼しさよ	涼し	時候
5721	明治38年	夏の部	獨居の芭蕉に黙す麦こがし	麦焦し	人事
5722	明治38年	夏の部	雷に賢聖障子震ひけり	雷	天文
5723	明治38年	夏の部	青々と朝露垂るゝ胡瓜哉	瓜	植物
5724	明治38年	夏の部	夏山や敵の輜重のあり所	夏山	地理
5725	明治38年	夏の部	夏山や一あめすぐる宇治の町	夏山	地理
5726	明治38年	夏の部	夕立に芭蕉忽ちほぐれけり	夕立	天文
5727	明治38年	夏の部	温泉の宿がくれし金魚かな	金魚	動物
5728	明治38年	夏の部	三文の茄子五文の瓜も涼し	雑	雑
6045	明治39年	夏の部	その鳴くや佶屈として蟇	蟇	動物
6046	明治39年	夏の部	千載に一たび舞はむ蟇	蟇	動物
6047	明治39年	夏の部	藜伐て貧しき中に盟ひけり	藜	植物
6048	明治39年	夏の部	粽結ふ女の心忖りけり	粽	人事
6049	明治39年	夏の部	青眼のあるじや梅の実をかぢる	梅の實	植物
6050	明治39年	夏の部	蟇を獲て筆を絶ちけり奇人僧	蟇	動物
6051	明治39年	夏の部	舊跡や畑とならば紅の花	紅花	植物
6052	明治39年	夏の部	二頃の田青鷺も居て我富めり	青鷺	動物
6053	明治39年	夏の部	百貫の銭を荷へり夏木立	夏木立	植物
6054	明治39年	夏の部	衣更て人を遠きに懐ひけり	更衣	人事
6055	明治39年	夏の部	時鳥啼く頃の花さへ悲し	時鳥	動物
6056	明治39年	夏の部	清新の句を酬ひけり鮓の客	鮓	人事
6057	明治39年	夏の部	鮓なれて故人再び過りけり	鮓	人事
6058	明治39年	夏の部	我を以て貧しとなさず鮎の鮓	鮓	人事
6059	明治39年	夏の部	鮎の鮓少かに足らず朋の來る	鮓	人事
6060	明治39年	夏の部	今來んとばかりになれつ一夜すし	鮓	人事
6061	明治39年	夏の部	野の宮は蟲さへ飛はず青簾	青簾	人事
6062	明治39年	夏の部	青簾偶々過ぐる白頭翁	青簾	人事
6063	明治39年	夏の部	黄昏の月逗るや青すたれ	青簾	人事
6064	明治39年	夏の部	青簾夏行の心定まりぬ	青簾	人事
6065	明治39年	夏の部	青簾花を隔てゝ賣花翁	青簾	人事
6066	明治39年	夏の部	子を持たぬ鵜飼か妻の化粧哉	鵜飼	人事
6068	明治39年	夏の部	鵜を縱つ事壮佼を凌ぎけり	鵜	動物
6069	明治39年	夏の部	六國の相印我に鵜縄かな	鵜	動物
6070	明治39年	夏の部	年々の鵜同じからず鵜川哉	鵜	動物
6071	明治39年	夏の部	花むしろ織りちらしたる晝寐哉	晝寢	人事
6072	明治39年	夏の部	うきくさに水まさりけり朝の程	萍	植物
6073	明治39年	夏の部	うき草の花吹く風に吹かれけり	萍	植物
6074	明治39年	夏の部	うき草の花に盛をわびにけり	萍	植物
6075	明治39年	夏の部	うき草の花に負きて小魚見ゆ	萍	植物
6076	明治39年	夏の部	うき草に早しのゝめの花白し	萍	植物
6077	明治39年	夏の部	商人の衣を汚しぬ沖膾	沖膾	人事
6078	明治39年	夏の部	沖鱠一ト日脂粉を遠ざくる	沖膾	人事
6079	明治39年	夏の部	丈草は詩を作りけり沖鱠	沖膾	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6080	明治39年	夏の部	酒壷の古きに対す沖鱠	沖膾	人事
6081	明治39年	夏の部	逸興や俄かに作る沖鱠	沖膾	人事
6082	明治39年	夏の部	鯉幟庭樹の露を拂ひけり	鯉幟	人事
6083	明治39年	夏の部	青梅に興や一家の詩を作る	梅の實	植物
6084	明治39年	夏の部	けし散るを惜む主人やはたゝ神	雷	天文
6085	明治39年	夏の部	矢叫に脅かされし夏野哉	夏野	地理
6086	明治39年	夏の部	蝶一つ遠く吹かれし夏野哉	夏野	地理
6087	明治39年	夏の部	慇懃にすや梅干の壷一つ	梅干す	人事
6088	明治39年	夏の部	衣ぬいで此野を蛇の行方哉	蛇衣を脱ぐ	動物
6089	明治39年	夏の部	口辯のいやしげならず夏羽織	夏羽織	人事
6091	明治39年	夏の部	撫子やこゝに人待つ松林	撫子	植物
6092	明治39年	夏の部	撫子や土手の窪みの草の中	撫子	植物
6093	明治39年	夏の部	撫子に水を求めてありきけり	撫子	植物
6094	明治39年	夏の部	撫子に藪の茂りや毒うつぎ	撫子	植物
6095	明治39年	夏の部	撫子に砂はねかへす轍かな	撫子	植物
6096	明治39年	夏の部	撫子の淡々しさや宵の星	撫子	植物
6097	明治39年	夏の部	草臥や鼻の先なる野撫子	撫子	植物
6098	明治39年	夏の部	堀切の新道涼し野撫子	撫子	植物
6099	明治39年	夏の部	汐風を遮って松に野撫子	撫子	植物
6100	明治39年	夏の部	水辺の夕撫子や露早し	撫子	植物
6102	明治39年	夏の部	蝉凉し門に車を入れしめず	蝉	動物
6103	明治39年	夏の部	車下りて蝉なく方へ寺凉し	蝉	動物
6104	明治39年	夏の部	案内の坊主に蝉のいばり哉	蝉	動物
6105	明治39年	夏の部	物干して庫裡に人なし蝉時雨	蝉	動物
6106	明治39年	夏の部	梅干はすいぞ／＼と蝉の声	蝉	動物
6107	明治39年	夏の部	蝉木立出あるく僧に拶着す	蝉	動物
6108	明治39年	夏の部	墓守の蹲まる背や蝉凉し	蝉	動物
6109	明治39年	夏の部	傳法の松や飛つく蝉唖なり	蝉	動物
6110	明治39年	夏の部	かしましき蝉ふかれ落つ青田哉	蝉	動物
6111	明治39年	夏の部	象潟は埋れて蝉の声あつし	蝉	動物
6113	明治39年	夏の部	逢戀を柳の妬水馬	水馬	動物
6114	明治39年	夏の部	蛇苺草にかくるゝ朽木かな	蛇苺	植物
6115	明治39年	夏の部	白鹿の其子は人に射られけり	鹿の子	動物
6116	明治39年	夏の部	昼眠る鹿の子に銀杏若葉	鹿の子	動物
6117	明治39年	夏の部	長明が家は若葉にかくれけり	若葉	植物
6118	明治39年	夏の部	草清水藥の紙を飛ばしけり	清水	地理
6119	明治39年	夏の部	人わるく顔を見せじと日仐哉	日傘	人事
6120	明治39年	夏の部	短夜の人に後れし渡シかな	短夜	時候
6121	明治39年	夏の部	牡丹活けて菴の古きに篭りけり	牡丹	植物
6122	明治39年	夏の部	雲の峰旅行く君が笠の上	雲の峰	天文
6123	明治39年	夏の部	渺々の水を吹き来る田植歌	田植	人事
6124	明治39年	夏の部	夏の曉の夕の霞や幟竿	幟	人事
6125	明治39年	夏の部	姉妹の餉を分つ田植哉	田植	人事
6126	明治39年	夏の部	青丹よし奈良を出れば雲の峰	雲の峰	天文
6127	明治39年	夏の部	客一人牡丹をして俗ならしめず	牡丹	植物
6128	明治39年	夏の部	身を修め家を齊へ昼寐哉	晝寢	人事
6129	明治39年	夏の部	山苣萵の花に出そめし藪蚊かな	蚊	動物
6130	明治39年	夏の部	橘の香をなつかしみ鳴蚊かな	蚊	動物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6131	明治39年	夏の部	昼の蚊の窺ひよるや讀書人	蚊	動物
6132	明治39年	夏の部	一穂の灯ざしや遠く蚊鳴去る	蚊	動物
6133	明治39年	夏の部	夜な／＼の五車の反古に鳴蚊哉	蚊	動物
6134	明治39年	夏の部	鮓の石其頑ナを守りけり	鮓	人事
6135	明治39年	夏の部	柹の花愚かなる子を遊ばしむ	柹の花	植物
6136	明治39年	夏の部	柹の花よべの狸を打ちし跡	柹の花	植物
6137	明治39年	夏の部	柹の花掃きも棄つべき流あり	柹の花	植物
6138	明治39年	夏の部	衣濯ぐ智月が宿や柿の花	柹の花	植物
6139	明治39年	夏の部	蚊帳貰うて去来戻りぬ柿の花	柹の花	植物
6140	明治39年	夏の部	運ぶべき甕に夕日や柿の花	柹の花	植物
6141	明治39年	夏の部	加茂を出て日にあたりたる葵哉	葵	植物
6142	明治39年	夏の部	加茂の子が戯れかざす葵かな	葵	植物
6143	明治39年	夏の部	葵かけて糺の水に鑑みぬ	葵	植物
6144	明治39年	夏の部	枯葵清少納言老いにけり	葵	植物
6145	明治39年	夏の部	葵かざす蒼生や神の國	葵	植物
6146	明治39年	夏の部	氷室守老いて帝の御幸哉	氷室	人事
6147	明治39年	夏の部	氷室見て氷の髄を思ひけり	氷室	人事
6148	明治39年	夏の部	養老の滝の上なる氷室哉	氷室	人事
6149	明治39年	夏の部	氷室開く吉き日の旭上りけり	氷室	人事
6150	明治39年	夏の部	百合の花活々として氷室山	氷室	人事
6151	明治39年	夏の部	水鶏啼くや郷先生の碑のあたり	水鶏	動物
6152	明治39年	夏の部	鵜を縦つ人壯ン也鬢の霜	鵜	動物
6153	明治39年	夏の部	綿打によき娘あり棉の花	棉の花	植物
6154	明治39年	夏の部	白蓮の咲きしが特に骨立ちぬ	蓮	植物
6155	明治39年	夏の部	一村や麻より低き家ばかり	麻	植物
6156	明治39年	夏の部	雲水と挨拶しけり麻頭巾	麻頭巾	人事
6157	明治39年	夏の部	一宿して立去る君や麻頭巾	麻頭巾	人事
6158	明治39年	夏の部	麻頭巾白眼に人通りけり	麻頭巾	人事
6159	明治39年	夏の部	髙山の嵐や夏の蝶あがる	夏の蝶	動物
6160	明治39年	夏の部	夕顔に人まだ早し辻説法	夕顔	植物
6161	明治39年	夏の部	合歓咲くや日はあか／＼と西の海	合歓の花	植物
6162	明治39年	夏の部	雨乞の人むら／＼と登山哉	雨乞	人事
6163	明治39年	夏の部	一盆の水くつがへす簟	簟	人事
6164	明治39年	夏の部	寺深く微凉を慕ひ至りけり	凉し	時候
6165	明治39年	夏の部	夏菊にまゆ商人をもてなしぬ	夏菊	植物
6166	明治39年	夏の部	朝露や晒し遺れし晒菅	菅刈	人事
6167	明治39年	夏の部	露おくや踏まれずにある晒菅	菅刈	人事
6168	明治39年	夏の部	葭簀して藍扱く女白かりし	藍扱く	人事
6169	明治39年	夏の部	野の村や麻より低き家ばかり	麻	植物
6171	明治39年	夏の部	昼顔のからまるものも無かりけり	晝顔	植物
6173	明治39年	夏の部	臑の蚊を打つたびに我句は成りぬ	蚊	動物
6174	明治39年	夏の部	南瓜咲いて民の愠りの解けにけり	南瓜の花	植物
6175	明治39年	夏の部	南瓜作る南瓜の花が咲きにけり	南瓜の花	植物
6176	明治39年	夏の部	万巻の書を讀破しぬ心太	心太	人事
6177	明治39年	夏の部	蟇鳴くや家に焚餘の書を藏む	蟇	動物
6178	明治39年	夏の部	書庫を出る洒掃の子や今年竹	若竹	植物
6179	明治39年	夏の部	蒭蕘の輩ラ凉し書を讀む	凉し	時候
6180	明治39年	夏の部	白蓮や一日外典に目をさらす	蓮	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6181	明治39年	夏の部	五車の蠹魚と我老にけり簟	簟	人事
6182	明治39年	夏の部	江山を藏めて凉し書庫の中	凉し	時候
6478	明治40年	夏の部	花に負き句を鬪はす牡丹かな	牡丹	植物
6479	明治40年	夏の部	目に残る扇流や河鹿鳴く	河鹿	動物
6480	明治40年	夏の部	夏山に居て材木の荒削り	夏山	地理
6481	明治40年	夏の部	先生の爲に蚊火焚く夜学哉	蚊遣	人事
6482	明治40年	夏の部	蚊やり草薫と蕕とを分ちけり	蚊遣	人事
6483	明治40年	夏の部	篭り人少れに來る蚊に起きてあり	蚊	動物
6484	明治40年	夏の部	湯上りや妻が刈来る蚊やり草	蚊遣	人事
6485	明治40年	夏の部	一片の心蚊をやく故人かな	蚊遣	人事
6486	明治40年	夏の部	白頭の今に苦吟や蚊を悪む	蚊	動物
6487	明治40年	夏の部	今朝とりし菊の葉の虫や雹がふる	雹	天文
6488	明治40年	夏の部	百合を折る一時の興や峠越え	百合	植物
6489	明治40年	夏の部	たが家の墓所や大きな百合の花	百合	植物
6490	明治40年	夏の部	百合活けて山野の氣味を覚えけり	百合	植物
6491	明治40年	夏の部	夏の日を恐るゝ人や百合の花	百合	植物
6492	明治40年	夏の部	蕗の谷行く／＼百合の山路哉	百合	植物
6493	明治40年	夏の部	風に偃す草と異り百合の花	百合	植物
6494	明治40年	夏の部	野百合咲いて軍兵の目を凉しくす	百合	植物
6495	明治40年	夏の部	山裾の岬の幟吹かれけり	幟	人事
6496	明治40年	夏の部	夏山や雛といふ馬牽来る	夏山	地理
6497	明治40年	夏の部	短夜の事かきそへつ文のはし	短夜	時候
6498	明治40年	夏の部	述懐の洒々落々と明易き	短夜	時候
6499	明治40年	夏の部	地氣動くところ果して清水かな	清水	地理
6500	明治40年	夏の部	劍客と袂を分つ清水かな	清水	地理
6501	明治40年	夏の部	夜出でしけものゝ跡や草しみず	清水	地理
6502	明治40年	夏の部	商人の銭鳴らしけり岩清水	清水	地理
6503	明治40年	夏の部	人絶えて溢るゝばかり清水哉	清水	地理
6504	明治40年	夏の部	滴りの金石にしむ清水かな	清水	地理
6505	明治40年	夏の部	清水湧く一路当帰の茂かな	清水	地理
6506	明治40年	夏の部	日光の草に洽き清水哉	清水	地理
6507	明治40年	夏の部	村の子の草くゞり行く清水哉	清水	地理
6508	明治40年	夏の部	村塾の罰則清水汲ましめぬ	清水	地理
6509	明治40年	夏の部	あけやすく既に幟の二三本	幟	人事
6510	明治40年	夏の部	牡丹さげて競馬の泥を避けにけり	牡丹	植物
6512	明治40年	夏の部	行々子も鳴かず豊葦原の國	行々子	動物
6513	明治40年	夏の部	海濶の二字を題しぬ沖膾	沖膾	人事
6514	明治40年	夏の部	賓客の到りまもなく夕立哉	夕立	天文
6515	明治40年	夏の部	蓬生やかゝる小家に金魚玉	金魚玉	人事
6516	明治40年	夏の部	象潟の鶴は返らぬ青田哉	青田	地理
6517	明治40年	夏の部	松葉ちる一々法の韻きかな	松落葉	植物
6518	明治40年	夏の部	經藏を風に開くや松落葉	松落葉	植物
6519	明治40年	夏の部	萍や木深く見えて城戸の趾	萍	植物
6520	明治40年	夏の部	萍に生れしと見る虫のとぶ	萍	植物
6521	明治40年	夏の部	萍や鐘は水樹に隠見す	萍	植物
6522	明治40年	夏の部	浮草や蝉鳴く森を水の上	萍	植物
6523	明治40年	夏の部	浮草に新たに蓮の巻葉哉	萍	植物
6524	明治40年	夏の部	萍に立よりてやゝ吹かれけり	萍	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6525	明治40年	夏の部	萍に蚊火の烟の消にけり	萍	植物
6526	明治40年	夏の部	萍も土用の花と咲にけり	萍	植物
6527	明治40年	夏の部	萍のはびこるまゝや水平	萍	植物
6528	明治40年	夏の部	虫干の室に隣りて謡かな	蟲干	人事
6529	明治40年	夏の部	虫干や天地に留む一詩巻	蟲干	人事
6530	明治40年	夏の部	蒭蕘の何にさゝやく曝書哉	蟲干	人事
6531	明治40年	夏の部	書をさらし終る松風蘿月哉	蟲干	人事
6532	明治40年	夏の部	蝉鳴くと行く道の辺の泉哉	蝉	動物
6533	明治40年	夏の部	蝉すゞし山に不断の法の声	蝉	動物
6534	明治40年	夏の部	清淨の身を蝉のなく下山哉	蝉	動物
6535	明治40年	夏の部	凉しげに蝉聴ゝおはすとも見えず	蝉	動物
6536	明治40年	夏の部	山深きかしこさよ蝉鳴くさへも	蝉	動物
6537	明治40年	夏の部	此山の巨人の跡や雨祈る	雨乞	人事
6538	明治40年	夏の部	雨乞の地を卜す崖の青すゝき	雨乞	人事
6539	明治40年	夏の部	雨祈るこの大木を力かな	雨乞	人事
6540	明治40年	夏の部	雨乞の人狼籍す百合の花	雨乞	人事
6541	明治40年	夏の部	人泊めし蚊帳の釣手も名残哉	蚊帳	人事
6542	明治40年	夏の部	白扇に夏菊そへて使かな	夏菊	植物
6543	明治40年	夏の部	夏菊を乞へば主人の吝さかに	夏菊	植物
6544	明治40年	夏の部	夏菊にそゝぐべき水一荷哉	夏菊	植物
6545	明治40年	夏の部	夏菊にまじり剪られつ雑の草	夏菊	植物
6546	明治40年	夏の部	夏菊に人旱魃の立咄	夏菊	植物
6547	明治40年	夏の部	うろくつの耳すますらん御祓川	御祓	人事
6548	明治40年	夏の部	七種のみそきの供物星凉し	御祓	人事
6549	明治40年	夏の部	水ナ上の蒼々の樹や御祓川	御祓	人事
6550	明治40年	夏の部	御祓人通ふ草原小石原	御祓	人事
6551	明治40年	夏の部	神の御衣想ふみそぎの水の色	御祓	人事
6552	明治40年	夏の部	御祓川尊きものに瀬を早み	御祓	人事
6553	明治40年	夏の部	御祓川岸辺に長き青すゝき	御祓	人事
6554	明治40年	夏の部	波さわぐ物の恐れや御祓川	御祓	人事
6555	明治40年	夏の部	御祓川雲吹落す嵐山	御祓	人事
6556	明治40年	夏の部	夕祓水ひた／＼と岸辺かな	御祓	人事
6557	明治40年	夏の部	清水近く飯白き宿と記しけり	清水	地理
6558	明治40年	夏の部	猿酒に明易き夜や君が醉	短夜	時候
6559	明治40年	夏の部	朴すゞし君が行李のおきどころ	凉し	時候
6560	明治40年	夏の部	冷酒の醉を忘るな山膾	冷酒	人事
6561	明治40年	夏の部	夏菊の貧を侮りぬ仇し草	夏菊	植物
6562	明治40年	夏の部	百合の香に驚いて相別れけり	百合	植物
6563	明治40年	夏の部	糠漬の浴き別れや瓜茄子	雑	雑
6564	明治40年	夏の部	語合ふ明日の別を灯取虫	灯取蟲	動物
6565	明治40年	夏の部	灯取虫の魂君が草枕	灯取蟲	動物
6566	明治40年	夏の部	夕顔に早く蛸つる病かな	夕顔	植物
6567	明治40年	夏の部	鑛毒に遠く夕顔咲にけり	夕顔	植物
6568	明治40年	夏の部	夕皃やいつこ神鳴る宵の癖	夕顔	植物
6569	明治40年	夏の部	相似たり夕皃棚のありどころ	夕顔	植物
6570	明治40年	夏の部	夕皃を見つ刈にゆく蚊やり草	夕顔	植物
6571	明治40年	夏の部	納凉する塩噌の外の一間哉	納凉	人事
6573	明治40年	夏の部	夏菊の家一つ舟果にけり	夏菊	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6574	明治40年	夏の部	今日の瀬の鮎居ずなりし故郷哉	鮎	動物
6575	明治40年	夏の部	吾を知る人や乏しき鮎くれし	鮎	動物
6576	明治40年	夏の部	鮎くるゝ人に鄙吝の心なし	鮎	動物
6577	明治40年	夏の部	見下ろすや鮎つる人に岩高き	鮎	動物
6578	明治40年	夏の部	山に居る官人に鮎乞はれけり	鮎	動物
6579	明治40年	夏の部	鮎を釣る朝のいとまや川近き	鮎	動物
6580	明治40年	夏の部	山門の金剛玉や麦埃り	麦打ち	人事
6840	明治41年	夏の部	編笠に月照るばかり夜道かな	編笠	人事
6841	明治41年	夏の部	花苗のあだに伸びたり田植過	田植	人事
6842	明治41年	夏の部	心太すすって自問自答かな	心太	人事
6843	明治41年	夏の部	わが家の藏書乏しうして涼し	涼し	時候
6844	明治41年	夏の部	喬木の生立ち涼し沢一つ	涼し	時候
6845	明治41年	夏の部	風蓮雨蓮此意を以て詩を品す	蓮	植物
6846	明治41年	夏の部	山郭やこの一筋の御祓川	御祓	人事
6847	明治41年	夏の部	繭屑のえり屑も満つ古麻小笥	繭	人事
6848	明治41年	夏の部	硯賣重荷卸すやまゆむしろ	繭	人事
6849	明治41年	夏の部	詩の意公主に媚ぶや闘草	闘草	人事
6850	明治41年	夏の部	雨雲の千里百里や闘草	闘草	人事
6851	明治41年	夏の部	齷齪と世に處る人や蚤一つ	蚤	動物
6852	明治41年	夏の部	たちぎわの朝雷や蚤の宿	蚤	動物
6853	明治41年	夏の部	洪水を見に早起や蚤の宿	蚤	動物
6854	明治41年	夏の部	目ふさげばきのふの花やのみの宿	蚤	動物
6855	明治41年	夏の部	佗人の先づ知る蚤や花うつぎ	蚤	動物
6856	明治41年	夏の部	夏の雨浴びて尚釣るけしきかな	夏の雨	天文
6857	明治41年	夏の部	聞知らぬ農話の興や夏の雨	夏の雨	天文
6858	明治41年	夏の部	一炉けぶる幻住庵や夏の雨	夏の雨	天文
6859	明治41年	夏の部	夏の雨牧畜の構大なり	夏の雨	天文
6860	明治41年	夏の部	けしの如く敦盛死して夏の雨	夏の雨	天文
6861	明治41年	夏の部	野辺送三百人や草茂る	草茂る	植物
6862	明治41年	夏の部	茂りゆく山辺薄命佳人すむ	茂り	植物
6864	明治41年	夏の部	一草の茂れるも一伽藍かな	草茂る	植物
6865	明治41年	夏の部	羅や花活けて妻の主ぶる	羅	人事
6866	明治41年	夏の部	さをとめの早起の戸や水鶏啼く	早乙女	人事
6867	明治41年	夏の部	新妻の顔の黒子や鮓を押す	鮓	人事
6868	明治41年	夏の部	隣人の何に竹割る明易き	短夜	時候
6869	明治41年	夏の部	鮎つるとこそ見ゆれ肩聳かす	鮎	動物
6870	明治41年	夏の部	老鶯や行李が届く假の宿	老鶯	動物
6871	明治41年	夏の部	竹植ゑて小酌常と異ならず	竹植る	人事
6872	明治41年	夏の部	なべて家は桜青葉や竹植うる	竹植る	人事
6873	明治41年	夏の部	桃の実は兒孫の汁や竹植うる	竹植る	人事
6874	明治41年	夏の部	半日小集竹植しつかれあり	竹植る	人事
6875	明治41年	夏の部	来べき人来ずと文あり竹うゝる	竹植る	人事
6876	明治41年	夏の部	大なる泉を控え酒煮哉	煮酒	人事
6877	明治41年	夏の部	蕗茂る里見に来れば酒煮哉	煮酒	人事
6878	明治41年	夏の部	花にそゝぐ夕や酒煮の家あるじ	煮酒	人事
6879	明治41年	夏の部	椎一木酒煮の僕こぞりけり	煮酒	人事
6880	明治41年	夏の部	酒煮祝ふお僧尊くおはしけり	煮酒	人事
6881	明治41年	夏の部	斯道の絶えずも芭蕉玉をまく	芭蕉玉卷	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6882	明治41年	夏の部	夏篭や翊々として虫のとぶ	夏籠	人事
6883	明治41年	夏の部	蛾と化して白き翅や虎が雨	蛾	動物
6884	明治41年	夏の部	蚊柱や馬賣惜む頑に	蚊	動物
6885	明治41年	夏の部	閨と云へど女も棲まず栁の花	栁の花	植物
6886	明治41年	夏の部	鍛冶もすむ山手の茂文庫見ゆ	茂り	植物
6887	明治41年	夏の部	三ヶ条書庫の掟や蝉すゞし	蝉	動物
6888	明治41年	夏の部	編みさしの図書目録や梅黄ばむ	梅の實	植物
6889	明治41年	夏の部	日上るや降らぬにきまる旱雲	旱	天文
6890	明治41年	夏の部	水をせく石動かすや旱村	旱	天文
6891	明治41年	夏の部	神事佛事なき一郷の旱哉	旱	天文
6892	明治41年	夏の部	養魚地に鳥捕る鶚も旱哉	旱	天文
6893	明治41年	夏の部	水源地鬱蒼として旱かな	旱	天文
6894	明治41年	夏の部	紙魚出る頃に終りぬ嵯峨日記	紙魚	動物
6895	明治41年	夏の部	打ち／＼し紙魚弔ふや秋隣	紙魚	動物
6896	明治41年	夏の部	愁へては行李のしみをはたきけり	紙魚	動物
6897	明治41年	夏の部	夏篭や肱を曲ぐれば紙魚ひそむ	紙魚	動物
6898	明治41年	夏の部	掃へどもしみ出る事よ諸子百家	紙魚	動物
6899	明治41年	夏の部	はた／＼としみ打つ祖父や晝寐時	紙魚	動物
6900	明治41年	夏の部	硯石の産地の論や百合の花	百合	植物
6901	明治41年	夏の部	打水や虫は書灯の方へ飛ぶ	打水	人事
6902	明治41年	夏の部	打水や怪鳥も来鳴く庭木にて	打水	人事
6903	明治41年	夏の部	小半日習字打水したりけり	打水	人事
6904	明治41年	夏の部	打水の折から一騎通りけり	打水	人事
6905	明治41年	夏の部	打水に猫の子走る庭浅し	打水	人事
6906	明治41年	夏の部	地拓けバ先づ馬鈴薯や夏野原	夏野	地理
6907	明治41年	夏の部	夏野路や沼沿ひときけど沼も見えず	夏野	地理
6908	明治41年	夏の部	放牧の馬に濁れり夏野川	夏野	地理
6909	明治41年	夏の部	蹄跡中窪路の夏野哉	夏野	地理
6910	明治41年	夏の部	松ありて祖師に似し憩ふ夏野かな	夏野	地理
6911	明治41年	夏の部	景にふれて帰山の念や舟遊	舟遊	人事
6912	明治41年	夏の部	桑の実や心に会して古詩をよむ	桑の實	植物
6913	明治41年	夏の部	山荒の話はたごに虹近し	虹	天文
6914	明治41年	夏の部	渡守の後ろ曠野や虹の空	虹	天文
6915	明治41年	夏の部	藻がくれに子鴨うきけり虹明り	虹	天文
6916	明治41年	夏の部	虹うつる山裾道の日仐かな	虹	天文
6917	明治41年	夏の部	層々の山迢々の水虹あかり	虹	天文
7108	明治42年	夏の部	筍に花漬の約償ひぬ	筍	植物
7109	明治42年	夏の部	反古清書筍の皮棄にけり	筍	植物
7110	明治42年	夏の部	提婆品筍の皮剥き落す	筍	植物
7111	明治42年	夏の部	木曽路より音信到る袷かな	袷	人事
7112	明治42年	夏の部	大杯をあぐと誇張の幟かな	幟	人事
7113	明治42年	夏の部	木立出れば馬に鞭つ幟かな	幟	人事
7114	明治42年	夏の部	水攻の河も空しき幟かな	幟	人事
7115	明治42年	夏の部	朴の葉に糧裹む慣ひ幟哉	幟	人事
7116	明治42年	夏の部	家の吉事栽うる門木や幟立つ	幟	人事
7118	明治42年	夏の部	一景に一神守護や雲の峰	雲の峰	天文
7120	明治42年	夏の部	游艸にとゞむ歌曲や夏柳	夏柳	植物
7122	明治42年	夏の部	此水も此樹も石も風かほる	薫風	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7123	明治42年	夏の部	熊笹の刈場を谷のさみだるゝ	五月雨	天文
7124	明治42年	夏の部	五月雨や一物の香炉賣惜む	五月雨	天文
7125	明治42年	夏の部	鷺を射る的なす森や五月雨	五月雨	天文
7126	明治42年	夏の部	女沼男沼通路知らずさみだるゝ	五月雨	天文
7127	明治42年	夏の部	生き死ぬる毛虫羽虫や五月雨	五月雨	天文
7128	明治42年	夏の部	毒草にふれし歎や雨祈る	雨乞	人事
7129	明治42年	夏の部	神業の雨ふれば峯渡る鹿	雨乞	人事
7130	明治42年	夏の部	請雨法夕に開く花の前	雨乞	人事
7131	明治42年	夏の部	遠雷や筆端に墨みちぬれバ	雷	天文
7132	明治42年	夏の部	河中の根木を漁人の納涼哉	納涼	人事
7133	明治42年	夏の部	夏の山雷落つるけはひ哉	夏山	地理
7134	明治42年	夏の部	百姓の手負いたはる瓜の畑	瓜	植物
7243	明治43年	夏の部	諸木輪講一石黙す夏行かな	安居	人事
7244	明治43年	夏の部	結夏の偈朝に夕に朱を点ず	安居	人事
7245	明治43年	夏の部	一字酬う到来の筆や安居寺	安居	人事
7246	明治43年	夏の部	角なきが如牙なきが如一夏の字	安居	人事
7247	明治43年	夏の部	妄執の焔夏經の頭上かな	安居	人事
7248	明治43年	夏の部	酒をたつ一夏堅固や雲の峰	安居	人事
7249	明治43年	夏の部	つみすつる夏花汲みすつる泉哉	夏花	人事
7251	明治43年	夏の部	夏木描く傍鬼の話哉	夏	時候
7252	明治43年	夏の部	一宿に足る交や露涼し	夏の露	天文
7253	明治43年	夏の部	草木の名を知る誇り蚊火あるじ	蚊遣	人事
7254	明治43年	夏の部	客頻りに山容を賞す蚊やり時	蚊遣	人事
7255	明治43年	夏の部	里蚊やり頃になれバ山おろし吹く	蚊遣	人事
7256	明治43年	夏の部	君にけぶる蚊火よと妻のあふきけり	蚊遣	人事
7257	明治43年	夏の部	蚊火に加ふ金泥の反古二三片	蚊遣	人事
7337	明治44年	夏の部	遠まはりして水細に綿の花	棉の花	植物
7338	明治44年	夏の部	馬好きの暮鶏好きの旦綿の花	棉の花	植物
7340	明治44年	夏の部	薫風や蕗の主人にさそはれて	薫風	天文
7341	明治44年	夏の部	水打て鯉の大きさ語りけり	打水	人事
7343	明治44年	夏の部	帰路一字改竄思ふ山清水	清水	地理
7344	明治44年	夏の部	初祖遠忌藪の清水に蹊あり	清水	地理
7345	明治44年	夏の部	杣清水娘の色を白うせり	清水	地理
7346	明治44年	夏の部	轡鳴らして人警むる清水哉	清水	地理
7347	明治44年	夏の部	紙魚の如き君と相見る清水哉	清水	地理
7349	明治44年	夏の部	幽明相隔つ話柄や苔清水	清水	地理
7351	明治44年	夏の部	説法ハ瓜の鴉に利くまいぞ	瓜	植物
7430	明治45年	夏の部	此樹あればぞ此里のある夏の月	夏の月	天文
7432	明治45年	夏の部	砧女も其父母もありぬべし	砧	人事
7434	明治45年	夏の部	割前を出さざなるまい心太	心太	人事
7436	明治45年	夏の部	水飯をま白しと見る目に涙	水飯	人事
7438	明治45年	夏の部	潭心の寒きより寒し梅の花	梅	植物
7440	明治45年	夏の部	春服やつゝじに匂ふ人の顔	春服	人事
7442	明治45年	夏の部	藥舐る禽にかあらん木下闇	木下闇	植物
7444	明治45年	夏の部	流泉を饒舌と做す簟	簟	人事
7446	明治45年	夏の部	蝉涼し來往に石をふむ流レ	涼し	時候
7448	明治45年	夏の部	遠雷や突兀として起句雄に	雷	天文
7450	明治45年	夏の部	木犀や晨に淡き詩人の灯	木犀	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7452	明治45年	夏の部	木がくれて童子も立てり夕紅葉	紅葉	植物
7454	明治45年	夏の部	老松の雪振落し／＼	雪	天文
7456	明治45年	夏の部	露の珠を吸尽しけむ螢飛ぶ	螢	動物
7458	明治45年	夏の部	双飛鳥一莖葦よだち寂しうす	夜立ち	天文
7459	明治45年	夏の部	峡を下る箭の舟やよだち雲裂けて	夜立ち	天文
7460	明治45年	夏の部	旱鬼の角碎けよと夕立かな	夕立	天文
7461	明治45年	夏の部	誰が斧に祟りて深山夕立哉	夕立	天文
7462	明治45年	夏の部	夕立の狼籍たりや里神樂	夕立	天文
7463	明治45年	夏の部	羽うつ鳥の怪異やよだちの水烟	夜立ち	天文
7465	明治45年	夏の部	霹靂として神去りましぬ夏の雲	夏の雲	天文
7467	明治45年	夏の部	早稲の香に天機洩し聞ゆ畏さよ	稻	植物
7469	明治45年	夏の部	九二六五相臨む吉今朝の秋	今朝の秋	時候
7471	明治45年	夏の部	蚊火細う猶寐ねずあり小百姓	蚊遣	人事
7472	明治45年	夏の部	虫掃ふこと丁寧や零墨も	蟲干	人事
7473	明治45年	夏の部	兀ねんと居れバ灯取虫一度す	灯取蟲	動物
7474	明治45年	夏の部	時を違へず蜩の啼きいづる	蜩	動物
7475	明治45年	夏の部	秋近き何に指ざす漁者樵者	秋近し	時候
7477	明治45年	夏の部	材木に啼きついて蟬の尚あつし	蟬	動物
7479	明治45年	夏の部	巖踏みし足の埃や鮎の宿	鮎	動物
7595	大正２年	夏の部	梅若葉斯人在焉と又思ふ	若葉	植物
7596	大正２年	夏の部	心相許す新樹の風の前（全縣青年大会）	新樹	植物
7598	大正２年	夏の部	梅黄ばむも待たざりし才を抱く君	梅の實	植物
7600	大正２年	夏の部	山の雄河の大幟立つところ	幟	人事
7604	大正２年	夏の部	家々祭る天神栁の青きにも	青栁	植物
7606	大正２年	夏の部	庭前を江湖に夏書すゝみけり	夏書	人事
7607	大正２年	夏の部	朴鳴りに清水得つ日を仰ぐ山	清水	地理
7608	大正２年	夏の部	焚火跡を山五月雨の漂はす	五月雨	天文
7609	大正２年	夏の部	館の跡見て藻の花の裏沼へ	藻の花	植物
7610	大正２年	夏の部	館の跡見巡りしつかれ更衣	更衣	人事
7611	大正２年	夏の部	さみだるゝ小家河童の宿にもや	五月雨	天文
7612	大正２年	夏の部	雲低し蓴舟と遠く見てすぎぬ	蓴菜	植物
7613	大正２年	夏の部	川狩の友まつ間登山の詩を作る	川狩	人事
7614	大正２年	夏の部	明日にせまる來遊の事風かほる	薫風	天文
7617	大正２年	夏の部	黄帷子着たり靈異記の一節を眼に	帷子	人事
7621	大正２年	夏の部	轉眼睛即ち萩たり桔梗たり	雜	雜
7623	大正２年	夏の部	水力の事語り尽く蟬の声	蟬	動物
7624	大正２年	夏の部	黙すれば涼し汝と枝蛙	涼し	時候
7625	大正２年	夏の部	瀧をうしろ炭やきと百合に問答す	滝	地理
7627	大正２年	夏の部	山鳥の羽搏を横に百合山路	百合	植物
7628	大正２年	夏の部	奥へ／＼蹄の跡を百合も見て	百合	植物
7629	大正２年	夏の部	滝の景を大きく説きつ山百合も	百合	植物
7630	大正２年	夏の部	百合の風人まつ心とぞなりぬ	百合	植物
7631	大正２年	夏の部	百合の句案明日又越えん山の事	百合	植物
7731	大正３年	夏の部	蛍追へバ蛍追ふらしき人見えつ	螢	動物
7732	大正３年	夏の部	手親ら蚊やりして仰ぐ門大樹	蚊遣	人事
7733	大正３年	夏の部	彗星出るあたり見て涼しと思ふ	涼し	時候
7734	大正３年	夏の部	打水に花ほのかはゝき星出でむ	打水	人事
7735	大正３年	夏の部	青田ほとり碑の裏の文字名残よむ	青田	地理

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7737	大正３年	夏の部	松を出て涼し竹に入る尚すゞし	涼し	時候
7738	大正３年	夏の部	虫干の綺羅を目に樹間飛ぶ雀	蟲干	人事
7792	大正４年	夏の部	梅雨雲に翔りて深山鳥の來る	梅雨雲	天文
7795	大正４年	夏の部	夜学用の薪朽ちたり桐の花	桐の花	植物
7796	大正４年	夏の部	百合咲くや水浴ひし馬の蹄鳴り	百合	植物
7944	大正５年	夏の部	餘花一樹山中の地氣もゆる也	餘花	植物
7945	大正５年	夏の部	若葉照りに干割るゝ薪山成せり	若葉	植物
7946	大正５年	夏の部	舟峽を上り螢に泊てにけり	螢	動物
7947	大正５年	夏の部	漁區の禁解けしに客や夏霞	夏霞	天文
7948	大正５年	夏の部	白雲青山幟立つ日かな	幟	人事
7949	大正５年	夏の部	杉深く我足跡に滴りぬ	滴り	地理
7950	大正５年	夏の部	毛虫ハ皆蕁麻に附けと思ふ	毛蟲	動物
7951	大正５年	夏の部	登臨の帽子吹かるゝ若葉哉	若葉	植物
7952	大正５年	夏の部	老鶯や人ハ泉に歩みよる	老鶯	動物
7953	大正５年	夏の部	獨力に岨道成りぬ青芒	青芒	植物
7954	大正５年	夏の部	初蝉や栽ゑし樹またく根づきたり	蝉	動物
7956	大正５年	夏の部	水草の尚生ひまさる五月雲	梅雨雲	天文
7957	大正５年	夏の部	よしのびて鳥來る朝や水の色	葦若葉	植物
7959	大正５年	夏の部	芍藥も見ず鶏のあはただし	芍藥	植物
7960	大正５年	夏の部	短夜の戸に物の苗くれに來る	短夜	時候
7961	大正５年	夏の部	鳴神の夜の間に芭蕉ほぐれたり	雷	天文
7963	大正５年	夏の部	夏の露と答ふるすべも知らざりき	夏の露	天文
7965	大正５年	夏の部	花菖蒲の笑むなべに汝が顔を見る	花菖蒲	植物
7966	大正５年	夏の部	青梅を見るや詩作の思立ち	梅の實	植物
7967	大正５年	夏の部	暑き日のたゞ中を燕閃きぬ	暑さ	時候
7968	大正５年	夏の部	六月の樹々の光に歩むかな	六月	時候
7969	大正５年	夏の部	青嵐の餘氣屢す讀書樓	青嵐	天文
7970	大正５年	夏の部	五月雨に籠り藥を點検す	五月雨	天文
7971	大正５年	夏の部	雲の峰を看る放參の法師原	雲の峰	天文
7972	大正５年	夏の部	眞清水に浸す我魚籃の魚光る	清水	地理
7973	大正５年	夏の部	夕立雲迫るに釣場守るかな	夕立	天文
7974	大正５年	夏の部	火を遁れて潜む毒蛾の明易き	短夜	時候
7975	大正５年	夏の部	早起瓜もぎに行けバ瓜の花	瓜の花	植物
7976	大正５年	夏の部	紫陽花に追へども去らぬ睡魔哉	紫陽花	植物
7977	大正５年	夏の部	清水溢れて大川に注ぐ也	清水	地理
7978	大正５年	夏の部	隣家の南瓜蔓垣を越來る	南瓜の花	植物
7979	大正５年	夏の部	蝉高樹吾兒あまりに小さき哉	蝉	動物
7980	大正５年	夏の部	潮引くが如炎天の暮にけり	炎天	天文
7981	大正５年	夏の部	水飯に水の出處の石を想ふ	水飯	人事
7984	大正５年	夏の部	打水に大地息づく木立かな	打水	人事
7985	大正５年	夏の部	柳低く旱の土にしだれけり	旱	天文
7986	大正５年	夏の部	照り砂に人の汗零つ胡麻の花	胡麻の花	植物
7987	大正５年	夏の部	わが一人行水了へつ秋隣	秋近し	時候
7988	大正５年	夏の部	雨を欲する人群がりぬ暮の星	旱	天文
8105	大正６年	夏の部	喬木の都となりぬ鯉幟	鯉幟	人事
8109	大正６年	夏の部	うの花の寒きが中に獨在らむ	卯の花	植物
8111	大正６年	夏の部	樹ハ喬木となりにけり更衣	更衣	人事
8112	大正６年	夏の部	短夜や靄の中なる川明り	短夜	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8113	大正６年	夏の部	五月雲過ぐる山又山の勢り	梅雨雲	天文
8114	大正６年	夏の部	新樹風あり書齋整頓す	新樹	植物
8115	大正６年	夏の部	一束の花苗土間の梅雨寒に	梅雨寒	時候
8116	大正６年	夏の部	桑の實や徑曲れバ明るき野	桑の實	植物
8118	大正６年	夏の部	遠方の追悼會我に杜宇	時鳥	動物
8120	大正６年	夏の部	如意一揮青梅故の如く也	梅の實	植物
8123	大正６年	夏の部	蚺の中に皆目覚め居り水の音	蚊帳	人事
8124	大正６年	夏の部	蝉の聲水の音人々の耳	蝉	動物
8125	大正６年	夏の部	書中句々皆我を責む雲の峰	雲の峰	天文
8126	大正６年	夏の部	夕蝉に水明り舟岸につく	蝉	動物
8128	大正６年	夏の部	橋渡る人の額や夏の月	夏の月	天文
8130	大正６年	夏の部	鳥人の踵をかへす雲涼し	涼し	時候
8131	大正６年	夏の部	露涼しく今朝又一花開きけり	夏の露	天文
8132	大正６年	夏の部	前栽に灌ぐ水足る涼しさよ	涼し	時候
8133	大正６年	夏の部	石の為めに湛へ流るゝ清水哉	清水	地理
8134	大正６年	夏の部	草刈の日裏に刈るやきり〻す	草刈	人事
8136	大正６年	夏の部	愛著の焔の外の夏花かな	夏花	人事
10512	大正６年	夏の部	竹揺れて湖も見えけり夕納涼	夕涼	天文
10658	大正６年	夏の部	竹揺れて湖も見えけり夕涼み	夕涼	天文
8274	大正７年	夏の部	脈々の靈気相知る樹々若葉	若葉	植物
8275	大正７年	夏の部	家々やおのれ引來て菖蒲葺く	菖蒲葺	人事
8276	大正７年	夏の部	葉櫻や逢はまく思ふ人遠き	葉櫻	植物
8277	大正７年	夏の部	大樹なれバ欝々として青嵐	青嵐	天文
8279	大正７年	夏の部	櫻若葉柩に紅き蕊の降る	若葉	植物
8281	大正７年	夏の部	さみだるゝ中やあまりに小さき塚	五月雨	天文
8282	大正７年	夏の部	五月雨の山際あかし夜明かも	五月雨	天文
8283	大正７年	夏の部	五月雨の道の焚火に旅人かな	五月雨	天文
8284	大正７年	夏の部	群木相倚りて五月雨地を流る	五月雨	天文
8285	大正７年	夏の部	さみだれの地に印す馬の蹄かな	五月雨	天文
8286	大正７年	夏の部	山越やさみだるゝ中に餉くふ	五月雨	天文
8287	大正７年	夏の部	牡丹蕊のみこの國のさみたれに	五月雨	天文
8288	大正７年	夏の部	さみだるゝ頃の獣に夜の人	五月雨	天文
8289	大正７年	夏の部	さみだれの髓にやしまむ古芭蕉	五月雨	天文
8290	大正７年	夏の部	五月雨に遠く齎らしぬ花菖蒲	五月雨	天文
8292	大正７年	夏の部	湖の方へ薄暑の車吹かれけり	薄暑	時候
8294	大正７年	夏の部	墓の前に我が立つ葭切も啼かず	行々子	動物
8296	大正７年	夏の部	夏草のかきわくべくもあらぬ哉	夏草	植物
8298	大正７年	夏の部	我が出し山やつゆ雲かゝりゐる	梅雨雲	天文
8299	大正７年	夏の部	深山鳥姿あり／＼とつゆ寒に	梅雨寒	時候
8300	大正７年	夏の部	つゆ雲や波平らかに湖の神	梅雨雲	天文
8301	大正７年	夏の部	つゆ冥し驛樹行人友の如く	梅雨	天文
8302	大正７年	夏の部	梅雨空や矢場の草を等閑に	梅雨空	天文
8304	大正７年	夏の部	朝日子の出づる國也幟竿	幟	人事
8306	大正７年	夏の部	蚤よ蚊よと物思ふ遑なかりけり	雑	雑
8308	大正７年	夏の部	頌曰紙魚游ぶところ亦江山	紙魚	動物
8309	大正７年	夏の部	水饒かに木々吸い剰す涼しさよ	涼し	時候
8310	大正７年	夏の部	葛藟を手繰りをり山人涼し	涼し	時候
8311	大正７年	夏の部	一輪の花日の夕を涼しくす	涼し	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8312	大正７年	夏の部	山里ハ美婦の行くさへ涼しかり	涼し	時候
8313	大正７年	夏の部	月の出をまつ人々に山涼し	涼し	時候
8314	大正７年	夏の部	山陰の雷鳴簾吹く涼し	涼し	時候
8315	大正７年	夏の部	涼しさに伸びて夜明の瓜の花	涼し	時候
8316	大正７年	夏の部	心涼し南瓜の花の大なるも	涼し	時候
8317	大正７年	夏の部	打水に得堪へで涼し花細か	涼し	時候
8318	大正７年	夏の部	宿の灯の涼し登山のかしま立	涼し	時候
8319	大正７年	夏の部	かゝる難所を剛力と行く涼し	涼し	時候
8320	大正７年	夏の部	剛力は木石の如く涼しけれ	涼し	時候
8321	大正７年	夏の部	難所涼し剛力も巖石の如	涼し	時候
8322	大正７年	夏の部	祠涼しく初茄子献げたる	涼し	時候
8323	大正７年	夏の部	大川の出水定まる夕涼し	涼し	時候
8324	大正７年	夏の部	郡集に足りて濁らず山清水	清水	地理
8325	大正７年	夏の部	壯佼の手々の刄物や山清水	清水	地理
8470	大正８年	夏の部	葩を斂めて牡丹晩に在り	牡丹	植物
8471	大正８年	夏の部	牡丹深沈吾ひとり近寄りぬ	牡丹	植物
8472	大正８年	夏の部	牡丹大方崩れ物の音もなし	牡丹	植物
8473	大正８年	夏の部	庭荒れしがまゝに牡丹ちり尽す	牡丹	植物
8474	大正８年	夏の部	薯山の如し夏野の一家族	夏野	地理
8475	大正８年	夏の部	藪中に奔馬を避くる夏野哉	夏野	地理
8476	大正８年	夏の部	鑛脈のいづち走れる夏野哉	夏野	地理
8477	大正８年	夏の部	水に生きて人現はれし夏野哉	夏野	地理
8478	大正８年	夏の部	只一人雷雨を冒す夏野哉	夏野	地理
8479	大正８年	夏の部	夏野ゆきつくしぬ大河横はり	夏野	地理
8480	大正８年	夏の部	夏野ゆくや注ぎ逼き雨の中	夏野	地理
8481	大正８年	夏の部	夏野年々草に朽ちゆく招魂標	夏野	地理
8482	大正８年	夏の部	火の如く雨蒸れ騰る夏野哉	夏野	地理
8483	大正８年	夏の部	雲冥し夏野に隔つ海の音	夏野	地理
8484	大正８年	夏の部	暮歩々に草の香沈む夏野哉	夏野	地理
8485	大正８年	夏の部	奔馬避けて夏野に立つや風斜	夏野	地理
8487	大正８年	夏の部	蚊遣火の消えしがまゝや佛の灯	蚊遣	人事
8491	大正８年	夏の部	苺摘來て歸省の兄に分ちけり	苺	植物
8493	大正８年	夏の部	草苺に汗零つ午や子待つらむ	草苺	植物
8494	大正８年	夏の部	苺摘む童と見ゆれ日は斜	草苺	植物
8495	大正８年	夏の部	蕗の葉をこぼれて苺水に在り	草苺	植物
8496	大正８年	夏の部	悼亡の句作や苺盛りたるに	草苺	植物
8497	大正８年	夏の部	人知らぬ苺に寄りつ閑古鳥	草苺	植物
8498	大正８年	夏の部	深山路や苺たわゝに靄上る	草苺	植物
8500	大正８年	夏の部	笠打敷けバ泪こぼれぬ草苺	草苺	植物
8501	大正８年	夏の部	苺嗜む賓人なれや草の宿	草苺	植物
8502	大正８年	夏の部	誰をか怨む虫くひ苺彈きつゝ	草苺	植物
8504	大正８年	夏の部	凾打開くなみゐる人の涼しげに	涼し	時候
8505	大正８年	夏の部	つゆけしやよべの蚊遣のあまり草	蚊遣	人事
8506	大正８年	夏の部	どさと置く蚊遣草夕山おろし	蚊遣	人事
8507	大正８年	夏の部	例年の南瓜棚花盛り也	南瓜の花	植物
8508	大正８年	夏の部	紙魚はたく姿を人に見られけり	紙魚	動物
8510	大正８年	夏の部	物々しく虎杖暑し館ノ下	暑さ	時候
8511	大正８年	夏の部	旱魃の樹々騒がして朝嵐	旱	天文

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8512	大正８年	夏の部	野人憩へるに青芒すく日哉	青芒	植物
8668	大正９年	夏の部	はつ蝉や雑木もる日の明るさに	蝉	動物
8669	大正９年	夏の部	鶯の老いて谷水湧きやまず	老鶯	動物
8670	大正９年	夏の部	五月雨の麻も蓬も屈む哉	五月雨	天文
8671	大正９年	夏の部	五月雨の漏りふたぐすべも無かりけり	五月雨	天文
8673	大正９年	夏の部	向上の一路を得たり山清水	清水	地理
8674	大正９年	夏の部	きそひ蕃る梢に近し夏の月	夏の月	天文
8675	大正９年	夏の部	寺山の蝉や即ち大般若	蝉	動物
8676	大正９年	夏の部	蝉近し水草しげる水の上	蝉	動物
8677	大正９年	夏の部	書巻山の如蝉鳴く庭淺し	蝉	動物
8678	大正９年	夏の部	蝉鳴くや欝然として書樓の書	蝉	動物
8680	大正９年	夏の部	蝉凉し共に倚りそふ杉木立	蝉	動物
8681	大正９年	夏の部	蝉凉し一路直ちに山門へ	蝉	動物
8683	大正９年	夏の部	夏草に溢るゝとなし雨そゝぐ	夏草	植物
8684	大正９年	夏の部	晝顔や雨去てたまり水の澄む	晝顔	植物
8685	大正９年	夏の部	夕の花概ね白き夏野哉	夏野	地理
8686	大正９年	夏の部	濵草の名を問ふ旅の愁かな	雑	雑
8687	大正９年	夏の部	松間に崩れて白し土用浪	土用浪	地理
8688	大正９年	夏の部	汐虫も出て遊ぶ湖辺凉しきに	凉し	時候
8689	大正９年	夏の部	夙に起きて花を愛すや青簾	青簾	人事
8690	大正９年	夏の部	談笑朗かに聞ゆ青簾	青簾	人事
8691	大正９年	夏の部	海を見て客と帰りぬ青簾	青簾	人事
8692	大正９年	夏の部	江山の一幅古し青簾	青簾	人事
8693	大正９年	夏の部	汐鳴の幽かになりぬ青簾	青簾	人事
8694	大正９年	夏の部	小酒賣る庭淨めたり百日紅	百日紅	植物
8806	大正10年	夏の部	上人の飛錫杳かや閑古鳥	閑古鳥	動物
8807	大正10年	夏の部	心當てに泉尋ねん閑古鳥	閑古鳥	動物
8808	大正10年	夏の部	閑古鳥あからさまなり軒端山	閑古鳥	動物
8809	大正10年	夏の部	閑古啼くや深山薊の花の色	閑古鳥	動物
8810	大正10年	夏の部	山人の口訥なれや閑古鳥	閑古鳥	動物
8811	大正10年	夏の部	萬木の午睡る也閑古鳥	閑古鳥	動物
8812	大正10年	夏の部	閑古鳥風に吹かれて飛にけり	閑古鳥	動物
8813	大正10年	夏の部	採桑か狂女かあらず閑古鳥	閑古鳥	動物
8814	大正10年	夏の部	雲の冷え艸木に垂れつ閑古鳥	閑古鳥	動物
8815	大正10年	夏の部	山の僧が例の悪詩や閑古鳥	閑古鳥	動物
8817	大正10年	夏の部	稀に見るつゝじ爛れつ酒の醉	躑躅	植物
8818	大正10年	夏の部	咲き残るつゝじを尋ねありきけり	躑躅	植物
8819	大正10年	夏の部	崇山や五月の會の人少な	五月	時候
8820	大正10年	夏の部	鋤鍬禾の處を得たり雑煮くふ	雑煮	人事
8821	大正10年	夏の部	麦秋や枇杷の樹下の讀書人	麦の秋	時候
8822	大正10年	夏の部	麦秋に僧を招じてひそかなる	麦の秋	時候
8823	大正10年	夏の部	麦秋の日黄也大戦の後	麦の秋	時候
8824	大正10年	夏の部	麦秋を出生又も女の子	麦の秋	時候
8825	大正10年	夏の部	一方の雲の爛れや麦の秋	麦の秋	時候
8826	大正10年	夏の部	麦秋の黎明はやも立咄	麦の秋	時候
8827	大正10年	夏の部	麦秋や我等寄進の鐘が鳴る	麦の秋	時候
8828	大正10年	夏の部	細道や関の清水の麦埃	麦の秋	時候
8829	大正10年	夏の部	崇山を望む麦秋の事終へて	麦の秋	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8830	大正10年	夏の部	眼前に祭迫りぬ麦埃	麦の秋	時候
8831	大正10年	夏の部	晝顔や何に依々たる日仐人	日傘	人事
8832	大正10年	夏の部	立寄れバ日仐を透す蝉しぐれ	日傘	人事
8833	大正10年	夏の部	日仐置けバ毛虫這よる草の上	日傘	人事
8834	大正10年	夏の部	梅黄む家の子供の日仐かな	日傘	人事
8835	大正10年	夏の部	雨上りの日仐眩ゆし蝸牛	日傘	人事
8836	大正10年	夏の部	祇王寺を離るゝ日仐一ツ哉	日傘	人事
8837	大正10年	夏の部	日仐たゝみ水際に顔を並べけり	日傘	人事
8838	大正10年	夏の部	青空のいや遠々し日仐人	日傘	人事
8839	大正10年	夏の部	蕗畠の大蕗見居り日仐人	日傘	人事
8840	大正10年	夏の部	草の丈舊蹟なれバ日仐人	日傘	人事
8841	大正10年	夏の部	六月の草木照合ふ日仐哉	日傘	人事
8842	大正10年	夏の部	少女ぶり日仐の色の濃かに	日傘	人事
8843	大正10年	夏の部	象潟の森の松かげ日仐見ゆ	日傘	人事
8844	大正10年	夏の部	紺碧の湖に泛べる日仐哉	日傘	人事
8846	大正10年	夏の部	人の子や薫れと祈る蚊遣草	蚊遣	人事
8847	大正10年	夏の部	名所の鹿の子近寄る日仐哉	日傘	人事
8987	大正11年	夏の部	初幟己れ生れて重右ェ門	幟	人事
8989	大正11年	夏の部	青梅の枝さし伸べし書齋哉	梅の實	植物
8990	大正11年	夏の部	松落葉つもりて久し松の色	松落葉	植物
8992	大正11年	夏の部	湖濶けたり一むら葦の若葉より	葦若葉	植物
8993	大正11年	夏の部	文晁居の主人と知りて行々子	行々子	動物
8995	大正11年	夏の部	牡丹見て一詩を成さず酒の悔	牡丹	植物
8997	大正11年	夏の部	縄墨の痕鮮かに風薫る	薫風	天文
8998	大正11年	夏の部	青梅や眞晝啼去る杜宇	梅の實	植物
8999	大正11年	夏の部	青梅の枝葉もる日や美少年	梅の實	植物
9000	大正11年	夏の部	青梅や霽るゝ慣ひの雲の峰	梅の實	植物
9001	大正11年	夏の部	青梅や日に／＼雲の峰づくり	梅の實	植物
9002	大正11年	夏の部	青梅や客の驚く流れ水	梅の實	植物
9003	大正11年	夏の部	人の子ハ着飾り來梅黄む頃	梅の實	植物
9004	大正11年	夏の部	青梅に着飾りありく人の子よ	梅の實	植物
9005	大正11年	夏の部	青梅の林に入りぬ輕き汗	梅の實	植物
9006	大正11年	夏の部	青梅や長男臥病家に在り	梅の實	植物
9007	大正11年	夏の部	青梅の古幹かくす草の丈	梅の實	植物
9008	大正11年	夏の部	青梅をゆさぶり去りぬ朝嵐	梅の實	植物
9012	大正11年	夏の部	二十年家郷を出でず花茨	茨の花	植物
9013	大正11年	夏の部	思寝の蛸に目覚めて夢暗し	蚊帳	人事
9014	大正11年	夏の部	桑の実に稚き頃の面ざしも	桑の實	植物
9016	大正11年	夏の部	遠く之を望む一木の茂り哉	茂り	植物
9020	大正11年	夏の部	うろくづと生れ変らば凉しかろ	凉し	時候
9021	大正11年	夏の部	雨乞の驗もなしに明易き	短夜	時候
9022	大正11年	夏の部	明易き樹や海鳥の假宿り	短夜	時候
9023	大正11年	夏の部	短夜や既に根つきし物の苗	短夜	時候
9024	大正11年	夏の部	短夜をなど燕雀のかしましき	短夜	時候
9025	大正11年	夏の部	短夜や磯の祭の朝籌	短夜	時候
9026	大正11年	夏の部	明易き耳を貫く矢聲哉	短夜	時候
9027	大正11年	夏の部	妻が炊ぐ一日の糧や明易き	短夜	時候
9028	大正11年	夏の部	問答は了る青山明易き	短夜	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9029	大正11年	夏の部	短夜や虫の骸のさながらに	短夜	時候
9031	大正11年	夏の部	灯籠を見るものにせん淺き庭	燈籠	人事
9032	大正11年	夏の部	唐黍の間ひに低し雲の峰	雲の峰	天文
9033	大正11年	夏の部	赤鬼のよぢ登る見ゆ雲の峰	雲の峰	天文
9034	大正11年	夏の部	雲の峰暮れて稲妻起りけり	雲の峰	天文
9035	大正11年	夏の部	雲の峰頽れかゝりし伏家哉	雲の峰	天文
9036	大正11年	夏の部	雲の峰をよそに麻引き進むかな	雲の峰	天文
9037	大正11年	夏の部	諸子百家文庫の窓の雲の峰	雲の峰	天文
9038	大正11年	夏の部	登山衆の後ろに聳ゆ雲の峰	雲の峰	天文
9039	大正11年	夏の部	草臥れて行手に遠し雲の峰	雲の峰	天文
9040	大正11年	夏の部	東京の方に当りて雲の峰	雲の峰	天文
9041	大正11年	夏の部	雲の峰崩れて消えて星一ツ	雲の峰	天文
9228	大正12年	夏の部	父も母も牡丹散りしを知らざりき	牡丹	植物
9229	大正12年	夏の部	喪に居りて庭樹のしげり怖ろしき	茂り	植物
9230	大正12年	夏の部	このいちごの香よ色よ徒に腐りゆく	苺	植物
9231	大正12年	夏の部	汝に告ぐ豌豆の花白かりし	豌豆の花	植物
9234	大正12年	夏の部	煩悩の手に掃ひけり夏のつゆ	夏の露	天文
9373	大正13年	夏の部	朝戸開く童女に牡丹ゆらぎけり	牡丹	植物
9374	大正13年	夏の部	菖蒲蓬軒に炊烟颺りけり	菖蒲	植物
9375	大正13年	夏の部	弟兄のきそひ引來る菖蒲かな	菖蒲	植物
9376	大正13年	夏の部	桐の花水に流るゝ嵐かな	桐の花	植物
9377	大正13年	夏の部	豁ラなる空に吹入る青嵐	青嵐	天文
9378	大正13年	夏の部	青梅や毛虫及ばぬ斜一枝	梅の實	植物
9379	大正13年	夏の部	雨冷えや若葉にこもる禽の声	若葉	植物
9380	大正13年	夏の部	山鳩の二ツ飛び立つ若葉哉	若葉	植物
9381	大正13年	夏の部	谷川の橋危きに若葉哉	若葉	植物
9382	大正13年	夏の部	曼多羅に若葉耀く日尊き	若葉	植物
9383	大正13年	夏の部	網打てバ底くゞる魚や淵若葉	若葉	植物
9384	大正13年	夏の部	澗水の底明りする若葉哉	若葉	植物
9385	大正13年	夏の部	若葉山人住みて麦黄む也	若葉	植物
9386	大正13年	夏の部	神宮の木々の若葉やまのあたり	若葉	植物
9387	大正13年	夏の部	日に雨に若葉悲しく潔し	若葉	植物
9388	大正13年	夏の部	若葉風馬に飲ふ両三騎	若葉	植物
9389	大正13年	夏の部	青梅に訪來る人の帽古き	梅の實	植物
9390	大正13年	夏の部	青梅や賓客と踏む庭の苔	梅の實	植物
9391	大正13年	夏の部	青梅や俄に曇る麓村	梅の實	植物
9392	大正13年	夏の部	青梅や机に通ふ朝嵐	梅の實	植物
9393	大正13年	夏の部	青梅や錢弄ぶ童達	梅の實	植物
9394	大正13年	夏の部	青梅や遺稿を寫し了る頃	梅の實	植物
9395	大正13年	夏の部	青梅を後ろに窯の火を見居り	梅の實	植物
9396	大正13年	夏の部	青梅に陶やく窯の焔かな	梅の實	植物
9397	大正13年	夏の部	夏草にひた押寄する出水哉	夏草	植物
9398	大正13年	夏の部	夏草に蹄ぬれ來る子馬かな	夏草	植物
9399	大正13年	夏の部	夏草に支ふものなき奔馬哉	夏草	植物
9400	大正13年	夏の部	喜雨亭の跡夏草の葉廣草	夏草	植物
9401	大正13年	夏の部	蛇のゐる夏草薙ぎて進みけり	夏草	植物
9402	大正13年	夏の部	桑の実に薄暑の人の憩ひけり	薄暑	時候
9403	大正13年	夏の部	よき水の想出にゐつ薄暑人	薄暑	時候

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9404	大正13年	夏の部	著飾りて薄暑行く也緑の野	薄暑	時候
9405	大正13年	夏の部	薄暑來て山人と會ふ湖の人	薄暑	時候
9406	大正13年	夏の部	一路平安薄暑の草に笠を置く	薄暑	時候
9407	大正13年	夏の部	蚋つりて二三子去りぬ芭蕉庵	蚊帳	人事
9408	大正13年	夏の部	語りつきてかたふく月に蚋つりぬ	蚊帳	人事
9409	大正13年	夏の部	蚋つりて座る所も無かりけり	蚊帳	人事
9411	大正13年	夏の部	熱くなき涼しくもなき國とかや	涼し	時候
9560	大正14年	夏の部	石に彫りし我が句の魂か閑古鳥	閑古鳥	動物
9561	大正14年	夏の部	野路ゆけバ雲むれ去るや茨の花	茨の花	植物
9562	大正14年	夏の部	館址の茂りを醮し大河あり	茂り	植物
9563	大正14年	夏の部	明易き大河の橋を渡り去る	短夜	時候
9564	大正14年	夏の部	つゆ雲に濕ふや我が旅衣	梅雨雲	天文
9565	大正14年	夏の部	蛍一つ句碑のあたりを飛去らず	螢	動物
9566	大正14年	夏の部	神木を放れて蛍一ツ哉	螢	動物
9567	大正14年	夏の部	老憂しや曉方の蛍見て	螢	動物
9568	大正14年	夏の部	羽搏ちくる火蛾や木鳴らす夜嵐に	蛾	動物
9569	大正14年	夏の部	執著や二ツ相搏つ灯取虫	灯取蟲	動物
9570	大正14年	夏の部	灯の虫のむくろを棄てつ露涼し	夏の露	天文
9571	大正14年	夏の部	火蛾悲し尸を曬す古經巻	蛾	動物
9572	大正14年	夏の部	水盤を海と浮びつ灯取虫	灯取蟲	動物
9573	大正14年	夏の部	男沼女沼水草の花黄に白に	水草の花	植物
9574	大正14年	夏の部	萍の花撲つ雨を喜びぬ	萍	植物
9575	大正14年	夏の部	眞菰すく／＼萍の花平ら也	萍	植物
9576	大正14年	夏の部	水草の花咲いて水の魔を封ず	水草の花	植物
9577	大正14年	夏の部	水草の花の盛りを禊かな	水草の花	植物
9579	大正14年	夏の部	禮佛や堂を下れば瓜の花	瓜の花	植物
9580	大正14年	夏の部	雨急也茂の中の朴廣葉	茂り	植物
9581	大正14年	夏の部	山寺の石を濶ほしよだち過ぐ	夜立ち	天文
9582	大正14年	夏の部	帽軽き帰省の子らよ瓜の花	瓜の花	植物
9583	大正14年	夏の部	繭干して小家山雨に襲はるゝ	繭	人事
9584	大正14年	夏の部	一木の白花こぼるゝ茂かな	茂り	植物
9585	大正14年	夏の部	河鹿棲む水を湛へて茂哉	茂り	植物
9586	大正14年	夏の部	繭賣りて淋しき灯かゝげけり	繭	人事
9587	大正14年	夏の部	貧しさはよき繭盛りぬ古筐	繭	人事
9589	大正14年	夏の部	朗らかに晴開けバ夏樹哉	新樹	植物
9741	大正15年	夏の部	うつ木咲く鄙に讀むべき歌書もなし	卯の花	植物
9742	大正15年	夏の部	うの花の垣並めて祭休み哉	卯の花	植物
9743	大正15年	夏の部	水鳴るは闇の垣根やうつ木咲く	卯の花	植物
9744	大正15年	夏の部	したゝかな露の一朝うつ木咲く	卯の花	植物
9746	大正15年	夏の部	吾棲みて舊りぬる軒や菖蒲葺く	菖蒲葺	人事
9748	大正15年	夏の部	來し方や道一筋の花卯木	卯の花	植物
9749	大正15年	夏の部	推敲の觀瀾記事や心太	心太	人事
9750	大正15年	夏の部	百里來て交を結ぶ心太	心太	人事
9751	大正15年	夏の部	貧しかれど娘ハ賣らじ心太	心太	人事
9752	大正15年	夏の部	月山の雪汁すゝれ心太	心太	人事
9754	大正15年	夏の部	心太さそくのあるじまうけ哉	心太	人事
9756	大正15年	夏の部	新樹道をてらして泉近づけり	新樹	植物
9757	大正15年	夏の部	硯石風に潤ふ新樹かな	新樹	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9758	大正15年	夏の部	賀の筵新樹に扇ひらめかす	新樹	植物
9759	大正15年	夏の部	酒微醺に入り新樹光あり	新樹	植物
9761	大正15年	夏の部	鮎もくれて儕故し百合花	百合	植物
9762	大正15年	夏の部	座右の物茶經三巻籠枕	籠枕	人事
9763	大正15年	夏の部	莊周が夢の行方や籠枕	籠枕	人事
9764	大正15年	夏の部	竹夫人廬山の雨を含みけり	竹夫人	人事
9765	大正15年	夏の部	抱篭の夢や青海原の上	竹夫人	人事
9766	大正15年	夏の部	抱篭や碧紗を隔つ夜の空	竹夫人	人事
9768	大正15年	夏の部	鳶も魚も處に在りてつゆ曇	梅雨雲	天文
9770	大正15年	夏の部	夏山に虎渓と名づけ廬せり	夏山	地理
9771	大正15年	夏の部	夏山の何れにか在る氷室守	夏山	地理
9772	大正15年	夏の部	夏山や山守もなき流レ水	夏山	地理
9773	大正15年	夏の部	夏山に人を導く日午也	夏山	地理
9774	大正15年	夏の部	夏山に誰ぞ廬して衣干す	夏山	地理
9775	大正15年	夏の部	夏山の霞を吸ひて嘶ふ馬	夏山	地理
9776	大正15年	夏の部	蚊火焚くと主人出て行く宵闇よ	蚊遣	人事
9777	大正15年	夏の部	賓人と大に笑ふ蚊やり哉	蚊遣	人事
9778	大正15年	夏の部	蚊火すてゝ主人嘯き去にけり	蚊遣	人事
9779	大正15年	夏の部	蚊火けふるあたりに吾を待つらんぞ	蚊遣	人事
9780	大正15年	夏の部	古軒に釣竿かゝる蚊遣哉	蚊遣	人事
9781	大正15年	夏の部	魚籃あけて少き魚や蚊やり草	蚊遣	人事
9783	大正15年	夏の部	撫子や濃かれと灌ぐ花の色	撫子	植物
9784	大正15年	夏の部	蚊火けふり主人が姿かくれけり	蚊遣	人事
9786	大正15年	夏の部	瓜茄子の徳を修めんとぞ思ふ	雑	雑
9788	大正15年	夏の部	三尺の庭に王たり蟇	蟇	動物
9789	大正15年	夏の部	南天の花踏んで蟇出にけり	蟇	動物
9790	大正15年	夏の部	蟇出てゝ主人やうやく醉來る	蟇	動物
9791	大正15年	夏の部	茗荷林を浪々の身や蟇	蟇	動物
9792	大正15年	夏の部	萩早く莟みて蟇の名殘哉	蟇	動物
9793	大正15年	夏の部	杯を啣みて蟇と相見たる	蟇	動物
9794	大正15年	夏の部	百合の丈の高くもあるか蟇	蟇	動物
9795	大正15年	夏の部	麟を獲て絶ちし筆はや蟇	蟇	動物
9796	大正15年	夏の部	闇の中に殘りぬ蟇と庭石と	蟇	動物
10046	昭和２年	夏の部	高木渡る風や幟の吹流し	鯉幟	人事
10047	昭和２年	夏の部	幟白し眞田が跡の一郭	幟	人事
10048	昭和２年	夏の部	蕃山の葉山の中の幟哉	幟	人事
10049	昭和２年	夏の部	幟吹くや水の流の朝嵐	幟	人事
10050	昭和２年	夏の部	幟立つや五日の空の深みどり	幟	人事
10052	昭和２年	夏の部	卯の花を詠じて迎へ給ふらむ	卯の花	植物
10055	昭和２年	夏の部	琵琶罷んで皆春惜む人ばかり	春惜む	時候
10057	昭和２年	夏の部	深山鳥羽耀かす五月晴	五月晴	天文
10058	昭和２年	夏の部	裏山や五月晴して朴高木	五月晴	天文
10059	昭和２年	夏の部	五月晴水を隔つる翠微哉	五月晴	天文
10060	昭和２年	夏の部	五月晴翠微に颺る烟哉	五月晴	天文
10061	昭和２年	夏の部	海の如く野ハ緑なり五月晴	五月晴	天文
10062	昭和２年	夏の部	鳥めかす枝の雀や五月晴	五月晴	天文
10063	昭和２年	夏の部	故郷は花なき草の茂哉	草茂る	植物
10064	昭和２年	夏の部	草茂る中の筧や山の水	草茂る	植物

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10065	昭和２年	夏の部	山水の流れて白し五月晴	五月晴	天文
10066	昭和２年	夏の部	古道を行けバ家なし草茂る	草茂る	植物
10068	昭和２年	夏の部	藤の花虚空高きに揺ぐ哉	藤の花	植物
10070	昭和２年	夏の部	青嵐嵯峨の話のつきなくに	青嵐	天文
10071	昭和２年	夏の部	與に見る保津川石や子規	時鳥	動物
10073	昭和２年	夏の部	六月の鶯を道の枝折哉	六月	時候
10074	昭和２年	夏の部	山に上る僧俗二人夏の露	夏の露	天文
10075	昭和２年	夏の部	木いちごに靄の痕見つ閑話頭	木苺	植物
10077	昭和２年	夏の部	繭かきの一人に蝶や近く來る	繭	人事
10078	昭和２年	夏の部	繭かきの額の汗や唐葵	繭	人事
10080	昭和２年	夏の部	諸惡莫作鼻高ながら蟇	蟇	動物
10082	昭和２年	夏の部	はしきやし雀子は巣に籠りゐる	雀の子	動物
10084	昭和２年	夏の部	易へずあらむ宵々蚊火の置所	蚊遣	人事
10086	昭和２年	夏の部	八重垣に濃緑菖蒲匂ひけむ	菖蒲	植物
10087	昭和２年	夏の部	三笑の聲聽知らむ蝸牛	蝸牛	動物
10088	昭和２年	夏の部	金泥の文字見ぬ久し蝸牛	蝸牛	動物
10089	昭和２年	夏の部	でゝむしや角の上なる寂しをり	蝸牛	動物
10090	昭和２年	夏の部	紫陽花の露を喰ひぬ蝸牛	蝸牛	動物
10091	昭和２年	夏の部	金泥の書に近づかずかたつぶり	蝸牛	動物
10092	昭和２年	夏の部	蝸牛兵火を遁れこゝに在り	蝸牛	動物
10093	昭和２年	夏の部	病葉や梢に見たる梅小粒	病葉	植物
10094	昭和２年	夏の部	病葉のちり／＼旱つゞくらし	病葉	植物
10095	昭和２年	夏の部	病葉に何喧すし群雀	病葉	植物
10096	昭和２年	夏の部	病葉のちりからびたり苔の上	病葉	植物
10097	昭和２年	夏の部	病葉や人を夢みる紅閨裡	病葉	植物
10098	昭和２年	夏の部	かまびすく病葉落す群雀	病葉	植物
10100	昭和２年	夏の部	蓬萊の香ぐの果も簟	簟	人事
10102	昭和２年	夏の部	あらがねの土を離れて瓜の花	瓜の花	植物
10103	昭和２年	夏の部	瀧水に葛の葉ぬれて眞夏なる	滝	地理
10104	昭和２年	夏の部	淙々と瀧壺淺し蝉の聲	滝	地理
10105	昭和２年	夏の部	瀧を觀る良久し手に夏蕨	滝	地理
10106	昭和２年	夏の部	蕃山に道失へり瀧の音	滝	地理
10107	昭和２年	夏の部	滝の末かちわたりせむ葛の花	滝	地理
10409	昭和３年	夏の部	薫風や貢の禽の餌につく	薫風	天文
10410	昭和３年	夏の部	白鵬ハ籠に返らず風かほる	薫風	天文
10411	昭和３年	夏の部	薫風や雫は潜む苔の中	薫風	天文
10412	昭和３年	夏の部	薫風に長途の笠や羽黒山	薫風	天文
10413	昭和３年	夏の部	薫風や驛路すぐる鈴の聲	薫風	天文
10415	昭和３年	夏の部	短夜の心あまりて鳴く蛙	短夜	時候
10416	昭和３年	夏の部	魚棲まぬ水の深さよ青嵐	青嵐	天文
10417	昭和３年	夏の部	閑古鳥幾たび影を醮しけむ	閑古鳥	動物
10418	昭和３年	夏の部	岩に巣ふ小禽何々苔の花	苔の花	植物
10419	昭和３年	夏の部	六月や岩に花咲く晝の露	六月	時候
10420	昭和３年	夏の部	流るゝは鳥の古巣か青嵐	青嵐	天文
10421	昭和３年	夏の部	夕立雲裂けて碎けて岩孤ツ	夕立	天文
10422	昭和３年	夏の部	夏雲と孰れ傾く岩穂かな	夏の雲	天文
10423	昭和３年	夏の部	常盤木の落葉もたぎち流れけり	常盤木落葉	植物
10425	昭和３年	夏の部	城址の近きに家す青すたれ	青簾	人事

夏の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10426	昭和３年	夏の部	よき水に立寄る人や青簾	青簾	人事
10427	昭和３年	夏の部	岩せまる谿に家しつ青簾	青簾	人事
10429	昭和３年	夏の部	庭を見て未だ帰らず青簾	青簾	人事
10430	昭和３年	夏の部	薫風や兜を祀る杉の中	薫風	天文
10431	昭和３年	夏の部	指し示す杉のあはひや古清水	清水	地理
10432	昭和３年	夏の部	利き鈍き鏃埋れて草清水	清水	地理
10433	昭和３年	夏の部	水を戀ひて啼くらむ鳥ぞ早苗取	早苗取	人事
10434	昭和３年	夏の部	睡蓮や逕は曲る竪穴へ	睡蓮	植物
10436	昭和３年	夏の部	蚊帳の夢きのふの山の翠かな	蚊帳	人事
10437	昭和３年	夏の部	山水を脱却したり明易き	短夜	時候
10438	昭和３年	夏の部	物賣ハ鮎にかあらむ釣忍	釣忍	人事
10439	昭和３年	夏の部	戸をさゝで獨となりぬ釣忍	釣忍	人事
10440	昭和３年	夏の部	逢はぬ戀にすりけむ昔忍草	忍草	植物
10441	昭和３年	夏の部	たぎつ瀬に垂れつ乱れつ忍草	忍草	植物
10442	昭和３年	夏の部	石女やつりて久しき忍草	釣忍	人事
10444	昭和３年	夏の部	畚の土胡瓜の花に振りこぼす	瓜の花	植物
10446	昭和３年	夏の部	露凉し夜と別るゝ花の様	夏の露	天文
10448	昭和３年	夏の部	水近き潤ひ芭蕉巻葉哉	芭蕉玉巻	植物
10449	昭和３年	夏の部	日中や地に梅干の壺一ツ	梅干す	人事
10450	昭和３年	夏の部	枝に在りしきのふの梅を漬にけり	梅干す	人事
10452	昭和３年	夏の部	吾が思ふ方へ靡けり女郎花	女郎花	植物
10453	昭和３年	夏の部	蓮の實の飛ぶと知りたる賢さよ	蓮實飛ぶ	植物
10454	昭和３年	夏の部	海に入って鯉に近づく雀かな	雀蛤となる	動物
10456	昭和３年	夏の部	句は知らず古人幾夜の火取蟲	灯取蟲	動物
10460	昭和３年	夏の部	夏草を踏みしだき來て獨なる	夏草	植物
10461	昭和３年	夏の部	百合挿して手桶重げに運び出づ	百合	植物
10462	昭和３年	夏の部	古妻の手桶重げに百合の花	百合	植物
10464	昭和３年	夏の部	葉よれ草祈雨の修法の水はじく	雨乞	人事
10465	昭和３年	夏の部	雨乞や涙をつゞるのりとごと	雨乞	人事
10466	昭和３年	夏の部	雨乞に草木鳴を鎮めたり	雨乞	人事
10467	昭和３年	夏の部	雨乞に上る裾野の小家より	雨乞	人事
10468	昭和３年	夏の部	雨乞に行くや埴生の小屋を出て	雨乞	人事
10469	昭和３年	夏の部	雨乞に根々の神の名呼び申す	雨乞	人事
10471	昭和３年	夏の部	羅や王母が袖にかくすもの	羅	人事
10597	不　　詳	夏の部	松のこと雲のこと其の時鳥	時鳥	動物
10608	不　　詳	夏の部	斯の道の末枯瓜に水灌げ	末枯瓜	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
137	明治27年	秋の部	初秋の鳶の高さよ安房の山	初秋	時候
138	明治27年	秋の部	浦人よ初秋の雑魚ありやなしや	初秋	時候
139	明治27年	秋の部	初秋の枕に近し海の音	初秋	時候
140	明治27年	秋の部	樓高し頭上をはしる天の川	天の川	天文
141	明治27年	秋の部	落潮の漁燈遥なり天の川	天の川	天文
142	明治27年	秋の部	秋風や彼も昔は二千石	秋の風	天文
143	明治27年	秋の部	秋風の砲台高し觀音崎	秋の風	天文
144	明治27年	秋の部	海くれて安房の山々秋の風	秋の風	天文
145	明治27年	秋の部	秋風のいさり火消えつ海の闇	秋の風	天文
146	明治27年	秋の部	秋風の鱸肥えたる便りかな	秋の風	天文
147	明治27年	秋の部	縁に出でゝ手を組む人や秋の風	秋の風	天文
148	明治27年	秋の部	秋の風美人眼をやむ帳かな	秋の風	天文
149	明治27年	秋の部	虫の音のやむ時露の音すなり	蟲	動物
150	明治27年	秋の部	大船や霧はれて海の果もなし	霧	天文
151	明治27年	秋の部	秋風や家に白髪の母います	秋の風	天文
152	明治27年	秋の部	稲妻の竹の梢は戦ぐなり	稲妻	天文
153	明治27年	秋の部	朝顔や賣家の札に這ひかゝる	朝顔	植物
154	明治27年	秋の部	朝皃の庄屋が家や寄合衆	朝顔	植物
155	明治27年	秋の部	きり〳〵す膳の縁這ふ苫屋かな	きりぎりす	動物
156	明治27年	秋の部	淋しくは爰に來て啼けきり〳〵す	きりぎりす	動物
157	明治27年	秋の部	きり〳〵す昔話のとぎれかな	きりぎりす	動物
158	明治27年	秋の部	促織の肩に飛びつく浴みかな	こおろぎ	動物
159	明治27年	秋の部	蜻蛉ちら／＼秋静かなる小村かな	蜻蛉	動物
160	明治27年	秋の部	海原や月更けて人樓にあり	月	天文
161	明治27年	秋の部	大原の月下をはしる鉄車かな	月	天文
162	明治27年	秋の部	大海原疊の如し星月夜	星月夜	天文
163	明治27年	秋の部	淺川の水の光りや星月夜	星月夜	天文
164	明治27年	秋の部	秋の雨旅の記をかくひとりかな	秋の雨	天文
165	明治27年	秋の部	荒海や龍王も泣く秋の雨	秋の雨	天文
166	明治27年	秋の部	大杉の梢尖れり秋の空	秋の空	天文
167	明治27年	秋の部	大海の秋静かに月あらはれぬ	秋	時候
168	明治27年	秋の部	行秋や水の底なる栗のいが	行秋	時候
169	明治27年	秋の部	茄子の花小さく咲いて秋暮れぬ	秋の暮	時候
170	明治27年	秋の部	人も見えず一犬吠えて秋くれぬ	秋の暮	時候
171	明治27年	秋の部	粟の種の我から動く夕月夜	粟	植物
172	明治27年	秋の部	水すみて雁影細き野川哉	雁	動物
173	明治27年	秋の部	雁一ツ月のあたりを飛ぶ夜哉	雁	動物
174	明治27年	秋の部	雁の声胡天に入て月落ちぬ	雁	動物
175	明治27年	秋の部	雁なくや扁舟去て水悠々	雁	動物
176	明治27年	秋の部	雁が音や月下をはしる汽車の窓	雁	動物
177	明治27年	秋の部	二三軒柿の紅葉のあはひかな	柿紅葉	植物
178	明治27年	秋の部	草紅葉一逕つきて小家かな	草錦	植物
179	明治27年	秋の部	秋高く海は白帆の往來かな	秋高し	天文
180	明治27年	秋の部	秋晴れたり船去て烟横はる	秋晴	天文
181	明治27年	秋の部	海暮れんとす秋の苫屋に烟起つ	秋	時候
182	明治27年	秋の部	里の秋うなゐふみ讀む声すなり	秋	時候
342	明治28年	秋の部	さわやかに秋立つ村の草木かな	立秋	時候
343	明治28年	秋の部	曙の山近うして秋の立つ	立秋	時候

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
344	明治28年	秋の部	曙の雲に秋立つ峠かな	立秋	時候
345	明治28年	秋の部	初秋の蝉ひいと鳴いて飛びにけり	初秋	時候
346	明治28年	秋の部	初秋の人渡るなり瀬田の橋	初秋	時候
347	明治28年	秋の部	初秋の灯火并ぶ港町	初秋	時候
348	明治28年	秋の部	初秋の白河在を旅立ちぬ	初秋	時候
349	明治28年	秋の部	初秋の奥の大名登るなり	初秋	時候
351	明治28年	秋の部	初秋の君は彼方よ浪の音	初秋	時候
352	明治28年	秋の部	初秋の烟起つなり朝の村	初秋	時候
353	明治28年	秋の部	初秋の庭石ぬれて目さめたり	初秋	時候
354	明治28年	秋の部	初秋の手水に映る皃やせたり	初秋	時候
355	明治28年	秋の部	草搖れて灯火搖れて虫のなく	蟲	動物
356	明治28年	秋の部	灯青く秋の雨ふる伽藍かな	秋の雨	天文
357	明治28年	秋の部	辻堂に灯ともす人や秋の雨	秋の雨	天文
358	明治28年	秋の部	奥州の秋の并松雨暗し	秋	時候
359	明治28年	秋の部	何萬里を天の川の音もなし	天の川	天文
360	明治28年	秋の部	龕燈死し僧物いはず電光	稲妻	天文
361	明治28年	秋の部	美くしや小草の露の夕月夜	露	天文
362	明治28年	秋の部	朝露の小狐ぬれて帰るなり	露	天文
363	明治28年	秋の部	白露の我思千々に乱れける	露	天文
364	明治28年	秋の部	はら／＼と葎の露のこぼれける	露	天文
365	明治28年	秋の部	驛路の露の有明面白や	露	天文
366	明治28年	秋の部	白露のこぼれて物を思ひける	露	天文
367	明治28年	秋の部	白露の古き関所をゆくはたれ	露	天文
368	明治28年	秋の部	古道の露踏みしだき／＼	露	天文
369	明治28年	秋の部	夕暮の小草花咲く野は廣し	花野	地理
370	明治28年	秋の部	夕月や家を繞りて萩の花	萩	植物
371	明治28年	秋の部	萩咲いてほの三日月の小家かな	萩	植物
372	明治28年	秋の部	雨の萩赤い女の通りけり	萩	植物
373	明治28年	秋の部	草長く灯火細し初嵐	初嵐	天文
374	明治28年	秋の部	文月の太刀佩くは誰が家の子ぞ	文月	時候
375	明治28年	秋の部	更くる夜を橡の実落る山家かな	橡の實	植物
377	明治28年	秋の部	秋風や汝と我と三千里	秋の風	天文
378	明治28年	秋の部	秋の風手はなつ蔓の哀れなり	秋の風	天文
379	明治28年	秋の部	一村は晒月夜となりにけり	月	天文
380	明治28年	秋の部	明月の瀛車路長し那須の原	名月	天文
381	明治28年	秋の部	秋の夕鳥は塒に帰るなり	秋の暮	時候
382	明治28年	秋の部	里の秋このみ草のみこぼれけり	秋	時候
383	明治28年	秋の部	菅笠や秋の峠をゆくはたれ	秋	時候
384	明治28年	秋の部	この曉洗ひあげたる秋なるか	秋	時候
385	明治28年	秋の部	秋晴や鎮守の森の赤い旗	秋晴	天文
386	明治28年	秋の部	山寺の秋の灯火幽かなり	秋	時候
387	明治28年	秋の部	桐一葉此夜山僧帰来ず	桐一葉	植物
388	明治28年	秋の部	東雲や幽かに稲のそよぐ音	稲	植物
389	明治28年	秋の部	早稲の香の千疊敷を吹廻ける	稲	植物
390	明治28年	秋の部	女郎花そとば仆れて文字もなし	女郎花	植物
391	明治28年	秋の部	行秋を何國へ越ゆる順礼ぞ	行秋	時候
392	明治28年	秋の部	行く秋を誰が家の子のかしましや	行秋	時候
393	明治28年	秋の部	秋の暮烏のつゝく何の骨	秋の暮	時候

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
395	明治28年	秋の部	行秋を恙なかりけり君も我も	行秋	時候
396	明治28年	秋の部	藁葺の屋根はら／＼と秋の風	秋の風	天文
397	明治28年	秋の部	谷川に霧吹下ろし／＼	霧	天文
398	明治28年	秋の部	ほろ／＼と柳散りけりほろ／＼と	柳散る	植物
514	明治29年	秋の部	痩犬のくゞり出でたり萩の垣	萩	植物
515	明治29年	秋の部	初秋の松杉高し城の跡	初秋	時候
516	明治29年	秋の部	城跡の草吹きまくる野分かな	野分	天文
518	明治29年	秋の部	酒壺を野分に仆すこと勿れ	野分	天文
520	明治29年	秋の部	誰が家の子ぞと呼ばれん秋の風	秋の風	天文
521	明治29年	秋の部	泣かぬ子の後ろつき見よ秋の風	秋の風	天文
522	明治29年	秋の部	行秋を宋江壁に題しける	行秋	時候
523	明治29年	秋の部	小傾城にこやかに行秋を知らず	行秋	時候
524	明治29年	秋の部	徒らに我髭伸びつ秋のゆく	行秋	時候
526	明治29年	秋の部	帰るべく帰らば新酒熟すべく	新酒	人事
527	明治29年	秋の部	いざ罷らん栗飯の腹ふくれける	栗飯	人事
528	明治29年	秋の部	菊咲いて雨風多き他國かな	菊	植物
529	明治29年	秋の部	長安に滯ること三月菊の花	菊	植物
530	明治29年	秋の部	行秋の心地死ぬべく覚えたり	行秋	時候
531	明治29年	秋の部	玉川の鮎三寸にしてさびたりな	錆鮎	動物
532	明治29年	秋の部	宿醉や三尺の窓に冨士の秋	秋	時候
533	明治29年	秋の部	國境や北を望めバ秋のゆく	行秋	時候
534	明治29年	秋の部	紅葉せり出羽奥州の峯つゞき	紅葉	植物
535	明治29年	秋の部	北國の山々見えつ末枯るゝ	末枯	植物
536	明治29年	秋の部	邯鄲の市は新酒の匂ひかな	新酒	人事
537	明治29年	秋の部	秋のふじ塔三寸の裾野かな	秋	時候
538	明治29年	秋の部	此の恨ほろりとこぼれし露の玉	露	天文
539	明治29年	秋の部	堆く小皿に盛りぬこほれ萩	萩	植物
540	明治29年	秋の部	女郎花くねりたるをばちご折れり	女郎花	植物
541	明治29年	秋の部	鬼灯の豆の如きを三ツばかり	鬼灯	植物
542	明治29年	秋の部	薄き濃き紅葉三ツ四ツ手水鉢	紅葉	植物
543	明治29年	秋の部	啼かず飛ばず鴉がぬれて秋の雨	秋の雨	天文
544	明治29年	秋の部	一人居れば丑満頃の虫が鳴く	蟲	動物
545	明治29年	秋の部	朝皃の小さな屋根に這ひのぼる	朝顔	植物
546	明治29年	秋の部	姫君は朝皃の莟つませ給ふ	朝顔	植物
547	明治29年	秋の部	妹死んで終に此秋老いにける	暮の秋	時候
548	明治29年	秋の部	鳶飛んで天に戻るか里の秋	秋	時候
549	明治29年	秋の部	よき人の登第したり菊の花	菊	植物
550	明治29年	秋の部	瀬をはやみあはれ／＼鮎落んとす	錆鮎	動物
551	明治29年	秋の部	名月の船に琵琶ひく昔思ほゆ	名月	天文
552	明治29年	秋の部	僧死んで月片われぬ峯の上	月	天文
553	明治29年	秋の部	垣をあらみ朝皃の蔓ばかりなり	朝顔	植物
554	明治29年	秋の部	谷間の月に砧の砑かな	砧	人事
555	明治29年	秋の部	三日月の彼方に鹿の声すなり	鹿	動物
556	明治29年	秋の部	船頭の子はみめよくて月夜かな	月	天文
557	明治29年	秋の部	鹿笛のあはれ聞えずならんとす	鹿	動物
558	明治29年	秋の部	渋柿や三郎實語教をよむ	柿	植物
559	明治29年	秋の部	我等二人松茸を煮て句作せん	松茸	植物
560	明治29年	秋の部	塗縁に南天の実のこぼれける	南天の実	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
561	明治29年	秋の部	歌なんど鳴立澤の秋の暮	秋の暮	時候
562	明治29年	秋の部	鹿どもが薬採らんと行けば啼く	鹿	動物
563	明治29年	秋の部	急げ馬鶉もなかず日は暮れぬ	鶉	動物
564	明治29年	秋の部	啄木鳥や宮様は下馬せさせ給ふ	啄木鳥	動物
565	明治29年	秋の部	百舌の声寺子の声や申の刻	鵙	動物
566	明治29年	秋の部	小坊主が最上峯の砧かな	砧	人事
567	明治29年	秋の部	夕暮を下第の人と雁と行く	雁	動物
568	明治29年	秋の部	乗合の寝静まる時雁わたる	雁	動物
569	明治29年	秋の部	苫船の夜の雨音雁の音	雁	動物
570	明治29年	秋の部	雁をきく夜船の底の進士かな	雁	動物
571	明治29年	秋の部	江の村や夕嵐して鳥渡る	渡鳥	動物
572	明治29年	秋の部	畔をゆけバ螽三ツ四ツ飛つきぬ	螽	動物
573	明治29年	秋の部	蟷螂の戈を枕に眠るかな	蟷螂	動物
574	明治29年	秋の部	白虹日を貫いて蟷螂起つ	蟷螂	動物
575	明治29年	秋の部	蟀は小さき黒き虫にぞありける	こおろぎ	動物
576	明治29年	秋の部	蜻蜓の三十六湾日は斜	蜻蛉	動物
577	明治29年	秋の部	蜻蜓一ツ鞍をはなれぬ野道かな	蜻蛉	動物
578	明治29年	秋の部	蜻蜓や斜に長き塔の影	蜻蛉	動物
579	明治29年	秋の部	残る蚊の侮りがたき力かな	秋の蚊	動物
580	明治29年	秋の部	秋の蚊の泣く／＼雨に出でゝ行く	秋の蚊	動物
581	明治29年	秋の部	秋の蝿承塵光りて恐ろしき	秋の蝿	動物
582	明治29年	秋の部	秋の蝿二ツ三ツ寄合ふ鞍の上	秋の蝿	動物
583	明治29年	秋の部	二ツ一ツ秋の螢の消えてゆく	秋の螢	動物
584	明治29年	秋の部	飛びもやらず秋の螢の一ツかな	秋の螢	動物
585	明治29年	秋の部	秋の蝶つれな芒にはぢかれぬ	秋の蝶	動物
586	明治29年	秋の部	恨かな小町が塚の秋の蝶	秋の蝶	動物
587	明治29年	秋の部	虫どもの夜更けて何を語るのか	蟲	動物
588	明治29年	秋の部	虫の音の草をくゞりて行方かな	蟲	動物
589	明治29年	秋の部	何虫ぞ或は一時に鳴き立つる	蟲	動物
590	明治29年	秋の部	雪洞や虫さがすちごの美しき	蟲	動物
591	明治29年	秋の部	行けど／＼野路は虫の音ばかり	蟲	動物
592	明治29年	秋の部	蝋燭に紅葉をかざす内侍かな	紅葉	植物
593	明治29年	秋の部	欄干に白衣の客の月夜哉	月	天文
594	明治29年	秋の部	紅葉さげて中将の君立たせ給ふ	紅葉	植物
595	明治29年	秋の部	紅葉狩横川の僧都見えたるよ	紅葉狩	人事
596	明治29年	秋の部	神殿に蝋燭を傳ふ夜寒かな	夜寒	時候
597	明治29年	秋の部	渋柿や丈け小さき寺男	柿	植物
598	明治29年	秋の部	柴胡掘て見知らぬ翁帰りける	藥掘	人事
599	明治29年	秋の部	もみぢ葉の簾を撲てひるがへる	紅葉	植物
600	明治29年	秋の部	栗はねて山賊の頭領あらはれぬ	栗	植物
601	明治29年	秋の部	栗を燒く山賊の妻美なるかな	栗	植物
602	明治29年	秋の部	茸狩りて天狗を見たる噂かな	茸狩	人事
603	明治29年	秋の部	空寺や鼡三疋栗一ツ	栗	植物
604	明治29年	秋の部	いが栗をころがして来る童哉	栗	植物
605	明治29年	秋の部	栗はねて大入道と化けても見よ	栗	植物
606	明治29年	秋の部	いが栗をつかまんものとあせりける	栗	植物
607	明治29年	秋の部	乱を避けてくさびらなんど狩り暮らす	茸	植物
608	明治29年	秋の部	茸狩に吾松茸を得んとぞ思ふ	茸狩	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
609	明治29年	秋の部	白馬馬に非ずと云へば栗はねる	栗	植物
610	明治29年	秋の部	夢に木犀の下美人立てりき	木犀	植物
611	明治29年	秋の部	紅葉散る髙麗縁の疊哉	紅葉	植物
612	明治29年	秋の部	明星や神前の紅葉巫女の袖	紅葉	植物
613	明治29年	秋の部	芋ひきや偶々宿る旅の僧	芋	植物
614	明治29年	秋の部	百尺の蔦這上る巖かな	蔦	植物
615	明治29年	秋の部	十文字に蔦とざしたる空家かな	蔦	植物
616	明治29年	秋の部	末枯や暮雲平かに奥州路	末枯	植物
617	明治29年	秋の部	菊咲いて朝鮮人が詩を作る	菊	植物
618	明治29年	秋の部	椎の実の八升ばかりこぼれける	椎の實	植物
619	明治29年	秋の部	亡國の志士寄合ふや菊の花	菊	植物
620	明治29年	秋の部	尾花ぼう／＼驚破漁陽の鼙鼓起る	芒	植物
621	明治29年	秋の部	子を負て昼餉持行く芦の花	蘆の花	植物
622	明治29年	秋の部	何鳥か飛起つ芦の花月夜	蘆の花	植物
623	明治29年	秋の部	二三本鶏頭の丈の髙さかな	鶏頭	植物
624	明治29年	秋の部	鶏頭の共に仆るゝ卒塔婆かな	鶏頭	植物
625	明治29年	秋の部	花もなき蓼ぼう／＼と藏やしき	蓼の花	植物
626	明治29年	秋の部	死馬の紅葉かぶりて流れける	紅葉	植物
627	明治29年	秋の部	旭出るや紅葉よりつく橋の杭	紅葉	植物
628	明治29年	秋の部	稲こきの其家の聟もと浪人	稲こき	人事
629	明治29年	秋の部	花もなき鶏頭散りぬ地藏堂	鶏頭	植物
630	明治29年	秋の部	里の子の切りさいなむや鶏頭花	鶏頭	植物
631	明治29年	秋の部	犬殺は武士の果なり稲の花	稲の花	植物
632	明治29年	秋の部	稲刈や兄弟二人睦しき	稲刈	人事
633	明治29年	秋の部	鳳仙花を人形姫に奉る	鳳仙花	植物
634	明治29年	秋の部	笑ましげに鬼灯ならす女の子	鬼灯	植物
635	明治29年	秋の部	野菊なんをかしきものにはありける	野菊	植物
636	明治29年	秋の部	盗人のいさかひすなり芒原	芒	植物
637	明治29年	秋の部	大株の芒刈られてしまひけり	芒	植物
638	明治29年	秋の部	黒い牛赤い牛居る花野哉	花野	地理
639	明治29年	秋の部	やう／＼に谷を出れば花野かな	花野	地理
640	明治29年	秋の部	ひとり来て何やら思ふ花野かな	花野	地理
641	明治29年	秋の部	芭蕉十八尺欄に上る影婆娑たり	芭蕉	植物
642	明治29年	秋の部	ふくべ一ツいつまでも／＼さがりける	瓢	植物
643	明治29年	秋の部	笑て答へずひさごを叩く童子かな	瓢	植物
644	明治29年	秋の部	かくの如きふくべに似たるものありや	瓢	植物
645	明治29年	秋の部	がむしゃむと唐辛子かむ男かな	唐辛子	植物
646	明治29年	秋の部	あれに見ゆる紅葉の山は何山か	紅葉	植物
647	明治29年	秋の部	庵せましふくべころがる二ツまで	瓢	植物
648	明治29年	秋の部	僧喝す柳は緑り唐辛子	唐辛子	植物
649	明治29年	秋の部	紅葉した漆畑を風が吹く	紅葉	植物
650	明治29年	秋の部	二三十紅葉の山の夕鴉	紅葉	植物
651	明治29年	秋の部	家古く柿の大木紅葉せり	柿	植物
652	明治29年	秋の部	伸上り紅葉折らまくほしき女	紅葉	植物
653	明治29年	秋の部	橋朽ちて両岸の紅葉半散る	紅葉	植物
654	明治29年	秋の部	小屋の前の櫨紅葉せり水車	櫨紅葉	植物
655	明治29年	秋の部	飯や焚く村南の紅葉烟起つ	紅葉	植物
656	明治29年	秋の部	紅葉午にして木こりが娘戀を歌ふ	紅葉	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
657	明治29年	秋の部	少年詩を吟じて紅葉山下を過ぐ	紅葉	植物
658	明治29年	秋の部	夕虹の紅葉につゞく峠かな	紅葉	植物
659	明治29年	秋の部	縁に散る紅葉を掃ふ若き尼	散紅葉	植物
660	明治29年	秋の部	散紅葉真白き手して拾ひける	散紅葉	植物
661	明治29年	秋の部	一片の紅葉を千々にさく女	紅葉	植物
662	明治29年	秋の部	一漢酒を被て紅葉をゆする	紅葉	植物
663	明治29年	秋の部	岩角を打てば裂けぬべき紅葉かな	紅葉	植物
664	明治29年	秋の部	断岸を紅葉すべること数ふべからず	紅葉	植物
665	明治29年	秋の部	そぼふれば紅葉さゝやく音すなり	紅葉	植物
666	明治29年	秋の部	そぼぬれて紅葉をくゞる樵夫かな	紅葉	植物
667	明治29年	秋の部	曉や紅葉もこぼれ露もこぼれ	紅葉	植物
668	明治29年	秋の部	幾秋の紅葉は朽ちて何になる	紅葉	植物
669	明治29年	秋の部	大木の紅葉の下や毬の唄	紅葉	植物
670	明治29年	秋の部	童子云へらく紅葉した山に師はありと	紅葉	植物
671	明治29年	秋の部	里近し紅葉の奥の咿唔の声	紅葉	植物
672	明治29年	秋の部	紅葉して門長へに鎖したり	紅葉	植物
673	明治29年	秋の部	漁人帰る丹楓江上夕照す	楓	植物
674	明治29年	秋の部	見送りや紅葉の村の外れまで	紅葉	植物
675	明治29年	秋の部	一村は徴兵帰る紅葉する	紅葉	植物
676	明治29年	秋の部	紙燭して見れば紅葉がこぼれぬる	紅葉	植物
677	明治29年	秋の部	深潭や風死して紅葉散りこぼれ	紅葉	植物
678	明治29年	秋の部	大澤に紅葉飄る嵐かな	紅葉	植物
679	明治29年	秋の部	岩角にへばりついたる紅葉哉	紅葉	植物
680	明治29年	秋の部	乞食ども紅葉のかげにやすらへり	紅葉	植物
681	明治29年	秋の部	見て居ればボキと紅葉折る男哉	紅葉	植物
682	明治29年	秋の部	くる／＼と犬ころはしる紅葉かな	紅葉	植物
683	明治29年	秋の部	村の子が紅葉釣り寄す小川哉	紅葉	植物
684	明治29年	秋の部	据風呂や紅葉こぼるゝ蓋の上	紅葉	植物
685	明治29年	秋の部	紅葉葉のひらり／＼と舞落ちぬ	紅葉	植物
686	明治29年	秋の部	飯鍋に紅葉ちり込む山家かな	紅葉	植物
687	明治29年	秋の部	据風呂を出れば紅葉飛つきぬ	紅葉	植物
688	明治29年	秋の部	子は紅葉さげ母は野茶屋に病めりける	紅葉	植物
689	明治29年	秋の部	紅葉燒いて燗すべく酒を賣る女	紅葉	植物
690	明治29年	秋の部	鉄漿くろ〳〵紅葉が茶屋の女笑ふ	紅葉	植物
692	明治29年	秋の部	両三軒紅葉の中の日の御旗	紅葉	植物
693	明治29年	秋の部	ところ〳〵運動會や紅葉山	紅葉	植物
694	明治29年	秋の部	夕晴や紅葉振り／＼馬士唄ふ	紅葉	植物
695	明治29年	秋の部	何茸か紅葉かぶりて居たりける	紅葉	植物
696	明治29年	秋の部	山段々紅葉しぬべく見えにける	紅葉	植物
697	明治29年	秋の部	ところ／＼紅葉しぬべく病める蔦	紅葉	植物
698	明治29年	秋の部	蔦の葉の黄なるもあり紅なるもあり	蔦紅葉	植物
699	明治29年	秋の部	川中の岩に何の木か紅葉す	紅葉	植物
700	明治29年	秋の部	大樹せず小樹尽く紅葉す	紅葉	植物
701	明治29年	秋の部	手を拍て笑へば紅葉こぼれける	紅葉	植物
703	明治29年	秋の部	此の別れ紅葉拈て微笑すべく	紅葉	植物
704	明治29年	秋の部	覚束な渕に臨める蔦紅葉	蔦紅葉	植物
705	明治29年	秋の部	戀なるべく紅葉の蔭に二人ゐる	紅葉	植物
706	明治29年	秋の部	屋根見えつ紅葉の村に犬吠ゆる	紅葉	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
707	明治29年	秋の部	日は照りつ紅葉の山に雨がふる	紅葉	植物
708	明治29年	秋の部	炭に燒かんと紅葉伐仆す谷間哉	紅葉	植物
709	明治29年	秋の部	蔦の葉の薄紅に恥らへり	蔦紅葉	植物
710	明治29年	秋の部	紅葉の茶屋覗けバ女病みてあり	紅葉	植物
711	明治29年	秋の部	一樹の紅葉爰に甘酒ありと有り	紅葉	植物
712	明治29年	秋の部	炭燒の娘紅葉と申す艶なり	紅葉	植物
713	明治29年	秋の部	我宿は俎板も鍋も紅葉哉	紅葉	植物
714	明治29年	秋の部	さら／＼と紅葉すべり落つ鬼瓦	紅葉	植物
716	明治29年	秋の部	我戀は渋柹の渋の渋からず	柹	植物
717	明治29年	秋の部	柳散る／＼驛馬繫がれて物をくふ	柳散る	植物
718	明治29年	秋の部	渋柹の二ツ三ツ残る梢かな	柹	植物
719	明治29年	秋の部	渋柹の枝裂けなんとしたるを支へてあり	柹	植物
720	明治29年	秋の部	古家の柳散り／＼日が暮れる	柳散る	植物
721	明治29年	秋の部	仙台の城下の外づれ末枯れぬ	末枯	植物
722	明治29年	秋の部	穢多村の渋柹見ゆる野中哉	柹	植物
723	明治29年	秋の部	旅人宿の灯火暗く散る柳	柳散る	植物
724	明治29年	秋の部	旗立てゝ徴兵迎ふ村の秋	秋	時候
725	明治29年	秋の部	渋柿に階子かけたる小家かな	柹	植物
727	明治29年	秋の部	草鞋買ふべく腰に銭あり暮の秋	暮の秋	時候
728	明治29年	秋の部	出水して粟の穂先を小舟漕ぐ	粟	植物
730	明治29年	秋の部	いざ起てよ萩の中道二人行かむ	萩	植物
731	明治29年	秋の部	別れても地として渋柿なからんや	柹	植物
732	明治29年	秋の部	宮城野の萩ある處まで送れ	萩	植物
733	明治29年	秋の部	一ツ宛渋柹喰ふて別れうぞ	柹	植物
735	明治29年	秋の部	初秋の乾坤朗らかに鼾せよ	初秋	時候
736	明治29年	秋の部	此秋は三千の発句物すべし	秋	時候
738	明治29年	秋の部	つく／＼と踊見て居る男かな	踊	人事
740	明治29年	秋の部	秋風の大地震ふて已まざりき	秋の風	天文
741	明治29年	秋の部	がっくりと大地裂けたり秋の風	秋の風	天文
742	明治29年	秋の部	早稲の香や出羽街道は鶏の声	稲	植物
743	明治29年	秋の部	地震やむで日暮れて秋の雨がふる	秋の雨	天文
744	明治29年	秋の部	秋の雨親なき子らの泣いて行く	秋の雨	天文
745	明治29年	秋の部	二三人家失ひて秋の雨	秋の雨	天文
746	明治29年	秋の部	鶏も鳴かず地震の跡の秋の雨	秋の雨	天文
747	明治29年	秋の部	秋なれば雨なれば病みぬればこそ	秋	時候
748	明治29年	秋の部	秋雨のいつこに濡れておはすらん	秋の雨	天文
749	明治29年	秋の部	据風呂に秋の風もる庇かな	秋の風	天文
750	明治29年	秋の部	夜は長しらんぷの笠に物をかく	夜長	時候
751	明治29年	秋の部	秋の夜の夫婦いさかふ木賃かな	秋の夜	時候
752	明治29年	秋の部	芒わけて女出てたり雨の中	芒	植物
753	明治29年	秋の部	荒瀧の霧を裂くこと五百尺	霧	天文
754	明治29年	秋の部	嘯けば大澤の霧渦きぬ	霧	天文
755	明治29年	秋の部	女郎花踏みにじられて哀れなり	女郎花	植物
756	明治29年	秋の部	雨に行けばもたれんとすなり女郎花	女郎花	植物
757	明治29年	秋の部	そぼふるや秋の蝶々戀もなし	秋の蝶	動物
758	明治29年	秋の部	山裂けて大木震ふ秋の風	秋の風	天文
759	明治29年	秋の部	日は西へ詮方もなし秋の蝶	秋の蝶	動物
760	明治29年	秋の部	名月や妻を娶らば正に今宵	名月	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
761	明治29年	秋の部	風やむで秋の奥州日は暮れぬ	秋	時候
762	明治29年	秋の部	ひや/＼と洪水の跡月が照る	月	天文
763	明治29年	秋の部	西の方安達太郎山霧を拔く	霧	天文
764	明治29年	秋の部	利根の濁流大霧割いて奔到す	霧	天文
766	明治29年	秋の部	夜は寒し水を隔てゝ異人唄ふ	夜寒	時候
767	明治29年	秋の部	狂人の頻りに鳴子鳴らしけり	鳴子	人事
768	明治29年	秋の部	戯れに鳴子を鳴らす異人かな	鳴子	人事
769	明治29年	秋の部	萩の花少しこぼれて三日の月	萩	植物
770	明治29年	秋の部	夜を寒み薫物くゆる廣間哉	夜寒	時候
772	明治29年	秋の部	一盆の芋皆喰ふてしまひけり	芋	植物
773	明治29年	秋の部	君見よや此水切て落さんず	落し水	地理
774	明治29年	秋の部	虫鳴くや少将戀の細道を	蟲	動物
775	明治29年	秋の部	門前を宗祇が通る芋がある	芋	植物
777	明治29年	秋の部	丹を煉る鍋かけてあり桐一葉	桐一葉	植物
778	明治29年	秋の部	小坊主が名月の鐘つかんとゆく	名月	天文
780	明治29年	秋の部	力なや地を這ふ蔦の薄紅葉	薄紅葉	植物
781	明治29年	秋の部	一面に小草の花の夕月夜	夕月夜	天文
782	明治29年	秋の部	江北へ鴉が飛んで秋暮るゝ	暮の秋	時候
783	明治29年	秋の部	秋風の猪病んで死なんとす	秋の風	天文
785	明治29年	秋の部	右左十歩ばかりの花野かな	花野	地理
786	明治29年	秋の部	鐵燈篭朽ちて虫なく夜毎かな	蟲	動物
787	明治29年	秋の部	三夜網す偶々得たる鱸かな	鱸	動物
788	明治29年	秋の部	重陽の酒壺仆す何奴ぞ	重陽	人事
789	明治29年	秋の部	稲妻や金掘る山の恐ろしき	稲妻	天文
791	明治29年	秋の部	一山の月明かに鐘黒く	月	天文
792	明治29年	秋の部	深渕にひら/＼と秋の蝶黄なり	秋の蝶	動物
793	明治29年	秋の部	末枯や黒う固まる馬の糞	末枯	植物
794	明治29年	秋の部	頬白き人の寒がるあしたかな	朝寒	時候
795	明治29年	秋の部	明星や白菊細く丈け高く	菊	植物
796	明治29年	秋の部	白露の草皆二寸ばかりなる	露	天文
797	明治29年	秋の部	白い旗赤い旗なんど里の秋	秋	時候
798	明治29年	秋の部	葉ちいさく紅ゐ薄く哀れなり	薄紅葉	植物
799	明治29年	秋の部	白雲鶏犬秋長へに老いずもあれ	秋	時候
800	明治29年	秋の部	岩鼻や秋風白き九十九里	秋の風	天文
802	明治29年	秋の部	普請濟むで雨となりけり鶏頭花	鶏頭	植物
803	明治29年	秋の部	鶏頭のこけつ仆れつ藏普請	鶏頭	植物
804	明治29年	秋の部	塵塚や月に鶏頭丈け八尺	鶏頭	植物
805	明治29年	秋の部	塵塚や鶏頭やせてなほ赤し	鶏頭	植物
806	明治29年	秋の部	月暈あり鶏頭の影化けぬべく	鶏頭	植物
807	明治29年	秋の部	門口や左何やら右鶏頭	鶏頭	植物
808	明治29年	秋の部	ばっさりと窓にものうし葉鶏頭	雁來紅	植物
809	明治29年	秋の部	鶏頭を逆さまに吊す小店かな	鶏頭	植物
810	明治29年	秋の部	淺ましや鶏頭の葉のむしられて	鶏頭	植物
811	明治29年	秋の部	雨つれ/＼鶏頭十句成らんとす	鶏頭	植物
813	明治29年	秋の部	村会や台湾の稲二夕作す	稲	植物
814	明治29年	秋の部	村会の門口に菊なんどあり	菊	植物
815	明治29年	秋の部	村会や古学校のやゝ寒き	やや寒	時候
816	明治29年	秋の部	村会や渋柿落る窓の外	柿	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
817	明治29年	秋の部	野分して村会議場仆れつべく	野分	天文
818	明治29年	秋の部	芋引の村会覗く時計かな	芋	植物
819	明治29年	秋の部	村会のがらす窓破れて稲の花	稲の花	植物
820	明治29年	秋の部	村会や役人にすゝむ芋一盆	芋	植物
821	明治29年	秋の部	村会や二三人よりて秋のあめ	秋の雨	天文
822	明治29年	秋の部	末枯や村会議員皆袴	末枯	植物
823	明治29年	秋の部	重陽や偶村会して終に酒	重陽	人事
825	明治29年	秋の部	調練の輜重つゞきぬ秋の村	秋	時候
826	明治29年	秋の部	野茶屋あり吊したる柹の尻黒み	柹	植物
827	明治29年	秋の部	びいどろ欠け散らばりつ末枯るゝ	末枯	植物
828	明治29年	秋の部	柹を隣り空瓶の棚傾きつ	柹	植物
829	明治29年	秋の部	店先や空瓶ころがり秋の蝿	秋の蠅	動物
830	明治29年	秋の部	渋柹や屋根葺換ふる煤くろく	柹	植物
831	明治29年	秋の部	いたいけに紅葉しかゝる轍かな	紅葉	植物
832	明治29年	秋の部	百舌鳥なくや草の実むしる乞食の子	鵙	動物
833	明治29年	秋の部	蓮の実飛んで大に笑ふ男あり	蓮實飛ぶ	植物
834	明治29年	秋の部	刈稲の中に飯喰ふ男かな	稲刈	人事
835	明治29年	秋の部	紅葉せよ我妻酒をかもすべく	紅葉	植物
836	明治29年	秋の部	七八人赤裸々なるが鰯引く	鰯引	人事
837	明治29年	秋の部	雁が音や燕王賢を招くときく	雁	動物
838	明治29年	秋の部	帶にはさむ栗こぼしたる娘かな	栗	植物
839	明治29年	秋の部	水とん／＼鶺鴒の尾たらり／＼	鶺鴒	動物
840	明治29年	秋の部	花白く莖赤き之をなんそば	蕎麥花	植物
841	明治29年	秋の部	鯉も出でつゐもりも出でつ秋の虹	秋の虹	天文
842	明治29年	秋の部	句集あみて栗飯と題せんはいかに	栗飯	人事
843	明治29年	秋の部	奉納の手拭吊るす紅葉かな	紅葉	植物
844	明治29年	秋の部	末枯や赤く彫りたる不動尊	末枯	植物
845	明治29年	秋の部	末枯の薮も畑も夕日かな	末枯	植物
846	明治29年	秋の部	薄暗し知らず木の実か草の実か	雑	雑
847	明治29年	秋の部	石壇や登りも果てず木の実落つ	木の實	植物
848	明治29年	秋の部	畫棟さびて老樹更に紅葉せず	紅葉	植物
849	明治29年	秋の部	地にあれば末枯るゝなり比翼塚	末枯	植物
850	明治29年	秋の部	百舌鳥なくや女大勢不動に詣づ	鵙	動物
851	明治29年	秋の部	末枯れて不動の臑の細る思ひ	末枯	植物
853	明治29年	秋の部	願はくは新酒の醉の三十里	新酒	人事
854	明治29年	秋の部	毒茸は喰はず遙かに酒許せ	茸	植物
855	明治29年	秋の部	其芒なければ淋しかるべきか	芒	植物
856	明治29年	秋の部	其芒なければ淋しかるべきか	芒	植物
857	明治29年	秋の部	少年の紅葉に狂すときかば我	紅葉	植物
858	明治29年	秋の部	少年の紅葉に狂すときかば我	紅葉	植物
859	明治29年	秋の部	渋柹を喰ふてしまへば帰るなり	柹	植物
860	明治29年	秋の部	渋柹を喰ふてしまへば帰るなり	柹	植物
861	明治29年	秋の部	君来らず栗飯少し残りける	栗飯	人事
863	明治29年	秋の部	去って栗留って酒いづれ秋	秋	時候
865	明治29年	秋の部	路ばたの紅葉ゆすらば出でゝ見よ	紅葉	植物
866	明治29年	秋の部	もみぢはの二片三片枝にあり	紅葉	植物
867	明治29年	秋の部	洪水や月を浸して押寄する	月	天文
868	明治29年	秋の部	二三人頬冠りして月に行く	月	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
869	明治29年	秋の部	明月や槍棒廻はす法師原	名月	天文
10614	明治29年	秋の部	野分吹く矢留の城の草長し	野分	天文
10615	明治29年	秋の部	稲の香の吹き廻はるなり大広間	稲の香	植物
10616	明治29年	秋の部	澄む山や月地震の後の腥	月	天文
10617	明治29年	秋の部	風ひや／＼大地裂けたるあはひ哉	冷ゆ	時候
10618	明治29年	秋の部	谷暗し昼の稲妻割りて入る	稲妻	天文
10619	明治29年	秋の部	稲妻や地震の跡の仮屋々々	稲妻	天文
10620	明治29年	秋の部	稲妻の顔見合はする人もなし	稲妻	天文
10621	明治29年	秋の部	秋さめの何処を濡れて辿るらむ	秋雨	天文
10622	明治29年	秋の部	稲妻や大きな家の仆れてある	稲妻	天文
10623	明治29年	秋の部	稲妻の中夜哭声四方に起る	稲妻	天文
10624	明治29年	秋の部	秋雨や中夜哭声四野に満つ	秋雨	天文
10625	明治29年	秋の部	稲妻の奥州山河五十四郡	稲妻	天文
10626	明治29年	秋の部	やむ人の枕並べて秋の風	秋の風	天文
10627	明治29年	秋の部	仮小屋の秋さめに病む女の子	秋雨	天文
10628	明治29年	秋の部	朝寒の松原通るひとりかな	朝寒	時候
10629	明治29年	秋の部	隧道をくぐれば蕎麦の花三(寸)ヵ	蕎麦の花	植物
10630	明治29年	秋の部	西の方蕎麦の花咲く里一つ	蕎麦の花	植物
10631	明治29年	秋の部	そこのけよあゝら長安一片の月	月	天文
10632	明治29年	秋の部	名月や背戸の畑に風呂たい(たり)ヵ	名月	天文
10633	明治29年	秋の部	朝顔の蔓細く花小さなる	朝顔	植物
10634	明治29年	秋の部	名月や土蔵の蔭は薄暗く	名月	天文
10635	明治29年	秋の部	名月や五升樽提げて其角く(る)ヵ	名月	天文
10636	明治29年	秋の部	名月の焼芋かぢり／＼ゆく	名月	天文
10637	明治29年	秋の部	二三人名月の門を出でゝゆく	名月	天文
10639	明治29年	秋の部	三日月の西方十万憶土哉	三日月	天文
10640	明治29年	秋の部	名月や傾城たんねんと薫物(す)ヵ	名月	天文
10641	明治29年	秋の部	蚯蚓の尾を切るなよと申しける	蚯蚓	動物
10642	明治29年	秋の部	踊子の戻ればもとの禅の寺	踊り子	人事
10643	明治29年	秋の部	秋風や草鞋買ふべき腰の銭	秋風	天文
10644	明治29年	秋の部	紅葉手にして村女頻りに恋を歌ふ	紅葉	植物
10645	明治29年	秋の部	人なども紅葉の陰にやすらへり	紅葉	植物
10646	明治29年	秋の部	嵐して紅葉散り込む谷の水	紅葉	植物
10647	明治29年	秋の部	何と云ふか城下のはづれ末枯れし	末枯	植物
10648	明治29年	秋の部	谷間や紅葉舞上る夕あらし	紅葉	植物
10649	明治29年	秋の部	君が代は渋柿ならぬ里もなし	渋柿	植物
10651	明治29年	秋の部	笹原を稲妻切てまはりける	稲妻	天文
10652	明治29年	秋の部	茸狩を御息所のいなみ玉ふ	茸狩	人事
10654	明治29年	秋の部	夜に入れば蝋燭立てゝ菊見哉	菊見	人事
10655	明治29年	秋の部	橋杭に紅葉の枝の流れよる	紅葉	植物
10612	明治29年	秋の部	子規おらがとぶろく呑みに来よ	どぶろく	人事
10638	明治29年	秋の部	舟歌は聞えずなりて夜さむし	夜さむし	天文
10653	明治29年	秋の部	馬を馳す八州の野は末枯れぬ	末枯	植物
1373	明治30年	秋の部	癩病の小屋を出て薬煮る月夜かな	月	天文
1374	明治30年	秋の部	病むちごの月にも芋にもむづかりぬ	雑	雑
1375	明治30年	秋の部	病みやせてひとり灯篭の下に立つ	燈籠	人事
1376	明治30年	秋の部	客にして病み再び秋に逢へる悲し	秋	時候
1377	明治30年	秋の部	鱸さげて漁師が娘医師を訪ふ	鱸	動物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1378	明治30年	秋の部	病やゝ怠りつ氣秋に入る	秋	時候
1379	明治30年	秋の部	立秋を東隣の病者詩を吟ず	立秋	時候
1380	明治30年	秋の部	七夕に病んで物かく女かな	七夕	人事
1381	明治30年	秋の部	病を力め魂祭るべく灯ともしつ	魂祭	人事
1382	明治30年	秋の部	創をつゝむで稲妻に立つ男かな	稲妻	天文
1383	明治30年	秋の部	稲妻に病兵多き野陣かな	稲妻	天文
1384	明治30年	秋の部	落武者のちんばひとりゆく野分かな	野分	天文
1385	明治30年	秋の部	小角力の藥煮てゐる旅篭かな	角力	人事
1386	明治30年	秋の部	朝顔に藥を煮る男鰥にして迂	朝顔	植物
1387	明治30年	秋の部	夕暮を病める角力の馬で来る	角力	人事
1388	明治30年	秋の部	病院の庭に虫なく寐覚かな	蟲	動物
1389	明治30年	秋の部	いとゞ病める身にしむや起て内に入る	身に入む	時候
1390	明治30年	秋の部	医者の輿木槿咲いたる門に入る	木槿	植物
1391	明治30年	秋の部	縁側に藥鍋を持出でつ月を見る	月	天文
1392	明治30年	秋の部	雁が音の去年は越路に病みたりし	雁	動物
1393	明治30年	秋の部	門前を医者の輿いそぐ秋の暮	秋の暮	時候
1394	明治30年	秋の部	病めるにかあらん案山子が倒れゐる	案山子	人事
1395	明治30年	秋の部	医者の門に順礼の子や秋の暮	秋の暮	時候
1396	明治30年	秋の部	君が病に鱸鮮けきなどがよし	鱸	動物
1397	明治30年	秋の部	只ひとり鴫立澤の湯治かな	鴫	動物
1398	明治30年	秋の部	枕上の藥瓶を引寄す夜半の秋	秋の夜	時候
1399	明治30年	秋の部	疫をやむ村に砧の音もなし	砧	人事
1400	明治30年	秋の部	明月の土手をいざりの車行く	名月	天文
1401	明治30年	秋の部	病む人の菊に目さむる廣間かな	菊	植物
1402	明治30年	秋の部	腫物の顔仰向けて月見かな	月見	人事
1403	明治30年	秋の部	眼を病みつ童して白菊手折らしむ	菊	植物
1404	明治30年	秋の部	白髪にして古法を講ず菊の花	菊	植物
1405	明治30年	秋の部	醫者の庭に殊に菊咲く赤き菊	菊	植物
1406	明治30年	秋の部	菊の露に丹を煉るべく菊畑	菊	植物
1407	明治30年	秋の部	藥掘の月夜に帰る梁甫吟	藥掘	人事
1408	明治30年	秋の部	看病やひとり夜寒の枕元	夜寒	時候
1409	明治30年	秋の部	長き夜を曉方に誕生す	夜長	時候
1410	明治30年	秋の部	貧道士の病を咒ふ夜寒かな	夜寒	時候
1411	明治30年	秋の部	病む乳児の銀杏に笑むぞ嬉しき	銀杏	植物
1412	明治30年	秋の部	病める汝に唐辛を與へんか	唐辛子	植物
1413	明治30年	秋の部	貧なる医の松茸を狩りに出でし	松茸	植物
1414	明治30年	秋の部	足駄穿いて月夜に帰る按摩かな	月	天文
1415	明治30年	秋の部	疝氣ある人の先づ吟じ帰る月見かな	月見	人事
1416	明治30年	秋の部	病を忘れ汝と酌み合ふ新酒かな	新酒	人事
1417	明治30年	秋の部	縁端に松茸を干す医者が妻	松茸	植物
1418	明治30年	秋の部	藥掘て里に出でたる道士かな	藥掘	人事
1419	明治30年	秋の部	多病にして白菊多く作りにし	菊	植物
1420	明治30年	秋の部	村に住んで松茸の友に医者を得つ	松茸	植物
1421	明治30年	秋の部	或時は松露或時は茯苓を突く	雑	雑
1422	明治30年	秋の部	安産や秋の夜中をどよめきぬ	秋の夜	時候
1423	明治30年	秋の部	秦淮の残月夢に似たるかな	有明月	天文
1425	明治30年	秋の部	滝涸れつ天の川の斜なり	天の川	天文
1426	明治30年	秋の部	黒雲の天の川を絶つ夜半かな	天の川	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1427	明治30年	秋の部	谷底に仰いで天の川を見る	天の川	天文
1428	明治30年	秋の部	遠の灯や曉方の天の川	天の川	天文
1429	明治30年	秋の部	壇上や銀河に對し香を炷く	天の川	天文
1430	明治30年	秋の部	逢はぬ戀鶏鳴きあけの露深み	露	天文
1431	明治30年	秋の部	長き夜を動かざる佛師が影法師	夜長	時候
1432	明治30年	秋の部	艸むらや偶々きちかうの白き咲く	桔梗	植物
1433	明治30年	秋の部	異人館に夜な／＼踊る音すなり	踊	人事
1434	明治30年	秋の部	朝皃に半月白き戸口かな	朝顔	植物
1435	明治30年	秋の部	冷かや汀に立てば星が飛ぶ	流星	天文
1436	明治30年	秋の部	和蘭の波止場で秋の風に逢ふ	秋の風	天文
1438	明治30年	秋の部	行く／＼や松虫吟じ鈴虫和す	雑	雑
1439	明治30年	秋の部	藥掘て日暮に帰る人あやし	藥掘	人事
1440	明治30年	秋の部	虫賣と連立て終に市に入る	蟲賣	人事
1441	明治30年	秋の部	重箱の埃掃ひつ今朝の秋	今朝の秋	時候
1442	明治30年	秋の部	店を過ぎり南瓜の不具なるを憎む	南瓜	植物
1443	明治30年	秋の部	明窓淨几朝皃の巻をかゝむかな	朝顔	植物
1445	明治30年	秋の部	妾宅に小さき灯篭つるしたり	燈籠	人事
1446	明治30年	秋の部	灯篭に芒かぶさる小家かな	燈籠	人事
1447	明治30年	秋の部	川を隔て曉方の高灯籠	燈籠	人事
1448	明治30年	秋の部	日くれて灯篭の町に入りぬ	燈籠	人事
1449	明治30年	秋の部	両岸の灯篭を見て下りけり	燈籠	人事
1450	明治30年	秋の部	家毎に赤き灯篭吊したり	燈籠	人事
1451	明治30年	秋の部	沈香亭に灯篭つるしひとりゐる	燈籠	人事
1452	明治30年	秋の部	草家二軒中に灯篭の高き立つ	燈籠	人事
1453	明治30年	秋の部	川風に灯篭消えてしまひけり	燈籠	人事
1454	明治30年	秋の部	清人の亭に灯篭つるしたり	燈籠	人事
1455	明治30年	秋の部	いくさあり灯篭つるす家もなし	燈籠	人事
1456	明治30年	秋の部	揚屋町の灯篭見れば美くしき	燈籠	人事
1457	明治30年	秋の部	斥候の高灯篭を打見やる	燈籠	人事
1459	明治30年	秋の部	くさいろ／＼秋いろ／＼の花咲きぬ	秋	時候
1461	明治30年	秋の部	一人ゆけば小萩が野辺を雨がふる	萩	植物
1462	明治30年	秋の部	暮に出でゝ萩咲けるあたり人戀し	萩	植物
1463	明治30年	秋の部	男萩丈高く曉に露けしや	萩	植物
1464	明治30年	秋の部	女萩とかや細やかにして花咲ける	萩	植物
1465	明治30年	秋の部	萩寺の萩盛りなり二三日	萩	植物
1466	明治30年	秋の部	馬に喰はれ少し花咲く萩の株	萩	植物
1467	明治30年	秋の部	萩長くして灯篭に達すべく	萩	植物
1468	明治30年	秋の部	寺に寐て五更に萩の露の音	萩	植物
1469	明治30年	秋の部	雨の中を一荷尽く萩の花	萩	植物
1470	明治30年	秋の部	花まばらに丈徒らに長き萩	萩	植物
1472	明治30年	秋の部	兄弟が一斗の粟を搗て居る	粟	植物
1473	明治30年	秋の部	雲高み山畑の粟黄に熟す	粟	植物
1474	明治30年	秋の部	川に沿ひ夕日が岡の粟黄なり	粟	植物
1475	明治30年	秋の部	はら／＼と露こぼす穂や粟月夜	粟	植物
1476	明治30年	秋の部	粟の中に拔け出でし稗を風が吹く	粟	植物
1478	明治30年	秋の部	道にして大霧に咽び上り得ず	霧	天文
1479	明治30年	秋の部	どう／＼と狹霧の中の水車	霧	天文
1480	明治30年	秋の部	浦風の狹霧を吹くや沖の方	霧	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1481	明治30年	秋の部	曉や霧が小嶋に灯の残る	霧	天文
1482	明治30年	秋の部	龍蟄す窟を霧の渦きぬ	霧	天文
1483	明治30年	秋の部	とある村に帰り後れし燕とぶ	秋燕	動物
1484	明治30年	秋の部	初汐の房州遠み船かゞり	初汐	地理
1485	明治30年	秋の部	日もすがらつく／＼ほうしつくほうし	つくつく法師	動物
1486	明治30年	秋の部	都より残る暑さの便りかな	残暑	時候
1488	明治30年	秋の部	狡兎死して汝は萩を枕かな	萩	植物
1489	明治30年	秋の部	鶏の子の野分に少し飛ばされし	野分	天文
1490	明治30年	秋の部	白い萩と細い芒の株とあり	雑	雑
1491	明治30年	秋の部	風雲や唐もろこしの丈高く	唐黍	植物
1492	明治30年	秋の部	瘧をやみ居れば頻りに稲妻す	稲妻	天文
1493	明治30年	秋の部	瘧落ちて縁より月をさし入れぬ	月	天文
1494	明治30年	秋の部	今朝はしも秋海棠に歌よみし	秋海棠	植物
1495	明治30年	秋の部	晴れし夜を西の方屡々稲妻す	稲妻	天文
1496	明治30年	秋の部	野の中に角力場立てし小村哉	角力	人事
1497	明治30年	秋の部	裏町を角力の太皷通りける	角力	人事
1498	明治30年	秋の部	夕暮を角力大勢町に入る	角力	人事
1499	明治30年	秋の部	虫どもの小萩が下に戀すかな	萩	植物
1500	明治30年	秋の部	女郎花折るべくとして物思ふ	女郎花	植物
1501	明治30年	秋の部	芒わけて小高き処に出でたり	芒	植物
1502	明治30年	秋の部	稲妻の馬上八幡を遙拜す	稲妻	天文
1503	明治30年	秋の部	小提灯に野分しば／＼吹きつける	野分	天文
1504	明治30年	秋の部	海岸や野分の雲を吹飛ばす	野分	天文
1505	明治30年	秋の部	秋風の小夜にさら／＼と音すなり	秋の風	天文
1506	明治30年	秋の部	風にひゞく玉川の里の砧かな	砧	人事
1507	明治30年	秋の部	砧やみて玉川に沿ふ村月夜	砧	人事
1508	明治30年	秋の部	とある村の砧ひとしく打出しぬ	砧	人事
1509	明治30年	秋の部	夜道して砧の里を打過ぎぬ	砧	人事
1510	明治30年	秋の部	沙魚釣の沙魚釣上る頻りなり	鯊釣	人事
1511	明治30年	秋の部	妻の留守に鱸を得たる詩人かな	鱸	動物
1512	明治30年	秋の部	あるが中に巨口細鱗なる鱸	鱸	動物
1513	明治30年	秋の部	無住寺や後ろは蓼の花盛り	蓼の花	植物
1514	明治30年	秋の部	綿摘や夕日の畑を散らばりつ	綿取	人事
1515	明治30年	秋の部	暮を急ぎ野菊のさかり捨てがたき	野菊	植物
1516	明治30年	秋の部	月夜な／＼背戸の畑の蕎麦の花	蕎麥花	植物
1517	明治30年	秋の部	淋しうて出れば案山子が立てゐる	案山子	人事
1518	明治30年	秋の部	五六人根岸に會す野分の日	野分	天文
1520	明治30年	秋の部	萩芒うなづき合ふて別れかな	雑	雑
1521	明治30年	秋の部	君が立つ午の刻より野分かな	野分	天文
1522	明治30年	秋の部	秋風を吾子下るなり最上川	秋の風	天文
1523	明治30年	秋の部	薄暗くふくべ三ツ四ツさがりける	瓢	植物
1524	明治30年	秋の部	虫が鳴く神泉苑の月夜かな	月	天文
1525	明治30年	秋の部	垣つゞき根岸の里の木槿かな	木槿	植物
1526	明治30年	秋の部	殊更に木槿の一木栽ゑてあり	木槿	植物
1527	明治30年	秋の部	葛の葉の端山に起る野分かな	野分	天文
1528	明治30年	秋の部	門に出でつしばし彳む村花火	花火	人事
1529	明治30年	秋の部	二階より花火眺めやる旅人かな	花火	人事
1530	明治30年	秋の部	中島に花火あげたる岸暗み	花火	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1531	明治30年	秋の部	池の中に小舟物して花火かな	花火	人事
1532	明治30年	秋の部	人の子や我子に椎の實を手向け	椎の實	植物
1533	明治30年	秋の部	鶏の尾の野分に逆立事しばし	野分	天文
1534	明治30年	秋の部	犬吹かれ鶏鳴き出す秋の風	秋の風	天文
1535	明治30年	秋の部	葛の葉の日午にして風白き	葛	植物
1536	明治30年	秋の部	會散じひとり詩作る夜の長き	夜長	時候
1537	明治30年	秋の部	新酒賣る家の女の見も馴れず	新酒	人事
1538	明治30年	秋の部	野の店に新酒の杉葉青きかな	新酒	人事
1539	明治30年	秋の部	新酒の鬼殺しと名づくかんばしき	新酒	人事
1540	明治30年	秋の部	野の店に残る暑さの蝿群れつ	残暑	時候
1541	明治30年	秋の部	蝉どもの残る暑さを啼き出しぬ	残暑	時候
1542	明治30年	秋の部	草原や残る暑さの蛇を見る	残暑	時候
1543	明治30年	秋の部	溜水の涸れなんとする残暑かな	残暑	時候
1544	明治30年	秋の部	物狂はしうあるは芒の中に立つ	芒	植物
1545	明治30年	秋の部	岩多く短き芒ばかりかな	芒	植物
1546	明治30年	秋の部	芒喰ひ尽して牧場に馬もなし	芒	植物
1547	明治30年	秋の部	短くてから芒と申す鉢にあり	芒	植物
1548	明治30年	秋の部	川中の岩に夕日す花すゝき	芒	植物
1549	明治30年	秋の部	路傍に芒刈るなり姉妹	萱刈	人事
1550	明治30年	秋の部	野社の右も左も芒かな	芒	植物
1551	明治30年	秋の部	方三尺芒が岡の祠かな	芒	植物
1552	明治30年	秋の部	萩に泣き芒に怨じ日たゝ戀	雑	雑
1553	明治30年	秋の部	洪水を一家避難す粟畑	粟	植物
1554	明治30年	秋の部	洪水を月円なるがあらはれぬ	月	天文
1555	明治30年	秋の部	避病院に秋のてふ／＼青きとぶ	秋の蝶	動物
1556	明治30年	秋の部	巽より野分起り乾に去る	野分	天文
1557	明治30年	秋の部	名月や何やら欲しき我が思	名月	天文
1558	明治30年	秋の部	芋の葉に灯火うつる戸口かな	芋	植物
1559	明治30年	秋の部	秋風の帝闕さかんなるを見る	秋の風	天文
1560	明治30年	秋の部	南殿や制に應じて月を賦す	月	天文
1561	明治30年	秋の部	油も買はずしばらく月と相對す	月	天文
1562	明治30年	秋の部	妹黄菊姉白菊をかざしかな	菊	植物
1563	明治30年	秋の部	一輪の白菊咲きぬ貞女塚	菊	植物
1564	明治30年	秋の部	蛤を屑しとせざる雀かな	雀蛤となる	動物
1565	明治30年	秋の部	或夜案山子夢に入って怨ずらく	案山子	人事
1566	明治30年	秋の部	田の案山子畑の案山子を呼ばんとす	案山子	人事
1567	明治30年	秋の部	風さはがしく案山子割據す山畑	案山子	人事
1568	明治30年	秋の部	狂かあらぬか案山子を脇はさんで奔る	案山子	人事
1569	明治30年	秋の部	志蛤にあるらしき雀かな	雀蛤となる	動物
1570	明治30年	秋の部	白菊の一枝を與へ去らしめつ	菊	植物
1571	明治30年	秋の部	謁見やたま／＼菊の間に置酒す	菊	植物
1572	明治30年	秋の部	山路深く菊の扉を見得たり	菊	植物
1573	明治30年	秋の部	道に立て異人指す案山子かな	案山子	人事
1574	明治30年	秋の部	蛤を思ひとまりし雀かな	雀蛤となる	動物
1575	明治30年	秋の部	三ツ栗を一ツ／＼の別かな	栗	植物
1576	明治30年	秋の部	栗のいが仰向いて笑ふ梢かな	栗	植物
1577	明治30年	秋の部	二ツ栗や一つを送るいがの中	栗	植物
1578	明治30年	秋の部	錦心繡腸にして柘榴子と号す	柘榴	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1579	明治30年	秋の部	落水の一處に落合ふ濁りかな	落し水	地理
1580	明治30年	秋の部	三ツ栗の只一ツ残る思ひかな	栗	植物
1581	明治30年	秋の部	古の箕子の國行けば鷓鴣の啼く	鷓鴣	動物
1582	明治30年	秋の部	車遠く撰みに洩れし虫の鳴く	蟲	動物
1583	明治30年	秋の部	夕風やさいかちの實を吹き鳴らす	皀角	植物
1584	明治30年	秋の部	佛刻み菊に親む一間かな	菊	植物
1585	明治30年	秋の部	雨の如く露おつるなり森の中	露	天文
1586	明治30年	秋の部	露乾かず野に雲低れて草長く	露	天文
1587	明治30年	秋の部	大磯の露にぬれたる横はる	露	天文
1588	明治30年	秋の部	虫の音の露とやなりし夜明方	露	天文
1589	明治30年	秋の部	庭前に露氣紛々と下るなり	露	天文
1590	明治30年	秋の部	鶏の子の晨に出でゝ露をふむ	露	天文
1591	明治30年	秋の部	前栽や紫の露あけの露	露	天文
1592	明治30年	秋の部	朝露の乾くべくもあらぬ社頭哉	露	天文
1593	明治30年	秋の部	大旗の露打拂ふ嵐かな	露	天文
1594	明治30年	秋の部	鉢植に露置きたるを取入れつ	露	天文
1595	明治30年	秋の部	砂原の露にぬれしを裸足かな	露	天文
1596	明治30年	秋の部	落鮎の簗にも入らぬ行くへかな	錆鮎	動物
1598	明治30年	秋の部	美しき菊の御苑の朝日かな	菊	植物
1599	明治30年	秋の部	かしこしや袞龍の御袖菊の花	菊	植物
1600	明治30年	秋の部	菊の間に萬國の諸侯賀をまをす	菊	植物
1601	明治30年	秋の部	君が代は東籬の菊の雨露多し	菊	植物
1602	明治30年	秋の部	卓上や菊の杯菊の酒	菊	植物
1603	明治30年	秋の部	頌に曰く聖代只今菊の花	菊	植物
1604	明治30年	秋の部	夙に起きて菊を東籬の露に採る	菊	植物
1605	明治30年	秋の部	菊插すべく古瓶を得つ埃多き	菊	植物
1606	明治30年	秋の部	白き痩せぬ小鍛冶が庭の菊の花	菊	植物
1607	明治30年	秋の部	東海に旭出でつ城の紅葉かな	紅葉	植物
1608	明治30年	秋の部	木の實黄に草の實紅く野に旭出づ	雑	雑
1609	明治30年	秋の部	君が代の菊の花びら大いなり	菊	植物
1610	明治30年	秋の部	菊の御門をさす朝賀の馬車	菊	植物
1611	明治30年	秋の部	行秋を天に怪しき雲起る	行秋	時候
1612	明治30年	秋の部	江樓やいつくともなく秋のゆく	行秋	時候
1613	明治30年	秋の部	長き夜をあやしき禽の声すなり	夜長	時候
1615	明治30年	秋の部	松茸の老いて山を出づる物うかり	松茸	植物
1616	明治30年	秋の部	木幣や秋風動く熊祭	秋の風	天文
1617	明治30年	秋の部	色かへぬ松をと母の宣ひぬ	色変えぬ松	植物
1618	明治30年	秋の部	こぼれ沈む南天の實や手水鉢	南天の実	植物
1619	明治30年	秋の部	旅篭屋に冬を待つまもあらぬ哉	冬を待つ	時候
1620	明治30年	秋の部	さび鮎を賣残しけり家中町	錆鮎	動物
1621	明治30年	秋の部	啄木鳥のつゝきもあへず飛去りぬ	啄木鳥	動物
1623	明治30年	秋の部	病あるかすこし後れし鴛鴦の妻	鴛鴦	動物
1624	明治30年	秋の部	瘧落ちて飽まで喰ふ河豚かな	河豚	動物
1625	明治30年	秋の部	炭ついで再び煮出す藥かな	炭	人事
2337	明治31年	秋の部	高楼に人のけはひや星今宵	星月夜	天文
2338	明治31年	秋の部	七夕や夜更けて騒ぐ竹の風	七夕	人事
2339	明治31年	秋の部	欄干に星の契りを見る夜哉	星合い	人事
2340	明治31年	秋の部	傾城の星数へけり星今宵	星月夜	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2341	明治31年	秋の部	文月やをり／＼通る女づれ	文月	時候
2342	明治31年	秋の部	秋立つやお城の松の朝あらし	立秋	時候
2343	明治31年	秋の部	山の井の水湧きあふれ初あらし	初嵐	天文
2344	明治31年	秋の部	初秋の枕に近し水の音	初秋	時候
2345	明治31年	秋の部	秋暑し出水のあとの泥まみれ	残暑	時候
2346	明治31年	秋の部	稲妻の水をはしるやつゞけさま	稲妻	天文
2347	明治31年	秋の部	初月を草葉の風が吹て行く	初月	天文
2348	明治31年	秋の部	よき頃にはっと開きし花火哉	花火	人事
2349	明治31年	秋の部	磯十里松風の音天の川	天の川	天文
2350	明治31年	秋の部	よき人の硯洗へる汀かな	硯洗	人事
2351	明治31年	秋の部	人の娘踊の場より盗まれぬ	踊	人事
2352	明治31年	秋の部	灯篭や輿を出てゆく仲の町	燈籠	人事
2353	明治31年	秋の部	骸骨を画く揚屋の灯篭か那	燈籠	人事
2355	明治31年	秋の部	雨の中を曽良と翁と萩芒	雑	雑
2356	明治31年	秋の部	萩芒奥の細道雨がふる	雑	雑
2357	明治31年	秋の部	大粒の雨が落来るきみ畑	唐黍	植物
2358	明治31年	秋の部	芭蕉葉のはら／＼雨に目さめたり	芭蕉	植物
2359	明治31年	秋の部	はたごやに秋の雨きく七部集	秋の雨	天文
2360	明治31年	秋の部	庭前の雨夜もすがら虫も鳴かず	蟲	動物
2361	明治31年	秋の部	両岸の秋雨秋風最上川	雑	雑
2362	明治31年	秋の部	雨ふらんとして踊の太皷打ちやまず	踊	人事
2363	明治31年	秋の部	酣にして雨がふる踊か那	踊	人事
2364	明治31年	秋の部	秋の蚊の雨の夕暮鳴いて来る	秋の蚊	動物
2365	明治31年	秋の部	縁先に梨の皮剥く月夜か那	月	天文
2366	明治31年	秋の部	この道は萩の里へと通ふなり	萩	植物
2367	明治31年	秋の部	故里に母と飯喰ふ角力か那	角力	人事
2368	明治31年	秋の部	草花の露に爪先ぬらしけり	露	天文
2369	明治31年	秋の部	霧さめや顔白き人の宮詣で	霧	天文
2370	明治31年	秋の部	引越して虫聞出しぬ縁の下	蟲	動物
2371	明治31年	秋の部	鍬の土こぼれし月の戸口哉	月	天文
2372	明治31年	秋の部	國元の角力召されぬお庭先	角力	人事
2374	明治31年	秋の部	駕を出て萩に泣き伏す山路哉	萩	植物
2375	明治31年	秋の部	しのび駕萩の裏門三日の月	萩	植物
2376	明治31年	秋の部	灯篭や駕を出て行く仲の町	燈籠	人事
2377	明治31年	秋の部	木犀や駕召し給ふお庭先	木犀	植物
2378	明治31年	秋の部	霧さめや駕出給ふ宮詣で	霧	天文
2379	明治31年	秋の部	よき駕や芙蓉咲いたる庭の前	芙蓉	植物
2380	明治31年	秋の部	草いろ／＼花たばつくる駕の内	草花	植物
2381	明治31年	秋の部	代官の駕送り出す稲の花	稲の花	植物
2382	明治31年	秋の部	たそがれや医者の駕ゆく木槿垣	木槿	植物
2383	明治31年	秋の部	空駕や渡し吹かるゝ秋の暮	秋の暮	時候
2384	明治31年	秋の部	駕で越す峠八里や花芒	芒	植物
2385	明治31年	秋の部	取巻の女房の駕や花野ゆく	花野	地理
2387	明治31年	秋の部	名月に木蘭の船浮べたり	名月	天文
2388	明治31年	秋の部	船の人に花すすき振る夕日か那	芒	植物
2389	明治31年	秋の部	漣や月の笹舟くつがへる	月	天文
2390	明治31年	秋の部	人を送る管絃の船や秋の虹	秋の虹	天文
2391	明治31年	秋の部	網打ちし船や月下の水烟	網打	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2392	明治31年	秋の部	舩をつなぎ岸に上りつ秋の風	秋の風	天文
2393	明治31年	秋の部	夜な／＼の戀の舩路や芦の花	蘆の花	植物
2394	明治31年	秋の部	逢戀や舟漕入るゝ芦の花	蘆の花	植物
2395	明治31年	秋の部	帰るべく船に先立つ燕哉	秋燕	動物
2396	明治31年	秋の部	舷に露吹き散らす芒か那	芒	植物
2398	明治31年	秋の部	絵巻物あるは花野を牛車	花野	地理
2399	明治31年	秋の部	がたひしと夜さむの車路次に入る	夜寒	時候
2400	明治31年	秋の部	俗にして車を賃す菌狩	茸狩	人事
2401	明治31年	秋の部	案内や車を下りて草の花	草花	植物
2402	明治31年	秋の部	りん／＼と車はしるや橋月夜	月	天文
2403	明治31年	秋の部	名月の門に乗入るよき車	名月	天文
2404	明治31年	秋の部	いさゝかの萩など咲いて車寄	萩	植物
2405	明治31年	秋の部	鵙鳴くや車を下りて異人ゆく	鵙	動物
2406	明治31年	秋の部	朝寒の車下りたり宮の前	朝寒	時候
2407	明治31年	秋の部	待合の柳散るなりほろ車	柳散る	植物
2408	明治31年	秋の部	荷車の馬に喰はせる芒か那	芒	植物
2409	明治31年	秋の部	顔に散る棹の雫や舩の月	月	天文
2411	明治31年	秋の部	我を追ふ朝皃の蔓から／＼に	朝顔	植物
2412	明治31年	秋の部	俳諧や寺の紅葉の燒豆腐	紅葉	植物
2414	明治31年	秋の部	窓あけて雁を見送る女か那	雁	動物
2415	明治31年	秋の部	いわしひく村の惣出や濵日和	鰯引	人事
2416	明治31年	秋の部	木の実など取りつゝゆかば日がくれむ	木の實	植物
2417	明治31年	秋の部	真先に宮の大木紅葉せり	紅葉	植物
2418	明治31年	秋の部	刈残す芒の株や寺の畑	芒	植物
2419	明治31年	秋の部	行秋をこよひも人に別れけ里	行秋	時候
2420	明治31年	秋の部	材木や米代川の秋の風	秋の風	天文
2421	明治31年	秋の部	夕暮を戀の細道草紅葉	草錦	植物
2423	明治31年	秋の部	菊さけて翁夫婦や渡りそめ	菊	植物
2424	明治31年	秋の部	芋の子を洗上けたる小川哉	芋	植物
2426	明治31年	秋の部	寺に住む詩人訪ひよる蔦の門	蔦	植物
2427	明治31年	秋の部	秋の蝶黄なるが多し寺の松	秋の蝶	動物
2428	明治31年	秋の部	方丈や朝日にうとき白芙蓉	芙蓉	植物
2429	明治31年	秋の部	末枯のせざる水田の蓮もあ里	末枯	植物
2430	明治31年	秋の部	蔓ひけば青きが出でぬ烏瓜	烏瓜	植物
2431	明治31年	秋の部	山門に車下りたり鵙の声	鵙	動物
2432	明治31年	秋の部	出水に蓼丈高く花咲きぬ	雑	雑
2433	明治31年	秋の部	路傍や写生してゐる秋日和	秋日和	天文
2434	明治31年	秋の部	石大にして石蕗の莟の開かざる	雑	雑
2435	明治31年	秋の部	草花の中に黄なるが抜出でし	草花	植物
2437	明治31年	秋の部	木犀やお経を写す朝机	木犀	植物
2438	明治31年	秋の部	山駕のお肌寒くぞ覚ほすらん	肌寒	時候
2439	明治31年	秋の部	湖近く竹の嵐や星月夜	星月夜	天文
2440	明治31年	秋の部	秋雨や浮世を語る小商人	秋の雨	天文
2441	明治31年	秋の部	わが庭の月や籾する隣りあり	籾摺	人事
2442	明治31年	秋の部	鳴きさうな鹿見て通る夕か那	鹿	動物
2443	明治31年	秋の部	綿取のふくやかに肥えし女か那	綿取	人事
2445	明治31年	秋の部	簑虫の泣明したる甲斐もなし	蓑虫	動物
2447	明治31年	秋の部	杯に菊の雫のたまりける	菊	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2448	明治31年	秋の部	床の間に菊の雫のこぼれける	菊	植物
2449	明治31年	秋の部	菊刈て痩せたる菊の残りけり	残菊	植物
2450	明治31年	秋の部	とざしたる月の戸口や菊白し	菊	植物
2451	明治31年	秋の部	山路来て菊作る家を見つけたり	菊	植物
2452	明治31年	秋の部	残る菊痩せて白きをいとほしみ	残菊	植物
2453	明治31年	秋の部	菊折れて人の心をいたましむ	菊	植物
2454	明治31年	秋の部	菊の間に酒もりしたる公卿哉	菊	植物
2455	明治31年	秋の部	團子喰ふ茶屋の人数や菊人形	菊人形	人事
2456	明治31年	秋の部	菊咲いて妻を娶りし詩人か那	菊	植物
2457	明治31年	秋の部	わが庭の白菊を愛す黄菊がち	菊	植物
2458	明治31年	秋の部	菊そへてまゐらす菊の酒となん	菊の酒	人事
2459	明治31年	秋の部	圓き月尾花が末にあらはれぬ	芒	植物
2460	明治31年	秋の部	調練の旗ひらめかす花野哉	花野	地理
2461	明治31年	秋の部	白菊に香の烟や雨ほそし	菊	植物
3185	明治32年	秋の部	飯濟むや踊あるべき村旅篭	踊	人事
3186	明治32年	秋の部	初秋の草に風吹く寐覚哉	初秋	時候
3187	明治32年	秋の部	迎火のしめりがちなる哀れか那	迎火	人事
3188	明治32年	秋の部	七夕の歌を乞はれし旅篭かな	七夕	人事
3189	明治32年	秋の部	蜩や木の間に見ゆる赤き雲	蜩	動物
3190	明治32年	秋の部	七夕の紅きともしや京の町	七夕	人事
3191	明治32年	秋の部	雷の陣たのもしき弦かな	雷	天文
3192	明治32年	秋の部	蘭を愛す入唐の僧や山の雲	蘭	植物
3193	明治32年	秋の部	朝皃の莟を見るや星明り	朝顔	植物
3194	明治32年	秋の部	蜻蛉の生れ出でたる草葉かな	蜻蛉	動物
3196	明治32年	秋の部	七夕を君にたよりす思ひやり	七夕	人事
3198	明治32年	秋の部	母乗せて彼岸詣や馬に萩	萩	植物
3199	明治32年	秋の部	打かつぐ太皷うれしき踊かな	踊	人事
3200	明治32年	秋の部	裸子の泥に菱とる秋暑し	残暑	時候
3201	明治32年	秋の部	太皷買ふて町を出るや稲の花	稲の花	植物
3202	明治32年	秋の部	海山や二百十日の空の色	二百十日	時候
3203	明治32年	秋の部	虫選びともし消えたる草の風	蟲	動物
3204	明治32年	秋の部	葉鶏頭南瓜畑は荒れにけり	雁來紅	植物
3205	明治32年	秋の部	碧梧は伐仆されつ庭の月	月	天文
3206	明治32年	秋の部	横雲や萩に夜明くる髙台寺	萩	植物
3207	明治32年	秋の部	俳諧は蓮の実飛ぶが如きかな	蓮實飛ぶ	植物
3209	明治32年	秋の部	水にちる花火の色や目さましき	花火	人事
3210	明治32年	秋の部	くれなゐの或はみどりの花火哉	花火	人事
3211	明治32年	秋の部	よく揚る花火は天の川近し	花火	人事
3212	明治32年	秋の部	中流に舟を泛べて花火哉	花火	人事
3213	明治32年	秋の部	金龍の水をはしれる花火哉	花火	人事
3214	明治32年	秋の部	芦の洲に舟漕ぎよせし花火哉	花火	人事
3215	明治32年	秋の部	花火消えて稲妻光る目先哉	花火	人事
3216	明治32年	秋の部	両國の橋は落ちたる花火哉	花火	人事
3217	明治32年	秋の部	月代や花火消えたる岡の上	花火	人事
3218	明治32年	秋の部	揚花火岸の柳に消えにけり	花火	人事
3219	明治32年	秋の部	大粒な雨降りいでし花火かな	花火	人事
3221	明治32年	秋の部	萩わけて橋の名を見る庭荒れし	萩	植物
3222	明治32年	秋の部	石に萩夜露こぼるゝばかりなり	萩	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3223	明治32年	秋の部	藤棚の荒れし軒端や萩の丈	萩	植物
3224	明治32年	秋の部	萩の人に茶盆を運ぶまはり道	萩	植物
3225	明治32年	秋の部	萩咲くや木の間に見ゆる人の影	萩	植物
3226	明治32年	秋の部	萩の園犬ころ多き芝生かな	萩	植物
3227	明治32年	秋の部	松の木を繞りて萩の逕かな	萩	植物
3228	明治32年	秋の部	寺俗に萩乱れ咲く人出かな	萩	植物
3229	明治32年	秋の部	商人の女房なりけり萩の花	萩	植物
3230	明治32年	秋の部	異草もまじりて萩の莟かな	萩	植物
3232	明治32年	秋の部	寐そべってひやづく壁を踏みにけり	冷か	時候
3233	明治32年	秋の部	冷や物打着せし腹の上	冷か	時候
3234	明治32年	秋の部	ひや／＼と浪打寄する木の根哉	冷か	時候
3235	明治32年	秋の部	つきにゆきし鐘冷かに大なり	冷か	時候
3236	明治32年	秋の部	幢幔やひや／＼として風が吹く	冷か	時候
3237	明治32年	秋の部	冷かに楸散るなり門の内	冷か	時候
3238	明治32年	秋の部	冷かな風に吹かれてかしま立	冷か	時候
3239	明治32年	秋の部	雨一夜ひやづく空となりにけり	冷か	時候
3240	明治32年	秋の部	冷かや草を拂へば石に露	冷か	時候
3241	明治32年	秋の部	夙に起きて刻む佛や冷やかに	冷か	時候
3243	明治32年	秋の部	鶏の子は籠に戻りつ秋の雨	秋の雨	天文
3244	明治32年	秋の部	篝火を草に打振り牛祭	牛祭	人事
3245	明治32年	秋の部	松枯れて葡萄の月を賞しけり	葡萄	植物
3246	明治32年	秋の部	装ひや萩に連立つ三四人	萩	植物
3247	明治32年	秋の部	柳散り戸口に古き轍かな	柳散る	植物
3248	明治32年	秋の部	栃の葉と栃と盛りたる器かな	栃	植物
3249	明治32年	秋の部	椋鳥の木の実をこぼす坂の上	椋鳥	動物
3250	明治32年	秋の部	穂芒の馬の腹うつ野分かな	野分	天文
3251	明治32年	秋の部	老樂の鳴子も引いて見たりけり	鳴子	人事
3252	明治32年	秋の部	長き夜の雨ふり已まぬ旅篭哉	夜長	時候
3253	明治32年	秋の部	雨垂れのいさごを洗ひ鳳仙花	鳳仙花	植物
3254	明治32年	秋の部	末なりの鬼灯残る青みがち	鬼灯	植物
3256	明治32年	秋の部	奏聞の孝子もありて年豐か	豊年	人事
3257	明治32年	秋の部	豊年の村に入りけり奉幣使	豊年	人事
3258	明治32年	秋の部	豐年は津々浦々の踊かな	豊年	人事
3259	明治32年	秋の部	豊年の舞樂起るや行在所	豊年	人事
3260	明治32年	秋の部	實る秋千石舩に帆をあげて	秋	時候
3261	明治32年	秋の部	豊かなる瑞穂の國や秋日和	秋日和	天文
3262	明治32年	秋の部	入船の港賑はふ米の秋	秋	時候
3263	明治32年	秋の部	國々の五穀みのると奏しけり	豊年	人事
3264	明治32年	秋の部	瑞兆の雲も現れ実る秋	豊年	人事
3265	明治32年	秋の部	豊年の夫も帰りて嬉しけれ	豊年	人事
3267	明治32年	秋の部	洪水や黍に風吹く朝月夜	唐黍	植物
3268	明治32年	秋の部	江月や鶴飛去りし舟の上	月	天文
3269	明治32年	秋の部	小銭もちて酒買ひに行く村の月	月	天文
3270	明治32年	秋の部	明月の水は東に流れけり	名月	天文
3271	明治32年	秋の部	冷かな月夜なりけり雨上り	月	天文
3272	明治32年	秋の部	明月の庭には木々の雫かな	名月	天文
3273	明治32年	秋の部	明月の風颯々と吹いて来る	名月	天文
3274	明治32年	秋の部	明月の葉廣柏や暗き窓	名月	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3275	明治32年	秋の部	草庵の灯も見えて嵯峨の月	月	天文
3276	明治32年	秋の部	いくさやんで月に暈見る野末哉	月	天文
3278	明治32年	秋の部	打やまぬ踊太鼓や雨になり	踊	人事
3279	明治32年	秋の部	笛吹の美男なりける踊かな	踊	人事
3280	明治32年	秋の部	踊ありとふれまはりけり稲の花	踊	人事
3281	明治32年	秋の部	宿を出て踊見にゆく他国かな	踊	人事
3282	明治32年	秋の部	京の人をとめて踊を習ひけり	踊	人事
3283	明治32年	秋の部	時の疫の踊もなくて村さびし	踊	人事
3284	明治32年	秋の部	篝火の草木にうつり踊かな	踊	人事
3285	明治32年	秋の部	道心のさそひ出されし踊かな	踊	人事
3286	明治32年	秋の部	下加茂の踊召されし御庭哉	踊	人事
3287	明治32年	秋の部	月に雲踊も散ってしまひけり	踊	人事
3288	明治32年	秋の部	古の神泉苑や秋の水	秋の水	地理
3289	明治32年	秋の部	花芒小石がちなる山路哉	芒	植物
3290	明治32年	秋の部	草花に水流れ入る小橋哉	草花	植物
3291	明治32年	秋の部	山越の暮に悲しき案山子哉	案山子	人事
3292	明治32年	秋の部	つはくらも帰りて門の穂蓼哉	蓼の花	植物
3293	明治32年	秋の部	末枯の茄子畑や水が退く	末枯	植物
3294	明治32年	秋の部	いが栗の青きが落ちぬ谷の水	栗	植物
3295	明治32年	秋の部	後の月は菊に灯す夜なりけり	後の月	天文
3296	明治32年	秋の部	此頃の夜寒の空や星が見え	夜寒	時候
3297	明治32年	秋の部	小謠の夕山越や藥掘	藥掘	人事
3299	明治32年	秋の部	豆引いて鶏頭残る畑かな	豆引	人事
3300	明治32年	秋の部	豆引いてかけし軒端に照る日哉	豆引	人事
3301	明治32年	秋の部	畑の豆畦豆も引いてしまひけり	豆引	人事
3302	明治32年	秋の部	引残す豆に鶏遊びけり	豆引	人事
3303	明治32年	秋の部	荒畑や草の中より豆を引く	豆引	人事
3304	明治32年	秋の部	豆引や小豆畑はまだ青し	豆引	人事
3305	明治32年	秋の部	雨晴れて豆引かばやと思ひけり	豆引	人事
3306	明治32年	秋の部	草荒れて豆引くべくもあらぬかな	豆引	人事
3307	明治32年	秋の部	畔豆を引くや門口に鶏を追ふ	豆引	人事
3308	明治32年	秋の部	豆引いて荷ひ来りし労れかな	豆引	人事
3310	明治32年	秋の部	山路來て男に逢ひぬ木賊刈	木賊刈	人事
3311	明治32年	秋の部	木賊刈る雨もさびしや八ツ下り	木賊刈	人事
3312	明治32年	秋の部	木賊刈る男は村の鰥夫かな	木賊刈	人事
3313	明治32年	秋の部	木賊刈寺に寄りけり石に鎌	木賊刈	人事
3314	明治32年	秋の部	三日月や風さら／＼と木賊刈	木賊刈	人事
3315	明治32年	秋の部	木賊刈る男に道を問ひにけり	木賊刈	人事
3316	明治32年	秋の部	木賊刈木賊の中の昼餉哉	木賊刈	人事
3317	明治32年	秋の部	小盗人出づる山路や木賊刈	木賊刈	人事
3318	明治32年	秋の部	道の辺に木賊刈干す小石哉	木賊刈	人事
3319	明治32年	秋の部	領内を忍びの狩や木賊刈	木賊刈	人事
3321	明治32年	秋の部	起き出でゝ葉姜を掘るひじり哉	生姜	植物
3322	明治32年	秋の部	葉姜を荷ひ来りぬ市の雨	生姜	植物
3323	明治32年	秋の部	朝の雨姜の若葉ぬるゝ程	生姜	植物
3324	明治32年	秋の部	葉姜やしめりがちなる畑の土	生姜	植物
3325	明治32年	秋の部	葉姜の葉ながらにして卓の上	生姜	植物
3326	明治32年	秋の部	葉姜の草にまじりて伸びにけり	生姜	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3327	明治32年	秋の部	葉姜を洗へば白き根なりけり	生姜	植物
3328	明治32年	秋の部	霧雨や葉姜を掘る山の畑	生姜	植物
3329	明治32年	秋の部	よき酒に葉姜ひたし贈りけり	生姜	植物
3330	明治32年	秋の部	葉姜の掘残されて更くる秋	秋深し	時候
3331	明治32年	秋の部	葉姜の葉は緑なる梅酢哉	生姜	植物
3332	明治32年	秋の部	葉姜を朝に嗜む老儒哉	生姜	植物
3334	明治32年	秋の部	叔母の子をさそふ鬼灯畑哉	鬼灯	植物
3335	明治32年	秋の部	男の子にも鬼灯分つ大人ぶり	鬼灯	植物
3336	明治32年	秋の部	鬼灯も賣れぬ小店や日短かし	鬼灯	植物
3337	明治32年	秋の部	鬼灯も鶏頭も皆泥まみれ	雑	雑
3338	明治32年	秋の部	鬼灯の青きもまじり多くなる	鬼灯	植物
3339	明治32年	秋の部	鬼灯を貰ひに来るや隣の子	鬼灯	植物
3340	明治32年	秋の部	鬼灯も枯れ勝にして蒜の畑	鬼灯	植物
3341	明治32年	秋の部	鬼灯に蝶も見えけり日をうけて	鬼灯	植物
3342	明治32年	秋の部	草わけて鬼灯さがす屋敷跡	鬼灯	植物
3343	明治32年	秋の部	鬼灯を賣りに來りぬ例の媼	鬼灯	植物
3344	明治32年	秋の部	飴賣の鬼灯も賣る物日哉	鬼灯	植物
3345	明治32年	秋の部	鬼灯は刈尽されぬ昼の虫	鬼灯	植物
3346	明治32年	秋の部	鬼灯の殻引裂いて憂かな	鬼灯	植物
3347	明治32年	秋の部	鬼灯の切捨てられてしなびけり	鬼灯	植物
3349	明治32年	秋の部	見知らざる翁もまじり菌狩	茸狩	人事
3350	明治32年	秋の部	茸狩の茸を煮るべき用意哉	茸狩	人事
3351	明治32年	秋の部	茸狩に仙を羨む心あり	茸狩	人事
3352	明治32年	秋の部	茸狩や鶏鳴く村を見下ろして	茸狩	人事
3353	明治32年	秋の部	炭焼に訪寄る昼や菌狩	茸狩	人事
3354	明治32年	秋の部	茸狩の寺に集ひし戻りかな	茸狩	人事
3355	明治32年	秋の部	炭焼の娘をなぶり菌狩	茸狩	人事
3356	明治32年	秋の部	菌狩藥も掘りて戻りけり	茸狩	人事
3357	明治32年	秋の部	茸狩や襟に落ちたる松の露	茸狩	人事
3358	明治32年	秋の部	茸狩や渓に下りし人の声	茸狩	人事
3359	明治32年	秋の部	名も知らぬ菌を取ってすてにけり	茸狩	人事
3360	明治32年	秋の部	山僧やさそひ出されて菌狩	茸狩	人事
3361	明治32年	秋の部	茸狩の連にはぐれし下山かな	茸狩	人事
3362	明治32年	秋の部	茸狩の松茸を撰る篭の中	茸狩	人事
3363	明治32年	秋の部	かり得たる菌に草をかぶせけり	茸狩	人事
3365	明治32年	秋の部	初汐や鐘つき出す磯の寺	初汐	地理
3366	明治32年	秋の部	初汐に二十日の月も出でにけり	初汐	地理
3367	明治32年	秋の部	初汐に風吹く磯の木立哉	初汐	地理
3368	明治32年	秋の部	初汐や淡路の山に昼の月	初汐	地理
3369	明治32年	秋の部	初汐の漫々として星光る	初汐	地理
3370	明治32年	秋の部	初汐や嶌の草木の日の光り	初汐	地理
3371	明治32年	秋の部	初汐や嶋から帰る朝の舟	初汐	地理
3372	明治32年	秋の部	初汐の武さしの國や朝烟	初汐	地理
3373	明治32年	秋の部	初汐や磯は雨ふる小家がち	初汐	地理
3374	明治32年	秋の部	初汐に夜明くる村や舟の窓	初汐	地理
3375	明治32年	秋の部	舟人の初汐はかり更けにけり	初汐	地理
3376	明治32年	秋の部	初汐や高きに立てる磯の寺	初汐	地理
3378	明治32年	秋の部	嬉しくも萩につれ立つ三人かな	萩	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3380	明治32年	秋の部	露しぐれ笠傾くる風もあり	露しぐれ	天文
3381	明治32年	秋の部	もろともに萩を見にきと傳へてよ	萩	植物
3383	明治32年	秋の部	曲物に柚の葉もそへて柚味噌哉	柚味噌	人事
3384	明治32年	秋の部	方外のゆみそをわかつ笹葉哉	柚味噌	人事
3385	明治32年	秋の部	老禅に柚味噌乞ひ得て戻りけり	柚味噌	人事
3386	明治32年	秋の部	この頃のゆみそもありて小酒哉	柚味噌	人事
3387	明治32年	秋の部	柚味噌の残少き愚庵かな	柚味噌	人事
3388	明治32年	秋の部	酒のまぬ人ばかりなり新柚みそ	柚味噌	人事
3389	明治32年	秋の部	わびしくも芭蕉を泊めしゆみそ哉	柚味噌	人事
3390	明治32年	秋の部	ゆみそつくる朝の厨のうそ寒し	柚味噌	人事
3391	明治32年	秋の部	山里は豆腐に遠き柚みそ哉	柚味噌	人事
3392	明治32年	秋の部	芋の子を呉れてゆみそを貰ひけり	柚味噌	人事
3394	明治32年	秋の部	入舩の新酒もありて祭かな	新酒	人事
3395	明治32年	秋の部	店先に新酒の樽や鶏頭花	新酒	人事
3396	明治32年	秋の部	村中に新酒をくばり祝儀哉	新酒	人事
3397	明治32年	秋の部	野の店の新酒の醉や草の花	新酒	人事
3398	明治32年	秋の部	新酒のむで夜道をゆくやさめ心地	新酒	人事
3399	明治32年	秋の部	賣出しの草花かざる新酒など	新酒	人事
3400	明治32年	秋の部	樽入は新酒なりけりよい嫁御	新酒	人事
3401	明治32年	秋の部	醉顔の下司もうれしき新酒哉	新酒	人事
3402	明治32年	秋の部	新酒積んで川を下るや花芒	新酒	人事
3403	明治32年	秋の部	雨がちの新酒も遅き村さびし	新酒	人事
3404	明治32年	秋の部	菊咲いて君来ましたり此夕	菊	植物
3405	明治32年	秋の部	なか／＼に花野を遠み牛車	花野	地理
3406	明治32年	秋の部	夕月の戸口にあたりひさご哉	瓢	植物
3407	明治32年	秋の部	曉の星も消えけり白桔梗	桔梗	植物
3408	明治32年	秋の部	新そばは弥冝もまじりて発句哉	新蕎麥	人事
3409	明治32年	秋の部	古の月夜に似たる砧かな	砧	人事
3410	明治32年	秋の部	満目の蓮破れぬ風曇り	破蓮	植物
3411	明治32年	秋の部	引きそめし豆の畑や雁わたる	雁	動物
3412	明治32年	秋の部	大名の白河を立つあけの雁	雁	動物
3413	明治32年	秋の部	酒買ふて舟に戻るや暮の雁	雁	動物
3414	明治32年	秋の部	釈奠の襟を正しくうそ寒き	やや寒	時候
3415	明治32年	秋の部	雁金や雨ふり出でし舟の窓	雁	動物
3416	明治32年	秋の部	初雁やまだ鶏頭の痩せながら	雁	動物
3417	明治32年	秋の部	鶏の子の落穂拾ふや畦の草	落穂	植物
3418	明治32年	秋の部	夕晴の菊鮮かや土ぬれし	菊	植物
3419	明治32年	秋の部	紅葉散る縁に雨垂しぶきけり	紅葉	植物
3420	明治32年	秋の部	柳ちり／＼日もくれんとす	柳散る	植物
3421	明治32年	秋の部	赤菊の咲き乱れたり勝手口	菊	植物
3422	明治32年	秋の部	鰯引大雨風となりにけり	鰯引	人事
3423	明治32年	秋の部	ぐみの木の葉も落尽す濵の風	茱萸	植物
3424	明治32年	秋の部	飛んで来る烏にしぐれけり	時雨	天文
3425	明治32年	秋の部	しぐれ来て少しかゝりぬ利休窓	時雨	天文
3426	明治32年	秋の部	大雨に砂洗はれし黄菊かな	菊	植物
3427	明治32年	秋の部	料理屋を出てしぐれけりもみの裏	時雨	天文
3428	明治32年	秋の部	赤々と瀬にうつる雲や鮎のさび	錆鮎	動物
3429	明治32年	秋の部	谷川の尖りし石や鮎落る	錆鮎	動物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3430	明治32年	秋の部	さびあゆの貫かれけり草の骨	錆鮎	動物
3431	明治32年	秋の部	さびあゆの岩に便らん思哉	錆鮎	動物
3432	明治32年	秋の部	さびあゆの膳に上りぬ山はたご	錆鮎	動物
3433	明治32年	秋の部	さびあゆの身をかくすべきすべをなみ	錆鮎	動物
3434	明治32年	秋の部	しばらくは日向に寄りぬ下りあゆ	錆鮎	動物
3435	明治32年	秋の部	此頃の鮎もさびたり鰯すし	錆鮎	動物
3436	明治32年	秋の部	落鮎の身も黄みけり網の中	錆鮎	動物
3437	明治32年	秋の部	あゆも落ち尾花もちりてしまひけり	雑	雑
3438	明治32年	秋の部	秋風や岩に干からびし海の草	秋の風	天文
3439	明治32年	秋の部	自茲去ていつくに君は花芒	芒	植物
3440	明治32年	秋の部	思ひあまり暮秋の山を下りけり	暮の秋	時候
3441	明治32年	秋の部	秋も末になりける顔や君も亦	暮の秋	時候
3442	明治32年	秋の部	旅もはや茲に九月の酒中り	九月	時候
3443	明治32年	秋の部	掃はざる銀杏落葉や能樂堂	銀杏散る	植物
3444	明治32年	秋の部	眼中の秋に海あり吾老矣	秋	時候
3445	明治32年	秋の部	此頃の日和つゝきや茶の莟	茶の花	植物
3446	明治32年	秋の部	茶の花の垣も低しや馬に乗り	茶の花	植物
3447	明治32年	秋の部	茶の花の木幡あたりや雨さびし	茶の花	植物
3448	明治32年	秋の部	茶の花や霜早くふる山の寺	茶の花	植物
3449	明治32年	秋の部	茶の花も咲きぬ異木の帰花	茶の花	植物
3450	明治32年	秋の部	朝起の去来は柹を眺めけり	柹	植物
3452	明治32年	秋の部	茸狩や木の間に見ゆる京の町	茸狩	人事
3453	明治32年	秋の部	茸狩や草につらぬく茸の数	茸狩	人事
3455	明治32年	秋の部	鳥も来ず紅葉に早き金閣寺	紅葉	植物
3456	明治32年	秋の部	達磨の画秋風吹くが如きかな	秋の風	天文
3458	明治32年	秋の部	境内は名のある桜もみじかな	桜紅葉	植物
3460	明治32年	秋の部	渋柿はみんな鴉に喰はれうぞ	柹	植物
3462	明治32年	秋の部	染物に赤蜻蛉や京の川	赤蜻蛉	動物
3464	明治32年	秋の部	風吹くや木津の川辺の棉畑	棉	植物
3466	明治32年	秋の部	よき人の墓も荒れたり鶏頭花	鶏頭	植物
3468	明治32年	秋の部	雨の中に朝戸を開けて蕎麦の花	蕎麥花	植物
3470	明治32年	秋の部	秋雨や鶏の米賣る媼が店	秋の雨	天文
3472	明治32年	秋の部	しん／＼と霧に雨ふる神の山	霧	天文
3473	明治32年	秋の部	上流の紅葉も見えつ五十鈴川	紅葉	植物
3475	明治32年	秋の部	神樂殿の雨に人なきそゞろ寒	そぞろ寒	時候
3476	明治32年	秋の部	朝寒や宮作るべき木の匂ひ	朝寒	時候
3477	明治32年	秋の部	やゝ寒き雨や見上ぐる神の杉	やや寒	時候
3478	明治32年	秋の部	神木のひやゝかにして雫かな	冷か	時候
3479	明治32年	秋の部	秋にして雨にして神の残シの灯	秋	時候
3481	明治32年	秋の部	山風の霧吹きおろす畏さよ	霧	天文
3483	明治32年	秋の部	幾秋の千木高うして宮の雨	秋	時候
3485	明治32年	秋の部	やや久しき汽車の遅れや夜の寒き	夜寒	時候
3487	明治32年	秋の部	海岸に宿れる夜半や秋の雨	秋の雨	天文
3489	明治32年	秋の部	草花も吾もぬれけり雨三日	草花	植物
3491	明治32年	秋の部	大佛の口影を踏むや肌寒う	肌寒	時候
3492	明治32年	秋の部	大佛のうしろは山や秋の風	秋の風	天文
3494	明治32年	秋の部	月の夜は達磨の眼光りけり	月	天文
3496	明治32年	秋の部	鎌倉を見たり満地の秋の風	秋の風	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3499	明治32年	秋の部	北国の山の紅葉や雪早し	紅葉	植物
3500	明治32年	秋の部	帰省して今年の粟を炊きけり	粟	植物
3501	明治32年	秋の部	茶の花に遊ぶ小鳥も見馴れたり	茶の花	植物
3502	明治32年	秋の部	茶の花や引残されし烏瓜	茶の花	植物
3503	明治32年	秋の部	茶の花や俗も閑なる寺の會	茶の花	植物
3504	明治32年	秋の部	茶畑の荒れて久しや花咲きぬ	茶の花	植物
3505	明治32年	秋の部	草枯の畑や茶の木の莟がち	茶の花	植物
3506	明治32年	秋の部	海中の巖を吹くや秋の風	秋の風	天文
3507	明治32年	秋の部	此頃の燕も帰り干莨	秋燕	動物
3508	明治32年	秋の部	三四の菌を草に包みけり	茸	植物
3509	明治32年	秋の部	神嘗の祭の月となりにけり	神嘗祭	人事
3510	明治32年	秋の部	渋柿や袴つけたる氏子ども	柿	植物
3511	明治32年	秋の部	まはり道の足もよごさず草紅葉	草錦	植物
3512	明治32年	秋の部	草紅葉運動会は果てにけり	草錦	植物
3513	明治32年	秋の部	秋晴の道に物干す筵哉	秋晴	天文
3514	明治32年	秋の部	月に歩す偶々九月十三夜	九月	時候
3515	明治32年	秋の部	百舌鳥鳴いて目黒に近き木立かな	鵙	動物
3516	明治32年	秋の部	十町もありと云ふ道や花芒	芒	植物
3517	明治32年	秋の部	酒ものまず夜を寒がりて寐たりけり	夜寒	時候
3518	明治32年	秋の部	冷やかに神の扉を閉るなり	冷か	時候
3519	明治32年	秋の部	岩木山の雪を見上る刈田哉	刈田	地理
3520	明治32年	秋の部	雨寒く刈田を雁の低う飛ぶ	刈田	地理
3521	明治32年	秋の部	老一人田も刈終へてしまひけり	刈田	地理
3522	明治32年	秋の部	秋もはや里は刈田の雨つゞき	刈田	地理
3523	明治32年	秋の部	刈跡の水も落さぬ穭哉	穭	植物
3524	明治32年	秋の部	山里や田を刈りてより小淋しき	刈田	地理
3525	明治32年	秋の部	岡の畑のそばも実となる刈田哉	刈田	地理
3526	明治32年	秋の部	豆引の刈田を眺め戻りけり	刈田	地理
3527	明治32年	秋の部	この頃の秋の霜ふる刈田哉	刈田	地理
3528	明治32年	秋の部	鶏追へば刈田に遠く遊びけり	刈田	地理
3529	明治32年	秋の部	山の田は刈られて久し散尾花	芒	植物
3530	明治32年	秋の部	少し明かき刈田の果や雲のきれ	刈田	地理
3531	明治32年	秋の部	薄明き月の戸口や葉鶏頭	雁來紅	植物
3532	明治32年	秋の部	よき酒を買にやりけり鯷漬	鯷漬	人事
3533	明治32年	秋の部	松茸の土こぼれけり台どころ	松茸	植物
3534	明治32年	秋の部	松茸に草ちらばりぬ台處	松茸	植物
3535	明治32年	秋の部	神の木の盤桓として野分かな	野分	天文
3536	明治32年	秋の部	秋の山に上りて見たり雲の色	秋の山	地理
3537	明治32年	秋の部	鶺鴒や川原に咲ける黄なる花	鶺鴒	動物
3538	明治32年	秋の部	清水の愚庵を訪ひぬ蘭の歌	蘭	植物
3539	明治32年	秋の部	入唐の僧帰りけり蘭の花	蘭	植物
3540	明治32年	秋の部	幽谷に人もすみけり蘭の花	蘭	植物
3541	明治32年	秋の部	岩を負ひて咲かざる蘭の茂りけり	蘭	植物
3542	明治32年	秋の部	菊の花旦のものと思ふかな	菊	植物
3543	明治32年	秋の部	蕙と蘭と共に吹かるゝ旦かな	蘭	植物
3544	明治32年	秋の部	蘭咲くや岩にこぼれし日の光	蘭	植物
3545	明治32年	秋の部	蘭の香や愚なる子の僧となり	蘭	植物
3546	明治32年	秋の部	蘭の鉢貴人の前に据ゑにけり	蘭	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3547	明治32年	秋の部	よき水も流れて蘭の多き谷	蘭	植物
3548	明治32年	秋の部	蘭の苞いやしき人の通りけり	蘭	植物
3549	明治32年	秋の部	蘭の花桂の露や星明り	蘭	植物
3550	明治32年	秋の部	蘭の花野分も知らぬ岩により	蘭	植物
3551	明治32年	秋の部	盆石と花なき蘭を愛しけり	蘭	植物
3552	明治32年	秋の部	襖あけて書院に蘭を運びけり	蘭	植物
3554	明治32年	秋の部	渋柿や流行り出したる大黒天	柿	植物
3555	明治32年	秋の部	實もならぬよしある柿の一木哉	柿	植物
3556	明治32年	秋の部	小一里を枝柿もちて帰りけり	柿	植物
3557	明治32年	秋の部	小淋しき山里路や柿落葉	柿落葉	植物
3558	明治32年	秋の部	渋柿の葉も青々と秋暑し	柿	植物
3559	明治32年	秋の部	渋柿は枝に残れり干莨	柿	植物
3560	明治32年	秋の部	渋柿の村も見えけり花芒	柿	植物
3561	明治32年	秋の部	門に入る医者の車や柿落葉	柿落葉	植物
3562	明治32年	秋の部	渋柿の扁たきを名の在所哉	柿	植物
3563	明治32年	秋の部	渋柿に到る逕も荒れにけり	柿	植物
3565	明治32年	秋の部	俳諧は酒温むるすべもなし	温め酒	人事
3566	明治32年	秋の部	雨となりし運動会や草紅葉	草錦	植物
3567	明治32年	秋の部	低き木の紅葉もまじり花芒	芒	植物
3568	明治32年	秋の部	俳諧の別は似たり柿の蔕	柿	植物
3569	明治32年	秋の部	柚の皮の味噌も残りて別哉	柚味噌	人事
3570	明治32年	秋の部	五六人高きに登る菊の花	菊	植物
3571	明治32年	秋の部	あたためて柚味噌なめけりさしむかひ	柚味噌	人事
3572	明治32年	秋の部	莽として愁ふ芒や君は去る	芒	植物
3573	明治32年	秋の部	風に臨んで暮秋の人を送りけり	暮の秋	時候
3574	明治32年	秋の部	よき人の胞衣うめし木はもみじけり	紅葉	植物
3575	明治32年	秋の部	皆曰く是より遠し秋の風	秋の風	天文
3576	明治32年	秋の部	足らざりし柚味噌に惜き別哉	柚味噌	人事
3578	明治32年	秋の部	木の間から海は見えけり露しぐれ	露しぐれ	天文
3579	明治32年	秋の部	露しぐれ袖にかこひし小提灯	露しぐれ	天文
3580	明治32年	秋の部	山駕に露しぐれきく小淋しき	露しぐれ	天文
3581	明治32年	秋の部	露しぐれ鳥も啼かざる木立哉	露しぐれ	天文
3582	明治32年	秋の部	露しぐれ人出て給ふ車寄	露しぐれ	天文
3583	明治32年	秋の部	露しぐれ森を出てたる日の光	露しぐれ	天文
3584	明治32年	秋の部	内宮の神の灯残り露しぐれ	露しぐれ	天文
3585	明治32年	秋の部	しばし憩ふ一木の松や露しぐれ	露しぐれ	天文
3586	明治32年	秋の部	露しぐれ水に散込む夜明哉	露しぐれ	天文
3587	明治32年	秋の部	露しぐれ既に乾いて草の花	露しぐれ	天文
3588	明治32年	秋の部	夕ふじや垣の茶の木も咲きそめて	茶の花	植物
3589	明治32年	秋の部	黍からを踏んで逕のやゝ寒き	唐黍	植物
3590	明治32年	秋の部	大國の刈田の上やくもり勝	刈田	地理
3591	明治32年	秋の部	山越之狹き刈田や蕎麦の花	蕎麥花	植物
3592	明治32年	秋の部	税輕し籾すり唄も昔ぶり	籾摺	人事
3593	明治32年	秋の部	此頃の雁もまれなり尾花散る	芒散る	植物
3594	明治32年	秋の部	登臨の城高うして雲の秋	秋の雲	天文
3595	明治32年	秋の部	草の実もこぼれて久し古き墓	草の實	植物
3596	明治32年	秋の部	八月の鱸をさくや舟の客	八月	時候
3597	明治32年	秋の部	笠の中に木実を取りし山路哉	木の實	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3598	明治32年	秋の部	紅葉見て滝の裏へもまはりけり	紅葉	植物
3599	明治32年	秋の部	朝寒の菊一ツ咲く戸口哉	雑	雑
3600	明治32年	秋の部	掃かずなりし藤棚の下や冬近し	冬近し	時候
3601	明治32年	秋の部	別るゝに物の悲しや草の花	草花	植物
3602	明治32年	秋の部	心細く北向く皃や秋の風	秋の風	天文
3603	明治32年	秋の部	秋風や道にちらばる草の骨	秋の風	天文
3604	明治32年	秋の部	岩多き國に入りけり秋の風	秋の風	天文
3605	明治32年	秋の部	秋風や桑の畑の泥乾き	秋の風	天文
3606	明治32年	秋の部	洪水や日くれて秋の風が吹く	秋の風	天文
3607	明治32年	秋の部	朝寒や眉の上なる吾妻山	朝寒	時候
3608	明治32年	秋の部	古の奥州路なり秋の風	秋の風	天文
3609	明治32年	秋の部	秋の雲藏王岳を奔りけり	秋の雲	天文
3610	明治32年	秋の部	もろともに新酒の醉や國訛	新酒	人事
3611	明治32年	秋の部	萩芒芒は穂にも出でずして	雑	雑
3612	明治32年	秋の部	十境の外に菊咲く蘭若かな	菊	植物
3613	明治32年	秋の部	芋の子をとりて芋の葉捨てにけり	芋	植物
3614	明治32年	秋の部	茸もなく松の下草花さびし	茸	植物
3615	明治32年	秋の部	衰へし蜻蛉を見る落穂哉	雑	雑
3616	明治32年	秋の部	みとり子の其子美し菊の綿	菊	植物
3617	明治32年	秋の部	穴に入る頃を野ら蛇うとましき	蛇穴に入る	動物
3618	明治32年	秋の部	いさゝかの莨を干して戸さし勝	莨干	人事
3619	明治32年	秋の部	東海に臨む旅篭や星月夜	星月夜	天文
3620	明治32年	秋の部	美しき木の葉の色や鮓の肌	鮓	動物
3621	明治32年	秋の部	末枯れし萩や芒はさびしかり	雑	雑
3622	明治32年	秋の部	よく歌ふ蚯蚓や姫の恋ならん	蚯蚓鳴く	動物
3623	明治32年	秋の部	紫の花は小さし草の秋	秋の草	植物
3624	明治32年	秋の部	末枯れし野や白日を風の吹く	末枯	植物
3625	明治32年	秋の部	巣にもよらで燕さびしき別かな	秋燕	動物
3626	明治32年	秋の部	鳥を射る蝦夷の男や秋の海	秋の海	地理
3627	明治32年	秋の部	仆をさして出てけり雨月夜	月	天文
3628	明治32年	秋の部	椎の実や神恐しき森の風	椎の實	植物
3629	明治32年	秋の部	鴫立て月は東にあらはれぬ	鴫	動物
3630	明治32年	秋の部	腸を洗はれてゐる糸瓜哉	糸瓜	植物
3631	明治32年	秋の部	女郎花折らんともせで通りけり	女郎花	植物
3632	明治32年	秋の部	山盛の栗商や後の月	後の月	天文
3633	明治32年	秋の部	長き夜の星や軒端に迫りたる	夜長	時候
3634	明治32年	秋の部	肌さむき松の鱗の雫かな	肌寒	時候
3635	明治32年	秋の部	白菊の莟尊し天津星	菊	植物
3636	明治32年	秋の部	俳諧師秋の茄子をめでにけり	秋茄子	植物
3637	明治32年	秋の部	綿干すや路にほこりも立たぬ風	綿	植物
3638	明治32年	秋の部	鶏頭に吹溜りけり柿落葉	雑	雑
3639	明治32年	秋の部	行秋や渺茫として海の色	行秋	時候
3640	明治32年	秋の部	二ツ栗別るゝ戀もありぬべし	栗	植物
3641	明治32年	秋の部	雨の中にひとり山田の稲を刈る	稲刈	人事
3642	明治32年	秋の部	稲妻やくれて家に入るひとり者	稲妻	天文
3643	明治32年	秋の部	炭を焼く男に逢ひぬ紅葉狩	紅葉狩	人事
3644	明治32年	秋の部	白菊や夜は星辰二十八	菊	植物
3645	明治32年	秋の部	鱗閣の人誰々ぞ菊の花	菊	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3646	明治32年	秋の部	鳴子引老いては物に氣短き	鳴子	人事
3647	明治32年	秋の部	鳴子引楚の項王を怨みけり	鳴子	人事
3648	明治32年	秋の部	鳴子引秦時の民や法三章	鳴子	人事
3649	明治32年	秋の部	朝寒や白朝皃の花一ツ	朝顔	植物
3650	明治32年	秋の部	鯊釣や尾花に當る西入日	鯊釣	人事
3651	明治32年	秋の部	鶏頭も穂蓼も焦げてしまひけり	雑	雑
3652	明治32年	秋の部	枝豆や月南面の忠義堂	枝豆	植物
3653	明治32年	秋の部	落し水月は屋後に傾きぬ	落し水	地理
3654	明治32年	秋の部	物思へば夢定らず遠砧	砧	人事
3655	明治32年	秋の部	雨風や二百十日の家淋し	二百十日	時候
3656	明治32年	秋の部	思ふ事云はで桔梗の莟哉	桔梗	植物
3657	明治32年	秋の部	長き夜の若宮を思ふ里居哉	夜長	時候
3658	明治32年	秋の部	草市や手にあまりたる物の数	草市	人事
3659	明治32年	秋の部	あざやかな願の糸や笹の露	露	天文
3660	明治32年	秋の部	少しつゝ燒米貰ふ寺子かな	燒米	人事
3661	明治32年	秋の部	油畫や玉川の里草の花	草花	植物
10587	明治32年	秋の部	裏街の踊もまじる踊かな	踊	人事
3866	明治33年	秋の部	朝貌のもの悲しくも咲き残り	朝顔	植物
3867	明治33年	秋の部	朝顔の一輪さきや濃紫	朝顔	植物
3868	明治33年	秋の部	朝顔の思ひや鉢の置所	朝顔	植物
3869	明治33年	秋の部	朝貌ののびるがまゝや花の数	朝顔	植物
3870	明治33年	秋の部	こて／＼と朝貌の鉢や俗和尚	朝顔	植物
3871	明治33年	秋の部	朝顔や水明かに星映り	朝顔	植物
3872	明治33年	秋の部	朝顔の花を描くや葉の緑	朝顔	植物
3873	明治33年	秋の部	朝顔や早起きをする胃の病	朝顔	植物
3874	明治33年	秋の部	朝顔の鉢碎けたり花の末	朝顔	植物
3875	明治33年	秋の部	朝顔を見て心よしかしまだち	朝顔	植物
3876	明治33年	秋の部	既にして秋暑からず水の家	残暑	時候
3877	明治33年	秋の部	秋暑し河伯を呪ふ川の壇	残暑	時候
3878	明治33年	秋の部	秋あつき此頃青き蝶出でぬ	残暑	時候
3879	明治33年	秋の部	秋あつく藥草實ること遲し	残暑	時候
3880	明治33年	秋の部	秋あつく御悩重らせ給ひけり	残暑	時候
3881	明治33年	秋の部	名月や伽羅たきすてゝ人もなし	名月	天文
3882	明治33年	秋の部	雨寒し刈残したる青き稲	稲	植物
3883	明治33年	秋の部	秋雨や人を弔ふ文をかく	秋の雨	天文
3884	明治33年	秋の部	しらげたる新米五升草の庵	新米	人事
3885	明治33年	秋の部	雁金も尾花も風に吹かれけり	雑	雑
3886	明治33年	秋の部	枝豆の殻ばかり憂きものはなし	枝豆	植物
3887	明治33年	秋の部	御題を賜ふ社頭の紅葉かな	紅葉	植物
3888	明治33年	秋の部	誰やらによう似た顔や相撲取	角力	人事
3889	明治33年	秋の部	相撲場に露したゝりぬ神の杉	角力	人事
3890	明治33年	秋の部	小相撲のだまされている揚屋哉	角力	人事
3891	明治33年	秋の部	乗込んだ東八ヶ國の角力哉	角力	人事
3892	明治33年	秋の部	先年の角力の跡や草の花	草花	植物
3893	明治33年	秋の部	妹にめぐり遇ひたる相撲かな	角力	人事
3894	明治33年	秋の部	小相撲や師匠の墓にすゝり泣	角力	人事
3895	明治33年	秋の部	酒飲めぬ相撲はさびし小杯	角力	人事
3896	明治33年	秋の部	相撲取の子を養へり男伊達	角力	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3897	明治33年	秋の部	食あたりして小相撲の残りけり	角力	人事
3898	明治33年	秋の部	温めもせず磊塊に澆ぐ酒	温め酒	人事
3899	明治33年	秋の部	晨々の霜ふる秋に驚きぬ	秋	時候
3900	明治33年	秋の部	また青き神の銀杏や九月尽	九月尽	時候
3901	明治33年	秋の部	紅茸に云ひ寄る菌もありぬべし	茸	植物
3902	明治33年	秋の部	毒茸の毒とも見えぬ憎み哉	茸	植物
3903	明治33年	秋の部	松茸の老いて朽ちなん憤り	松茸	植物
3904	明治33年	秋の部	鎌倉は畑ばかりや星月夜	星月夜	天文
10516	明治33年	秋の部	蕈一過の雨に吹かれけり	蕈	植物
10517	明治33年	秋の部	湾々の芦の花風日の夕	芦の花	植物
10518	明治33年	秋の部	蘭を得て花をいやしむひしり哉	蘭	植物
10519	明治33年	秋の部	蜩や魯智院既に山を去る	蜩	動物
10520	明治33年	秋の部	いさゝかの橋錢を守る秋の雨	秋の雨	天文
10522	明治33年	秋の部	衰残の菊に友を得つ九月尽	九月尽	時候
10523	明治33年	秋の部	月正によろし軒端の通草棚	通草	植物
10524	明治33年	秋の部	六朝の碑を読む野菊かな	野菊	植物
10525	明治33年	秋の部	風流の旅路なるかな女郎花	女郎花	植物
10526	明治33年	秋の部	風雲の影ひやゝけき木末かな	木末	天文
10527	明治33年	秋の部	石趨の踏みにじりかり女郎花	女郎花	植物
10528	明治33年	秋の部	牛頭馬頭も踊り出したる一夜哉	踊	人事
10529	明治33年	秋の部	下草の青きを見るや櫨紅葉	櫨紅葉	植物
10530	明治33年	秋の部	戀中の渋柿をおくるか思無邪	渋柿	植物
10532	明治33年	秋の部	旅籠屋や芋の名月芋団子	芋団子	人事
10533	明治33年	秋の部	魂棚鼠尾草の花哀れなり	鼠尾草	植物
10534	明治33年	秋の部	稲の花すこし風吹くならひかな	稲の花	植物
10542	明治33年	秋の部	掛稲に日は當りけり蓼の花	蓼の花	植物
10543	明治33年	秋の部	鷄の子や露の草花或るは潜り	露	天文
10544	明治33年	秋の部	豆引いて鷄頭淋し痩せながら	鷄頭	植物
10546	明治33年	秋の部	鄙に来て踊の唄や昔ぶり	踊	人事
10550	明治33年	秋の部	鬼灯の壳を捨てたり池の上	鬼灯	植物
10551	明治33年	秋の部	驚きし夜寒の里や山あらし	夜寒	時候
10552	明治33年	秋の部	蕎麥咲や晴れたる川の照反し	蕎麥	植物
10562	明治33年	秋の部	甘酒を飲んで旦の暇乞	甘酒	人事
10565	明治33年	秋の部	朝顔や朝戸あけたる典座敷	朝顔	植物
10566	明治33年	秋の部	小淋しく雨降る宵や高燈籠	燈籠	人事
10567	明治33年	秋の部	虫鳴くや落窪の君人を待つ	虫鳴く	動物
10568	明治33年	秋の部	名月や馬上ゆゝしき金覆輪	名月	天文
10570	明治33年	秋の部	新渋の瓶に日あたる戸口なか	新渋	人事
10571	明治33年	秋の部	南山の秋に対して澹如たり	秋	時候
10572	明治33年	秋の部	逞しき渋柿の木や古き家	渋柿	植物
10573	明治33年	秋の部	芍薬の根を分けて或は薬とす	芍薬の根	植物
10574	明治33年	秋の部	菊咲いて酒の琥珀の光あり	菊	植物
10575	明治33年	秋の部	稲刈りて積蓼に夕日當りけり	稲刈	人事
10535	明治33年	秋の部	ひやゝかに覚えてさめし宵寝哉	冷か	時候
10536	明治33年	秋の部	鹿笛に依々たる鹿の想ひかな	鹿笛	動物
10537	明治33年	秋の部	鳴子引く郡の太守を見送りぬ	鳴子引く	人事
10538	明治33年	秋の部	冷やしたる梨の皮むく刃哉	梨	植物
10541	明治33年	秋の部	妻なくて砧の盤の夜露かな	砧	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10545	明治33年	秋の部	老いて猶砧うつなる母悲し	砧	人事
10549	明治33年	秋の部	小鳥狩愚に生れたる家老の子	小鳥狩	人事
10576	明治33年	秋の部	臨終の物たまはぬ夜寒かな	夜寒	時候
10539	明治33年	秋の部	籾磨や奥に泊めたる俳諧師	籾磨	人事
10540	明治33年	秋の部	籾磨の歌も歌はぬか夫婦哉	籾磨	人事
4085	明治34年	秋の部	草花も悲しとや見む親にして	草花	植物
4086	明治34年	秋の部	虫の音にあこがるゝ身も恋にこそ	蟲	動物
4087	明治34年	秋の部	思ひつゝ寐よとや虫の鳴くならん	蟲	動物
4088	明治34年	秋の部	草に鳴く虫や月夜のたまり水	蟲	動物
4089	明治34年	秋の部	鳴く虫の其父をよび母をよび	蟲	動物
4090	明治34年	秋の部	踊夜の西する月ややるせなき	踊	人事
4091	明治34年	秋の部	故郷に一ト夜は踊るなつかしみ	踊	人事
4092	明治34年	秋の部	樂みは昔ながらの踊かな	踊	人事
4093	明治34年	秋の部	踊見に出たいと思ふ夕餉哉	踊	人事
4094	明治34年	秋の部	蛇の身の斑に光り秋暑し	残暑	時候
4095	明治34年	秋の部	関白の様な皃して瓢かな	瓢	植物
4096	明治34年	秋の部	かき買と去来と見上く梢かな	柿	植物
4097	明治34年	秋の部	渋かろとなぶられ去ぬ柿をなご	柿	植物
4098	明治34年	秋の部	柿食へばどこか渋いかなどゝ禪	柿	植物
4099	明治34年	秋の部	しぶかきや載ち奔る陶渕明	柿	植物
4100	明治34年	秋の部	新藁に且ちる柿の紅葉哉	柿紅葉	植物
4101	明治34年	秋の部	落人に歌を讀みけり木賊刈	木賊刈	人事
4102	明治34年	秋の部	濁酒に赤菊の宿も小うれしき	菊	植物
4103	明治34年	秋の部	落鮎の網に入りけり暮の雨	錆鮎	動物
4104	明治34年	秋の部	庭鳥に紫菀の露や吹きつける	紫菀	植物
4105	明治34年	秋の部	峯入は皆柿道心とや申す	柿	植物
4106	明治34年	秋の部	落雷の杉の一ト木や草紅葉	草錦	植物
4107	明治34年	秋の部	日に當る岩の裸や蔦紅葉	蔦紅葉	植物
4108	明治34年	秋の部	何虫の身にしみ〳〵と鳴音かな	蟲	動物
4109	明治34年	秋の部	鰯引あすは雨ぢゃと申しけり	鰯引	人事
4110	明治34年	秋の部	登臨の客鯉魚風に嘆ずらく	秋の風	天文
4111	明治34年	秋の部	一尺の布を縫ひゐる夜寒かな	夜寒	時候
4112	明治34年	秋の部	二氣未だ合はず恁麽の瓢かな	瓢	植物
4113	明治34年	秋の部	三逕や秋の氣を吐く松の老	秋	時候
4114	明治34年	秋の部	四方皆嶽恐ろしき月夜かな	月	天文
4115	明治34年	秋の部	五音和す月夜の鐘や水の上	月	天文
4116	明治34年	秋の部	清瀬の上を且ちる日の夕	且散る	植物
4117	明治34年	秋の部	虫鳴いて物のあはれと覚えけり	蟲	動物
4118	明治34年	秋の部	虫の音の露に消入る思ひかな	蟲	動物
4119	明治34年	秋の部	鳴虫の玉をころがす美音哉	蟲	動物
4120	明治34年	秋の部	虫鳴くや憂さに堪へざる小夜衣	蟲	動物
4121	明治34年	秋の部	魑魅去て木に住む虫の鳴くさびし	蟲	動物
4122	明治34年	秋の部	宿貧し虫の来て鳴く古疊	蟲	動物
4123	明治34年	秋の部	客泊めて浮世話や踊の夜	踊	人事
4124	明治34年	秋の部	月に打つ踊太皷や人少な	踊	人事
4125	明治34年	秋の部	寺の樹をとよもす踊太皷かな	踊	人事
4126	明治34年	秋の部	漢宮の踊秦時の名月に	踊	人事
4127	明治34年	秋の部	雨雲を恐れ心の踊かな	踊	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4128	明治34年	秋の部	三人の娘踊のたくみ哉	踊	人事
4129	明治34年	秋の部	疫ありて小村につどふ踊かな	踊	人事
4130	明治34年	秋の部	ありたけの水を吐いたる糸瓜哉	糸瓜	植物
4131	明治34年	秋の部	養老の賜もあり稲の花	稲の花	植物
4132	明治34年	秋の部	松の実を踏んで境内ありきけり	新松子	植物
4133	明治34年	秋の部	唐きびの影も月夜の眺かな	唐黍	植物
4134	明治34年	秋の部	つと入を待まうけたる主哉	衝突入	人事
4135	明治34年	秋の部	犬殺梨の木老いて実らざり	梨	植物
4136	明治34年	秋の部	ながらへて何の糸瓜のぶら下り	糸瓜	植物
4137	明治34年	秋の部	霾ふるやうはばみ穴に入る夕	蛇穴に入る	動物
4138	明治34年	秋の部	蛇穴に入りてしまひしけはひ哉	蛇穴に入る	動物
4139	明治34年	秋の部	戀蛇の穴に入るべき別かな	蛇穴に入る	動物
4140	明治34年	秋の部	蛇穴に入るや彼岸の日は西へ	蛇穴に入る	動物
4141	明治34年	秋の部	蛇穴に入る頃草のにしきかな	蛇穴に入る	動物
4142	明治34年	秋の部	蛇穴に入らんと思ふ覚悟かな	蛇穴に入る	動物
4143	明治34年	秋の部	人の世はこんなものとて蛇穴へ	蛇穴に入る	動物
4144	明治34年	秋の部	草を打ち蛇をして穴に入らしめぬ	蛇穴に入る	動物
4145	明治34年	秋の部	蛇穴に入れば松風蘿月哉	蛇穴に入る	動物
4146	明治34年	秋の部	蛇穴に入りてみゝづの唄ひかな	蛇穴に入る	動物
4147	明治34年	秋の部	宮様の茲に御成や草錦	草錦	植物
4148	明治34年	秋の部	畏しや武徳は秋の氣の如し	秋	時候
4149	明治34年	秋の部	風を切てそれ矢の行くへ秋の空	秋の空	天文
4150	明治34年	秋の部	秋風を斬て太刀鳴る壮ん也	秋の風	天文
4151	明治34年	秋の部	蓮の実の飛ぶよと見れば柔ら哉	蓮實飛ぶ	植物
4152	明治34年	秋の部	秋駒の勝ほこりたる足掻哉	馬肥ゆる	動物
4153	明治34年	秋の部	自転車を下りて紫菀に歩みよる	紫菀	植物
4154	明治34年	秋の部	唐にしき大和にしきや花千草	草花	植物
4155	明治34年	秋の部	音樂の空に聞ゆる月夜哉	月	天文
4156	明治34年	秋の部	麦酒のんでそゞろ寒皃してゐたり	そぞろ寒	時候
4157	明治34年	秋の部	蓮の実の飛とも知らで達磨哉	蓮實飛ぶ	植物
4158	明治34年	秋の部	蓮の実の飛とは見えてうつゝ哉	蓮實飛ぶ	植物
4159	明治34年	秋の部	菊は皆莟なりけり後の雛	後の雛	人事
4160	明治34年	秋の部	朝戸出のみかん畑や秋の霜	秋の霜	天文
4161	明治34年	秋の部	水をふいて大きな梨や二ツわり	梨	植物
4162	明治34年	秋の部	徒らに物の悲しき花野哉	花野	地理
4163	明治34年	秋の部	沙魚釣の沙魚やく店や新走	新酒	人事
4164	明治34年	秋の部	秋風の薮も畠もぬかご哉	秋の風	天文
4165	明治34年	秋の部	よき虫の選にもれし美音哉	蟲	動物
4166	明治34年	秋の部	新蕎麦に芭蕉の噂したりけり	新蕎麥	人事
4167	明治34年	秋の部	豆引に誘はる朝の日和かな	豆引	人事
10554	明治34年	秋の部	紅葉狩白衣の人に逢へりけり	紅葉狩	人事
10555	明治34年	秋の部	君見ずや松露は松の露と書く	露	天文
4567	明治35年	秋の部	秋の水仙家の鍋を閑却す	秋の水	地理
4568	明治35年	秋の部	釣人の夕腹へりぬ荻の風	荻	植物
4569	明治35年	秋の部	朝顔に日あたる頃や暇乞	朝顔	植物
4570	明治35年	秋の部	初嵐夜天文を覗ひぬ	初嵐	天文
4571	明治35年	秋の部	月明の清きに耐へす桐一葉	桐一葉	植物
4573	明治35年	秋の部	なく虫の今宵もなきぬ然れども	蟲	動物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4575	明治35年	秋の部	別れんとすれば一剱秋に鳴る	秋	時候
4576	明治35年	秋の部	僧よりも痩せたる蘭の緑かな	蘭	植物
4577	明治35年	秋の部	蘭を獲て氣傲る人や去にけり	蘭	植物
4578	明治35年	秋の部	幽谷に蘭あり美ナル哉之ノ子	蘭	植物
4579	明治35年	秋の部	風蘭の姿や轉タ君を思ふ	蘭	植物
4580	明治35年	秋の部	蘭に鳴く虫に紙燭や兒の顔	蘭	植物
4581	明治35年	秋の部	西瓜きれば故人偶々過ぎりけり	西瓜	植物
4582	明治35年	秋の部	戀歌の秋の部よみぬ小夜枕	秋	時候
4583	明治35年	秋の部	西瓜喰ふ宵の剪燈新話哉	西瓜	植物
4584	明治35年	秋の部	庭上の爽気や粥をすゝりけり	爽か	時候
4585	明治35年	秋の部	秋寒し雨にうたるゝ紅芙蓉	芙蓉	植物
4586	明治35年	秋の部	目さむれば蚊帳の萠黄も九月哉	九月	時候
4587	明治35年	秋の部	枝豆や月明らかに人の皃	枝豆	植物
4588	明治35年	秋の部	蝶の翼秋海棠に力なし	秋海棠	植物
4589	明治35年	秋の部	捨扇さながら人の戀しけれ	秋扇	人事
4590	明治35年	秋の部	寂として蘭に水わく山の中	蘭	植物
4591	明治35年	秋の部	旭已にとんぼ飛ぶなり花芙蓉	芙蓉	植物
4592	明治35年	秋の部	白きものに愛着もなき木槿哉	木槿	植物
4593	明治35年	秋の部	長吉が出世取巻く角力かな	角力	人事
4594	明治35年	秋の部	目指されて踊出でたり男振	踊	人事
4595	明治35年	秋の部	踊から呼戻されし一人哉	踊	人事
4596	明治35年	秋の部	藥園の花こぼれけり秋の水	秋の水	地理
4597	明治35年	秋の部	唐黍に月落かゝる野分哉	野分	天文
4598	明治35年	秋の部	唐黍にかくるゝ戀や尻の冷え	唐黍	植物
4599	明治35年	秋の部	釣竿も見えず荻吹く風ばかり	荻	植物
4600	明治35年	秋の部	岩上の松影をふむ氣爽か	爽か	時候
4601	明治35年	秋の部	朝皃の主はわかし文章生	朝顔	植物
4602	明治35年	秋の部	早稲の香や病もいえてかしま立	稲	植物
4603	明治35年	秋の部	早稲咲いて水こゝろよき旦哉	稲	植物
4604	明治35年	秋の部	臨済の口の廣さよ蓮の実が	蓮實飛ぶ	植物
4605	明治35年	秋の部	白萩を佛の花と手折りけり	萩	植物
4606	明治35年	秋の部	無東西只秋風の声をきく	秋の風	天文
10583	明治35年	秋の部	秋涼し人の眼に立つ大構ひ	秋涼し	天文
10591	明治35年	秋の部	草花をよしとよく見て描かれし	草花	植物
5034	明治36年	秋の部	秋立や參合はして朝茶の湯	立秋	時候
5035	明治36年	秋の部	衰や粥の香匂ふけさの秋	今朝の秋	時候
5036	明治36年	秋の部	墓参途に故人と邂逅す	墓參	人事
5037	明治36年	秋の部	墓参竹馬の友の墓荒れたり	墓參	人事
5038	明治36年	秋の部	一錢のみそはき買へり墓参	墓參	人事
5039	明治36年	秋の部	墓參狂女に道をゆつりけり	墓參	人事
5040	明治36年	秋の部	芙蓉黄也家相見てゐる知らぬ老	芙蓉	植物
5041	明治36年	秋の部	宮愁や露にたへたる白芙蓉	芙蓉	植物
5042	明治36年	秋の部	秋の蛍石山寺の石の上	秋の螢	動物
5043	明治36年	秋の部	なかなかに月あかき夜や扇置く	秋扇	人事
5044	明治36年	秋の部	朝皃や粥煮こぼるゝ獨すみ	朝顔	植物
5045	明治36年	秋の部	朝皃や垣をへだてゝ川千鳥	朝顔	植物
5046	明治36年	秋の部	秋の蛍女は夜を淋しがる	秋の螢	動物
5047	明治36年	秋の部	攝待や関羽威名華夏に震ふ	攝待	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5048	明治36年	秋の部	分限者の榎も古き門茶哉	攝待	人事
5049	明治36年	秋の部	摂待もはや夕風となりにけり	攝待	人事
5050	明治36年	秋の部	木槿白し一朝雨忽ち晴る	木槿	植物
5051	明治36年	秋の部	とんぼの目蓼の花などうつりけり	蜻蛉	動物
5052	明治36年	秋の部	稲妻は知らず踊のかゞり哉	踊	人事
5053	明治36年	秋の部	七夕や子供は餅をうれしがり	七夕	人事
5054	明治36年	秋の部	蓼の花稲にあいたる雀かな	蓼の花	植物
5055	明治36年	秋の部	人魂や消えて芒の五六尺	芒	植物
5056	明治36年	秋の部	少年の旅の首途や初嵐	初嵐	天文
5057	明治36年	秋の部	新涼に謠ひいでたる美音哉	新涼	時候
5058	明治36年	秋の部	星月夜そばの花咲く関ヶ原	蕎麥花	植物
5059	明治36年	秋の部	虫合はしめに合す雑の虫	虫合	人事
5060	明治36年	秋の部	花芒井手の山吹末かれぬ	芒	植物
5061	明治36年	秋の部	はぜつりの岸の芒を束ねけり	鯊釣	人事
5062	明治36年	秋の部	籾すりや芭蕉は月を見ておはす	籾摺	人事
5063	明治36年	秋の部	梨の皮黍の殻月は傾きぬ	雑	雑
5064	明治36年	秋の部	玉川の鮎さびたりな草紅葉	草錦	植物
5065	明治36年	秋の部	昼のきり四十八滝渡りけり	霧	天文
5066	明治36年	秋の部	秋の人晴れたる山に上りけり	秋	時候
5067	明治36年	秋の部	案山子の手かゝしの足の冷かさ	案山子	人事
5068	明治36年	秋の部	芋くうて即ち梁の國を去る	芋	植物
5069	明治36年	秋の部	京角力江戸の角力と對しけり	角力	人事
5070	明治36年	秋の部	末枯や北風つよく当る山	末枯	植物
5071	明治36年	秋の部	秋晴の夕空さむくなりゆきぬ	秋晴	天文
5072	明治36年	秋の部	花野つきて芒に人のかくれけり	花野	地理
5073	明治36年	秋の部	秋のもの小庵に鱸鮮か也	鱸	動物
5074	明治36年	秋の部	著述家の小閒を得て鳴子引	鳴子	人事
5075	明治36年	秋の部	白きもの衣桁の衣も夜寒哉	夜寒	時候
5076	明治36年	秋の部	毛見の衆の芋を貪りくらひけり	毛見	人事
5077	明治36年	秋の部	鳴く虫のみゝじも秋の恋歌かな	蟲	動物
5078	明治36年	秋の部	鶏頭に桐の廣葉の落尽す	鶏頭	植物
5079	明治36年	秋の部	鶏頭に弓引く遊びしたりけり	鶏頭	植物
5080	明治36年	秋の部	門口に野分の後の木の葉かな	野分	天文
5081	明治36年	秋の部	月蝕の草木尽く秋也	秋	時候
5082	明治36年	秋の部	月今宵芙蓉の如き女かな	月	天文
5083	明治36年	秋の部	月むかし烏鵲南に飛ぶを見る	月	天文
5084	明治36年	秋の部	名月や風吹送る子夜の歌	名月	天文
5085	明治36年	秋の部	名月の吾志海の如し	名月	天文
5086	明治36年	秋の部	名月や古人山高きを厭はず	名月	天文
5087	明治36年	秋の部	月今宵ひさごの米もあふれけり	月	天文
5088	明治36年	秋の部	商人は商人皃の月見哉	月見	人事
5089	明治36年	秋の部	鉄笛や月下征人三十萬	月	天文
5090	明治36年	秋の部	月蝕の午前一時やそゞろ寒	そぞろ寒	時候
5091	明治36年	秋の部	秋風や三千年の坐禪石	秋の風	天文
5092	明治36年	秋の部	山買ひて山見めくれバ渡鳥	渡鳥	動物
5093	明治36年	秋の部	新道を馬車の往來やそばの花	蕎麥花	植物
5094	明治36年	秋の部	毛見衆に後るゝ人や囁きぬ	毛見	人事
5095	明治36年	秋の部	寺のちご間に棗を拾ひけり	棗	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5096	明治36年	秋の部	市に買ふ夜寒の魚や生きてあり	夜寒	時候
5097	明治36年	秋の部	新走世は草花の好時節	新酒	人事
5098	明治36年	秋の部	さびしさに紅葉を焚いて遊びけり	紅葉	植物
5099	明治36年	秋の部	名月や机の上の梨の影	名月	天文
5100	明治36年	秋の部	紅葉散て巖角いよゝ現はれぬ	散紅葉	植物
5101	明治36年	秋の部	水とれば佛もへちまもなかりけり	糸瓜	植物
5102	明治36年	秋の部	大方の菊きり尽す十三夜	後の月	天文
5103	明治36年	秋の部	行秋の我が病膏肓に入る	行秋	時候
5104	明治36年	秋の部	歡をなすよく幾日ぞ扇置く	秋扇	人事
5105	明治36年	秋の部	扇置いて且作りけり子夜の歌	秋扇	人事
5106	明治36年	秋の部	婆娑と落つ物の葉や蛇穴に入る	蛇穴に入る	動物
5107	明治36年	秋の部	蛇は穴に風落々と鳴りにけり	蛇穴に入る	動物
5108	明治36年	秋の部	穴に入る蛇のまぼろしまんじゅさけ	蛇穴に入る	動物
5109	明治36年	秋の部	蛇穴に入るが如しと卜しけり	蛇穴に入る	動物
5110	明治36年	秋の部	其糞奇也蛇穴に入らんとす	蛇穴に入る	動物
5111	明治36年	秋の部	風前の玉樹日の秋人立てり	秋の日	天文
5112	明治36年	秋の部	紅葉深くよき水絶えず流れけり	紅葉	植物
5113	明治36年	秋の部	昔火を噴きし山也むら紅葉	紅葉	植物
5114	明治36年	秋の部	絶頂にめづらしき紅葉一木かな	紅葉	植物
5115	明治36年	秋の部	日の光白き野分の雲間哉	野分	天文
5116	明治36年	秋の部	秋風の刀段々と折れにけり	秋の風	天文
5117	明治36年	秋の部	蓬莱や木実に遊ぶ童男女	木の實	植物
5118	明治36年	秋の部	虫いろ／＼戀なればこそみゝづ鳴け	蟲	動物
5119	明治36年	秋の部	恋無常秋の夕となりにけり	秋の暮	時候
5121	明治36年	秋の部	秋の山此国豆の如くなり	秋の山	地理
5123	明治36年	秋の部	草の実も木の実も俳諧秋の季ぞ	雑	雑
5125	明治36年	秋の部	猶存す芭蕉葉上古時の花	芭蕉	植物
5126	明治36年	秋の部	芭蕉花あり又碧巖を把て讀む	芭蕉の花	植物
5127	明治36年	秋の部	松間に寺あり芭蕉花ひらく	芭蕉の花	植物
5128	明治36年	秋の部	花をつけし芭蕉や小鳥親まず	芭蕉の花	植物
5129	明治36年	秋の部	時ならぬ霰芭蕉の花黄なり	芭蕉の花	植物
5130	明治36年	秋の部	月明らかに芭蕉の花を照らしけり	芭蕉の花	植物
5131	明治36年	秋の部	芭蕉の花出羽の小春を咲きにけり	芭蕉の花	植物
5132	明治36年	秋の部	さゝげ來る芭蕉の花や人僧也	芭蕉の花	植物
5133	明治36年	秋の部	裂盡す芭蕉に花の大なり	芭蕉の花	植物
5134	明治36年	秋の部	剪落す芭蕉の花や秋の風	芭蕉の花	植物
5433	明治37年	秋の部	踏み迷ふ山女郎花稀にさく	女郎花	植物
5434	明治37年	秋の部	荻苅りて漁家の趣秋老いぬ	荻	植物
5435	明治37年	秋の部	釀し得て恰もよし濁酒	濁酒	人事
5436	明治37年	秋の部	蛇穴に入ると喩へて帰省哉	蛇穴に入る	動物
5437	明治37年	秋の部	蝦夷菊の花や籾する家貧し	蝦夷菊	植物
5438	明治37年	秋の部	山僧や木槿白きに嗽ぎ	木槿	植物
5439	明治37年	秋の部	山寺や月見てあれば栗鼡のなく	月	天文
5440	明治37年	秋の部	新蕎麥や俳諧も亦華かに	新蕎麥	人事
5441	明治37年	秋の部	秋寒に驚く儒者の葛衣哉	秋寒	時候
5442	明治37年	秋の部	寒山の胡座さびしや蔦紅葉	蔦紅葉	植物
5444	明治37年	秋の部	秋の日の帰心いらだつ船路かな	秋の日	天文
5445	明治37年	秋の部	山門秋日粉蝶を藏しけり	秋の日	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5446	明治37年	秋の部	日の秋の燕子に傷む心か南	秋の日	天文
5447	明治37年	秋の部	秋の日の没して魚竜黙しけり	秋の日	天文
5448	明治37年	秋の部	秋の日の既にして射る承露盤	秋の日	天文
5449	明治37年	秋の部	秋の日の芙蓉に薄き辺土かな	秋の日	天文
5450	明治37年	秋の部	秋の日の江湖に落ちて一漁翁	秋の日	天文
5451	明治37年	秋の部	日の秋や鸚鵡驚く木實の香	秋の日	天文
5452	明治37年	秋の部	紅葉さむし劍を仗き荊軻行く	紅葉	植物
5453	明治37年	秋の部	鎌倉の山めくりすや花芒	芒	植物
5454	明治37年	秋の部	初鮭の吉例神に捧ぐなり	鮭	動物
5455	明治37年	秋の部	秋晴の水の鏡やかちわたり	秋晴	天文
5456	明治37年	秋の部	さび鮎や疝氣を語る樵者漁者	錆鮎	動物
5457	明治37年	秋の部	落し水早く日陰の山田哉	落し水	地理
5458	明治37年	秋の部	よべの虫蚊帳をたゝめば飛にけり	蟲	動物
5459	明治37年	秋の部	虫なくや夜は兵書に目をさらす	蟲	動物
5460	明治37年	秋の部	長が宿虫きく荒レと成にけり	蟲	動物
5461	明治37年	秋の部	唐黍の葉末に虫の高音哉	蟲	動物
5462	明治37年	秋の部	掛物に虫が來てなく獨坐哉	蟲	動物
5463	明治37年	秋の部	秋涼し葛の葉裏を見る程に	新涼	時候
5464	明治37年	秋の部	新涼に猶愛す蜩の翠哉	新涼	時候
5465	明治37年	秋の部	新涼に生れて鳴きぬ朝の蝉	新涼	時候
5466	明治37年	秋の部	秋涼し坐に盆石の潤ヒ	新涼	時候
5467	明治37年	秋の部	秋涼し宮女牽牛花を詠ず	新涼	時候
5468	明治37年	秋の部	虫枯の山田の毛見も終りけり	毛見	人事
5469	明治37年	秋の部	毛見済で社日の酒の旨き哉	毛見	人事
5470	明治37年	秋の部	毛見の衆に三戸の村の恐れけり	毛見	人事
5471	明治37年	秋の部	毛見の衆のにく／＼しさよ長羽織	毛見	人事
5472	明治37年	秋の部	大庭をとよもす風や駒迎	駒迎	人事
5473	明治37年	秋の部	小鳥狩川の中洲へ渡りけり	小鳥狩	人事
5474	明治37年	秋の部	立たぬ鴫西上人が歌の屑	鴫	動物
5475	明治37年	秋の部	葉葡萄の月にましらを逸しけり	月	天文
5476	明治37年	秋の部	戸を叩く狸来ずなり夜寒哉	夜寒	時候
5477	明治37年	秋の部	枕上の白湯冷かに夜明けたり	冷か	時候
5478	明治37年	秋の部	秋の霜木末の蜜柑色づきぬ	秋の霜	天文
5479	明治37年	秋の部	酒尽きて鯷漬猶少しあり	鯷漬	人事
5480	明治37年	秋の部	鳴く蚯蚓東に在れば東華坊	蚯蚓鳴く	動物
5481	明治37年	秋の部	猿酒や葛藟之を掩ひけり	猿酒	人事
5482	明治37年	秋の部	足三たび宰相の門に入れば秋	秋	時候
5483	明治37年	秋の部	芦の花舟ありと見えて人語哉	蘆の花	植物
5484	明治37年	秋の部	芦の花水清うして魚住まず	蘆の花	植物
5485	明治37年	秋の部	末枯れて真菰は寒し芦の花	蘆の花	植物
5486	明治37年	秋の部	芦の花石碣村の月見か南	蘆の花	植物
5487	明治37年	秋の部	去來忌や心ゆく程秋の風	去來忌	人事
5488	明治37年	秋の部	去来忌の夜更けて門を叩く音	去來忌	人事
5489	明治37年	秋の部	去來忌の庵の客只一人か南	去來忌	人事
5490	明治37年	秋の部	名月やあたりは暗き杉林	名月	天文
5491	明治37年	秋の部	月前の雲に老杜の愁かな	月	天文
5492	明治37年	秋の部	山家集相聞の部は月にして	月	天文
5493	明治37年	秋の部	黍老いて此頃の月美なるかな	月	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5494	明治37年	秋の部	僧泊めて坐を与へけり月の縁	月	天文
5495	明治37年	秋の部	落尽す梧桐の下や月を見る	月	天文
5496	明治37年	秋の部	芦の花漁人の妻を見たりけり	蘆の花	植物
5497	明治37年	秋の部	去來忌やこゝにも一人粥の客	去來忌	人事
5498	明治37年	秋の部	毛見の衆に機を下らぬ寡哉	毛見	人事
5499	明治37年	秋の部	芋十句一顆をくへば一句か南	芋	植物
5500	明治37年	秋の部	去来忌や月はあれども古簾	去來忌	人事
5501	明治37年	秋の部	破蓮下第の人の寺ごもり	破蓮	植物
5502	明治37年	秋の部	攝待や人に紛れぬ打虎武松	攝待	人事
5503	明治37年	秋の部	月前の雲や谷風吹上ぐる	月	天文
5504	明治37年	秋の部	墓の月松柏既に摧けたり	月	天文
5505	明治37年	秋の部	片側は女人ばかりや月の宴	月	天文
5506	明治37年	秋の部	帳あげて月に面をかゞやかす	月	天文
5507	明治37年	秋の部	去来忌や昨日の雛の小盃	去來忌	人事
5508	明治37年	秋の部	去來忌や猶見る菊の雛達	去來忌	人事
5509	明治37年	秋の部	雁を射る人かくれけり芦の花	蘆の花	植物
5510	明治37年	秋の部	芦の花八月潮平かに	蘆の花	植物
5511	明治37年	秋の部	芦の花天明に見る蘇子が舟	蘆の花	植物
5512	明治37年	秋の部	芦の花蘇子に隨ふ二客あり	蘆の花	植物
5513	明治37年	秋の部	去來忌や蝕み古き弓の弦	去來忌	人事
5514	明治37年	秋の部	去来忌や栁晋問答くりかへす	去來忌	人事
5515	明治37年	秋の部	一湾の芦花や玩家の三兄弟	蘆の花	植物
5516	明治37年	秋の部	故人遠し傾くまでの月を見る	月	天文
5517	明治37年	秋の部	芦の花返照及ぶ水の隈	蘆の花	植物
5518	明治37年	秋の部	膾造る菊も十日の佛かな	菊膾	人事
5519	明治37年	秋の部	月に栗鼡葉葡萄の露をゆりこぼす	月	天文
5520	明治37年	秋の部	鶏頭の根こぎと干しぬ烏瓜	烏瓜	植物
5521	明治37年	秋の部	烏瓜茶の木の老いて花多き	烏瓜	植物
5730	明治38年	秋の部	倚添うて角力美くし宮柱	角力	人事
5731	明治38年	秋の部	角力取大内山を罷出けり	角力	人事
5732	明治38年	秋の部	小竒麗な女房とつれて角力哉	角力	人事
5733	明治38年	秋の部	河渉る馬の頭や野分吹く	野分	天文
5734	明治38年	秋の部	野分吹いて狹斜の巷乱れけり	野分	天文
5735	明治38年	秋の部	芭蕉裂けて腸を断つ野分哉	野分	天文
5736	明治38年	秋の部	芋畑に客引入れて語りけり	芋	植物
5737	明治38年	秋の部	糸瓜あるを知らず主人迂濶なり	糸瓜	植物
5738	明治38年	秋の部	歌の文字猶目に存す捨扇	秋扇	人事
5739	明治38年	秋の部	俳諧は一字を惜む捨扇	秋扇	人事
5740	明治38年	秋の部	御幸過きて久しくなりぬ置扇	秋扇	人事
5741	明治38年	秋の部	扇置くや秋海棠に親みて	秋扇	人事
5742	明治38年	秋の部	堂に上る虫や扇を納めけり	秋扇	人事
5743	明治38年	秋の部	振向くや皆初秋の男ぶり	初秋	時候
5744	明治38年	秋の部	舷に面起すや初あらし	初嵐	天文
5745	明治38年	秋の部	新凉の岸離れゆく船路哉	新凉	時候
5746	明治38年	秋の部	初嵐帆綱は水に浸りけり	初嵐	天文
5747	明治38年	秋の部	稀に見る玫瑰の実や秋の風	秋の風	天文
5748	明治38年	秋の部	我笠の菅の白さよ秋の水	秋の水	地理
5749	明治38年	秋の部	貝殻や秋の日をふむ海燕	秋の日	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5750	明治38年	秋の部	海を見て一人立ちけり秋の峯	秋の山	地理
5751	明治38年	秋の部	わりなしや錨にとまる秋の蝶	秋の蝶	動物
5752	明治38年	秋の部	荒磯やつれなく棄てし野撫子	撫子	植物
5753	明治38年	秋の部	二三尺波を離れて秋の蝶	秋の蝶	動物
5754	明治38年	秋の部	秋の海人ひとり乗る丸木舟	秋の海	地理
5755	明治38年	秋の部	馬に乗る人鄙しさよ女郎花	女郎花	植物
5756	明治38年	秋の部	新凉の庭や桃の実喰棄てし	桃の實	植物
5757	明治38年	秋の部	吟情や鶉啼くべきこのあたり	鶉	動物
5758	明治38年	秋の部	これなん曼珠沙華のたぐひなりけり	曼珠沙華	植物
5759	明治38年	秋の部	君が喰ふ林檎甚だ渋からずや	林檎	植物
5760	明治38年	秋の部	凉しき花となん草の名を知らず	草花	植物
5761	明治38年	秋の部	わらんじを湯本の萩にすてにけり	萩	植物
5762	明治38年	秋の部	四五人に秋の旭や山かつら	秋の日	天文
5763	明治38年	秋の部	此萩に縋がれ／＼と教へけり	萩	植物
5764	明治38年	秋の部	秋風や海士が小庭の瘦すゝき	芒	植物
5765	明治38年	秋の部	紺深き朝顔を見る苫屋哉	朝顔	植物
5767	明治38年	秋の部	巖の心ン冷かなるを覚えけり	冷か	時候
5768	明治38年	秋の部	岩の窪古鼎に湛ふ秋の水	秋の水	地理
5769	明治38年	秋の部	手を揮うて蚩尤が霧を排しけり	霧	天文
5770	明治38年	秋の部	秋風や氤氳として魚鼈の氣	秋の風	天文
5771	明治38年	秋の部	群類の皆黙しけり秋の声	秋の声	天文
5772	明治38年	秋の部	龍の血の凝りて巖の秋の風	秋の風	天文
5773	明治38年	秋の部	地維缺けて鳴り込む秋の潮かな	秋の潮	地理
5774	明治38年	秋の部	白帝の岩に弓射る爽氣哉	秋	時候
5775	明治38年	秋の部	鷹の別一たび巖をつかみけり	鷹渡る	動物
5776	明治38年	秋の部	初汐に岩の棧猶高し	初汐	地理
5777	明治38年	秋の部	身に入むや舷を撃つ岩の露	露	天文
5778	明治38年	秋の部	蛇穴に日月の明を奪ふかな	蛇穴に入る	動物
5779	明治38年	秋の部	秋寒し女娼を巖の上に見る	秋寒	時候
5780	明治38年	秋の部	天晴て鶚に躍る鱸かな	鱸	動物
5781	明治38年	秋の部	初汐に鶚の糞を洗ひけり	初汐	地理
5782	明治38年	秋の部	岩に立つ鵜の首白し秋の風	秋の風	天文
5783	明治38年	秋の部	蛟龍の下腹見えつ秋の雲	秋の雲	天文
5784	明治38年	秋の部	岩橋や天傾いて秋の汐	秋の潮	地理
5785	明治38年	秋の部	岩に印す巨人の跡や露寒し	露寒	天文
5786	明治38年	秋の部	共工の頭を碎く秋の声	秋の声	天文
5787	明治38年	秋の部	岩に落つ鶚の影や秋の風	秋の風	天文
5788	明治38年	秋の部	秋風や日暮れて上る竜像巖	秋の風	天文
5789	明治38年	秋の部	新凉に堪へず魚飛ぶ頻なり	新凉	時候
5790	明治38年	秋の部	新凉の岩ひたぬるゝ潮かな	新凉	時候
5791	明治38年	秋の部	巖ぬれ巖乾きぬ秋の風	秋の風	天文
5792	明治38年	秋の部	秋凉し岩に寄來る藻汐草	新凉	時候
5793	明治38年	秋の部	岩に波秋を引裂く狂ひかな	秋	時候
5794	明治38年	秋の部	汐を裂く底津岩根や秋の声	秋の声	天文
5795	明治38年	秋の部	岩の骨に秋を刻める姿かな	秋	時候
5796	明治38年	秋の部	秋風の巖を透す響かな	秋の風	天文
5797	明治38年	秋の部	秋官に白竜を紀す古き世ぞ	雑	雑
5798	明治38年	秋の部	偉なる哉巖大なる哉秋の空	秋の空	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5799	明治38年	秋の部	秋高く口を開いて笑ひけり	秋高し	天文
5800	明治38年	秋の部	天の川寒風山にかゝりけり	天の川	天文
5801	明治38年	秋の部	來し方の夜は只黒し天の川	天の川	天文
5802	明治38年	秋の部	我宿はいづれの處天の川	天の川	天文
5803	明治38年	秋の部	林檎むいて蚊帳なる人と語りけり	林檎	植物
5804	明治38年	秋の部	林檎むく巧みや旅は語草	林檎	植物
5805	明治38年	秋の部	新凉の燈下や旅の覚えがき	新凉	時候
5807	明治38年	秋の部	着せ綿を襲ねて菊の齢かな	菊	植物
5808	明治38年	秋の部	新凉に吹放たれし胡蝶かな	新凉	時候
5809	明治38年	秋の部	松芒慇懃に茸を採り尽す	茸狩	人事
5810	明治38年	秋の部	晝顔のかたまり咲くや道普請	盆路	人事
5811	明治38年	秋の部	修驗者のまなざし曼珠沙華赤し	曼珠沙華	植物
5812	明治38年	秋の部	古籾を磨りぬ宵はた踊るらん	踊	人事
5813	明治38年	秋の部	蘇武が言猶耳にあり秋の風	秋の風	天文
5815	明治38年	秋の部	秋風や蛇を封じて一千年	秋の風	天文
5817	明治38年	秋の部	官人の子等が見あるく燈篭哉	燈籠	人事
5818	明治38年	秋の部	迎火の自らまた燃えにけり	迎火	人事
5819	明治38年	秋の部	よき花に心づよしや墓参	墓參	人事
5820	明治38年	秋の部	葉鶏頭ゆりふせらるゝ嵐哉	雁來紅	植物
5821	明治38年	秋の部	この蘭に入唐の頃をしぬびけり	蘭	植物
5822	明治38年	秋の部	狼の祭や曉の稲妻す	稲妻	天文
5823	明治38年	秋の部	山姥の髪おどろなす草錦	草錦	植物
5824	明治38年	秋の部	河原ありく施餓鬼の僧や蕩の花	施餓鬼	人事
5825	明治38年	秋の部	人となり木槿白きを一枝哉	木槿	植物
5826	明治38年	秋の部	染らざる木槿の色や秋の風	木槿	植物
5827	明治38年	秋の部	去る法師むくげ白きを顧ず	木槿	植物
5828	明治38年	秋の部	山椒の実は只赤し花むくげ	木槿	植物
5829	明治38年	秋の部	白木槿花疎らなる茂かな	木槿	植物
5830	明治38年	秋の部	萬年の天子あらんや月に醉ふ	月	天文
5831	明治38年	秋の部	月前に折ふし梅の落葉哉	月	天文
5832	明治38年	秋の部	赤壁や月に漁人をそゝのかす	月	天文
5833	明治38年	秋の部	月明かに魏呉の分野を照しけり	月	天文
5834	明治38年	秋の部	幾人か回ると月の雲を見る	月	天文
5835	明治38年	秋の部	明月や人に喰はせぬ芋頭	名月	天文
5836	明治38年	秋の部	山人の猿を叱咤す谷の月	月	天文
5837	明治38年	秋の部	名月や呉王宮裡の人の眉	名月	天文
5838	明治38年	秋の部	月の雲斐然として章を成す	月	天文
5839	明治38年	秋の部	山の月ひとり越ゆらん君が面	月	天文
5840	明治38年	秋の部	喝々と秋風痰の佛かな	秋の風	天文
5841	明治38年	秋の部	秋の蚊の或は妬婦をさしにけり	秋の蚊	動物
5842	明治38年	秋の部	秋の季の己れ皃なり烏瓜	烏瓜	植物
5843	明治38年	秋の部	芭蕉裂けて百艸ひとしく悲む	破れ芭蕉	植物
5844	明治38年	秋の部	蓼の花酒は温むべくなりぬ	蓼の花	植物
5845	明治38年	秋の部	燕去って孤樓の簾古びけり	秋燕	動物
5846	明治38年	秋の部	易を見る九日の菊の光かな	菊	植物
5847	明治38年	秋の部	水見れば野菊に埋む筧かな	野菊	植物
5848	明治38年	秋の部	渋作り莨干す日短し	莨干	人事
5849	明治38年	秋の部	実を結ぶ草の裏戸や螽燒く	螽	動物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5850	明治38年	秋の部	河渡る人の声あり星月夜	星月夜	天文
5851	明治38年	秋の部	唐黍の風や秋社の戻り人	秋社	人事
5852	明治38年	秋の部	世をあげてふくべに似たる人もなし	瓢	植物
5853	明治38年	秋の部	寥々と冬近き日や野を照す	冬近し	時候
5854	明治38年	秋の部	山僧の指さす方や柿もみぢ	柿紅葉	植物
5855	明治38年	秋の部	蓮の骨智深の醉のさめにけり	破蓮	植物
5856	明治38年	秋の部	梅落葉疾く柳ちる徐ろに	柳散る	植物
5857	明治38年	秋の部	神嘗の祭も知らずいわし引	鰯引	人事
5858	明治38年	秋の部	山の幸柿と易へたる鰯かな	鰯	動物
5859	明治38年	秋の部	鰯引く子等や濱辺の小學校	鰯引	人事
5860	明治38年	秋の部	題目の信者ばかりや鰯引	鰯引	人事
5861	明治38年	秋の部	小男の祖父が指図や鰯引	鰯引	人事
5862	明治38年	秋の部	草市に五文が花のあはれ哉	草市	人事
5863	明治38年	秋の部	稲妻や萬年青小暗き店の隅	稲妻	天文
5864	明治38年	秋の部	七夕のさびし柳の衰へ	七夕	人事
5866	明治38年	秋の部	葛の葉に人悲めり秋の風	秋の風	天文
5867	明治38年	秋の部	草花に汐垂衣しほりけり	草花	植物
5868	明治38年	秋の部	荒波の割れて碎けて裂けて秋	秋	時候
5869	明治38年	秋の部	女郎花角力の羽織ぬれにけり	女郎花	植物
5870	明治38年	秋の部	白扇に己物かきすてにけり	秋扇	人事
5871	明治38年	秋の部	思ひあまり扇の別れ泣にけり	秋扇	人事
5872	明治38年	秋の部	草の舍の母に蚊帳つる角力哉	角力	人事
5873	明治38年	秋の部	萬燈の一時に消ゆる野分哉	野分	天文
5874	明治38年	秋の部	野分して悲しき花となりにけり	野分	天文
5875	明治38年	秋の部	上苑の水吹散らす野分哉	野分	天文
5876	明治38年	秋の部	天柱を碎いて秋の神立てり	竜田姫	天文
5877	明治38年	秋の部	電光の岩に碎けて海青し	稲妻	天文
5878	明治38年	秋の部	九頭の龍かと吾に秋寒し	秋寒	時候
5879	明治38年	秋の部	岩柱鰲の足を断って秋	秋	時候
5880	明治38年	秋の部	これ昔帝秋を鋳て成らざりき	秋	時候
5881	明治38年	秋の部	龍の血の凝りて秋風吹きたえず	秋の風	天文
5882	明治38年	秋の部	憤り去る醉人やみゝず鳴く	蚯蚓鳴く	動物
5883	明治38年	秋の部	秋風や天下に傳ふ百八句	秋の風	天文
5884	明治38年	秋の部	朱貴が箭の芦に没して渡鳥	渡鳥	動物
5885	明治38年	秋の部	蚊帳の別書巻の灯影あかき哉	秋の蚊帳	人事
5886	明治38年	秋の部	丈草と寝たりし蚊帳の別哉	秋の蚊帳	人事
5887	明治38年	秋の部	写すべき庭の小草や秋涼し	新涼	時候
5888	明治38年	秋の部	無用の長物と糸瓜に歎きけり	糸瓜	植物
5889	明治38年	秋の部	鬼灯を吊して酒もうりにけり	鬼灯	植物
5890	明治38年	秋の部	満園の日や欣々と鳳仙花	鳳仙花	植物
5891	明治38年	秋の部	去る燕女心に悲めり	秋燕	動物
5892	明治38年	秋の部	水の音の絶えざるをきく夜長哉	夜長	時候
5893	明治38年	秋の部	重陽の下僕に故事を教へけり	重陽	人事
5894	明治38年	秋の部	人まれに茱萸かざしけり寒き風	茱萸	植物
5895	明治38年	秋の部	折ふしの雲割れやすし後の月	後の月	天文
5896	明治38年	秋の部	思はずの芒が中や渡鳥	渡鳥	動物
5897	明治38年	秋の部	菊に灯のその趣や古人の句	菊	植物
5898	明治38年	秋の部	秋風やぬかごこぼるゝ路の上	零餘子	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5899	明治38年	秋の部	路傍のぬかごこぼれてたまりけり	零餘子	植物
5900	明治38年	秋の部	このふくべ何の誰かに似たりけり	瓢	植物
5901	明治38年	秋の部	今年米五器の古きもめでたけれ	新米	人事
5902	明治38年	秋の部	佛壇の鼡を逸す夜寒哉	夜寒	時候
5903	明治38年	秋の部	磽确の山路やぬかごこぼれたり	零餘子	植物
5904	明治38年	秋の部	あか／＼と夜寒の灯かゝげけり	夜寒	時候
5905	明治38年	秋の部	芋汁に社日の醉を作にけり	芋	植物
5906	明治38年	秋の部	最明寺殿とも知らず籾をする	籾摺	人事
6067	明治39年	秋の部	懐の銭冷かにうがひかな	冷か	時候
6184	明治39年	秋の部	秋立や星は柳を遠ざかり	立秋	時候
6185	明治39年	秋の部	刈柴の関路の露を拂ひけり	露	天文
6186	明治39年	秋の部	朝顔や尚伸びまさる小柴垣	朝顔	植物
6187	明治39年	秋の部	朝顔に誰ぞや火を鑽る家の中	朝顔	植物
6188	明治39年	秋の部	朝顔の鉢や電鈴鳴るところ	朝顔	植物
6189	明治39年	秋の部	安じて動ずとする南瓜かな	南瓜	植物
6190	明治39年	秋の部	新凉の疊の上や紙魚を打つ	新凉	時候
6191	明治39年	秋の部	新凉の掌にめず小石かな	新凉	時候
6192	明治39年	秋の部	篁にたま／＼螢秋凉し	新凉	時候
6193	明治39年	秋の部	ひた／＼と水に木末や初あらし	初嵐	天文
6194	明治39年	秋の部	家低し象潟荒れて天の川	天の川	天文
6195	明治39年	秋の部	花火あかし荒れまさりゆく水驛	花火	人事
6196	明治39年	秋の部	四五本の花火あがりて旅情かな	花火	人事
6197	明治39年	秋の部	萩に笠離愁甚だ濃かに	萩	植物
6198	明治39年	秋の部	古松の薪となりぬ墓まゐり	墓參	人事
6199	明治39年	秋の部	山頂に杖を揮ふや旅の秋	秋	時候
6200	明治39年	秋の部	剛力の面も振らず女郎花	女郎花	植物
6202	明治39年	秋の部	水急に短き芒見て過ぐる	芒	植物
6203	明治39年	秋の部	森來り蝉時雨去る舟はやし	蝉	動物
6204	明治39年	秋の部	嶮悪の山の朽木や秋の風	秋の風	天文
6205	明治39年	秋の部	滝の辺の百合に道なき嶮しさよ	百合	植物
6206	明治39年	秋の部	山迫るところ山飛ぶ蜻蛉哉	蜻蛉	動物
6207	明治39年	秋の部	夕陽の秋明かに山の峽	秋	時候
6208	明治39年	秋の部	蜩に船路せまりぬ最上川	蜩	動物
6209	明治39年	秋の部	蜩や宿坊見えて木下道	蜩	動物
6210	明治39年	秋の部	蜩の啼きやめば家に灯かな	蜩	動物
6211	明治39年	秋の部	蜩の樹に混堂の煙哉	蜩	動物
6212	明治39年	秋の部	蜩や九十九森に夕の汐	蜩	動物
6214	明治39年	秋の部	檜笠秋の蝿見る柱かな	秋の蝿	動物
6215	明治39年	秋の部	君が代は秋を用ゐず蝿叩	秋	時候
6216	明治39年	秋の部	菊に飛べば九日の蝿と興じけり	菊	植物
6217	明治39年	秋の部	草皆の穂に出る色や秋の蝿	秋の蝿	動物
6218	明治39年	秋の部	凉しさに尚打ちて棄つ秋の蝿	秋の蝿	動物
6219	明治39年	秋の部	片われの月待ち得たる夜長かな	夜長	時候
6220	明治39年	秋の部	そこばくの鶏頭吊す貧しくも	鶏頭	植物
6221	明治39年	秋の部	行秋の句屑紙屑賣りにけり	行秋	時候
6222	明治39年	秋の部	我と無我といづれ雀か蛤か	雀蛤となる	動物
6223	明治39年	秋の部	鱸割いて大河の景を誇りけり	鱸	動物
6224	明治39年	秋の部	慈恩寺の塔に人あり秋の雲	秋の雲	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6225	明治39年	秋の部	交りの此道棄てず新走	新酒	人事
6226	明治39年	秋の部	賣るものに橡餅もあり秋の風	秋の風	天文
6227	明治39年	秋の部	なも／＼と師やこわづくる野分の夜	野分	天文
6228	明治39年	秋の部	さらぼうて野分に立てり烽火守	野分	天文
6229	明治39年	秋の部	青楼の更に灯ともす野分哉	野分	天文
6230	明治39年	秋の部	野分やむで川明らかに渉りけり	野分	天文
6231	明治39年	秋の部	温泉烟の樹々に裂けゆく野分哉	野分	天文
6232	明治39年	秋の部	荻苅るや水明かに鳥もゐる	荻	植物
6233	明治39年	秋の部	風すさぶ短き荻に旅人かな	荻	植物
6234	明治39年	秋の部	荻鳴らす風や小舟が沖に出る	荻	植物
6235	明治39年	秋の部	出水して荻に風だも無かりけり	荻	植物
6236	明治39年	秋の部	晩風や錨を下ろす荻の窪	荻	植物
6238	明治39年	秋の部	木つゝきの啄き残して君は在り	啄木鳥	動物
6239	明治39年	秋の部	古酒誇る主の菊を盗みけり	菊	植物
6240	明治39年	秋の部	獣を見るべくなりぬ秋の霜	秋の霜	天文
6241	明治39年	秋の部	富みて且つ貴く銀杏落葉哉	銀杏散る	植物
6242	明治39年	秋の部	肌寒は通夜かな人の花作る	肌寒	時候
6243	明治39年	秋の部	鮓きびし名残の月に菊膾	菊膾	人事
6244	明治39年	秋の部	末枯れて惜まるゝ艸もなかりけり	末枯	植物
6245	明治39年	秋の部	末枯るゝ艸や芭蕉は与からず	末枯	植物
6246	明治39年	秋の部	末枯に蹊つくるは獣かな	末枯	植物
6247	明治39年	秋の部	末枯れて簗に親しむべくなりぬ	末枯	植物
6248	明治39年	秋の部	早く已に戦さの跡の末枯るゝ	末枯	植物
6249	明治39年	秋の部	唐からし鼡を憎む辞あり	唐辛子	植物
6250	明治39年	秋の部	選衣や小さき赤き唐からし	唐辛子	植物
6251	明治39年	秋の部	冷かさ心に知りぬ唐からし	唐辛子	植物
6252	明治39年	秋の部	紫の一本故に唐からし	唐辛子	植物
6253	明治39年	秋の部	太閤は海を渡らず唐からし	唐辛子	植物
6254	明治39年	秋の部	稲妻や芦をかすめて疾き舟	稲妻	天文
6255	明治39年	秋の部	朝皃をまばらに見たり初あらし	朝顔	植物
6256	明治39年	秋の部	草の宿朝皃の主人起きてあり	朝顔	植物
6257	明治39年	秋の部	鷹遠し白露の天の霽の色	白露	時候
6258	明治39年	秋の部	秋凉し夕山越の讀書人	新凉	時候
6259	明治39年	秋の部	新凉の草にうもれぬ聽蛙亭	新凉	時候
6260	明治39年	秋の部	秋の気をつんざいて山尖りけり	秋気	時候
6261	明治39年	秋の部	秋凉し白衣の人の徘徊す	新凉	時候
6262	明治39年	秋の部	馬引の馬いましめつ初あらし	初嵐	天文
6263	明治39年	秋の部	髙々と鳴子すさまし月明り	鳴子	人事
6264	明治39年	秋の部	鳴子引け穂に出る草の花盛	草花	植物
6265	明治39年	秋の部	草の宿障子白きに夜半の虫	蟲	動物
6266	明治39年	秋の部	曉嵐に杖を揮へり露の空	露	天文
6267	明治39年	秋の部	つき鳴らす金剛杖や草の花	草花	植物
6268	明治39年	秋の部	初秋の星や柳に遠ざかる	初秋	時候
6269	明治39年	秋の部	主藏れ賓行く庭の芭蕉哉	芭蕉	植物
6270	明治39年	秋の部	庭深く数株の芭蕉長じけり	芭蕉	植物
6271	明治39年	秋の部	昔容の髣髴として芭蕉哉	芭蕉	植物
6272	明治39年	秋の部	鳩吹の悠容として吹居たり	鳩吹く	人事
6273	明治39年	秋の部	潮近くひたす并木や星月夜	星月夜	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6274	明治39年	秋の部	旧跡に家して芒ばかり哉	芒	植物
6275	明治39年	秋の部	盆の月娘をもたぬ家もなし	盆の月	天文
6276	明治39年	秋の部	要害の地を諳じて藥掘	藥掘	人事
6277	明治39年	秋の部	踊子の色白うして昼居たり	踊	人事
6278	明治39年	秋の部	庭の隅暗きに紫菀ぬきんでし	紫菀	植物
6279	明治39年	秋の部	臨邛の其夜を悔うる砧かな	砧	人事
6280	明治39年	秋の部	初嵐葛の藪かげ小提灯	初嵐	天文
6281	明治39年	秋の部	馬引の提灯小さし初あらし	初嵐	天文
6282	明治39年	秋の部	見る所古き牧場や星月夜	星月夜	天文
6283	明治39年	秋の部	病中に秋海棠を写しけり	秋海棠	植物
6284	明治39年	秋の部	鶏頭の赤きにたぐふ角力哉	角力	人事
6285	明治39年	秋の部	間引菜の落散る畑や皃斜	間引菜	植物
6286	明治39年	秋の部	雨の月何に興じて主客哉	雨の月	天文
6287	明治39年	秋の部	五升程負債かへしぬ今年米	新米	人事
6288	明治39年	秋の部	七草に一草足らず鶉かな	鶉	動物
6289	明治39年	秋の部	片鶉誰ぞや竹枝を口吟む	鶉	動物
6290	明治39年	秋の部	新豆腐賣る家草の錦哉	雑	雑
6291	明治39年	秋の部	茸狩の人々の茸異りぬ	茸狩	人事
6292	明治39年	秋の部	がさこそと烏瓜引く僧都あり	烏瓜	植物
6293	明治39年	秋の部	落ち／＼て月夜となりぬ落シ水	落し水	地理
6294	明治39年	秋の部	菊作る家に賢き童かな	菊	植物
6295	明治39年	秋の部	駒迎関の清水を尋ねけり	駒迎	人事
6296	明治39年	秋の部	籾すりの菊見る遑なかりけり	籾摺	人事
6297	明治39年	秋の部	柹の木に上る子はいを打たぬなり	柹	植物
6298	明治39年	秋の部	金氣衝く五更に起きて讀詩哉	秋気	時候
6299	明治39年	秋の部	莨干す家の後に尿かな	莨干	人事
6300	明治39年	秋の部	天徳を糸瓜に生せり長き哉	糸瓜	植物
6301	明治39年	秋の部	八十の祖父と見てゐる糸瓜哉	糸瓜	植物
6302	明治39年	秋の部	二三子が糸瓜の長けを測りけり	糸瓜	植物
6303	明治39年	秋の部	赤菊のむら／＼と咲くつよさ哉	菊	植物
6304	明治39年	秋の部	尊しや八十にして菊作り	菊	植物
6305	明治39年	秋の部	花そばに人恙なく帰村かな	蕎麥花	植物
6306	明治39年	秋の部	懐ろにすべくもあらぬゆみそかな	柚味噌	人事
6307	明治39年	秋の部	唐辛子青き赤きを論じけり	唐辛子	植物
6308	明治39年	秋の部	此山の名所も知らず松露掘	松露	植物
6310	明治39年	秋の部	五台山を下れば野草花開く	草花	植物
6582	明治40年	秋の部	初秋や穂になる草の紅一点	初秋	時候
6583	明治40年	秋の部	庭に灌ぐ水の剰りや秋の立つ	立秋	時候
6584	明治40年	秋の部	初秋の尚宵々を出ありきぬ	初秋	時候
6585	明治40年	秋の部	初秋の飯喰うて人と別れけり	初秋	時候
6586	明治40年	秋の部	初秋に採るべき藥名を記す	初秋	時候
6587	明治40年	秋の部	明星や舷にちるあしの露	露	天文
6588	明治40年	秋の部	材木の間を行くや露しめり	露	天文
6589	明治40年	秋の部	露けしやよべの砧のありどころ	露	天文
6590	明治40年	秋の部	灯の色に夜露くだるを悟りけり	露	天文
6591	明治40年	秋の部	朝露のおくまもあらず秋浅し	秋淺し	時候
6592	明治40年	秋の部	露早く乾く葉樫や日の表	露	天文
6593	明治40年	秋の部	草の葉廣草の葉細や露の玉	露	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6594	明治40年	秋の部	白露の結ぶと見ればこぼれけり	露	天文
6595	明治40年	秋の部	花揉みて爪を染るも露の中	露	天文
6596	明治40年	秋の部	葉葡萄に酒成る秋を契りけり	葡萄酒醸す	人事
6597	明治40年	秋の部	古道の君待坂や女郎花	女郎花	植物
6598	明治40年	秋の部	七座の一座に咲や女郎花	女郎花	植物
6599	明治40年	秋の部	女郎花水ありさうな処かな	女郎花	植物
6600	明治40年	秋の部	夕立の雲を危み女郎花	女郎花	植物
6601	明治40年	秋の部	禿山の見るものにすや女郎花	女郎花	植物
6602	明治40年	秋の部	魚の眼の岩に危し秋の水	秋の水	地理
6603	明治40年	秋の部	新涼の耳穿つ也山の峽	新涼	時候
6604	明治40年	秋の部	軒近く穂に出る草や星まつり	七夕	人事
6605	明治40年	秋の部	星の戀魚は深きに潜みけり	星合い	人事
6606	明治40年	秋の部	山里は稗田に家す星まつり	七夕	人事
6607	明治40年	秋の部	何願ふ子等かさゝやく星の事	七夕	人事
6608	明治40年	秋の部	思出の梶の葉屑を袂かな	梶の葉	人事
6609	明治40年	秋の部	文机に両の袂や星まつり	七夕	人事
6610	明治40年	秋の部	湖の上に笛吹き止みぬ天の川	天の川	天文
6611	明治40年	秋の部	大沢に声何人ぞ天の川	天の川	天文
6612	明治40年	秋の部	昼越えし山の高きや天の川	天の川	天文
6613	明治40年	秋の部	野にあまる千種の花や天の川	天の川	天文
6614	明治40年	秋の部	桔梗咲く終日庭の日かげかな	桔梗	植物
6615	明治40年	秋の部	萩桔梗句合の序をあやどりぬ	雑	雑
6616	明治40年	秋の部	桔梗はすゝきにまじるべくもなし	桔梗	植物
6617	明治40年	秋の部	古銅器にさす草はあれと白桔梗	桔梗	植物
6618	明治40年	秋の部	家の集に妻が桔梗の一句かな	桔梗	植物
6619	明治40年	秋の部	店先の小桶に花や新豆腐	新豆腐	人事
6620	明治40年	秋の部	沙魚釣らぬ不興もをかし新豆フ	新豆腐	人事
6621	明治40年	秋の部	鶏頭に帘新豆フあり	新豆腐	人事
6622	明治40年	秋の部	清水に誰ぞこもる祇園は新豆腐	新豆腐	人事
6623	明治40年	秋の部	新豆腐に赤飯も焚いて旅祝ふ	新豆腐	人事
6624	明治40年	秋の部	十ヶ寺を詣で果さず新豆フ	新豆腐	人事
6625	明治40年	秋の部	新豆フに朝餉すましぬかしま立ち	新豆腐	人事
6626	明治40年	秋の部	厨にも萩のこぼれや新豆フ	新豆腐	人事
6627	明治40年	秋の部	肺腸の秋を浴くす新豆腐	新豆腐	人事
6628	明治40年	秋の部	くさびらを以て酬ひん新豆腐	新豆腐	人事
6629	明治40年	秋の部	一陣の風過るなり毛見の笠	毛見	人事
6630	明治40年	秋の部	毛見の衆に彗星の事申しけり	毛見	人事
6631	明治40年	秋の部	毛見ありと夙に起きたり三家村	毛見	人事
6632	明治40年	秋の部	钁鑠として毛見の衆を驚かす	毛見	人事
6633	明治40年	秋の部	親と子と普請もすなり毛見の路	毛見	人事
6634	明治40年	秋の部	毛見の衆に郷先生の憤り	毛見	人事
6635	明治40年	秋の部	毛見の衆も鎭守の神に詣でけり	毛見	人事
6636	明治40年	秋の部	毛見の衆と見ゆ榛の木の雨宿り	毛見	人事
6637	明治40年	秋の部	毛見なれば山畑の粟の穂もつかむ	毛見	人事
6638	明治40年	秋の部	どや／＼と毛見来る宿や鶏の鳴く	毛見	人事
6639	明治40年	秋の部	雲霧の山路の菊の大きさよ	菊	植物
6640	明治40年	秋の部	掛稲のよく乾く日や菊の花	菊	植物
6641	明治40年	秋の部	縄きれに束ねあまりし黄菊哉	菊	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6642	明治40年	秋の部	高く積む書冊に菊の尚高し	菊	植物
6643	明治40年	秋の部	菊つむで喪中の厨ぬれにけり	菊	植物
6644	明治40年	秋の部	東宮の菊に四皓の遊かな	菊	植物
6645	明治40年	秋の部	一村の長して菊をつくりけり	菊	植物
6646	明治40年	秋の部	菊折らんと出づれば風や襟を吹く	菊	植物
6647	明治40年	秋の部	階前に菊の光や三槐堂	菊	植物
6648	明治40年	秋の部	里人の安息日や菊盛	菊	植物
6649	明治40年	秋の部	小高みな先人の碑や稲の中	稲	植物
6650	明治40年	秋の部	これ蘭これ菊群賢一堂	雑	雑
6651	明治40年	秋の部	白石磊々として高きに登りけり	登高	人事
6652	明治40年	秋の部	明日植ゑる苗圃の杉や秋の蝶	秋の蝶	動物
6653	明治40年	秋の部	よき程に聳ゆる山や木子狩	茸狩	人事
6654	明治40年	秋の部	日あるうちに薮を刈りけり秋の晴	秋晴	天文
6655	明治40年	秋の部	舌上に會して首肯づく柚味噌哉	柚味噌	人事
6656	明治40年	秋の部	登高の我に隨ふ客もなし	登高	人事
6657	明治40年	秋の部	須臾にして晷移りぬ百舌の贄	鵙の贄	動物
6658	明治40年	秋の部	店に鮭あり炭燒の娘来る	鮭	動物
6659	明治40年	秋の部	大杉に照る日や杉の実を干しぬ	杉の實	植物
6660	明治40年	秋の部	菊に早く来つ筆墨の小商人	菊	植物
6661	明治40年	秋の部	門柱徒に大きく柳ちる	柳散る	植物
6662	明治40年	秋の部	杉の実を採る聾あり百舌の鳴	杉の實	植物
6663	明治40年	秋の部	杉植ん下草紅葉燒にけり	草錦	植物
6664	明治40年	秋の部	秋の日を避けてか栗鼠の枝移り	秋の日	天文
6665	明治40年	秋の部	木の実落つ中にぢゝめくましら哉	木の實	植物
6666	明治40年	秋の部	山囲み方なる原や末枯るゝ	末枯	植物
6667	明治40年	秋の部	鑛山の香に耐へすとや女郎花	女郎花	植物
6668	明治40年	秋の部	相逢うて相語る林檎紅に	林檎	植物
6919	明治41年	秋の部	餅もなき垢離場の店や初嵐	初嵐	天文
6920	明治41年	秋の部	月影や突兀として芋の山	芋	植物
6921	明治41年	秋の部	川缺の渕となりゆく花野哉	花野	地理
6922	明治41年	秋の部	餘白ある一日記事や虫の声	蟲	動物
6923	明治41年	秋の部	登嶽を果さぬ悔や扇置く	秋扇	人事
6924	明治41年	秋の部	大銀杏の後の銀杏や放生会	放生会	人事
6926	明治41年	秋の部	米女鬼山の草花咲けバ忌日なり	草花	植物
6927	明治41年	秋の部	展墓記事新そばの句を夾みけり	新蕎麥	人事
6928	明治41年	秋の部	俳席の掟柹食ふ法もあり	柹	植物
6929	明治41年	秋の部	方円の筆法風の芭蕉かな	芭蕉	植物
6930	明治41年	秋の部	御本陣の跡料理屋の芭蕉かな	芭蕉	植物
6931	明治41年	秋の部	神去るが如く芭蕉裂けつくす	芭蕉	植物
6932	明治41年	秋の部	釣るはぜの小さきよりす郷思かな	鯊釣	人事
6933	明治41年	秋の部	一川を領しはぜ釣るものは誰ぞ	鯊釣	人事
6934	明治41年	秋の部	吾に勝るものなしとはぜつり返る	鯊釣	人事
6935	明治41年	秋の部	誰々の祖父ども出会ふ墓参	墓參	人事
6936	明治41年	秋の部	人知らぬ鬢の二毛や墓参	墓參	人事
6937	明治41年	秋の部	地つゞきの山買ひ得たり墓参	墓參	人事
6938	明治41年	秋の部	登山者の下りつきし宿や灯篭吊る	燈籠	人事
6939	明治41年	秋の部	双棲の白き頭や軒灯篭	燈籠	人事
6940	明治41年	秋の部	草分の家すたれゆく灯篭哉	燈籠	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6941	明治41年	秋の部	家構骨太にして釣灯篭	燈籠	人事
6942	明治41年	秋の部	川上に橋ありと見ゆ灯篭哉	燈籠	人事
6943	明治41年	秋の部	奠都の議此地を相す稲の花	稲の花	植物
6944	明治41年	秋の部	木工頭に出羽の案内や稲の花	稲の花	植物
6945	明治41年	秋の部	碑の事に里をこぞりぬ稲の花	稲の花	植物
6946	明治41年	秋の部	一竿の沙魚には早し稲の花	稲の花	植物
6947	明治41年	秋の部	郷倉の礎置くや稲の花	稲の花	植物
6949	明治41年	秋の部	川下す木々相撃つやむら芒	芒	植物
6950	明治41年	秋の部	峰渡り笠に雲飛ぶ秋涼し	新涼	時候
6952	明治41年	秋の部	湖成りし神話も果てゝ天の川	天の川	天文
6953	明治41年	秋の部	魚の眼に秋知るか石に来去る	秋	時候
6954	明治41年	秋の部	秋と云へば波打越しぬ御座の石	秋	時候
6955	明治41年	秋の部	初嵐湖の浮木の浮沈	初嵐	天文
6957	明治41年	秋の部	湖の魚と我山の雲と君共に秋	秋	時候
6959	明治41年	秋の部	女人許す垢離場詣や初嵐	初嵐	天文
6960	明治41年	秋の部	三分缺けし月の出でけり扇置く	秋扇	人事
6961	明治41年	秋の部	水郷と云へど山聳ゆ秋扇	秋扇	人事
6962	明治41年	秋の部	親骨に刻める山や秋扇	秋扇	人事
6963	明治41年	秋の部	葉廣草裂けし夜荒れや扇おく	秋扇	人事
6964	明治41年	秋の部	思ふことしのぶの乱れ秋扇	秋扇	人事
6965	明治41年	秋の部	留むれど遂に去る西瓜白かりし	西瓜	植物
6966	明治41年	秋の部	硯洗へば恰も西瓜到來す	西瓜	植物
6967	明治41年	秋の部	灯に嵐しづまりて割く西瓜哉	西瓜	植物
6968	明治41年	秋の部	水中の■食西瓜の出來あしき	西瓜	植物
6969	明治41年	秋の部	秋声の賦の一佳句や西瓜割く	西瓜	植物
6970	明治41年	秋の部	鳴子引讀尽す天下無用の書	鳴子	人事
6971	明治41年	秋の部	有用の書一部藏す夜学哉	夜学	人事
6972	明治41年	秋の部	帰急ぐ燕や草の穂長なる	秋燕	動物
6973	明治41年	秋の部	高光る日の皇子なれや菊莟む	菊	植物
6974	明治41年	秋の部	售らざる文自ら序す雁の声	雁	動物
6975	明治41年	秋の部	古墳発く博士一行や雁渡る	雁	動物
6976	明治41年	秋の部	同文の国漫遊や雁をきく	雁	動物
6977	明治41年	秋の部	建碑式の人散り〻\や雁渡る	雁	動物
6978	明治41年	秋の部	門額を始めて掲ぐ雁の声	雁	動物
6979	明治41年	秋の部	底ずれの舟洲につくや渡鳥	渡鳥	動物
6980	明治41年	秋の部	刈棄の莖細の蕎麦や鳥渡る	渡鳥	動物
6981	明治41年	秋の部	朝顔の手柴引く日や渡鳥	渡鳥	動物
6982	明治41年	秋の部	山を出づる帆柱の材や渡鳥	渡鳥	動物
6983	明治41年	秋の部	簗に網底見ゆる川や鳥渡る	渡鳥	動物
7136	明治42年	秋の部	林相の図をたゝみけり天の川	天の川	天文
7137	明治42年	秋の部	案内宿も草分にして天の川	天の川	天文
7138	明治42年	秋の部	聾の博士泊めけり天の川	天の川	天文
7139	明治42年	秋の部	晒菅野を白うせり天の川	天の川	天文
7140	明治42年	秋の部	今を猶魚住まぬ湖や天の川	天の川	天文
7141	明治42年	秋の部	魂棚に魂来ますらん庭の月	魂祭	人事
7142	明治42年	秋の部	魂祭る親は八十九十かな	魂祭	人事
7143	明治42年	秋の部	魂棚もかざりて親子二人かな	魂祭	人事
7144	明治42年	秋の部	魂まつり女同胞住めりけり	魂祭	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7145	明治42年	秋の部	一睡の不覚を思ふ天の川	天の川	天文
7146	明治42年	秋の部	牧を出て驛逓の駿や天の川	天の川	天文
7147	明治42年	秋の部	先づ関に入るもの覇たり天の川	天の川	天文
7148	明治42年	秋の部	豪渓に居て豪渓を図す天の川	天の川	天文
7149	明治42年	秋の部	陣法の古今に通ず天の川	天の川	天文
7150	明治42年	秋の部	天の川笠ぬふ菅を白うせり	天の川	天文
7151	明治42年	秋の部	咸陽の火のほ流れて天の川	天の川	天文
7152	明治42年	秋の部	談笑平日の如く栃の事	栃	植物
7153	明治42年	秋の部	去来忌や紙魚猶はしる後の雛	去來忌	人事
7154	明治42年	秋の部	一時遊ぶ大竹原や落栃舎忌	去來忌	人事
7155	明治42年	秋の部	角力鑑増補の僭も夜半の秋	秋の夜	時候
7156	明治42年	秋の部	茶焙ジは文具かあらず夜話の秋	秋の夜	時候
7157	明治42年	秋の部	墓荒れし昨日を憶ふ夜寒か南	夜寒	時候
7158	明治42年	秋の部	自然林の説に一致す夜寒かな	夜寒	時候
7159	明治42年	秋の部	芋掘れとそゝのかされて掘りに行く	芋	植物
7160	明治42年	秋の部	諄々と貯蓄すゝめも芋煮る間	芋	植物
7161	明治42年	秋の部	代受くること肯はず芋の主	芋	植物
7162	明治42年	秋の部	千両の馬を隣に芋の秋	芋	植物
7163	明治42年	秋の部	芋の饗再び句論強ひらるゝ	芋	植物
7164	明治42年	秋の部	毒茸と決めて寐ねたる夜寒哉	夜寒	時候
7165	明治42年	秋の部	粟飯を山と盛らるゝ夜寒かな	夜寒	時候
7166	明治42年	秋の部	祭衣裳箪笥に納む夜寒哉	夜寒	時候
7167	明治42年	秋の部	頭々顱々耳聳つる秋の風	秋の風	天文
7259	明治43年	秋の部	一穂の水を抽んず解夏旦	解夏	人事
7260	明治43年	秋の部	漫々地夜雨に漲る解夏の河	解夏	人事
7262	明治43年	秋の部	裏のあたり鶏頭見れば芋見れば	雑	雑
7264	明治43年	秋の部	新渋の句集の點者うべなひぬ	新渋	人事
7265	明治43年	秋の部	鶏頭を大きく作るこのあるじ	鶏頭	植物
7266	明治43年	秋の部	手を分つ辞艶なり露寒に	露寒	天文
7267	明治43年	秋の部	舘下に尚住む十戸露しぐれ	露しぐれ	天文
7268	明治43年	秋の部	獲物活きて簗人かへる露空に	露	天文
7269	明治43年	秋の部	朝露や石を神にす素蝋燭	露	天文
7270	明治43年	秋の部	山を離れて山の威容や露をふむ	露	天文
7271	明治43年	秋の部	古戦場の講話一樹の露時雨	露しぐれ	天文
7272	明治43年	秋の部	然諾は露に馬蹄を輕くせり	露	天文
7274	明治43年	秋の部	栃貰ふ帰路を約せり朝晴に	栃	植物
7275	明治43年	秋の部	色白に汗して里婦や晴るゝ秋	秋晴	天文
7276	明治43年	秋の部	舘といふ名に知るや鳥渡る音	渡鳥	動物
7277	明治43年	秋の部	治水策いかにあるべき雁の聲	雁	動物
7278	明治43年	秋の部	知る人に逢はずなりゆく野菊哉	野菊	植物
7279	明治43年	秋の部	船路取りし人を懐ふや花野晴	花野	地理
7280	明治43年	秋の部	語音鈍き老幼に栃饒かなり	栃	植物
7281	明治43年	秋の部	死ぬべかりしを又日の晴や粟黄む	粟	植物
7283	明治43年	秋の部	人に逢へば稔らぬ話野菊見て	野菊	植物
7284	明治43年	秋の部	近道を教へて訥や野菊あり	野菊	植物
7285	明治43年	秋の部	耳にせし巨木なし野菊咲つゞく	野菊	植物
7286	明治43年	秋の部	高山を右に行く／＼野菊晴	野菊	植物
7287	明治43年	秋の部	湧く水を徒に見てすぐ野菊哉	野菊	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7353	明治44年	秋の部	物そのところを得たり萩桔梗	雑	雑
7355	明治44年	秋の部	真人の柵の獨木に虫静まりぬ	蟲	動物
7356	明治44年	秋の部	刀は傳家の話柄に更けつ虫の声	蟲	動物
7357	明治44年	秋の部	虫鳴くや硯洗ひて幾夜なる	蟲	動物
7358	明治44年	秋の部	寺にあれバ文字も異様に虫の声	蟲	動物
7359	明治44年	秋の部	樹々古きに住まへバ虫の遠音なる	蟲	動物
7361	明治44年	秋の部	秋晴やさる扇屋を陋巷に	秋晴	天文
7362	明治44年	秋の部	君を訪へばげに琅玕居秋晴に	秋晴	天文
7363	明治44年	秋の部	削り荒らの柱歴々と晴るゝ秋	秋晴	天文
7364	明治44年	秋の部	庭石の奇特秋晴の水を吸ふ	秋晴	天文
7365	明治44年	秋の部	刀を見て意を得し一事秋晴に	秋晴	天文
7367	明治44年	秋の部	音訓の双耳穿つや秋の風	秋の風	天文
7369	明治44年	秋の部	真人山の霧を呑吐す誰々ぞ	霧	天文
7371	明治44年	秋の部	邊愁を写す字屑や草苺	草苺	植物
7373	明治44年	秋の部	縁起めく俚謠を耳に草紅葉	草錦	植物
7375	明治44年	秋の部	地図による水の源月に語りけり	月	天文
7376	明治44年	秋の部	月に知る釣針に秘訣あることを	月	天文
7377	明治44年	秋の部	鉄をきたえて獲る所あり月を見る	月	天文
7379	明治44年	秋の部	月に歩して菊の柳に意を致す	月	天文
7380	明治44年	秋の部	紫菀高し千たび鍛えし鉄匂ふ	紫菀	植物
7382	明治44年	秋の部	菊の花に生残る小蜂吾に飛ぶ	菊	植物
7383	明治44年	秋の部	菊に貧し雨姿風態の夙に起き	菊	植物
7384	明治44年	秋の部	菊の家柳の家の子等賢愚なし	菊	植物
7385	明治44年	秋の部	菊に開く柴門芭蕉に暗所あり	菊	植物
7386	明治44年	秋の部	旧友の衣裳美なり菊明らかに	菊	植物
7481	明治45年	秋の部	山の月野の月賤が袖の露	露	天文
7483	明治45年	秋の部	愁ふれバ一夜の老や案山子見る	案山子	人事
7485	明治45年	秋の部	鯊つりに意動けど雑書讀みあかぬ	鯊釣	人事
7486	明治45年	秋の部	鯊焼くは故人の子也草の宿	鯊	動物
7487	明治45年	秋の部	白雲一片鯊釣を見ぬ里もなし	鯊釣	人事
7488	明治45年	秋の部	鯊つりに説くに鱸の巨口哉	鯊釣	人事
7489	明治45年	秋の部	鯊つりの竿かあらぬか蘆の花	鯊釣	人事
7490	明治45年	秋の部	鯊焼いて残る燕の飛ぶと見し	鯊	動物
7491	明治45年	秋の部	野分江を過ぎて幾日か鯊肥えし	鯊	動物
7493	明治45年	秋の部	既にして例の松野路の秋晴るゝ	秋晴	天文
7494	明治45年	秋の部	弓の事は知らず秋晴の矢遠き	秋晴	天文
7495	明治45年	秋の部	明日の事君しか云へど晴るゝ秋	秋晴	天文
7496	明治45年	秋の部	漁者に就いて聞けるふし／＼秋晴るゝ	秋晴	天文
7497	明治45年	秋の部	秋霞は晴の兆ぞ例の杉	秋霞	天文
7498	明治45年	秋の部	画題巨人の跡とあり晴るゝ秋の會	秋晴	天文
7500	明治45年	秋の部	みそなはせ我渋柿の生るは／＼	柹	植物
7502	明治45年	秋の部	故人誰々因に柹の句をつくる	柹	植物
7503	明治45年	秋の部	柹青き久し釣來ては鯊をやく	柹	植物
7504	明治45年	秋の部	飽喫し去てその後柹に便りなし	柹	植物
7505	明治45年	秋の部	北国の柹渋く議論上下せり	柹	植物
7506	明治45年	秋の部	之子生れてまづ逢へり柹の秋晴に	柹	植物
7508	明治45年	秋の部	雁を射る眉目を誰にたくらべむ	雁	動物
7510	明治45年	秋の部	柹の句を作り了すこの風雨あり	柹	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7511	明治45年	秋の部	雷雨秋也乾坤を朗かにせり	秋	時候
7512	明治45年	秋の部	灯秋也尚断簡の文字を解せず	秋	時候
7514	明治45年	秋の部	一隻眼晴秋海棠も咲く	秋海棠	植物
7515	明治45年	秋の部	野菊にもとり〳〵名あり何とやら	野菊	植物
7516	明治45年	秋の部	着せ綿をふくと云ふ菊の莟あり	菊	植物
7518	明治45年	秋の部	達磨忌の頭の中や江渺々	達磨忌	人事
7520	明治45年	秋の部	秋晴れの山下るるも獨也	秋晴	天文
7522	明治45年	秋の部	湯治帰り景に溢美や新酒酌む	新酒	人事
7523	明治45年	秋の部	茱萸つみのなどて新酒の馬追はぬ	新酒	人事
7633	大正２年	秋の部	水に降る露かあらぬか夜の音	露	天文
7635	大正２年	秋の部	瀑布の句百合の句酒の句となりぬ	雑	雑
7636	大正２年	秋の部	筆把れバ書かざなるまい踊るもの	踊	人事
7637	大正２年	秋の部	一語君に寄す秋涼しかろ／＼	新涼	時候
7639	大正２年	秋の部	巖怒り水激す秋をはしる雲	秋	時候
7640	大正２年	秋の部	筆下虹あり秋の水飛ぶ五十尺	秋の水	地理
7642	大正２年	秋の部	この道のこの記事涼し潮の香	涼し	時候
7644	大正２年	秋の部	あらまほしきもの水引の花さへも	水引花	植物
7645	大正２年	秋の部	つぶて雲白し朝露晞きあり	露	天文
7647	大正２年	秋の部	芭蕉我を覆ふあり月の食を見る	芭蕉	植物
7648	大正２年	秋の部	稲黄ばめり日に漂へる雲一片	稲	植物
7650	大正２年	秋の部	野菊晴れて文庫の本を借來る	野菊	植物
7651	大正２年	秋の部	薪割りし筋の痛ミや秋の暮	秋の暮	時候
7652	大正２年	秋の部	物思ひ夜の芭蕉に手を觸るゝ	芭蕉	植物
7653	大正２年	秋の部	薪干して子等を使役す秋の風	秋の風	天文
7654	大正２年	秋の部	遠足帰り貝殻に又灯す秋	秋の灯	人事
7655	大正２年	秋の部	遠足の貝殻も夜寒山どころ	夜寒	時候
7657	大正２年	秋の部	驛樹晴れて友の話端を飛ぶ蜻蛉	蜻蛉	動物
7658	大正２年	秋の部	驛の樹を緒に情話飛ぶとんぼ	蜻蛉	動物
7659	大正２年	秋の部	秋出水丘の狐の憎まるゝ	秋出水	地理
7660	大正２年	秋の部	菊の竹に小鳥來つ風に又去りつ	小鳥	動物
7661	大正２年	秋の部	新酒甕に盈てり家訓壁にあり	新酒	人事
7662	大正２年	秋の部	師弟黙す栗のいが道墓辺道	栗	植物
7663	大正２年	秋の部	端近の新米後の月夜なる	新米	人事
7665	大正２年	秋の部	菊の戸明し家訓長へに在り	菊	植物
7667	大正２年	秋の部	菊の林酒の泉をためしとて	菊	植物
7740	大正３年	秋の部	天子赫怒秋風吹て雲飛揚	秋の風	天文
7741	大正３年	秋の部	豊年の蓼も野菊も盛哉	豊年	人事
7742	大正３年	秋の部	只芭蕉葉の聲をきく星月夜	星月夜	天文
7743	大正３年	秋の部	高灯籠の下を流るゝ水の音	燈籠	人事
7744	大正３年	秋の部	秋風やあからさまなる藥艸	秋の風	天文
7745	大正３年	秋の部	日々好日と杉の實干してあり	杉の實	植物
7746	大正３年	秋の部	一別以來消息もなし蚊帳名殘	秋の蚊帳	人事
7747	大正３年	秋の部	白と明け黄と暮るゝ菊に無事の家	菊	植物
7748	大正３年	秋の部	菊日和稲埃人馬驚かず	菊	植物
7749	大正３年	秋の部	菊風雨戦場こゝを去る遠し	菊	植物
7750	大正３年	秋の部	巻を掩へバ庭前芭蕉裂くる音	破れ芭蕉	植物
7798	大正４年	秋の部	秋暑く栖む野の禽や羽虫見て	残暑	時候
7799	大正４年	秋の部	戸口掩ふ芭蕉の野分獨在り	野分	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7801	大正４年	秋の部	峯を離れし雲の行方や秋の水	秋の水	地理
7802	大正４年	秋の部	天子長壽を嘉し給へり菊の花	菊	植物
7803	大正４年	秋の部	菊の香や天杯下る賤が宿	菊	植物
7804	大正４年	秋の部	民もろ／＼国中の菊の花に醉ふ	菊	植物
7805	大正４年	秋の部	菊の露をくすりと今日の壽詞哉	菊	植物
7806	大正４年	秋の部	老も病も吉日足日と菊に起つ	菊	植物
7807	大正４年	秋の部	菊尊黒酒白酒に耀けり	菊	植物
7808	大正４年	秋の部	舟はてゝ名月の帆をたゝみけり	名月	天文
7809	大正４年	秋の部	朝戸出の馬の肥へたり露しぐれ	露しぐれ	天文
7810	大正４年	秋の部	海山の幸に菊照る國中哉	菊	植物
7811	大正４年	秋の部	民もろ／＼菊といふ菊に醉にけり	菊	植物
7812	大正４年	秋の部	漁者樵者一輪の菊を仰ぎけり	菊	植物
7813	大正４年	秋の部	山量りの果の光拜みぬ	木の實	植物
7814	大正４年	秋の部	高光る日を浴びて新藁の山	新藁	人事
7816	大正４年	秋の部	酒は古く鯊を老とや來山忌	鯊	動物
7817	大正４年	秋の部	天津日の力を樹植う露しぐれ	露しぐれ	天文
7824	大正４年	秋の部	庭落葉渦いてやがて音もなし	落葉	植物
7825	大正４年	秋の部	報賽の又仰ぐ鐘やかへり花	歸り花	植物
7990	大正５年	秋の部	脛に草露や晨の鶏の聲	露	天文
7991	大正５年	秋の部	提灯に稲葉の露よ家に入る	露	天文
7992	大正５年	秋の部	魂棚の蓮も供物も干からびぬ	魂祭	人事
7993	大正５年	秋の部	喫茶帰路につく霧の月白し	霧	天文
7994	大正５年	秋の部	相撲見の早発ゆゝし霧の中	霧	天文
7996	大正５年	秋の部	比枝を左に老鶯や晝の月	老鶯	動物
7998	大正５年	秋の部	秋風に鞭うたれたる藜かな	秋の風	天文
8000	大正５年	秋の部	秋風にふるゝもの皆傷む哉	秋の風	天文
8002	大正５年	秋の部	秋風や父なる人の懐に	秋の風	天文
8004	大正５年	秋の部	山寺や木鼠に石打つ秋の風	秋の風	天文
8005	大正５年	秋の部	秋風に偃す草起す獨哉	秋の風	天文
8006	大正５年	秋の部	白木槿言葉短く別れけり	木槿	植物
8007	大正５年	秋の部	野菊咲いて税吏至らぬ里もなし	野菊	植物
8008	大正５年	秋の部	鶏頻りに鳴いて朝露乾きけり	露	天文
8009	大正５年	秋の部	このあたりの草花折來糸瓜佛	草花	植物
8010	大正５年	秋の部	鯊釣の後に高き穂蓼哉	鯊釣	人事
8011	大正５年	秋の部	釣竿の長き短き飛蜻蛉	蜻蛉	動物
8012	大正５年	秋の部	名月に小園の花ありやなし	名月	天文
8013	大正５年	秋の部	燕行く頃鬼灯の色づきぬ	鬼灯	植物
8014	大正５年	秋の部	蜩の別レ山上海を望みし今日	秋の蚊帳	人事
8015	大正５年	秋の部	客已に海越えつらむ扇置く	秋扇	人事
8016	大正５年	秋の部	路傍の紫蘇の香高く秋の風	秋の風	天文
8017	大正５年	秋の部	草花の殘り少や雨に飽く	草花	植物
8018	大正５年	秋の部	掛稲に白雲高し山郭	掛稲	人事
8019	大正５年	秋の部	菊高く開かむとする山郭	菊	植物
8020	大正５年	秋の部	菊畑に立てバ風吹く衣かな	菊	植物
8021	大正５年	秋の部	菊の花高さを眉と齊うす	菊	植物
8022	大正５年	秋の部	風に吹かれ行く／＼落穂拾ふ哉	落穂	植物
8023	大正５年	秋の部	谿水の里川となりぬ戸々の菊	菊	植物
8024	大正５年	秋の部	菊を見て安息日の講話哉	菊	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8025	大正５年	秋の部	草の実の各がじしゑむ徑かな	草の實	植物
8026	大正５年	秋の部	尾花くゞる小禽の行方曇りけり	芒	植物
8027	大正５年	秋の部	兒の群に吾兒の見えつ柿紅葉	柿紅葉	植物
8028	大正５年	秋の部	掲示板に夜學の事や柿紅葉	柿紅葉	植物
8029	大正５年	秋の部	串柿と粟の穂と日当る方の軒	雑	雑
8138	大正６年	秋の部	君が歌のさまに花咲く草の丈	草花	植物
8139	大正６年	秋の部	魂まつる花になりゆくや一穂草	魂祭	人事
8140	大正６年	秋の部	虫鳴けバしばらく虫の世界かな	蟲	動物
8141	大正６年	秋の部	初秋の空はしり雲斜なり	初秋	時候
8142	大正６年	秋の部	唐黍の葉に露上る夕餐かな	唐黍	植物
8144	大正６年	秋の部	新凉に夙起の煙藪をもる	新凉	時候
8145	大正６年	秋の部	新凉の小石や夜雨に露はれし	新凉	時候
8146	大正６年	秋の部	高山に神鳴りて角力盛也	角力	人事
8147	大正６年	秋の部	角力觀に山の奥より至りけり	角力	人事
8148	大正６年	秋の部	吾家の子が泣く聲や天の川	天の川	天文
8149	大正６年	秋の部	藪に家す人の起居や天の川	天の川	天文
8150	大正６年	秋の部	虫鳴くに熟睡しにけり帰省の子	蟲	動物
8151	大正６年	秋の部	晝の虫鳴いて香煙ますぐ也	蟲	動物
8152	大正６年	秋の部	鯉の子に翡翠飛べり稲の花	稲の花	植物
8153	大正６年	秋の部	材木を引くやとゞろと稲の花	稲の花	植物
8154	大正６年	秋の部	南瓜の花大きく咲いて霧あがる	霧	天文
8156	大正６年	秋の部	遠忌夜話露下る雨の如し	露	天文
8157	大正６年	秋の部	秋雨に撲たるゝ草の項かな	秋の雨	天文
8158	大正６年	秋の部	新凉に生れかはりし目鼻哉	新凉	時候
8159	大正６年	秋の部	あれ見よや汝に飛來る赤蜻蛉	赤蜻蛉	動物
8160	大正６年	秋の部	秋風や農事講話の人少な	秋の風	天文
8161	大正６年	秋の部	桐の葉越し黒雲すぐる夜半の秋	秋の夜	時候
8162	大正６年	秋の部	鰯賣見つゝや稗田刈急ぐ	稗	植物
8164	大正６年	秋の部	故人をまのあたり「野草花開」の語	草花	植物
8165	大正６年	秋の部	憎むべき毛虫はたきつ秋の風	秋の風	天文
8166	大正６年	秋の部	草花の種採り採らず秋しぐれ	秋時雨	天文
8167	大正６年	秋の部	風蕭颯たり南瓜棚ほぐす	南瓜	植物
8171	大正６年	秋の部	淋しき草悲しき草も咲きにけり	草花	植物
8172	大正６年	秋の部	秋風の吹いて紫蘇の實扱きこぼす	秋の風	天文
8174	大正６年	秋の部	穂芒も少なに雨の月の前	雨の月	天文
8175	大正６年	秋の部	樹枝飛んで野分の人の顔傷む	野分	天文
8176	大正６年	秋の部	野分吹けども動かざる雲高し	野分	天文
8177	大正６年	秋の部	飄々と野分の花をくゝりけり	野分	天文
8179	大正６年	秋の部	靡く尾花を劍とも見む晴あり	芒	植物
8181	大正６年	秋の部	通草藪へ我よりも先に小禽かな	通草	植物
8182	大正６年	秋の部	秋風に馳下りけり暮るゝ山	秋の風	天文
8183	大正６年	秋の部	草臥れし裳の草の實に家の灯よ	草の實	植物
8185	大正６年	秋の部	吾大君にさゝぐべき菊開きけり	菊	植物
8186	大正６年	秋の部	山に對して歌無からめや菊佳節	明治節	人事
8187	大正６年	秋の部	佳節ほぐ子等也柿の小路より	明治節	人事
8188	大正６年	秋の部	穀物の地に墜つ悲し暮るゝ秋	暮の秋	時候
10511	大正６年	秋の部	吹く風の音さへ竹の秋ごゝろ	秋	時候
10659	大正６年	秋の部	吹く風の音さへ竹の秋ごころ	秋ごころ	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8327	大正７年	秋の部	石の秘の三千年や葛の花	葛の花	植物
8328	大正７年	秋淺し藪伐れバ栗の青毬も	秋淺し	秋淺し	時候
8329	大正７年	秋の部	實をもちて秋草となりぬ深山はや	秋の草	植物
8330	大正７年	秋の部	山道に憩へば秋の雲の影	秋の雲	天文
8331	大正７年	秋の部	花葛に身を没しけり道しるべ	葛の花	植物
8332	大正７年	秋の部	一竿を収めて霧のあがる見る	霧	天文
8333	大正７年	秋の部	鶏頭や今し釣來て小鯊焼く	鶏頭	植物
8335	大正７年	秋の部	秋風や一時にかゞむ草の骨	秋の風	天文
8337	大正７年	秋の部	新凉や骨輕々と鶴の如	新凉	時候
8338	大正７年	秋の部	露けしや折りたく柴の乏しきに	露	天文
8339	大正７年	秋の部	満ちこぼるゝ一朝の露に目を張りぬ	露	天文
8340	大正７年	秋の部	祖父と孫としとゝ露けき草履哉	露	天文
8341	大正７年	秋の部	月一川鯊釣何ぞ歸らざる	鯊釣	人事
8342	大正７年	秋の部	月逾々蕎麦畑白し山廓	蕎麥花	植物
8343	大正７年	秋の部	東山の月に應対す讀書樓	月	天文
8344	大正７年	秋の部	來ぬ友の遠し無月の灯を挑ぐ	無月	天文
8345	大正７年	秋の部	すさましや露ふる樹下の破床几	露	天文
8346	大正７年	秋の部	夕草の咲き活きて月の出を望む	月	天文
8347	大正７年	秋の部	庭の月に見入れバ櫻落葉かな	月	天文
8348	大正７年	秋の部	夜半風起り無月の雲を掃ふ	無月	天文
8349	大正７年	秋の部	雨戸引けバ燈火無月の供物哉	無月	天文
8350	大正７年	秋の部	村のためこぞる青年や月の秋	月	天文
8351	大正７年	秋の部	一樹の影河心に屆る月の前	月	天文
8352	大正７年	秋の部	月光に堪へて桐の葉の音もなし	月	天文
8353	大正７年	秋の部	夜長語る遠足の子の寢入りたり	夜長	時候
8354	大正７年	秋の部	星高し夜長の露の降りまさる	夜長	時候
8355	大正７年	秋の部	鱸獲し父を待ち得たり夜長の灯	夜長	時候
8356	大正７年	秋の部	フト覚むれバ尚籾磨の夜長なる	夜長	時候
8357	大正７年	秋の部	晝見し海を眼に夜長の室に在り	夜長	時候
8358	大正７年	秋の部	雨風や怖るともなく夜長守る	夜長	時候
8359	大正７年	秋の部	山の果の朱に紫に夜長の灯	夜長	時候
8360	大正７年	秋の部	夜長知らでうまゐしにけり子等が國	夜長	時候
8361	大正７年	秋の部	夜長なる樫の葉風の止まぬ哉	夜長	時候
8362	大正７年	秋の部	夜長帰る我に門樹のだまり立つ	夜長	時候
8363	大正７年	秋の部	夜長うして登高の苞披かれし	夜長	時候
8364	大正７年	秋の部	後の月も雨に夜長の獨哉	夜長	時候
8365	大正７年	秋の部	著るく欽けゆく月に夜々長き	夜長	時候
8366	大正７年	秋の部	紅葉ます／＼濃く水いよ／＼澄む	紅葉	植物
8367	大正７年	秋の部	白雲の浮べるまゝや草錦	草錦	植物
8368	大正７年	秋の部	家まばら石高道に柳散る	柳散る	植物
8370	大正７年	秋の部	幸にして菊尚枯れずあり	菊	植物
8371	大正７年	秋の部	落穂食む一鳥我に驚かず	落穂	植物
8514	大正８年	秋の部	花火消えて家路を思ふ三十里	花火	人事
8516	大正８年	秋の部	皆飛ぶに我もまじりぬ稲雀	稲雀	動物
8517	大正８年	秋の部	職人が早起きて居り露の中	露	天文
8518	大正８年	秋の部	鉄負ひしかぬぢと逢ひぬ女郎花	女郎花	植物
8519	大正８年	秋の部	蝉鳴て驛道近し峠道	蝉	動物
8520	大正８年	秋の部	新凉に堪へて云ひつぐ神話哉	新凉	時候

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8521	大正８年	秋の部	新凉や艶に消えたる揚花火	新凉	時候
8522	大正８年	秋の部	新凉やまばらに青き栗のいが	新凉	時候
8523	大正８年	秋の部	新凉に下草もなき社木哉	新凉	時候
8524	大正８年	秋の部	新凉や尚灯を慕ふ虫の数	新凉	時候
8525	大正８年	秋の部	新凉の郷思を載せて車哉	新凉	時候
8526	大正８年	秋の部	客のために石器運ぶや花葵	葵	植物
8527	大正８年	秋の部	蝉凉し神威に息を調ふる	蝉	動物
8528	大正８年	秋の部	新凉に高知る千木や雲見ゆる	新凉	時候
8529	大正８年	秋の部	水草の根は定まりぬ飛蜻蛉	蜻蛉	動物
8530	大正８年	秋の部	水澄むや菱の葉強に秋の蝶	秋の蝶	動物
8531	大正８年	秋の部	螽紛々物も思はぬ小百姓	螽	動物
8532	大正８年	秋の部	暮るゝ戸や誰につき來て螽ゐる	螽	動物
8533	大正８年	秋の部	露はしりて當るべからず芋畑	芋	植物
8534	大正８年	秋の部	芒野に顧るおのれ獨かな	芒	植物
8535	大正８年	秋の部	野菊咲きつらなるに客と歡べり	野菊	植物
8536	大正８年	秋の部	落つる日を後ろになして山田刈る	稲刈	人事
8537	大正８年	秋の部	身にしむや稲妻老いし山の雲	稲妻	天文
8538	大正８年	秋の部	秋風に靡くなびかぬ千草哉	秋の風	天文
8539	大正８年	秋の部	秋風に堪へて物いはず渡守	秋の風	天文
8540	大正８年	秋の部	秋風に干竿の鳴る夜となりぬ	秋の風	天文
8541	大正８年	秋の部	秋風に顔うつむけて晩歸哉	秋の風	天文
8542	大正８年	秋の部	秋風や手にしかと持つ茱萸の枝	秋の風	天文
8543	大正８年	秋の部	月の雲はしり去り虫高く鳴く	蟲	動物
8544	大正８年	秋の部	秋の雨暮れなんとして虹見ゆる	秋の雨	天文
8545	大正８年	秋の部	霧を見る晴定めつ柹梢	霧	天文
8546	大正８年	秋の部	霧漫々戸に偏りて秋海棠	秋海棠	植物
8547	大正８年	秋の部	夜栗量る隣を耳に讀書哉	栗	植物
8548	大正８年	秋の部	行く人皆掛稲にかくれけり	掛稲	人事
8549	大正８年	秋の部	夫婦して新藁高く積上げつ	新藁	人事
8550	大正８年	秋の部	渋柹に稲扱器械ひゞく也	柹	植物
8551	大正８年	秋の部	風北に変り豆引働きぬ	豆引	人事
8552	大正８年	秋の部	さらぼうて穂蓼まじりぬ草錦	草錦	植物
8553	大正８年	秋の部	菊の露を冐し蕋食む小虫哉	菊	植物
8554	大正８年	秋の部	菊畑の天の一方山崇き	菊	植物
8555	大正８年	秋の部	花々葉々相倚りて菊光る哉	菊	植物
8556	大正８年	秋の部	杉の実干す人に分たむ契哉	杉の實	植物
8557	大正８年	秋の部	大方の紅葉が中の菊光る	菊	植物
8558	大正８年	秋の部	背戸の菊に徑してゆく杉林	菊	植物
8559	大正８年	秋の部	ゆく秋の小禽と道に別れけり	行秋	時候
8560	大正８年	秋の部	尾花ちるに非ずや後の月夜頃	芒散る	植物
8561	大正８年	秋の部	童子去れバ小鳥が遊ぶ散銀杏	銀杏散る	植物
8563	大正８年	秋の部	秋の海矢聲沈みて八百年	秋の海	地理
8564	大正８年	秋の部	燕既に歸りつくしぬ晝砧	砧	人事
8565	大正８年	秋の部	女より高き穂蓼や晝砧	砧	人事
8566	大正８年	秋の部	砧きく古き夢路や奈良の月	砧	人事
8567	大正８年	秋の部	山鳴りの絶えし安堵の砧かな	砧	人事
8568	大正８年	秋の部	砧措きて灯にこぞりけり京便	砧	人事
8569	大正８年	秋の部	砧うちて大学に入る子勵ましつ	砧	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8570	大正８年	秋の部	砧うつや母の年忌の近づくに	砧	人事
8571	大正８年	秋の部	ひとり砧うち行ひすましけり	砧	人事
8572	大正８年	秋の部	世の中は砧もうたず月に笛	砧	人事
8573	大正８年	秋の部	山里や砧に馴れて狸など	砧	人事
8574	大正８年	秋の部	月に怨じ風に喞ちてぞ砧うつ	砧	人事
8575	大正８年	秋の部	嫗一人砧うつ狐狸のすみか哉	砧	人事
8696	大正９年	秋の部	分野秋涼し筆星硯星	新涼	時候
8697	大正９年	秋の部	初嵐人谿川を渉りゆく	初嵐	天文
8698	大正９年	秋の部	風簷を鳴らして天の川老いし	天の川	天文
8699	大正９年	秋の部	地にありて旱怖れつ天の川	天の川	天文
8700	大正９年	秋の部	詩人何に獨起きたり天の川	天の川	天文
8702	大正９年	秋の部	ころ／＼と我に虫鳴く門出哉	蟲	動物
8703	大正９年	秋の部	野路の虫鳴止まず我旅行くに	蟲	動物
8704	大正９年	秋の部	此清水護る神います杉嵐	秋の嵐	天文
8705	大正９年	秋の部	踊子の皃白々と稗田ゆく	踊	人事
8706	大正９年	秋の部	君にして踊らば誰か踊らざらん	踊	人事
8707	大正９年	秋の部	終夜一樹を繞る踊かな	踊	人事
8708	大正９年	秋の部	曉の霧踊の場を封じけり	踊	人事
8709	大正９年	秋の部	山一ツ越えて踊に通ひけり	踊	人事
8710	大正９年	秋の部	山陰の踊見せうぞ急げ馬	踊	人事
8711	大正９年	秋の部	灯も置かで踊の留守居したりけり	踊	人事
8712	大正９年	秋の部	踊果てつ牽牛織女あか／＼と	踊	人事
8713	大正９年	秋の部	姉妹の踊を戻る先後かな	踊	人事
8714	大正９年	秋の部	おば子十七踊は今ぞ笛もよし	踊	人事
8716	大正９年	秋の部	皆共に月を悲しきものと見む	月	天文
8718	大正９年	秋の部	此月に鬚眉耀かす人あらむ	月	天文
8721	大正９年	秋の部	一日無事なれバ菊の主たり	菊	植物
8722	大正９年	秋の部	菊の莟大きくなりぬ霧の中	菊	植物
8723	大正９年	秋の部	朝戸出に菊恙なし禽も飛ぶ	菊	植物
8724	大正９年	秋の部	年々や籬落の菊に往返り	菊	植物
8725	大正９年	秋の部	菊畑に物の落葉の乾きけり	菊	植物
8726	大正９年	秋の部	後の月を市に泊りし山の人	後の月	天文
8727	大正９年	秋の部	朝寒に衣の塵を掃ひけり	朝寒	時候
8728	大正９年	秋の部	温かき飯振まひぬ菊の宿	菊	植物
8729	大正９年	秋の部	風菊を撼かして主客黙しけり	菊	植物
8731	大正９年	秋の部	君が菊星ともならで莟む哉	菊	植物
8732	大正９年	秋の部	菊に喚べば杳かに鷹ふ孤ツ松	菊	植物
8733	大正９年	秋の部	物の葉を掃きてすてけり後の月	後の月	天文
8734	大正９年	秋の部	霧の海に鳴子の縄のゆくへ哉	鳴子	人事
8735	大正９年	秋の部	蓼赤し野川にたるむ鳴子縄	鳴子	人事
8736	大正９年	秋の部	鳴子鳴ってのそりと立ちぬ山の僧	鳴子	人事
8737	大正９年	秋の部	社皷鼕々鳴子の縄のくも手哉	鳴子	人事
8738	大正９年	秋の部	いさゝかの粟田に鳴子物々し	鳴子	人事
8739	大正９年	秋の部	遠き案山子近き鳴子の構哉	雑	雑
8740	大正９年	秋の部	逢はぬ恋夜の鳴子を鳴らしけり	鳴子	人事
8741	大正９年	秋の部	かりそめの縺れの解けて鳴子かな	鳴子	人事
8742	大正９年	秋の部	引板鳴って鴻髙く渡りけり	鳴子	人事
8743	大正９年	秋の部	稲妻に鳴子靜まる小村哉	鳴子	人事

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8744	大正９年	秋の部	山郭や落穂拾ひに日一ツ時	落穂	植物
8745	大正９年	秋の部	老の身を屈めて落穂あさる哉	落穂	植物
8746	大正９年	秋の部	畔草の錦の中の落穂哉	落穂	植物
8747	大正９年	秋の部	落穂拾ふ子に北國の雲低れつ	落穂	植物
8748	大正９年	秋の部	落穂拾うてゆく／＼霰至りけり	落穂	植物
8851	大正10年	秋の部	朝寒の中に遠山鎮まりぬ	朝寒	時候
8852	大正10年	秋の部	骨を去らぬ登山疲レや初嵐	初嵐	天文
8853	大正10年	秋の部	子一人のため機織るや初嵐	初嵐	天文
8854	大正10年	秋の部	帳中の詩人の燈や初嵐	初嵐	天文
8855	大正10年	秋の部	初嵐のなごり小庭の穂草哉	初嵐	天文
8856	大正10年	秋の部	初嵐秋海棠に及びけり	初嵐	天文
8857	大正10年	秋の部	家々の葉生姜茂り初嵐	初嵐	天文
8858	大正10年	秋の部	馬どころ馬皆美也初嵐	初嵐	天文
8859	大正10年	秋の部	客を送って潮をきゝつ初嵐	初嵐	天文
8860	大正10年	秋の部	物かげの秋海棠や初嵐	初嵐	天文
8861	大正10年	秋の部	女郎花の類ひ靡かす初嵐	初嵐	天文
8862	大正10年	秋の部	峠越す相撲の衆や初嵐	初嵐	天文
8864	大正10年	秋の部	白骨の白さ漾ふ露の中	露	天文
8865	大正10年	秋の部	朝寒や起きて文かく喪中人	朝寒	時候
8866	大正10年	秋の部	朝寒に花肥ゆるなり朝な／＼	朝寒	時候
8867	大正10年	秋の部	朝寒を尚りん／＼と虫の声	朝寒	時候
8868	大正10年	秋の部	朝寒や早起に慣れて花を剪る	朝寒	時候
8869	大正10年	秋の部	虫更けてはや朝寒を催しぬ	朝寒	時候
8870	大正10年	秋の部	朝寒にから／＼と笑ふ家の兒等	朝寒	時候
8871	大正10年	秋の部	朝寒に狩得て悲し鮎の腹	朝寒	時候
8872	大正10年	秋の部	朝寒を提け來る鱸らし	朝寒	時候
8873	大正10年	秋の部	朝寒の横雲割れて日を顔に	朝寒	時候
8876	大正10年	秋の部	ほくよみがやがらにすなる案山子哉	案山子	人事
8878	大正10年	秋の部	此水に鮎ゐずなりぬ花すゝき	芒	植物
8879	大正10年	秋の部	雲垂れて芒に道を得たりけり	芒	植物
8880	大正10年	秋の部	家を去る一里芒の旅心	芒	植物
8881	大正10年	秋の部	花芒案山子祭の客をまつ	芒	植物
8882	大正10年	秋の部	蟹寺に問答もなし花芒	芒	植物
8884	大正10年	秋の部	雨の如くつゆふる頃の事なりし	露	天文
8886	大正10年	秋の部	栃の味さめてゆく／＼野菊見る	野菊	植物
8887	大正10年	秋の部	野菊さいて雀など飛ぶ古人の碑	野菊	植物
8888	大正10年	秋の部	祀られぬ案山子や野菊咲残る	野菊	植物
8889	大正10年	秋の部	日は山へ野菊に遊ぶ鳥もなし	野菊	植物
8890	大正10年	秋の部	我馬にむしり食はるゝ野菊哉	野菊	植物
8891	大正10年	秋の部	鐘の銘も野菊も古き世なりけり	野菊	植物
8892	大正10年	秋の部	野菊白く月東山に現はれし	野菊	植物
8893	大正10年	秋の部	掛稲にかくれて野菊盛哉	野菊	植物
8894	大正10年	秋の部	酒さめて野菊に家を顧る	野菊	植物
8895	大正10年	秋の部	旅行けバ野菊に愁ふ曇哉	野菊	植物
8897	大正10年	秋の部	ある時は菊圃に立ちて風をきく	菊	植物
8898	大正10年	秋の部	日嗣の皇子國見せさすや稲の秋	稲	植物
8900	大正10年	秋の部	掛稲やけふの足日に飛ぶ螽	掛稲	人事
8901	大正10年	秋の部	掛稲も野菊もぬれつ通り雨	雑	雑

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8902	大正10年	秋の部	稲人の安息日や菊膾	稲刈	人事
8903	大正10年	秋の部	稲積むや啄み足りて鶏歌ふ	稲刈	人事
8904	大正10年	秋の部	雲如錦神嘗の稲の秋	稲	植物
8905	大正10年	秋の部	門せまし稲扱機械柿落葉	稲こき	人事
8906	大正10年	秋の部	雁渡るかな掛稲の一郭	掛稲	人事
8907	大正10年	秋の部	稲の國粟の國八十神の國	雑	雑
8908	大正10年	秋の部	小提灯消さじと稲の露の中	稲	植物
9043	大正11年	秋の部	山霧の君が机を冐しけむ	霧	天文
9044	大正11年	秋の部	これより行け細道ながら露の中	露	天文
9046	大正11年	秋の部	つゆの音きゝつ一時の叢に	露	天文
9048	大正11年	秋の部	玫瑰に草鞋の埃浴せけり	玫瑰	植物
9050	大正11年	秋の部	麻どころの麻引くを見て帰る也	麻刈	人事
9051	大正11年	秋の部	北上の流騒がしや銀河	天の川	天文
9052	大正11年	秋の部	著るく洪水引きぬ天川	天の川	天文
9053	大正11年	秋の部	燕の歸らで淋し古戦場	秋燕	動物
9054	大正11年	秋の部	經堂を出て目を張りぬ百日紅	百日紅	植物
9055	大正11年	秋の部	白露や扉を開く金色堂	露	天文
9056	大正11年	秋の部	関守の子等とも見えず麻を引く	麻刈	人事
9057	大正11年	秋の部	六郡を稲妻す也草枕	稲妻	天文
9058	大正11年	秋の部	新涼や北上に飛ぶ杉嵐	新涼	時候
9059	大正11年	秋の部	如是月夜と知りて鳴く虫か	蟲	動物
9060	大正11年	秋の部	鳴く虫を脅かしたる一葉哉	蟲	動物
9062	大正11年	秋の部	道の辺の虫に轡鳴らしゆく	蟲	動物
9063	大正11年	秋の部	經堂を出て階や晝の虫	蟲	動物
9064	大正11年	秋の部	虫の音を耳に墓辺の草むしる	蟲	動物
9065	大正11年	秋の部	曽良は知らず象潟の虫鳴初めし	蟲	動物
9066	大正11年	秋の部	押寄する狭霧に堪へて虫の鳴く	蟲	動物
9067	大正11年	秋の部	鳴く虫の鈴振立つる水際哉	蟲	動物
9068	大正11年	秋の部	虫鳴くや天にかゞやく星の華	蟲	動物
9069	大正11年	秋の部	虫鳴いて神の扉を護りけり	蟲	動物
9071	大正11年	秋の部	亭の長老子に乞ひぬ南瓜の賛	南瓜	植物
9072	大正11年	秋の部	秋風に孤峭の肩を吹かれけり	秋の風	天文
9073	大正11年	秋の部	抽ンでゝ大きく揺るゝ穂蓼哉	蓼の花	植物
9074	大正11年	秋の部	ひら／＼と風掠め去る芒かな	芒	植物
9075	大正11年	秋の部	物蔭に莟める艸や秋しぐれ	秋時雨	天文
9076	大正11年	秋の部	月あまり明きに虫の声まばら	蟲	動物
9078	大正11年	秋の部	益良夫ハ秋の帝の賜ぞ	秋	時候
9080	大正11年	秋の部	薯掘に酒を強ひけり山遊	自然薯掘る	人事
9081	大正11年	秋の部	草の花摘まで且つ見る愁哉	草花	植物
9082	大正11年	秋の部	山に遊びて家の灯を見る秋の暮	秋の暮	時候
9086	大正11年	秋の部	白に黄に後の雛衣めをと衣	後の雛	人事
9088	大正11年	秋の部	秋風や恃むものなき物の蔓	秋の風	天文
9089	大正11年	秋の部	夕日ぬくし紅葉にや醉ふ手弱女ら	紅葉	植物
9090	大正11年	秋の部	巖山の終日湿ふむら紅葉	紅葉	植物
9091	大正11年	秋の部	歌御會還御の後や夕紅葉	紅葉	植物
9092	大正11年	秋の部	詩稿焚くに折りてくべたる紅葉哉	紅葉	植物
9093	大正11年	秋の部	紅葉せぬ庭木の下に獨在り	紅葉	植物
9094	大正11年	秋の部	時しもあれ紅葉の爛れ霰打つ	紅葉	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9095	大正11年	秋の部	梅紅葉籬の菊へ徑かな	紅葉	植物
9096	大正11年	秋の部	豆腐買ひに紅葉の谿を出で來る	紅葉	植物
9097	大正11年	秋の部	紅葉敷きて筆硯を置くや紅葉狩	紅葉狩	人事
9098	大正11年	秋の部	雨過ぐる紅葉の林鹿もぬれつ	紅葉	植物
9236	大正12年	秋の部	秋立つか雲の音聞け山の上	立秋	時候
9240	大正12年	秋の部	夜嵐や魂棚更けて灯孤ツ	魂祭	人事
9241	大正12年	秋の部	虫食ひの鬼灯悲し魂祭	魂祭	人事
9242	大正12年	秋の部	みそはぎをこぼして魂の去りけらし	魂祭	人事
9243	大正12年	秋の部	魂棚や夜の間にからぶ蓮の飯	魂祭	人事
9244	大正12年	秋の部	草花の數をつくして魂まつり	魂祭	人事
9245	大正12年	秋の部	つゆけしや人を送りて無言なる	露	天文
9246	大正12年	秋の部	一行の元氣朝つゆ乱れ散る	露	天文
9247	大正12年	秋の部	白露の中や朝鶏追ひ放す	露	天文
9248	大正12年	秋の部	白露や昨日終へたる庵曝書	露	天文
9250	大正12年	秋の部	新凉に苔を掃へり頌徳碑	新凉	時候
9251	大正12年	秋の部	新凉にものゝ二葉の生れけり	新凉	時候
9253	大正12年	秋の部	美人前にあり稲妻頻り也	稲妻	天文
9254	大正12年	秋の部	登山より歸る水村秋めきて	秋めく	時候
9255	大正12年	秋の部	貴人の登山遠雷畏けれ	登山	人事
9256	大正12年	秋の部	登山案内己が稗田に徑して	登山	人事
9257	大正12年	秋の部	素顔吹く霧や登山の女馬士	登山	人事
9258	大正12年	秋の部	登山宿の軒の草偃す嵐哉	登山	人事
9259	大正12年	秋の部	扇白く登山の客の逗留す	登山	人事
9260	大正12年	秋の部	登山元氣朝つゆ降らす濶葉樹	登山	人事
9261	大正12年	秋の部	登山戻れバ灯籠ほのか草の宿	登山	人事
9262	大正12年	秋の部	七星斜なり登山のかしま立	登山	人事
9263	大正12年	秋の部	合歡花登山の便り到りけり	合歓の花	植物
9265	大正12年	秋の部	秋風にふれてこぼれぬ露もなし	秋の風	天文
9266	大正12年	秋の部	秋風の吹くがまゝ也草も木も	秋の風	天文
9267	大正12年	秋の部	筆を輟めて栗ひく鼡聞きすます	栗	植物
9269	大正12年	秋の部	桐落葉踏んで大地を鳴らし去る	桐一葉	植物
9271	大正12年	秋の部	この程の忌日子規庵無事なりき	子規忌	人事
9273	大正12年	秋の部	柹くひし佛を偲ぶ物の本	柹	植物
9274	大正12年	秋の部	枝柹到來婆娑と疊の上に置く	柹	植物
9275	大正12年	秋の部	山盛りの柹くひつくす天高し	柹	植物
9276	大正12年	秋の部	柹くうて家を辞すれバ風の吹く	柹	植物
9277	大正12年	秋の部	消息に酬いて柹の句を贈る	柹	植物
9278	大正12年	秋の部	秋晴の光の中の羽虫哉	秋晴	天文
9279	大正12年	秋の部	秋晴に羽たゝいて洲の鳥のゐる	秋晴	天文
9280	大正12年	秋の部	秋晴や松の鱗の片照りも	秋晴	天文
9281	大正12年	秋の部	秋晴に芒ともしく光りけり	秋晴	天文
9282	大正12年	秋の部	秋晴の夕となりし翠微哉	秋晴	天文
9284	大正12年	秋の部	網し得て夜寒に鯉の大きさよ	夜寒	時候
9285	大正12年	秋の部	旅路の事語りつゞけて夜寒哉	夜寒	時候
9286	大正12年	秋の部	萬巻の書に埋もれけり夜寒の灯	夜寒	時候
9287	大正12年	秋の部	夜寒の座を占め得たり庵の大硯	夜寒	時候
9288	大正12年	秋の部	二三人夜寒の灯かげ句を作る	夜寒	時候
9413	大正13年	秋の部	新凉や水を愛して水草も	新凉	時候

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9414	大正13年	秋の部	新凉や色濃かに深山艸	新凉	時候
9415	大正13年	秋の部	新凉やしばらく潜む魚の子ら	新凉	時候
9416	大正13年	秋の部	千生の未生の秋も凉しげに	新凉	時候
9417	大正13年	秋の部	新凉の流れて星の疎なる	新凉	時候
9419	大正13年	秋の部	白扇や瀑布見にまかる木下道	扇	人事
9421	大正13年	秋の部	巖踏んで宿にかへり來百合花	百合	植物
9422	大正13年	秋の部	似タリ貝露と尾花のいさかひも	雑	雑
9423	大正13年	秋の部	鮑採の嘯岩に振ふかな	鮑	動物
9424	大正13年	秋の部	岩館の岩より起る秋の風	秋の風	天文
9425	大正13年	秋の部	旅今宵潮虫も鳴け宿の庭	蟲	動物
9426	大正13年	秋の部	四五人の踊に磯の香のたちぬ	踊	人事
9430	大正13年	秋の部	今朝の秋又青山と一拶す	今朝の秋	時候
9432	大正13年	秋の部	秋の草の千くさの中の穂長艸	秋の草	植物
9434	大正13年	秋の部	星まつる一むら萩をよるべ哉	七夕	人事
9435	大正13年	秋の部	秋風の山おろし來つ古簾	秋の風	天文
9437	大正13年	秋の部	磯の宿に名殘の幮や濤の音	秋の蚊帳	人事
9438	大正13年	秋の部	月の瀾われて碎けて千々の秋	秋	時候
9439	大正13年	秋の部	秋風に吹かれて輕し漁り舟	秋の風	天文
9440	大正13年	秋の部	秋晴の海に入りけり山の裾	秋晴	天文
9442	大正13年	秋の部	道の友南北よりす秋の風	秋の風	天文
9443	大正13年	秋の部	秋風の中に一人や松に倚る	秋の風	天文
9444	大正13年	秋の部	高館に遊びて久し置扇	秋扇	人事
9445	大正13年	秋の部	置扇子が草花をむしり來る	秋扇	人事
9446	大正13年	秋の部	嵐吹いて尚棚に在る南瓜哉	南瓜	植物
9447	大正13年	秋の部	秋風や水急にして帆掛舟	秋の風	天文
9448	大正13年	秋の部	閑話柄主人が座右の南瓜哉	南瓜	植物
9449	大正13年	秋の部	事もなげに隣家南瓜を贈來る	南瓜	植物
9450	大正13年	秋の部	贈られし南瓜に何を酬いんか	南瓜	植物
9451	大正13年	秋の部	扇置くや壞古の作の未定稿	秋扇	人事
9453	大正13年	秋の部	供物くさ〳〵主人が足しぬ秋海棠	秋海棠	植物
9454	大正13年	秋の部	畑に出て月待ち得たる薄衣哉	月	天文
9455	大正13年	秋の部	月今し客の面を照しけり	月	天文
9456	大正13年	秋の部	書巻積みし方の小暗き月夜哉	月	天文
9457	大正13年	秋の部	穂芒の灯影無月の記を艸す	無月	天文
9458	大正13年	秋の部	頑に句を罵りぬ鶏頭花	鶏頭	植物
9460	大正13年	秋の部	人遠き思ひ夜寒に朝寒に	雑	雑
9462	大正13年	秋の部	皆人の顔色動く秋の風	秋の風	天文
9464	大正13年	秋の部	耳にとき樹間の聲や秋の風	秋の風	天文
9467	大正13年	秋の部	四五人を北へ送りぬ草紅葉	草錦	植物
9468	大正13年	秋の部	幾日ちる柳ぞ曇つゞく日ぞ	柳散る	植物
9591	大正14年	秋の部	白き花折持ちて蜩の谿	蜩	動物
9593	大正14年	秋の部	北を指せバ東に聳ゆ雲の峰	雲の峰	天文
9594	大正14年	秋の部	霧蒼し北門こゝに開けたり	霧	天文
9596	大正14年	秋の部	石露はれて河骨の細々と	河骨	植物
9597	大正14年	秋の部	青葡萄熊に非ずバ何通ふ	青葡萄	植物
9598	大正14年	秋の部	露けしや昔の蝦夷の足跡も	露	天文
9599	大正14年	秋の部	羊蹄山端山裾山霧の降る	霧	天文
9600	大正14年	秋の部	夏霧に喬木の葡萄滴りぬ	夏霧	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9601	大正14年	秋の部	明日立たん旅の宿天の川淡し	天の川	天文
9602	大正14年	秋の部	北を限る國の旅寝や天の川	天の川	天文
9603	大正14年	秋の部	蝦夷人の笹の軒端や天の川	天の川	天文
9605	大正14年	秋の部	定山の魂も祭らず鴉啼く	魂祭	人事
9607	大正14年	秋の部	言葉を残し去る唐葵の花の中	立葵	植物
9608	大正14年	秋の部	秋立つと目に白樺の白さ哉	立秋	時候
9609	大正14年	秋の部	今朝秋や耳にあやしき駅路の名	今朝の秋	時候
9610	大正14年	秋の部	峰の木々秋立つ容つくり哉	立秋	時候
9613	大正14年	秋の部	奥蝦夷や樹海の果の女郎花	女郎花	植物
9617	大正14年	秋の部	花豆や砂に相撲へる蝦夷の子ら	角力	人事
9618	大正14年	秋の部	山にハ山の草花折りぬほつ／＼と	草花	植物
9619	大正14年	秋の部	足に灌げ山の眞清水藥なる	清水	地理
9620	大正14年	秋の部	海山や知らぬ國なる女郎花	女郎花	植物
9621	大正14年	秋の部	蝦夷近し海風に偃す女郎花	女郎花	植物
9623	大正14年	秋の部	虫聲々筆の穂艸の細かに	蟲	動物
9625	大正14年	秋の部	膝を撃ちて蚊火の烟の中にあり	蚊遣	人事
9626	大正14年	秋の部	東北へ斜に南瓜棚仆る	南瓜	植物
9627	大正14年	秋の部	庭草をくゞる嵐や茗荷の子	茗荷の子	植物
9628	大正14年	秋の部	秋風や壁にはためく書一軸	秋の風	天文
9630	大正14年	秋の部	はぎすゝきそも山男山女	雑	雑
9632	大正14年	秋の部	夜嵐や無月の欄の花すゝき	無月	天文
9633	大正14年	秋の部	果落す栗鼠を憎みて吟哦哉	木の實	植物
9635	大正14年	秋の部	天さかる鄙少女野菊たてまつれ	野菊	植物
9636	大正14年	秋の部	杉の里の夜寒畏し御火焚ら	夜寒	時候
9638	大正14年	秋の部	果敢なさは無月の詩筆措きもあへず	無月	天文
9640	大正14年	秋の部	雨を避くる物かげもなし草錦	草錦	植物
9641	大正14年	秋の部	松の里芙蓉の家や雨宿り	芙蓉	植物
9643	大正14年	秋の部	日中暖に眞垣の菊に倚り	菊	植物
9645	大正14年	秋の部	菊長短南山常の如くにて	菊	植物
9799	大正15年	秋の部	など斯くは蜩早き今年ぞも	蜩	動物
9801	大正15年	秋の部	燈火親し草の葉ずれを耳の底	燈火親し	人事
9802	大正15年	秋の部	燈火親し大空の覆ふ夜にして	燈火親し	人事
9803	大正15年	秋の部	庭の虫燈火親しと鳴出けむ	燈火親し	人事
9804	大正15年	秋の部	燈に親み山奥の湯に居殘りぬ	燈火親し	人事
9805	大正15年	秋の部	秋の燈や端居になれて草の色	秋の灯	人事
9807	大正15年	秋の部	濱草の秋咲く花に暑さ哉	草花	植物
9808	大正15年	秋の部	合歡咲いて象潟近し旅心	合歓の花	植物
9809	大正15年	秋の部	三郡の水平かに稲の花	稲の花	植物
9810	大正15年	秋の部	秋の雲海の碧に影落す	秋の雲	天文
9811	大正15年	秋の部	白砂ふむ墓辺の道や合歡花	合歓の花	植物
9812	大正15年	秋の部	君が星臣が星宵々の秋	秋の宵	時候
9813	大正15年	秋の部	浦波に足ぬらし來つ胡麻の花	胡麻の花	植物
9814	大正15年	秋の部	白銀の翅も秋や浪千鳥	秋	時候
9815	大正15年	秋の部	三昧より起ちてか蚤を振ひけむ	蚤	動物
9816	大正15年	秋の部	樹の奥の鳩啼止めバ露の音	露	天文
9817	大正15年	秋の部	妙音朗々大竹原をもるも秋	秋	時候
9818	大正15年	秋の部	海明けぬいづこきのふの天の川	天の川	天文
9819	大正15年	秋の部	岩清水帰路一掬の名殘哉	清水	地理

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9821	大正15年	秋の部	魂棚にみそなはすらむ旅衣	魂祭	人事
9822	大正15年	秋の部	魂棚の灯に参り會ふ旅路哉	魂祭	人事
9823	大正15年	秋の部	魂まつる越路の穂草見てすぎぬ	魂祭	人事
9824	大正15年	秋の部	魂祭宵月に立つ人の影	魂祭	人事
9825	大正15年	秋の部	魂棚の灯をつぎ足しぬ獨居て	魂祭	人事
9826	大正15年	秋の部	樹石皆神あるにつく／＼法師	つくつく法師	動物
9827	大正15年	秋の部	幾秋の泉を旅の鏡哉	秋	時候
9828	大正15年	秋の部	遺墨かず／＼西瓜の記事ハなかりけり	西瓜	植物
9829	大正15年	秋の部	朝皃のつゆに別を急ぎけり	朝顔	植物
9831	大正15年	秋の部	西東と釣りぬ大きな蝸二ツ	蚊帳	人事
9832	大正15年	秋の部	あはたゞしくかたみにくゞる蝸の裾	蚊帳	人事
9833	大正15年	秋の部	杯を置けバ鳰啼く別哉	鳰	動物
9835	大正15年	秋の部	鄙めきて百日紅咲く畏けれ	百日紅	植物
9836	大正15年	秋の部	蜩に何まどふべき物もなし	蜩	動物
9837	大正15年	秋の部	うき我にくれし林檎の小粒なる	林檎	植物
9838	大正15年	秋の部	黄金掘る山瘠せにけり花芒	芒	植物
9839	大正15年	秋の部	昔人ひたすがりけむ葛の花	葛の花	植物
9840	大正15年	秋の部	岩清水誰が俳腸をしぼりけむ	清水	地理
9842	大正15年	秋の部	岩根冷し鰰雲を呼ばふらん	鰰	動物
9843	大正15年	秋の部	盆休磯ハ磯草の花盛	盆休	人事
9845	大正15年	秋の部	青山やかさねて嗽ぐ水の秋	秋の水	地理
9846	大正15年	秋の部	みるかつぐ蜑少女夜踊るなり	踊	人事
9847	大正15年	秋の部	禅院の流レ水蜩の鳴く	蜩	動物
9848	大正15年	秋の部	木々開山が手栽らし蜻蛉とぶ	蜻蛉	動物
9849	大正15年	秋の部	滝道の喬木とんぼ飛び断えし	蜻蛉	動物
9850	大正15年	秋の部	磯馴松蜻蛉ハ町へ吹かれけり	蜻蛉	動物
9851	大正15年	秋の部	昼もうつ踊の太鼓とんぼ飛ぶ	蜻蛉	動物
9852	大正15年	秋の部	山際に蜻蛉とぶ見ゆ海平ラ	蜻蛉	動物
9854	大正15年	秋の部	これを喰ふ両三顆天爽かに	爽か	時候
9856	大正15年	秋の部	呱々の聲あり千里さはやかに	爽か	時候
9858	大正15年	秋の部	女郎花よりか萩より芒へか	雑	雑
9860	大正15年	秋の部	萩の花咲の盛りや小酒盛	萩	植物
9862	大正15年	秋の部	稲妻や聳ゆるまゝに一の山	稲妻	天文
9864	大正15年	秋の部	秋風にくちゆくものゝ哀しさよ	秋の風	天文
9865	大正15年	秋の部	馬肥ゆる樂しさ萩の二番刈	馬肥ゆる	動物
9866	大正15年	秋の部	馬肥えて牧の秋風日たゞ吹く	馬肥ゆる	動物
9867	大正15年	秋の部	一峡の葛喰ひつくし馬肥ゆる	馬肥ゆる	動物
9868	大正15年	秋の部	ほと／＼と葉つゆ穂つゆや馬肥えし	馬肥ゆる	動物
9869	大正15年	秋の部	秋風や牽く駒肥えし不破の関	馬肥ゆる	動物
9871	大正15年	秋の部	黍は稈に立ついづこ魂遊ぶ	唐黍	植物
9873	大正15年	秋の部	萩に行かむ芒に來よと忙しさ	雑	雑
9875	大正15年	秋の部	つゆしぐれ鶉の床をみだしけむ	露しぐれ	天文
9876	大正15年	秋の部	翁さびて唐辛子干す日ありけり	唐辛子	植物
9877	大正15年	秋の部	磽确の土悲しさよ唐辛子	唐辛子	植物
9878	大正15年	秋の部	鎌倉や畑一ところ唐辛子	唐辛子	植物
9879	大正15年	秋の部	棒喝の唐辛子煮る遑哉	唐辛子	植物
9880	大正15年	秋の部	山畑や引殘されし唐辛子	唐辛子	植物
9882	大正15年	秋の部	草花の種採りに出つ風の中	草花の種	植物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9883	大正15年	秋の部	草花の種こぼれたり草の老	草花の種	植物
9884	大正15年	秋の部	草花の種ぞ穂末に残りける	草花の種	植物
9885	大正15年	秋の部	草花の種小粒なり日の秋に	草花の種	植物
9886	大正15年	秋の部	草花の種の光や秋の風	草花の種	植物
9887	大正15年	秋の部	草花の種が飛ぶなり風の中	草花の種	植物
9889	大正15年	秋の部	秋の海深く行きけむ鰭廣に	秋の海	地理
9890	大正15年	秋の部	ホキと折れて手柴引かれぬ秋の風	手柴引	人事
9891	大正15年	秋の部	手柴引けバ蔓も斷たれて秋の風	手柴引	人事
9892	大正15年	秋の部	手柴引けバ瓜の末生絡まりぬ	手柴引	人事
9893	大正15年	秋の部	手柴引く蔓の下草つゆけさよ	手柴引	人事
9894	大正15年	秋の部	手柴引く因みに仆す黍の稈	手柴引	人事
9896	大正15年	秋の部	むかし男今もこそ居れ鳩吹いて	鳩吹く	人事
9898	大正15年	秋の部	菊の花耀くばかり酒微醺	菊	植物
9900	大正15年	秋の部	酒壺のあたり紅葉の二三片	紅葉	植物
9901	大正15年	秋の部	したみつくす瓢の酒や紅葉寒	紅葉	植物
9902	大正15年	秋の部	荒がねの毒と流るゝ紅葉哉	紅葉	植物
9903	大正15年	秋の部	紅葉折りて心晩帰を急ぎけり	紅葉	植物
10109	昭和２年	秋の部	はらからの迎火に袖飜へす	迎火	人事
10110	昭和２年	秋の部	送火のかたばかり紵がら白々と	送火	人事
10111	昭和２年	秋の部	迎火や灯篭已にともりゐる	迎火	人事
10112	昭和２年	秋の部	送火や門辺の塵の露じめり	送火	人事
10113	昭和２年	秋の部	送火や潮の八百路の磯の宿	送火	人事
10114	昭和２年	秋の部	迎火や尚ひぐらしの一しきり	迎火	人事
10115	昭和２年	秋の部	樹欝蒼送火の烟消えにつゝ	送火	人事
10117	昭和２年	秋の部	客あり跋渉し來る今朝の秋	今朝の秋	時候
10118	昭和２年	秋の部	夜の蝉しば／＼鳴くも寂しからむ	蝉	動物
10119	昭和２年	秋の部	君ありとなどか知るべき虫の聲	蟲	動物
10120	昭和２年	秋の部	只是の如し夕餐と蜩と	蜩	動物
10121	昭和２年	秋の部	夕を咲く花に行く／＼里清水	清水	地理
10122	昭和２年	秋の部	遠き母に文かく野分吹やまず	野分	天文
10123	昭和２年	秋の部	朝皃の咲きあへず野分吹つのる	野分	天文
10124	昭和２年	秋の部	野分吹て瀧道とざす草の丈	野分	天文
10125	昭和２年	秋の部	尚鳴くよ野分の底の虫一ツ	蟲	動物
10126	昭和２年	秋の部	関守に片われ月や野分ふく	野分	天文
10127	昭和２年	秋の部	雲折々山の瘤掃く野分哉	野分	天文
10128	昭和２年	秋の部	山畑や野分にたへて小百姓	野分	天文
10129	昭和２年	秋の部	母に文す野分の灯明らけく	野分	天文
10130	昭和２年	秋の部	名月の雲の黒さよ明るさよ	名月	天文
10131	昭和２年	秋の部	月今宵雲の深さを欄に倚る	月	天文
10132	昭和２年	秋の部	獨居を荒野の思月の雲	月	天文
10134	昭和２年	秋の部	紙魚はたきつくさず已に獺祭忌	子規忌	人事
10135	昭和２年	秋の部	秋といふたましひ木の実草の花	雑	雑
10136	昭和２年	秋の部	日に三たび絲瓜の老を省る	糸瓜	植物
10137	昭和２年	秋の部	山寺ハ蓮の青さに書を曝す	蟲干	人事
10138	昭和２年	秋の部	鯊釣の子等を停めて事問ひぬ	鯊釣	人事
10139	昭和２年	秋の部	鯊釣の子等にまじりて徑ゆく	鯊釣	人事
10141	昭和２年	秋の部	大木とならん相やつゆしぐれ	露しぐれ	天文
10143	昭和２年	秋の部	廬淺く秋風吹かぬ隈もなし	秋の風	天文

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10144	昭和２年	秋の部	草の花木の實秋てふ魂か	雑	雑
10146	昭和２年	秋の部	一峰を前に後へに木子狩	茸狩	人事
10147	昭和２年	秋の部	籃の中木子乏しみ蜻蛉とぶ	茸	植物
10148	昭和２年	秋の部	遠く來つる海辺の人よ木子狩	茸狩	人事
10149	昭和２年	秋の部	雑茸の群がり起る端山哉	茸	植物
10150	昭和２年	秋の部	茸狩やさ霧に起きて朝餉	茸狩	人事
10151	昭和２年	秋の部	茸もなき芒の岡に上りけり	茸	植物
10152	昭和２年	秋の部	白魚を膾に花野遊哉	花野	地理
10153	昭和２年	秋の部	大海の魚を膾や花野酒	花野	地理
10154	昭和２年	秋の部	家につとに秋野の花や晴三里	花野	地理
10155	昭和２年	秋の部	水澄めるあたり菌老にけり	茸	植物
10156	昭和２年	秋の部	茸狩に疲れし夢や松青き	茸狩	人事
10157	昭和２年	秋の部	茸狩の頭挙ぐれバ雲赤し	茸狩	人事
10158	昭和２年	秋の部	山果幾たび落つる夜長哉	夜長	時候
10159	昭和２年	秋の部	山寺や夜長に起きて栗鼡を追ふ	夜長	時候
10160	昭和２年	秋の部	長き夜のつもりて鬢の白さ哉	夜長	時候
10161	昭和２年	秋の部	古柳長々し夜を垂にけり	夜長	時候
10162	昭和２年	秋の部	反故ちるに夜長の膝を容にけり	夜長	時候
10473	昭和３年	秋の部	蓮咲くや松ハ懶き朝まだき	蓮	植物
10475	昭和３年	秋の部	背水の勢に在る案山子哉	案山子	人事
10477	昭和３年	秋の部	誰が畫より抜出でし萩食み足らず	萩	植物
10479	昭和３年	秋の部	鮎川の石に馬蹄を轟かす	鮎	動物
10480	昭和３年	秋の部	鮎狩のかたらひすなり石の上	鮎釣	人事
10481	昭和３年	秋の部	鮎の知る水のまさりや峡一雨	鮎	動物
10482	昭和３年	秋の部	鮎を釣る故人の面や上つ瀬に	鮎釣	人事
10483	昭和３年	秋の部	君を訪へば年魚の瀬音の高まさる	鮎	動物
10484	昭和３年	秋の部	串削る年魚の七瀬の主ぶり	鮎	動物
10485	昭和３年	秋の部	魚肥えぬ萩の下つゆ繁きより	萩	植物
10486	昭和３年	秋の部	きり岸の芒の影や魚走る	芒	植物
10488	昭和３年	秋の部	吾馬の墓辺秋草食まんとす	秋の草	植物
10490	昭和３年	秋の部	墨の痕と泉の聲と今朝の秋	今朝の秋	時候
10492	昭和３年	秋の部	月日知らぬ岩に青蔦からみけり	青蔦	植物
10493	昭和３年	秋の部	天の川注がむ岩門開けたり	天の川	天文
10495	昭和３年	秋の部	芒原に道片寄りし花野哉	花野	地理
10496	昭和３年	秋の部	思ひあがり雀も飛べる花野哉	花野	地理
10497	昭和３年	秋の部	尚白し花野に曬す馬の骨	花野	地理
10498	昭和３年	秋の部	花野行く耳にきのふの峡の聲	花野	地理
10499	昭和３年	秋の部	ぬか星の幾つこぼれし花野哉	花野	地理
10501	昭和３年	秋の部	胸打さはぎ葛吹く風止まず	葛	植物
10503	昭和３年	秋の部	聞説伽藍の内外秋の風	秋の風	天文
10505	昭和３年	秋の部	虫の音を文にもつゞれ旅せめて	蟲	動物
10506	昭和３年	秋の部	むし各常の夜の如鳴にけり	蟲	動物
10507	昭和３年	秋の部	鳴く虫を愛ずるに蛙こわ高な	蟲	動物
10508	昭和３年	秋の部	天と高く地と低しや蟲の聲	蟲	動物
10596	不　　詳	秋の部	山中の秋意や故人勘破の言	秋意	人事
10598	不　　詳	秋の部	先たゝず遅れじとすや茸取り	茸	植物
10599	不　　詳	秋の部	蟲鳴けば蟲聞く人に蛙かな	蟲	動物
10600	不　　詳	秋の部	雲の峯消えて蟲鳴く野となりぬ	蟲	動物

秋の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10601	不　　詳	秋の部	雲間月あり蟲鳴きやまず	蟲	動物
10607	不　　詳	秋の部	よそほひや萩を見に出る女づれ	萩	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
184	明治27年	冬の部	小春日の竿に並べる雀かな	小春	時候
185	明治27年	冬の部	月に吠ゆる犬や十夜の人帰る	十夜	人事
186	明治27年	冬の部	夕しぐれ佐野のわたりを古法師	時雨	天文
187	明治27年	冬の部	箱根越えて灯ともす村のしぐれける	時雨	天文
188	明治27年	冬の部	落潮のいさり火遠くしぐれけり	時雨	天文
189	明治27年	冬の部	船千艘しぐれて暮るゝ港かな	時雨	天文
190	明治27年	冬の部	大方はしくれて衛士の篝かな	時雨	天文
191	明治27年	冬の部	木枯の海山暮れて静かなり	凩	天文
192	明治27年	冬の部	鶏なくや霜の晨の村外れ	霜	天文
193	明治27年	冬の部	霜白し十萬軒の鬼瓦	霜	天文
194	明治27年	冬の部	霜の夜の狐鳴くなり多賀の城	霜	天文
195	明治27年	冬の部	霜白し上人帰る嵯峨の奥	霜	天文
196	明治27年	冬の部	霜の荒野灯残る村のつゞきける	霜	天文
197	明治27年	冬の部	霜きら／＼朝賀の車つゞきける	霜	天文
198	明治27年	冬の部	月きら／＼龍湖の氷音もなし	氷	天文
199	明治27年	冬の部	すさましや氷さけたる外がはま	氷	天文
200	明治27年	冬の部	谷底に猪死で氷りける	氷	天文
201	明治27年	冬の部	雪折れの竹の大藪すさまじや	雪折れ	植物
202	明治27年	冬の部	雪の夜を月下の駒の見えずなり	雪	天文
203	明治27年	冬の部	上苑に鶴なく霜のあしたかな	霜	天文
204	明治27年	冬の部	雪の夜や峰を隔てゝ人の声	雪	天文
205	明治27年	冬の部	一山の木魚絶えたり夜の雪	雪	天文
206	明治27年	冬の部	あけぼのや雪の松原馬じるし	雪	天文
207	明治27年	冬の部	冬籠密柑の皮の散らばりぬ	冬籠	人事
208	明治27年	冬の部	冬籠麓の村の鶏の声	冬籠	人事
209	明治27年	冬の部	東路に尼ひとり泣く炬燵かな	炬燵	人事
210	明治27年	冬の部	京の人の文かいてゐる炬燵かな	炬燵	人事
211	明治27年	冬の部	老僧の火桶抱へて眠りける	火桶	人事
212	明治27年	冬の部	吾妹子の袖口赤き火桶かな	火桶	人事
213	明治27年	冬の部	炭がまや昔ながらの八瀬の奥	炭がま	人事
214	明治27年	冬の部	侍の臑あらはなる蒲團かな	蒲團	人事
215	明治27年	冬の部	紙衣着て京に歌よむ男あり	紙衣	人事
217	明治27年	冬の部	頭巾脱いて萬歳謠ふ翁かな	頭巾	人事
218	明治27年	冬の部	旗竿の一段高し冬木立	冬木	植物
219	明治27年	冬の部	うつくしや枯木の中の日の御旗	枯木	植物
220	明治27年	冬の部	裏町や干菜の軒の日のみ旗	干菜	人事
221	明治27年	冬の部	井戸端の大根白き寒さかな	寒さ	時候
222	明治27年	冬の部	角灯の谷中を通る寒さかな	寒さ	時候
223	明治27年	冬の部	竹搖れて湖上の星の寒さかな	寒さ	時候
224	明治27年	冬の部	霜やけの手を并べたる寺子哉	霜焼	人事
225	明治27年	冬の部	狼の水にかゞむや冬の月	冬の月	天文
226	明治27年	冬の部	冬の月鳥居をくゞる狂女哉	冬の月	天文
227	明治27年	冬の部	大比叡の雲脚はやし冬の月	冬の月	天文
228	明治27年	冬の部	車去て都大路の月さむし	寒月	天文
229	明治27年	冬の部	殿前の羽林の鋒や冬の月	冬の月	天文
230	明治27年	冬の部	寒月の廊下を通る局かな	寒月	天文
231	明治27年	冬の部	月さむし御講の堤牛車	寒月	天文
232	明治27年	冬の部	冬されの畑に出でたり狐の子	冬ざれ	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
233	明治27年	冬の部	破巣の梢に高し冬の山	冬山	天文
234	明治27年	冬の部	鳥の糞巖に白し冬の山	冬山	天文
235	明治27年	冬の部	順礼の母に追ひつく枯野哉	枯野	天文
236	明治27年	冬の部	落葉して筧の音の細りゆく	落葉	植物
237	明治27年	冬の部	鐘楼の瓦古りにたり冬木立	冬木	植物
238	明治27年	冬の部	僧入定山茶花一枝こぼれける	山茶花	植物
239	明治27年	冬の部	山茶花のほろ／＼と散る伽籃かな	山茶花	植物
240	明治27年	冬の部	むさし野の尾花枯れたり月われたり	枯芒	植物
241	明治27年	冬の部	尾花枯れて月落る野の果もなし	枯芒	植物
242	明治27年	冬の部	舟去て古渡の枯芦暮れにける	枯蘆	植物
243	明治27年	冬の部	草枯れて土手の夕日の力なし	草枯	植物
244	明治27年	冬の部	からかきの縁に散らばる苫屋哉	蛎	動物
245	明治27年	冬の部	月更けて水鳥もなし加茂川原	水鳥	動物
246	明治27年	冬の部	漣や岩に寄來るをし二ツ	鴛鴦	動物
247	明治27年	冬の部	旭さすや鴛鴦眠る石の上	鴛鴦	動物
248	明治27年	冬の部	なく千鳥傾城伽羅をたく夕	千鳥	動物
249	明治27年	冬の部	餅蜜柑吹革祭の棚黒し	吹革祭	人事
250	明治27年	冬の部	火起して吹革祭の袴かな	吹革祭	人事
251	明治27年	冬の部	行列や東海道の枯柳	枯柳	植物
252	明治27年	冬の部	大師講背戸に女の声すなり	大師講	人事
253	明治27年	冬の部	風呂吹に一山の僧居並べり	風呂吹	人事
254	明治27年	冬の部	河豚汁や机の上の普門品	河豚汁	人事
255	明治27年	冬の部	河豚汁飽くまで喰ふ女かな	河豚汁	人事
256	明治27年	冬の部	経よむや河豚喰ふたる皃もあり	河豚	動物
257	明治27年	冬の部	入る月の沖に汐吹く鯨かな	鯨	動物
258	明治27年	冬の部	大鷹の明星睨む梢かな	鷹	動物
259	明治27年	冬の部	古暦木賃の宿に残りけり	古暦	人事
260	明治27年	冬の部	赤鬚の市に出でたり年のくれ	年の暮	時候
261	明治27年	冬の部	行年を尼ひとり泣く関の宿	行年	時候
262	明治27年	冬の部	宿かりて煤掃く旅の法師かな	煤拂	人事
263	明治27年	冬の部	痩犬の何をあさるぞ冬の村	冬	時候
265	明治27年	冬の部	死馬を引出す冬の小村かな	冬	時候
266	明治27年	冬の部	煤掃に馬引出す小家かな	煤拂	人事
267	明治27年	冬の部	行年の馬士のさげたる何魚ぞ	行年	時候
400	明治28年	冬の部	散紅葉筧斜に水細し	散紅葉	植物
401	明治28年	冬の部	水青うして両岸の紅葉散る	散紅葉	植物
402	明治28年	冬の部	凩の終日土手を打て鳴る	凩	天文
403	明治28年	冬の部	凩や湖上の星のきらめきぬ	凩	天文
404	明治28年	冬の部	狐火のしぐれ／＼て消ゆるなり	狐火	天文
405	明治28年	冬の部	垣朽ちて我紙衾あらはなる	衾	人事
406	明治28年	冬の部	頭巾もて塞いでも見たり壁の穴	頭巾	人事
407	明治28年	冬の部	宮柱太敷立て神の留主	神の旅	人事
408	明治28年	冬の部	古沓や又古沓や霜の朝	霜	天文
409	明治28年	冬の部	きら／＼と小春の杉の梢かな	小春	時候
411	明治28年	冬の部	君がため名所旧跡時雨せん	時雨	天文
413	明治28年	冬の部	羅漢達されども寒き夜をいかむ	寒さ	時候
414	明治28年	冬の部	小夜時雨そこ行く人や誰候	時雨	天文
415	明治28年	冬の部	羽をり／＼鴨の羽たゝく音すなり	鴨	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
416	明治28年	冬の部	寒月を漕ぎ帰るなり渡守	寒月	天文
417	明治28年	冬の部	初冬の取敢へず酒を買ひにけり	初冬	時候
418	明治28年	冬の部	寺子らが手を並べたる火桶かな	火桶	人事
419	明治28年	冬の部	落葉さら／＼僧は叩く月下の門	落葉	植物
420	明治28年	冬の部	夕風や伽藍の落葉吹きまくる	落葉	植物
421	明治28年	冬の部	石壇の落葉ふみ／＼僧かへる	落葉	植物
422	明治28年	冬の部	君見よや簀の子の落葉朽ちもせん	落葉	植物
423	明治28年	冬の部	枯蔓の梢より吹落されぬ	枯蔓	植物
424	明治28年	冬の部	哀れ菊枯れたる中の花一ツ	枯菊	植物
425	明治28年	冬の部	達磨忌や塞いで見たる壁の穴	達磨忌	人事
426	明治28年	冬の部	達磨忌や夜更けてはらり壁の土	達磨忌	人事
427	明治28年	冬の部	冬枯や厠の屋根の鳥の糞	冬枯	植物
428	明治28年	冬の部	鉢叩轉べばひさご碎けなん	鉢叩	人事
429	明治28年	冬の部	鉢叩七十八と答へけり	鉢叩	人事
430	明治28年	冬の部	鉢叩たゝかで帰る時悲し	鉢叩	人事
431	明治28年	冬の部	そこ退けよ罷出でたり鉢叩	鉢叩	人事
432	明治28年	冬の部	更くる夜の瓦をすべる落葉かな	落葉	植物
433	明治28年	冬の部	つくねんと雑魚寝にもるゝ一人かな	雑魚寝	人事
434	明治28年	冬の部	あちら向きこちら向くなり年こもり	年籠	人事
435	明治28年	冬の部	年守夜せう事なしのともしかな	年籠	人事
436	明治28年	冬の部	大年の乳児這上る俵かな	大晦日	時候
437	明治28年	冬の部	人の家のいさかひやみて除夜の雨	除夜	時候
438	明治28年	冬の部	大晦日小判落した人の行く	大晦日	時候
439	明治28年	冬の部	小晦日いさゝか掃きぬ門の雪	小晦日	時候
440	明治28年	冬の部	春近き芥の上の芥かな	春近し	時候
441	明治28年	冬の部	寺男汝も春待つか立てゐる	春待	時候
442	明治28年	冬の部	油尽きて火消えて年流れたり	行年	時候
443	明治28年	冬の部	力なく年の梢を入る日かな	年の暮	時候
444	明治28年	冬の部	我年は下の五文字の名残かな	年の名残	時候
445	明治28年	冬の部	年一ト夜いさゝか惜しき思あり	除夜	時候
446	明治28年	冬の部	行年をうなる文よむ隣かな	行年	時候
447	明治28年	冬の部	年の暮偶々鳥が飛んでゆく	年の暮	時候
448	明治28年	冬の部	掛取に狩野の一軸を説き明かす	掛乞	人事
449	明治28年	冬の部	二三人侍衆の年わすれ	年忘	人事
450	明治28年	冬の部	二三人何を語りて年忘	年忘	人事
451	明治28年	冬の部	面白や權兵衛が宿の宵飾	門松立つ	人事
453	明治28年	冬の部	折しも時雨盗人何処を駆拔くらむ	時雨	天文
871	明治29年	冬の部	大根の引残されて拔出でたり	大根	植物
872	明治29年	冬の部	骨鳴るべく木枯の不動立ってゐる	凩	天文
873	明治29年	冬の部	凩の海を渡りて靺鞨へ	凩	天文
874	明治29年	冬の部	雲黄なり江北一帶冬枯れつ	冬枯	植物
875	明治29年	冬の部	行くこと十歩にして野は枯れ天空し	枯野	天文
876	明治29年	冬の部	枯野行き尽くる處のほとり海を見る	枯野	天文
877	明治29年	冬の部	氷月夜天未黒き北氷洋	氷	天文
878	明治29年	冬の部	人も居らず鉢植の菊枯れてあり	枯菊	植物
879	明治29年	冬の部	縁先や根こぎにしたる菊枯れつ	枯菊	植物
880	明治29年	冬の部	掃溜や枯れたる中の菊の葉青み	枯菊	植物
881	明治29年	冬の部	枯菊の半刈られて半あり	枯菊	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
882	明治29年	冬の部	病む菊の此夕暮を枯れにける	枯菊	植物
883	明治29年	冬の部	菊枯れて荷馬引込む畑かな	枯菊	植物
884	明治29年	冬の部	畑中や菊二三本枯れて立つ	枯菊	植物
885	明治29年	冬の部	墓原菊も何も枯れて夕嵐	枯菊	植物
886	明治29年	冬の部	枯れたるをばたばねあげたり菊畑	枯菊	植物
887	明治29年	冬の部	菊枯れて下駄痕多き畑かな	枯菊	植物
888	明治29年	冬の部	一束の枯れし菊たゝよふ野川かな	枯菊	植物
889	明治29年	冬の部	墓守の枯菊を焚くべく積上げつ	枯菊	植物
890	明治29年	冬の部	原中に人を賣るなり冬の月	冬の月	天文
891	明治29年	冬の部	冬枯の城南は半ば城北は皆	冬枯	植物
892	明治29年	冬の部	凩や折れて飛散る桑の枝	凩	天文
893	明治29年	冬の部	畑中や桑冬枯れて風白く	冬枯	植物
894	明治29年	冬の部	凩の山川蒼々茫々と	凩	天文
895	明治29年	冬の部	葬かあらぬか白旗ばかり枯野くる	枯野	天文
896	明治29年	冬の部	家五六を北に見て行く枯野かな	枯野	天文
897	明治29年	冬の部	里あり家五六にして更に枯野かな	枯野	天文
898	明治29年	冬の部	握飯喰て疝氣起すべく野は枯れぬ	枯野	天文
899	明治29年	冬の部	野は枯れて小さき赤い鳥居見えつ	枯野	天文
900	明治29年	冬の部	物も云はで枯野を通る主從かな	枯野	天文
901	明治29年	冬の部	ところ〳〵石ころ高き枯野かな	枯野	天文
902	明治29年	冬の部	枯野ゆけば真紅の紐の落ちてあり	枯野	天文
903	明治29年	冬の部	鶏の畔傳ひ行く小春かな	小春	時候
904	明治29年	冬の部	小春日や網干してある磯つづき	小春	時候
905	明治29年	冬の部	しぐるゝや鴉がとまる澪標	時雨	天文
906	明治29年	冬の部	汨羅あたり三閭の太夫しぐれける	時雨	天文
907	明治29年	冬の部	谷底の灯火一つしぐれける	時雨	天文
908	明治29年	冬の部	霜の陣此の夜周瑜死すと傳ふ	霜	天文
909	明治29年	冬の部	詔を階下に受くる霜夜かな	霜夜	時候
910	明治29年	冬の部	満天の雪に楚江を渡るかな	雪	天文
911	明治29年	冬の部	呉か越か雪の曙島も見えず	雪	天文
912	明治29年	冬の部	駅路や雪のあけぼの鈴の音	雪	天文
913	明治29年	冬の部	雪のあした紫の上光る君	雪	天文
914	明治29年	冬の部	天幕に李陵泣くなり冬の月	冬の月	天文
915	明治29年	冬の部	曉に匈奴出でたり雪の丘	雪	天文
916	明治29年	冬の部	営に火して單于逃げたり冬の月	冬の月	天文
917	明治29年	冬の部	寒月に将士皆泣く遺詔かな	寒月	天文
918	明治29年	冬の部	切支丹のがらすの窓や冬の月	冬の月	天文
919	明治29年	冬の部	寒月の大鋸や木挽小屋	寒月	天文
920	明治29年	冬の部	寒月の首桶并ぶ野陣かな	寒月	天文
921	明治29年	冬の部	牢内の錠音高き寒さかな	寒さ	時候
922	明治29年	冬の部	首枷に流罪の人の寒さかな	寒さ	時候
923	明治29年	冬の部	首桶の首のがたつく寒さかな	寒さ	時候
924	明治29年	冬の部	鐘樓古く一山の木葉落尽す	落葉	植物
925	明治29年	冬の部	落葉の白帝城上鴉啼く	落葉	植物
926	明治29年	冬の部	木枯や呉江に艤する三千艘	凩	天文
927	明治29年	冬の部	枯芦や石碣村の家五六	枯蘆	植物
928	明治29年	冬の部	一村は干菜つる軒日午なり	干菜	人事
929	明治29年	冬の部	苞に居てなまこ何をか夢むらん	海鼠	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
930	明治29年	冬の部	東の方海に入てなまこを見たりける	海鼠	動物
931	明治29年	冬の部	覇業未だ成らずなまこに恨あり	海鼠	動物
932	明治29年	冬の部	なまことは王者の道かそも覇者か	海鼠	動物
933	明治29年	冬の部	曉天に納豆打つなり媼が茶屋	納豆	人事
934	明治29年	冬の部	榾の火や木曽の冠者の幼き	榾	人事
935	明治29年	冬の部	榾の火に六鞉をよむ男かな	榾	人事
936	明治29年	冬の部	榾の火や南朝の遺臣姓は和田	榾	人事
937	明治29年	冬の部	板額の何やら縫へる榾火かな	榾	人事
938	明治29年	冬の部	炭ついでしばしもくねんとしたりける	炭	人事
939	明治29年	冬の部	はり／＼と何やらはねる炭火かな	炭	人事
940	明治29年	冬の部	薄衾かぶりつ／＼苦吟かな	衾	人事
941	明治29年	冬の部	足が出て詮方もなきふとんかな	蒲團	人事
942	明治29年	冬の部	物思ひ居ればたんぽのさめやすき	湯たんぽ	人事
943	明治29年	冬の部	一人寝てたんぽさめたる夜半かな	湯たんぽ	人事
944	明治29年	冬の部	俳諧や炬燵もなくて二人ゐる	炬燵	人事
945	明治29年	冬の部	あるは詩書あるは礼樂冬籠	冬籠	人事
946	明治29年	冬の部	更くる夜の裾野のあたり里かぐら	神樂	人事
947	明治29年	冬の部	鉢叩とは謠曲の名なるべく	鉢叩	人事
948	明治29年	冬の部	雪丸げ二つに割れし恨かな	雪遊び	人事
949	明治29年	冬の部	起きて見ればひとり月下の雪佛	雪達磨	人事
950	明治29年	冬の部	後向いて入定したり雪佛	雪達磨	人事
951	明治29年	冬の部	雪佛に簑笠きせて笑ひける	雪達磨	人事
952	明治29年	冬の部	案山子にも似て哀れなり雪佛	雪達磨	人事
953	明治29年	冬の部	胡兒驕る塞上塞下の吹雪かな	吹雪	天文
954	明治29年	冬の部	士卒五千匈奴に降る吹雪哉	吹雪	天文
955	明治29年	冬の部	勅をきいて一軍振ふあられかな	霰	天文
956	明治29年	冬の部	早打の輿に打込む霰かな	霰	天文
957	明治29年	冬の部	德利もてば霰はね返る野道かな	霰	天文
958	明治29年	冬の部	江を渡り中流にして霰かな	霰	天文
959	明治29年	冬の部	瀧壺に氷柱見上るあしたかな	垂氷	天文
960	明治29年	冬の部	尼若くつらゝを折て棄てにける	垂氷	天文
961	明治29年	冬の部	染物の紫も朱もつらゝかな	垂氷	天文
962	明治29年	冬の部	有明や田毎／＼のうす氷	薄氷	地理
963	明治29年	冬の部	紅といた皿の中なる氷かな	氷	天文
964	明治29年	冬の部	薄氷に紅こぼしたる女かな	薄氷	地理
965	明治29年	冬の部	張りつめし氷の中の巖かな	氷	天文
966	明治29年	冬の部	鷹の子や越の海岸岩多き	鷹	動物
967	明治29年	冬の部	たか狩や日暮れて帰る左賢王	鷹狩	人事
968	明治29年	冬の部	乾坤は正に五更の氷かな	氷	天文
969	明治29年	冬の部	君に侑む世に乾鮭もまた風流	乾鮭	人事
970	明治29年	冬の部	よき人の笑ませ給ふや藥くひ	藥喰	人事
971	明治29年	冬の部	藥喰頻りに客にすゝめける	藥喰	人事
972	明治29年	冬の部	藥喰を見てゐる妻の美くしき	藥喰	人事
973	明治29年	冬の部	藥喰すべく火を焚く古廟かな	藥喰	人事
974	明治29年	冬の部	藥には狸なんどもよかるべく	狸	動物
975	明治29年	冬の部	狸なんど下司の喰ふべきものなるぞ	狸	動物
976	明治29年	冬の部	藥喰ひて大の字に寐たる男哉	藥喰	人事
977	明治29年	冬の部	麾下の士が公の愛馬を藥喰ひ	藥喰	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
978	明治29年	冬の部	藥喰ふて鍋かぶりたる法師かな	藥喰	人事
979	明治29年	冬の部	あかゞりに墨つけて見る寺子かな	皸	人事
980	明治29年	冬の部	水鼻やひとり遺文をよむ灯下	水鼻	人事
981	明治29年	冬の部	雪沓や幼きものは主なるべく	雪沓	人事
982	明治29年	冬の部	驀直に雪車乗下ろす谷間哉	雪舟	人事
983	明治29年	冬の部	師走八日雪ふれば寒き日なりける	師走	時候
984	明治29年	冬の部	寒垢離や入れずみしたる大男	寒垢離	人事
985	明治29年	冬の部	月西へ寒念佛の鉦遠くなり	寒念佛	人事
986	明治29年	冬の部	あれ聞けよ宿るべき村の寒念佛	寒念佛	人事
987	明治29年	冬の部	肉さげて魯智深なるべく寒ね佛	寒念佛	人事
988	明治29年	冬の部	豆打て何やら唱ふひとりもの	豆まき	人事
989	明治29年	冬の部	煤掃かんと大黒抱く男かな	煤拂	人事
990	明治29年	冬の部	掃けど／＼不動御像煤びたる	煤拂	人事
991	明治29年	冬の部	せんなしや乳児這出づる煤掃ひ	煤拂	人事
992	明治29年	冬の部	煤掃に軍歌を唱ふ隣の子	煤拂	人事
993	明治29年	冬の部	煤掃に如來の腕の欠けが出る	煤拂	人事
994	明治29年	冬の部	京の六右ェ門殿とやら節季候	節季	時候
995	明治29年	冬の部	此あたりに隠れもない節季候にて候	節季	時候
996	明治29年	冬の部	年の市に俎板叩く男かな	年の市	人事
997	明治29年	冬の部	立て話す京の男や年の市	年の市	人事
998	明治29年	冬の部	うき人の古暦見て居たりける	古暦	人事
999	明治29年	冬の部	寄合ふて年忘する木賃かな	年忘	人事
1000	明治29年	冬の部	鶏啼いて師走とも見えぬ小村かな	師走	時候
1001	明治29年	冬の部	二三疋師走の村の犬吠えぬ	師走	時候
1002	明治29年	冬の部	年の暮劉備筵を織て居る	年の暮	時候
1003	明治29年	冬の部	行年に何の書をよむ子房ぞも	行年	時候
1004	明治29年	冬の部	狐落す咒文高らかに年の暮	年の暮	時候
1005	明治29年	冬の部	臘八や里に啼く日は里鴉	臘八	人事
1006	明治29年	冬の部	餅の村にわが宿るべき村もなし	餅	人事
10650	明治29年	冬の部	鉢植の菊枯れて縁にころがりぬ	菊枯れ	植物
1627	明治30年	冬の部	湯婆温めて母にまゐらす看護哉	湯たんぽ	人事
1628	明治30年	冬の部	蒲團重くしはぶき苦し夜中頃	蒲團	人事
1629	明治30年	冬の部	藥より更に湯婆を愛すかな	湯たんぽ	人事
1630	明治30年	冬の部	病む母に配られし衣見せ申す	衣配	人事
1631	明治30年	冬の部	市に住んで医者に閑あり年の暮	年の暮	時候
1632	明治30年	冬の部	一村に疫あり餅の音もなし	餅	人事
1633	明治30年	冬の部	雑魚寐して風を引いたる男かな	雑魚寝	人事
1634	明治30年	冬の部	煤掃にはき出されたる病者かな	煤拂	人事
1635	明治30年	冬の部	仇は獲ず従者は病みぬ年のくれ	年の暮	時候
1636	明治30年	冬の部	神の留守病を呪ふすべをなみ	神の旅	人事
1637	明治30年	冬の部	我に疝氣炉を開くこと早かりし	爐開	人事
1638	明治30年	冬の部	時雨小集あるじの病を慰めつ	時雨	天文
1639	明治30年	冬の部	遂に起たず夜半凩遠く鳴る	凩	天文
1640	明治30年	冬の部	病癒えて未だ枯れざる菊を見る	菊	植物
1641	明治30年	冬の部	山茶花や年若き僧心をやむ	山茶花	植物
1642	明治30年	冬の部	寒に中り越路に逗留すと文す	寒さ	時候
1643	明治30年	冬の部	二人まで疫に死したり年のくれ	年の暮	時候
1644	明治30年	冬の部	湯治場に冬篭しつ京の人	冬籠	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1645	明治30年	冬の部	霜の陣夜もすがら金創の痛み哉	霜	天文
1646	明治30年	冬の部	風呂吹に病みたる僧の列なりし	風呂吹	人事
1647	明治30年	冬の部	只納豆汁の温きが藥なり	納豆汁	人事
1648	明治30年	冬の部	千鳥きく我に戀あり病あり	千鳥	動物
1649	明治30年	冬の部	戀に病める海鼠もあらむ苞の中	海鼠	動物
1650	明治30年	冬の部	疫の家に豆打つ声の聞ゆなり	豆まき	人事
1651	明治30年	冬の部	ひとりものゝ病むで四五人年ごもり	年籠	人事
1652	明治30年	冬の部	旅に病むで暦の末を恨むかな	古暦	人事
1653	明治30年	冬の部	懸乞の骨折きたる群集かな	掛乞	人事
1654	明治30年	冬の部	凩に金創の藥を賣ってゐる	凩	天文
1655	明治30年	冬の部	病床に冬の夕日のすこしさす	冬	時候
1656	明治30年	冬の部	病院の窓に物干す小春哉	小春	時候
1657	明治30年	冬の部	小盗人の病むで粥喰ふ榾火かな	榾	人事
1658	明治30年	冬の部	捕はれて盗の婦となりつ藥喰	藥喰	人事
1659	明治30年	冬の部	玄関に火鉢を遠み藥取	火鉢	人事
1660	明治30年	冬の部	急病や十夜の戻りさはがしき	十夜	人事
1661	明治30年	冬の部	外科室に器械并べる寒さ哉	寒さ	時候
1662	明治30年	冬の部	藥喰すべく約成る木賃かな	藥喰	人事
1663	明治30年	冬の部	傷寒を醫者の爭ふ師走哉	師走	時候
1665	明治30年	冬の部	一家中足袋はくことを許されず	足袋	人事
1666	明治30年	冬の部	草庵や時雨吹込む翁の像	時雨	天文
1668	明治30年	冬の部	朝の程西にたまりし落葉哉	落葉	植物
1669	明治30年	冬の部	崕下に落葉吹込む薄暗し	落葉	植物
1670	明治30年	冬の部	曉に落葉の森を流人かな	落葉	植物
1671	明治30年	冬の部	暮れんとして落葉が岡の風急なり	落葉	植物
1672	明治30年	冬の部	庭前の落葉を掃くや翁ぶり	落葉	植物
1673	明治30年	冬の部	松原に何の落葉か吹たまる	落葉	植物
1674	明治30年	冬の部	落葉踏んで行けば頻りに猿が鳴く	落葉	植物
1675	明治30年	冬の部	草鞋軽々落葉が上を踏み心	落葉	植物
1676	明治30年	冬の部	林中の落葉をふんで夜帰る	落葉	植物
1677	明治30年	冬の部	主從の落葉焚きつくる知らぬ山	落葉	植物
1679	明治30年	冬の部	正面の坐ふとんばかり明いてゐる	蒲團	人事
1680	明治30年	冬の部	一枚のふとんかぶりし二人かな	蒲團	人事
1681	明治30年	冬の部	贈られし蒲團絹にして薄かりし	蒲團	人事
1682	明治30年	冬の部	温くもりの少し残りしふとん哉	蒲團	人事
1683	明治30年	冬の部	唐艸のふとん積上げし車かな	蒲團	人事
1684	明治30年	冬の部	かつぎ入るゝ蒲團にせまき戸口かな	蒲團	人事
1685	明治30年	冬の部	ふとん足らず其角坐に入る胡坐かな	蒲團	人事
1686	明治30年	冬の部	ふとん着てしばしが程はうずくまる	蒲團	人事
1687	明治30年	冬の部	一人寐てふとん廣きを愛すかな	蒲團	人事
1688	明治30年	冬の部	拔け出でしふとんの穴に再びす	蒲團	人事
1689	明治30年	冬の部	買はまくす蒲團の幅のやゝせまき	蒲團	人事
1690	明治30年	冬の部	他国人と年忘する湯治かな	年忘	人事
1692	明治30年	冬の部	石壇の下にたまりし落葉かな	落葉	植物
1693	明治30年	冬の部	人も來ず落葉たまりし低き縁	落葉	植物
1694	明治30年	冬の部	落葉かく弥宜が娘の年ふけし	落葉	植物
1695	明治30年	冬の部	岡の上に落葉焚き居る畑かな	落葉	植物
1696	明治30年	冬の部	うす黒く水田にたまる落葉かな	落葉	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1697	明治30年	冬の部	いつのまにか何の落葉ともわかぬかな	落葉	植物
1699	明治30年	冬の部	棒鱈の乾さけ妬む愚かかな	雑	雑
1700	明治30年	冬の部	乾鮭にかんてらの烟吹きつける	乾鮭	人事
1701	明治30年	冬の部	仕官してからさけを得つ年のくれ	年の暮	時候
1702	明治30年	冬の部	この師走乾鮭十駄市に入る	師走	時候
1703	明治30年	冬の部	二三子のからさけ割いて夜半亭	乾鮭	人事
1704	明治30年	冬の部	からさけを厨下に割ける素振あり	乾鮭	人事
1705	明治30年	冬の部	俳諧や遂にからさけに酒をおく	乾鮭	人事
1706	明治30年	冬の部	店先の乾鮭に喝す貧道心	乾鮭	人事
1707	明治30年	冬の部	からさけのいとからびたるをめづるかな	乾鮭	人事
1708	明治30年	冬の部	夜遅く乾鮭に飯喰ふ一人かな	乾鮭	人事
1709	明治30年	冬の部	他国にして人からさけをなつかしむ	乾鮭	人事
1710	明治30年	冬の部	村夫子素よりからさけを愛すあり	乾鮭	人事
1712	明治30年	冬の部	乘合の頭巾まぶかき女かな	頭巾	人事
1713	明治30年	冬の部	暗がりをちらと怪しきづきん哉	頭巾	人事
1714	明治30年	冬の部	人に嫁してづきんの色に好みあり	頭巾	人事
1715	明治30年	冬の部	二人立つづきんながらや物語	頭巾	人事
1716	明治30年	冬の部	古びたる頭巾あはれむ白髪哉	頭巾	人事
1717	明治30年	冬の部	只古びたるづきんにして人は亡し	頭巾	人事
1718	明治30年	冬の部	今やうのづきんかぶりし知らぬ人	頭巾	人事
1719	明治30年	冬の部	連立て朝鮮人のづきんかな	頭巾	人事
1720	明治30年	冬の部	給はりしづきんの色のさめもせず	頭巾	人事
1721	明治30年	冬の部	取りはづしづきんあはれぬ故人かな	頭巾	人事
1722	明治30年	冬の部	人老いてづきんことやうなるを着る	頭巾	人事
1723	明治30年	冬の部	相別るゝこと十年づきんなつかしき	頭巾	人事
1724	明治30年	冬の部	さし出でゝづきん見にくき男かな	頭巾	人事
1726	明治30年	冬の部	曽れらしきづきんを着たる人もなし	頭巾	人事
1728	明治30年	冬の部	俤のづきん目につくゆがみかな	頭巾	人事
1730	明治30年	冬の部	あのやうにづきんの曲がむ人なりし	頭巾	人事
1732	明治30年	冬の部	押入に乾さけ藏す易者かな	乾鮭	人事
1733	明治30年	冬の部	髭なきが師走の市に卜を賣る	師走	時候
1734	明治30年	冬の部	かみくらに易者据ゑたる十夜哉	十夜	人事
1735	明治30年	冬の部	行き逢ひし醫者と易者のづきん哉	頭巾	人事
1736	明治30年	冬の部	白鹿を見たり卜者を訪ふ道に	鹿	動物
1737	明治30年	冬の部	醫者卜者日向に對す冬至かな	冬至	時候
1738	明治30年	冬の部	日南す易者が門の帰花	歸り花	植物
1739	明治30年	冬の部	卜を賣る門にあやしき木實哉	木の實	植物
1740	明治30年	冬の部	医卜對坐して冬至の日があたる	冬至	時候
1741	明治30年	冬の部	落葉さッと賣卜先生吹かれ皃	落葉	植物
1742	明治30年	冬の部	今猶在り銀杏落葉して賣卜郎	落葉	植物
1743	明治30年	冬の部	諸木落ちて卜者社頭を去る夕	落葉	植物
1744	明治30年	冬の部	落葉して賣卜の床几移したる	落葉	植物
1745	明治30年	冬の部	賣卜の床几移しゝ小春かな	小春	時候
1746	明治30年	冬の部	卜を賣り居れば銀杏の落葉かな	落葉	植物
1747	明治30年	冬の部	大道や理髪師に隣る賣卜師	雑	雑
1748	明治30年	冬の部	賣卜師を中に銀杏の落葉かな	落葉	植物
1749	明治30年	冬の部	卜して吉鱸釣らんと出でゝ行く	鱸	動物
1750	明治30年	冬の部	行年を貧にして卜吉なりし	行年	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1751	明治30年	冬の部	筮竹に霰落來る社頭かな	霰	天文
1752	明治30年	冬の部	冬枯の卜者小家す土手の下	冬枯	植物
1753	明治30年	冬の部	冬枯や賣卜の旗に日が當る	冬枯	植物
1755	明治30年	冬の部	藥喰到れば少し後れたる	藥喰	人事
1756	明治30年	冬の部	聽法の人さま〳〵に凍えたる	凍る	天文
1757	明治30年	冬の部	狐落ちて銀杏の落葉握り居る	落葉	植物
1758	明治30年	冬の部	梁に狂女笑へり冬の月	冬の月	天文
1760	明治30年	冬の部	冬篭るべくとして南向きなるよ	冬籠	人事
1761	明治30年	冬の部	枯葛の恨みんよしもあらぬ戀	枯葛	植物
1762	明治30年	冬の部	麦蒔くべく日和嬉しき朝出かな	麦蒔	人事
1763	明治30年	冬の部	家に物の古暦なんど申すなき	古暦	人事
1764	明治30年	冬の部	きれ〳〵や冬田をはしる雲の影	冬田	天文
1765	明治30年	冬の部	炭小屋に炭なくて冬の月がさす	雑	雑
1767	明治30年	冬の部	煤掃かんとちょと移したり鉢の梅	煤拂	人事
1768	明治30年	冬の部	煤掃の寒梅庭の彼方かな	煤拂	人事
1769	明治30年	冬の部	煤掃に筵を叩く夫婦かな	煤拂	人事
1770	明治30年	冬の部	憤ふらく煤なんど掃いて何かせん	煤拂	人事
1771	明治30年	冬の部	すゝはきに土器碎き発心す	煤拂	人事
1772	明治30年	冬の部	大黒の煤びたるを掃き奉る	煤拂	人事
1773	明治30年	冬の部	一ト處掃き残したる煤悲し	煤拂	人事
1774	明治30年	冬の部	煤掃に什器こわしゝ婢を罪す	煤拂	人事
1775	明治30年	冬の部	煤掃に嵐吹き込む一トしきり	煤拂	人事
1776	明治30年	冬の部	煤掃やせんすべ知らぬひとりもの	煤拂	人事
1777	明治30年	冬の部	神の子の不具なるはこの海鼡哉	海鼠	動物
1778	明治30年	冬の部	浦の昔海鼡化けたる噺かな	海鼠	動物
1779	明治30年	冬の部	魚河岸に出會ふ他国の海鼡哉	海鼠	動物
1781	明治30年	冬の部	道にして湯婆さめなんこと悲し	湯たんぽ	人事
1782	明治30年	冬の部	おくるべく君に湯婆を温めし	湯たんぽ	人事
1783	明治30年	冬の部	猟犬の面もふらず霰かな	霰	天文
1784	明治30年	冬の部	雪の夜や犬くゝとなく庫裡の方	雪	天文
1785	明治30年	冬の部	猟犬の門守るべく老いしかな	狩	人事
1787	明治30年	冬の部	冬ごもり後ろに近きえぞが嶌	冬籠	人事
1789	明治30年	冬の部	蕪引大根引とは異にして	雑	雑
1791	明治30年	冬の部	梅一枝早きに過きし年の暮	年の暮	時候
1792	明治30年	冬の部	風呂吹の味噌を分つや年忘れ	年忘	人事
1794	明治30年	冬の部	沖の方時に鳴動す年の暮	年の暮	時候
1796	明治30年	冬の部	冨士少し見ゆる嬉しき冬篭	冬籠	人事
1798	明治30年	冬の部	戦さやんでありなれの水朧ろなり	朧	天文
1800	明治30年	冬の部	戀十五十八椰子の月凉し	凉し	時候
1802	明治30年	冬の部	耶蘇の墓に四月の花の赤きかな	四月	時候
1804	明治30年	冬の部	菩提樹下昼寐さめたる男かな	晝寢	人事
1806	明治30年	冬の部	雁をきく萬里長城以北かな	雁	動物
1808	明治30年	冬の部	凩の鐵笛鳴て日は暮れぬ	凩	天文
1810	明治30年	冬の部	鰰と申す魚なり冬籠	冬籠	人事
1846	明治31年	冬の部	寐ぬる頃少し残りし炭火かな	炭	人事
1847	明治31年	冬の部	篭もりて炭の粉少しこぼれける	炭	人事
1848	明治31年	冬の部	炭小屋に吹雪積りし隙間哉	炭	人事
1849	明治31年	冬の部	ぬかるみに炭俵埋む戸口哉	炭俵	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1850	明治31年	冬の部	戸を推せば嵐吹込む炭火哉	炭	人事
1851	明治31年	冬の部	青白く炭小屋燒けし焔かな	炭	人事
1852	明治31年	冬の部	客去て炭火徒らに熾んなる	炭	人事
1853	明治31年	冬の部	日雇の地に炭火して朝寒き	朝寒	時候
1854	明治31年	冬の部	三伏に鉄を鍛ゆる炭火かな	三伏	時候
1855	明治31年	冬の部	炭とりの底はたきけり梅の花	梅	植物
1856	明治31年	冬の部	壇上に咒文荒く壇下に炭火さかん	炭	人事
1857	明治31年	冬の部	燒跡の炭火となりし夜明かな	炭	人事
1858	明治31年	冬の部	活火炉上更に一簀の炭を投ず	炭	人事
1859	明治31年	冬の部	客もなき診断の間の炭火かな	炭	人事
1860	明治31年	冬の部	小屋の前の粉炭に霰散乱す	霰	天文
1861	明治31年	冬の部	掻きまはし掻きまはせども炭火なし	炭	人事
1862	明治31年	冬の部	吹き止めバ次第に消ゆる炭火かな	炭	人事
1863	明治31年	冬の部	それ鷹の虚空をつかむ怒かな	鷹	動物
1864	明治31年	冬の部	王若く鷹を好みてしば／＼す	鷹	動物
1865	明治31年	冬の部	寒むがるを抱きすくめつゝ湯に入れし	寒さ	時候
1866	明治31年	冬の部	湯屋を出てちょこ／＼走りさむき風	寒さ	時候
1867	明治31年	冬の部	湖南より湖北に達す氷かな	氷	天文
1868	明治31年	冬の部	明方の氷屡々響あり	氷	天文
1869	明治31年	冬の部	大根の引くべかりしを盗まれし	大根	植物
1870	明治31年	冬の部	うき人の引きわづらへる大根哉	大根	植物
1872	明治31年	冬の部	宰相を罵て時雨の山に入る	時雨	天文
1873	明治31年	冬の部	頭巾着て逢恋すべく羞かしき	頭巾	人事
1875	明治31年	冬の部	吾が頭巾人の頭巾に似て非なり	頭巾	人事
1877	明治31年	冬の部	吾が頭巾浮世のさまに似ずもがな	頭巾	人事
1878	明治31年	冬の部	水樓や千鳥月夜を郎かへる	千鳥	動物
1879	明治31年	冬の部	客を留め鳴かぬ千鳥や茶の烟	千鳥	動物
1880	明治31年	冬の部	川隈の闇に鳴きゆく千鳥かな	千鳥	動物
1881	明治31年	冬の部	小夜千鳥博多小女郎浪枕	千鳥	動物
1882	明治31年	冬の部	水に沈む廻廊の灯や鳴千鳥	千鳥	動物
1883	明治31年	冬の部	千鳥きいて泣く人もあらむ今時分	千鳥	動物
1884	明治31年	冬の部	千鳥も見えず夜の霜ふる川原哉	千鳥	動物
1885	明治31年	冬の部	川尻や丑満近く千鳥鳴く	千鳥	動物
1886	明治31年	冬の部	わかき男女とはしる千鳥鳴く	千鳥	動物
1887	明治31年	冬の部	陣門に犬吠ゆ冬の月三更	冬の月	天文
1888	明治31年	冬の部	賞もあらず鷹を見てゐる犬愚也	鷹	動物
1889	明治31年	冬の部	群犬やいくさの跡の冬の月	冬の月	天文
1890	明治31年	冬の部	杢兵衛が麦ま支にゆけば犬も行く	麦蒔	人事
1891	明治31年	冬の部	闘犬や街道の雪に血を印す	雪	天文
1892	明治31年	冬の部	老いし犬の寒夜の門をまもり居る	寒夜	時候
1894	明治31年	冬の部	鶏の尾の雫となりしみぞれかな	霙	天文
1895	明治31年	冬の部	音もなくみぞれふるなり杉木立	霙	天文
1896	明治31年	冬の部	帆重くみぞれとなりし船出かな	霙	天文
1897	明治31年	冬の部	山腹はみぞれにして山麓は雨	霙	天文
1898	明治31年	冬の部	みぞれしばししたゝかの雨となりけるよ	霙	天文
1899	明治31年	冬の部	乗合の合羽の上のみぞれかな	霙	天文
1900	明治31年	冬の部	雨かあらず雪かあらず乃ち霙かな	霙	天文
1901	明治31年	冬の部	塀側をみぞれ吹いて寒菊わなゝきぬ	霙	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
1902	明治31年	冬の部	みぞれ一ト日ふみ切らしたる草鞋かな	霙	天文
1903	明治31年	冬の部	寒き日をみぞれにして暮れにけり	霙	天文
1904	明治31年	冬の部	鞍壺に霙を拂ふ合羽かな	霙	天文
1905	明治31年	冬の部	仐を傾けつみぞれを滑べらかす	霙	天文
1906	明治31年	冬の部	杉の葉のみぞれ解けずして氷りけり	霙	天文
1907	明治31年	冬の部	生垣にみぞるゝ音す夫帰る	霙	天文
1908	明治31年	冬の部	寄席を出て風斜なる霙かな	霙	天文
1910	明治31年	冬の部	七十年身に病なし冬ごもり	冬籠	人事
1911	明治31年	冬の部	貢献の白象寒に病むで死す	寒	時候
1912	明治31年	冬の部	巻帙乱れ散て水仙花咲きぬ	水仙	植物
1913	明治31年	冬の部	虫の氣の姫に册つき夜の長き	夜長	時候
1914	明治31年	冬の部	かりそめの風の心地を秋の行く	行秋	時候
1915	明治31年	冬の部	玉欄に病む目眩ゆき牡丹哉	牡丹	植物
1916	明治31年	冬の部	病むちごの屡魘はれつ明やすき	短夜	時候
1917	明治31年	冬の部	蹇の蚊帳より縁に這出でし	蚊帳	人事
1918	明治31年	冬の部	蚤に蚊に物狂はしき病かな	雑	雑
1919	明治31年	冬の部	蚊柱や疫の小村の鉦の音	蚊	動物
1920	明治31年	冬の部	病眼に梅猶寒き社前哉	梅	植物
1921	明治31年	冬の部	梅咲くや痘ありぬべく赤き注連	梅	植物
1922	明治31年	冬の部	人病むで吟骨梅の如く瘦す	梅	植物
1923	明治31年	冬の部	戀すべく蹇の猫あはれな里	猫の戀	動物
2463	明治31年	冬の部	故里ははや初冬の庭さびし	初冬	時候
2465	明治31年	冬の部	野の店の葱畑や朝の月	葱	植物
2466	明治31年	冬の部	俎板や葱に月さす臺所	葱	植物
2467	明治31年	冬の部	黒土や葱掘る背戸の霜柱	雑	雑
2468	明治31年	冬の部	庖丁やさと迸しる葱の香	葱	植物
2469	明治31年	冬の部	市に買ひし一抱の葱の長短	葱	植物
2470	明治31年	冬の部	清流に葱長きを洗ひけり	葱	植物
2471	明治31年	冬の部	葱の香やあつものを吹く卓の上	葱	植物
2472	明治31年	冬の部	葱味噌の小皿や朝の飯あつし	葱	植物
2473	明治31年	冬の部	行灯やひとり卜者の葱を煮る	葱	植物
2474	明治31年	冬の部	ひともじの葷さを厭ふ女か那	葱	植物
2475	明治31年	冬の部	朝川に葱の屑を流しけり	葱	植物
2476	明治31年	冬の部	葱さげて貧乏町や星明り	葱	植物
2477	明治31年	冬の部	撰りわけて葱水仙に似たるか那	葱	植物
2478	明治31年	冬の部	大根といつれか白き葱か那	雑	雑
2479	明治31年	冬の部	居酒屋の葱かんばしく醉多し	葱	植物
2480	明治31年	冬の部	大江に葱を洗ふ舟の月	葱	植物
2481	明治31年	冬の部	塊や青きが長き葱畑	葱	植物
2482	明治31年	冬の部	葱さがす厨の偶や干からびし	葱	植物
2483	明治31年	冬の部	旭のすくや木立に隣る葱畑	葱	植物
2484	明治31年	冬の部	洗はざる葱買ふて山に帰る哉	葱	植物
2486	明治31年	冬の部	煮凍や日脚さし込む舟の窓	煮凝	人事
2487	明治31年	冬の部	いさゝかの煮凍さがす灯か那	煮凝	人事
2488	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐をさびと申すべく	煮凝	人事
2489	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐かみたる鼡か那	煮凝	人事
2490	明治31年	冬の部	煮凍の小鍋温む炭貧し	煮凝	人事
2491	明治31年	冬の部	二三子や煮凍わかつ熟の朝	煮凝	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2492	明治31年	冬の部	煮凍の豆腐俳諧の小酒もり	煮凝	人事
2493	明治31年	冬の部	煮凍の鍋の火を吹く妻もなし	煮凝	人事
2494	明治31年	冬の部	片偶や煮凍の鍋物うくて	煮凝	人事
2495	明治31年	冬の部	兀として煮凍とかす土鍋か那	煮凝	人事
2496	明治31年	冬の部	汁うすく煮凍の葱白し	煮凝	人事
2497	明治31年	冬の部	粟飯に煮凍の狸をすゝめけり	煮凝	人事
2498	明治31年	冬の部	煮凍や物かぶせたる河豚鍋	煮凝	人事
2499	明治31年	冬の部	煮凍の狸なんどや火のいぶる	煮凝	人事
2500	明治31年	冬の部	煮凍の肉喰ひ去る盗人か那	煮凝	人事
2501	明治31年	冬の部	煮凍の熊のしゝむら火明か	煮凝	人事
2503	明治31年	冬の部	浦島が子も来合はして夷講	夷講	人事
2504	明治31年	冬の部	裏町は莨蒻賣りや夷講	夷講	人事
2505	明治31年	冬の部	難船や人数駆出す夷講	夷講	人事
2506	明治31年	冬の部	既にして相撲取も見えつ夷講	夷講	人事
2507	明治31年	冬の部	大風の吹く夜なるか那夷講	夷講	人事
2508	明治31年	冬の部	夷講あるは狐にばかされつ	夷講	人事
2509	明治31年	冬の部	見知らぬが袴むづかし夷講	夷講	人事
2510	明治31年	冬の部	袴着て夷講中物めかす	夷講	人事
2511	明治31年	冬の部	夷講の酒酌む銀の栢杓かな	夷講	人事
2512	明治31年	冬の部	酒樽に月さし込むや夷講	夷講	人事
2514	明治31年	冬の部	禅寺をかりて翁忌の二三人	芭蕉忌	人事
2515	明治31年	冬の部	庵中の二三子庭前の枯尾花	枯芒	植物
2516	明治31年	冬の部	幾しぐれ墨うすれゆく笠の文字	時雨	天文
2517	明治31年	冬の部	わびぬれば只うづくまる翁の日	芭蕉忌	人事
2518	明治31年	冬の部	客僧の棒喫ひけり翁の日	芭蕉忌	人事
2519	明治31年	冬の部	枯れ／＼て翁忌の庭の菊立てり	芭蕉忌	人事
2520	明治31年	冬の部	二百年の笠の雫や時雨の日	芭蕉忌	人事
2521	明治31年	冬の部	庵にとなる竹の雫や翁の像	芭蕉忌	人事
2522	明治31年	冬の部	芭蕉忌や即今天下什麽生の俳	芭蕉忌	人事
2523	明治31年	冬の部	二三子去て翁の像と相対す	芭蕉忌	人事
2525	明治31年	冬の部	鹿笛に草の戦ぎや落つる月	鹿	動物
2526	明治31年	冬の部	仇草と刈棄てられし小菊か那	菊	植物
2527	明治31年	冬の部	露草の露月草の月の庭	露草	植物
2528	明治31年	冬の部	秋風や草にからまる殻角大豆	秋の風	天文
2529	明治31年	冬の部	秋草の中に障子や絵師か家	秋の草	植物
2530	明治31年	冬の部	光琳の秋草画く日和か那	秋の草	植物
2531	明治31年	冬の部	草枯や入江に映る暮の雲	草枯	植物
2532	明治31年	冬の部	草すこし蛍入れたるがらす哉	螢	動物
2533	明治31年	冬の部	藥草の谷かんばしき春日哉	春日	時候
2534	明治31年	冬の部	日のあたる汀の草やうす氷	薄氷	地理
2535	明治31年	冬の部	草市の草の匂ひや水を打つ	草市	人事
2536	明治31年	冬の部	下草のあるは黄色の花をつく	草花	植物
2537	明治31年	冬の部	紅葉鮒草につらぬき帰るなり	紅葉鮒	動物
2538	明治31年	冬の部	草花や障子古びし絵師が家	草花	植物
2539	明治31年	冬の部	闘て草の実こぼす雄鶏か那	草の實	植物
2540	明治31年	冬の部	銀杏の草に落ちしが多かりし	銀杏	植物
2541	明治31年	冬の部	草敷いて鮎并べたり舟の中	鮎	動物
2542	明治31年	冬の部	力草吹散らす鷹の羽風か那	鷹	動物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2544	明治31年	冬の部	越調や客筑を撃つ冬の月	冬の月	天文
2545	明治31年	冬の部	ぬくもりや湯婆抱いたる夢心	湯たんぽ	人事
2547	明治31年	冬の部	鳳輦や十月寒花日は南	十月	時候
2548	明治31年	冬の部	小園や冬の日影のこぼれさす	冬日	天文
2549	明治31年	冬の部	谷間の冬の朝日や閼伽をくむ	冬の朝	時候
2550	明治31年	冬の部	閒庭や少し見得たる茶の莟	茶の花	植物
2551	明治31年	冬の部	凩や刄洗ふ水の逆しり	凩	天文
2552	明治31年	冬の部	明方を神いますべき雲の行方哉	神の旅	人事
2553	明治31年	冬の部	木菟や凝然として晝の月	木菟	動物
2554	明治31年	冬の部	主從に粥まゐらする榾火哉	榾	人事
2556	明治31年	冬の部	刄字刻す寒月の碑や泉岳寺	寒月	天文
2558	明治31年	冬の部	小春日や動物園の禽の声	小春	時候
2560	明治31年	冬の部	珍草や霜に花咲く植物園	霜	天文
2562	明治31年	冬の部	寒月や舟に見上るお茶の水	寒月	天文
2564	明治31年	冬の部	菜屑多き神田の市や年のゆく	行年	時候
2566	明治31年	冬の部	女多き銀坐通りや枯柳	枯柳	植物
2568	明治31年	冬の部	深川や二三子さそふ翁の日	芭蕉忌	人事
2570	明治31年	冬の部	大根や四谷街道朝車	大根	植物
2572	明治31年	冬の部	寺多き牛込の奥の冬至哉	冬至	時候
2574	明治31年	冬の部	為めに壇を築く九州探題の生海鼡	海鼠	動物
2576	明治31年	冬の部	泥舟に木葉散るなりお茶の水	木葉	植物
2578	明治31年	冬の部	相を罷めし早稲田の邸の木葉哉	木葉	植物
2580	明治31年	冬の部	寒菊に冬静なる離宮哉	冬	時候
2582	明治31年	冬の部	加賀殿のお屋敷跡や冬木立	冬木	植物
2584	明治31年	冬の部	冬枯の日は斜きぬ花やしき	冬枯	植物
2586	明治31年	冬の部	鼡小僧の墓に物いふ寒夜哉	寒夜	時候
2588	明治31年	冬の部	狸穴に近く家しぬ納豆賣	納豆	人事
2590	明治31年	冬の部	凩や蛎殻町の人だかり	凩	天文
2592	明治31年	冬の部	小春日の銀座通や絵草紙屋	小春	時候
2594	明治31年	冬の部	水鳥に松の雫の吹散りぬ	水鳥	動物
2595	明治31年	冬の部	水鳥の見えずなりけり沼の月	水鳥	動物
2596	明治31年	冬の部	水鳥の啼立つ芦の枯葉かな	水鳥	動物
2597	明治31年	冬の部	水鳥の浮いて来るなり波朝日	水鳥	動物
2598	明治31年	冬の部	水鳥の啼く方寒し土手の月	水鳥	動物
2599	明治31年	冬の部	美しき水鳥浮ぶ御講か那	水鳥	動物
2600	明治31年	冬の部	水鳥や風に柳の枯れ尽す	水鳥	動物
2601	明治31年	冬の部	水鳥や篷に顔出す舟の月	水鳥	動物
2602	明治31年	冬の部	水鳥や酒買戻る舟の人	水鳥	動物
2603	明治31年	冬の部	水鳥や枯尽したる宮の森	水鳥	動物
2604	明治31年	冬の部	水鳥の啼くや古江に落つる月	水鳥	動物
2606	明治31年	冬の部	引残す大根たのもし雪の朝	大根	植物
2607	明治31年	冬の部	大根干す三戸の村や冬木立	大根	植物
2608	明治31年	冬の部	馬舟の朝川渡る大根か那	大根	植物
2609	明治31年	冬の部	大根舟に炊ぐ烟や朝月夜	大根	植物
2610	明治31年	冬の部	店先の蜜柑は黄なる大根か那	大根	植物
2611	明治31年	冬の部	沼に沿ふ大根畑や朝の月	大根	植物
2612	明治31年	冬の部	井戸端の大根の屑や薄氷	大根	植物
2613	明治31年	冬の部	清流に大根の土を洗ひけり	大根	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2614	明治31年	冬の部	大根切て水迸る刀か那	大根	植物
2615	明治31年	冬の部	抜出でし大根の葉や霜どけぬ	大根	植物
2616	明治31年	冬の部	霜柱大根は引いてしまひけり	大根	植物
2617	明治31年	冬の部	中流を大根舟の流れけ里	大根	植物
2619	明治31年	冬の部	霜やけや痒きにさはる絹のきれ	霜焼	人事
2620	明治31年	冬の部	かんてらに河豚の眼の鈍きか那	河豚	動物
2621	明治31年	冬の部	入定を猶凩の吹止まず	凩	天文
2622	明治31年	冬の部	暖かき初の亥の子や里帰り	亥の子	人事
2623	明治31年	冬の部	北風や村の出口の葱畑	葱	植物
2624	明治31年	冬の部	薬喰に皮羽織着たり主じ顔	薬喰	人事
2625	明治31年	冬の部	薬喰唐机など片寄せぬ	薬喰	人事
2626	明治31年	冬の部	草枯や暮の雲出る裏の山	草枯	植物
2627	明治31年	冬の部	護摩壇にしぐれのしぶく灯哉	時雨	天文
2628	明治31年	冬の部	冬の夜の厨に葱をさがし得つ	葱	植物
2629	明治31年	冬の部	柴漬の舟に小魚や午の雨	柴漬	人事
2630	明治31年	冬の部	炉開いて伯夷叔齊を思ふか那	爐開	人事
2631	明治31年	冬の部	炉開の二階に落つる日脚か那	爐開	人事
2632	明治31年	冬の部	炉開の庭に赤松偃蹇す	爐開	人事
2633	明治31年	冬の部	炉開けば秀次殿の使か那	爐開	人事
2634	明治31年	冬の部	唐様の文机を得つ炉を開く	爐開	人事
2635	明治31年	冬の部	炉開や麓の里の鶏の声	爐開	人事
2637	明治31年	冬の部	納豆買ふ町のはづれやうらなひ者	納豆	人事
2638	明治31年	冬の部	精進に納豆の苞のくさきか那	納豆	人事
2639	明治31年	冬の部	納豆賣の老いしが遲く来りけり	納豆	人事
2640	明治31年	冬の部	山寺や松風起る納豆汁	納豆汁	人事
2641	明治31年	冬の部	禅寺や納豆を叩く曉の雲	納豆	人事
2642	明治31年	冬の部	五十にして悟らぬ僧や納豆うつ	納豆	人事
2643	明治31年	冬の部	門前や納豆賣る婆子歯がぬけし	納豆	人事
2644	明治31年	冬の部	納豆賣戻るや寺の裏畑	納豆	人事
2645	明治31年	冬の部	朝曇舟に納豆を叩くか那	納豆	人事
2646	明治31年	冬の部	葱の香や熟のあしたの納豆汁	納豆汁	人事
2647	明治31年	冬の部	寺かりて連歌の会や納豆汁	納豆汁	人事
2648	明治31年	冬の部	俳諧は且つ三斛の納豆汁	納豆汁	人事
2650	明治31年	冬の部	鉢叩来る夜となりぬ寐ざめがち	鉢叩	人事
2651	明治31年	冬の部	明方や橋を越えたる鉢叩	鉢叩	人事
2652	明治31年	冬の部	乾坤を叩き尽して鉢叩	鉢叩	人事
2653	明治31年	冬の部	鉢叩風に聞えずなりにけり	鉢叩	人事
2654	明治31年	冬の部	鉢叩の妻てふものを見まほしき	鉢叩	人事
2655	明治31年	冬の部	米量る妻もありけり鉢叩	鉢叩	人事
2656	明治31年	冬の部	鉢叩昼は飯喰ふ男か那	鉢叩	人事
2657	明治31年	冬の部	子もありて悲しきものよ鉢叩	鉢叩	人事
2658	明治31年	冬の部	鉢叩二人粥喰ふ昼の宿	鉢叩	人事
2659	明治31年	冬の部	鉢叩戻れば軒の朝の月	鉢叩	人事
2660	明治31年	冬の部	鉢叩昼はひさごに潜むべし	鉢叩	人事
2661	明治31年	冬の部	鉢叩も来ぬ夜となりて冬わびし	鉢叩	人事
2662	明治31年	冬の部	鉢叩聞えずなりて夜明か那	鉢叩	人事
2663	明治31年	冬の部	交りや鉢叩に隣る納豆賣	雑	雑
2664	明治31年	冬の部	鉢叩わが妻起す戸口か那	鉢叩	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
2666	明治31年	冬の部	崖の上に月落ちかゝる氷柱か那	垂氷	天文
2667	明治31年	冬の部	草庵や氷柱もさがる雪の朝	雪	天文
2668	明治31年	冬の部	洩るゝ日や氷柱の落つる杉木立	垂氷	天文
2669	明治31年	冬の部	岩山や氷柱輝く曉の星	垂氷	天文
2670	明治31年	冬の部	巖窟に氷柱見上る雫か那	垂氷	天文
2671	明治31年	冬の部	日にうとき石灯篭の氷柱か那	垂氷	天文
2672	明治31年	冬の部	水涸れて滝美しき氷柱か那	垂氷	天文
2673	明治31年	冬の部	滝壷に氷柱の下る五更か那	垂氷	天文
2674	明治31年	冬の部	金碧や氷柱の垂るゝ觀音堂	垂氷	天文
2675	明治31年	冬の部	明方の岩に氷柱や滝しぶき	垂氷	天文
3663	明治32年	冬の部	さゝ鳴や山に折るべき花もなし	笹鳴	動物
3664	明治32年	冬の部	枯菊と小さき卒塔婆流れよる	枯菊	植物
3665	明治32年	冬の部	帰花咲くべくも見えぬ老木哉	歸り花	植物
3666	明治32年	冬の部	炉開に何の家例もなかりけり	爐開	人事
3667	明治32年	冬の部	よき水や大根も洗ひ葉も洗ひ	大根	植物
3668	明治32年	冬の部	茶の莟僅かに白し朝煙	茶の花	植物
3669	明治32年	冬の部	見出てたる落葉の中の柘榴かな	落葉	植物
3670	明治32年	冬の部	霰うつや石の不動の鼻柱	霰	天文
3671	明治32年	冬の部	時雨るゝや舩に物煮る古き鍋	時雨	天文
3672	明治32年	冬の部	旅なれぬ若き女神もおはすらむ	神の旅	人事
3673	明治32年	冬の部	枯菊や庭に風ふく冬構	雜	雜
3674	明治32年	冬の部	埋火や既にして又かき廻す	埋火	人事
3675	明治32年	冬の部	傳來の大杯や夷子講	夷講	人事
3676	明治32年	冬の部	初氷汀は芹の葉を青み	初氷	天文
3677	明治32年	冬の部	痛棒を喫して冬の月に座す	冬の月	天文
3678	明治32年	冬の部	北風となりて小春の夕さむし	小春	時候
3679	明治32年	冬の部	炭ついで炭の粉をふく青疊	炭	人事
3680	明治32年	冬の部	傾くる笠に霙の雫かな	霙	天文
3681	明治32年	冬の部	若うして炬燵はなれぬ病かな	炬燵	人事
3682	明治32年	冬の部	亡妻の俤を見る榾火かな	榾	人事
3683	明治32年	冬の部	座ふとんを叩て物に激すけり	雜	雜
3684	明治32年	冬の部	鴨の毛の風に逆立つ氷かな	雜	雜
3685	明治32年	冬の部	鷹狩の同じ扮装や十二人	鷹狩	人事
3686	明治32年	冬の部	口切や庵の行事の覚書	口切	人事
3687	明治32年	冬の部	二十年昔となりし頭巾哉	頭巾	人事
3688	明治32年	冬の部	煮凍をとかせば鹿の脂哉	煮凝	人事
3689	明治32年	冬の部	二合半の酒温むる世帯かな	温め酒	人事
3690	明治32年	冬の部	顔見せや言葉通ぜぬ和蘭人	顔見世	人事
3691	明治32年	冬の部	お十夜の後世願はぬ人もなし	十夜	人事
3692	明治32年	冬の部	お妾は美人なりけり玉子酒	玉子酒	人事
3693	明治32年	冬の部	はにかむて巨燵に遠き目見え哉	炬燵	人事
3694	明治32年	冬の部	湯婆さめて悲しき事もありぬべし	湯たんぽ	人事
3695	明治32年	冬の部	律の寺山茶花の垣高うして	山茶花	植物
3696	明治32年	冬の部	をしどりの離れては又寄そひぬ	鴛鴦	動物
3697	明治32年	冬の部	神棚に巻納めけり古こよみ	古暦	人事
3698	明治32年	冬の部	善兵衛はいんでしまいぬ藥喰	藥喰	人事
3699	明治32年	冬の部	年の市人に物やる切支丹	年の市	人事
3700	明治32年	冬の部	頸剃て寒かる師走八日哉	師走	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3701	明治32年	冬の部	紅筆で氷柱をそむる遊哉	垂氷	天文
3702	明治32年	冬の部	藥うりの口上手なり胼くすり	皸	人事
3703	明治32年	冬の部	頑の妻を持ちけり藥喰	藥喰	人事
3704	明治32年	冬の部	老樂やよき娘持つ網代守	網代	人事
3705	明治32年	冬の部	寒菊に炭のほこりや炭俵	寒菊	植物
3706	明治32年	冬の部	納豆汁其曉の松の風	納豆汁	人事
3707	明治32年	冬の部	寂しさや炉のなき宿の古行燈	圍爐裏	人事
3708	明治32年	冬の部	降積る雪や湯婆の湯をすつる	雪	天文
3709	明治32年	冬の部	篭にあまる葱の葉青き霰哉	霰	天文
3710	明治32年	冬の部	小夜千鳥四條渡れば祇園町	千鳥	動物
3711	明治32年	冬の部	市中に熊の肉賣るあられ哉	霰	天文
3712	明治32年	冬の部	草枯れや物に詣づる女づれ	草枯	植物
3713	明治32年	冬の部	釣干菜日の丸の旗ひるがへり	干菜	人事
3714	明治32年	冬の部	耄碌のはやらぬ頭巾きたりけり	頭巾	人事
3715	明治32年	冬の部	水鳥や城の後の古き沼	水鳥	動物
3716	明治32年	冬の部	老居士の髭の汚れや納豆汁	納豆汁	人事
3717	明治32年	冬の部	枯葦や偶々緋鯉泳き去る	枯蘆	植物
3718	明治32年	冬の部	外套の赤きをつけて猿芝居	外套	人事
3719	明治32年	冬の部	いさかひの頭巾を取るや大童	頭巾	人事
3720	明治32年	冬の部	神を思ふ心切なり神のるす	神の旅	人事
3721	明治32年	冬の部	宵々の灯火くらし冬こもり	冬籠	人事
3722	明治32年	冬の部	大德を泊めて風呂吹参らせぬ	風呂吹	人事
3723	明治32年	冬の部	炭取を投出しけり雪の上	雪	天文
3724	明治32年	冬の部	火を起す土の火鉢や佗住居	火鉢	人事
3725	明治32年	冬の部	引っかゝる祭の旗や冬木立	冬木	植物
3726	明治32年	冬の部	熊賣の來て待つ雪の渡哉	雪	天文
3727	明治32年	冬の部	達磨忌や土の達磨の冷かに	達磨忌	人事
3728	明治32年	冬の部	風呂吹の冷えかゝりけり膳の上	風呂吹	人事
3729	明治32年	冬の部	風呂吹に口を燒いたる僧都哉	風呂吹	人事
3730	明治32年	冬の部	風呂吹を盛上にけり佛の椀	風呂吹	人事
3731	明治32年	冬の部	風呂吹の鍋をすゑたる廣間哉	風呂吹	人事
3732	明治32年	冬の部	炭燒の或夜風呂吹したりけり	雜	雜
3733	明治32年	冬の部	風呂吹の味噌残りたる小皿哉	風呂吹	人事
3734	明治32年	冬の部	風呂吹の腹の具合や酒ほしき	風呂吹	人事
3735	明治32年	冬の部	殿原の腹立皃やお鷹狩	鷹狩	人事
3736	明治32年	冬の部	鷹狩の岩山暮れて風強し	鷹狩	人事
3737	明治32年	冬の部	鷹狩や吹飛されん握めし	鷹狩	人事
3738	明治32年	冬の部	鷹狩の殿をお諫め申しけり	鷹狩	人事
3739	明治32年	冬の部	鷹狩や黄金賜る小百姓	鷹狩	人事
3740	明治32年	冬の部	鷹狩やせうとの君は文の道	鷹狩	人事
3741	明治32年	冬の部	鷹狩の白馬の人や我が敵	鷹狩	人事
3742	明治32年	冬の部	鷹狩の殿若うして短氣哉	鷹狩	人事
3743	明治32年	冬の部	鷹狩の途に出会ひし念者哉	鷹狩	人事
3744	明治32年	冬の部	鷹狩や武道を励む二少年	鷹狩	人事
3745	明治32年	冬の部	眼を睜けり生海鼡四方の志	海鼠	動物
3746	明治32年	冬の部	雪車に乘る若き女房や人の門	雪舟	人事
3747	明治32年	冬の部	小火鉢や人の女房の遠慮勝	火鉢	人事
3748	明治32年	冬の部	煤掃いて松の翠を眺めけり	煤拂	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3749	明治32年	冬の部	温石に湯婆に母の悲しかり	雑	雑
3750	明治32年	冬の部	寒声や駆落したる隣の子	寒声	人事
3751	明治32年	冬の部	花活の花のしほみや古暦	古暦	人事
3752	明治32年	冬の部	いさゝかのにくみ心や水祝	水祝	人事
3753	明治32年	冬の部	河豚喰ふて死んだ便りもなかりけり	河豚	動物
3754	明治32年	冬の部	年の内に春は立ちけり古今集	年内立春	時候
3755	明治32年	冬の部	蝋燭の既に五寸や年ごもり	年籠	人事
3756	明治32年	冬の部	茶の花や旦に荒き石の霜	茶の花	植物
3757	明治32年	冬の部	乾鮭に文字を刻まん古法帖	乾鮭	人事
3758	明治32年	冬の部	寸鉄を帶ふるものなし桃青忌	芭蕉忌	人事
3759	明治32年	冬の部	忙しの人を誘ひて年忘	年忘	人事
3760	明治32年	冬の部	乾鮭のからび果てたり春星忌	蕪村忌	人事
3761	明治32年	冬の部	北国の雪の話や藥賣	雪	天文
3762	明治32年	冬の部	笹鳴や落葉を照らす日の光	笹鳴	動物
3763	明治32年	冬の部	うつくまり寒夜の吟や影法師	寒夜	時候
3764	明治32年	冬の部	君がため岡見の憂心かな	岡見	人事
3765	明治32年	冬の部	ふし漬に大根の葉などかゝりけり	大根	植物
3766	明治32年	冬の部	餅搗の宵に返りぬ馬鹿息子	餅搗	人事
3767	明治32年	冬の部	追儺すんで蝋燭輝けり	追儺	人事
3768	明治32年	冬の部	寒月や石に當て影法師	寒月	天文
3769	明治32年	冬の部	反古に包むみかんの皮や冬坐敷	冬座敷	人事
3770	明治32年	冬の部	其まゝに死んでしまひし生海鼠哉	海鼠	動物
3771	明治32年	冬の部	神前の水氷りけり寒椿	冬椿	植物
3772	明治32年	冬の部	煮凍や粱にさす夜半の月	煮凝	人事
3773	明治32年	冬の部	大風に吹かれて去りぬ鯨うり	鯨	動物
3774	明治32年	冬の部	書出しをおいていにたるけはひ哉	掛乞	人事
3775	明治32年	冬の部	寒念佛都は女うつくしき	寒念佛	人事
3776	明治32年	冬の部	雪達摩あかつきの星と相對す	雪達磨	人事
3777	明治32年	冬の部	はねかへる鮪の市の霰かな	霰	天文
3778	明治32年	冬の部	はした女の眞赤な顔や雪つぶて	雪遊び	人事
3779	明治32年	冬の部	見せものゝけもの咆ゆるや年の市	年の市	人事
3780	明治32年	冬の部	水仙の鉢の氷や花の精	水仙	植物
3906	明治33年	冬の部	嚴霜や筋骨痛き座禪石	霜	天文
3907	明治33年	冬の部	霜ふるや夜半の潮平かに	霜	天文
3908	明治33年	冬の部	しも晴の筑波や麦は二寸程	霜	天文
3909	明治33年	冬の部	霜よけを除けば花の薫じけり	霜よけ	人事
3910	明治33年	冬の部	恐ろしき地震の後や荒き霜	霜	天文
3911	明治33年	冬の部	霜とんで声あり達摩渡江の図	霜	天文
3912	明治33年	冬の部	花さげて霜解に行脳み玉ふ	霜	天文
3913	明治33年	冬の部	花屋去て花屑散りぬ霜の庭	霜	天文
3914	明治33年	冬の部	山の氣の黒金臭し霜柱	霜柱	天文
3915	明治33年	冬の部	瀟湘や水に霜ふる朝月夜	霜	天文
3916	明治33年	冬の部	木枯や山のけものゝ糞乾き	凩	天文
3917	明治33年	冬の部	禮樂や魯の正月の朝朗	正月	時候
3918	明治33年	冬の部	夫子老いて二三子と谷の梅を見る	梅	植物
3919	明治33年	冬の部	乾坤の中に生れし海鼠かな	海鼠	動物
3920	明治33年	冬の部	紅きもの着たるもまじり寒念佛	寒念佛	人事
3921	明治33年	冬の部	正面に雪ふりかゝり寒念佛	寒念佛	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
3922	明治33年	冬の部	曉天の氣を吹く老や寒念佛	寒念佛	人事
3923	明治33年	冬の部	難有きものに思ひぬ寒念佛	寒念佛	人事
3924	明治33年	冬の部	大雪の朝な／＼や寒念佛	寒念佛	人事
3925	明治33年	冬の部	講中の世話やきぢゝや寒念佛	寒念佛	人事
3926	明治33年	冬の部	西方の空も尊し寒念佛	寒念佛	人事
3927	明治33年	冬の部	大寒に入りし旦や寒念佛	寒念佛	人事
3928	明治33年	冬の部	恥かしの娘を誘ひ寒念佛	寒念佛	人事
10531	明治33年	冬の部	冷たかや水を飲まんと水に顔	冷たし	時候
10548	明治33年	冬の部	吹上ぐる谷の狭霧や蔦の橋	狭霧	天文
10569	明治33年	冬の部	烏瓜青きを獲たり茶の木原	烏瓜	植物
10577	明治33年	冬の部	鳰吹いて生き残りけり昔人	鳰	動物
4169	明治34年	冬の部	洋服に足駄は寒し小役人	寒さ	時候
4170	明治34年	冬の部	河豚ふゞき海鼡みぞるゝ形かな	雑	雑
4171	明治34年	冬の部	口切や布衣の交り面白き	口切	人事
4172	明治34年	冬の部	山もしぐれ海もしぐれつ天が下	時雨	天文
4173	明治34年	冬の部	俳諧は五升の酒や御命講	御命講	人事
4174	明治34年	冬の部	絨緞の花に据えたる火鉢かな	火鉢	人事
4175	明治34年	冬の部	染物の絹をも裂かん霰かな	霰	天文
4176	明治34年	冬の部	榮耀に飼はるゝ鷹の羽色哉	鷹	動物
4177	明治34年	冬の部	風呂吹の淡きに如かず河豚汁	河豚汁	人事
4178	明治34年	冬の部	河豚喰て発句に俗を罵りぬ	河豚	動物
4179	明治34年	冬の部	凩や貧乏神の火の車	凩	天文
4180	明治34年	冬の部	霜柱踏出てにけり朱の沓	霜柱	天文
4181	明治34年	冬の部	茶の花も小鳥も寒き日なりけり	寒さ	時候
4182	明治34年	冬の部	吾夫を尋ねあてたり藥喰	藥喰	人事
4183	明治34年	冬の部	納豆汁其曉の嶺の雲	納豆汁	人事
4184	明治34年	冬の部	落人の詮議かしこみ榾火哉	榾	人事
4186	明治34年	冬の部	別れとも知らぬ海鼡のあはれ哉	海鼠	動物
4188	明治34年	冬の部	乾鮭に御して渡海の心ざし	乾鮭	人事
4190	明治34年	冬の部	乾鮭や小鼻大鼻曲り鼻	乾鮭	人事
4192	明治34年	冬の部	乾鮭に寒梅の香もなかりけり	乾鮭	人事
4194	明治34年	冬の部	乾鮭や焚く枯菊の薄烟	乾鮭	人事
4195	明治34年	冬の部	天門の氷を開く力かな	氷	天文
4196	明治34年	冬の部	芭蕉忌のふとんかふりて物をよむ	芭蕉忌	人事
4197	明治34年	冬の部	夜興引の咎められたる迷ひ哉	夜興引	人事
4198	明治34年	冬の部	君が代は綿入足袋の老樂し	足袋	人事
4199	明治34年	冬の部	炉開に妻は男の子を生めり	爐開	人事
4200	明治34年	冬の部	誂の大蝋燭やえびす講	夷講	人事
4201	明治34年	冬の部	水仙にかゝる檜の鉋屑	水仙	植物
4202	明治34年	冬の部	野は枯れて殺生石の氣騰りぬ	枯野	天文
4203	明治34年	冬の部	埋火の貧しからさる調度かな	埋火	人事
4204	明治34年	冬の部	隠現の鬼形や庭燎ふけにけり	焚火	人事
4205	明治34年	冬の部	袴着や母は氏なきへりくだり	袴着	人事
4206	明治34年	冬の部	蛇を見る神の社の春近し	春近し	時候
4207	明治34年	冬の部	冴る月人を苦しむ姿かな	冴る	時候
4208	明治34年	冬の部	吹雪やんで川明らかに流れけり	吹雪	天文
4209	明治34年	冬の部	山見れば眠れり君はあらずして	山眠る	天文
4210	明治34年	冬の部	珍草や寒の雨ふる植物園	寒の雨	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4211	明治34年	冬の部	藥喰ふ小角力二人三人かな	藥喰	人事
4212	明治34年	冬の部	寒垢離や滝の不動の灯明か	寒垢離	人事
4213	明治34年	冬の部	年のくれ人參のんで首くゝり	年の暮	時候
4214	明治34年	冬の部	煤掃の煤に汚れず美なる珠	煤拂	人事
4215	明治34年	冬の部	掛乞の昔語となりにけり	掛乞	人事
4216	明治34年	冬の部	夜明くるや追儺の宵を忘れ皃	追儺	人事
4217	明治34年	冬の部	よき酒に卵子割ったる炭火哉	炭	人事
4218	明治34年	冬の部	鯨突鯨の如き漢子哉	鯨	動物
4219	明治34年	冬の部	寐て起きて／＼春を待つばかり	春待	時候
4220	明治34年	冬の部	炭うりの水仙さげて戻りけり	炭売	人事
4221	明治34年	冬の部	寒念佛例の坊主の頓死哉	寒念佛	人事
4222	明治34年	冬の部	雪沓の痕恐ろしき廟かな	雪沓	人事
4223	明治34年	冬の部	お火焚の跡の寒さや朝詣	御火焚	人事
4225	明治34年	冬の部	歌をよむ妻もこもれり雪車の中	雪舟	人事
4226	明治34年	冬の部	玉の如き男の子菖蒲の産湯哉	菖蒲	植物
4227	明治34年	冬の部	花に醉ひてぬるき湯に入る疲かな	花	植物
4228	明治34年	冬の部	さめやすき湯婆も悲し思ひやり	湯たんぽ	人事
4608	明治35年	冬の部	鷹狩や御手に一枝寒の花	鷹狩	人事
4609	明治35年	冬の部	鷹狩や皆曰く紂討つべしと	鷹狩	人事
4610	明治35年	冬の部	凩の碓氷は悲し海の色	凩	天文
4611	明治35年	冬の部	金槐集海にしぐるゝ姿かな	時雨	天文
4613	明治35年	冬の部	夢に見る滄海の珠や冬ごもり	冬籠	人事
4614	明治35年	冬の部	山門を誦じ出でけり冬至の詩	冬至	時候
4615	明治35年	冬の部	行逢ひて衣の香にくし雪車の中	雪舟	人事
4616	明治35年	冬の部	水仙や冬鶯の死にし曉	水仙	植物
4617	明治35年	冬の部	鴛鴦や枯木吹ちる水の上	鴛鴦	動物
4618	明治35年	冬の部	年忘腹中の詩を盗まれし	年忘	人事
4619	明治35年	冬の部	発句帖萬句もあれと祝ひ言	雑	雑
4620	明治35年	冬の部	寒の入る刻とやなりぬ水の音	寒の入	時候
4621	明治35年	冬の部	粥柱赤きもの着て老萊子	粥柱	人事
4622	明治35年	冬の部	鐵鉢に米も少し寒の梅	寒梅	植物
4623	明治35年	冬の部	初夢の故人や既に執金吾	初夢	人事
4624	明治35年	冬の部	闇汁に風流貌の干菜かな	干菜	人事
4625	明治35年	冬の部	人の妻干菜の蔭にかくれけり	干菜	人事
4626	明治35年	冬の部	こゝにあると人に應へて干菜つる	干菜	人事
4627	明治35年	冬の部	油繪や干菜も下がり森の色	干菜	人事
4628	明治35年	冬の部	君が手のつめたき戀や干菜編み	干菜	人事
4629	明治35年	冬の部	赤蕪の赤きは一時流行ぞ	蕪	植物
4630	明治35年	冬の部	袴着や肌に守の觀世音	袴着	人事
4631	明治35年	冬の部	寒の入五更の豆腐声もなし	寒の入	時候
4632	明治35年	冬の部	袴着や朝日豊さか上りけり	袴着	人事
4633	明治35年	冬の部	難有や納豆に花が咲く法話	納豆	人事
4634	明治35年	冬の部	里神樂祢宜の娘を見たりけり	神樂	人事
4635	明治35年	冬の部	御神樂や五十鈴川波さゞら波	神樂	人事
4636	明治35年	冬の部	雪をふんで杉の下道神樂人	雪	天文
4637	明治35年	冬の部	歌かるた若き從兄の文學士	歌留多	人事
4638	明治35年	冬の部	都府楼の瓦の色や春を待つ	春待	時候
4639	明治35年	冬の部	珍草に春待つ人や鴻鸕舘	春待	時候

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
4640	明治35年	冬の部	春待つや或はかきからを丘に焚く	春待	時候
4641	明治35年	冬の部	春待つや美人を見ざること久し	春待	時候
4642	明治35年	冬の部	春待つや時々登る古城の上	春待	時候
4643	明治35年	冬の部	清淨や神樂に雪を焚く夕	雪	天文
4644	明治35年	冬の部	そば湯吹く皃も賢愚や台所	蕎麥湯	人事
4645	明治35年	冬の部	ぬくめ鳥松の梢に旭出でたり	暖め鳥	動物
4646	明治35年	冬の部	荒浪のつらゝかみ去る窟かな	垂氷	天文
4647	明治35年	冬の部	皃見世や寐たる姿の東山	顔見世	人事
4648	明治35年	冬の部	柴漬の獲物買ひけり岸の人	柴漬	人事
4649	明治35年	冬の部	老人の何に驚く岡見哉	岡見	人事
4650	明治35年	冬の部	年木こり雪に黄金を拾ひけり	雪	天文
4651	明治35年	冬の部	乾鮭に眉を描かんとぞ思ふ	乾鮭	人事
4652	明治35年	冬の部	風呂吹を召され候ぞと申す	風呂吹	人事
4653	明治35年	冬の部	顔見せや江戸は名高き男伊達	顔見世	人事
4654	明治35年	冬の部	しはぶきや雑魚寐に洩れし人はたれ	雑魚寝	人事
4655	明治35年	冬の部	垣越に山の眠りや寒の雨	寒の雨	天文
4656	明治35年	冬の部	納豆の寂寞として苞の中	納豆	人事
4657	明治35年	冬の部	河豚汁豆腐輕くして浮きぬ	河豚汁	人事
4658	明治35年	冬の部	納豆汁豆腐や白く潔し	納豆汁	人事
4659	明治35年	冬の部	方正を守る豆腐や狸汁	狸汁	人事
4660	明治35年	冬の部	藥喰豆腐は白き君が皃	藥喰	人事
4661	明治35年	冬の部	煮凍の豆腐や墨子悲めり	煮凝	人事
4662	明治35年	冬の部	けふもやく夕げの豆腐冬ごもり	冬籠	人事
4663	明治35年	冬の部	豆腐汁坐に松影の冬至哉	冬至	時候
4664	明治35年	冬の部	法話未だ已まず豆腐既に氷りぬ	凍る	天文
4665	明治35年	冬の部	詩債あり除夜も豆腐の煮ゆるまで	除夜	時候
4666	明治35年	冬の部	味ひや豆腐の焦げも冬ごもり	冬籠	人事
4667	明治35年	冬の部	袴着やこゝに年ふる陰陽師	袴着	人事
4668	明治35年	冬の部	袴着や軒を并べて三長者	袴着	人事
4669	明治35年	冬の部	袴着の古式はめでた尽し哉	袴着	人事
4670	明治35年	冬の部	納豆臭き寺の男や物不知	納豆	人事
4671	明治35年	冬の部	納豆の容りも厨かな	納豆	人事
4672	明治35年	冬の部	空山に納豆打つ音響きけり	納豆	人事
4673	明治35年	冬の部	納豆汁杓子にさはる物もなし	納豆汁	人事
4674	明治35年	冬の部	雪一白岩戸神樂に夜明けたり	神樂	人事
4675	明治35年	冬の部	冬菜汁葱の臭きを厭ひけり	冬菜	植物
4676	明治35年	冬の部	書きすてつ丸めつ火鉢の火に投ず	火鉢	人事
4677	明治35年	冬の部	逆鱗にふれてまかでぬ枯柳	枯柳	植物
4678	明治35年	冬の部	人の子のあかぎれの手や涙ふく	皸	人事
4679	明治35年	冬の部	黒土や葱の折葉も凍つきて	葱	植物
4680	明治35年	冬の部	子に頭巾かぶり／＼と一茶坊	頭巾	人事
4681	明治35年	冬の部	寒月やけもの突くべき竹の槍	寒月	天文
4682	明治35年	冬の部	北風の雪吹つける枯木哉	吹雪	天文
4683	明治35年	冬の部	玉子酒夜間物かく小説家	玉子酒	人事
4684	明治35年	冬の部	馬に鍼す冬一日を卜しけり	冬	時候
4685	明治35年	冬の部	鐘冴えて聞えん灯見ゆる野の小家	冴る	時候
4686	明治35年	冬の部	昔人の此夜の詩句や年ごもり	年籠	人事
5136	明治36年	冬の部	日山に入ること早し釣干菜	干菜	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5137	明治36年	冬の部	一爻變して北の窓を塞く	北窓塞	人事
5138	明治36年	冬の部	かへり見る峠の人や日短し	短日	時候
5139	明治36年	冬の部	水鳥や琵琶は寿永の物語	水鳥	動物
5140	明治36年	冬の部	鷹狩や涙を拂ふ蘇武が跡	鷹狩	人事
5141	明治36年	冬の部	寂栞柴漬に鳴く川千鳥	千鳥	動物
5142	明治36年	冬の部	執筆の昔語や桃青忌	芭蕉忌	人事
5143	明治36年	冬の部	冬の雨趣や竹二三竿	冬の雨	天文
5144	明治36年	冬の部	紙衣着て夢や小判を擲ちぬ	紙衣	人事
5145	明治36年	冬の部	年々の金屏の松や冬に入る	冬	時候
5146	明治36年	冬の部	小春晴枯柴採りに裏の山	小春	時候
5147	明治36年	冬の部	小春日の空ものすごき青み哉	小春	時候
5148	明治36年	冬の部	小春日のはや午すぎとなりにけり	小春	時候
5149	明治36年	冬の部	小春日の落葉や宵の雨の痕	小春	時候
5150	明治36年	冬の部	草の骨に馬遊ばする小春かな	小春	時候
5151	明治36年	冬の部	冬木立黄鶴楼の跡もなし	冬木	植物
5152	明治36年	冬の部	冬木立遊山ともなく法師原	冬木	植物
5153	明治36年	冬の部	冬木立把栗寒花の詩を獲たり	冬木	植物
5154	明治36年	冬の部	力石横はりけり冬木立	冬木	植物
5155	明治36年	冬の部	鎌倉の大きな寺や冬木立	冬木	植物
5156	明治36年	冬の部	餅搗て居れば其角が醉て來る	餅搗	人事
5157	明治36年	冬の部	餅搗いて主ぶりけりお足輕	餅搗	人事
5158	明治36年	冬の部	餅筵子等の春衣も出来てあり	餅筵	人事
5159	明治36年	冬の部	餅搗を終日寺に遊びけり	餅搗	人事
5160	明治36年	冬の部	餅搗の音も聞ゆる岡見哉	餅搗	人事
5161	明治36年	冬の部	寒声に窮陰の氣を発しけり	寒声	人事
5162	明治36年	冬の部	蝋燭のあたりを拂ふ追儺かな	追儺	人事
5163	明治36年	冬の部	書出しや竜畫きゐる家あるじ	掛乞	人事
5164	明治36年	冬の部	凩の温泉の客稀に来りけり	凩	天文
5165	明治36年	冬の部	孝行な嫁を貰へりお取越	御取越	人事
5166	明治36年	冬の部	達磨忌も何も知らずと答へけり	達磨忌	人事
5167	明治36年	冬の部	みつじ田のくぼみにたまる霰哉	霰	天文
5168	明治36年	冬の部	藥喰漢の武帝を嘲りぬ	藥喰	人事
5169	明治36年	冬の部	燒芋のよろしき芋をたうべけり	燒芋	人事
5170	明治36年	冬の部	クリスマス小袋の銀貨鳴らしけり	クリスマス	人事
5171	明治36年	冬の部	水涸に吹散る雪もなかりけり	水涸	天文
5172	明治36年	冬の部	炭俵三冬の菜屑大根屑	炭俵	人事
5173	明治36年	冬の部	衣配母います時の如くせり	衣配	人事
5174	明治36年	冬の部	娘して送る年貢の炭五俵	炭	人事
5175	明治36年	冬の部	神帰り赦免の沙汰もなかりけり	神帰り	人事
5177	明治36年	冬の部	あら笑止俵に痛き足の骨	雑	雑
5179	明治36年	冬の部	芭蕉七尺影はふまじと思ひけり	芭蕉忌	人事
5181	明治36年	冬の部	浅ましき榾火の松のいぶりかな	榾	人事
5183	明治36年	冬の部	寒の雨巖に声もなかりけり	寒の雨	天文
5185	明治36年	冬の部	凩に吹散る松の鱗かな	凩	天文
5187	明治36年	冬の部	巖が根のゆるがじとする海鼠かな	海鼠	動物
5189	明治36年	冬の部	玄黄の其血吹雪や巖に劍	吹雪	天文
5190	明治36年	冬の部	榾の火やあれこそ厨川二郎	榾	人事
5191	明治36年	冬の部	事納師は木食のすこやかに	事納	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5192	明治36年	冬の部	方丈に俗の客あり冬椿	冬椿	植物
5193	明治36年	冬の部	雪沓に剛の座の人まかでけり	雪沓	人事
5194	明治36年	冬の部	書出も貧居の吟の一ツかな	掛乞	人事
5195	明治36年	冬の部	日光や冬田の中の水たまり	冬田	天文
5196	明治36年	冬の部	戯の一詩を獲たり厄落	厄落	人事
5197	明治36年	冬の部	寒稽古又にかゝる霜もなし	寒稽古	人事
5198	明治36年	冬の部	三升の麦種悲し小作人	麦蒔	人事
5199	明治36年	冬の部	麦蒔のしるしの料理赤蕪	麦蒔	人事
5200	明治36年	冬の部	いくさあれば晴れて麦蒔く日も淋し	麦蒔	人事
5201	明治36年	冬の部	麦蒔の摩耶に入る日を惜みけり	麦蒔	人事
5202	明治36年	冬の部	麦蒔に亥の子の餅を振まへり	麦蒔	人事
5203	明治36年	冬の部	綿ほこり綿入つくる老が妻	綿入	人事
5204	明治36年	冬の部	綿入てぬくまれば事もなかりけり	綿入	人事
5205	明治36年	冬の部	綿入や古びにたれど垢つかず	綿入	人事
5206	明治36年	冬の部	綿入や貧しかれども人の親	綿入	人事
5207	明治36年	冬の部	故人句あり綿入れて即ち贈りけり	綿入	人事
5208	明治36年	冬の部	氷裂けて水鴨緑や陽の光	氷	天文
5209	明治36年	冬の部	岩のくぼ目洗ひ水も氷りけり	凍る	天文
5210	明治36年	冬の部	澗水の涸尽したる氷かな	氷	天文
5211	明治36年	冬の部	堅氷に斧打って水探りけり	氷	天文
5213	明治36年	冬の部	厳氷を砕くが如き響かな	氷	天文
5214	明治36年	冬の部	雪つむや十抱への木の下り枝	雪	天文
5215	明治36年	冬の部	年の市音樂隊の通哉	年の市	人事
5216	明治36年	冬の部	神泉苑氷の上の遊かな	氷	天文
5217	明治36年	冬の部	葱洗ふ門川の氷固からず	氷	天文
5218	明治36年	冬の部	除夜の灯や古人のふみに零つ涕	除夜	時候
5219	明治36年	冬の部	眠る山菜作る畑も見たりけり	山眠る	天文
5523	明治37年	冬の部	山寺に冬至の蹊つくりけり	冬至	時候
5524	明治37年	冬の部	佛恩や菜屑を捨てず御取越	御取越	人事
5525	明治37年	冬の部	冬の雨堂塔とざす金閣寺	冬の雨	天文
5526	明治37年	冬の部	神鳴て鰰さむき山家哉	鰰	動物
5527	明治37年	冬の部	帰去來の句を書捨てつ古暦	古暦	人事
5528	明治37年	冬の部	登る日に眼を射られけり暖め鳥	暖め鳥	動物
5529	明治37年	冬の部	こもり居や地図を四壁の冬座敷	冬座敷	人事
5530	明治37年	冬の部	河豚喰ふて一陽発す臓腑かな	河豚	動物
5531	明治37年	冬の部	さゝ鳴や鴻臚の人の愁思吟	笹鳴	動物
5532	明治37年	冬の部	さゝ鳴や故園の情話日を竟る	笹鳴	動物
5533	明治37年	冬の部	さゝ鳴や俎豆陳ぬるあそび事	笹鳴	動物
5534	明治37年	冬の部	さゝ鳴や自ら笑ふ閑妄想	笹鳴	動物
5535	明治37年	冬の部	さゝ鳴や枯木の中を女の童	笹鳴	動物
5536	明治37年	冬の部	境内の雪を汚して札納	札納	人事
5537	明治37年	冬の部	綿帽子糟糠の妻と呼做せり	綿帽子	人事
5538	明治37年	冬の部	此頃の日かげ慕し枯葎	枯葎	植物
5539	明治37年	冬の部	鮟鱇を市にさげすみ通りけり	鮟鱇	動物
5540	明治37年	冬の部	鳥叫や天紅ゐの雲起る	冬茜	天文
5541	明治37年	冬の部	冬夜吟千里の友に送りけり	冬夜	時候
5542	明治37年	冬の部	茶の友の参り合せし師走か南	師走	時候
5543	明治37年	冬の部	水に住む鱗むせぶ吹雪哉	吹雪	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5544	明治37年	冬の部	厄落し済みたる市の月夜か南	厄落	人事
5545	明治37年	冬の部	犠牲は毛の荒ものの寒さ哉	寒さ	時候
5546	明治37年	冬の部	良き馬に鍼一ツすや寒の入	寒の入	時候
5547	明治37年	冬の部	温石のぬくみ覚えつ寒の入	寒の入	時候
5548	明治37年	冬の部	虬斬て淵紅ゐや寒の水	寒の水	天文
5549	明治37年	冬の部	勤行に焔吐くらん寒の中	寒	時候
5550	明治37年	冬の部	寒一日先師の靈を祀りけり	寒	時候
5551	明治37年	冬の部	菊枯れて鳥の蹊となりにけり	枯菊	植物
5552	明治37年	冬の部	枯菊を焚いて餉をまゐらせぬ	枯菊	植物
5553	明治37年	冬の部	主の翁炉にほとりして菊をたく	圍爐裏	人事
5554	明治37年	冬の部	句の意落葉に菊ぞ懐しき	落葉	植物
5555	明治37年	冬の部	衰や詩巻に垂るゝ髯寒し	寒さ	時候
5556	明治37年	冬の部	水烟や山川の石にましら啼く	冬の靄	天文
5557	明治37年	冬の部	緋毛布にがらす戸をもる晷かな	毛布	人事
5558	明治37年	冬の部	袴着の客大学を講じけり	袴着	人事
5559	明治37年	冬の部	貝焼の河豚を照す孤燈かな	河豚	動物
5560	明治37年	冬の部	冬の日を愛する心起りけり	冬日	天文
5561	明治37年	冬の部	君が爲河豚な喰ひそと戒しめつ	河豚	動物
5562	明治37年	冬の部	射損じの枯木に折れし猟矢哉	狩	人事
5563	明治37年	冬の部	髪置や男女の席の正うす	髪置	人事
5564	明治37年	冬の部	臘八の曉天にうつ納豆か南	臘八	人事
5565	明治37年	冬の部	皮ごろも梅清香を発しけり	裘	人事
5566	明治37年	冬の部	埋火の消えゆく人の別かな	埋火	人事
5567	明治37年	冬の部	姑蘇遠し夜行く人に鐘冴ゆる	冴る	時候
5568	明治37年	冬の部	寒念佛功德の水も涸にけり	寒念佛	人事
5569	明治37年	冬の部	俳諧は聖道門のそばゆか南	蕎麥湯	人事
5570	明治37年	冬の部	貴妃に醉うて帝は知らず鬼やらひ	追儺	人事
5571	明治37年	冬の部	煮凍の猶腥き悪みけり	煮凝	人事
5572	明治37年	冬の部	大川の氷を渉る首途かな	氷	天文
5573	明治37年	冬の部	禅寺に冬の水わく暖き	冬の水	天文
5574	明治37年	冬の部	山林に冬の水凝る烟かな	冬の水	天文
5575	明治37年	冬の部	此山に黄金花さき冬の水	冬の水	天文
5576	明治37年	冬の部	さゝ鳴や廟をめぐる冬の水	冬の水	天文
5577	明治37年	冬の部	狼のねぶりあまりや冬の水	冬の水	天文
5578	明治37年	冬の部	燒跡をすぎて家あり冬椿	冬椿	植物
5579	明治37年	冬の部	すさましき師走の火事を見たりけり	師走	時候
5580	明治37年	冬の部	野の中の一軒燒くる吹雪か南	吹雪	天文
5581	明治37年	冬の部	火事埃施行の粥の白きか南	粥施行	人事
5582	明治37年	冬の部	枯芭蕉火事をのがれし庭の中	枯芭蕉	植物
5583	明治37年	冬の部	かき炙るわざ巧みなり浪花人	蛎	動物
5584	明治37年	冬の部	かき喰うて俳優を見る浪花哉	蛎	動物
5585	明治37年	冬の部	かき舟や舷にふる雪二寸	蛎	動物
5586	明治37年	冬の部	日蓮はかきくふ頃を去にけり	蛎	動物
5587	明治37年	冬の部	かき殻にまじる千鳥の糞白し	蛎	動物
5588	明治37年	冬の部	冬さうび花開きたる淋しさよ	冬薔薇	植物
5589	明治37年	冬の部	紅皿に落ちて死にけり冬の蝿	冬の蝿	動物
5590	明治37年	冬の部	水鳥の何に驚く羽音哉	水鳥	動物
5591	明治37年	冬の部	乾鮭に一派の宗を開きけり	乾鮭	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
5592	明治37年	冬の部	湯婆して紅顔の人を夢みけり	湯たんぽ	人事
5593	明治37年	冬の部	依稀として孤松を存ず菊の花	菊	植物
5908	明治38年	冬の部	狼に墓の樒の乱されし	狼	動物
5909	明治38年	冬の部	狼の痩せて劔に似たる哉	狼	動物
5910	明治38年	冬の部	巌穴に狼人を護りけり	狼	動物
5911	明治38年	冬の部	狼の氣を吐く見たり寒の雨	狼	動物
5912	明治38年	冬の部	狼に我が糧寒き山路哉	狼	動物
5913	明治38年	冬の部	鯛味噌の君や浪花に成長す	鯛味噌	人事
5914	明治38年	冬の部	落葉焚く煙かゝりぬ熊祭	熊祭	人事
5915	明治38年	冬の部	むかし人に別れし岡や桃落葉	落葉	植物
5916	明治38年	冬の部	喬木の沼を繞れる落葉哉	落葉	植物
5917	明治38年	冬の部	人知れず香焚きこめてざこね哉	雑魚寝	人事
5918	明治38年	冬の部	からうたを謠ふくすしや夷講	夷講	人事
5919	明治38年	冬の部	此も一時頭巾に花をかざしけり	頭巾	人事
5920	明治38年	冬の部	鑄物師の祭の頃や花八ツ手	八ツ手の花	植物
5921	明治38年	冬の部	ひたぶるに古を好み紙衣哉	紙衣	人事
5922	明治38年	冬の部	佩玉の鳴る凩や神の旅	神の旅	人事
5923	明治38年	冬の部	細矛千足のさまや神の旅	神の旅	人事
5924	明治38年	冬の部	水仙と孰れか寒き詩の心	水仙	植物
5925	明治38年	冬の部	終焉は巨燵離るゝが如きかな	炬燵	人事
5926	明治38年	冬の部	巨燵して菴の形勝依然たり	炬燵	人事
5927	明治38年	冬の部	秋色が家の巨燵に辜負しけり	炬燵	人事
5928	明治38年	冬の部	置巨燵江戸派の分野酒の跡	炬燵	人事
5929	明治38年	冬の部	芭蕉庵古びたれども巨燵哉	炬燵	人事
5930	明治38年	冬の部	冬の海蕭條として麦まきぬ	冬の海	天文
5931	明治38年	冬の部	冬の海眺めつきて寺に遊びけり	冬の海	天文
5932	明治38年	冬の部	海士が戸に路からびけり冬の海	冬の海	天文
5933	明治38年	冬の部	古松の韵キや冬の海に落つ	冬の海	天文
5934	明治38年	冬の部	冬の海辺暖かなれど枯芒	枯芒	植物
5935	明治38年	冬の部	年貢人難波の都しぬびけり	年貢	人事
5937	明治38年	冬の部	裘蒙茸として人と異り	裘	人事
6312	明治39年	冬の部	口切の文や橙黄ばむなど	口切	人事
6313	明治39年	冬の部	冬川や北に渡れば草もなし	冬川	天文
6314	明治39年	冬の部	小石白き坡に出でぬ落葉掻	落葉	植物
6315	明治39年	冬の部	山の物炭百俵や夷講	夷講	人事
6316	明治39年	冬の部	北の窓塞ぎぬ獣通ふらし	北窓塞	人事
6317	明治39年	冬の部	枯芒北見ゆる窓未だあり	枯芒	植物
6318	明治39年	冬の部	川涸や岸高うして家一つ	川涸	天文
6319	明治39年	冬の部	北風を遮る山もなかりけり	北風	天文
6320	明治39年	冬の部	庭前に更に花なし枯芭蕉	枯芭蕉	植物
6321	明治39年	冬の部	鬼潜む昼や日あかき冬木立	冬木	植物
6322	明治39年	冬の部	菊枯れて獨往くべき逕かな	枯菊	植物
6323	明治39年	冬の部	うつくまる背に斜日や落葉掻	落葉	植物
6324	明治39年	冬の部	窪路の石に錦や散紅葉	散紅葉	植物
6325	明治39年	冬の部	搗残す一斗の粟や菊枯るゝ	枯菊	植物
6326	明治39年	冬の部	凩に昼行く鬼を見たりけり	凩	天文
6327	明治39年	冬の部	凩に粟搗きこぼす戸口哉	凩	天文
6328	明治39年	冬の部	枯菊に風あり朋を送り出づ	枯菊	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6329	明治39年	冬の部	枯菊を刈る遑あり小百姓	枯菊	植物
6330	明治39年	冬の部	枯菊を惜まぬ心高き哉	枯菊	植物
6331	明治39年	冬の部	日々に枯行く菊を守りけり	枯菊	植物
6332	明治39年	冬の部	枯菊を見せまゐらする佗しさよ	枯菊	植物
6333	明治39年	冬の部	菊枯れて鴻稀に来る日哉	枯菊	植物
6334	明治39年	冬の部	陸の神水の神旅衣かな	神の旅	人事
6335	明治39年	冬の部	人踏まぬ銀杏落葉や神の旅	神の旅	人事
6336	明治39年	冬の部	枯菊を後に神を送りけり	枯菊	植物
6337	明治39年	冬の部	縹渺の空晨なり神の旅	神の旅	人事
6338	明治39年	冬の部	神の旅磊塊の石を想ひけり	神の旅	人事
6339	明治39年	冬の部	枯菊に遊ぶ誰が子ぞ綿帽子	綿帽子	人事
6340	明治39年	冬の部	綿帽子人は長安古意の中	綿帽子	人事
6341	明治39年	冬の部	隠棲むでやまと言葉や綿帽子	綿帽子	人事
6342	明治39年	冬の部	菜園に吾妻見たりわた帽子	綿帽子	人事
6343	明治39年	冬の部	綿帽子なくて遊女が雪見かな	雪見	人事
6344	明治39年	冬の部	年忘妻やきのふの想人	年忘	人事
6345	明治39年	冬の部	年忘一人は聞きつ川千鳥	年忘	人事
6346	明治39年	冬の部	とかくして師を醉はしめぬ年忘	年忘	人事
6347	明治39年	冬の部	川涸の河原に晝の焚火哉	川涸	天文
6348	明治39年	冬の部	只たのめ莖漬の石もお取越	御取越	人事
6349	明治39年	冬の部	里人の何かに集ふ神無月	神無月	時候
6350	明治39年	冬の部	賣らで去る霹靂魚賣や日みちかき	短日	時候
6351	明治39年	冬の部	水涸れて狩の矢拾ふ川原かな	川涸	天文
6352	明治39年	冬の部	榾焚いて殺生の身を悔にけり	榾	人事
6353	明治39年	冬の部	笹鳴や薮の下草尚青き	笹鳴	動物
6354	明治39年	冬の部	貯の油の壷や冬構	冬構	人事
6355	明治39年	冬の部	短日の行へも知らず鳥一つ	短日	時候
6356	明治39年	冬の部	一人ある針子も休む寒さ哉	寒さ	時候
6357	明治39年	冬の部	硯見れば水乾きたる寒さ哉	寒さ	時候
6358	明治39年	冬の部	錆びたれど鎗一筋の寒さ哉	寒さ	時候
6359	明治39年	冬の部	黄金壞く旅恐ろしき時雨哉	時雨	天文
6360	明治39年	冬の部	人なきにしぐるゝ山や大悲閣	時雨	天文
6361	明治39年	冬の部	寒巖の勢を作す達磨の日	達磨忌	人事
6362	明治39年	冬の部	茶の花に嘯くとしもなかりけり	茶の花	植物
6363	明治39年	冬の部	鴨なくやもののふ松尾忠左ェ門	鴨	動物
6364	明治39年	冬の部	口切や古びたれども坐右の銘	口切	人事
6365	明治39年	冬の部	橘緑に題す冬至の句作かな	冬至	時候
6366	明治39年	冬の部	年忘人の許しゝ両三句	年忘	人事
6367	明治39年	冬の部	みかん呉れて子を寐させけり年忘	年忘	人事
6368	明治39年	冬の部	年忘俳諧三十六頭顱	年忘	人事
6369	明治39年	冬の部	各の來る遲速や年忘	年忘	人事
6370	明治39年	冬の部	三人に硯一ツや年忘	年忘	人事
6371	明治39年	冬の部	菜畑に妻出行くよ年忘	年忘	人事
6372	明治39年	冬の部	曾遊の山を描くや年忘	年忘	人事
6373	明治39年	冬の部	年忘すと押やりつ灯下の書	年忘	人事
6374	明治39年	冬の部	あるものに風呂吹切るや年忘	年忘	人事
6375	明治39年	冬の部	賣尽す茶器に悔あり年忘	年忘	人事
6376	明治39年	冬の部	年忘越の友より送りもの	年忘	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6377	明治39年	冬の部	誰が得たる古短冊や年忘	年忘	人事
6378	明治39年	冬の部	二三子が題の所望や年忘	年忘	人事
6379	明治39年	冬の部	北の窓ふさく因に干菜哉	北窓塞	人事
6380	明治39年	冬の部	稀に鳴る神や北窓ふさぎけり	北窓塞	人事
6381	明治39年	冬の部	佗を知る畑や北の窓ふさぐ	北窓塞	人事
6382	明治39年	冬の部	川涸を見下ろす岡や風の吹く	川涸	天文
6383	明治39年	冬の部	川涸に日落る旅を急ぎけり	川涸	天文
6384	明治39年	冬の部	隙間もる日の短長や冬坐敷	冬座敷	人事
6385	明治39年	冬の部	絵草紙のをかしき添へつ衣配	衣配	人事
6386	明治39年	冬の部	皮ごろも幾たび琵琶に涙哉	裘	人事
6387	明治39年	冬の部	松明に沼の廣さや梟啼く	梟	動物
6388	明治39年	冬の部	人に示す遊戯文字や厄落し	厄落	人事
6389	明治39年	冬の部	さゝ鳴を驚かしたる斧斤かな	笹鳴	動物
6390	明治39年	冬の部	夜竊かに生海鼡の桶を覗きけり	海鼠	動物
6391	明治39年	冬の部	めら／＼と燃ゆる火急や河豚汁	河豚汁	人事
6392	明治39年	冬の部	雲に巻舒あり生海鼡を相るといつれ	海鼠	動物
6393	明治39年	冬の部	雪車が来て散らばる町の子とも哉	雪舟	人事
6394	明治39年	冬の部	大寒の夜の響や水時計	大寒	時候
6395	明治39年	冬の部	杉風のあき人ぶりや年の市	年の市	人事
6396	明治39年	冬の部	皃見せの昔を夢の炬燵かな	炬燵	人事
6670	明治40年	冬の部	遊猟の幸なきことを吟じけり	狩	人事
6671	明治40年	冬の部	十年の山居遊猟の友が来る	狩	人事
6672	明治40年	冬の部	人の着る毛布もほしや年貢時	年貢	人事
6673	明治40年	冬の部	我旅の遠々しさよ古こよみ	古暦	人事
6674	明治40年	冬の部	古暦家に債もなかりけり	古暦	人事
6675	明治40年	冬の部	冬の日や樹を伐仆す五六本	冬の日	時候
6676	明治40年	冬の部	湯豆腐や少年輩は狩に行く	湯豆腐	人事
6677	明治40年	冬の部	巻中の艶な一句や年忘	年忘	人事
6678	明治40年	冬の部	主癖あり客に媚なし年忘	年忘	人事
6679	明治40年	冬の部	夜話の人こそ知らね垂氷かな	垂氷	天文
6680	明治40年	冬の部	笹鳴や貢の氷魚の皆活くる	笹鳴	動物
6681	明治40年	冬の部	茶畠に普請の屑も師走なる	師走	時候
6682	明治40年	冬の部	名に高き早川にして氷かな	氷	天文
6683	明治40年	冬の部	氷堅し人と別れて二三日	氷	天文
6684	明治40年	冬の部	氷る沼岸の高木の風に反る	凍る	天文
6685	明治40年	冬の部	誰がわざの神の扉に雪つぶて	雪遊び	人事
6686	明治40年	冬の部	乳母が居る家の灯を見て雪滑り	雪遊び	人事
6687	明治40年	冬の部	水涕や只水仙の爲に坐す	水仙	植物
6688	明治40年	冬の部	我馬の驚きやすき枯野哉	枯野	天文
6689	明治40年	冬の部	落窪に水田が見ゆる枯野哉	枯野	天文
6690	明治40年	冬の部	前書も三度更ゆ冬篭の句	冬籠	人事
6691	明治40年	冬の部	奥の田は水も落さず神の留守	神の旅	人事
6692	明治40年	冬の部	金銭を見るに満地の木葉哉	木葉	植物
6693	明治40年	冬の部	雪垣にちょとかくれけり歌舞の人	雪垣	人事
6694	明治40年	冬の部	十二橋家悉く雪垣す	雪垣	人事
6695	明治40年	冬の部	雪垣をして南山を見ずなりぬ	雪垣	人事
6696	明治40年	冬の部	雪垣に取残されし八ツ手哉	雪垣	人事
6697	明治40年	冬の部	雪垣や猪かつぎ込む雪明り	雪垣	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6698	明治40年	冬の部	聖経に倦で湯豆腐欲しけり	湯豆腐	人事
6699	明治40年	冬の部	湯豆腐の味知れと霰かな	湯豆腐	人事
6700	明治40年	冬の部	湯豆腐の一味自力の法語哉	湯豆腐	人事
6701	明治40年	冬の部	湯豆腐や日を短かゞる人の来て	湯豆腐	人事
6702	明治40年	冬の部	誤って師の坊に中つ雪つぶて	雪遊び	人事
6703	明治40年	冬の部	山に擬して反古つみけり冬篭	冬籠	人事
6704	明治40年	冬の部	時ならず馬で山越す霰かな	霰	天文
6705	明治40年	冬の部	碧梧桐が佐渡の咄や年忘	年忘	人事
6706	明治40年	冬の部	物あれバ垂氷す水の在所哉	垂氷	天文
6707	明治40年	冬の部	炭俵賣る午過や垂氷落つ	垂氷	天文
6708	明治40年	冬の部	浪に日の網に幸なし冬の海	冬の海	天文
6709	明治40年	冬の部	眠れりといふ山も見ゆ冬の海	冬の海	天文
6710	明治40年	冬の部	親汐のあたりの雲か冬の海	冬の海	天文
6711	明治40年	冬の部	麦蒔や人の後の冬の海	冬の海	天文
6712	明治40年	冬の部	磯の木に雷落ちて冬の海	冬の海	天文
6713	明治40年	冬の部	図書室にいつもの人と煖爐哉	暖爐	人事
6714	明治40年	冬の部	煖爐焚や雪の兎を語草	暖爐	人事
6715	明治40年	冬の部	卓上のみかんに遠き煖爐哉	暖爐	人事
6716	明治40年	冬の部	去る人を煖爐離れて送りけり	暖爐	人事
6717	明治40年	冬の部	二人寄れバ我顔ほてる煖爐哉	暖爐	人事
6718	明治40年	冬の部	山越の苛き年貢や枯芒	枯芒	植物
6723	明治40年	冬の部	親汐に逆ふ船や冬の月	冬の月	天文
6725	明治40年	冬の部	紙鳶の絵の腹案もあり師走哉	師走	時候
6726	明治40年	冬の部	水仙に似げなき手蹟拙さよ	水仙	植物
6727	明治40年	冬の部	水仙の南帖梅の北碑かな	雑	雑
6728	明治40年	冬の部	古駅此一木のちりもみぢ	散紅葉	植物
6729	明治40年	冬の部	豆腐買ふ頃一しきり散紅葉	散紅葉	植物
6730	明治40年	冬の部	斧入れて見る／＼中や散紅葉	散紅葉	植物
6731	明治40年	冬の部	鼠穴に蓄の栗ちりもみぢ	散紅葉	植物
6732	明治40年	冬の部	ちり紅葉買山の銭足らぬ也	散紅葉	植物
6733	明治40年	冬の部	大川のへりゆく水や神の留守	神の旅	人事
6734	明治40年	冬の部	鶴々の水鳥一つ神の留守	神の旅	人事
6735	明治40年	冬の部	小舟囲ふ川辺の里や神の留守	神の旅	人事
6736	明治40年	冬の部	残る菊の黄がちとなりぬ神の留守	神の旅	人事
6737	明治40年	冬の部	いさかひの地も末枯や神の留守	神の旅	人事
6985	明治41年	冬の部	濱便り日々届く小春かな	小春	時候
6986	明治41年	冬の部	鉄瓶に汲む茶の水や霜朝夕	霜	天文
6987	明治41年	冬の部	産屋明きの日の朝晴や笹鳴す	笹鳴	動物
6988	明治41年	冬の部	一語だも著せず頭巾清らなり	頭巾	人事
6989	明治41年	冬の部	さつ箭とぶと見るや頭巾の漢子出づ	頭巾	人事
6990	明治41年	冬の部	並木切るに公事定まりぬ冬構	冬構	人事
6991	明治41年	冬の部	酢徳利も空に賣れたり夕氷	氷	天文
6992	明治41年	冬の部	志士年忌堅氷の詩を作りけり	氷	天文
6993	明治41年	冬の部	寒月や皆そら事の小町塚	寒月	天文
6994	明治41年	冬の部	象潟に美妓のいつ来て冬の月	冬の月	天文
6995	明治41年	冬の部	截鉄の斬釘の筆氷りけり	凍る	天文
6996	明治41年	冬の部	厚氷朝課の素讀果しけり	氷	天文
6998	明治41年	冬の部	この鍬にこの鎌に初しぐれかな	時雨	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
6999	明治41年	冬の部	柴門をくゞる乾鮭の孤峭かな	乾鮭	人事
7000	明治41年	冬の部	削去りて二三句存す除夜の鐘	除夜の鐘	人事
7001	明治41年	冬の部	等類の句に恥知るや年忘	年忘	人事
7002	明治41年	冬の部	足袋はくや年々つのる登山癖	足袋	人事
7003	明治41年	冬の部	冬藏の林檎紅ゐ煥発す	冬	時候
7004	明治41年	冬の部	民間に氏かゞやかす神樂かな	神樂	人事
7005	明治41年	冬の部	窮陰の地に火のほ立つ神樂かな	神樂	人事
7006	明治41年	冬の部	一山の一皴長し冬の川	冬川	天文
7007	明治41年	冬の部	冬木描く筆意冬川流れけり	冬川	天文
7008	明治41年	冬の部	冬川や北に片よる鳳凰堂	冬川	天文
7009	明治41年	冬の部	洲を行けば山の裏見ゆ冬の川	冬川	天文
7010	明治41年	冬の部	冬川や火見揩子も岸並木	冬川	天文
7011	明治41年	冬の部	方正の囲ろり孤獨の二人かな	圍爐裏	人事
7012	明治41年	冬の部	ゐろり端や鞘なき山刀の底光り	圍爐裏	人事
7013	明治41年	冬の部	大榾のゐろりに兀と酒の燗	圍爐裏	人事
7014	明治41年	冬の部	雪沓に燃えつけば去るゐろり哉	圍爐裏	人事
7015	明治41年	冬の部	根榾葉榾ゐろりにさがす雪の竿	圍爐裏	人事
7019	明治41年	冬の部	怙字恃字に灯前の眼を寒うしぬ	寒さ	時候
7021	明治41年	冬の部	此國の頭巾も脱がぬ頃なりし	頭巾	人事
7022	明治41年	冬の部	里の子と路に遊べり風の神	冬の風	天文
7023	明治41年	冬の部	風邪の神に後見らるゝ灯下哉	風邪	人事
7169	明治42年	冬の部	冬空や咎なくてやは墓木伐る	冬空	天文
7170	明治42年	冬の部	一字删る誄辞の稿や冬空に	冬空	天文
7171	明治42年	冬の部	短日や学人菊を焚く遑	短日	時候
7172	明治42年	冬の部	活計に輕舸操縱日短き	短日	時候
7173	明治42年	冬の部	短日や書は浩瀚にして售れず	短日	時候
7174	明治42年	冬の部	來年の暦話も日短に	短日	時候
7175	明治42年	冬の部	朱に墨に製図師に晷短しや	短日	時候
7176	明治42年	冬の部	話柄漁季に岐れ短き日脚哉	短日	時候
7177	明治42年	冬の部	待ちわぶる樺太便り日短き	短日	時候
7178	明治42年	冬の部	短日や文庫の森の夕鴉	短日	時候
7179	明治42年	冬の部	日短かの己れ急げば猟人も	短日	時候
7180	明治42年	冬の部	短日の虎を打ちしは武松也	短日	時候
7181	明治42年	冬の部	貧を侮る又の使や鴨の声	鴨	動物
7182	明治42年	冬の部	鴨啼くや家宝に図会と繁昌記	鴨	動物
7183	明治42年	冬の部	廩粟の耗りを憂や里冬木	冬木	植物
7184	明治42年	冬の部	石投げて冬木に中つる晷哉	冬木	植物
7185	明治42年	冬の部	巻末に至れバ冬木鳴やみぬ	冬木	植物
7186	明治42年	冬の部	法に飢ゑ道に渇きぬ寺冬木	冬木	植物
7187	明治42年	冬の部	筆意反り刀法屈む冬木哉	冬木	植物
7188	明治42年	冬の部	水鳥や狂言綺語に夢疲る	水鳥	動物
7189	明治42年	冬の部	水鳥や素懐を遂げて君と在り	水鳥	動物
7190	明治42年	冬の部	水鳥や沙弥の昔を見知る松	水鳥	動物
7191	明治42年	冬の部	水鳥や遺墨見し眼に筆法も	水鳥	動物
7192	明治42年	冬の部	浮寢鳥旅泊の綺夢に砭す	水鳥	動物
7194	明治42年	冬の部	筆硯又笹鳴の句を思ふ	笹鳴	動物
7196	明治42年	冬の部	因に榾の一句あり證シとす	榾	人事
7289	明治43年	冬の部	新嘗の祭器見て久し冬篭	冬籠	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7290	明治43年	冬の部	課題再び香奩體や冬ごもり	冬籠	人事
7291	明治43年	冬の部	道しるべに誰が救はれむ冬ごもり	冬籠	人事
7292	明治43年	冬の部	瑣事の文に羽檄と題す冬篭	冬籠	人事
7293	明治43年	冬の部	妻賢に厨あかるし冬ごもり	冬籠	人事
7294	明治43年	冬の部	跡を絶ちし惡獣を繪に冬篭	冬籠	人事
7295	明治43年	冬の部	薪割てふと樹齢知る冬ごもり	冬籠	人事
7297	明治43年	冬の部	後援の事氣短に冬篭	冬籠	人事
7388	明治44年	冬の部	橙黄に吉事あり山眠る里	山眠る	天文
7389	明治44年	冬の部	里冬木他が舌鋒を挫くべし	冬木	植物
7390	明治44年	冬の部	筆陣の虚を狙ふ主冬日向	冬日	天文
7391	明治44年	冬の部	水鳥に夜学提灯はや過ぎし	水鳥	動物
7392	明治44年	冬の部	雪下ろし終へよ狸が煮えたるに	雪下し	人事
7393	明治44年	冬の部	山僧の跡雪沓の尻長に	雪沓	人事
7394	明治44年	冬の部	句意に人と相識るや水鳥も見て	水鳥	動物
7395	明治44年	冬の部	壽宴に皆詩あり遠近山眠る	山眠る	天文
7396	明治44年	冬の部	松雪折れ霽れての瀬鳴高々に	雪折れ	植物
7397	明治44年	冬の部	杉山を負ひ戸々富めり冬の水	冬の水	天文
7398	明治44年	冬の部	旅人はや大槻の陰に冬田哉	冬田	天文
7399	明治44年	冬の部	冬木仆す三五人の鬨疾き雲に	冬木	植物
7400	明治44年	冬の部	水郷の魚買ひに大寒日和あり	大寒	時候
7401	明治44年	冬の部	雪沓の産土神詣はれがまし	雪沓	人事
7403	明治44年	冬の部	菅薦の句もありけむを霜の声	霜	天文
7525	明治45年	冬の部	掃除檢査も小家勝神の留守をすむ	神の旅	人事
7526	明治45年	冬の部	神を送る峯又峯の尽くるなき	神の旅	人事
7528	明治45年	冬の部	枯菊を見てありき思ふ遺句の事	枯菊	植物
7529	明治45年	冬の部	冬かまへ早し垣の内の落葉ふむ	冬構	人事
7530	明治45年	冬の部	村一番憎まれものゝ冬構	冬構	人事
7531	明治45年	冬の部	年忘一偈に襟を正うす	年忘	人事
7532	明治45年	冬の部	隠語解せぬ我醉早し年忘	年忘	人事
7533	明治45年	冬の部	大官と美人と寒霧を衝て雪車	雪舟	人事
7534	明治45年	冬の部	雪舟疾し北國穹廬夕づく日	雪舟	人事
7535	明治45年	冬の部	笹鳴や家祖祭の珍長き薯	笹鳴	動物
7536	明治45年	冬の部	屋髙煤掃き終へし不時雷鳴に	煤拂	人事
7537	明治45年	冬の部	煤箒立つる庭青空も見し	煤拂	人事
7547	大正２年	冬の部	雪雲の一重雨雲の八重春近き	春近し	時候
7548	大正２年	冬の部	名残燒く籾殻の阜春隣	春近し	時候
7550	大正２年	冬の部	さながらに雪道作れ下部ども	雪	天文
7669	大正２年	冬の部	はつあられ菊の奴を鞭ちぬ	霰	天文
7671	大正２年	冬の部	さゝ鳴や神に誓ひし面晴れ	笹鳴	動物
7673	大正２年	冬の部	水の低きに就く音とさゝ鳴と	笹鳴	動物
7674	大正２年	冬の部	伐木に戸寒し昔の頭巾思ふ	頭巾	人事
7675	大正２年	冬の部	雷鳴のこれを名殘か蕪引	蕪引	人事
7676	大正２年	冬の部	草搾り木しぼり尽きて水涸れ／＼	水涸	天文
7677	大正２年	冬の部	冬山に國見す樹を伴石を侶	冬山	天文
7752	大正３年	冬の部	話柄又薫染の事さゝ鳴て	笹鳴	動物
7754	大正３年	冬の部	枯菊の句もなし雪に埋もれ泣く	雪	天文
7833	大正５年	冬の部	風呂吹の味噌を點ずる第一義	風呂吹	人事
7834	大正５年	冬の部	大晴レの烟となりぬ冬の水	冬の水	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
7835	大正５年	冬の部	寒の雨に老木の腕潤へり	寒の雨	天文
7836	大正５年	冬の部	この凍に醉人と道に別れけり	凍る	天文
7837	大正５年	冬の部	土掘れバ物の根切らる夕しぐれ	時雨	天文
7838	大正５年	冬の部	冬枯や尚鍬下ろす土の友	冬枯	植物
7839	大正５年	冬の部	和韵至る硯池の氷解にけり	氷	天文
7841	大正５年	冬の部	新涼の目に澄み耳に徹りけり	新涼	時候
7842	大正５年	冬の部	寒ン晴やまこと獣の穴にして	寒晴	天文
7843	大正５年	冬の部	晝餉最中に獣狩の鬨の声（冬篭）	狩	人事
7844	大正５年	冬の部	夜学出て一尺の雪に呼びかはす（山家）	雪	天文
7845	大正５年	冬の部	門に立つ我が放心よ三十三才	鷦鷯	動物
7846	大正５年	冬の部	早起枯菊を焚く我寒に入る	寒の入	時候
7847	大正５年	冬の部	一ところの雲明り冬木立かな	冬木	植物
7848	大正５年	冬の部	狐見ゆたま／＼大寒の靄ゆうべ	大寒	時候
7849	大正５年	冬の部	書楼より隣の干菜見る久し	干菜	人事
7850	大正５年	冬の部	沈思より起てバ冬木の怖ろしき	冬木	植物
7851	大正５年	冬の部	氷餅につく雀追へバ日昇る	氷餅	人事
7852	大正５年	冬の部	画賛の句を想ふ庭の枯柳	枯柳	植物
7853	大正５年	冬の部	書樓下る毎に北風の音す也	北風	天文
7854	大正５年	冬の部	画幅巻いて商人辞去す枯柳	枯柳	植物
7855	大正５年	冬の部	北風の屋鳴り画賛の筆を措く	北風	天文
7857	大正５年	冬の部	長辰宮南に暗き椿かな	椿	植物
7859	大正５年	冬の部	風邪の夢に南朝の古蹟冬されし	冬ざれ	時候
7860	大正５年	冬の部	薪足る積嵩や鷦鷯鳴く	鷦鷯	動物
7861	大正５年	冬の部	大寒や夕晴の山の彼方海	大寒	時候
7862	大正５年	冬の部	風邪に臥して土うつ寒の雨をきく	寒の雨	天文
7863	大正５年	冬の部	土玄し北國希有に雪ふらぬ	雪	天文
7864	大正５年	冬の部	病起一朝の雪の深さを行く	雪	天文
7865	大正５年	冬の部	氷餅吊す夜や谿川の水の音	氷餅	人事
7866	大正５年	冬の部	潜む魚に氷砕くや日昇る	氷	天文
7867	大正５年	冬の部	晝榾火に傳家刀見る機会哉	榾	人事
7868	大正５年	冬の部	日暄かに一炉根榾の燃え尽きず	榾	人事
7869	大正５年	冬の部	高山を後ろに推す雪舟の疾き	雪舟	人事
7870	大正５年	冬の部	夜学又大勢となりぬ積る雪	雪	天文
7871	大正５年	冬の部	春近き消息や硯池乾きけり	春近し	時候
7872	大正５年	冬の部	難解の書を讀了へぬ春隣	春近し	時候
7873	大正５年	冬の部	山脈の雪に書樓の起居かな	雪	天文
7874	大正５年	冬の部	炭竈の一時冬日正面なる	冬日	天文
7875	大正５年	冬の部	冬日落ちゆくに尚斧揮ふあり	冬日	天文
8031	大正５年	冬の部	草鞋の泥乾くまもなし栗落葉	落葉	植物
8032	大正５年	冬の部	朽葉ふみゆけバ菊の黄活きてあり	朽葉	植物
8033	大正５年	冬の部	書樓日々木葉掃出す三五片	落葉	植物
8034	大正５年	冬の部	書出シをかゝねばならぬ日の暮るゝ	掛乞	人事
8035	大正５年	冬の部	吾庭にのみあり芭蕉枯れにけり	枯芭蕉	植物
8036	大正５年	冬の部	山郭や我は顔なる干大根	干大根	人事
8037	大正５年	冬の部	霜朝日障子の中に泣く乳児よ	霜	天文
8038	大正５年	冬の部	莢開いて豆自から落つ達磨の忌	達磨忌	人事
8040	大正５年	冬の部	遠山の雪看る市の蜜柑かな	雪	天文
8041	大正５年	冬の部	遠山の雪耀けり一架の書	雪	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8042	大正５年	冬の部	鷹凛々雪尖る北方の山	雪	天文
8043	大正５年	冬の部	雪疊む山遠し大河日に涸るゝ	雪	天文
8044	大正５年	冬の部	玻璃窓の曇拭へり庭冬木	冬木	植物
8045	大正５年	冬の部	海底へ冬雷の失せにけり	冬雷	天文
8046	大正５年	冬の部	机一つ藏書さてなし煤拂	煤拂	人事
8047	大正５年	冬の部	すゝの日や到來の柑子端近な	煤拂	人事
8048	大正５年	冬の部	子等が頬いよ／＼紅し年の暮	年の暮	時候
8049	大正５年	冬の部	鬢斜に燭寒し海鳥の鳴く	寒さ	時候
8050	大正５年	冬の部	曲閼れバ冬木原又風の吹く	冬木	植物
8058	大正６年	冬の部	河に臨むて氷堅きを信じけり	氷	天文
8059	大正６年	冬の部	漁夫の群大きくなりぬ厚氷	氷	天文
8062	大正６年	冬の部	吹雪ぬくや我が肺腸のもゆる音	吹雪	天文
8063	大正６年	冬の部	髙樅を楯に家栖む冬日かな	冬の日	時候
8064	大正６年	冬の部	泣きやまぬ兒に吹雪婆の驚破來る	吹雪	天文
8065	大正６年	冬の部	青空を見るうれしさよ屋根の雪	雪	天文
8066	大正６年	冬の部	朝な／＼雪道踏むや山遠き	雪	天文
8067	大正６年	冬の部	大雪に露はなる我頭かな	雪	天文
8068	大正６年	冬の部	日景通ふ雪に埋れて鶏の鳴く	雪	天文
8069	大正６年	冬の部	雀の如ふくらみて雪の人の來る	雪	天文
8070	大正６年	冬の部	閑話良久し屢々垂氷落つ	垂氷	天文
8071	大正６年	冬の部	村文庫へ雪沓の痕新らしき	雪沓	人事
8072	大正６年	冬の部	門札の我名見古りぬ枯柳	枯柳	植物
8073	大正６年	冬の部	磧より炭竈の烟見上げたり	炭がま	人事
8075	大正６年	冬の部	青空を見る偶々や冬の水	冬の水	天文
8076	大正６年	冬の部	凍霧の中夜明の瀬鳴り髙まさる	凍霧	天文
8077	大正６年	冬の部	屋根の雪おろす本堂鳴ひゞく	雪下し	人事
8190	大正６年	冬の部	初冬の雲に壓さるゝ小村哉	初冬	時候
8191	大正６年	冬の部	常盤木に神鎭まるや玉霰	霰	天文
8192	大正６年	冬の部	雜穀地にこぼれ霰雲の飛ぶ	霰	天文
8193	大正６年	冬の部	霰急渡りおくれし藪小鳥	霰	天文
8194	大正６年	冬の部	廬を出でゝ古人に似たる時雨哉	時雨	天文
8195	大正６年	冬の部	獨ゆく我に木葉のふることよ	木葉	植物
8197	大正６年	冬の部	ゆく春のこというて山を下りけり	行春	時候
8199	大正６年	冬の部	輕寒と怕る眉目や小六月	小春	時候
8200	大正６年	冬の部	雪の笹に馬遊バすや事始	事始	人事
8201	大正６年	冬の部	鮭さげし人にゆづりぬ落葉道	落葉	植物
8204	大正６年	冬の部	雀飢ゑて軒を離れず枯柳	枯柳	植物
8206	大正６年	冬の部	天髙地厚菊もろ／＼の影	菊	植物
8207	大正６年	冬の部	賢といはむ菊に仕へて樂める	菊	植物
8209	大正６年	冬の部	枝を擇む悲しき鳥や冬木立	冬木	植物
8217	大正７年	冬の部	群木は雪にうもれて松と我	雪	天文
8218	大正７年	冬の部	釜の湯の徒に沸騰す吹雪哉	吹雪	天文
8219	大正７年	冬の部	雪の城垂氷の砦書に籠る	雜	雜
8220	大正７年	冬の部	我が蒲團の裾邊萬國地圖掛る	蒲團	人事
8221	大正７年	冬の部	この雪の下に青菜の偃しあらむ	雪	天文
8222	大正７年	冬の部	風邪去らぬ頭冬川に臨みけり	冬川	天文
8223	大正７年	冬の部	今朝も掃かれず障子の羽虫いつ凍てし	凍る	天文
8224	大正７年	冬の部	冬川に明るき樹影帆影哉	冬川	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8225	大正７年	冬の部	産土神の杉を力や雪の中	雪	天文
8226	大正７年	冬の部	凍霧晴に人々の睛耀けり	凍霧	天文
8227	大正７年	冬の部	樹々骨の如く凍霧裂けて飛ぶ	凍霧	天文
8228	大正７年	冬の部	朝日充ちて蒼空に凍霧消えゆけり	凍霧	天文
8229	大正７年	冬の部	雪凍てし響あり稀に行く人に	雪	天文
8230	大正７年	冬の部	雪沓の又しも足に合はぬかな	雪沓	人事
8373	大正７年	冬の部	木葉飛ぶ頻に谷の水騒ぐ	木葉	植物
8374	大正７年	冬の部	神儼に杜にいますや散紅葉	散紅葉	植物
8375	大正７年	冬の部	竹伐て紅葉大方ちらしけり	散紅葉	植物
8376	大正７年	冬の部	新嘗のたなつもの紅葉散はゆる	散紅葉	植物
8377	大正７年	冬の部	人并に干菜釣得て妻のあり	干菜	人事
8378	大正７年	冬の部	かの母も子等が需むる胼藥	皸	人事
8380	大正７年	冬の部	枯野ゆくまがつひ何に潜みたる	枯野	天文
8382	大正７年	冬の部	いかなれバ物狂はしう霰うつ	霰	天文
8384	大正７年	冬の部	行年や尚あり／＼と天の川	行年	時候
8385	大正７年	冬の部	日短く師走の空の窄まりぬ	師走	時候
8386	大正７年	冬の部	少閒に只山を見つ年の暮	年の暮	時候
8387	大正７年	冬の部	或日獨書齋の煤を拂ひけり	煤拂	人事
8388	大正７年	冬の部	足跡もなき鎭守の雪や札納	札納	人事
8389	大正７年	冬の部	行年の一日の晴を惜みけり	行年	時候
8390	大正７年	冬の部	大方の人に咎なし年忘	年忘	人事
8391	大正７年	冬の部	年尽るまで枯菊を守りけり	枯菊	植物
8392	大正７年	冬の部	書出シ配り終へて主人澹如たり	掛乞	人事
8393	大正７年	冬の部	子等が歌ふこん／＼霰年暮るゝ	年の暮	時候
8395	大正７年	冬の部	この寒さ温石いかにし給ひし	温石	人事
8405	大正８年	冬の部	飴笹のひたからびけり冬籠	冬籠	人事
8407	大正８年	冬の部	春立つや衣裳好みの甲斐／＼し	立春	時候
8408	大正８年	冬の部	霜柱ゆく／＼筑波遙かなり	霜柱	天文
8409	大正８年	冬の部	魚ハ淵に潜みて久し霜柱	霜柱	天文
8410	大正８年	冬の部	霜柱の中に去來が墓石哉	霜柱	天文
8411	大正８年	冬の部	丈山の足跡見よや霜柱	霜柱	天文
8412	大正８年	冬の部	松間を僧俗二人霜柱	霜柱	天文
8413	大正８年	冬の部	霜柱金色堂は鎖されて	霜柱	天文
8414	大正８年	冬の部	武蔵野の芒残りぬ霜柱	霜柱	天文
8415	大正８年	冬の部	霜柱寒雁鳴いて渡りけり	霜柱	天文
8416	大正８年	冬の部	霜柱例の針子が小風呂敷	霜柱	天文
8417	大正８年	冬の部	霜柱水暖かに流れけり	霜柱	天文
8577	大正８年	冬の部	巖すべりて水に流るゝちり紅葉	散紅葉	植物
8578	大正８年	冬の部	落葉深く籾磨奥に聞ゆ也	落葉	植物
8579	大正８年	冬の部	早起の子等踏みてをり今朝落葉	落葉	植物
8580	大正８年	冬の部	大川に沿うてあるきぬ日短く	短日	時候
8581	大正８年	冬の部	落葉ふむで夜も行かふ隣どち	落葉	植物
8582	大正８年	冬の部	日の中に木葉ふり／＼静まりぬ	木葉	植物
8583	大正８年	冬の部	霜ながら物皆朝を動きつゝ	霜	天文
8585	大正８年	冬の部	この山をしぐれて帰る湖の人	時雨	天文
8586	大正８年	冬の部	草錦霰消ゆるに降りそゝぐ	霰	天文
8587	大正８年	冬の部	水槽の底へ木葉や一時雨	木葉	植物
8588	大正８年	冬の部	麦蒔の晝餉や海の鳥來鳴く	麦蒔	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
8589	大正８年	冬の部	麦蒔に霜の兆の天青し	麦蒔	人事
8590	大正８年	冬の部	麦蒔人心無げやな草の花	麦蒔	人事
8591	大正８年	冬の部	麦を蒔く土軟かや雁稀に	麦蒔	人事
8592	大正８年	冬の部	我糧の麦蒔く夫婦憩ひけり	麦蒔	人事
8593	大正８年	冬の部	風掃くや麦蒔き終へし土と人	麦蒔	人事
8594	大正８年	冬の部	麦蒔の短日土の黒き哉	麦蒔	人事
8595	大正８年	冬の部	麦蒔の藁灰飛ぶや風曇り	麦蒔	人事
8596	大正８年	冬の部	麦蒔に遲き日出でゝぬくさ哉	麦蒔	人事
8597	大正８年	冬の部	凩の下に麦蒔しづまりぬ	麦蒔	人事
8598	大正８年	冬の部	北國の麦蒔日和称へけり	麦蒔	人事
8600	大正８年	冬の部	風呂吹の湯氣の中より宣はく	風呂吹	人事
8610	大正９年	冬の部	未了寒し決定の時尚寒し	寒さ	時候
8611	大正９年	冬の部	雪舞ふや鴛鴦見失ふ水の隈	雪	天文
8612	大正９年	冬の部	篁の雪に朝茶の煙かな	雪	天文
8613	大正９年	冬の部	雪ちるや神の泉の苔の上	雪	天文
8614	大正９年	冬の部	湖照るや松のあはひの比良の雪	雪	天文
8615	大正９年	冬の部	曉天の第一砲や雪の山	雪山	天文
8616	大正９年	冬の部	鷹飛ぶや峯の雪ふむ旅の者	雪	天文
8617	大正９年	冬の部	薄雪や梅の在所の道普請	雪	天文
8618	大正９年	冬の部	日色なし雪に聳ゆる雪の山	雪	天文
8619	大正９年	冬の部	簾外の雪に小櫂や歌舞の町	雪	天文
8620	大正９年	冬の部	かれ／＼し芒に雪の小鳥哉	雪	天文
8621	大正９年	冬の部	神木にはや道絶えし深雪かな	雪	天文
8622	大正９年	冬の部	古椿雪暖かにすべりけり	雪	天文
8624	大正９年	冬の部	言靈の鶯の春をも待たず	春待	時候
8626	大正９年	冬の部	可憐綺夢驚いてこたつ冷ゆ	炬燵	人事
8627	大正９年	冬の部	蒲團去れバこたつの骸古びたり	炬燵	人事
8628	大正９年	冬の部	我と老いぬこたつ蒲團の蝶鳥も	炬燵	人事
8629	大正９年	冬の部	こたつ出て狩に行く人見送りぬ	炬燵	人事
8630	大正９年	冬の部	こたつして曾遊遠き思かな	炬燵	人事
8631	大正９年	冬の部	置こたつ故人遠く寄す吉野の句	炬燵	人事
8632	大正９年	冬の部	蝿生きてこたつ蒲團の香に漂ふ	炬燵	人事
8633	大正９年	冬の部	こたつ知らぬ老の僕ぞ何にゆく	炬燵	人事
8634	大正９年	冬の部	こたつ蒲團の裾辺玩具の鳥獣	炬燵	人事
8635	大正９年	冬の部	こたつ蒲團の香を吐く雪の小庭哉	炬燵	人事
8750	大正９年	冬の部	物潜みつくして落葉静まりぬ	落葉	植物
8751	大正９年	冬の部	我と共に落葉ふみ行く人もなし	落葉	植物
8752	大正９年	冬の部	日暮るゝに落葉掃殘す一樹哉	落葉	植物
8754	大正９年	冬の部	詩書堆裏兒等橙を玩ぶ	橙	植物
8912	大正10年	冬の部	風吹けバ物の悲しき釣干菜	干菜	人事
8913	大正10年	冬の部	物の緒の枯木に絡む鷹野哉	枯木	植物
8921	大正11年	冬の部	鳥寒くさかしまに落つ壑の底	寒さ	時候
8922	大正11年	冬の部	冬雲の明るき處なかりけり	冬の雲	天文
8923	大正11年	冬の部	冬雲と流るゝ茶毘の煙哉	冬の雲	天文
8924	大正11年	冬の部	人々も柩も一時吹雪哉	吹雪	天文
8925	大正11年	冬の部	いつち行きし我子や冬木そゝり立つ	冬木	植物
9102	大正11年	冬の部	武藏野の冬菜所や富士白し	冬菜	植物
9103	大正11年	冬の部	武藏野の霜に面を曬しけり	霜	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9105	大正11年	冬の部	岩山に凍えし鳥と見ゆる哉	凍る	天文
9106	大正11年	冬の部	川涸れて生物何に潜みけむ	川涸	天文
9108	大正11年	冬の部	筆硯を凍てさせじとす冬籠	冬籠	人事
9110	大正11年	冬の部	折ふしハ冬至近き日さす故に	冬至	時候
9111	大正11年	冬の部	曼陀羅を後ろに落葉踏去りぬ	落葉	植物
9112	大正11年	冬の部	落葉踏むこと良久し富士見ゆる	落葉	植物
9113	大正11年	冬の部	岩山に吹きも溜らぬ落葉哉	落葉	植物
9114	大正11年	冬の部	東京より歸れバ落葉庭を埋む	落葉	植物
9115	大正11年	冬の部	谿落葉くゞり來て水明かに	落葉	植物
9116	大正11年	冬の部	桑の何の五畝の落葉のつもるまゝ	落葉	植物
9117	大正11年	冬の部	落葉焚きし烟うすれてたそがるゝ	落葉	植物
9118	大正11年	冬の部	落葉かけバ水自から流れけり	落葉	植物
9119	大正11年	冬の部	庭もせの落葉静まる月夜哉	落葉	植物
9120	大正11年	冬の部	日中は人も落葉も騒がしき	落葉	植物
9121	大正11年	冬の部	水際の葦四五本や鴨遊ぶ	鴨	動物
9122	大正11年	冬の部	水鳥の飛ぶ颯爽と水の上	水鳥	動物
9123	大正11年	冬の部	この頃の悲しき色や冬の雲	冬の雲	天文
9124	大正11年	冬の部	冬構ガラスの明り頼もしき	冬構	人事
9129	大正12年	冬の部	枯れ／＼し藪や茨の実生きてあり	枯茨	植物
9130	大正12年	冬の部	叫ぶものに皆いのちある吹雪哉	吹雪	天文
9131	大正12年	冬の部	冬川を渡らんと思ふ狐哉	冬川	天文
9132	大正12年	冬の部	冬川を偶々過ぎし雀かな	冬川	天文
9133	大正12年	冬の部	冬川に何する人と鴉かな	冬川	天文
9134	大正12年	冬の部	煙揚げて凩の日を山仕事	凩	天文
9135	大正12年	冬の部	一軸の外凩や茶味禅味	凩	天文
9136	大正12年	冬の部	凩の凪ぎて不斷の泉哉	凩	天文
9137	大正12年	冬の部	凩の中にいさかふ小者哉	凩	天文
9138	大正12年	冬の部	凩の響き渡りぬ寺林	凩	天文
9139	大正12年	冬の部	凩に生きて屆きし海鼠哉	凩	天文
9140	大正12年	冬の部	凩や寺に寄合ふ小作人	凩	天文
9141	大正12年	冬の部	凩や馬を犒ふ小百姓	凩	天文
9142	大正12年	冬の部	凩や馬引き返る年貢人	凩	天文
9143	大正12年	冬の部	凩の中に尚在り賣茶翁	凩	天文
9144	大正12年	冬の部	凩や火明り斷えぬ一部落	凩	天文
9145	大正12年	冬の部	凩に木つゝく鳥の忙がしき	凩	天文
9146	大正12年	冬の部	凩に物貯へむ土掘りつ	凩	天文
9147	大正12年	冬の部	飢鳥枝に犯さんと欲す氷餅	氷餅	人事
9148	大正12年	冬の部	梅槎枒たり軒に聯ねし氷餅	氷餅	人事
9149	大正12年	冬の部	氷餅初更の水を出にけり	氷餅	人事
9151	大正12年	冬の部	雪皎々この一ところ塵もなし	雪	天文
9152	大正12年	冬の部	雪積みて黄泉いよゝ遠きかな	雪	天文
9154	大正12年	冬の部	筆凍てゝ今はた消えし面影よ	凍る	天文
9155	大正12年	冬の部	墓邉護る冬木の枝の細々と	冬木	植物
9156	大正12年	冬の部	寒ン晴に藪下水の光かな	寒晴	天文
9157	大正12年	冬の部	手に在りて鋸鈍き寒さかな	寒さ	時候
9158	大正12年	冬の部	雪雲の又しも我にかぶさりぬ	雪	天文
9159	大正12年	冬の部	雪の山深く入にし獵夫かな	雪山	天文
9160	大正12年	冬の部	鬣の雪揮ひけり廏口	雪	天文

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9161	大正12年	冬の部	一方に照返す日や雪戰	雪遊び	人事
9162	大正12年	冬の部	雪に伏す竹や夜学の小提灯	雪	天文
9163	大正12年	冬の部	大雪の門辺煤日のはした女等	雪	天文
9164	大正12年	冬の部	庭椿の雪すべり落つ日の匂ひ	雪	天文
9165	大正12年	冬の部	雪堅し杉の下道社まで	雪	天文
9166	大正12年	冬の部	雪の暮何に宿らむ小禽哉	雪	天文
9167	大正12年	冬の部	家雪にうもれて午の鶏鳴きぬ	雪	天文
9168	大正12年	冬の部	薄雪の足痕よべの千鳥かな	雪	天文
9292	大正12年	冬の部	時雨めきて菊の葉ぬらすあまたゝび	時雨	天文
9294	大正12年	冬の部	大根引く里川木葉流るゝに	大根引	人事
9295	大正12年	冬の部	菊未だ枯れず大根引く庵よ	大根引	人事
9296	大正12年	冬の部	洗上げて大根月夜となりにけり	大根	植物
9297	大正12年	冬の部	暮雲紅し大根引かれし畠の上	大根引	人事
9298	大正12年	冬の部	風呂吹と僧に乞はれつ大根引	大根引	人事
9299	大正12年	冬の部	金福寺句座の人見ゆ大根引	大根引	人事
9300	大正12年	冬の部	門外に大根の馬を駐めけり	大根	植物
9301	大正12年	冬の部	寺庭に年貢の大根積にけり	大根	植物
9302	大正12年	冬の部	路の邊の芒も刈りぬ大根引	大根引	人事
9303	大正12年	冬の部	大根引く我参勤のお大名	大根引	人事
9305	大正12年	冬の部	短日の舟寄るべなき大河哉	短日	時候
9306	大正12年	冬の部	筆硯匆々枯菊を顧みず	枯菊	植物
9307	大正12年	冬の部	枯菊の雨も乾かず暮にけり	枯菊	植物
9308	大正12年	冬の部	古松を便りに住むや菊枯るゝ	枯菊	植物
9309	大正12年	冬の部	枯菊の小家出でゆく獵夫哉	枯菊	植物
9310	大正12年	冬の部	枯菊を刈て書齋に退きぬ	枯菊	植物
9311	大正12年	冬の部	短日や馬に賃して曠野ゆく	短日	時候
9312	大正12年	冬の部	短日の山の尖りの雲明かき	短日	時候
9313	大正12年	冬の部	短日や例の刻來る郵便夫	短日	時候
9314	大正12年	冬の部	暮早し枯木の中の人の聲	短日	時候
9315	大正12年	冬の部	大根畑見渡せば富士眞白なり	大根	植物
9317	大正12年	冬の部	蕪の神大根の神や神謀り	雑	雑
9326	大正13年	冬の部	このたびの果しも知らず冬日哉	冬の日	時候
9328	大正13年	冬の部	いへぬちに溢るゝ聲や雪の上	雪	天文
9330	大正13年	冬の部	日當れバ冬木に倚らむ思哉	冬木	植物
9331	大正13年	冬の部	などてこの涙凍らんひまも無き	凍る	天文
9332	大正13年	冬の部	その跡を追へども雪の果もなき	雪	天文
9334	大正13年	冬の部	早梅のそらだきものや御文筥	早梅	植物
9335	大正13年	冬の部	鳳笙鸞竿み空の霜に振ひけり	霜	天文
9470	大正13年	冬の部	冬嶺を看るに忍びず秀孤松	冬山	天文
9471	大正13年	冬の部	筐底をさぐりつくしぬ小夜しぐれ	時雨	天文
9472	大正13年	冬の部	例年の男傭うて冬構	冬構	人事
9475	大正13年	冬の部	凍蝶も知章が馬に舞出でぬ	凍蝶	動物
9476	大正13年	冬の部	冬ごもり硯の田地たのもしき	冬籠	人事
9478	大正13年	冬の部	此寒さ不識といふぞ愚なる	寒さ	時候
9480	大正13年	冬の部	補陀落の岸か浪路か小夜千鳥	千鳥	動物
9481	大正13年	冬の部	画幅もちて濡れじと人來しぐるゝ日	時雨	天文
9483	大正13年	冬の部	大儒迎ふ綴の錦京しぐれ	時雨	天文
9485	大正13年	冬の部	石玄黄几上霜見る冬籠	冬籠	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9486	大正13年	冬の部	樹の枝の雪ちる中や朝の人	雪	天文
9497	大正14年	冬の部	古妻の暇あれや燁藥貼る	皸	人事
9499	大正14年	冬の部	筆法に似たるものなし冬木立	冬木	植物
9500	大正14年	冬の部	折ふしの雀も寒の名殘哉	寒	時候
9502	大正14年	冬の部	顧みて又冬川を越ゆらんか	冬川	天文
9503	大正14年	冬の部	雪穴に陷りしこそ不覚なれ	雪	天文
9505	大正14年	冬の部	雪ふりやまず梅の花に寒からむ	雪	天文
9507	大正14年	冬の部	梅も咲かねど適く所あり鶴に騎る	鶴	動物
9647	大正14年	冬の部	落葉二ツ廿年の情百里の感	落葉	植物
9649	大正14年	冬の部	手應への重さ軽さや莖の石	茎漬	人事
9651	大正14年	冬の部	枯野行く／＼馬の蹄の高鳴に	枯野	天文
9652	大正14年	冬の部	風吹いて我を露はに枯野哉	枯野	天文
9653	大正14年	冬の部	北風を避くべきもなし馬の上	北風	天文
9655	大正14年	冬の部	むらしぐれ幾たび馬の躓きぬ	時雨	天文
9656	大正14年	冬の部	うつむきてしぐるゝまゝや馬の上	時雨	天文
9657	大正14年	冬の部	我馬や伏屋の落葉踏鳴らす	落葉	植物
9658	大正14年	冬の部	游草の惡句刪らむ年忘	年忘	人事
9661	大正14年	冬の部	數知れぬ落葉の中の二片か	落葉	植物
9662	大正14年	冬の部	墓石に雨と降りけむ落葉是	落葉	植物
9671	大正15年	冬の部	冬の水いづち潛りて流れゆく	冬の水	天文
9673	大正15年	冬の部	蝶鳥の一間静かに追儺	追儺	人事
9675	大正15年	冬の部	雪深しこの一筋の道祖神	雪	天文
9676	大正15年	冬の部	杉村の家々はたきをり煤筵	煤拂	人事
9677	大正15年	冬の部	杉村や黛つくる雪の山	雪山	天文
9678	大正15年	冬の部	大川の岸高み煤はたきをり	煤拂	人事
9679	大正15年	冬の部	煤はたく音大川を渡りくる	煤拂	人事
9905	大正15年	冬の部	紅葉ちりて菊の高さに廬せり	散紅葉	植物
9907	大正15年	冬の部	巖角や霜に嘯く乕の鬚	霜	天文
9908	大正15年	冬の部	人待てバ芒ちる見ゆ日短に	短日	時候
9909	大正15年	冬の部	時ならぬ砧打出す日短に	短日	時候
9910	大正15年	冬の部	短日や搗きこぼしたる畑つ物	短日	時候
9911	大正15年	冬の部	短日や賣れて乏しき唐辛子	短日	時候
9912	大正15年	冬の部	海山の風北になり暮急ぐ	短日	時候
9914	大正15年	冬の部	達磨忌の一時猛雨の人絶えし	達磨忌	人事
9916	大正15年	冬の部	庭上の霜に傲るハ何々ぞ	霜	天文
9917	大正15年	冬の部	凩や倉廩満ちて人往來	凩	天文
9918	大正15年	冬の部	凩や脂がゝりし魚の味	凩	天文
9919	大正15年	冬の部	凩や京のくさびら遲れつく	凩	天文
9920	大正15年	冬の部	凩の庵を見せけり裏の山	凩	天文
9921	大正15年	冬の部	凩に陵荒るゝ涙かな	凩	天文
9922	大正15年	冬の部	凩や木葉の下の硯石	凩	天文
9923	大正15年	冬の部	凩や狸のわざの水止まる	凩	天文
9924	大正15年	冬の部	凩に膝つき合はす庵淺し	凩	天文
9925	大正15年	冬の部	凩や銀杏葉溜る一ト所	凩	天文
9926	大正15年	冬の部	凩に紙一帖の使かな	凩	天文
9927	大正15年	冬の部	到來の五升の酒も冬構	冬構	人事
9928	大正15年	冬の部	思ひきや芋山の如し冬構	冬構	人事
9929	大正15年	冬の部	佗ぶらくハ鼡と住まん冬構	冬構	人事

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
9930	大正15年	冬の部	冬構梅の古木ハ与からす	冬構	人事
9931	大正15年	冬の部	我庵ハ冬を構へず山河在り	冬構	人事
9933	大正15年	冬の部	夢なれや天地に盈つる河豚の氣	河豚	動物
9935	大正15年	冬の部	凩に水の甘さを覚ゆらむ	凩	天文
9939	大正15年	冬の部	凩や家に居て柚子の包解く	凩	天文
9940	大正15年	冬の部	凩を遠く至りぬ柚子も葉も	凩	天文
9942	大正15年	冬の部	ふぐ汁の父の獨に灯しけり	河豚汁	人事
9943	大正15年	冬の部	河豚の眼や磯の社の常緑樹	河豚	動物
9944	大正15年	冬の部	河豚汁や窓の外行く紅毛人	河豚汁	人事
9945	大正15年	冬の部	河豚の座や果實が装ふ一緑葉	河豚	動物
9946	大正15年	冬の部	ふぐの友二たび三たび會しけり	河豚	動物
9948	大正15年	冬の部	大霜の後の菊觀し幾人ぞ	霜	天文
9949	大正15年	冬の部	只斯の心菊を枯れしめず	枯菊	植物
9950	大正15年	冬の部	用もなき暦買ふなり主人ぶり	暦売	人事
9954	昭和２年	冬の部	筆の穂の凍ることなき力哉	凍る	天文
9956	昭和２年	冬の部	ひたぶるに蹶はらゝかす深雪哉	雪	天文
9957	昭和２年	冬の部	朝な／＼雪の淨らや島咽ぶ	雪	天文
9958	昭和２年	冬の部	春近し一雨に遷る鶴の群	春近し	時候
9959	昭和２年	冬の部	誰々に紅買ひやらむ春鄰	春近し	時候
9960	昭和２年	冬の部	芹かあらぬか春まちごゝろさゝ流れ	春待	時候
9961	昭和２年	冬の部	せゝらぎや春まちごゝろ芹を見る	春待	時候
9962	昭和２年	冬の部	ともしさのつとも春まつ帰省哉	春待	時候
9963	昭和２年	冬の部	日々消ぬる獣の踪や春鄰	春近し	時候
9965	昭和２年	冬の部	行年や追失ひし紙魚一ツ	行年	時候
9966	昭和２年	冬の部	行年や帙にうするゝはなだ色	行年	時候
9967	昭和２年	冬の部	水鳥の浮くも潜るも淨土哉	水鳥	動物
10164	昭和２年	冬の部	山眠る中に群松吼ゆる哉	山眠る	天文
10165	昭和２年	冬の部	百姓に教へて倦まず山眠る	山眠る	天文
10166	昭和２年	冬の部	昔ながらの山眠るさへ人戀し	山眠る	天文
10167	昭和２年	冬の部	渉らじのせみの小川や山眠る	山眠る	天文
10168	昭和２年	冬の部	鳰の湖は古き深さよ山眠る	山眠る	天文
10170	昭和２年	冬の部	穭細し鳥海の裏おろす風	穭	植物
10171	昭和２年	冬の部	山峽や枯れぬ尾花に家幾つ	芒	植物
10172	昭和２年	冬の部	霜の後の月岩山にかゝりけり	霜	天文
10173	昭和２年	冬の部	草枯や海士が墓皆海に向く	草枯	植物
10175	昭和２年	冬の部	短日をちり尽す沙羅双樹の葉	短日	時候
10176	昭和２年	冬の部	樅の実を啄む鳥もなかりけり	木の實	植物
10178	昭和２年	冬の部	鶏頭の種採ることを咎むるな	鶏頭	植物
10179	昭和２年	冬の部	詩仙堂に寄らで小春を帰洛哉	小春	時候
10181	昭和２年	冬の部	短日の風爭ふや四派の松	短日	時候
10182	昭和２年	冬の部	朱の椀にすこし飯盛る霜夜哉	霜	天文
10183	昭和２年	冬の部	小春日の暮るゝに近し水煙	小春	時候
10184	昭和２年	冬の部	小春日や暮れて竹鳴る嵯峨戻り	小春	時候
10185	昭和２年	冬の部	花の種むさぼり採りぬ日の小春	小春	時候
10186	昭和２年	冬の部	小春日のつゞくらし宵々の月	小春	時候
10187	昭和２年	冬の部	進一歩霜を挾まぬ石もなし	霜	天文
10188	昭和２年	冬の部	わうじきの調べや鐘の幾時雨	時雨	天文
10190	昭和２年	冬の部	菊昔ながら畿内の霞かな	菊	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10192	昭和２年	冬の部	数へ來る木菴即非茶の蕾	茶の花	植物
10193	昭和２年	冬の部	黄檗の道場冬の片日哉	冬	時候
10195	昭和２年	冬の部	かりそめに訪ふ旧蹟や日短き	短日	時候
10196	昭和２年	冬の部	短日や指僂へて國遠し	短日	時候
10197	昭和２年	冬の部	短日や誰ぞ下り來る大悲閣	短日	時候
10198	昭和２年	冬の部	短日や鶩の声惡み客の去る	短日	時候
10200	昭和２年	冬の部	短景に鳥を點ずる梢哉	雑	雑
10202	昭和２年	冬の部	帶解の子安に柹を奉る	柹	植物
10203	昭和２年	冬の部	片枝の紅葉さしいでつ吉野口	紅葉	植物
10204	昭和２年	冬の部	香具山の霧おろしけり青蜜柑	霧	天文
10205	昭和２年	冬の部	歌垣の昔を匂へ草の花	草花	植物
10207	昭和２年	冬の部	川波をくゞるは国栖の何落葉	落葉	植物
10209	昭和２年	冬の部	さながらに菊伏す山路間なき雨	菊	植物
10210	昭和２年	冬の部	濃かに野菊咲殘る笠置道	野菊	植物
10211	昭和２年	冬の部	吉の山竹もしぐるゝ宿り哉	時雨	天文
10212	昭和２年	冬の部	太閤ハしくれを知らずよしの山	時雨	天文
10213	昭和２年	冬の部	炭ついでしくれに居りぬよしの山	時雨	天文
10214	昭和２年	冬の部	そのかみや珠も錦もしぐれつゝ	時雨	天文
10215	昭和２年	冬の部	旅の髭伸びぬ吉野はしぐれつゝ	時雨	天文
10217	昭和２年	冬の部	しくれ來て提灯消えつ御陵道	時雨	天文
10218	昭和２年	冬の部	常盤木のしくれ畏しよし野山	時雨	天文
10219	昭和２年	冬の部	一處落葉つもりぬよしの山	落葉	植物
10220	昭和２年	冬の部	陵やありとも見えぬしぐれの灯	時雨	天文
10222	昭和２年	冬の部	神ながら古りゆく神輿幾しぐれ	時雨	天文
10224	昭和２年	冬の部	とく／＼の清水を後に日短き	短日	時候
10226	昭和２年	冬の部	石はしる水よ落葉よ五百年	落葉	植物
10228	昭和２年	冬の部	壯士が鎧の塵か草紅葉	草錦	植物
10230	昭和２年	冬の部	子規の字の為山のと浪花夜寒なる	夜寒	時候
10232	昭和２年	冬の部	青に黄にお手々の蜜柑つぶらなる	蜜柑	植物
10233	昭和２年	冬の部	之にしあれや旅の夜寒の袖ふるゝ	夜寒	時候
10234	昭和２年	冬の部	吉野出て見はてぬ夢の千鳥哉	千鳥	動物
10236	昭和２年	冬の部	露霜の結ばむ草木無かりけり	露霜	天文
10237	昭和２年	冬の部	凩の石に留めず雲の影	凩	天文
10239	昭和２年	冬の部	牛祭すぎて戀しさ三十年	牛祭	人事
10241	昭和２年	冬の部	ひし／＼と霜に鳴りけむ巨枝大葉	霜	天文
10245	昭和２年	冬の部	俗めくや落柹舍の柹落葉ふむ	柹落葉	植物
10247	昭和２年	冬の部	色紙へぎて後の寒さに誰か在る	寒さ	時候
10248	昭和２年	冬の部	旅に在りて何を主や嵯峨の月	月	天文
10249	昭和２年	冬の部	茶の花の咲き澄みて人知れずこそ	茶の花	植物
10251	昭和２年	冬の部	秋深し神馬も戀ふる五十鈴川	秋深し	時候
10252	昭和２年	冬の部	しだり尾の長鳴鳥や夕紅葉	紅葉	植物
10254	昭和２年	冬の部	糸瓜見る因みに憶ふ三十年	糸瓜	植物
10255	昭和２年	冬の部	雁來紅上野の森ハ見えざりけり	雁來紅	植物
10257	昭和２年	冬の部	木葉ふるや掃へども水そゝげども	木葉	植物
10259	昭和２年	冬の部	一勺の酒そゝぐべき落葉哉	落葉	植物
10261	昭和２年	冬の部	露ながら主人がくれし柹一ツ	柹	植物
10262	昭和２年	冬の部	むさし野の落葉掃かれぬ細々に	落葉	植物
10263	昭和２年	冬の部	常盤木や青きにひそむ烏瓜	烏瓜	植物

冬の部

No.	作句年	部	俳　　句	季語	分類
10264	昭和２年	冬の部	往返り栃落葉ふむ斯心	栃落葉	植物
10266	昭和２年	冬の部	木深さを鳴穿ち去る百舌の声	鵙	動物
10267	昭和２年	冬の部	衡宇を望んで落葉踏鳴らす	落葉	植物
10268	昭和２年	冬の部	帰り來て菊の香にあるしばし哉	菊	植物
10269	昭和２年	冬の部	帰りつけバ妻ハ大根引了る	大根引	人事
10270	昭和２年	冬の部	落尽す銀杏葉誰そや掃尽す	落葉	植物
10272	昭和２年	冬の部	草枯や一夢と消えし都の灯	草枯	植物
10273	昭和２年	冬の部	峰のあたり尚しぐるらむよしの山	時雨	天文
10275	昭和２年	冬の部	菊の香のあまりの中に生れけり	菊	植物
10278	昭和２年	冬の部	山賤は榾に櫻を焚にけり	榾	人事
10279	昭和２年	冬の部	御方に榾けふらすな吉野人	榾	人事
10280	昭和２年	冬の部	堅氷のほとりふし榾根榾哉	榾	人事
10281	昭和２年	冬の部	榾つみて砦に似たり國の守	榾	人事
10282	昭和２年	冬の部	雪かぶる榾や朝々取くづす	榾	人事
10284	昭和２年	冬の部	此菊を枯らさじと日に省る	菊	植物
10286	昭和２年	冬の部	迦陵嚬伽啄み飽ける果かも	木の實	植物
10290	昭和２年	冬の部	寒日や勅語捧讀奉答歌	寒さ	時候
10291	昭和２年	冬の部	橘緑耀きて禮を行へり	橘	植物
10292	昭和２年	冬の部	沓ならびたり此日の大霜に	霜	天文
10293	昭和２年	冬の部	講堂の窓の松影山眠る	山眠る	天文
10294	昭和２年	冬の部	物の聲揚がる枯野の阪下に	枯野	天文
10296	昭和２年	冬の部	何すとて枯菊をおく厨かな	枯菊	植物
10298	昭和２年	冬の部	野に山に冬菜一種なかりけり	冬菜	植物
10300	昭和２年	冬の部	せんなしや又灰となる火桶の火	火桶	人事
10320	昭和３年	冬の部	袖ふれんよすがもあらず冬木立	冬木	植物
10322	昭和３年	冬の部	凍解を心に會して起チにけ里	凍解	地理
10324	昭和３年	冬の部	水鳥の黎明さして羽搏ちけり	水鳥	動物
10326	昭和３年	冬の部	寒椿澆ぐに雪を以ってせむ	冬椿	植物
10603	不　　詳	冬の部	鉢叩とは泣面の竹の函(亟)	鉢叩	人事
10604	不　　詳	冬の部	寺に入る酢賣賢し大三十日	大三十日	時候
10605	不　　詳	冬の部	大三十日蒟蒻賣を罵しりぬ	大三十日	時候